◆世界の枠組みを越えて◆　『漫画小説……だったけど、今は保留中』

キンギョ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
◆世界の枠組みを越えて◆　『漫画小説……だったけど、今は保留中』

【Ｎコード】
Ｎ９５４５Ｎ

【作者名】
キンギョ

【あらすじ】
◆注意書き……途中から主人公が両性類（性別不明）になります。

◆前半……ほのぼのホームドラマ。子犬と主人公の和やかな戯れ。

◆後半……魔女と堕天使の間で優柔不断にうろたえる子猫が主人公。

◆結論……主人公の襲われ率が半端ない。男女構わずに襲われてい

る気がするが、可愛いのでよしとしよう。

オリジナル小説「彼女のカ・タ・チ☆」と連鎖しています。

もう限界〈メモリー編〉（前書き）

「人間止めましたから……」完結後のお話です。
といっても、特別なことが起きるわけでもなく。
と言っていたのは初めだけ……。
最近はいろいろと大騒動です。

もう限界〈メモリー編〉

もう……限界だ。

僕の前にはつぶらな瞳で僕を見上げる子犬が一匹。
子犬と言っても、ただの犬じゃない。
ファンタジックな服を着た少年に、犬耳と尾をつけた。
まるでコスプレみたいな。
そんな子犬……。

名前はハル。
僕の住んでいる世界とは違う……。
別の世界の住人だ。
しかも、ハルは人間でも獣でもなく。
生き物でもないと……話では聞いている。
人によって作られた……お札。
魔力を込めて作られた……身代わり人形。
詳しい事は語らない。
それはまた別の話に綴られている。
僕が語る必要もないだろう。

前置きはそれくらいにして、本題だ。
期待をするような目を僕に向けるハルに対して、僕はノイローゼ気味。
最近は、ハルの飼い主が忙しいからといって、なぜか僕が面倒をみている。

だけど、それもそろそろ限界。
ハルが必要以上に元気有り余って、暴走するから。
僕が付いていけなくなってきた。

僕の手にはガムテープ。
やってはいけない事だとわかりつつも、ガムテープを引きのばす。
ちぎり取って、ハルの口に付ける。
パチパチと瞬きをするハル。
姿は子どもでも、中身は高校生だから。
状況は分かっているはずだ。
抵抗しないのは、構ってほしいからだろう。

そのまま、ハルの手を後ろに回して、ガムテープでがんじがらめ。
ついでに足もしばりつけて、身動きを取れないようにする。
後は……誰かがどうにかしてくれるだろう。
寂しげなハルに手を振って、僕が言う。

「じゃあね。僕は家に帰るから……」
「ん～～～～」

ハルの訴えを聞き入れずに、部屋を出る。
あ～、眠い。頭が痛い、吐き気までしてきた。
早く帰って少し休もう。

なんとか、家に辿り着いて。
ベッドの上に倒れ込む。
久しぶりに、疲れ果てた……。
はぁ～、もうくたくた。

しばらくは自分の世界に引きこもろう。
外は疲れる……。
目を瞑って、リラックス。
そのまま心地よくなって……。

妙な物音で目が覚める。
暗い部屋。外も暗いのか、窓から差し込む光もない。
今は夜中だろう……それはいいけど。何の音？
奇妙な音に、上体を起こす僕。
もしかして……空き巣？

僕の顔色が悪くなり、胸ポケットに手を当てる。
大丈夫……これはある。
ボールペンを確認して、少し安心。
だけど、笑えない状況。
そっと立ち上がり、音のする方へと足を向ける。
とにかく確認しよう……。

足音を立てずに、ゆっくりと前進。
冷蔵庫の前に人影だ。
その後ろ姿を見て、停止する僕。
恐怖心は消え去り。代わりに心労で、胸が痛くなる。
ため息をつきながら、電気をつける。
そのまま人影に声を掛ける。

「何してるの？　ハル？」
「んぐんぐ……」

振り返るのは、犬耳少年。
食べ物を口に含み、頬を膨らませながら。嬉しげに尾をなびかせる。
だけど、何でこんな所にいるの？
というか、どうやってここに来たの？
ハルには……世界を移動する能力なんてないはずだ。

冷蔵庫の扉を閉めて、僕の足元へ駆けてくるハル。
僕を見上げて、口を開く。

「お腹すきました！」

真夜中に〈メモリー編〉　★

真夜中に料理をする僕。
別に自分が食べるためじゃない。
椅子に座って、お箸を両手に一本ずつ持つ犬コロ。
これに餌をあげるためだ。

＞ｉ１１９９１―２３１＜

今、家にある材料で作れる物を片っ端から料理して、ハルの前に差しだす。
瞬間消滅。
この犬に満腹という言葉はないのだろうか？

出せる食べ物を全部差しだし、材料が尽きる。
あ～あ、明日は買い物に行かないとな……。
面倒くさい。
ヤル気のない僕の前では、ガッつきながらご飯を食べるハル。
ハルがお茶をがぶ飲みした後、僕に笑顔を向ける。

「美味しかったです」
「どう？　お腹は膨れた？」
「全然」
「……」

気持ちがめげる。
お家に帰りたい。
いや、既に家だけど……。
それにしても、どうしたものかな？

まさか、僕の世界に入り込んでくるなんて……。

早く追い出してしまいたいのが本心。
だけど、どう考えても出ていく気のないハル。
誰かに迎えに来てもらう？
駄目だな、誰も来やしない。
送りに行く？
無理だ。
ハルの事だから、近々またここへやってくるだろう。

世界に錠(じょう)はついていない。
パソコンと同じ。
どこかに必ず隙間が出来る。
頭の良い人達はその隙間を縫って、世界を行き来したりする。
公の場で認められていなくても、移動手段は色々とあるから。

ハルに目を向けると、勝手に漫画を読んでいる。
まぁ、いいか……。
大人しくしているのなら放っておこう。
ハルから目を逸らして、ベッドに向かう。
他の事は後でしよう。
今はただ眠りたい。

僕がベッドに寝転んで、十秒も経たぬうちに。僕の上に何かが飛び乗る。
思わず、声を上げてしまう。
そんな僕の上から、聞こえてくるのはハルの声。

「遊びましょ！　ねぇ、ねぇ。一緒に遊んで下さい」
「そう……。じゃあ……。とりあえず、睡眠ごっこだね。寝ている

時間の長い方が勝ち……」
「そんなの嫌です。何かお話して下さい」
「……」

元気のない僕に対して、ハルは活気に満ち溢れている。
子どもは良いよね……。
エネルギーの塊だから。
だけど、僕は……。
今にも眠りそうな僕の上からは、未だに声が止まらない。

「そういえば、メモリーさんって何歳ですか？　未来さんよりも年上ですか？　同い年くらいに見えますけど……。後、メモリーさんって何か特技はあるのですか？『橋』の人って、皆して凄い人ばかりだから」

返事なんて返せない。
眠いから……。
ハルの声が遠ざかっていき……。
意識が薄れて……。

探索〈ハル編〉　★（前書き）

ハル……余計なことしすぎ。
メモリーが死んでるよ……。

探索〈ハル編〉　★

声を掛けても、揺すっても。ジャンプをしても、起きてくれない。
メモリーさん……本格的に寝ちゃったみたい。

＞ｉ１２０２０―２３１＜

つまらないな。
膨れる僕。
ベッドから下りて、辺りを見回す。
それにしても、メモリーさんの家……。
というかマンション？　かなり豪華。
何の仕事をしているのだろう？　凄く疑問。

以前はもっとこぢんまりとしたアパートに住んでいたって噂。
引っ越したのかな？
前はどんな部屋に住んでいたのだろう？
後で質問してみたい。

ちょこちょこと辺りを探索。
何か面白い物はないの？
子どもの嗅覚で、娯楽を探す。

本棚には漫画に混じって、難しそうな文学本が数冊……。
メモリーさんって、本読むのかな？
前に聞いたら、文字は苦手って言っていたけど……。

あ、これ面白そう。
思わず漫画に手を伸ばし、途中で手を止める。

漫画漁りは後にしよう。今は部屋の探索が先だ。

それにしても、子どもの背だと、棚の上までは見れないな。
椅子を持ってくるのも面倒だし……。
あ、そういえば、僕……魔力を使えたんだっけ？
今は魔力不足で子どもの姿だけど、ちょっとくらいは大丈夫だろう。

魔力を使って空を飛ぶ。
この世界でも魔力は使えるのか。
世界各国共通かな？
制限はされるかもしれないけど、空を飛ぶくらいは大丈夫みたい。

フワフワと空を飛んで、見えなかった場所に目を向ける。
目ぼしい物……目ぼしい物……。
あ、写真立てを発見。
写真立ての写真に目を向ける。
綺麗な女性。
メモリーさんの彼女かな？
わぁ～、何だか優しそう。

写真立ての隣には、オルゴール。
もちろん、手を伸ばしてふたを開ける。
あれ……？　音がならない。
ネジを回していないからかな？
ふたを閉じて、ネジを回して。ふたを開ける。
流れる音楽。
聞いた事のない曲。
ちょっと切ないメロディー。

物寂しい音楽が部屋の中に広がる。

そんな中、僕は新たに探索開始。
何かないかな？　と思った矢先、扉を発見。
こっちの部屋にはまだ行っていない。
ワクワクしながら、扉を開ける。

扉を開けて、目を丸くする僕。
扉の向こう側にギッシリ詰まっているのは、パソコンの山。
いろんな機械がごっちゃごちゃ。
何だか専門機器みたいで、全然わけがわからない。

部屋に入って、辺りを見回す。
机の上に置いてある本に手を伸ばす。
開いてみると、何これ？　パソコンの専門書？

うーん。
考えた末に、本を閉じて元の場所に放置。
成る程……。
メモリーさん、こういう関係の仕事しているのか。
思わず、納得。
だから、ヒッキーって呼ばれてるんだな。
メモリーさんの別名。

難し過ぎて、手がつけられなくて。
キョロキョロと観察だけしていたら、ふと目に留まる物。
それに手を伸ばす。
一冊の絵本……。
ワーイ。自分にわかる物を見つけて、思わず大喜び。
本を開く。
どんなお話だろう？

「合いの子」　★（前書き）

先に言っておきますけれども、挿絵おかしいです。
ちょっと無理があった（泣）
なれない事はするものじゃない。
もとが絵本だから、話も短いです。
ちなみに、この挿絵5分で描きました。
もっと努力しろよなって、思いますよね。

「合いの子」　★

遠い昔のお話です。
この世には、天使と悪魔がいました。
天使は悪魔の事を嫌い、悪魔は天使の事を嫌いました。

そんな中、たった一人だけ天使と悪魔の合いの子がいました。
背に付いた羽も、半分が白色で。残りが黒色です。
合いの子はいつも一人で遊んでいましたが、いつしか寂しくなってきて。
友達を作るために、天使達の元へと向かいました。

楽しげに遊ぶ天使達に近づき、合いの子が口を開きます。

「僕も仲間に入れて」
「君は半分悪魔だろ？　悪魔は悪魔と一緒に遊びなよ」

と天使の一人が口にしました。
そのまま合いの子を無視して、天使達は遊び続けます。

合いの子はしかたがないので、悪魔達の元へと向かいました。
悪魔達を見つけると、その内の一人に近づいて。
合いの子が話しかけます。

「ねぇ、僕も仲間に入れて」
「ダメダメ。お前、天使だろ？　天使は仲間に入れてやらないよ」

天使にも悪魔にも追い払われた、可哀そうな合いの子。
シクシクと涙を流しながら、向かう先は神様の元です。

合いの子が神様に近づき言いました。

「皆が仲間に入れてくれないの」

話を聞いた神様は、合いの子を慰めながら。
天使達と悪魔達を呼び集めました。
皆が集合したのを確認すると。
神様が指を振り、呪文を唱えました。

すると、どうでしょう？
たちまちに、天使達と悪魔達の背中に生えた羽が消えてしまいます。
困惑する天使達と悪魔達。
そんな彼らを眺めながら、神様が口を開きました。

「今日からお前達は人間だ。天使でも悪魔でもない。皆、仲良くするように」

合いの子が自分の背を見ると、白と黒の羽が消えていました。
これで皆と同じです。
未だに戸惑う皆の元へと駆けていく合いの子。
たった一人、笑顔が尽きないのでした。

＞ｉ１２０３２―２３１＜

ストレス〈メモリー編〉　★（前書き）

まぁ、人づきあいが苦手な人はこうなるよね。
メモリーの気持ちも結構わかる。

ストレス〈メモリー編〉　★

目が覚める。
ぼんやりしながら起き上り、時計に目を向ける。
一時……。
もちろん、昼だろう。
今日は思った以上に早起きだ。

ベッドから下りて、冷蔵庫から飲み物を取り出す。
不意に思い出す事……。
そういえば、ハルは？
不安になりながら、バタバタとハルを探す。
すぐに発見。
仕事部屋で熟睡している。

＞ｉ１２０３５―２３１＜

ハルの隣には、あの絵本。
この間、本屋で見かけた物だけど。
懐かしくて、思わず買ってしまった。

絵本を拾って、片付ける。
ハルを起こそうかと思うけど、今は熟睡しているようだから。
寝かせておいてあげよう。
ハルを持ち上げて、ベッドの前に連れていく。
ベッドの中に放り込んで、布団をかぶせる。
当分は起きないな。
ありがたい話だ。

一安心して、さっきの続き。
飲み物を飲んだ後、シャワーを浴びて。
食事をしようと冷蔵庫を開けるけど……中は空っぽ何もない。
あるのはジュースくらい。
これじゃあ、満足できないな。
面倒くさいけど……買いに行くしかないか。

財布を手に持ち、部屋を出る。
ハルは……大丈夫だろう。
あれでも元は高校生だ。
そんな無茶はしないはず。

買い物を終えて、帰ってきて。
朝食込みの昼食を作って、食事して。
やっと時間が空いたから、今の内に仕事。
いつものように椅子に座って、パソコンの電源を入れる。

メールボックスに受信メールが一通。
未来からだ。
あぁ、未来っていうのは……。
別の世界の『橋』……リーダーをしている。
僕の友達で、ハルの師匠もどき。
ちなみに、僕はこの世界の『橋』……みたいなもの。
メール内容は以下の通り。

「メモリー、元気にしてたぁ～？　そうそう、ハルがそっちに行っているそうだけど。しばらくの間、よろしくね。俺はちょっと仕事が忙しくてさぁ～。手が回らないんだよ。まぁ、ハルをあの城に連

れて行ってもいいんだけど。せっかくメモリーに懐いているんだし。ほら、少しペットを飼う気分で。ハルの世話をしておいて。頼んだよ」

メールを読み終え、苛立ちを感じる。
仕事が忙しいから？
じゃあ、僕はどうなるの？
ストレスを感じて、腕を組む。
うん、よし。わかったよ。
未来宛に返信メール。
もちろん、ウイルスを添付して。
送信！

僕が本気で作ったウイルスだ。
いくら未来でも、解除するのに三時間は掛るだろう。
僕も頑張るから、未来も頑張ってね。
そのまま素知らぬふりをして、仕事を開始。

いつもはこんな酷い事しないけど、今日は特別だ。
何せ止まらない苛立ち。
ハルに係わってからストレスがたまるばかり。
元々、人と係わる事が苦手な僕に……どうしてハルが懐いたのか？
頼むから放っておいてほしい。
僕を一人にしてほしい。

わかっているのか、いないのか。
向こうで眠る子犬のお目覚めが、恐怖だな……。

お説教？　〈ハル編〉　★

ん～、気持ちいい。ふわぁ？　ここはどこ？
意識が戻って、起き上がる。
知らない部屋……見た事のない部屋。
じーっと考えて、思い出す。
そういえば、メモリーさんの家に遊びに来ていたんだ。
絵本を読んでいて、眠たくなってきて……。

ベッドから下りて、時間を確認。夕方の五時。
うん、どう考えても寝坊だな。
まぁ、僕は人間じゃないから。
学校もないし、時間に束縛されることもない。
しいていうなら、毎日が日曜日。
人間なら羨ましいと思うだろう生活。

ところで、メモリーさんはどこにいるの？
キョロキョロ見回すけど、姿がない。
お出かけ中かな？
そう思いながら、パソコンルームへと足を向ける。
部屋の中から、タイピングする音。

扉を開けて、そっと覗き込む。
メモリーさんを発見。
パソコンの前に座って、キーボードを打ち続けている。
それにしても、凄い速さ。
しかも、何しているのかわからない。
日本語じゃなくて……何か記号みたいなのがいっぱい。

物陰から、こっそりと様子を窺う僕。
凄いな、カッコいいな。
こういう事できる人って尊敬する。
まるで映画を見ているみたい。
大手会社のパソコンをハッキングする映画……。

ドキドキしながら、眺めていたら。
不意にメモリーさんが振り返る。

「あぁ、ハル。おはよう」
「おはようございます」
「食事は向こうの机に置いてあるから。全部食べていいよ。僕はもう食べたし」
「はい、ありがとうございます！」
「それと……」

メモリーさんが立ち上がり、僕の前までやってくる。
何だろう？
メモリーさんを見上げる僕に、メモリーさんが指差して言う。

「食事を食べ終わったら、すぐにこの世界から出て行ってね」
「えー」

＞ｉ１２０７５―２３１＜

「『えー』じゃないよ。君はここの世界の住人じゃないでしょ？帰る家だって、あるんだから。きっと家の人が心配しているよ。わかった？」
「大丈夫です。家の人には連絡しましたから」
「……」

メモリーさんが腕を組みながら、考え込む。
しばらくも経たぬうちに、僕に宣言する。

「正直に言わせてもらうよ。凄く迷惑なの。遊びたいのなら、また今度にでも僕がそっちの世界に行くから。それでいいでしょ？」
「こっちの世界で遊びたいです」
「……わかったよ。遊びたいのなら、構わない。外に行って、遊んで来たらいいよ。だけど、僕の家に居すわるのは止めて」
「メモリーさんと遊びたいです」

僕が言ったら、メモリーさんが硬直。
嫌なのだろうな。
わかっているけど、素直な気持ちを言ってみた。
他の人と遊んでもいいのだけど。
パターン化してきて、飽きてきたし。
まだよく知らない人と遊びたい。
メモリーさんはお兄さんみたいで、一緒にいて楽しいから。
ついつい甘えてしまっている気がする。

いけない事だとわかっているのに、出ていく気のない僕。
だって、暇だもの。
僕の前には鬱陶しそうな顔をするメモリーさん。
あー、怒ってる。
怒られるかな？
緊張感の漂う空気。
そんな中、鳴り響くのはチャイムの音。

ＫＹ乱入〈メモリー編〉　★★（前書き）

マジでＫＹがやってきた。
メモリーが倒れるのも時間の問題。

ＫＹ乱入〈メモリー編〉　★★

　こんな時に一体誰だろう？
玄関に向かう僕。扉についた覗き穴から外を窺う。
すぐに停止。
見たくない物が目に入る。
蒼白しながら、扉から離れて。
どうしようかと困惑する。
僕の様子を見て、ハルが首を傾げる。

「どうかしたのですか？」
「ＫＹが来た……」
「ＫＹ？　誰です？」
「いつも暇している……人」
「暇人さんですか？」
「僕の中ではＫＹだよ……」

　どうしよう？
困った事になった。
絶対に入れたくない。
あれだけは何が何でも入れてはいけない。
入れたら最後……僕の部屋が荒らされる。

　何か良い手はないものか？
僕が必死に思考していたら、扉方面から音が……。
振りかえると、扉が開いている。
別にハルが開けたわけじゃない。
もしや、合いカギか？
っていうか、チェーン掛けてなかったっけ？

目を凝らすと、チェーンが切れている。
なんて奴だ！
勝手にチェーンを切りやがった！

言葉を無くす僕達の前に現れたのは、アホそうな面の人間……か？
ＫＹが僕に向いて言う。

「宅配です。ハンコと通帳と暗証番号とカードをお願いします」
「ハンコ以外は必要ないじゃない。ちょっと何しに来たの？　ＫＹ？」
「ＫＹって何！？　ちょっと人の名前を改造するなよ。暇人でもオワリンガーなのに、ＫＹって最悪じゃん」
「ＫＹで十分だよ」
「ヒッキーに言われたくない！」
「ヒッキーって言うな！」

怒鳴り合う僕とＫＹ。
駄目だ。
このままじゃあ、ご近所に迷惑が掛る。
音量を落として、ＫＹに口を開く。

「せっかく来たのなら、ハルを連れて帰ってよ。今すぐに」
「何で？　せっかく遊びに来たのに」
「遊びに来たって……。どうやって来たのかは知らないけれど。邪魔だから帰って。特に君は手がつけられないで有名なんだよ。姫様でさえ、『係わりたくない』って言っているんだから」

姫様というのも、僕や未来と同じ『橋』の一人。
凄く怖い……お姫様だ。
あの人が嫌がるのだから、ＫＹの迷惑レベルは尋常じゃない。

僕が本気で怒りそうになっていたら、ＫＹが頷いて言葉を吐く。

「わかった。こうなったら、ＫＹ特有の必殺技だ」

「必殺技？」

「ＫＹ宣言！」

何が？　首を傾げる僕とハル。

数秒間、ＫＹが停止した後。

何事もなかったかのように、部屋を見回す。

「それにしても、お前……良い部屋に住んでるな。もっとおんぼろイメージだったのに。かなりゴージャスじゃん」

「帰れよ！」

思わず、怒鳴ってしまう。

本当にＫＹだ。

苛立ちが止まらない僕に向かって、ＫＹが発言する。

「そうそう、手土産です。はい、これ」

「何……これ？」

ＫＹがダンボール箱を僕に見せる。

かなり大きい。

中に何が入っているのか？

気持ち悪くて、開ける気にもならない。

眉をしかめる僕を余所に、ＫＹがダンボール箱のふたを開ける。

中に入っていたのは……山積みされたタマゴ。

ハルが尾を振り喜ぶ中、ＫＹが口を開く。

「タマゴです」

「タマゴ……何でこんなにたくさん？」と僕。
「賞味期限が切れました」
「そんな物持ってこないでよ！」
「何を言うか！　昔はな、タマゴには賞味期限がなかったんだぞ。タマゴはな……思った以上に、日持ちするんだよ」
「だからって、普通はそんな物を人にあげないし！　今すぐ持って帰ってよ！　ハルと一緒に！」

僕の話を聞きもしないで、ハルとＫＹがタマゴで盛り上がる。
駄目だ……頭が痛くなってきた。
胸まで苦しい。
吐き気がする。
冗談抜きで、ストレスで死にそうだ……。
今にも泣きそうな僕に向かって、ＫＹが口を開く。

「おい、ヒッキー。タマゴ料理を作ってくれ。できれば、火を通した料理な」

＞ｉ１２０９５―２３１＜

＞ｉ１２０９６―２３１＜

駄弁る〈ハル編〉　★

暇人さん……。
メモリーさんの言う、ＫＹさんがやってきて。
メモリーさんが寝込んでしまう。
大丈夫かな？
顔色が凄く悪かった。
心配げな僕に向いて、暇人さんが質問する。

「ところで、お前は何でヒッキーにまとわりつくの？」
「えーっと、一緒にいると楽しいので。それに、優しいし、カッコいいし。何だか不思議なので気になるのですよ」
「まぁ、不思議だわな。お前、どうやって生活しているんだよ？みたいな。しかし、カッコいいというのは的外れだろ？　ただのストレスに弱いヒッキーじゃん」
「そんな事はないですよ。パソコンをしているメモリーさんは、ハッカーみたいでカッコいいです。メモリーさんって、頭がいいのですね。後ろから画面を覗いていたのですけど、僕には全然わかりませんでした」

ＫＹさんが頷いて、理解を示してくれる。
そして、僕に話しかけてくる。

「成る程。お前はクールな天才に憧れているわけだな」
「うーん……。まぁ、そうですね」
「そんなお前を天才にしてやろうか？」
「天才になれるのですか？」
「おうよ。見てろよ」
「何するのです？」

「ファイヤー！」

＞ｉ１２１１１―２３１＜

プチンッという音。
一瞬、頭に痛みが走る。
思わず叫んで、頭を押さえる僕。
そんな僕にＫＹさんが口を開く。

「アホ毛を抜いた。これでお前も天才だ」
「そんなわけがないでしょ！？　髪の毛が減っただけじゃないですか！」
「多少は頭も良くなっただろ。刺激を与えたんだから」
「そんなバカな……」

本当にわけのわからない人。
メモリーさんが寝込むわけだ。
思わず納得してしまう。
頭を押さえる僕に向いて、ＫＹさんが話を進める。

「とりあえず、タマゴを処理しよう。俺は玉子焼き専門家だ。他の料理はお前に任せる」

タマゴ料理の山を作り、大喜びに食べる僕。
ＫＹさんが勝手にジュースを飲みながら、寛ぎ加減に口を開く。

「さて、暇になりましたな。せっかくですから、何か昔話でもしましょうか？」

「昔話ですか？」
「おう、有名な話をしてやろう。知っている奴もいるだろうが、パソのデータを消したから。幻の作品になっているお話だ」
「何ですか？　面白いお話ですか？」
「あぁ、俺の弟と母が家族旅行に行った時。旅行先で語っていたお話だ。アドリブだけで話が進んだため、中途半端につじつまが合わないが。それなりに面白い話になっている。聞きたいか？」
「はい、是非とも」
「そうか……。では語ろう。それは遠い昔の事じゃった」

「強欲ばあさんと強欲じいさん」（前書き）

これは読みながら突っ込みを入れまくる話です。
突っ込み小説なので、変な点は気にしないでください。
無秩序は承知の上。でも、それなりに面白いです。

「強欲ばあさんと強欲じいさん」

昔々のお話です。
とある所に、お爺さんが一人おりました。
そのお爺さんは誰もが驚く強欲者で
世界一の強欲と言っていいほどに強欲でした。

しかし、その強欲じいさんですら敵わない相手がおりました。
それは妻の強欲ばあさんでした。
強欲ばあさんの強欲レベルは、強欲じいさんのそれを遥かに上回り。
そのおかげで、強欲ばあさんばかりが知名度を上げてゆきました。

そんなある日の事です。
ついに強欲じいさんがしびれを切らして、強欲ばあさんに言いました。

「お前、少しは無欲にならんか！？　お前が出しゃばるから、わしが有名にならんだろうが！」
「あんたの欲なんて、あたしの手の平ほども無いんだよ。あんたこそ強欲の名を捨てな！」
「では、宣戦布告を申し立てる！」
「いいよ。あんたがあたしに勝てるとは思わないけどね」

そんなこんなで、第一回強欲バトルが開始されます。
バトル内容は極簡単です。
スーパーの野菜詰め放題で、どれほど野菜を詰められるか。
二人のバトルは始まります。

まずは強欲じいさんです。

強欲じいさんは野菜に塩をかけて水分を減らし。
それはもうきっちり隙間なく袋を野菜で埋めました。
それを見ていた強欲ばあさんが口を開きます。

「あんたはやっぱり詰めが甘いね」
「何じゃと！？」
「まぁ、あたしを見てな」

そう言って、強欲ばあさんが詰め放題のかごに向かいました。
そこで、強欲じいさんは信じられない物を目にします。
強欲爺さんが見たもの。
それは……。

袋を火であぶり出した強欲ばあさんでした。
火であぶられた袋は膨張し、更に野菜を詰められるようになりました。
そして、強欲ばあさんは嘲笑うかのように、強欲じいさんを見下しました。

強欲じいさんは納得がいきませんでした。
強欲じいさんはまた強欲ばあさんに言いました。

「今回は手を抜いてやったのだ。もう一度勝負じゃ！」
「ふん、何度やっても同じだよ」

こうして始まる二回戦。
第二回強欲バトルの開始です。
次のお題はこちら。
ホテルでどれほど物を持って帰れるか。

まずは、先手。強欲じいさんです。
強欲じいさんはホテルの部屋に入るなり。
すぐに洗面所や棚で、持ち帰れる物を鞄に詰め込みました。

例えば、歯ブラシやカミソリ。
タオルはもちろんのこと、浴衣まで詰めました。
そして、持参した大量のペットボトルに。
水を満タンに入れ、ふたを閉めました。

満足顔の強欲じいさんが荷物を持ち、ホテルから出ようとすると。
何だか大きなトラックがホテルの前に停まっているではないですか。
訝しげな顔をする強欲じいさんの前に現れたのは強欲ばあさんです。
しかも、トラックの中から出てきたのです。

何を始めるのだろうと思い、強欲じいさんは強欲ばあさんに尋ねました。
すると、強欲ばあさんが笑いながら言いました。

「見てな。あんたには出来ない事をやってやるよ」

そう言って、ホテルの中へと入っていく強欲ばあさん。
次に強欲ばあさんが現れた時、強欲じいさんは仰天します。
なぜなら、強欲ばあさんがテレビを背負っているのです。

強欲じいさんがあんぐりと口を開けていると。
強欲ばあさんが素早くホテルの中に入って行きました。
強欲爺さんが立ちつくす中、
強欲ばあさんが次々とホテルの物をトラックに乗せて行きます。
テレビや冷蔵庫にとどまらず、襖や畳も剥ぎ取れる物を全部トラックに乗せました。

しかし、ホテルの従業員が呼んだ警察によって、
強欲ばあさんはあえなく逮捕されてしまいます。
強欲じいさんはついに強欲ばあさんに勝ったと思いました。

そして、強欲じいさんの平凡な日々が始まります。
しかし……とある日の事、事態が一変します。
強欲じいさんが昼間にテレビを見ていると。
何と強欲ばあさんがテレビに出ているではないですか。

強欲じいさんには何が起きたのかわかりません。
実はこんなことがありました。
強欲ばあさんは牢の中で自分の体験を本にしていたのです。
しかも、何とその本がベストセラーになり、強欲ばあさんは大金持ちになっていたのでした。

最後に、テレビの中の強欲ばあさんが
まるで強欲じいさんをあざ笑うかのように笑っていましたとさ。
めでたいのか？　めでたいんだよな？

ラーメン〈ハル編〉　★（前書き）

メモリーさん……
カッコイイのか、カッコ悪いのか。
頭良いのか、悪いのか。
わけのわからない人だ。
でも、キャラ特性はかなり好み。（笑）

ラーメン〈ハル編〉　★

ふわぁ～、よく寝た。
昨日はＫＹさんのお話を聞いた後、一度家に帰って。
着替えを用意してから、またここへ戻って来た。
メモリーさんのベッドに潜り込んで爆睡。
ＫＹさんは泊まりではないらしくて、明日も来ると言っていたけど。
果たして本当に来るのだろうか？
よくわからない。

メモリーさんはどこにいるのかな？
探していたら、キッチンで発見。
椅子に座りながら、漫画を読んでいる。
近づいて、声を掛ける僕。

「おはようございます」
「おはよう……」

うん？
机の上に何かを発見。
これ……何？
メモリーさんに問いかける。

「これは何ですか？」
「ラーメン」
「……食べないのですか？」
「食べるよ」
「早く食べないとのびてしまいますよ」
「そうだね」

「……」

＞i12113―231＜

メモリーさん、それっきり黙って漫画を読み続ける。
ラーメンは？
いつ食べるの？
凄く気になって仕方がない。
ねぇ、早く食べないと不味くなりますよ。
これ以上、話しかけるのは失礼だろうか？

僕がおろおろしていたら。
いつの間にか、ＫＹさんが隣にいた。
ＫＹさんが挨拶をする。

「よ！」
「おはようございます」
「ヒッキーは挨拶なしか。流石、ヒッキーだな」
「早く帰ってよ」

メモリーさんが漫画を読みながら、口を開く。
聞こえてはいるみたい。
だけど、ラーメンはどうするの？
ＫＹさんが机の上のラーメンに気づいて、眉をしかめる。

「おい、これは……何？」
「ラーメンです。メモリーさんが食べると言ってから、五分経過しました」
「……」

KYさんがメモリーさんに近づいて、漫画を取り上げる。
そのまま怒鳴りだす。

「お前、ラーメン先に食えよ！　伸びるだろうが！」
「別にいいじゃない！　僕の勝手でしょ！？」
「ラーメンが伸びたら、不味くて食えないぞ。漫画は後にして、これを先に片付けろって」
「食べれるし。漫画を読んでから、食べるつもりだったの！」
「お前、漫画を読んでからって。後、一時間後にラーメンを見てみろ。別の生物に進化してるぞ。つーか、お前……このラーメンいつ炊いたの？」
「え～っと……一時間くらい前？」
「もう時既に遅しだろ？」
「食べれるよ。僕はいつもこれくらいになるもの」
「お前なぁ……。お前の生活習慣には口出ししないが。ラーメンを食べるのは、もう少し早めに食えよ」
「皆、大袈裟なんだよ。食べれたら問題ないじゃない。別に毒が入っているわけでもないんだし」
「いや、そういう問題じゃなくてなー」

朝から……いや、昼過ぎから喧嘩をする二人。
何て言うか……。
仲が悪いって言うか。
どちらかと言えば、兄弟喧嘩みたい。
この二人……どこか似てる。
改めて、そう思った。

それにしても、メモリーさん……。
元気になったのかな？
昨日よりは少し立ち直っている気がするけど。

ＫＹさんに怒られて、やっとのことでラーメンを食べ出すメモリーさん。
ＫＹさんはメモリーさんの漫画を奪って読んでいる。
さて、僕も何か食べよう。
僕もラーメンにしようかな？

違法ダウンロード〈メモリー編〉　★

眠ってみると、ストレスが減り。
少しは気持ちが楽になったけど。
それでも、状況に変わりはない。
むしろ、悪化している。

ハル以上の問題児。
ＫＹをどうするか。
住みつきはしなかったものの、こう毎日来られちゃかなわない。
変な事をされる前に、何とか追い出さないと……。

僕の膝上にはハル、隣にはＫＹ。
そんな中、ＫＹ追放策を考えながら、パソコンをしていたら。
不意にハルが話しかけてくる。

「メモリーさん、何をしているのですか？」
「他の人からデータをわけてもらってるの」
「……つーか、それ……違法ダウンロードだろ？」

ＫＹが口を出す。
それを聞いて、僕が言う。

「え？　そうなの？　初耳だけど」
「初耳って……。お前、知ってるだろ？　絶対にわざとだよな？」
「知らないよ。皆がしているから、いいのかと思ってた」
「いや、わざとだろ？　わかってるんだよ、お前の考えは」

うるさいなぁ～。

何で僕だけ怒られなきゃいけないわけ？
別にいいじゃない。ちょっとくらい……。
不満げな僕の下から、ハルの声だ。

「捕まらないのですか？」
「ユーザが多すぎて、捕まりゃしないよ」
「お前、案外に悪だな。しかし、流石に警察も黙っちゃいないだろ？」

ＫＹが問いかけてくる。
それに対して、僕が言う。

「そもそも、警察の中にどれくらいパソコンに強い人がいるの？
そんなにいないでしょ？　違法ダウンロする人と警官の数を逆転しない事には、手が回らないよ。それに、他の仕事もあるだろうしね」
「この世界の『橋』最高だな。こんなのが世界のリーダーをしているなんて知ったら、皆が仰天するぞ」

ＫＹが余計な事を言ってくれる。
文句があるなら、早く出て行ってよ。
大体、僕よりも二人の方が犯罪者じゃない。
人の部屋に侵入してきて、勝手に居すわって……。

僕が苛立ちを感じていたら、ＫＹが口を開く。

「して、あれらはお前がダウンロしたものですか？」

ＫＹの指差す先には僕のコレクション。
音楽やアニメなど、趣味で集めている物々。
違法ダウンロした物をＣＤに焼いている。

ＫＹが椅子から立ち上がり、コレクションに近づく。
すぐに僕がＫＹに言う。

「ちょっと荒らさないでよ。僕のコレクションなんだから」
「荒らさないけど、ちょっと見るだけ」

心配だな……。
ＫＹがコレクションを眺め出すと、ハルが僕の膝から飛び降りる。
そのままＫＹの元へと向かう。
コレクションを見るためだろう。

二人の事が気になって、パソコンなんてしていられない僕。
二人に振り返り、様子を窺う。
不意にＫＹが話しかけてくる。

「ちなみに、エロゲーはどれですか？」
「え？　ゲームは右側の小さい棚だよ」
「え！？　マジでエロゲーあるの！？」

仰天するＫＹ。
聞いておいて、失礼な奴。
冗談で言ったのか……。
それならそうと言ってくれれば黙っていたのに……。

僕が立ち上がり、二人の元へと向かう。
ゲームの棚から、一つを取り出し。二人に見せる。

＞ｉ１２１３５―２３１＜

「ちなみに、エロゲーでオススメなのがこれ。やってみる？」

「勧めるなよー！　おいー！」爆笑するＫＹ。
「エロゲーだからって、バカにしちゃ駄目だよ。かなりストーリーが充実しているんだから。最後は泣けるよ」
「だからって、勧めるなよ。これでも俺は女だぞ」
「え？　ＫＹに性別なんてあったの？」
「お前、失礼すぎー」

ＫＹがお腹を抱えて、笑い転げる。
隣ではハルも大爆笑だ。
なーんだかな。
別に笑いを取るつもりで言ったわけじゃないけど……。

写真立て〈ハル編〉　★（前書き）

夕食とか言ってるけど。多分、朝方の話です。なにせメモリーは夜型ですから。

写真立て〈ハル編〉　★

僕達を追い返そうとするメモリーさんだけど、
メモリーさんが話せば話す程に面白くて。
余計に出ていく気がなくなってしまう僕達。

そんなこんなで一日が終わる。
KYさんが帰った後、メモリーさんが深くため息。
困り顔で僕に目を向ける。

「ハルは帰らないの？」
「もうちょっといたいです」
「もうちょっと……それはいつまで？」
「飽きるまで」
「……」

疲れ顔を見せるメモリーさん。
やっぱり駄目かな……。
僕が帰るか帰らないか、心の中で葛藤していたら。
メモリーさんが風呂場を指差して、僕に言う。

「お風呂……先に入っていいよ。僕は夕食を作るから」
「居てもいいのですか？」
「だって、出ていく気がないんでしょ？　それじゃあ、仕方ないよ。ハルの気が向くまで、我慢するしかないね」
「無理矢理追い出したりはしないのですか？」
「追い出したところで、君はここに来る気でしょ？　それに……後味が悪くなるのも嫌だし。後で君に会う度に気が滅入っていたら、余計に疲れるよ。まぁ、早いところ飽きてね。期待しているよ」

「はい！」

やったー！

メモリーさんから初めて許可を貰った。

大喜びの僕。

すぐにお風呂場へと駆けていく。

今日から本格的なお泊まり決定。

何だか楽しい事が起こりそうな予感。

ワクワクしながら、お風呂に入る。

お風呂から出て、服を着て。

髪を乾かした後に、キッチンへＧＯ！

部屋中に良い香りが漂う中、メモリーさんを探してみる。

一目で発見。

写真立ての置いてあった場所。

写真立てを手に持ちながら、じっと写真を眺めている。

何だか話しかけづらくて、僕はただただ立ち呆け。

メモリーさんは僕に気づいていないみたい。

＞ｉ１２１３６―２３１＜

写真立てを眺め続けるメモリーさん。

何だか寂しげ。

確か……写真には綺麗な女の人の姿があったはず。

やっぱり好きな人なのかな？

もしかして、振られたとか？

それとも片思いとか？

うーん、どうなのだろう？
聞くに聞けない話だな……。

メモリーさんに近づいて、問いかけてみよう。
僕が近づいて行くと、メモリーさんが気づいてくれる。
今なら聞けそうな雰囲気。
すかさず僕が問いかける。

「その方はどなたですか？　メモリーさんの彼女ですか？」
「え？　あぁ……」

メモリーさんが写真を置いてあった場所に戻して、口を開く。

「まぁね……」
「何だか優しそうな人ですね。美人だし」
「フフッ……そうでしょ？　僕にはもったいないよね」
「そんな事はないですよ。とってもお似合いです」
「そうかな？」

メモリーさんが照れ笑い。
久しぶりに笑ってくれた。
続けて、僕が質問する。

「お名前はなんて言うのですか？」
「うん？　彼女の名前？」
「はい」
「日和……秋山日和だよ」
「秋山さんですか」
「うん……」

メモリーさんが頷いて、ぼうっと写真を眺め出す。
思わず、僕が口を開く。

「メモリーさんは引きこもりがちなイメージでしたけど。彼女がいるということは、よく外に遊びに行ったりもするのですか？」
「よく……外に遊びに行っていたね。まぁ、僕が一方的に連れ回していたんだけど」

うん？　何だか妙な空気？
僕の予感が当たったのか、メモリーさんがとんでも発言だ。

「彼女ね……。病気で亡くなったの。だいぶ前にね」
「え……」

ヤバい、聞いちゃいけない事を聞いちゃった。
凄く失礼な事をしちゃった。
メモリーさんの心臓にナイフを刺すくらいに、ヤバい事をしちゃった。
どうしよう！？
硬直して言葉がなくなる。
どうしよう！？
蒼白する僕に向かって、メモリーさんが言う。

「さぁ、夕食を食べよう。お腹空いたし」
「は、はい……」

話が逸れて一安心。
そうだったんだ……知らなかった。
もっと下調べをしておくべきだった。
きっとＫＹさんは知っていただろうに。

どうして教えてくれなかったのだろう？
明日にでも文句を言ってやる。

トラップ〈ハル編〉　★

お昼過ぎに目が覚める。
ぼんやりしながら、隣を見るとメモリーさんがいない。
もう起きたのかな？

そういえば、昨晩……というか今朝は失礼な事をしてしまった。
謝った方がいいのだろうか？
でも今更だし……。

真面目に考える僕の耳に入ってくるのは、メモリーさんの歌声。
超ノリノリで歌っているみたい。
謝るのはよそう。
どう考えても場違いだ。

メモリーさんの元へと向かう。
玄関の前、地面に何かを塗りながら。
凄く楽しそうなメモリーさん。
何しているのだろう？
僕が問いかける。

「何をしているのですか？」
「うん？　ＫＹを追い返すために、色々と考えているの」
「色々と……それは何を塗っているのです？」
「オイル」

オイル……地面に？
メモリーさん……ＫＹさんを言葉で追い返すのを諦めた代わりに、
トラップでも作る気だろうか？

どんな顔をしていいのかわからない僕が唖然と見ていたら、
メモリーさんがオイルを塗り終わる。

玄関から離れて、パソコンルームに入って行った。
しばらくして、出てきたと思ったら手にはエアガン？
しかも、かなり大きい。
本格的。
一メートルはありそうだ。
メモリーさんがエアガンを僕に見せながら、口を開く。

「電動マシンガンだよ。ちょっと改良したから、威力もそこそこ。
ＫＹには丁度いいね」
「どれくらいの威力なのですか？」
「ガラス貫通するくらい？」

死ぬー！
それ食らったら死ぬよ！
僕ならバリアーとか張れるけど、人間なら確実に大怪我だよね？
それって凄く危険じゃあ……。
僕が止める間もなく、チャイムの音が……。

勝手に扉を開けて、入って来たのはＫＹさん。
何も知らないＫＹさんが僕に向いて挨拶をする。
そんなＫＹさんに僕が叫ぶ。

「ＫＹさん、危険です！　ただちに避難して下さい！」
「何が？　……あぁ、この地面の事か。どうせヒッキーのトラップだろ？　くだらんな。レベルが低すぎる」
「いや、そうじゃなくて……」
「それより、ヒッキーはどこに行ったんだ？　姿が見えないけど」

ＫＹさんがオイルを飛び越え、部屋に入ってくる。
こっちに来ちゃ駄目なのにー！
蒼白する僕。
そして、ソファーの後ろから現れるのはメモリーさん。
マジでマシンガンを構えている。
メモリーさんがＫＹさんに口を開く。

「サヨナラ、ＫＹ！　最後まで迷惑だったよ」
「うぉい！？　それ何！？」
「三秒間だけ待ってあげる。１……２……」
「ムリムリムリ！　それ、ムリムリ！」

ＫＹさんが外に向かって走り出す。
オイルの前でジャンプして、見事にミスして。
滑って、転んで、頭を強打。
呻きながら頭を押さえるＫＹさんを見ながら、メモリーさんは大笑い。
何だ……マシンガンは撃つわけじゃなかったのか。
まぁ、よくよく考えたら、こんな所で発砲は無理だよね。
部屋が傷つくし、ご近所の迷惑にもなるから。

メモリーさんが爆笑する中、頭を押さえて起き上がるのはＫＹさん。
打ち切れモードで、立ち上がり。
もう一度滑って、体勢を崩す。
それを見て、更に笑うメモリーさん。

再度、ＫＹさんが部屋に入ってきて。
メモリーさんに向いて言う。

「ちょっと、上野君。お話があるんですけど」
「え？　何？　どうかしたの？」

メモリーさんが罪意識のない顔で首を傾げる。
ちなみに、上野というのはメモリーさんの本名。
『メモリー』はあだ名で本名は上野進一（うえのしんいち）というらしい。
この間、ちょっと小耳に挟んだ話。

ＫＹさんがメモリーさんの前に行き、地面を指差す。

「ちょっとここに座りなさい」
「何で？」
「いいから座れ」

かったるそうな顔をして、メモリーさんが地面に座る。
ＫＹさんも地面に座り。
僕も二人に近づいて、二人の隣に座りこむ。
ＫＹさんの対面にはメモリーさん。
そして、始まるのはＫＹさんの説教。
ＫＹさんがメモリーさんに言う。

「お前なぁ～。やっていいことと悪いことの区別もつかないのか？　あんなの打ち所が悪かったら大怪我だぞ。危ないじゃないか。お前、大人だろ？　常識わきまえろよ」
「別にいいじゃん、僕の部屋で何をしようが。大体、ＫＹが悪いんだよ。人の部屋に侵入してきて、僕の生活を荒らして。常識をわきまえなきゃいけないのはそっちでしょ？」
「だからって、あれは酷いだろ？　言いたい事があるのなら、口で言えよ！」

「口で言っても聞いてくれないから、行動に出たんだよ！」

二人の喧嘩。

少しずつエスカレートしていく。

僕が不安げな顔をしていたら、最後はメモリーさんがそっぽを向きだす。

＞ｉ１２１８７―２３１＜

「もういいよ。僕の話は聞かない癖に、自分のことばっかり押しつけて。ＫＹと話していても、楽しくない」

「そうか。じゃあ、楽しい話をしてやろう。今日、めっちゃノリのいい音楽を入手しました」

「どんなの？」

怒っているのかいないのか中途半端な口ぶりのＫＹさんに向いて、メモリーさんが初めて話に興味を持つ。

その後、始まるのは喧嘩ではなく。

音楽についての話し合い。

しかも、アニソンの類。

僕も割り込んで乱入。

三人でアニソンについて語り合う。

ちなみに喧嘩はどうなったのだろう？

多分、二人共に飽きたのだろうな……。

初音ミク〈メモリー編〉　★★★（前書き）

皆でお絵かきです。
ちなみに、メモリー。
面倒くさいから、ミクの頭のオプションなしにしています。

初音ミク〈メモリー編〉　★★★

どうしてこうなったのか？
多分、きっかけを作ったのはＫＹだろう。
音楽から話が逸れてしまい。
気が付けば、皆でイラストを描く事になっていた。

お題は『初音ミク』。
だけど、僕……普段から絵なんて描かないからなぁ……。
以前に練習したことはあるけど、すぐに飽きてしまった。
だって、ゲームの方が面白いし。
他にもやりたい事が色々とあるから。

パソコンに向かう僕の後ろで、ＫＹが口を開く。

「できた。こんな感じ」

＞ｉ１２１８９―２３１＜

ＫＹのイラストを見て、ハルが問いかける。

「ＫＹさんのイラストはいつも幼いですね。癖ですか？」
「そうだな。ちびっ子系が描きやすいんだよな。どうしても頭身が低くなる」
「ＫＹはロリコンだからね。仕方ないよ」と僕。
「おい、ヒッキー。一言多いぞ。お前、俺に喧嘩売ってるの？　何で俺にそんなに当たるの？　え？　何？　嫌がらせ？　俺の事嫌いなの？　嫌いなら素直に嫌いって言えよ」
「嫌い」

そりゃあ、玄関のチェーンを毎度壊されていたら嫌いにもなる。
その上、さっきは僕の大切なＣＤを踏みつけるし。
地面に置いていた僕も悪いけど、普通は足元見ながら歩くでしょ？
ＫＹが不満げに、ハルに話しかける。

「お前はどう思う？　いくらなんでも、ヒッキー調子に乗り過ぎだよな？」
「僕……子どもだから分からないです」
「お前、元高校生じゃなかった？」
「あ、できました。僕も完成です」
「お、見せて。見せて」

＞ｉ１２１９０―２３１＜

ハルのイラストを見て、ＫＹが口を開く。

「ハルっぽい絵だな」
「どういう意味です？」首を傾げるハル。
「何か……爽やかだ」

ＫＹが答えて、ハルが自分のイラストに目を落とす。
そんなハルに僕が質問する。

「上手いじゃない。ハルは絵とか描く人なの？」
「たまに描きます。暇な時とか」
「そっか～。僕は描かない人だから、えらい事になってきたよ」
「さっさと見せろよ。ヒッキー」

ＫＹが急かしだす。

だけど、本当に……。
これヤバいって。
凄く変だ。
ちょっとこれ……人に見せられないな。
僕が眉をしかめていたら、ＫＹが話しかけてくる。

「つーかさぁ。お前、描かない人なのに何でタブレット持ってるの？」
「何でも持っていたら便利かと思って。正直に言って、使ってないけどね」
「もったいないな。俺にくれよ」
「嫌」

それにしても問題だ。
描けば描くほどに、違和感が……。
え？　これ、本当に見せるの？
酷い出来だけど。
ＫＹに笑われるかもしれない。
うーん、どうしよう？
停止する僕にハルが話しかけてくる。

「どうですか？　メモリーさん？」
「うーん、見ない方がいいかも」
「気になります。見たいです」
「初めに一言だけ言っておくよ。僕、絵なんて描けないから」
「さっきも言ってただろうが。さっさと見せろって！」

ＫＹが口を出す。
見せるって……これを？
何か下手過ぎて見せる気にもならないし。

見せないって選択肢はないのかな？
僕が考えていたら、ハルが問いかけてくる。

「まだですか？　適当でいいので、見せて下さい」
「未完でも構わんから、見せろよ。ヒッキー。逃げるなんて、卑怯な真似をしたら。ただじゃおかないぞ」
「わかった、わかった。後、三十秒待って」

適当に背景を塗って、文字書いて完成。
わっけわからない作品だ。
僕が二人にイラストを見せる。

＞ｉ１２１９１―２３１＜

「酷い事になったよ」
「こらぁ、酷いな」とＫＹ。
「うーん……」

ハルが黙り込む。
僕が二人に口を開く。

「だけど、ＫＹよりは真面目でしょ？」
「いや、問題なのは絵じゃない。文字だ」

ＫＹが画面を指差す。
ハルが頷き、小声で呟く。

「『ゆ』が読めません……」
「昔から僕は字が汚いの」
「つーか、漢字使えよ」

ＫＹまで文句を言う。
うるさいなぁ～。
仕方がないから、文字を消して書き直す事に。
途中まで書いて、手が止まる。
考えた末に、ハルに問いかける。

「ねぇ、ハル。『ゆるして』って、漢字でどう書くの？」
「言偏に、正午の『午』です」
「言偏って何？」
「あの……言葉の『言』です」
「あぁ……。で、正午の『午』ってどう書くの？」
「あの……メモリーさん。それ、小学校の漢字ですよ」
「うん……かもしれない」

うーん、漢字は苦手だ。
昔から国語は苦手だったから、本を読むのも苦手だし。
呆れるハルの後ろから、ＫＹが教えてくれる。

「午後の『午』だ」
「午後の……」

もしかしたら、こうかな？
書いてみる。
すぐにハルが教えてくれる。

「そっちの『後』じゃないですよ」
「あれ？　違ったの？」
「そうじゃなくて、あの……『牛』の上の部分が突き出ない奴です」
「牛……」

わかんない。
もういいや。
ひらがなで書いてやる。
そしたら、すぐにＫＹが注意してくる。

「だから、『ゆ』が汚いって。少しは丁寧に書けよ」

質問〈ハル編〉 ★

三人で駄弁って、遊んで、騒いだ後。
ＫＹさんが家に帰る。
残された僕とメモリーさん。
昨日と同じように行動する。
僕がお風呂に入っている間に、メモリーさんが夕食作り。

お風呂から出ると、美味しそうな夕食が待っていた。
すぐに席に付いて、夕食を眺める。
今日のメニューはちらし寿司とお吸い物。
ワーイ、すっごく美味しそうだ。
よだれを垂らす僕に、メモリーさんがお箸をくれる。
メモリーさんがお茶を用意してくれて、席に着く。
手を合わせて、頂きますの合図。

夕食をガッつく僕に対して、
メモリーさんはゆっくり食事。
というのも、漫画を読んでいるから。
メモリーさん……いつも漫画を読みながら食事をしている気がする。
ＫＹさんに見つかったら、注意されるだろうな。

夕食を食べ終わり、暇になる僕。
暇すぎて、メモリーさんに話しかける。

「あの……一つ気になる事があるのですけど」
「うん？　何？」
「世界のリーダー……『橋』の人達って何人いるのですか？」
「……」

僕の話を聞いて、メモリーさんが漫画を閉じる。
そして、僕に顔を向ける。

「何人って決まりはないけれど……。今はそうだね、五人かな？『未来』に、『死神』。『姫様』と『僕』……。それに……厄介なのが一人。以前はもう少しいたけど。皆、忙しいからね。止めた人もいるよ。でも、そんな事を言っているうちに、また人が増えるかもしれないし……」
「へー、そうなのですか」

＞ｉ１２２２３―２３１＜

想像していた以上に、軽いノリだな。
もっとシビアな物かと思っていたのに……。
まるで何かの組合みたい。
僕がメモリーさんに問いかける。

「四人まではわかりましたけど……。最後の『厄介な人』って誰ですか？　僕は……お会いした事がありませんよね？」
「うん、ないと思うよ。普段は自分の世界から出てこないし。そうだね……。僕よりも、閉じこもりがちかもしれない。凄く怖い人なの。あだ名は『リベンジャー』。たまに余所の世界を荒らしに来るの。本当に止めてほしいよね」
「荒らしに……って、そんな事をしてもいいのですか？　『橋』なのに……」
「もちろん、ルール違反だよ。元々、余所の世界に行くこと自体がルール違反だもの。世界には力のバランスがあるからね。力の弱い世界と強い世界。『橋』が行き来することによって、世界のバランスが崩れるの」

「でも、皆さん……すぐに余所に遊びに行きますよね」
「うん、皆でルール破ってるの」

ヘラヘラ笑うメモリーさん。
駄目じゃん！
思わず、突っ込んでしまいそう。
そんな僕に、メモリーさんが教えてくれる。

「きっかけは『死神』らしいよ。『死神』が『未来』の所に乱入したんだって。それから、皆してルールを破るようになったね。まぁ、大樹様も怒らないから。いいかなと思って。だけど、『リベンジャー』の荒らしはそれ以前からだったなぁ……」

ちなみに、『大樹様』というのは『橋』の人達をまとめる大本みたい。
要するに、一番偉い人ってことかな？
僕がメモリーさんに問いかける。

「では……。もしも、その人が余所の世界で大暴れを始めたら。どうするのです？」
「もちろん、僕達がどうにかしなきゃね。まぁ、『橋』は大樹様の加護を受けているから。『橋』同士の殺し合いは出来ないし。『橋』になるとそれなりに力が付くそうだから。無理矢理に追い出すしかないよ」
「へ～、大変ですね」
「まぁね。ただ……」
「はい？」

メモリーさんが暗い顔。
小さな声でぼそりと呟く。

「僕は……大樹様の加護を受けていないから。下手をしたら殺されるんだよね……。だから、『リベンジャー』の事が苦手なの。まぁ、『姫様』も怖いけど……」
「え？　どうして、メモリーさんだけ大樹様の加護がないのです？」
「僕は……皆とは違うから。正直に言って、ただの人間。世界を移動する事はできるけど……。それ以外は、ごく普通の人間だよ」
「でも、『橋』なのでしょ？」
「皆のような、真の『橋』ではないよ。仮の橋みたいなものかな？　まぁ、いずれにしろ。『リベンジャー』に対抗するような力はないね。できる事と言ったら、『未来』や『死神』に連絡して泣きつくことくらい？」

何だかよくわからなくなってきた。
メモリーさんは『橋』じゃないの？
首を傾げる僕。
メモリーさんに質問しようとしたら、メモリーさんが立ち上がる。
食事の後片付け。
あ……聞きそびれた。
まぁ、いいか。
明日にしよう。
僕も立ち上がって、お手伝いをする。
ちょっとくらい手伝わないと、流石に悪いよね。

再チャレンジ〈ハル編〉　★

後片づけをして、テレビを見て。
眠って起きたら、既にお昼過ぎ……。
メモリーさんの姿はない。
仕事かな？
ベッドから下りて、メモリーさんを探す。

パソコンルームの扉を開けると、メモリーさんの姿を発見。
パソコンに向かって、腕を組んでいる。
僕がこっそりと覗いていたら、メモリーさんが頭を抱えて叫び出す。

「あー！　もう、何が変なのー！？」

何の事だろう？
ちょこちょこと近づいて、パソコンを覗きこんだら。
初音ミク？
昨日の続き？
昨日のとは違うイラスト……。

＞ｉ１２２２８―２３１＜

僕がメモリーさんに話しかける。

「おはようございます」
「あぁ、おはよう」
「また描いていたのですか？」
「昨日のがあまりにも気に入らなかったからね。やり直そうと思って、描いていたんだけど。やっぱり気に入らなくて。どうすればい

いと思う？」
「それで十分だと思うのですけど……」
　メモリーさんのイラストに目を向ける。
別に至って問題ない。
僕にしてみれば、上手いくらいだ。
それにしても、一日の間に何が起きたのか？
絵のタッチが凄く変わっている。
描き方……変えたのかな？
僕がメモリーさんに問いかける。
「描き方を変えました？　何だか昨日の絵とえらく違うのですけど……」
「うん、変えてみた。だって、同じように描くのは面白くないから」
「何だか可愛くなりましたね」
「そう？　じゃあ、これでいいや。どちらにしろ、もう描く気なんてないけど」
　パソコンの画面を消して、メモリーさんが振り返る。
「じゃあ、お昼にしようか」
「はい」
　素早く頷く僕。
今日のお昼は何だろう？
ワクワクしていたら、チャイムの音が。
眉をしかめるメモリーさん。
多分、ＫＹさんだろう。
メモリーさんが僕に向いて言う。

「いない振りでもしてみる？」
「勝手に入ってくるので意味ありませんよ」
「そうだね……」

メモリーさんがため息をつく。
玄関方面から、いつもの声が聞こえてくる。
ヤル気のない返事をしながら、玄関に向かうメモリーさん。
僕も後ろから付いて行く。
今日は何をして遊ぶのだろう。
だけど、まずはご飯だよね。

昼食の事を考えながら、遊ぶ事も考えて。
まるで子どもになった気分。
まぁ、子どもになっているのだけど。
そういえば、最近……自分が元高校生だった事を忘れてしまいそうになる。
これって、かなりマズイ事かも。

ＫＹがやってきたのはいいけれど。
今日は早起きをして、仕事をしていたから。
もの凄く眠い……。
ぼんやりと二人の話を聞いていたら、限界が来る。
ＫＹに向いて、僕が言う。

「ＫＹ、悪いんだけどね。僕達、今日は早起きをして凄く眠いの。今から寝るから、ＫＹは帰ってくれない？」
「俺が来て、まだ一分しか経過してないんですけど！？」
「ごめんね～」

僕が言って、椅子から立ち上がる。
すぐにＫＹがハルに向く。

「え？　お前ら何時に起きたんだよ？」
「僕は今起きました。全然、眠たくありません」
「……つーことは、ヒッキーだけじゃん！　何でハルまで巻き込んでるんだよ！？」
「ハルも眠いよね。早く寝ようね」

ハルを持ち上げて、ベッドに向かう僕。
ＫＹとハルを放置なんてしていたら、何が起きるかわからない。
凄く不安だ。
それに……これ以上、ＫＹを部屋に置いておきたくない。
何せ日に日にＫＹがいる時間が長くなっている。
このままでは部屋が乗っ取られてしまいそう。
そんなのごめんだ。

>i12247—231<

僕がハルを連れてベッドに向かう中、後ろからＫＹの怒鳴り声が聞こえてくる。
もちろん、そんなのは無視して、ハルをベッドに放り込み。
自分もベッドに転がり込む。
早く帰って、ＫＹ。
たまには空気読もうよ。

しばらくも経たぬうちに、ハルがベッドから脱出。
あー、逃げられた。
まぁ、いいや。と思って寝ていたら。
ＫＹのうるさい声が聞こえてくる。

「お前はどう思う？　友達が遊びに来ているのに、一人で寝るなんて。酷いと思わないか？」
「うーん……わからないです」とハル。
「このヒッキーに天誅を加えたいんだけど、何か良い手はないか？」
「うーん……わからないです」
「絶対に不幸にしてやる……」

ＫＹがいらない事を考えるけれど。
僕の眠気は増すばかり。
こんな時に寝るのはマズイかな？
だけど、どうしても眠くて……。

悪だくみ〈ハル編〉　★

ＫＹさんがやってきて、メモリーさんが二度寝開始。
そんなメモリーさんを見て、不満そうなＫＹさん。
腕を組みながら、悪巧みを考える。
不意にＫＹさんが僕に向く。

「お前は何をされたら、ショックだ？」
「うーん、以前に女の子達に襲われた時はショックでした。いくら本物の身代わりとはいえ、流石に泣きましたね」
「そうか……。一案だな。しかし、誰がこんな奴襲うんだよ？」
「プライドが高ければ、何をされてもショックだと思いますけど」
「果たしてこいつにプライドなんてあるのか？」
「パソコンを壊すとか……」
「そりゃあ、ショックだろうけど。その後、立ち直れなくなっても困るし。こいつ仕事がそれだからなぁ……。あまり無茶すると、マジで私生活潰しそうだ。それは流石にモラルに欠ける」

へ～、ＫＹさんでもそういう事は考えてるんだ。
意外だな……。
ちょっと感心しながら、僕が言う。

「僕達が居座れば、メモリーさんは泣きますよ」
「まぁ、そうだな……。でも、これ以上……居座るって。ちょっと時間帯的に無理」
「うーん、悪巧みも難しいですね」
「本当にな。どうしようか？」

ＫＹさんが真顔になって悪巧みを考える。

こんなに真面目なＫＹさんを見るのは初めてだ。
悪巧みを考えるのに、こんなに必死になる人を見るのも初めてだ。
思考の末に、ＫＹさんが口を開く。

「未来風に行こうか？」
「未来さん風ですか？　どういう意味ですか？」
「未来を泣かす時にする方法」

それって、要するに……普段から未来さんを苛めているの？
この人、最強だ。
あの師匠を泣かすなんて。
大抵の人は未来さんの思惑通りに動かされるのに……。
ＫＹさんはそれの対象外ってわけか……。

僕が驚いていると、ＫＹさんがどこからともなく杖を取り出す。
何だかファンタジックな杖。
この間、僕が一人で騒いでいたら、これで頭を殴られた。
とっても硬いということは知っている。
痛かったもの……。
だけど、それ以外の使用を見た事がない。
モンスターを召喚できるそうだけど……まさかここで？

ＫＹさんを眺めていたら、杖をクルクルと振りまわす。
といっても、小さく振っている。
壁や物に当たらないように考えているみたい。
ＫＹさんが杖を振りながら、口を開く。

「ほい、ほい、ほい」
「呪文とか唱えなくてもいいのですか？」
「めんどい」

面倒くさかったら、呪文を省略できるみたい。
便利な杖だな。
感心しながら、眺めていたら。
空の空間に二人の人物が召喚される。
二人の姿を見て、仰天。
何せ知り合い。
驚く僕に、ＫＹさんが口を開く。

「変質者を二名召喚してみた」
「変質者……っていうか、何でマティー！？　しかも、もう一人ってロックさん！？」

マティーというのは、僕の家……。
女神様達が住んでいる城に住む、女神様の一人。
凄く変わった女の子。
僕を見る度に追いかけて、僕を着せ替え人形にしようとする。

そして、もう一人はロックさん。
この間、知り合ったのだけど。
この人に犬耳をつけられた、しかも外れない。
ロックさんはストーカーで有名らしい。
未来さんが言っていた。

とんでもない二人が登場して、ＫＹさんが指揮を執る。

「お前らを呼んだのは言うまでもない。今日のターゲットはあそこで眠っているバカだ。行け、我が下部！」
「了解でありますです！」とマティー。
「今日はネコ耳メイドの気分ですよ～！」

二人共に不思議がることなく、ＫＹさんの命令に忠実だ。
どうして自分がここにいるのか、少しは疑問を持ってほしい。
だけど、まぁ……二人共に変人みたいだから。
言っても理解してくれないだろう。
変人二人がベッドで眠るメモリーさんの元へと向かう。
どうしよう？
メモリーさんの援護をするべき？

＞ｉ１２２８４―２３１＜

僕が優柔不断に陥っていたら、メモリーさんの叫び声が聞こえてくる。
いきなり知らない人が来て、驚いているみたい。
無理もないな。
しかも、その二人に服を脱がされそうになるのだから、尚更だ。

乱闘が起きる中、ＫＹさんに目を向けると。
冷蔵庫からジュースを取り出して、コップに移している。
僕も近づいて、コップを渡す。
ＫＹさんがジュースを入れてくれる。
後の事は、ジュースを飲んでから考えよう。

メイド服〈ハル編〉　★

変人二名が現れて。メモリーさんが、さぁ大変。
半狂乱になりながら、必死の抵抗だ。

「何するの!?　冗談止めてよ!　大体、君達は何なの!?　人の部屋に勝手に入ってきて!　ちょっと、止めてって!」
「あなた様にはこのお服がお似合いでありますですよ～」とマティー。
「オプションでネコ耳もどうですか!?」続いて、ロックさん。

マティーがメイド服を取り出し、ロックさんがネコ耳を取り出す。
それを見て、仰天するメモリーさん。二人に向いて、口を開く。

「何それ!?　メイド服!?　何で僕がそんなの着なきゃいけないの!?」
「きっとお似合いですよ!」とロックさん。
「あなた様は素材が良いので、最高の作品ができますですよ!」マティーが言う。

変人二人のもくろみを知って、二人から逃げ惑うメモリーさん。
もちろん、変人二人は罪意識など持っていない。
諦める素振りもない。
容赦のない変人達に対して、メモリーさんが打ち切れる。

「止めろって、言ってるだろ!　あんまり調子に乗ってると、マジでお前らぶっ殺すぞ!　警察呼ぶぞ!　あっち行けよ!　くそったれバカ!」

メモリーさん……口が悪い。
まぁ、必死なのはわかるけど。
いつもよりも数倍は酷い口調。
メモリーさんの言葉を聞いて、ＫＹさんが口を開く。

「マジ切れだな。ヒッキーは切れたら、口が悪くなるらしい。ハルは真似するなよ」
「ん～」

適当に誤魔化す僕。
自信はない。
マジ切れしたら、やっぱり冷静でいられないから。

未だに続く乱闘。
メモリーさんが押され気味。
何せ相手は一般男性と女神様だ。
ロックさんは体力がありそうだし。
マティーにおいては、いくら女性でも神力という荒技がある。
普段から動かないメモリーさんは初めから力負けしている。
僕のように魔力を操れるわけでもなく、
未来さんのように超人的な体力があるわけでもない。
勝ち目なんて、ないに等しい。

しばらくもしないうちに、メモリーさんの口調が変わる。

「本当、すみません。僕が悪かったです。ごめんなさい。反省しています。お願いですから、止めて下さい。今日から心を入れ替えますから、許して下さい」
「それではこれを着て下さい！」とロックさん。
「きっとお似合いでありますですよ～！」マティーが言う。

それにしても、メモリーさん……謝罪モード。
急に弱気になった。
もちろん、ＫＹさんが反応する。

「弱いな……ヒッキー。もうちょっと頑張れよ」
「だけど、勝ち目ありませんよ。あんな変人二人を相手にしたら」
「いや、それ以前にヒッキー体力なさすぎ」
「うーん……確かに。一分も持ちませんでしたね」
「せめて五分は耐えてほしかったなぁ～」

そう言いながら、助ける気のないＫＹさん。
僕は……どうすればいいの？
助けたいけど……。
助けたら、ＫＹさんに怒られる？
おろおろと戸惑っていたら、メモリーさんが吹っ切れた。

「わかったよ！　着りゃいいんでしょ！　自分で着るから、無理矢理に着替えさせるのは止めてよね！」

え？　着るの？
冗談かと思っていたら、メモリーさん……マジで着替えだす。
唖然とする僕。
ＫＹさんに目を向けたら、冷蔵庫を漁っている。
もう話に飽きたみたい。
ＫＹさんって本当に飽き性。

メモリーさんがネコ耳メイド服を着て、不満そうに話しだす。

「これで満足？」

「お似合いでありますですよ～」
「最高です！　その不満げな顔がグッときます」

鼻血を流すマティーの隣では、ロックさんが写真を撮っている。
やっぱりこの二人は変人だな。
改めて確認できた。
皆でワイワイと騒いでいたら、ＫＹさんがやってくる。
メモリーさんを見て、眉をしかめる。

「何してるの？」
「メイド」
「いや、まぁ……そりゃわかってるんだけど」
「さっさとこの二人を処分して」

メモリーさんが変人二人に指を差す。
ＫＹさんが頷いて、杖を振る。
二人が消え去り、部屋に静けさが。
もう一度、ＫＹさんが口を開く。

「マジで着るとは思わなかった。っていうか、かなり冷静だな。もうちょっと……落ち込んだりショックを受けたりしないの？」
「ない」
「せめて恥ずかしがるとかさぁ……」
「面倒くさい」
「……」

ＫＹさんが言葉を無くし、僕に向く。

「このメイド、可愛くないな」
「カッコいいです」

「そうか？　俺は何か……全然面白くないんだけど」
「こんなのアニメだけだと思ってたのに……」

　メモリーさんがぼやく。
ＫＹさんがメモリーさんに目を向ける。

「じゃあ、せっかくだし、メイドごっこでもしようか？」
「うん、いいよ」
「俺がご主人様ね」
「うん、わかったよ」
「えーっとな……まずは……」
「ほら、ご主人。そんなに暇なら掃除機かけてよ」

＞ｉ１２２８５―２３１＜

　メモリーさんがＫＹさんに命令を下す。
あれ？　何か間違ってない？
ＫＹさんが眉をしかめて、メモリーさんに口を開こうとする。
だけど、それを遮って、メモリーさんが続けて言う。

「それが終わったら、洗い物ね。後、ゴミ捨てと買い物よろしく。
僕は寝るから、後は頼んだよ。頑張ってね」
「いや、ちょいま……」

　ＫＹさんが止める間もなく、メモリーさんがベッドに向かった。
もちろん、メイド服のまま……。
沈黙する僕達。
ＫＹさんが僕に言う。

「何か間違ってない？」

「そんなことありませんよ」

「……」

今頃どうしているの？　〈ハル編〉　★★（前書き）

ちょっと過去小説のネタが入ります。
前回「人間止めましたから……」と前々回「ちびっ子神様」の主人公の今頃。
挿絵はリアルに起きている出来事です。

今頃どうしているの？　〈ハル編〉　★★

メモリーさんが眠ってしまい、
やることがなくなった僕達は。
結局のところ、メモリーさんの指示通りに動く事に。
と言っても指示に従うのは僕だけで、ＫＹさんは隣で駄弁っている。
まったくもって手伝ってくれそうにない。
まぁ、初めから期待なんてしていなかったけど……。

洗い物をする僕の隣でＫＹさんが口を開く。

「暇だなぁ～」
「暇ですね」
「ヒッキーは一人で寝ちまうしな」
「今日は早起きしたそうですから、寝かせておいてあげましょうよ」
「早起きって言っても、どうせ昼前だろ？」

ぶつぶつと文句を言い続けるＫＹさん。
そんなに口が動くのなら、手だって動くでしょ？
ちょっとは手伝ってくれないのですか？
心の中で思っていても、ＫＹさんには通じない。
口で言ったって通じないのだ。
ＫＹさんに意思を伝えるにはどうしたらいいのだろう？

不意にＫＹさんが話を持ち出してくる。

「そういえば、他の奴らは何してるんだろうな？」
「他の方ですか？　例えば、誰です？」
「ハルトとかどうなってるの？　お前の根源なんだから、お前がよ

く理解してるんじゃないの？」
「知るわけがありませんよ。確かに僕はハルトのコピーですけど、既に別個体です。向こうで起きている出来事をテレパシーで通じ合えるなんて思わないで下さい」
「そうか……大杉とイチャイチャライフか」
「……」

大杉さんと言うのは、僕の元彼女……。
と言っても、別に振られたわけじゃない！
僕はハルトによって作られたけど……。
僕が作られた時より、以前の記憶はハルトと同じ物だ。
だから……何と言うか。
大杉さんはハルトの事が好きだし、
ハルトも大杉さんの事が好きだから。
いくら僕が大杉さんの事を好きだからといって、
僕が出る幕なんて初めからなかった。

合理的と言えば合理的。
不合理と言えば不合理。
成るように成った、その形がこれだ。

不満げな僕の後ろから、ＫＹさんの小さな声。

「お前……負け組だもんな」
「うるさいです！」
「あまり騒ぐとヒッキーが怒りだすぞ」
「そう思うのなら、変な事を言わないで下さい！」
「ほーい」

それにしても、今頃どうしているのだろう？

大杉さんとイチャイチャライフ……。
別に悔しいとか思ってないもの。
僕にだって、エアさんがいるもの。
全然、根に持ってないし。

＞ｉ１２３１５―２３１＜

しばらく時間が経過して、またもやＫＹさんが口を開く。

「ところで、柊はどうなったんだ？」
「さぁ？　相変わらず元気にしているのでは？」
「大学受かったの？」
「どうなのでしょう？　最近は会っていないので、あまり詳しい事は……」
「桜井さんは確実に受かったとして、春日井は落ちただろ？」
「いえ、それもちょっと……」

うーん、最近は連絡もしていないからな。
どうなっているのだろう？
一度、シバルさんに電話してみないとな。
考える僕の後ろでは、ＫＹさんが一人で呟き続ける。

「春日井は落ちただろ～？　あいつが受かれる大学なんて想像できないし」

＞ｉ１２３１６―２３１＜

復讐計画〈メモリー編〉　★

目が覚める。
今は何時だろう？
時計を見ると、夜中の一時……。
流石に、ＫＹも帰ったかな？

起き上がって、ハルを探すと。
ソファーに座りながら、テレビを見ていた。
僕がハルに話しかける。

「おはよう……」
「あ、メモリーさん。お目覚めですか？　ちゃんとお掃除しておきましたよ」
「どうせＫＹは手伝ってないでしょ？」
「はい、まさに」
「だろうね」

やっぱりＫＹはＫＹだったか……。
ＫＹの無能さを改めて確認した後。
ハルの隣に座って、お礼を言う。

「ありがとう、ハル。助かったよ」
「いえ……僕も何か手伝わないと。ただの邪魔者になりますから」
「そう思うのなら、そろそろ帰る？」
「う～ん……」

ハルが曖昧に答える。
まだ帰る気にはなれないみたい。

まぁ、いいか……。

　ハルの頭をポンポンと撫でて、立ち上がる僕。
腕を組んで考える。
今度こそＫＹの奴を本気で仕留めなければ。
死んだって構わない。
元々、余所の世界の住人だ。
責任は全て『未来』に掛るだろう。
ＫＹが住んでいる世界のリーダー……『橋』だから……。
僕は知らない。

　どうやって殺るか……。
チェーンに電気でも通しておく？
わざわざチェーンに触れる人なんて、他にいないだろうし。
僕がＫＹ抹殺計画を立てていたら、ハルが後ろから声を掛けてくる。

「あの……メモリーさん」
「うん？　何？」
「凄く真面目に……何考えているのですか？」
「ＫＹ抹殺計画だよ」
「え……。ＫＹさんに復讐するのですか？」
「復讐……だね。あんなの死んだって別に誰も困らないよね」
「いえ、それは流石にマズイですよ。いくらなんでも未来さんが可哀そうですよ。確か……ＫＹさんの世界って、未来さんの所でしたよね？」
「うん、そうだけど……。大体、未来が管理しないから面倒な事になってるんだし。ちょっとくらい、いいでしょ？」
「ちょっとで人殺しはマズイですよ……」
「そう？」

まぁ……駄目か。
未来に文句を言われるのも疲れるし。
じゃあ、どうしようかな？
一回、未来に会って相談してみる？
それが一番かな……。
ついでに死神に会って、ハルの事も相談してみようか？
上手くいけば、二人共に帰ってくれるだろうし……。

僕が考え込んでいたら、ハルが声を掛けてくる。

「あの……メモリーさん」
「うん？　何？」
「あの……着替えなくてもいいのですか？　まだメイド服……」

ハルに言われて、自分の服に目を向ける。
あ……忘れてた。

＞ｉ１２３６９―２３１＜

話を聞いてよ〈メモリー編〉　★

メイド服を脱いで、シャワーを浴びて。
普段着を着てから、持ち物を確認。
携帯は持った、財布は持った、カギは持った。
ボールペンは……もちろん持っている。
さぁ、行くか。

玄関に向かう僕を見て、ハルが問いかけてくる。

「こんな夜中にお出かけですか？」
「うん、すぐに帰ってくるよ」
「どこに行くのですか？」
「中央セントラル」

セントラルというのは、世界と世界を繋ぐ中心に位置する所。
一般の人には入れない。
『橋』専用のお話広場。
まぁ、例外はあるけれど……。
それはややこしいから説明しない。

セントラルではいつも大樹様がいて、眠っている。
起きているところを見ることは、まずない。
よっぽどの事がない限り……起きないと思う。
だから、大樹様にも頼れない話……。

後ろから聞こえてくるハルの声を無視して、部屋を出る。
『未来』と『死神』はいるかな……。
できれば、他の『橋』には会いたくない。

『リベンジャー』には会わないだろうけど、
『姫様』に会ったら最後だ。
最近は機嫌が悪いから……。
すぐに喧嘩を売ってくるし。

部屋を出て、カギを閉めて。
向かう先は近くの公園。
普段は雑木林からセントラルに向かうけど。
今は真夜中だし、誰もいないだろう。
だから、きっと……大丈夫。

公園に辿り着くと、周りを確認。
人の姿はない。
一番大きな木の前に行き、ボールペンを手に取る。
人がいない隙を狙って、ボールペンを木に当てる。
すると、その木が白く輝いて、セントラルへの扉が開く。

白い木の中を突っ切って、駆けていく僕。
誰もいなかったら、どうしよう？
今の僕には、余所の世界にまで足を向けるほどの気力がない。
セントラルで昼寝でもしてようかな？
待っていたら、いずれ誰か来るだろうし……。

そんな事を考えていたら、セントラルに到着。
それに加えて、人影を発見。
未来に死神、姫様……。
姫様の肩には青い鳥……ブレットだ。
ブレットは姫様の護衛役……姫様の命令で騎士に変身する。

凄く忠誠心の高い人。
何だ、メンバー揃ってるじゃないか。

皆に近づくと、すぐにこちらに気づいてくれる。
未来がヘラヘラ笑顔で僕に言う。

「お久～、メモリー」
「お久じゃないよ。もう僕、死にそうなんだから。ＫＹとハルをどうにかしてよ！」
「まぁ、いいじゃん。メモリーは生活に刺激がないでしょ？　たまには、刺激があっても問題ないんじゃない？」
「問題だらけだよ！」

怒鳴る僕を見て、未来は何とも思わないらしい。
全然、話に取り合ってくれない。
僕が泣きそうな顔で死神に目を向けると。
死神が苦笑いしながら、小さく呟く。

「まぁ、あの……ＫＹさんは問題だとしても。ハルさんは問題ないでしょ？　常識を心得ていますから」
「常識を心得ている人は、勝手に人の部屋に入らないよ！」
「大体、メモリーは気にし過ぎなんだよ。そんなにバリアー張ってると、根暗になるよ。ほら、ペットを飼うような気分で軽く二人を受け流して。ちょっとは引きこもり生活を改善してみたら？」

未来が言う。
好き勝手な事……。
僕の気持ちを分かってくれない。
ペットを飼うのとわけが違う。
あの二人が部屋にいるだけで、僕の生活が荒れ狂うのに。

僕が打ち切れて、未来に怒鳴りつける。

「本当にペットだと思うのなら、未来が飼えばいいじゃない！」

「俺は他にもペットいるから。これ以上は、飼えないな」

「僕は……居候の身なので。ペットはちょっと……」と死神。

「シバ君の場合は自分がペットみたいなものだからね。そりゃ、飼えないや」

未来が死神を見ながら、ケラケラ笑う。

不満げな死神。

不意に未来が僕に向く。

「そんなことよりさぁ、今度行う合唱会の練習はしてるの？　どうせメモリーの事だから、サボってるんじゃないの？」

「まぁ、大分と先の話ですし。まだ時間がありますから、ゆっくり練習すればいいですよ」死神が答える。

そんなことより……か。

目眩、頭痛、吐き気。

一気に調子が崩れる……。

イライラした気持ちが落ち着きなく、

僕の身中を駆け巡る。

キモチワルイ……。

帰ろう……。

誰もわかってくれない。

皆嫌いだ。

皆から背を向け、家に帰ろうとする僕。

背後からは、未来と死神の楽しげな声。

その声を聞いているだけでも、気分が滅入る。

僕が姫様の前を横切った時、姫様の小声が耳に入る。

「皆さん、ＫＹですね。メモリーさんの気持ちも考えないで……」

「……」

「メモリーさん、もし疲れが溜まっているのなら。ここで休めばいいのです。ここには私達しかいませんから、気楽ですよ」

「……」

「とりあえず、死なない程度に生きて下さい。そうすれば、いずれ楽になりますから」

「姫様……。僕……ストレスのあまり、幻聴が聞こえるよ」

＞ｉ１２４１１―２３１＜

「行きなさい、ブレット。メモリーさんを仕留めるのです」

「ご、ごめんなさーい！」

自分の世界に向かって、全速力で走る、走る、走る。

背後からは、何かの気配。

きっと青い鳥が騎士に変身している。

そして、こっちに向かっている。

早く逃げないと、冗談抜きで殺される。

姫様が僕の心配をしてくれるなんて、あり得ない事だと思っていた。

だから、ついつい余計な事を口にして……。

だけど、今のは……本当に幻聴じゃないの？

うーん、何だか信じられないな。

姫様って、容赦のない腹黒イメージだから。

普段はそうだけど……もしかして、優しい所あるのかな？

いや……そんなわけないか。

多分、今のはやっぱり幻聴だ。

何とかセントラルから脱出して、公園まで戻る事が出来た。
真夜中の空の下、息を切らしながら、ベンチに座る。
成る程、確かに楽になった……。
少し……ストレスが減っている。
姫様の言うとおりだ。

帰ってこない……〈ハル編〉　★★

メモリーさんが出て行って、二時間が経過した。
未だに帰ってこないメモリーさん。
皆と駄弁っているとしても、ちょっと時間……掛りすぎじゃない？

眠りたいけど、眠れない僕。
尻尾をパタパタさせながら、じっと玄関に座りこむ。
メモリーさん待ち。
まだかまだかと待つけれど、メモリーさんは音沙汰なし。

＞ｉ１２４７２―２３１＜

そんな中、不意に恐ろしい映像が頭の中に浮かんでくる。
もしかして、メモリーさん……。
自暴自棄に陥って、自殺なんて事を考えたり……。
どんどん顔色が青くなり、焦りを覚える僕。
メモリーさんならやりかねない。
失礼ながら、そう思う。

＞ｉ１２４７３―２３１＜

ど、どうしよう！？
とにかく、メモリーさんを探さないと……。
だけど、どうやって探すの？
やっぱりあの方法か？

部屋の中を走り回り、紙とペンを用意する。
東西南北の印を書いて、五円玉を用意。

五円玉に紐を通して、紐の先を指で持つ。
東西南北に近付けて、良く回る方角にメモリーさんがいるはずだ。
気まぐれな占いではない。
ずっと以前から、僕の宝探しは百発百中。
泣く子も黙る程に、よく当たる。

メモリーさんがいるだろう方角を予測し、出かける準備を整える。
メモリーさんから借りている合いカギを手に持ち、外に出る。
カギを閉めて、いざ出発だ。

全速力でメモリーさんの元へと、駆けていく。
僕の足なら、乗り物なんて必要ない。
こんな姿でも、魔力は使えるし。
何より、最強で有名だったハルトのコピーだ。
いくら偽者で力負けしていると言っても、
体力的には人間に勝るはず。

てってけて～と、真夜中の街中を走りまわる。
人間が僕を見たならば、化け犬とでも思うのだろうか？

雑木林の奥で〈ハル編〉　★★（前書き）

ハルはとりあえず自分の立場をわきまえているのだろうか？

雑木林の奥で〈ハル編〉　★★

メモリーさんを探していると、えらい所に辿り着いた。
僕の目の前には鬱蒼（うっそう）と茂る雑木林。
どう考えても、死亡フラグが立っている。
真夜中の雑木林に出向く人なんて、
変質者か自殺願望者以外に思い付かない。

真っ青になりながら、雑木林の中に入り込む。
メモリーさん……まさか、まさか。ダメダメダメ！
雑木林の中、駆けて、駆けて、駆けまくる僕。
早く、早く探さないと！
メモリーさんが早まる前に！

雑木林の中は、奥に進めば進むほどに暗くなるものかと思っていた。
だけど、そういうわけでもなく。
むしろ、ほのかに明るいくらい。
どこかから光が差し込んでいるわけでもなく、
電灯が置いてあるわけでもない。
月明かりもそれほど強くないのに、どうしてこんなに明るいのだろう？

奇妙な違和感を抱きながら、冷静に分析なんてしていられない。
何せ今は急ぎだ。
考えるのは後にしよう。

走っていたら、不意に声が聞こえてくる。
歌声……。
メモリーさんの声みたい。
まさか……最後の独唱!?
この後に首をくくるつもりか!?

全速力にプラスアルファくらいの気持ちで、声の方へと飛んで行く。
しばらくして、メモリーさんを発見。
雑木林に囲まれながら、一人で歌を歌っている。

＞ｉ１２５１７―２３１＜

まだ間に合う!
メモリーさんの元へと素っ飛んで行って、
メモリーさんを吹っ飛ばす。
ぶっ倒れるメモリーさんの上に乗って、
泣きそうな声で僕が言う。

「早まらないで下さい!　メモリーさん!　僕が悪かったです!
まさか、死ぬほど嫌われていたなんて思わなかったのです!　ちょっと調子に乗り過ぎました!　メモリーさんが自殺するくらいだったら、僕は家に帰りますから!　だから、早まらないで下さい!」
「いったぁ～……。どちらかと言えば、今ので頭を打って死にそうだよ……」
「メモリーさん、死なないで下さい!」
「何が何だか……。とりあえず、ハル……落ち着こうね。どうして僕が死ぬ事になっているのか知らないけれど。僕はただ……今度の合唱会の練習をしていただけだよ」
「あれ……?」

早まっていたのは僕の方？
沈黙する僕。
その姿を見て、メモリーさんが吹き出す。
その後は、大爆笑。
笑い転げるメモリーさんに、恥ずかしさで膨れる僕。

＞ｉ１２５１８―２３１＜

ん～、それなら連絡してくれればいいのに～。
僕が拗ねながら、メモリーさんに文句を言う。

「大体、どうして夜中にこんな所で歌っているのですか？　勘違いするじゃないですか！」
「だって、家で歌うと近所迷惑でしょ？　ここは人がいないし。それに僕のお気に入りの場所だから」
「だからって、夜中に歌う事はないでしょ？　それに連絡もくれないし、心配していたのですよ。まったくもう～」
「さっき未来に注意されたの。僕はサボるから、ちゃんと練習しておけってね。連絡をしなかったのは、ハルがもう寝ていると思ったからだよ。別に心配を掛けるつもりはなかったんだけど……」

それなりに理に適った返答が返ってくる。
もどかしい気持ち、やるせない気持ち。
んん～、心配して損した！
どうにも気恥ずかしくて、話を変えてやる。

「それより、メモリーさん……。セントラルに何をしに行ったのですか？」
「えーっとね……。まぁ、ＫＹを駆除してもらうように頼みに行っ

たの。だけど、駄目だった。未来は役に立たないや。死神も駄目だね。あの二人、まったく僕の心配してくれないの。二人の責任なのに、酷いよね」

「ん～……」

ＫＹさんが邪魔ってことは、やっぱり僕も邪魔なのか……。

メモリーさんは口にしていないけど、きっとそう。

僕が考え込んでいたら、メモリーさんが話しかけてくる。

「どうしたの？　暗い顔して」

「やっぱり僕も……お邪魔ですか？　家に帰った方がいいのでしょうか？」

「あれ？　急に素直になったね。何か企(たくら)んでるの？」

「いえ、そういうわけじゃありませんけど……」

もしも、僕が居ついた事により、メモリーさんが早まったら……。

そういう事を考えていたわけだけど。

まぁ、口にできるわけがない。

僕がじーっと悩んでいたら、メモリーさんが話しだす。

「もうどっちでもいいけどね。今は気分もスッキリしているし。ブレットに追いかけられて、本気で走った後に。ここに来て、大声で歌っていたら。イライラも吹っ飛んじゃった。まぁ、ＫＹは論外だけど。あれだけはどうにかしなきゃ……」

「本当に僕は居てもいいのですか？　ストレスで死にそうになったら、すぐに教えて下さいね。リュックを背負ってトボトボと出て行きますから」

「何だか子犬を捨てるみたいで気が重いじゃない。せめて家に帰るって言ってよ」

「家に……トボトボ帰ります」

「『トボトボ』って言葉はいらないよ～」

ヘラヘラ笑うメモリーさん。
ちょっとご機嫌？
不機嫌ではなさそう。
ホッと安心する僕。
胸を撫で下ろしたついでに、メモリーさんに口を開く。

「せっかくですから歌を歌って下さい」
「歌？　何がいい？」
「アニソンがいいです」
「じゃあ、適当に歌ってみようか？」
「はい、是非とも」

本当の『橋』〈メモリー編〉★

ハルのリクエストに答えながら、歌を歌い続ける僕。
不意にハルが質問をしてくる。

「メモリーさん……というか、『橋』の人達って非常に歌がお上手ですよね。それって、『橋』の能力か何かですか？」
「うーん、どうなんだろう？　だけど『橋』になると、全体的に能力は向上するみたいだよ。というのも、余所の世界の影響を受けるからね。特に僕の世界みたいに、力の弱い場所の『橋』は影響を受けやすいって話を聞いた事があるよ。まぁ、僕は関係ないけど。所詮、『仮橋』だから」
「あの……メモリーさんは『橋』の代わりをしているのですよね？　それでは、この世界の本物の『橋』は誰なのですか？」
「え？　言ってなかったっけ？　これだよ、これ……」

胸ポケットからボールペンを取り出し、ハルに見せる。
目をパチパチさせるハルに向いて、説明する。

「元々は日和（ひより）……彼女が『橋』をしていたみたいなの。だけど、彼女がいなくなって……代わりに僕が引き継いでいるわけ。まぁ、僕も初めはこんな話を知らなかったし。ブレットが部屋に押し掛けてきた時には、何事かと思ったけど。日和がね、前もって『橋』の皆に伝えていたみたいなの。僕を一人にするのが心配だったんだろうね」
「へ～……じゃあ、メモリーさんは本物の『橋』にはなれないのですか？」
「うーん、大樹様に頼めば許されると思うけど……。僕はこのままがいいから。彼女が残してくれたボールペンで世界を繋ぐ事が出来

るなんて素敵でしょ？　何だかずっと彼女に見守られているみたいで」
「そうですね……」
ハルが頷く。
ボールペンを仕舞いながら、僕が言う。
「だから、僕は『橋』についてあまり詳しくないの。難しい事は他の人に聞いてね」
「はい、何だか凄く納得できました。メモリーさんって普通っぽいのに、何で『橋』なのだろう？　って、前々から気になっていたのですよ」
「やっと謎が解けたね」
「はい。だけど……皆さんと同じように歌はお上手ですよね」
「僕はそんなに上手くないよ。すぐに間違えるし。何となく誤魔化したら、姫様に怒られるの」
「僕には間違いなんて全然わかりません。凄く上手いと思います。これって、『橋』の力とか関係なしに。やっぱり練習ですか？」
「他の皆はどうか知らないけれど、僕は練習だね。姫様の卑劣超特訓。一日目なんて、僕の後ろでブレットが剣を構えているの。恥ずかしさを通り越して、恐怖で声が出なかったのを覚えているよ。姫様って、一般人にも容赦ないんだよね。本当に怖い人」
僕が言ったら、ハルがクスクスと笑いだす。
笑い事じゃないのにな。
他人から見れば笑えるのかもしれないけど……。
呑気（のんき）に笑うハルに向いて、僕が問いかける。
「そう言えば、ハルは歌うのが好きなの？」
「以前は苦手でしたけど、最近は好きです。もっと上手くなるには

どうしたらいいのか、色々と考えているのですよ。せっかくですから、メモリーさん。指導してくれませんか？」
「いいよ。だけど、僕に習うと中途半端になるかも」
「そんなことはないですよ。メモリーさんの歌は聞いていて心地いいです。僕よりもずっと上手いですし。プロみたいです」
「そう？」
「はい」
「フフッ、個人的に褒められたのは初めて。冗談だとわかっていても、嬉しいものだね」
「冗談じゃないですー！」

ハルが喚く。
僕の歌が上手いなんて、そんなわけない。
他の『橋』に比べたら、足元レベルだ。
多分、一生追いつかない。
というか、『橋』の皆……化け物みたいに上手いんだもの。
一般人の僕が追いつくわけがないじゃない。

そういうわけで、ハルと歌を歌いながら。
のんびりとした時間を過ごす。
最後はハルが眠ってしまい、
僕も疲れて黙り込む。

呆けていたら、不意に物音が。

＞ｉ１２５５５―２３１＜

そちらに振り替えると。一瞬、人影が横切る。

僕が声を出すまでもなく、消えてしまう人影。
もう追いかけても間に合わないだろう。

だけど、真夜中にこんな所にいるなんて……。
一体、誰だったんだろう？
何か……マズイ話を聞かれてなければいいのだけど……。

髪型〈ハル編〉　★

心地の良い眠りから、目が覚める。
ぼーっとしながら、辺りを見回す。
メモリーさんのお家。
いつの間にか、戻ってきていた。
メモリーさんが連れて帰ってくれたみたい。

呆けながら、隣を見るとメモリーさん……まだ眠っている。
時計を見ると、三時……。
多分、昼だろう。
何せ夜中の三時と言えば、メモリーさん探しに没頭していた時間帯。
朝方まで駄弁って、気が付けば今。

ベッドから潜り出て、キッチンに向かう。
飲み物を飲んで、お風呂に入って。
色々としているうちに二時間が経過。
することがなくなって、漫画を読む。
それから、ずーっと漫画を読み続ける。
気が付けば、夜の十時。
歯を磨いて、メモリーさんのベッドに潜りこむ。
メモリーさん……いつ起きるのだろう？
メモリーさんが起きるまで、僕も寝よう。

次に起きた時には、翌日のお昼……１２時。
隣を見たら……あれ？
メモリーさん……まだ寝ているのだけど。

これって、いつから寝ているの？
一回くらい起きてるよね？

メモリーさんの顔を覗く。
普通に眠っている。
顔の前に手を当てる。
ちゃんと息してる。
うん……だったら、大丈夫だろう。

ベッドから潜り出て、ご飯を食べる。
僕がソファーに座りながら、テレビを見ていたら。チャイムの音が。
すぐに入ってくるのは、ＫＹさん。
ＫＹさんが僕に言う。

「ほーい」
「おはようございます。昨日は来ませんでしたね。珍しく用事ですか？」
「いや、ニートに怒られたんだ。『貴様、ほどほどにしておけよ。余所の奴に迷惑を掛けるな、バカたれが。俺達に迷惑を掛けるのも許さんが。それ以上に、余所では謙虚にしてくれ。俺が恥ずかしいだろ。大体なぁ～、貴様は……』。と、うだうだうだうだ一時間くらい説教された。マジウザ」
「流石、ニートさんです。ＫＹさんに説教をするなんて、未来さんでもできませんよ」

ニートさんというのは……。未来さんのお友達で、読書好きな人。
いつも本を読んでいるけれど、仕事をしているところは見たことない。
仕事はしているみたいだけど、しているところを見ないからか。
皆して、ニートって呼んでいる。

本名を口にする必要はないだろう。
なんて事を言っていると、ニートさんが怖い本で僕達の様子を窺っているから。
あまり変な事は言えない。
……うん、いっぱい言っちゃった。
既に遅し。
後で怒られるかも、ごめんなさい。
罪悪感の欠片もない僕に向いて、ＫＹさんがため息をつく。

「本当、なえなえだ。それで、ヒッキーはどこにいるんだ？」
「メモリーさんなら、まだ寝ています」
「どうせ丸一日くらい寝てるんだろ？」
「はい、まさに。昨日は起きてきませんでした」
「え？　マジで？」

仰天するＫＹさん。
僕達が駄弁っていたら、噂のメモリーさんが起きてくる。

＞ｉ１２５６１―２３１＜

今にも死にそうな顔をしながら、ボーっとしているけど。
それ以上に、気になる事が……。
僕の代わりにＫＹさんが口を開く。

「おい、ヒッキー。髪型……変えましたか？」
「寝ぐせ……」とメモリーさん。
「お前……凄い寝ぐせだな。いつもそうなの？」
「……」

メモリーさんから、返事が返ってこない。

代わりに僕が口を開く。

「いつもはそんなことはないですよ。多分、今回は寝ている時間が長かったので……。寝ぐせになったのでしょう」

「何時間寝たらそうなるの？　もう新手のファッションじゃん」

呆れ返るＫＹさんを余所に、メモリーさんが洗面所の方へと歩いて行く。

顔を洗ってくるみたい。

しばらくして、帰ってくるメモリーさん。

目は生き返ったけど、髪の毛がそのまま。

メモリーさんが僕達に言う。

「戻らない……」

「風呂に入ってこい」とＫＹさん。

「乗り気じゃない……」

「頭だけでも、ザッと水にぬらしてみては？」と僕。

「面倒くさい……」

「お前、戻す気ないだろ？」とＫＹさん。

「まぁ、別に……。困る事でもないし。外に出るわけでもないし」

「部屋の中でも、羞恥心くらい持てよ。とりあえず、俺らがいるんだけど」

ＫＹさんが言って、メモリーさんが頷く。

頷くだけで、別に恥じらうわけでもない。

欠伸をしながら、冷蔵庫から飲み物を取り出し。

僕達の元へと戻ってくる。

僕の隣に座って、口を開く。

「おはよう、二人共」

「おはようございます」と僕。
「つーか、挨拶遅くない？　今更？」
　ＫＹさんが眉をしかめる。
そのまま、メモリーさんに問いかける。
「そういえば、前々から気になってたんだけどさぁ。ヒッキーの前髪、片方だけえらく長いけど。鬱陶しくない？　まぁ、ファッションだって、言われたら。何も言い返せないんだけど……」
「え、違うよ。これね、自分で切ったらこうなったの」
「自分で切ってるの！？」
　さらりと答えるメモリーさんに、突っ込みを入れる僕達。
すぐにメモリーさんが説明をしてくれる。
「僕、右利きでしょ？　それで、右側から切っていくんだけど。途中でさぁ、右手で右目が隠れるでしょ？　そしたら、凄く見えづらくて。あまり無茶苦茶に切るのは怖いから、遠慮がちに切っていくと。最終的にこうなるの。たまには上手くいくんだけど……。十回切って、九回はこうなるの」
「ファッションですらなかったのか……」呆れるＫＹさん。
「僕もずっとファッションだと思っていました……。それにしても、綺麗に斜めっていますね」
　感心する僕。
僕達を見ながら、メモリーさんが口を開く。
「以前に、未来にも言われたんだよ。それで今と同じ事を言ったら、爆笑されたね。で、その後……。今度、髪の毛が伸びたら、未来が切ってくれる。って、話になったんだけど……」

「それで、切ってもらったのですか？」

僕が問いかける。

メモリーさんが頷いて、話の続きを口にする。

「うん、切ってもらったよ。だけどね、なぜか未来が切った後も、同じようになってるの。僕が『もっと短くしてよ』って言ったら。未来が『これじゃないとしっくりこない！』って言って。それで相変わらずこの髪型を維持してるの」

「それなら、散髪しに行けばいいだろ？」とＫＹさん。

「面倒くさい」

「お前の中身は『面倒くさい』の塊か？　それ以外の理由がないじゃん」

「うん、まぁね」

メモリーさんが答えて、ＫＹさんが言葉を無くす。

うーん、まさか……自分で切っていたとは……。

しかも、ファッションじゃなかったなんて……。

それでも、なぜだろう？

メモリーさんの髪型……それっぽく見えるのは。

しかも、それなりに似合ってるんだから。

便利な髪型だよね……。

特技〈メモリー編〉　★（前書き）

よくよく冷静になってみたら、
ＫＹの言っていること……結構、正しくない？

特技〈メモリー編〉　★

　パソコンに向かう僕。
後ろではハルとＫＹが駄弁っている。
不意にＫＹが話しかけてくる。

「ヒッキーって、普通だよな。とりあえず、世界のリーダーしているんだから。何か人より飛びぬけて凄いような特技はないの？」
「うーん、ないね」
「一つくらいあるっしょ？」
「えー……特技でしょ？」
「パソコンは抜きで、何か凄い特技。『未来』とか『シバル』は何でも超越してるじゃん。『姫様』とかは性格が超越してるじゃん。ヒッキーは何が超越してるの？」
「あの人達と比べないでよ……」

　凄い特技なんて、ないないない。
パソコン関係が駄目なら、僕は何もできないし。
もちろん、運動は無理。
大して頭がいいわけでもない。
性格だって、至って普通。
腕を組んで悩む僕の後ろで、ＫＹがハルに言う。

「もしかしたら、こいつ……超大金持ちのお坊ちゃまだったりして」
「ありえそうです」とハル。
「家庭環境が超越してる。いいね、これ」
「メモリーさん、大金持ちだったのですね」
「何を勝手に妄想してるの？　大体、ハルの方が凄いじゃない。女神様が集まるハーレム王国の王子様でしょ？」

二人の会話に口を出す。
放っておいたら、暴走しそうだから。
勝手に二人が暴走して、
勝手に噂が広まって、
勝手に皆が思いこんだら、僕が困る。
考え込んだ末に、思いついた特技。
二人に振り返り、口を開く。

「特技……一つだけあるよ」
「お、何？　教えてくれ」とＫＹ。
「何ですか？　どんな特技ですか？」

ハルが言って、ＫＹと一緒に僕を見る。
僕は椅子から立ち上がると、二人に近づき口を開く。

「『橋』になってから、ずっとボールペンを持ち歩いていたからか……」

胸ポケットからボールペンを取り出しながら、続きを話す。

「ペン回しが非常に上手くなりました」
「ペン回す前に、字を綺麗にしろ！」

ＫＹがすかさず突っ込んでくる。

＞ｉ１２５９９―２３１＜

うるさいなぁ～、まったくもう～。
ちょっと不満げな僕に向いて、ハルが頼み込んでくる。

「ペン回して下さい」
「うん、いいよ」

二人の前でペン回し。
色々な技を披露する。
流石のＫＹも驚いているみたい。
ちょっと気分がいい。
一通り技を披露した後に、小さく呟く。

「だからって、別に何の役にも立たないんだけどね」
「いや、宴会には使える」とＫＹ。
「凄いです！　カッコいいです！」

ハルの目が輝いている。
だけど、本当にそれくらい。
気持ちカッコいい程度。
これならＫＹの言うとおり、字が綺麗な方がまだ使える。
ボールペンを仕舞い込む僕に向かって、ＫＹが口を開く。

「しかし、やっぱり『橋』は違うなぁ～。流石、世界のリーダーだ」
「凄いです！　僕もペン回したいです！」

続いて、ハルだ。
二人が感心しながら、ペン回しを絶賛してくれるけど……。
何て言うか……むしろからかわれている気分なのはどうしてだろう？
特にＫＹを見ていると、無駄に腹が立ってくる。

盛り上がる二人から離れて、元の席に着く。
パソコンに向かって、仕事を始める。

後ろではまだペン回しの話が続いている。
不意にＫＹが話しかけてくる。

「俺にもそのボールペン貸して」
「絶対に駄目！」

お買い物〈ハル編〉　★（前書き）

登場率が一番高い未来さん。
やっぱり今回も出現です。
そして、やっぱり今回もポテチからスタート。
しかしながら、少しは遠慮という言葉がないのだろうか？
メモリー的には鬱陶しいのがまた一人やってきた。
そんな気分なんだろうな……。

お買い物〈ハル編〉　★

三人で駄弁っていたら、もう夕方。
KYさんが家に帰り、メモリーさんと二人きりになる僕。
メモリーさんがパソコンルームにこもる中、僕は夕食を作る事に。

キッチンに行って、冷蔵庫を開ける。
んー、何もない。
いや、ちょっとはあるけれど。メインになるものがない。
いくら考えてもないものはないから、仕方ない。
……よし、買い物に行こう。

メモリーさんの元へと向かい、メモリーさんに話しかける。

「お金ください」
「何？　買い物？」
「はい、食料を買いたいのです」
「……」

メモリーさんが僕を見ながら、黙り込む。
何だか駄目っぽい？
意気揚々としていた僕だけど、メモリーさんの様子を見ているうちにしおれてくる。
今日は……ご飯抜き。

僕が落ち込んでいたら、メモリーさんが立ち上がる。
パソコンルームから出て、洋服たんすの前に行く。
扉を開いて、中を覗く。何かを探しているみたい。
しばらくして、取り出してきたのはフード付きの上着。

それを僕に渡して、メモリーさんが言う。

「はい、これ」

「これをどうするのです？」

「ハルが着るんだよ。まさかその格好で外に出るつもりだったの？　目立ちたいのなら構わないけど……。どうしてもそのままがいいのなら、僕から離れて歩いてね」

「え？　メモリーさんも付いてきてくれるのですか？」

「だって、場所がわからないでしょ？」

ワーイ、メモリーさんとお買い物だ。

嬉しくて尻尾をパタパタさせる僕。

すぐにメモリーさんに注意される。

「外では尻尾を動かさないようにね。それと、なるべく目立たないように行動して」

「はい」

何だかスパイみたいだ。

目立たないように行動……。

昔の僕なら得意中の得意だったけど、果たして今の僕にできるのだろうか？

結構、自信がない。

メモリーさんから貰った上着を着て、フードをかぶる。

もちろん、尻尾は服の中。

ごわごわするけど、ここは我慢。

メモリーさんはお風呂に行って、髪型をどうにかするみたい。

その間、僕は買いたい物をメモしておく。

向こうへ行った時に、肝心な物を買い忘れると困るから。

メモしておくととっても便利。
何も考えなくても、買い物ができる。
僕がメモを終えてすぐに、メモリーさんがやってくる。
準備は満タン。さぁ、行こう！

メモリーさんと共に、買い物に向かう僕。
向かう先は近所のスーパー。
数分間歩いたら、到着した。
とってもご近所。
これは便利な所。

大きなスーパーの中に入る。
中は結構ごみごみしている。
丁度夕方だから、仕事帰りの人が買い物に来ているのか。人の数が多い。

無意識のうちに、メモリーさんのズボンを掴む僕。
迷子にならないための、子どもの習慣だ。
メモリーさんは何も言わないから、そのまま買い物を続ける。
メモリーさんがカゴを持ち、僕が商品選び。

あれもこれもと言っているうちに、カゴの中が山盛りになる。
不意にメモリーさんが話しかけてくる。

「ねぇ、ハル……。これは何？」
「ビールです」
「ハルは……未成年だよね？」
「メモリーさんの分です」

「僕は飲まないよ」
「飲めないのですか？」
「いや……飲めるけど。『橋』の集まりの時くらいしか飲まないよ。無駄に眠くなるのは嫌だから。ほら、これ戻してきてね」
「ん～」

キュイキュイ鳴いてブーイング。
ちょっとだけ……ちょっとだけ……。
お菓子をねだる様な顔をしながら、メモリーさんを見上げる。
すると、メモリーさんが頷いて口を開く。

「わかったよ……。正直に言おう。もうね……重くて持てないの。これを持って帰るのを想像するだけで嫌なの」
「僕が持ちます。持ちますから……いいでしょ？」
「本当に持ってくれるの？　まず……持てる？」
「これくらい軽いです。余裕です」
「頼もしいね。それなら構わないよ」

メモリーさんが安堵の顔。
すぐに僕が追加を口にする。

「じゃあ、他にも欲しい物を買ってもいいですか？」
「持てる分だけね」
「いくらまで買ってもいいのですか？」
「カードだから、いくらでも。まぁ、常識を心得た範囲でお願いするよ」
「はい、ありがとうございます」

何を買おう？
まずは梅干しを買って。後、おつまみと。お菓子も買って。

スーパーの中を駆けまわる僕。
別のカゴを用意して、欲しい物をどんどん入れる。
常識なんて知らない。
多分、常識オーバーしている……。
品物の量を見れば一目瞭然。
不意にお菓子売り場にて、妙な物が目に入る。

ポテトチップスを手に持ちながら、真顔で悩む黒コート。
もしかしなくても、未来さんだろう。
何してるの？　あの人？
見た感じ、買い物をしている。
話しかけるべき？
メモリーさんなら言うだろう。
『係わらない、近づかない、話しかけない。わかった？』
うーん……でもとりあえず、僕の師匠なんだよね。
普通、弟子は師匠に挨拶するもの。

悩んだ末に、挨拶だけすることに。
未来さんに近づいて、声を掛ける。

「こんばんは、未来さん」
「あー、ハルじゃん。元気にしてた？」
「はい、とっても元気にしていました。メモリーさんのおかげです」
「もしかして、メモリーいるの？」
「向こうで待ってくれています」
「ラッキー！　じゃあ、悩む必要ないね」

未来さんが笑顔になって、ポテチの山を僕のカゴに放り込んでいく。
え？　ちょっとま……。

僕が止める間もなく、未来さんがカゴと僕を両手に抱え。スーパー内を駆けまわる。
メモリーさんを発見すると、僕とカゴをメモリーさんに突き付ける。

「メモリー、お久ー。はい、お願い」
「ちょっと……何で未来がいるの？　というか、そのポテチ全部、未来のでしょ？」
「いいじゃん。奢ってよ。俺、お金ないの」
「何で僕が……」
「いいでしょ。ポテチは特売で安いんだから」

＞ｉ１２６５９―２３１＜

「もう……」

不満そうなメモリーさん。
だけど、それ以上は何も言わないでレジに向かう。
言ったとしても未来さんには通じない事を知っているのだろう。

レジでお会計を済ませるメモリーさんの隣では、未来さんが喋り続けている。
二人で世間話。
僕の出る幕なーい。
つまらなくて、二人の話を聞いていたら。
誰かにフードを掴まれる。
そのままフードを外されて、振り返った先には小さな子ども。
人様のフードを外すなんて酷い奴。
その上、なぜか僕に注意をしてくる。

「お部屋の中で帽子はかぶっちゃ駄目なの！」

「ん～」と僕。
「耳！　ネコ！」
「犬です。猫じゃないです」
「ネコ！　ニャ～！　ニャ～！」
「犬です。ワンワンです」
「ニャ～」

子どもが駆けていく。
常識を知っているのか知らないのか。
中途半端な子だな……。

僕がちょっと不機嫌になっていたら、周りから視線が。
あ……無意識のうちに耳を動かしていた。
うーん……まぁ、いいか。
暑いから尻尾も出しちゃえ。
服の下から尻尾を出して、パタパタする。
あっつ～。
メモリーさんに見つかったら、怒られるかもしれない。
でも、まぁ、未来さんと喋っているから。きっと気づかないだろう。

ついて来ないで……〈メモリー編〉　★（前書き）

イラストを描く度に、ハルの頭身が変わってしまう。
だけど、とりあえずは小学校低学年のイメージなので。
いや……言ってみただけです。
絵のタッチが一定しないなぁ～。↑一人でつぶやいてます

ついて来ないで……〈メモリー編〉　★

スーパーの中、運悪く未来に出くわしてしまった。
ポテチの特売の時には気をつけなきゃいけない事をすっかり忘れていた。
未来の異常なまでのポテチ好き。
ポテチのために、世界を超えるなんて当たり前。
世の中からポテチが消えたなら、未来も一緒に消えてしまうだろう。
未来にとってポテチは命にほぼ等しい。

そういうわけで、僕達の隣を怪しい黒コートが歩いている。
できれば離れて歩きたい。
しかも、いつの間にかハルがフード……外してるし。
この子犬からも離れて歩きたい。
僕の周りを非常識な師弟が囲む。
コスプレ軍団だと思われたら、僕が不愉快だ。
未来に向いて、話しかける。

「それじゃあ、またね。わかっていると思うけど、公園はあっちだよ」
「ううん、俺はメモリーの家に寄るつもりだから」
「はぁ？」
「一度は行ってみたかったんだよね。どれだけボロ部屋に住んでいるのか。確認したいの」
「いや……え……。ちょっと待ってよ……。その……部屋の中……汚いから。ちょっと今日は無理……」
「別にいいじゃん。ハルだって住みついているんだから。汚いって言っても知れてるでしょ？」
「いや、でもね……。ちょっと今日は……」

ダメダメダメダメ。
未来が来たら大変だ。
あの仕事部屋を見られたら、きっと僕の人生が詰む。
ウイルスを送った事もバレるし、
他にも色々と悪戯をしていること……全てがバレてしまう。

僕が青い顔をしていたら、不意にハルが口を開く。

「今日は駄目ですよ、未来さん。メモリーさんはお仕事が溜まっていて、忙しいのです。それに、未来さんだって帰らなきゃいけないでしょ？　重要な仕事に追われている、って。この間、言っていたじゃないですか。放っておくと会社が潰れますよ」
「え～。ちょっとくらい、いいじゃん」

未来が呟く。
すぐにハルが追加する。

「でも、江川先生が怒りますよ。この間なんて、青い炎をまといながら。未来さんの愚痴を言っていましたから。次に未来さんがどこかに行く時は、未来さんの首に縄をつけて。自分もついて行く。って、言っていましたよ」

江川先生というのは未来の弟さん。
以前に仮の名前『江川』を使って、別世界……『死神』の世界で。
数学教師をしていた時期があるらしい。
火を操る凄く美人な人。一見、女性に見えてしまうくらいに美人な人。
本名は言っても……あまり意味はないだろう。
皆して『江川先生』って呼ぶから。

ハルの言葉を聞いて、未来が沈黙。
僕が横から口を出す。

「帰った方がいいよ。最近の未来は酷いくらいに行動し過ぎだから。人の世界に踏み込むくらいだったら、自分の世界を守ったほうがいいと思うよ」
「う～ん……そうだけど」
「ほら、ポテチも買ってあげたんだから。あんまり言うと返してもらうよ」
「それは駄目！　わかったよ、訪ねるのは今度にするから。それまでに、ポテチとコーラを用意しておいてね」
「うん、まぁ……気が向けば」

用意なんてするものか。
絶対に呼ばない、入れない、入れたくない。
これ以上、人とは係わりたくない。
ＫＹやハルですら気が重いのに、未来なんて論外だ。

手を振りながら、立ち去る未来。
少し先で角を曲がって、見えなくなる。

安心のあまりため息をつく僕。
その隣では、尾を振りながらハルが僕を見上げている。
今回ばかりは助かったな……。
ハルの頭をポンポンと撫でて、歩きだす僕。
ハルが笑顔になり、尾をなびかせる。

だけど冷静になって考えてみると、
ハルって高三……いや、大学に入る年だよね？

うーん……子どもにしか見えないのはどうしてだろう？

　というかそれ以前に、子ども服を買うべきかな？
今の服じゃあ、いくらなんでもファンタジー過ぎるし。
外に出るには派手だよね……。
僕の服はサイズが合わないから……。
どうしよう？
悩むなぁ～……。

＞ｉ１２７２４―２３１＜

盗聴されてる？　〈ハル編〉　★（前書き）

今回の主人公……どう考えてもボケ役ですね。
初めてじゃない？　こんなに抜けてる主人公。
タックンよりひでーよ。
結局、ヒッキーはバカなのか頭いいのか。
はっきりしてほしいところです。

盗聴されてる？　〈ハル編〉　★

買い物を終えてから、メモリーさんの家に戻り。
夕食を食べて、色々として。
眠たくなってきたので、ベッドにもぐりこんだ。
気が付けば翌日。

目が覚めて、大欠伸。
背伸びをしてから、隣を向く。
メモリーさんはいない。
今日は何をしているのだろう。
部屋の中を探しまわる。

キッチンにて、椅子に座りながら謎の機械をいじるメモリーさんを発見。
何やら深刻そうな顔をしている。
そんなメモリーさんに近づいて、声を掛ける。

「おはようございます。今日は何をしているのですか？」
「うん……ちょっとね」

メモリーさん……謎の機械をいじりながら、生返事。
机の上にもてんこ盛りな機械達。
メモリーさんの持つ機械を指差しながら、問いかける僕。

「それは何なのですか？」
「……」

黙るメモリーさん。

何だろう？
真面目な話かな……。
じっと返事を待っていたら、不意にメモリーさんが口を開く。
「ねぇ、ハル……。聞きたい事があるの……」
「はい、何でしょう？」
僕が首を傾げると、メモリーさんが僕に向く。
「普通……家に盗聴器って仕掛けられているものなの？」
「ん～」
返事に困る。
まぁ、普通はないと思うけど……。
僕がニッコリ笑顔で黙っていたら、メモリーさんが頷いて勝手に解釈を始める。
「そっか……。普通なんだ」
「普通じゃないですよ！　まさか仕掛けられていたのですか！？
一体、誰にですか！？　知り合いですか！？　未来さんですか！？
それとも他の誰かにですか！？　盗聴なんて犯罪ですよ！　警察沙汰ですよ！　犯人を捕まえないと、気持ち悪いですよ！」
「まぁ、落ち着いてよ。僕の家では日常だから」
ヘラヘラ笑うメモリーさん。
日常的に盗聴されてるの！？
それって凄く嫌じゃない！？
気持ち悪くないの！？
何で平気なの！？
っていうか、空き巣とか入られないの！？

突っ込みどころが多過ぎて、言葉に詰まる僕。
そんな僕にメモリーさんが口を開く。

「いつの頃かな？　ちょっとしたきっかけで見つけたの。だけど、僕の知り合いにそんな事をする悪戯者なんていないし。別世界の人達かと思ったけど……。まず、僕の家に来る人なんていないから。たまにブレットが来る事があるけど、機械なんて使えないだろうし。不思議だよね～」

「気持ち悪いですよ。警察に連絡した方がいいですよ」

「でもさぁ……。ハルが来るまでは一人だったから。僕、まったく喋ってないんだよ。たまに歌う事はあるけれど、一人で喋る事なんてまずないし。カメラが仕掛けられているわけでもない上に、盗みが起きるわけでもないし。実害がないから、別にいいかと思って放置していたんだけど。ハルが来てから喋る事が増えて。流石に邪魔になるから、撤去したの……。それなのに……」

メモリーさんが精密そうな機械の山を指差して、続きを話す。

「これだよ。仕掛けられたのは昨日だね。外に出ていたから。でもさぁ……いくらなんでもこれは多くない？」

「多すぎます。気持ち悪いです。警察に行きましょう」

「この量だと……相当な金額だね。しかも、これ……かなり高価そうだし。趣味にしては無駄が多いね。あー、もったいない」

そう言って、メモリーさんが盗聴器の山をゴミ袋に捨てる。
袋をくくって、放置。
僕に向いて、話しだす。

「相変わらず、今日も平凡な一日になりそうだね」

「それはわざと言っているのですか？」

「何が？」
「いえ……何でもないです」
メモリーさんの側にいる間に気づいた事だけど……。
メモリーさんって、ちょっとズレてるよね。
世間知らずというか、何か普通なのだけど変なところは変。
天然って言うのかな？
＞ｉ１２７５２―２３１＜

ハルハルゲーム！　〈メモリー編〉　★（前書き）

リアルにゲームを作りました。
携帯専用ゲームです。
「世界の枠組みを超えて」の携帯用トップ画面から入れます。
パソコンでもできなくもないですけど、ちょっとややこいです。
まぁ、お暇な人は遊んでみてくださいね。
最高得点が出たら、教えてください。
トップでご紹介しますので（＾－＾）

ハルハルゲーム！　〈メモリー編〉　★

僕の周りで騒ぎ回るハル。
そんなハルを叱りながら、仕事を続ける僕。
しばらくして、静かになる。
あまりにも静かになり、不気味さを感じた僕が振り返ると。
ハルが自分の携帯電話を眺めている。
ポチポチとボタンを押しながら、かなり真顔。
何をしているのか気になって、ハルに話しかける。

「何してるの？」
「さっきＫＹさんからメールがあって、『携帯用ゲームを作ったから、遊んでね』と書いてあったので。添付されていたアドレス先に飛んで、遊んでいるのです」
「へ～、ＫＹが……」
「もちろん、作成時にはカンペありらしいです。ハルトもカンペありでした。なしでは何も作れません」
「そう？　慣れれば作れるよ」
「メモリーさんと一緒にしないで下さい。僕達はこれが限界です」

そう言ったきり、ハルが黙ってしまう。
どういうゲームなんだろう？
ハルに近づいて、覗きこむ。
『モグラ叩き』ならぬ、『ハル叩き』。
ハルが『ハル叩き』をしていると、何か奇妙。

＞ｉ１２８０７―２３１＜

とにもかくにも、静かにしてくれたらそれでいいや。

そっとハルから離れて仕事に戻る。
これで集中できそうだ。
ＫＹもたまには役に立つじゃないか。
そう思った直後、玄関方面から聞こえてくるのはＫＹの声。
さすが、ＫＹ。
やっぱりＫＹはＫＹだったか。
褒めて損した気分。

　一気にヤル気が失せて、仕事放棄。
ネットゲーに繋げて、遊び出す。
すぐに後ろからＫＹの声が聞こえてくる。

「何してるの？　ネットゲーか？　ヒッキー、仕事大丈夫なの？」
「さぁね？　大丈夫じゃなかったら、その時考えるよ」
「『その時』には既に手遅れだろ？」
「そうかもね」
「……」

ほのぼの〈ハル編〉　★

ポチポチとゲームをしていて、
ふと気がつけば二人が消えていた。
どこに行ったのだろう？
二人を探す僕。

パソコンルームから出て、キッチンに目を向けると二人の姿が。
椅子に座りながら、駄弁っている。
机の上にはミカンがたくさん。
ＫＹさんのお土産だろう。

すぐにメモリーさんの元へ行き、メモリーさんの膝の上によじ登る。
おねだりをするような目つきで、メモリーさんを見上げていると。
メモリーさんが皮をむいたミカンをプレゼントしてくれる。
ワーイ。大喜びに食べる僕。
しばらくも経たぬうちに、食べ終わり。まっていたらもう一つくれた。
それもすぐに食べ終わり、次をねだる。
僕達がそんなやり取りを繰り返す中、ＫＹさんが口を開く。

「そういえば、前々から聞きたかったんだけど」
「うん、そうだよ」とメモリーさん。
「いや、まだ俺は何も言ってないだろ？　最後まで話を聞けよな」
「それで、何なの？　どうせくだらないことでしょ？」
「本当にヒッキーは調子乗りだよな。この間まではこんなキャラだと思ってなかったのに。喋るとこれだ。お前、黙っているのが一番だぞ」

「うるさいなぁ～。KYなんか、もう見たまんまのキャラだよね。全てが終わってるよね」
「お前、一回しめるぞ」
「そんな事を言ってると、閉めだすよ」

そして、二人が口喧嘩。
どこからどう見ても兄弟喧嘩にしか見えない。
この二人、本当に兄弟じゃないの？
二人に聞いてみたい気分。
もちろん、聞けない。
聞いたら二人揃って怒りだすから。

二人の喧嘩がエスカレートしていき、最後はメモリーさんが話を戻す。

「それで何なの？　聞きたい事って？」
「え？　そうそう。お前さぁ……パジャマないの？」
「え？　パジャマ？　……いや、あるよ。何でそんな事聞くの？」
「いや、寝起きにパジャマ着てなかったから。こいつ服のまま寝る人か？　と思って」
「あ～。でも、普段は服のまま寝るね。起きてから着替えるの面倒くさいし」
「しんどくないの？」
「でも、ハルだって服のままだよね？」

メモリーさんが話を振ってくる。
すぐに僕が返答だ。

「違います。僕はパジャマを着ないのではなくて。パジャマしか着ないのです」

「えっ！？　それパジャマだったの？」

目を丸くしながら、二人がはもる。

僕が頷いて、口を開く。

「はい。まぁ、正しくはパジャマ兼用（けんよう）です。神様の服はそういう物が多いそうです。着ている人の気分や調子によって、サイズが変動しますから。パジャマという物が必要ないのですよね。だから、服のまま寝る人も多いそうですよ」

「でも、お前の服って自分の魔力で作ってるんじゃなかったの？何せお前はお札だし」ＫＹさんが言う。

「いいえ。あの……以前はそうだったのですけど。魔力不足に陥って、そんな余裕がなくなり……。今は普通に服を着ています」

「へ～、そうだったのか」

ＫＹさんが驚いている。

メモリーさんを見ると、ミカンの皮をむきながら、何やら考えごと。

ふいにメモリーさんが口を開く。

「僕が最後にパジャマを使ったのは……半年くらい前かな？」

「それ使ってるって言わないだろ？」とＫＹさん。

「使ってるよ。風邪を引いた時とか……体調が悪い時に着るね。パジャマを着て、薬を飲んで、寝るの。さすがに服のまま寝ると、余計に調子が狂うから」

日常のくだらない会話。

何だかほのぼのと和んだ空気。

非日常を生きてきた僕にとっては、凄く新鮮だ。

僕達が人間だった頃は、こういうのが当たり前だったのだろうな。

幸せを感じながらまったりする僕。

メモリーさんにミカンをねだっていたら、最後は注意を受ける。

「ハル……。ミカンくらい自分でむこうよ。子どもじゃないんだから……」

「子どもです。ちっちゃいです。ミカンのむき方なんてわかりません」

「あのね～……」

何だかんだ言いながら、メモリーさんがミカンの皮をむいてくれる。

そのミカンを受け取る僕。

子どもの特権だ。

子どもだった頃よりも子どもになって、人に甘えて、迷惑掛けて。

それが何だか嬉しくて、楽しくて。

小さい頃、もっと甘えておくべきだったと。今になって後悔している。

＞ｉ１２８６０―２３１＜

ミカンの皮〈メモリー編〉　★

不意にＫＹが口を開く。

「ハラヘッター、何か食べ物ないの？」

「ミカン」僕が呟く。

「いや、ミカン以外で」

「冷蔵庫の中に何かあるよ」

そう言って、ハルの口の中にミカンを放り込む。

それを美味しそうに食べるハル。

そんなハルを見ていると、ちょっと悪戯したくなる。

次にハルが口を開けた時、ミカンの皮を放り込んでみた。

＞ｉ１２９９４―２３１＜

どうなるだろう？

じっと眺めていたら、ハルが口を閉じる。

もぐもぐと口を動かし続けるハル。

すぐに吐き出すと思ったのに、黙って僕に目を向けている。

寂しげな顔をしながら、ミカンの皮をかみ続ける。

僕の合図を待っているのかな？

どうもそうらしい。

僕が憐みも感じずにハルに言う。

「はい、飲みこんでね」

そう言ったら、ハルがミカンの皮を無理矢理に食べてしまう。
泣きそうな顔をしながら僕にしがみ付く。
まさか、本当に食べるとは。
なかなかやるじゃないか。

僕がハルの頭を撫でて、褒めたたえていると。
冷蔵庫を開きながら、ＫＹが口を開く。

「なぁ、ヒッキー。焼きそば食べたい」
「食べればー」
「焼くのめんどい」
「生（なま）で食べればー」
「食えるわけないだろうが」

ＫＹが僕達に振り返る。
目に映るのは、ミカンの皮を食べて、元気のないハル。
そんなハルを見て、眉をしかめる。

「どうしたんだ、ハル？　舌でも噛んだの？」
「どうもそうみたい。可哀そうにね」

嘘をつきながら、ハルの頭を撫でてやる僕。
ハルは何も喋らない。
どう思っているのだろう？
良い気持ちじゃないだろうけど。
何も知らないＫＹが自分勝手な事を言い続ける。

「焼きそば、焼いてー」
「え～、面倒くさいよ。ハル、お願い」

僕がハルに言ったら、ハルがそっぽを向く。
あ、すねた。
やっぱりミカンの皮は美味しくなかったのか。
仕方がないから、ハルを膝から下ろして。
ＫＹの元へと向かう。

「僕流で行くよ。文句を言わないのなら、作ってあげる」
「言わない、言わない。俺は基本的に好き嫌いないから」
「そう、それならいいよ。しばらく待っていてね」
「ほーい」

返事をして、ＫＹが立ち去る。
テレビでも見て、時間をつぶすのだろう。
不意に隣を向くと、ハルの姿が。
僕を見上げながら、何だか期待しているみたい。
さっきまでは元気がなかったのに、今は尻尾を振りながら。
ちょっと嬉しそう。
これ以上、苛めるのは可哀そうかな……。
余計な事は言わないで、僕が素直にハルに聞く。

「ハルも食べる？」
「はい」
「そう……わかったよ」

頷く僕を見て、ハルが首を傾げる。
不思議そうに口を開く。

「あれ……？　てっきり、最後に『ミカンの皮』って言われるかと思っていたのに」

「言ってもよかったけれど。これ以上、余計な事をするのもバカみたいだし」
「ん～」
「言ってほしかったの？」
「いいえ。ミカンの皮は美味しくないです。焼きそばのほうがいいです」
「そう？　だけど、僕の作る焼きそばの具は『麺』と『キャベツ』だけだよ」
「え……？　お肉はないのですか？」
「焼きそばに肉なんて野蛮（やばん）だね」
「……」

返事に戸惑うハル。
見せてやろう。
最強の肉なし焼きそばを。
笑っていられるのも、黙っていられるのも。
今のうちだけだ。

食べたら最後、やみつきになる美味しさ。
麺好きの僕が極めた、
シンプルで最高に美味しい焼きそばを。

焼きそば〈ハル編〉　★

冗談かと思っていたのに、
メモリーさん……本当に麺とキャベツだけで焼きそばを作りだす。
こんなので美味しいの？
お肉ないと味落ちするんじゃないの？
思うけれど、口にはしない。
変な事を言ったら、ご飯がなくなる。
僕はとにかく何でもいいから、
とにかく何か口に入れたい。
常に空腹の哀れなお子様だ。

とういうわけで、焼きそば待ち。
メモリーさんの後ろで、お皿を持ちながらチョロチョロしている僕。
不意にメモリーさんが口を開く。

「ハル。お皿かして」
「はい、どうぞ」
「ありがとう」

焼きそばがお皿に盛られる。
ワー、シンプル。
それ以外に何て言えばいいのかわからない。
メモリーさんが大声でＫＹさんを呼び集める。

「ご飯、できたよ！　食べるのなら、早く来て！」
「ほーい」

ＫＹさんの声。

すぐにＫＹさんがやってくる。
机の上に並ぶ、焼きそばの入ったお皿を見て沈黙。
焼きそばを指差しながら、眉をしかめる。

「ねぇ、これ何？」
「焼きそばです」と僕。
「いや、確かに『そば』は焼かれてるけど。いくらなんでも具が少なくね？　キャベツしかないじゃん」
「シンプル焼きそばです」
「シンプルだけど、これ旨いの？」
「さぁ？」

首を傾げる僕。
躊躇する僕達に向いて、メモリーさんが口を開く。

「見た目で判断しないでよ。食べなきゃ美味しさなんてわからないんだから」
「そりゃそうだ。行け、ハル！」
「え？　僕ですか？」

先陣を切るのは僕らしい。
ＫＹさんにお箸を渡される。
まぁ、別に変な物が入っているわけではないから。
不味くはないだろう。

さっそくお皿を手に取って、焼きそばを口に入れる。
ムムッ！？　こ……これは……。

＞ｉ１３０２５―２３１＜

硬直する僕を見て、ＫＹさんが眉をしかめる。
すぐにＫＹさんに向いて、僕が言う。

「ＫＹさん！　ビールを取って下さい！」
「お前、未成年だろ？」
「姿は子どもですが、元は高校生です！」
「いや、高校生も未成年だろ？」
「いいのです！　僕は人間じゃないから、飲んでもいいのです！」
「そうなの？　まぁ、別にいいけどさぁ……」

ＫＹさんが冷蔵庫からビールを取り出す。
それを受け取り、一気飲みする僕。

「くっー、最高です！」
「それで、旨いの？　不味いの？」
「めちゃくちゃ美味しいです。かなりビールにあいます。お肉なんて必要ありません」
「マジかよ？　俺も食ってみよう」

そう言って、ＫＹさんが焼きそばを口に入れる。
すぐに仰天しながら、メモリーさんに向く。

「メモリー様！　おかわりはありますか！？」
「ないよ」
「うそー。これだけじゃ、絶対に足りないし」
「なかなかイケるでしょ？」
「いや、マジで旨い。冗談抜きで旨い」

真面目に驚くＫＹさんを見て、メモリーさんが得意げになる。
すぐにＫＹさんが質問をする。

「お前、どうやって作ったの？　麺とキャベツ以外に何か隠し味を入れてるだろ？」
「さぁね？　企業秘密だよ」
「うっそー。じゃあ、今度から焼きそばを食べるときはお前の家に押し掛けるわ」
「止めてよ。冗談じゃない！」
「じゃあ、教えろよ。何を入れたんだよ？」
「今度から僕の家に来ないって約束するのなら、教えてもいいよ」
「いや、来る」
「じゃあ、言わない」
「教えろよー」

焼きそば一つで大盛り上がり。
ふと気が付けば、もう食べ終わっていた。
まだ食べたい。
物足りない。
全然足りない。

メモリーさんの元へと行き、メモリーさんの膝によじ登る。
おねだりするような目で見上げていたら、
僕の分をお皿に分けてくれる。
お礼を言って、食べようとする僕。
隣からのびてくるのはＫＹさんのお箸。

焼きそばを奪い合う僕達を見て、
メモリーさんが自分の分を僕達に全部くれる。
冷蔵に近づき、ラーメンを取り出す。
焼きそばを諦めて、ラーメンにするらしい。

焼きそばはもう空っぽ。
今度の買い物の時も、焼きそばを買おう。
ビールとセットで、たくさん買おう。
毎日食べてもきっと飽きない。
あれは最強のおつまみだ。

不思議な箱〈ハル編〉　★

何だかんだしていたら、いつの間にか夜中になっていた。
KYさんが家に帰り、部屋が静かになる。
メモリーさんに目を向けると、
僕に声もかけずに、パソコンルームに向かいだす。

ん～、何か寂しい。
一人になるのが嫌で、メモリーさんの後ろをついてく僕。
パソコンを始めるメモリーさんの後ろで、小さくなりながら存在感を消してみる。
お邪魔にならないよう、音を立てずにじっとしていたら。
メモリーさんに話しかけられる。

「ねぇ、ハル。悪いんだけど、今から集中したいから。部屋の外で遊んでくれない？」
「静かにしていますので……。いいでしょ？」
「いくら静かにしていても、気になるからね。少しくらい、一人にさせてよ」
「ん～……」

駄々をこねても仕方ない。
邪魔なものは邪魔なのだ。
暇になる度にメモリーさんの後を追いかける僕は、
メモリーさんにとって邪魔者以外の何者でもないだろう。

結局、僕が引き下がる事に。
一度頷いて、尻尾をたれながら、しょんぼり部屋を後にする。
そんな中、不意にメモリーさんの囁き声が聞こえてくる。

本当に小さな声。
普通の人なら聞き逃すような微かな問いかけ。

「ねぇ……ハル」
「うん？　何ですか？」

振り返る僕。
些細な音も聞き逃さない。
犬耳をつけてから、音に敏感になった。

僕に聞こえているなんて思いもしなかったのだろう。
戸惑いだすメモリーさん。
首を振って、僕から目を逸らす。

「いや……何でもないよ。大したことじゃないから」
「気になります。途中まで口にしたからには、最後まで言って下さい」
「……」

メモリーさんが口をつぐむ。
腕を組んで、考え込む。
何だろう？
真面目な話かな？
急かす事もせずに、待ち続ける僕。
じっと待っていたら、急にメモリーさんが動き出す。

パソコンが置いてある机。
一番下の引き出しを開けて、奥の方から不思議な箱を取り出す。
大人のこぶし二つ分くらいの大きさ。
その箱を僕に手渡して、口を開く。

「これ……ハルにあげるよ」
「これは何です？　積み木ですか？」
「フフッ、積み木じゃないよ。ふたがないように見えるけど、ちゃんと箱になってるの。振ってみると、中身が入っている事がわかると思うけど……」

メモリーさんに言われて、箱を振ってみる。
箱の中から、カタカタと何かの音がする。
凄く軽い物だろう。
箱自体が軽い物だから……。
中身は何かな？
音から察するに小さな物？
うーん、わからない。

＞ｉ１３１５９―２３１＜

僕がメモリーさんに問いかける。

「どうやって開けるのですか？　壊すのですか？」
「壊しちゃ意味ないね。それは仕掛け箱だから、ちゃんと開ける方法があるよ。パズルだと思えばいいかな？　もちろん、道具とか使っちゃ駄目だよ」
「メモリーさんは開けられますか？」
「もちろん。そうそう、部屋中を探しても、開け方を書いた説明書とかはないからね。それと、他の人に頼っちゃ駄目だよ。ハルが自分で努力して、謎を解き明かしてね」
「はい！」
「それじゃあ、外で遊んでて。眠くなったら、先に寝てね。僕は少し遅くなるから」

「わかりました」

元気に返事をして、パソコンルームから飛び出す。
不思議な箱を貰った。
パズルとか結構好きだから、ワクワクする。
凄く早く解読して、メモリーさんを驚かせてやろう！

ベッドの上に飛び乗って、不思議箱をいじりだす。
ねぇ、これ……どこが開くの？　どこが動くの？
必死になって、開け方を探るけど。
スタート地点から身動きが取れない。
普通に開かないってことは、変な場所が動くのだよね？
ここかな？　ちがーう。
じゃあ、こっち？　動かなーい。
うーん……早く開けたいのに。
気持ちだけが焦って、まったく進展しそうにない。

考え事〈メモリー編〉　★（前書き）

挿絵に飽きたので、ちょっと昔の主人公を並べてみた。
並べたらよくわかる。皆の性格特性。
なるほどね……見たら納得できますよ。多分。

考え事〈メモリー編〉　★

仕事が一段落して、部屋を出る。
ハルを探すと、ベッドの上で眠っていた。
もちろん、仕掛け箱は開いていない。
そう簡単に開けられることはないだろう。
元々が難しいものに、僕が手を加えているのだから。
未来や江川先生に頼らない限り、結構な時間が掛ると思う。

時計に目を向けると、朝の八時。
普通の人は起きる時間だけど、僕にとっては寝る時間。
お風呂に入って、歯を磨いて。
眠るための準備を終えてから、ソファーに座る。

テレビをつけると、朝のニュースが。
僕の興味の対象外。
政治とか、芸能人とか……。
僕にとっては、別世界以上に無関係だ。
そういった世間の話には興味がない。

しばらく経って、天気予報が流れだす。
今日の天気は……雨。
どおりで妙に寒いわけだ。
納得して、ソファーに寝転ぶ。

はぁ……。
ぼーっとしながら、ため息。
ハル達が来てから、バタバタと忙しくて。
一人でゆっくりできた例がない。

KYは毎日の如く家に押し掛けてくるし、
ハルも今や住みついている。
帰る気配すら感じられない。

でも、まぁ……流石に慣れてきたな。
初めの頃はイライラが募って、本気で死ぬかと思ったけど。
今は不満な気持ちが多少あるだけで、まぁ……耐えられる範囲。

テレビの中は忙しなく、色々な情報が報道される。
天気予報の後に、政治の話。
何？　国同士の争い？
知らないよ、そんなの。
こっちは別世界と仲良くするので精一杯だ。
国なんて小さなものは他の人に任せるよ。

終わりのない世の流れ。
世界はいつを基盤に始まって、いつを最後に終わるのだろう？
『橋』が死んでしまっても、次の『橋』が現れる。
こんなことなら一層の事、日和がいなくなってしまった時に。
世界が崩壊すればよかったのに……。

無駄が多いよ、多すぎる。
必要のない日々の連続。
もう一度、日和に会えるのなら。
僕の命を投げ捨てたって構わない。
今一時、この時間の存在理由がわからない。

無駄に悩んで、無駄に落ち込んで。
最後は考える事を止めて、頭の中を真っ白にして。
目を瞑って、眠りに入る。
夢の中だけでも……彼女に会う事はできないのかな？

＞ｉ１３２４５―２３１＜

不思議現象〈ハル編〉　★

目が覚めると、今何時？
時計を見ると、昼の一時。
結局のところ、箱は開かず。
動かせる場所を見つけることすらできなかった。
ん～、ちょっと悔しい。

ベッドの隅にある箱を手に取り、いじってみる。
寝起き早々、ぼーとする頭で考えたってわかりはしないだろう。
予想通り、何一つ進展せずに諦める。
ベッドから下りて、メモリーさんを探す事に。

キョロキョロと見回す事もなく、聞こえてくるのはテレビの談笑。
テレビに目を向けた後、そのままソファーに目を向ける。
メモリーさんが横になって眠っている。
メモリーさんに近づこうとする僕。

不意に妙な気配。
何かいる……。
子どもの直感……じゃなくて、犬の直感。
ソファーの前に何かいる。
見えないけど、絶対に何かいる。
僕が耳をそばだてながら、じっとソファーに目を向けていたら。
不意に気配が消えてしまう。

何！？
何なの！？
怖いじゃない！

もしかして、狭間の生き物？
いやいや、違う。そんなのじゃない。
もっと別物だ……。

何だったのだろう？
分からないけど、不思議だった。
危険な物じゃないと思う。
思うだけで、どうだかわからない。

あ、ちなみに狭間っていうのは隙間……。
世界の外側みたいな所。
普通の人には行けやしない。
『橋』の人や特殊な能力を持った人……。
そう、本物の僕……ハルトになら行ける場所。
僕はハルトのコピーだから行くことはできない。
だけど、ハルトにより作られた、僕の記憶には残っている。
独特な空気が漂う、不思議な場所。

でも、今のは狭間の気配を感じなかった。
本当に何だったのだろう？
気になるけれど、気にしたってわからない。
不安で堪らなくなり、メモリーさんに駆けよる僕。
メモリーさんを揺さぶり起こす。
起きたメモリーさんが初めに口にした言葉……。

「頭痛い……」

目の前には青い顔をしながら、薬を飲むメモリーさん。

＞i13304—231＜

雨の日のお風呂上りにソファーで眠って、風邪を引いたらしい。
凄く気分が悪そうな顔で、僕に言う。

「ごめん……。ちょっと寝るよ」
「あの……お話が」
「話……後でもいい？」
「はい、大丈夫です」
「うん……。ごめん……」

そう言って、メモリーさんがベッドに向かう。
ん～、話すに話せなかった……。
あれが何だったのか？
とにかく、誰かに話したいのに。
メモリーさんが寝ちゃったら、話す相手がいない。

僕はすることがなくなって、不思議箱を手に取り遊び出す。
今のうちに、この謎を解いてしまおう。
そして、メモリーさんが起きた時に例の話をしてみよう。
さっきの不思議現象を思い出しながら、不思議箱の謎を解く。
どちらか一つでもいいから、謎が解けたら。
少しはスッキリするのにな……。

火の玉か！？　〈ハル編〉　★

メモリーさんが寝込むベッドの隣で。
僕は小さくなりながら、携帯ゲーム。
不思議箱は……うにゃらうにゃうにゃ。ちょっと放置。
少し前までは頑張っていたのだけれど。
全然わからなくて、イライラしていた時に。
丁度、ＫＹさんからメールがあった。
内容はこんな感じ。

「例のハルハルゲーム、『正体不明さん』という方が最高記録を出してくれて。１３６００点だって。お前、確か……９８００点だったよな？　フッ……所詮はそんなもんか」

メールを読んだ瞬間、闘争本能が。
もちろん、ゲームを開始する。
僕だって、本気を出せば余裕だよ。余裕。
そう思って、ゲームを始めて。三十分……。
１００００点の壁が大きい……。

＞ｉ１３３８１―２３１＜

大体さぁ、ズルイよ。
僕はハルトのコピーだよ。
ハルトは『強力なお札』を作るので、左目を犠牲にしている。
要するに、左目が見えない。
それは僕も同じ事。

だから、片目で頑張っているのだけど。

こんな小さな画面を片目だけで凝視しながら、
お魚とお肉を持っている僕だけ狙ってボタンを押すだなんて。
ムリムリ。

そもそも、このお魚持ってる僕って、見えにくいのだよね。
何で色がもっとハッキリしていないの？
焼き魚のつもり？
ゲームなのだから、そんな設定いらないし。
もっとカラフルにしてくれたら、僕だって最高記録取れるのに……。

言い訳をしながら、ゲームをして。
記録が８７００点……。
拗ねてないもの。
全然、悔しくないもの。
やるせない気分。
何にぶつけたらいいのかわからない、この気分。

僕が携帯の画面を見ながら、膨れていたら。
またもや、さっきの……妙な気配。
メモリーさんに目を向けると、静かに眠っている。
もちろん、この奇妙な気配に気づいているわけがない。

気配の元を探り出す僕。
キョロキョロと辺りを見回していたら、
キッチンの前を何かが横切る。
光……？　薄い月明かりのような青色の球体。

今のは……何だろう？
予測される事。
第一に、目の錯覚。

第二に、電気の加減。
第三に、あれが噂のプラズマか？

え？　何？　幽霊案？
そんな物は信じない……わけない。
元々、僕はそういうオカルトが好きだから。
幽霊とか結構信じるタイプ。
もちろん、科学説を否定するわけではない。
それはそれで信じている。
どっちも信じて、両取りだ。

幽霊らしき物を見てしまい、うろたえる僕。
メモリーさんに近づいて、様子を見る。
薬が効いているのか、起きる気配がない。
どうしよう？
幽霊とコンタクトを取ろうか？
ちょっとドキドキ。
夢のようなお話。

僕がそわそわしていたら、あの気配が……。
振り返る先は、僕の真横……ベッドの前。
例の火の玉……じゃなくて、目に映るのは別物。
心配げにメモリーさんの様子を窺っている。
この人って……言葉を無くして停止する僕。
その人が僕に振り向く。
直後、薄れて消えてしまう。

幽霊……見た！
とんでもない幽霊を見た！
スクープだ！

あまりの衝撃に動揺を隠せず、メモリーさんに向かってダイブ！
調子の悪いメモリーさんを無理矢理に叩き起こす。

　飛び起きるメモリーさんは半分パニック。
だけど、僕は完全にパニック。
わー！　幽霊を見たよ！　幽霊いたんだ！
凄いよ、凄いよ！　ちょっと幽霊だよ、幽霊！
火の玉で、幽霊で。もうビックリだよ！

幽霊を見たのに！　〈ハル編〉　★

ぼんやりするメモリーさんの前には、必死に説明をする僕。
先程起きた出来事を混乱しながら、口にする。
メモリーさんはよく理解できていないのか、
口を半開きにしながら僕を眺めている。
最後は僕がしびれを切らして、一言でまとめる。

「とにかく、秋山さんの幽霊を見ました！」
「そう……」
「何なのですか、その反応は！？　信じていないのですか！？　本当ですよ！　本当に見たのです！　秋山さんの幽霊が、メモリーさんを心配げに眺めていたのです！」

必死に訴える僕を見て、メモリーさんが頷きながら返事を返す。

「だけど、ハル……。よく考えてみて。今まで、そういう出来事が起きたことは一度もないんだよ。どうして今になって、そういう出来事が起きるわけ？」
「分からないですけど……見たのです。本当に見たのです……」
「きっと見間違いだよ。幽霊なんて……いるわけないじゃない。死んでしまった人には、二度と会えないよ……。まぁ、自分も死んでしまったら、どうだかわからないけれど」

メモリーさん……僕の話を信じてくれない。
受け入れてもらえなくて、何だか悲しくなってきて。
僕の目に涙が溜まってくる。

＞ｉ１３４０８―２３１＜

「本当に見たのに……」
「ちょっとハル……泣かないでよ。そんな怒っているわけじゃないんだから」
「だって、メモリーさんが信じてくれないのだもの。僕は本当に見たのです。幽霊を見たのです！」
「わかったよ、わかったから。ハルは幽霊を見たんだね。きっと日和が僕の事を心配して、様子を見に来てくれたんだろうね。せっかく様子を見に来てくれたのに、風邪なんて引いてちゃ駄目だよね。そういうわけで、僕はもう少し休むから……」

僕の話を流すメモリーさん。
全然、信じてくれてない！
悔しくなって、僕が怒鳴る。

「やっぱり信じてくれてないでしょ！？」
「だって……そんな事を言われても。僕は幽霊とか信じないタイプだし……」
「もういいです！　メモリーさんに言った僕が悪かったです！」
「そんな……何で怒るのさぁ？　そもそも寝ている僕を叩き起こしておいて、怒るのは酷くない？」
「怒ってないです」
「怒ってるよ」

ちょっと空気が悪くなる。
僕が膨れる中、メモリーさんが服を着替える。
パジャマに着替えて、ベッドへ向かう。
パジャマに着替えるってことは、本当に調子が悪いのだろう。
病人に対して、怒るのは良くない事かもしれないけれど。
何だか凄く悔しい。

理解してもらえなかった悔しさ。
メモリーさんなら、信じてくれると思ったのに。
裏切られた気分……。

メモリーさんが二度寝に入る中。
僕はソファーに座って、テレビを見だす。
次に秋山さんの幽霊を見かけても、メモリーさんには教えてやらない。
絶対に教えてやらない。

テレビを見ながら、思い返す。
絶対に目の錯覚じゃない。
一度目はそうかもしれないと思ったけど、
二度目はハッキリと覚えている。
あれは本物だ。

秋山さん……やっぱりメモリーさんの事が心配なのかな？
心配で成仏できないの？
でも、まぁ……確かに。
あのメモリーさんを一人にしておくのは心配かも。

何もしていない時とか、ボーっとしている事が多いし。
そう言う時のメモリーさんは何を考えているのかわからなかったりする。
傍から見ると、死者か生者か区別がつかなかったりする。
死に対して無頓着そうだから、いきなり行動に出たり……。
なんて考えてしまうのは僕だけではないだろう。
秋山さんもきっと……。

メールが来た〈メモリー編〉　★

ハルに叩き起こされて、幽霊の話を聞かされて。
僕がぼんやりしていたら、なぜかハルに怒られて。
気まずい空気が部屋に充満。
そんな中、パジャマに着替えて二度寝に入る僕。

ハルのおかげか、薬の効きが悪いのか。
どうにも体調が悪化している。
酷くなる頭痛に次いで、微熱まで出てきた。
しばらくは、大人しくしていよう。
病院は嫌いだし、なるべく家で完治させたい。

テレビの音が聞こえてくる中。頭まで布団をかぶって、目を瞑る。
幽霊か……。
本当にいたとしたら、どうだろう？
まぁ、状況によるかな……。
ちゃんと見る事ができて、話をすることができて。
普通の人と接するように係わり合う事ができるのなら問題ない。
だけど……見えなくて、話もできなくて。
そんな状況なら、いないのと同じだ……。

不意に目が覚める。
今は……何時だろう？
起きて、時計を見ると。夜の十時。
結構、寝たかな……。

未だに聞こえてくるテレビの音。
ハルはまだ……起きているの？
立ち上がって、ソファーに向かう。
ソファーの上では小さく丸まりながら眠る子犬が一匹。
ちゃんと毛布をかぶって寝ているだけ、僕より偉いかも。

ハルの頭をポンポンと撫でてから、テレビを消す。
さて……どうしよう？
体調は良くなったけど、まだ治りきってはいないだろう。
薬を飲んで、仕事部屋に向かう。

パソコンの電源を入れる。
もちろん、仕事をするわけじゃない。
メールを見るだけ。

仕事関連のメールに混じり、ひときわ目立つメールが一つ。
もちろん、未来からだ。
件名は『ポイップチュチュっていいと思わない？』。
とりあえず、メールを開く。
内容は以下の通り。

「やっほー、元気にしてる？　最近、顔見ないからどうしているのかと思って。成仏していなかったら、問題ないんだけど。そうそう、何でマヨチュチュが流行るのに。ポイップチュチュは流行らないんだろうね？　あっちの方が主流じゃない？　俺的には、マヨネーズよりもホイップクリームの方が……」

うだうだと無駄話が続く。
僕にしてみれば、数日前に未来と出会っているけど。
世界には時間のズレがあるから。

未来にしてみれば、長い事……僕に会っていないのだろう。
堪りに堪った世間話。
と言っても、ポイップクリームの話が半分を占める。
ぱっと読み飛ばして、肝心な部分に目を向ける。

「そういえば、どうでもいい話になるんだけど。ハルト達が『閉じた時間』に落ちて以来、狭間の調子が悪くてさぁ。他の世界でも色々と影響が出ているみたい。姫様の所では、狭間の生物が暴れ回っていて。シバ君の所では、あちこちで狭間が開いて。かなり頭を抱えているそうだよ。俺の所では、まだ影響は出ていないけど……。メモリーの所はどう？　まぁ、何も言ってこないから。大丈夫だと思うけど。それじゃあ、次の合唱会には遅刻しないようにね。ばいば～い」

……え？　何それ？
そんな大変な事になってたの？
僕は普段から外に出ないから。
多分、異変に気づいていない。
やばいかも……。
後で外に出て、確かめないと。
やばいかも……。
大変な事になっていたら、どうしよう？
未来に泣きつこう。
それ以外に手は……いや、まずはハルに泣きつくか。

＞ｉ１３４５１―２３１＜

じっと考え込んでいたら、不意に思い出す。
今日は……雨。
蒼白する僕。

雨の日は特に狭間の影響を受けやすい。
今から、外に出るの？
明日にする？
だけど……明日じゃ、遅かったり。
でも、僕……風邪気味だし。

行こうか止めようか悩んでいたら、背後から物音。
ビックリして振り返った先には、ハルの姿が。
ぼうっとしながら、僕を見て呟く。

「メモリーさん……さっきはごめんなさい」

嵐の中で〈ハル編〉　★（前書き）

最初で最後のレアイラストになるだろう。
メモリーの両目ありバージョン。（笑）

嵐の中で〈ハル編〉　★

大喜びに走り回る僕に注意をするのはメモリーさん。
だけど、僕は聞いちゃいない。
だって、お散歩だもの。すっごく嬉しい。
メモリーさんと夜のお散歩。
初めてのお買い物くらいにテンションが上がる。
尻尾を振りながら走り回る僕の腕を掴んで、メモリーさんが言う。

「ちょっとハル、静かにしようね。今は夜中だよ。走り回っちゃ駄目。後、傘を持ってね」
「はい！　わかりました！　それで、どこに行くのですか！？　公園ですか？　カラオケですか？」
「ほら、声が大きいよ。静かに……。今から外に出るのは、狭間の影響を調べに行くの。ハルトが去って以来、ちょっと狭間が歪んでいるそうだから。こっちにも影響が出ていないか、それを調べるんだよ。別に遊びに行くわけじゃないからね」
「はい、わかりました！」
「声が大きい」
「ん～」

何度も注意を受けて、やっと静かにする僕。
メモリーさんの隣でワクワク待っていたら、出発の準備ができる。
傘を手に持ち、いざ出陣！

扉を開いた直後、暴風のような嵐が。
それを見て、扉を閉めようとするメモリーさん。
もちろん、無視して扉を突き飛ばす僕。
メモリーさんを引っ張って無理矢理連行！

ワーイ、お外だ！
何か嵐だー！

　嵐の街中。
大暴れする僕の後ろではメモリーさんが嵐に打たれている。
傘なんて持っちゃいない。
持っても意味がないから。
不意に聞こえてくるのはメモリーさんの声。

「ちょっとハル！　これ本当に行くの！？」
「メモリーさん、キャラ変わってますよー！」

　大笑いしながら、僕が言う。
嵐のせいで、髪が逆立って。
普段は髪で隠れているメモリーさんの片目が見えるようになっている。
要するに、両目のメモリーさん。
ワー、レアだ。レアだ。

＞ｉ１３４５３―２３１＜

　それにしても、凄い嵐。
部屋の中では気付かなかったけれど。
外に出ると、たちまちビックリだ。
きっと僕も凄い髪型になっているのだろうな。
この嵐だもの。
メモリーさんなんて、ボールペンをズボンのポケットに仕舞っちゃった。

今日のメモリーさんはレア度が高い。

走り回る僕を見て、メモリーさんが注意をする。
だけど、僕は言う事を聞かずに。
無意味に走り回って、大笑い。
嵐って何だかワクワクする。
何でだろう？　わからないけど。
とっても興奮してくる。
もうバカ騒ぎしたい気分。既にしているけど。

そういえば、メモリーさん……。
風邪気味だったけど、大丈夫なのかな？
まぁ、元気そうにしているから。大丈夫なのだろう。

意味もなく走り回る僕に対して、
メモリーさん……ズボンのポケットに手を突っ込みながら、辺りを見回している。
世界に異変が起きていないかチェックしているみたい。
結構、真面目モード。
やっぱり大人だな……。

未来さんなら確実に僕と一緒になって走り回っている。
そして、大騒ぎした後に爆笑している。
未来さんは、外見は大人だけど、中身は子どもだから。
ちなみに、シバルさんは逆。
外見は子どもだけど、中身は大人だから。

しばらく時間が経過して、

落ち着きを取り戻した僕がメモリーさんに言う。

「メモリーさんは大人ですね。嵐なのに走り回らないなんて」
「いや……僕は運動が苦手だから。未来や死神なら、走り回るよ」
「あれ？　シバルさんも走り回りますか？」
「うん、走り回るよ。以前に、橋のメンバーでカラオケに行った帰りに。未来と一緒になって意味もなく競争を始めたから」
「あらら……シバルさんは大人だと思っていたのに」
「まぁ、未来よりは大人だけど。案外に無茶苦茶するから。特に未来と一緒にいる時はね。あの二人は無駄に仲がいいの。相性がいいのかな？」
「そうですね……。似た者同士なのかも」
「フフッ……そうだね。似ているかもね」

ヘラヘラ笑うメモリーさん。
不意に思い付いた事を僕が言う。

「そう言えば、メモリーさんに聞きたい事があるのですけど」
「何？」
「この世界に来てから、メモリーさんの知り合いとかに出会ったためしがないのですけど。もしかしなくても、一人ぼっちですか？」
「心に突き刺さるような事をサラッと言うね。もう少し他に言い方はなかったの？」
「いえ……遠回しに聞くのも失礼かと思いまして」
「……」

メモリーさんが黙り込む。
やっぱりマズイ事を聞いちゃったかな？
ちょっと危ない橋だと思いながらも、気になるから聞いてみた。
返ってくるだろうか？　メモリーさんの返事……。

メモリーさんが深呼吸してから、首を傾げる。

「さぁね？　一人と言えば、一人だし。一人じゃないと言えば、一人じゃないかも。友達や知り合いもいる事にはいるよ。ただ……」

「ただ？」

「あまり……係わりたくないんだよね。人と」

「……根暗ですね」

「根暗だよ」

「じゃあ……ご家族とかは？」

「いない」

最後の質問、間髪をいれずに即答された。

僕が蒼白しながら、メモリーさんを見上げると。

メモリーさんの目から光が消えている。

あれ……？　もしかして、地雷を踏んだ？

橋の下で〈ハル編〉（前書き）

漫画小説なのに。
しばらくの間、イラストをお休みするのね。
代わりに、お話がいつもより長いかも……。

橋の下で〈ハル編〉

気まずい空気を掻き消すのは、乱れ狂う嵐。
あまりにも酷い嵐に、メモリーさんが僕に向く。

「それにしても、凄いね。特に風が。雨はそんなに降っていないのに……」
「まるで台風ですね。警報は出ていましたか？」
「さぁ？　どうなんだろう？　でもこれだけ酷いと、警報も出ていそうだよね」

メモリーさんが言った直後、メモリーさんのすぐ後ろに……秋山さん！？
硬直する僕。
メモリーさんは気づいていないらしい。
言葉ない僕を見ながら、秋山さんが遠慮がちにある方向を指差す。
そのまま消失。消えてしまった。
メモリーさんが混乱する僕に向いて、話しかけてくる。

「どうしたの？　ハル？」
「あ……え……」
「気分でも悪いの？」
「いや……え……。そうじゃなくて……。えーっと……」
「調子が悪いのなら、帰ろうか？　僕も調子悪いし」
「いえ……あの……。あっちに行きたいです。あっちに行ってから、帰りましょう」

秋山さんが指差した方角を指差して、僕が言う。
すぐにメモリーさんが返事を返す。

「あっち？　あっちは川だよ。他には何もないけど……」
「いいのです。あっちに行かないといけないような気がするのです」
「そう……。別に構わないけど」
「はい。では、行きましょう」

そういう事で、川へと向かう僕達。
三度目に入ると、秋山さんの存在は確定だ。
だけど、メモリーさんには言っていない。
どうせまた見間違いだって言われるから。

それよりも、直接に秋山さんとコンタクトを取りたい。
秋山さんはすぐに消えてしまうから、タイミングが難しいけど。
次に会った時には、お喋りをしたいと思う……。
もしも、話をすることができたなら、メモリーさんにも説明しやすいから。

しばらく歩いていると、川へと到着する。
川を覗くと、雨が酷いわけでもないのに、水かさが増している。
流れるスピードもいくぶん速い。
普通の子どもなら、流されてしまうだろう。
僕なら普通に泳げそうだけど……。

不意に感じるのは狭間の気配……独特なにおいのようなもの。
キョロキョロ辺りを見回して、気配の根源を探しだす僕。
橋の真下……あの辺りが怪しい。

メモリーさんに向いて、僕が言う。

「橋の下から、狭間の気配を感じます」

「狭間の……」

「さぁ、行きましょう！　メモリーさん！」

「うん、先頭はハルね。僕は後ろからついて行くから」

メモリーさんが真顔で言って、僕の後ろに隠れる。

え……ちょっと、ここまで来て。何でそうなるの？

僕がメモリーさんに向いて、文句を言う。

「急に弱気にならないで下さいよ。メモリーさんはこの世界のリーダーでしょ？　しっかりして……」

「後でハルの好きな食べ物を好きなだけ奢ってあげるから」

「はい、わかりました。メモリーさんは後ろで待機していて下さい」

食べ物に釣られて、つい口にしてしまう。

言ってしまったからには、先頭を切らないと。

まぁ、僕はこういう話に強いから。

適材適所といえば、その通りだ。

僕がすたこらさっさと歩く中、後ろを歩くメモリーさんは挙動不審。

おろおろおろおろとうろたえながら、背後と僕を交互に見る。

別に秋山さんに気付いたわけではないだろう。

ただ、ビビっているだけだ。

だけど、僕は何も言わない。

むしろこれが良い動き。

狭間関連の話になると、常に注意が必要だ。

特に背後や死角には十分に注意する必要がある。

ミスしたら最後、死んだって不思議じゃないから。

メモリーさんに背後の注意をしてもらい、前方は僕。
橋の下に入り、目を凝らす。
暗い……。
それでなくても、今は夜の十時過ぎだ。
街中では、電灯の明かりで何とか見られるけれど。
橋の下は真っ暗。
何にも見えない。
どうしよう？　とりあえず……。

魔力を両手の平に集めて、球体を作る。
人によって、魔力の色は異なるらしい。
僕の魔力は紫色、もっと明るい色が良かった。
そしたら、こういう時に役立つのにな……。

僕の作った魔球のおかげで、周りが少し明るくなる。
左異常なし、右異常……。
えらい物が目に映って、心臓が張り裂けそうになる。
ビクつく僕の後ろで、メモリーさんが不安げな声を出す。

「何、何？　どうしたの？」
「ビックリしたぁ～……。メモリーさん、何も言わずに向こうを見て下さい。驚きますから」
「何？　グロテスクなシーンは遠慮するんだけど……」
「大丈夫です。ちょっと異常ですけどね」
「大丈夫、大丈夫。怖くない……怖くないから」

メモリーさんが自分に言い聞かせながら、そっと右を向く。
そのまま停止。

前置きがあったから、驚きは少ないみたいだ。
すぐに僕の耳元で囁く。

「ねぇ、僕の目がおかしいのかな？　こんな所に女の子がいるんだけど、異常じゃない？」
「異常ですね」
「あれは……狭間の生き物？」
「さぁ？　そこまでは……」
「ふ～ん……」

女の子を遠くから見る限り、死人みたいだ。
本当に死んでいるわけではなくて、ただ座って壁にもたれているだけ。
目は開いているけど、人形みたいにじっとしている。
意識はあるのかな？　わからない。
不意にメモリーさんが動き出す。
危険なものかどうかも確認せずに、女の子に近づいて話しかける。

「こんにちは、大丈夫？」
「……」黙る女の子。
「君、学生？　家はどこ？」
「メモリーさん。そこだけ聞くと、何だかナンパしているみたいです」僕が突っ込む。
「だけど、それ以外に何を聞けばいいの？」
「うーん、ないですね」

メモリーさんが数秒間黙り、不意に思いついたように口を開く。

「パソコンはデスク派？　それとも、ノート派？」
「その質問は必要ありません」

「じゃあ、プリンターの機種は……」
「真面目に考えて下さい」

メモリーさん……真面目に考える気があるのだろうか？
僕が別の意味でメモリーさんの心配をしていたら。
急に、メモリーさんが話をふってくる。

「まぁ……どちらにしろ、反応がないね。その上、半分になっているから……存在が危うくなっているし。残りの半分は普通に生活しているのかな？　とにかく、どうしてこんな事になっているのか。原因を突き止めないと」
「半分って何ですか？」
「うん？　彼女をよく見るといいよ」

メモリーさんに言われて、女の子を凝視する。
あれ……？　透けて見えるのは気のせい？
メモリーさんが説明をしてくれる。

「今になって、思い出したんだけどね。狭間の影響もあってかな……。彼女……二人に別れちゃったの。根本的な原因は別にあるんだろうけど……」
「どうしてメモリーさんがそんな事を知っているのですか？　この方が二人に別れているなんて、どこで知ったのですか？」
「それはね。ハルトが去って、数日後くらいかな……？　僕が雑木林に行こうと思って歩いていたら。丁度、すれ違ったんだよね。彼女達と。それで、妙な違和感を持って……。だけど、面倒くさいから。見ない振りしたの」

え？　見ない振り？
呆れ返る僕の前で、メモリーさんがヘラヘラ笑う。

「後でよくよく推理してみると。多分、そういう事だと思うよ。勝手に解決してくれると、期待していたんだけど。何だか無理みたいだね。手助けした方がいいのかな？」
「そりゃそうでしょ。大体、メモリーさんはこの世界のリーダーなのですから」
「僕は『橋』じゃないよ。『橋』もどきだもの」
「言い訳はそれだけですか？」
「言い訳じゃないよ。事実だし」
「もう～。これじゃあ、未来さんよりも駄目『橋』じゃないですか。大体、メモリーさんは大人でしょ？　もう少し責任感という物を持って……」
「うわー、いやいや。お説教は嫌いなの。死神みたいなマシンガントークは止めて」

メモリーさんが耳を塞ぐ。
仕方がないから、話を変える僕。

「それよりも、この方はどうします？　こんな所で野ざらしは可哀そうですよ」
「彼女の家には、残りの半分……片割れがいるから送ることはできないし。かといって、僕の家に連れて帰ったら……犯罪だよね？」
「うーん。まぁ、いいと思いますよ。女の子を野ざらしで放置プレイするよりもマシだと思います」
「だけど、警察とか呼ばれたら……」
「こんな状態ですし、呼ばれることはないでしょう。もしも、呼ばれたら。僕がなんとかしますよ。僕の知り合いに、人の記憶を消去できる奴がいますから。それを連れてきましょう」
「何だか大騒動になりそう……。大事は苦手だなぁ……」

何だかんだ言いながらも、女の子を立たせて。
背中に背負うメモリーさん。
見捨てるつもりはないらしい。
まぁ、一度は見捨てているのだけど。
状況が仕方なかったのだろうと、僕はそう信じている。
じゃないと、メモリーさんが卑劣な人間になってしまう。
そうは思わない……。思いたくない。
お兄さんみたいなメモリーさんは好きだから。
未来さんみたいに反面教師じゃなくて、ちゃんとした教師として学びたい。
僕が頭で思い描いていたら、メモリーさんがいらぬ一言。

「あー、面倒くさい」

わかっているの？〈ハル編〉（前書き）

イラストお休み中～。
理由はない！

わかっているの？　〈ハル編〉

そういうわけで、女の子を連れて家に帰る僕達。
暴風のためか、人に会わないのはラッキーだ。
家に入ってすぐに、メモリーさんが女の子を地面に下ろす。
座りこむ女の子の目はうつろ。
未だに屍状態（しかばね）。
さて、どうしよう？

僕が女の子の様子を窺っていると、急に視界が暗くなる。
頭の上に何かが落ちた。
手に取ってみると、それはタオル。
後ろを向くと、メモリーさんを発見。
両手にタオルを持って、僕に言う。

「風邪を引かないようにね。僕はもう遅いけど……」
「ありがとうございます」
「うん。じゃあ、そっちの子にも。ほいっ」

そう言いながら、女の子に向かってタオルを投げるメモリーさん。
女の子の頭の上にタオルがかぶさる。
ちょいー！？
普通は手で渡すとかするよね！？
女の子に向かってタオルを投げるって何！？
親切なのかそうじゃないのか、わけのわからないメモリーさんに僕が言う。

「ちょっと、メモリーさん！　相手は女の子ですよ。投げつけるのは止めて下さい」

「え？　何で？」
「何でって……。その……相手に対して、もう少し思いやりとかないのですか？」
「思いやりって言われても。僕はこの子の事をよく知らないし。何にも思わないよ」
「だとしても、もう少し常識を持って……」
「もう～、うるさいなぁ～」

メモリーさんが膨れながら、女の子の頭にかぶさるタオルを手に取る。
そのまま女の子の頭をポンポンと拭き始める。
メモリーさんって、時々わけがわからない。
やっぱりちょっと非常識人。
親切な事は親切なのだけどなぁ～。

僕が何とも言えない気持ちでメモリーさんを見ていたら。
メモリーさんが拭き終わったタオルをたたんで、女の子の頭に乗せる。
だから、そういうのを止めようよ。
流石に突っ込む気力も失せて、自分の頭を拭き始める僕。
作業をしながら、メモリーさんに言う。

「頭だけ拭いても風邪を引きそうですね。服もずぶ濡れですし。どうします？」
「自分の事はどうにかするけど、その子の事はしらないよ。僕が手を出すわけにはいかないでしょ？　ハルがどうにかしてよ」
「いえ……僕もちょっと」
「大丈夫だって。ハルは子どもだから、問題ないよ」
「中身は高校生です」
「まぁ、僕よりもマシだよ。とりあえず、暖房を入れるから。後の

事は任せたよ」
「え!?　ちょっと待って下さい!」

僕が言っても、メモリーさん……話を聞いちゃいない。
キッチンへ向かって、歩いて行く。
ん～、どうするの?
どうすればいいの?
隣を向くと、女の子。
高校生くらい、学校の制服らしき服装をしている。

……。
いや、無理でしょ?
だって、僕も元は高校生。
年が合うとか合わないとか、そういう問題じゃない。
一介の男子が知らない女の子の服を着せかえるなんてできっこない。
というか、そもそも服がない。

ないない尽くしだ、どうすればいいの?
ちょっと、メモリーさん……。
責任転嫁し過ぎだよ。
大体、メモリーさんはこの世界のリーダーじゃない。
余所の世界の僕に押し付けるのは間違ってないの?

うだうだと文句を言いながら、女の子に目を向ける。
女の子は未だに動かない。
人形に成りきっている。
どうしよう?　これで何度この言葉を吐いただろう?

乾いたタオルで服の上から拭いてみる?
暖房の前に連れていく?

この際、これは人形だと思い込んで、チャレンジしてみる？
僕が必死になって考え込んでいたら、不意に声が聞こえてくる。

「ちょっと……身体を借りてもいいかな？」
「え……？」

思わず振り返る僕。
一瞬、青白い物が前を過る。
状況を理解するまでもなく、女の子の目に光が……。
その上、半透明だった身体が正常に。
そして、女の子が口を開く。

「こんにちは、ハル君。色々とごめんね。上野君はちょっとズレてるから。別にハル君の事が嫌いなわけじゃないのよ。それどころか、こんなに上野君とお喋りしている人を見るのは初めてなくらい」
「えっと……秋山さん？」
「うん、そう」

えへっと可愛らしく笑う女の子……秋山さん入り。
秋山さんが僕に言う。

「ハル君の服もずぶ濡れね。このままじゃあ、風邪を引いちゃうよ。ほら、お風呂に入ってきて。私は上野君に話があるから」
「はい……」

何て言えばいいのかわからなくて、情けない声を出す僕。
秋山さんがキッチンに向かって、大きな声を出す。

「上野君、お風呂借りるよー」
「はーい」

返ってくるメモリーさんの返事……めっちゃ普通なのだけど!?
驚かないの!?
不思議に思わないの!?
僕が仰天していたら、秋山さんに背中を押される。
そのままお風呂場へＧＯ！

迅速でお風呂に入って、二人の元へと走り向かう。
で、その後はどうなったの!?
ドラマの続きを見る気分で、キッチンの椅子に着地。
ほくほく気分の僕が二人に目を向ける。
二人を見ると、黙って紅茶を飲んでいる。
メモリーさんは漫画を読みながら、秋山さんはメモリーさんの様子を窺いながら。
メモリーさんは服を着替えたみたい。
今はパジャマ姿……。
お風呂には入らないのかな？　まぁ……風邪気味だし。

それにしても、お話は？
秋山さんに目を向けると、ニッコリ笑顔を返された。
その後も続く、沈黙の空間。
思わず、僕が口を開く。

「あの……それで、どうなったのです？」
「何が？」とメモリーさん。
「いや……何がって。あの……」

秋山さんに目を向ける僕。

秋山さんは楽しそう。
メモリーさんを眺めながら、和んでいる。
だけど、僕の視線に気が付いて、僕に顔を向ける。

「上野君が漫画を読むから。邪魔かと思って、黙っているの」
「いえ、漫画よりも、こっちの方が肝心なお話でしょ？」
「うーん……そうかもしれないけど、急ぎじゃないし」
「いえ、でも……漫画なんてどうでもいいですよ。ねぇ、メモリーさん？」
「うーん？　そう……？」

メモリーさん……話を聞いちゃいない。
こんな時に漫画なんて……。
ムッときて、メモリーさんの漫画を取り上げる。
そして、メモリーさんに言ってやる。

「メモリーさん、少しは会話して下さい」
「ちょっと返してよ！」
「人と話をする時は、漫画なんて読んじゃ駄目ですよ」
「何で！？　いつも読んでるじゃん！　今日に限ってそんな事を言うのは変だよ、ハル！」

メモリーさんと僕の睨み合い。
それを見て、秋山さんがクスクス笑う。
不満げなメモリーさんが、秋山さんに向いて口を開く。

「それで、君……名前は？　その服……青鶯高校（せいおうこうこう）の物だよね？　家はどこ？　どうして、こんな事になったの？」
「名前は秋山日和。趣味は読書で、特に推理物が好きね」
「秋山日和……？　へー……」

首を傾げるメモリーさん。
もしかしなくても、秋山さんに気づいていない？
秋山さんが微笑みながら、照れくさそうに言う。

「こう見えても私、高校生じゃないよ。上野君と同い年だから」
「その上野君って言うの止めてくれない？　というか、どうして僕と同い年だってわかるの？　年齢についてはハルにだって言ってな……」
「メモリーさんもボケるの大概にして下さい。この人……外見は異なりますが、中身は秋山さんです。メモリーさんの好きな秋山さんですよ。幽霊が乗り移っているのです。今は秋山さんが身体をコントロールしています」

このままじゃあ、話が進まないから。
僕が無理矢理に話を進めた。
僕の話を聞いて、メモリーさんが停止。
長い沈黙……。雨の音だけが耳に入る。
不意にメモリーさんが首を振って、話し出す。

「バカらしい。そういう冗談は止めてよね。幽霊なんているわけ……」
「ハル君が来るまでは、『幽霊でもいいから会いたい』って。毎日、呟いていたのにな」
「……」

秋山さんがぼそりと言って、メモリーさんが真顔になる。
直後、メモリーさんが炎上。
顔を真っ赤にしながら、パソコンルームに駆け込む。
あれ……？　メモリーさん……幽霊信じる人だったの？

あんなに幽霊はいないなんて言っていたのに……。
僕が首を傾げていたら、秋山さんが笑いながら言う。

「上野君、本当は気づいていたのよ。ハル君がお風呂に入っている間にね。ちょっとだけ話をしたの」
「どんなお話ですか？」
「上野君がね、『紅茶飲む？』って聞いてきたから。私が『アップルティーがいいな』って言ったの」
「それだけですか？」
「フフッ……。アップルティーなんて普通は頼まないでしょ？　私、アップルティー好きだから。生きていた頃はいつも『アップルティー飲みたいな』って、上野君に駄々をこねていたの」

楽しげな秋山さん。
だけど、メモリーさん……何で逃げたのだろう？
じっと考えて、ようやく気付く。
成る程、好きな人に私生活をずっと覗かれていたなんて知ったら、誰でも恥ずかしくなるよね。
だから、幽霊なんて信じないって言っていたのか。
本当は信じたいけど、信じたら恥ずかしい。
うーん、究極の葛藤だよね。

雰囲気に釣られて〈メモリー編〉（前書き）

まだイラスト描かないの？
描かないよ。
何で？
ノリ。
ん～。

雰囲気に釣られて〈メモリー編〉

仕事部屋に駆けこんで、扉の前に座りこむ。
頭を抱えて、半分パニック。
あの子の中に日和が……？
バカげた話だ、あり得ない……。
そう言いつつも、思い出すのはあの子の動き。
言葉遣いはともかく、仕草に至るまで。
外見を除けば、日和とそっくりだ。
中身が日和だと言われても、言い訳できないほどによく似ている。
その上、ハルの知らない事……。
アップルティーが好きな事や、僕が一人で呟いていた戯言など。
知るはずもない事を知っている。

まさか本当に日和が……？
そういえば、お昼過ぎにハルが幽霊を見たとか言っていたけど。
あれは見間違いじゃなかったって事？
だけど、どうして急に見えるようになったの？
確か、日和は毎日僕の生活を眺めていたような言い方をして……。

そこまで考えて、急に恥ずかしくなる。
うわぁー！　毎日、日和が僕の生活を……。
ハルが来てからの生活は別に構わない。
その前……一人だった頃の生活。
あんなオワタ生活を見られていたの？
ずっと？　日和が死んでから……ずっと？

やだやだやだ！
あんなの恥ずかしい！　恥ずかしすぎる！

日和に顔をあわせられない。
うぅ……もう駄目だ。
死にたい。
今すぐにでも死にたい。
いや、死ぬのはマズイな。
死んだら、日和と顔合わせだ。
そんなの余計に恥ずかしい。
もうこの世から消滅したい。

嬉しさを三桁ほど上回る羞恥心。
もう嫌だ、恥ずかしい。
それ以外に、何も考えられない。
僕が泣きそうになりながら頭を抱えていたら、女の子の……日和の声が聞こえてくる。

「上野君、服借りるよ。この子の服、凄く濡れているから。風邪を引かすのも可哀そうだし」

お願いだから話しかけないでー！
返事も返さずに、両手で顔を覆う僕。
もう泣きそう……。
というか、涙出ている。
恥ずかしくて、恥ずかしくて。
はぁ……。

じっと仕事部屋で息を殺す僕だけど、流石に限界がやってくる。
仕事なんてする気が出ないし、パソコンをすると頭が痛くなりそうだ。

できれば、早く眠りたい。

扉を開けて、外を確認。
毛布だけ取りに行って、仕事部屋で眠りにつこう。
そう思い、部屋を出る。
だけど、すぐに難問が。
毛布を取りに行くには、キッチンの前を通過しなければいけない。
うん、オワタ……。

キッチンからは談笑。
すぐに目に入るのは二人の姿。
ハルと……中身が日和の女の子。
いつの間にか、日和が僕の服を着ている。
そういえば、さっき貸してくれって言っていたっけ……。

存在感を消しながら、そっとキッチンの前を通り過ぎる僕。
だけど、もちろん声を掛けられる。
こんな狭い空間で逃げ場なんてありはしない。
ハルが僕に口を開く。

「メモリーさん、羞恥心は飛びましたか？」
「……全然。むしろ、増加しているよ」
「大丈夫だよ。私は変な事は言わないから」

口を挟むのは日和。
その一言が恥ずかしい。
顔を赤らめて、二人から目を逸らす僕。
これはきっと……夢だ。
こんな都合のいい二次元ストーリーなんて起きやしない。
早く毛布にくるまって眠ろう。

決断して、二人を見ない振り。
そそくさと押し入れに向かう僕の前に、日和が割って入ってくる。
両腕を広げて、僕の行く道を遮る。

「どこに行くのだぁ～。上野進一～」
「そこをどいてよ」

可愛く邪魔をする日和を避けて、押し入れから毛布を取り出す。
さっさと逃げなければ……。
頭の中がそれで精一杯。

だけど、よくよく考えると、どうして逃げているのだろう？
あんなに会いたいと思っていたのに……。
外見が違うから？　そういうわけじゃない。
ただ気まずくて……。

毛布を取り出し、後ろを向いたら、そこには日和。
両手を前に出して、僕に言う。

「それを持ってあげよう。上野君は病人だものね」

そう言って、僕の手に持つ毛布を取り上げる。
そして、僕に問いかけてくる。

「これはどこに持っていく？　お仕事のお部屋？」
「ううん……そこのソファー」

意地を張る気力もなくなって、思わず口にしてしまった。
日和が毛布をソファーに置いて、帰ってくる。
僕の様子を窺いながら、楽しそうに口を開く。

「次は何をすればいい？」
「別に……何もしなくていいよ」
「病人には優しくしないと。上野君、よく言っていたよね。私の体調が悪い時に。『日和は病気がちなんだから、無理しちゃ駄目だよ。何かしてほしい事があったら、何でも言ってね』って」
「いや、だけど……僕のはただの風邪……」
「ほら、恩返しだよ。恩返し。風邪だって病気の一種なんだから。何か食べたい物はある？　それとも、お話してほしい？　その格好じゃあ、寒くない？　暖房強める？」

一気にまくしたてる日和。
それにしても、元気だな……。
以前は……生前はもう少し落ち着いていた。
多分、調子が悪かったのだろう。
普段から無理していたのだなと……改めて理解する。

優柔不断に陥る僕の背中を押しながら、日和が言う。

「病人は起きてちゃ駄目だよ。ゆっくり休んで、治療しなくちゃ」

無理矢理にベッドまで連れていかれる僕。
仕事部屋を改めて、ソファーで寝ようと思っていたのだけど……。
僕が日和に向いて口を開く。

「僕は……ソファーで寝るよ。日和が……その子が寝る場所がなくなるでしょ？　だから……」
「駄目だよ。上野君は風邪気味なんだから、暖かくして眠らないと。私もこの子も大丈夫だよ。この子は橋の下で眠るくらいに身体が丈夫だし、私も一度はソファーで寝てみたかったんだ」

「だけど……」
「ほらほら、病人はベッドね。何か欲しい物はある？　夕食作ろうか？」
「え……うん……」

一方的に話を進められても言い返せない僕。
日和が嬉しそうにキッチンへと去っていく。

雰囲気に流されているうちに、大変な事になってきたな。
これからどうなるのだろう？
僕がため息をついていたら、僕の膝上にハルが飛び乗ってくる。
そういえば……いたんだ。
ごめん……すっかり忘れてた。

和やかな非日常〈ハル編〉

メモリーさんと秋山さんが楽しげに会話をする中。
一人置いてけぼりをくらいそうだったので、寂しくなってメモリーさんの膝上に飛び乗る僕。
メモリーさんを見上げると、妙に不安げな表情。
秋山さんがいる方面をちらりと横目で見てから、僕に向く。

「ねぇ、ハル。僕はどうすればいいの？」
「ん～。僕は子どもなのでよくわかりません」
「まさか、こういう形で日和と再会できるなんて……」
「嬉しくないのですか？」
「ううん、嬉しいよ。嬉しいけど……何て言うか。凄く混乱しているね」
「まぁ、一種の死者蘇生ですからね」
「はぁ～。どうすればいいの～？」

メモリーさんがため息をつきながら、僕を抱きしめる。
抱きしめる相手を間違えていますよ。
言っても今のメモリーさんには聞こえないだろう。
だって、秋山さんの事で頭がいっぱいだから。
抱き枕の如く僕を抱きしめながら、メモリーさんがうにゃうにゃ言いだす。

「あ～、もう助けてよ。ハル～。異常気象には強いんでしょ？　何がどうしてどうなってるの？　僕はどうすればいいの？　あ～……」
「うみゃ～」

僕が鳴いていたら、秋山さんがやってくる。

手にはおぼん。おぼんの上には雑炊だ。
それを目にして、尻尾を振りながら喜ぶ僕。
メモリーさんは未だにうにゃうにゃ言っている。
秋山さんが僕達の様子を見て、メモリーさんに注意をする。

「駄目だよ、上野君。そんな事をしたら、ハル君に風邪が移っちゃうよ」
「うっ……ごめん」

メモリーさんが謝って、僕を解放する。
そわそわするメモリーさんに対して、秋山さんはのほほんとしている。
小鍋に入った雑炊をお椀に移して、レンゲですくい。
メモリーさんの口元へ持っていく。

「はい、上野君。お口開けて」
「たっ、食べれるよ！　そんなの一人で食べれるよ！　僕は子どもじゃないんだから！」
「何で？　昔はこうやって食べてくれたのにな」

秋山さんの一言でメモリーさんが炎上。
そんな事をしていたんだ、メモリーさん。
よっぽど秋山さんの事が好きなのだな。
二人のやり取りを眺めながら、和む僕。
せっかくだから、秋山さんに向いて口を開く。

「あーん」
「はい、ハル君。あーん」

秋山さんが僕に雑炊を食べさせてくれる。

まるでお母さんみたい。
何だか懐かしい気分。
雑炊を口にして、僕が感想を述べる。

「んぐんぐ……。美味しいです！」
「そう、よかったぁ～。久しぶりの料理だから、失敗しないか心配だったの」

にっこり笑う秋山さん。
不意に、僕が上を見上げると。
お喋りする僕達を無視して、メモリーさんが自分で雑炊を食べている。
そんなメモリーさんに、秋山さんが話しかける。

「上野君、気をつけてね。上野君は猫舌だから。とりあえず、火傷しないように冷ましてはいるけれど……」
「大丈夫だよ、これくらいなら」
「え？　メモリーさんって、猫舌なのですか？」

話に乱入する僕。
秋山さんが微笑みながら僕に言う。

「そうなの。昔から猫舌でね。以前に、喫茶店に行った時に。上野君、話に夢中で紅茶が熱い事を忘れていて。それを口にしたから、火傷しちゃったの。その日から、私……喫茶店に行った時は。『ホットの紅茶、氷入りでお願いします』って言う事にしたのね。だから、いつも店員さんに『それはホットですか？　アイスですか？』って、聞き直されていたの」
「へ～、そんな事が……」
「後ね～。上野君はアイスクリームとか冷たい物を食べるのが凄く

遅くて。以前に、街でソフトクリームを買った時にね。上野君のソフトクリームがどんどん溶けてきて、最後はドロドロになっちゃって。だから、上野君にソフトクリームは渡しちゃ駄目だよ。渡すならカップアイスにしないと、後が大変な事になるから」

「ほ～、そんな事が……」

「他にはね～」

「お願いだから、もう喋らないでよ！　日和―！」

口が止まらない秋山さんに向いて、メモリーさんが赤面しながら訴える。

メモリーさんの反応を見て、えへっと笑う秋山さん。

笑顔がよく似合う人だな……。

何だか和みキャラだ。

そんなこんなで、夕食を食べながらお喋りをする僕達。

お喋りと言っても、僕と秋山さんがほとんど。

僕の質問に対して、秋山さんが答えてくれる。

メモリーさんは静かに話を聞いているだけ。

秋山さんが変な事を言いだしそうになったら、止めるけれど。

それ以外は、黙って僕達の話を耳にしている。

楽しい談話。

ちょっとした家族ごっこ。

メモリーさんがお父さんで、秋山さんがお母さん。

元がお札である僕には両親がいないから、何だか凄く嬉しい。

尽きない話のネタ。

長い間、堪りに堪った秋山さんの気持ち。

いつもよりも素直なメモリーさん。

穏やかで優しい非日常。

秋山さんの話を聞いているうちに、だんだん眠たくなってくる。
メモリーさんの膝上で丸まって、目を瞑る。
すると、メモリーさんが頭を撫でてくれる。
それが心地よくて眠りだす僕。
そんな僕の耳に入ってくるのは、二人の会話。
静かな笑い声が聞こえてきて……。
いつしか意識が薄れて……。

至福の一時〈メモリー編〉（前書き）

次くらいからは、イラスト描かないとね。
流石にマズイよね。
ルール違反だものね。

僕の膝上で寝息を立てるハル。
ハルの頭を撫でながら、僕が日和に口を開く。

「寝ちゃったね」
「フフッ……疲れちゃったのかな？　今日はバタバタしていたから」
「そうかもね……」

ハルを隣に移動させて、布団を掛けてやる。
当分は……起きないだろう。
僕がベッドから立ち上がろうとすると、日和が話しかけてくる。

「どこに行くの？　上野君？」
「いや……やっぱり僕は向こうで寝るよ。ハルもいるし、日和はこっちを使って。大丈夫、もう風邪は治ったから」
「駄目だよ～。まだ顔色悪いもの」
「大丈夫だって。それよりも、その子が風邪を引くほうが可哀そうだよ。とりあえずは……人の身体なんだから」
「それはそうだけど……」

立ち上がって、日和に手を伸ばす。
外見は異なるけれど……。
それでも……話をしていたら、やっぱり日和だなと思う。
少しの違和感も喋っているうちに消えてしまう。

バカな幻想を思い描いて、それに執着していた僕。
まさか本当に再会できるなんて……と思いつつも。
これが当たり前だと、どこかで認識している。

漫画の読み過ぎかな？　夢物語しか目に入らない。

暗い海のど真ん中、たった一つの救命ボート。
それが日和……。
日和がいなければ、僕の人生は救いようがない。
今の僕がいるのも、日和のおかげだろう。

日和を抱きしめると、日和が抱きしめ返してくれる。
それだけで、心底から湧き出てくる安心感。
僕が懐かしい心地よさに浸っていたら、日和が小声で呟く。

「ごめんね……」
「何が……？」
「上野君……私がいなくなってから、ずっと一人だったね」
「……日和のせいじゃないよ。僕が悪いの……」
「上野君のせいじゃないよ。私は……『橋』をしていたのに。大切な人も守れなくて」
「ううん……守ってくれてる。今も昔も……」
「……うん」

嬉しげに頷く日和。
僕をきつく抱きしめてから、身体を離す。
そして、ちょっと不満げに僕を見る。

「人の身体って、不便だね。変な事をしちゃいけないし」
「そう？　黙っていたら、バレないかも」
「駄目だよ。女の子は繊細なんだから」
「そっか……。じゃあ、日和。僕を誘惑しないでね。すぐに飲まれちゃうから」
「私も雰囲気に弱いの。上野君こそ誘惑しないでね」

冗談を言って、二人で笑う。
ちょっと行動は制御されるけれど、喋れるだけで十分に幸せ。
日和の髪を触りながら、僕が言う。

「そろそろ寝る？　その子の身体に負担が掛るとマズイから……」
「そうだね。本当はもうちょっとお話したいけど……。無理をさせるわけにはいかないし」
「うん……。じゃあ、おやすみ」
「おやすみ」

日和が微笑む。
僕はソファーに向かって歩いて行き、毛布をかぶって眠りにつく。
幸せの中に、一つの不安。
日和には聞けなかった。
この生活がいつまで続くだろうか……という話。

唐突に訪れた、あり得ない至福。
それはいずれ朽ち果てるだろう。
僕はその事をよく知っている。
知っているだけに、日和と係わるのが恐ろしい。
遠い昔、日和がいなくなった時に感じた絶望感は今でも覚えている。
あの頃は……生きていなかったな。
僕の方が死人に近かったかもしれない。

僕が思い悩んでいたら、ベッドの方から日和の声が。

「上野くーん」
「うーん？」
「また後でお喋りしようね」

「……うん」

フフッ……さすが日和だ。
僕の気持ちをここまで読むか。
悩み事も途端に消えて、ちょっと気恥ずかしい気持ちになる。

それにしても、日和は……僕の生活をどこまで覗いていたのだろう？
変な所を見られてなければいいのだけど。
後で聞いてみようかな？
ソファーの上で寝転んで、色々と考えていたら。
ベッドから日和の声が。

「九割かな？」
「え……何が？」
「上野君の生活」
「……」

九割……って、相当だよね？
消えかかっていた羞恥心が浮上してくる。
死にたい……。
僕が赤面していたら、ベッド方面から笑い声。
日和が小声で笑っている。
もう～……こうなったら、恥を掻くのを承知で。
後で、日和に聞いてみよう。
もちろん、ハルがいない間に。

朝食を食べながら〈ハル編〉　★

朝起きて、キッチンの机の上を見ると豪華な朝食が。
それを見て、急激に感じる空腹感。
お腹空いた、お腹空いた。
メモリーさんを探すけど、見当たらない。

勝手に食べていいかな？
いいや、食べてしまえ。
お箸を手に持ち、朝食を突きだす。
すっごく美味しそうなおかずを口に放り込む。
ん～、味しない。
何で？　こんなに美味しそうなのに。
もう一回、口に入れる。
だけど、やっぱり……味しない。

やけくそになって、やけ食いだ。
碌に味わいもしないで、ひたすらに食べ続ける僕。
だけど、何だか満足しない。
こんなに美味しそうなのに、満足しないなんて変だー。

という前置きがあって、目が覚める。
今の……夢。
食べ物の夢を見るなんて、まるで子どもか犬だよね……。
魔力不足で子ども姿になって以来、食べ物への執着心が異常なまでに増えている。
だって、お腹が空くのだもの。
最近はマシになったなんて言えない。
全然、マシになっていない。

未だに魔力が不足して、空腹でしかたない。
一日の半分は食事の事を考えている。

そんな僕の鼻をかすめるのは、よだれが出そうなほどにいい香り。
ぐーるぐるぐる、お腹が鳴りだす。
ご飯、食べたい。
ご飯の事だけを考えながら、ベッドから下りる。
そのままキッチンへと向かう。

キッチンにはメモリーさんじゃない人を発見。
学校の制服を来た高校生くらいの女の子。
一瞬、脳内停止。
直後、思い出すのは昨日の出来事。
その人が僕の方に振り返る。

「あら、ハル君。おはよう」
「おはようございます。秋山さん」
「朝食作ったよ。好きなだけ食べてね」
「じゃあ、メモリーさんの分もいただきます」

僕が冗談を言ったら、秋山さんがクスクスと笑い出す。
僕もヘラヘラ笑いながら、席についてお箸を手に取る。
ワーイ、今度こそは本物だ。
たくさん並ぶ料理を目にして、手が伸びる。
一つ二つと口に入れて、幸せを感じる僕。
おいしー。
食べるって、幸せだな。

あ、『いただきます』って言うのを忘れていた。
まぁ、いいや。

いつもメモリーさんは言わないし。

頭の隅で余計な事を考えながら、お口はもぐもぐ。
あまりの空腹に僕がガッつきながら食べていると、秋山さんに注意される。

「ハル君、そんなに急いで食べると喉に詰めちゃうよ。そんなに慌てなくても、料理は逃げないから。もう少しよく噛んで食べようね」
「ん～」

一度頷き、少しペースを落とす僕。
お茶で食べ物を飲み込んだ後に、ようやく秋山さんに話しかける。

「そういえば、僕……。昨晩は、途中で眠ってしまって。失礼しました」
「フフッ……別に謝ることはないよ。昨日は色々と忙しかったもの。ハル君も疲れたでしょ？」

うーん、どうだろう？
だけど、あれでも僕……お昼起きだった。
しかも、その後に昼寝している。
一般人の日曜日よりもぐうたら過ごしていた気が……。
素直に「はい」と頷けず、首を傾げる僕。
そんな僕を眺めながら、秋山さんは楽しげ。
不意に僕が問いかける。

「そういえば、メモリーさんは？」
「上野君なら、ソファーで眠っているよ。結局、私がベッドを使わせてもらったの。ハル君のお隣ね」
「そうだったのですか？　全然、気づきませんでした」

「そう？　てっきり気づいていたと思っていたのに。だって、ハル君の頭を撫でると。とっても幸せそうな顔をしながら、私にすり寄ってくるから」

え……そんな事をしていたの？
いくら無意識とはいえ、ヤバいな。
メモリーさんにバレたら殺されるかも。
情報隠しのために、秋山さんにお願いだ。

「今の話はメモリーさんには秘密でお願いします」
「フフッ、上野君が怒るとは思わないよ。上野君はハル君の事を子どもとしか思っていないもの」
「ん～。言われてみれば、そうですね」

子どもっていうか……ペット？
そっか……。じゃあ、問題ないよね。

そんな感じでお喋りを続ける僕達。
メモリーさんは起きてこない。
それにしても、メモリーさんって、いつも寝ている気がする。
僕よりも寝る人なんて見るの初めて。

しばらく経過して、秋山さんが不審な動き。
急に玄関へと向かいだす。
もちろん、僕が話しかける。

「どこへ行くのですか？」
「あれ……？　ちょっと待って」

スッと女の子の身体から出てくるのは、幽霊の秋山さん。
秋山さんが出てきた後も、女の子は動き続ける。
扉を開けて、出て行った。
えっと……止めなくて良かったのかな？
不意に幽霊の秋山さんが僕に振り返って言う。

「学校……みたいね。そういうことは覚えているんだ」
「止めなくて良かったのですか？」
「学校に大切な物があるのなら、行かせてあげないと」
「じゃあ、秋山さんは……。今後、幽霊のままですか？」
「きっと学校が終われば、橋の下に行くと思うの。そうしたら、また少し身体を借りようかな？」
「それまでは幽霊ですね。あ……そういえば、秋山さん」
「なぁに？」

ヘラッと笑う秋山さんに、僕が質問を投げる。

「僕は……どうして急に秋山さんを見られるようになったのですか？」
「きっと狭間の影響ね。ハルト君の件で、狭間に対して大きな影響を与えたから。それで、私を見る事ができるようになったのだと思うよ。だけど……」
「だけど？」
「ハル君が私を見る事ができるのは、別の世界の人だから。多分……上野君には私を見る事ができないと思うの」
「え……。そうなのですか？」

世界が違えば、見える物が異なるという話は聞いている。
納得する僕の隣では、秋山さんが珍しく寂しげな顔をする。

やっぱり本当の自分の姿で、メモリーさんに会いたいのだろうな。
だけど、僕には何もしてあげられなくて……。
心配げに秋山さんを見上げていると、秋山さんが口を開く。

「死んでから会えるだけでも幸せなのに。次から次へと、欲が出ちゃう。人間って贅沢だよね」

僕が秋山さんと駄弁っていたら、いつの間にやらお昼過ぎ。
そして、ようやくメモリーさんが目を覚ます。
ボーっとしながら、キッチンまでやってきて。
キョロキョロと辺りを見回し、口を開く。

「あれ？　日和は……？」
「秋山さんなら、ここにいますよ」

秋山さんに指を差し、答える僕。
メモリーさんが秋山さんの方に向いて、首を傾げる。

「え？　いないよ……」
「やっぱり……見えないのね」

しょんぼりと落ち込む秋山さん。
残念だけど……仕方ないのかな。
メモリーさんに説明をする。
話を聞いて、すぐに理解してくれるメモリーさん。
元気なく話しだす。

「そう……。まぁ、そんな事だろうと思ったよ」

「だけど、元気を出して下さい。秋山さんはそこにいますよ。僕が証人になります！」
「でもね、ハル。いくらハルが証人になってくれても、僕には見えないの。日和の顔色も声も、何もわからないんだよ。それじゃあ……意味ないよ」
「上野君……」

秋山さんがメモリーさんに手を伸ばす。
だけど、その手もすり抜けて……。
生きているか、死んでいるかの違いだけなのに。
遠距離恋愛よりも遠い距離。
寂しげな二人を見て、何とかしてあげたいけれど……。
僕にはそんな力がない。
重い空気の中、メモリーさんがカラ元気。

「まぁ、夕方になれば会えるだろうから。落ち込む必要ないよね」
「はい。それまでは僕が取り次ぎをしますので」
「フフッ……心強いこと」

メモリーさんが苦笑しながら、僕の頭を撫でてくれる。
その後、席について遅い朝食を食べ始める。
僕はメモリーさんの膝に飛び乗って、口を開けてご飯をせがみ。
メモリーさんが僕の口の中にご飯を放り込む。
以前と同じような日々。
ただ……僕の目には秋山さんが映っていて……。

ご飯を食べ終わり、メモリーさんが口を開く。

「さて……昼寝でもするかな」
「ちょっと、上野君！　昨日から何時間寝ているの！？」
「駄目ですよ、メモリーさん！　寝過ぎですよ！　このまま寝続けると、身体が動かなくなりますよ！」

秋山さんと僕が一斉にブーイング。
秋山さんの言葉は聞こえずとも、僕の言葉を聞いて。
メモリーさんがヘラヘラ笑う。

「大丈夫だよ。どうせ起きていても動かないし」
「今日は天気がいいんだから。上野君も少しは外に出て、お日様に当たらないと。病後で体調が悪いのもわかるけれど。これ以上、引きこもると。体力がなくなって、もっと酷い病気になっちゃうよ。暖かい格好をして、お外に行こうよ！」

秋山さんがメモリーさんの隣で騒ぐ中、僕がそれを要約する。

「秋山さんいわく、『外に出なさい』だそうですよ」
「え～、ヤダよ。外に出たってすることないし。時間の無駄だよ」
「またそんな事言って！　上野君、昔は凄くアウトドアだったよね？　私と一緒にいろんな所に行ったじゃない！　あの時の行動力はどこに行ったの～！？」

秋山さんは必死。
メモリーさんに手を伸ばしてもすり抜けるし。
大声を出してもメモリーさんには届いていないけれど。
それでも、もしかしたらという期待のあまりか怒鳴り続ける。
僕が話を要約だ。

「秋山さんいわく、『私にいろんな事をした行動力はどこに行った

の？』だそうです」
「ハル君、要約が変だよ！　一つ間違えると、変な勘違いしちゃうよ！」顔を赤らめる秋山さん。

ちょっとした応用問題……いや、引っ掛け問題。
最終的にはメモリーさんが、僕に口を開く。

「ハル……。それは日和が言ったの？」
「はい。秋山さんが言った言葉を僕が要約しました」
「あのさぁ……。要約しないで、日和が言った事をそのまま教えてくれない？　要約されるとわけがわからないから」
「ん～」

面白くないのー。
ちょっとつまらない顔をして。
先程、秋山さんが言った言葉を思い出せる限り同様に説明する。
それを聞いて、理解するメモリーさん。

「まぁ、あの頃は……あの頃で。今は今。ほら、前半で張りきりすぎたから。後半はのんびり行くの」
「上野君～！　一週間で一度でもいいから、外に出ようよ。ハル君が来るまでなんて、ほとんどネットショップで買い物して。最後に外に出たのはいつ？　ってくらいに、外に出ていなかったでしょ！？」秋山さんが訴える。
「メモリーさん……僕が来るまでは本格ヒッキーをしていたのですね」

秋山さんの話を聞いて、僕がメモリーさんに向く。
メモリーさんは苦笑い。
笑って誤魔化しながら、ベッドに向かおうとする。

もちろん、僕が走って行って、メモリーさんにスーパージャンプ。
遊びに行きたーい！

＞ｉ１４０７０―２３１＜

お散歩〈メモリー編〉　★

ハルにせがまれ、強制連行。
結局は、散歩をすることに。
日和が見えないのに、散歩だなんて……。
まったく乗り気になれない僕。
ハルは走り回り、たまに一人で喋り出す。
日和とお喋りしているようだ。
本当に羨ましいな……。
僕が一人で呆けていたら、ハルがこちらに向いて手を振りだす。

「ほら、メモリーさん。一人で拗ねてないで、楽しくお散歩しましょうよ！」
「はいはい。楽しいよー」
「その割には、ふて腐れたような顔をしていますよ」
「きっと気のせいだよ」
「じゃあ、笑って下さい。ほら、笑顔、笑顔」
「あはははは」

僕が真顔で笑う振り、それを見てハルがケラケラ笑う。
本当に楽しそう。
外に出たくて仕方なかったみたいだ。
やっぱり犬は、一日一回、散歩させなきゃ駄目なのか……。

街中は台風後。
昨日の嵐であちこちにいろんな物が落ちている。
倒れる自転車にかんばん。

これは何？　瓦（かわら）？
どこから飛んできたのだろう？

　散歩の途中でコンビニを発見。
もちろん、ハルが騒ぎ出す。
仕方がないから、中に入って、買い物だ。
僕が飲み物を選んでいると、隣のハルがカゴになみなみのお弁当。
おにぎりまで買って、これ何人前？
軽く十人前は超えているだろう。
いつもよりもはっちゃけるハルに注意もせずに、お金を払う。
まぁ、残さないのなら別にいいか……。

　駄弁りながら、歩いていると。
空き地のような所を発見。
そこでハルが三時のおやつ。
と言っても、さっき買ったお弁当をハイスピードで食べ始めるわけで。
決して、おやつなんて言えやしない。
これは夕食でいいのかな？
聞いたら、駄目だって言われるだろう。

　幸せそうに、何も考えず。
とにかく食べる事を続けるハルを横目で眺めながら、僕はジュースを口に含む。
一度はハルが食べ物を喉に詰めて、死にそうになっていた。
飲み物がなくなったのか、泣きそうな顔で僕の方を見るので。
ジュースを渡したら、一気飲み。
全部飲まれちゃう。

＞ｉ１４３１３―２３１＜

こうして飲み物が尽きてしまい、僕が買い出しに行く事に。
ハルは未だに食べ続けるけど。また喉に詰めると困るから。
確か、向こうに自販機があったはずだ……。

少し速足で歩いて行くと、自販機を発見。
飲み物を買おうと思い、手が止まる。
そういえば、ここって……青鶯(せいおう)高校の真横。
まぁ、正しくは青鶯学園だけど。
青鶯は中高に大学を加えた学園だから。

ちょっとした興味本位。
自販機を離れて、足を進める。
角を曲がると、予想通り学校の正門が目に留まる。
だけど、予想外な物が一つ……。

正門の前には高級車。
誰かお金持ちでも来てるのかな？
だけど、何で青鶯学園に？
訝しげに思い、正門に近づく。
少し離れた位置から、車の中を窺う僕。
うん、見えない。
すぐに諦めて、今度は学校の中を覗く。
うーん……わからない。
別に怪しい人なんていないし。

まぁ、いたとしても僕には関係ないか。
急に興味が失せて、引き返そうとしたところ。
誰かに声を掛けられる。
振りかえる先には、知り合いの顔だ。

驚き溢れて僕が言う。

「雫(しずく)!?　何でこんな所にいるの!?」

「それはこっちのセリフ～。進兄(しんにい)こそ、何でこんな所にいるの?」

「何でって……何でだろう?」

「雫に聞かれても知らないよ～。むしろ、雫の方が質問してるんだから」

「別に意味はないよ。たまたま通りがかったら、変な車があるから。不審者でもいるのかと思って、学校の中を覗いていたの」

「進兄の方が不審者だし～」

ケラケラ笑いながら、雫が僕に指を差す。

この子の名前は北原雫(きたはらしずく)。

日和のいとこで、中学生。

元気有り余る、はっちゃけ者だ。

僕が首を傾げながら、雫に問いかける。

「あれ?　雫の通っている学校って、青鶯だったっけ?　もしかして、転校?」

「違うよ～!　今年から雫は高校生。青鶯高校に受験して、通ったの。進兄は未だに雫の事を中学生だと思ってるでしょ?」

「……え?　マジで?」

「マジだよ。どこからどう見ても、高校生じゃん。ほら、この制服」

「中学も一緒でしょ?」

「中学のはもっと、襟とかスカートの部分が赤いの」

雫に言われて、納得する。

そうだったのか……。

雫は今年から高校生に……。

一年ほど前に誰かから中学生だと教えてもらったけれど、まさか中

三だったなんて。
僕が言葉を無くしていると、雫が僕に話しかけてくる。

「それにしても、進兄は雰囲気変わったね。まるでオタクだよ～。その前髪どうにかしたら？」
「別にいいじゃん。僕の勝手でしょ？」
「良くないよ。引きこもりみたいだよ。根暗オーラ出過ぎ」
「悪かったね。どうせ僕はヒッキーだよ」
「えぇ！？　進兄が引きこもりしてるの！？　あの超アウトドアの進兄が引きこもり！？　いつも日和お姉ちゃんと雫を連れて、色々な所に連れて行ってくれてたのに！　連絡がつかないから、心配していたら。ヒッキーになっていただなんて……」
「うるさいなぁ～。そもそも、雫は関係ないし。毎回、無理矢理ついてきてただけじゃん。本当、邪魔で仕方なかったよ」
「雫は二人の愛のキューピッドだよ。ちゃんと二人の援護をしていたじゃない」
「どこがぁ～？　後ろで騒いで邪魔していただけでしょ？」

ああだこうだと無駄話。
懐かしい昔を思い出して、ちょっと盛り上がる。
ついでに今の生活状況を報告。
結構、驚く事が多かった。
何せ人と係わらない僕だから、知らない事がかなりある。
そして、雫が僕に言う。

「進兄……本当にヒッキーしてるの？　こんな進兄を見たら、日和お姉ちゃんが泣いちゃうよ」
「そんな事ないよ……。まぁ、出かけるにしても一人で行くところなんてないし。引きこもっているほうが楽でいいの」
「ということは、まだ新しい彼女できてないんだ。やっぱりね～。

一目でわかったよ。彼女いなさそうなオーラだしてるもん」
「もう〜、うるさいなぁ〜。そういう雫はどうなの？」
「この間、告られたけど、振りましたー！」

雫がブイサインを出しながら、自慢げに言う。
だけど、それは……要するに、いないってことだよね。
僕が雫に言ってやる。

「じゃあ、僕と一緒だね」
「進兄と一緒にされたくないし。雫の場合は振ってやったの」
「僕は……振られたわけじゃないもの……」
「大丈夫だよ。日和お姉ちゃんは今の進兄を見て、幻滅しているだろうから。きっと今すぐ会えば振られるよ」
「……」

グサリッと心に突き刺さる言葉。
やっぱり雫は中学生だ。
人の気持ちを考えないで、ここまで言える人はそうはいないだろう。
不意に雫が言ってくる。

「なんなら、雫が彼女になってあげようか？　進兄なら、彼氏にしてもいいよ。いろんな所に連れて行ってくれるし」
「やだやだ、中学生なんてお断り。お金をむしり取られるだけだもん」
「中学生じゃないし！　高校生だし！」
「中学生だよ。雫は中身が中一くらいだもの。皆に聞いてみなよ。十人に十人が答えるよ」
「そんなことないし〜」

不満げな雫。

不意に聞こえてくるのはチャイムの音。
僕が雫の背中を押す。

「ほら、授業でしょ？　行った、行った。はい、さよなら。またいつか会える日まで」
「ちょっと進兄～！　愛想なさすぎ～！」
「走らないと遅刻だよ。先生に怒られるよ」

僕が言ったら、雫が反転して自慢げに話しだす。

「残念だけど、次は自習～。出席は取らないし、先生は優しいから。怒られないよ」
「そうなの？　だけど、こんな所をウロウロしていたら流石に怒られるでしょ？」
「怒られないし～。それより、進兄に学校を案内してあげる」
「何言ってるの？　僕が勝手に学校の中に侵入したら、警察沙汰だよ」
「大丈夫だよ。あっちに保護者カードを作る場所があるから。生徒と一緒に行って、記入欄に記入して～。証明書を出して、確認さえ取れたら。カードを首にさげて、自由だよ。ほら、行こうよ。地域住民との交流だよ」
「やだやだ、遠慮するよ。生徒でもないのに、学校の中に入るなんて嫌だよ。何か気が重いし……」

首を振る僕を無理矢理に引っ張る雫。
嫌だと言うのに、聞いてくれない。
長い戦いの末に敗れて、ビビりながら学校に入場。
うろたえる僕を見て、雫が大笑いだ。

「進兄、挙動不審だよ。一人でいたら、間違いなく警察呼ばれるね」

何なの……こいつ？〈メモリー編〉　★（前書き）

メモリーは口だけ達者だけど、マジ弱い……。
外出は控えた方がいいだろう。
『橋』の周りにはハプニングがいっぱいだからね。
ずっと引きこもっていたメモリーの行動は案外に正解かもしれない。

何なの……こいつ？〈メモリー編〉　★

雫に誘導されて、保護者カードを作り。学校内を散策する。
もしかしたら、例の女の子に会えるかもしれない。
もしも出会えたなら。あの子の素性を調べて、半分になった原因をつき止めないと……。

僕が考えごとをしていたら、不意に雫の声が聞こえてくる。

「ねぇ、日和お姉ちゃんがいなくなってから。進兄は引っ越ししたんでしょ？」
「うん……。っていうか、正しくは隣の部屋の人が火事を起こして。住めなくなったんだよね。部屋が燃えたわけじゃないけど……。もう煙とかで、臭いが酷くて。住めない、住めない」
「それで引っ越し先はどこ？　またボロアパート？」
「ううん、マンション」
「へ～、マンションなんだ。名前は？」
「え～っと……」

僕がマンションの名前を言うと、雫が目を丸くして騒ぎだす。

「それって、ここら辺ではかなりの高級マンションに入るよね！？進兄、そんなにお金持ちだったの！？」
「お金持ちっていうか……。外に出なければ使いどころがないもの。せめて部屋くらいは良い所に住みたいなぁ～と思って」
「玉の輿だね。ちょっと本気で雫とお付き合いしない？」
「絶対に、い～や」

僕が言いきり、雫が膨れる。

次は僕が雫に質問。

「そうそう、それで学校の前に止まっていた高級車……。あれは何なの？　どこかのお偉いさんでも来てるの？」

「えっ！？　進兄、ニュース見てないの？　この間までは大騒動だったんだよ……。今は落ち着いているけど」

「大騒動？　って、何かあったの？」

「えっとね……」

雫が周りを確かめながら、声を殺す。

「菊池財閥って知ってるでしょ？」

「んー、聞いた事があるような……ないような」

「日本でトップのお金持ちだよ。それで、菊池家には一人娘がいて。そのお嬢様がうちの学校に転校してきたの」

「何で？」

「そこまでは知らないよ～」

「へ～、そうなんだ」

「何でもっと驚かないの？　これって、凄い事なんだよ」

「いや……まぁ。凄いね。でも、だから、何なの？」

「進兄って、こういう所は鈍感なんだね～」

「うるさいなぁ～」

呆れる雫に文句を言う。

だけど……確かに鈍感だな。

特に別世界の存在を知ってから。

そんなお金持ちのお嬢様が学校に通っているくらいじゃあ、驚けない。

何せ僕の知り合いには本当のお姫様がいるし、ドラゴンだって見た事ある。

その上、神様や魔法使いみたいな人達だって知っている。
ここまで来ると鈍感になっても不思議じゃない。

雫が続けて、話を持ち出す。

「それでね。そのお嬢様の名前が瑠菜（るな）っていうんだけど……。もの凄いの！」
「何？　怪物みたいなの？」
「そんなわけないじゃない。そうじゃなくて、もの凄く可愛いんだよ～。あのね……背が小さくて、ハーフみたいな顔つきだから。まるでお人形みたいなの」
「へ～、そうなんだ」

まぁ、日和には劣るけどね。
心の中で呟いて、ちょっと自慢げ。
日和に勝る者なんていない。
誰よりも何よりも日和が一番だ。
僕が勝手な妄想をしていたら、雫がほざきだす。

「今から、お嬢様を見に行こうよ。マジで驚くほど可愛いから」
「別に興味ないし……」
「日本一の財閥のお嬢様だよ。本物を見ただけでも、自慢できるんだから」
「自慢する相手がいないし……」
「ほら、行こう！　一目見るだけだから」
「えぇ～」

面倒くさがる僕だけど、他にする事がないので。
雫に言われたまま、後をついて行く。
校舎の中に入って、階段を上って。

廊下を歩いて、とある教室前。
雫が小声で僕に言う。

「あれだよ、あの子。一番後ろの廊下側の席にいる子」
「説明なんていらないよ。だって、一人だけ制服着てないじゃん。一目でわかるし」
「めっちゃ可愛いでしょ？」
「まぁ、それなり？」

話をしていて、ふと気付く事。
真ん中辺りの席に、例のあの子。
お嬢様じゃなくて……半分の子。
そう、日和が乗り移っていたあの子の姿が。
今ここでみる限りは、半透明じゃない。ちゃんと普通に戻っている。
僕が雫に問いかける。

「ねぇ、あの子は誰？　あの……真ん中辺りの席に座っている。頭に触角が生えた子」
「恵梨香ちゃんだよ。安曇恵梨香（あずみえりか）ちゃん。もしかして、惚れたの？　駄目だよ、恵梨香ちゃんには彼氏いるから」
「いや、そういうわけじゃないけど……」

どういうことだろう？
普通に戻っているって事は……残りの半分と融合したの？
だけど、今までは半分だったのに。
いきなり元に戻るなんて、そんな好都合な事が起きるわけないよね……。

僕が腕を組みながら考え込んでいたら、教室からざわめきが聞こえてくる。

振りかえると、財閥のお嬢様……菊池瑠菜（きくちるな）が立ち上がっていた。
どうするのかと思ったら、こちらに向かって歩き出す。
そのまま教室から外に出て、僕の目の前。

妙な空気の中、僕と瑠菜の目が合う。
そして、なぜか瑠菜が僕に命令してくる。

「そこのあなた、ひざまずきなさい」
「何で？」
「いいから、ひざまずきなさい」
「嫌」

断言する僕。
意味がわからないもの。
理由もなしに、知らない高校生の前にひざまずくなんて、嫌に決まってる。
僕の態度を見て、うろたえる見物人。
雫が僕を突いて、小声で言う。

「ちょ、ちょっと。駄目だよ、進兄。お嬢様の言う事は絶対だよ。先生だって逆らえないんだから。言われたらその通りに行動しないと、後で怖い事になるよ」
「そんな事を言われても、わけわからないじゃない。いきなり人にひざまずけって。いくら相手がお嬢様でも、そんなのはごめんだね」

僕が言い終わると同時に、瑠菜が僕に指を差す。

「この者を押さえつけなさい」

直後、どこに潜んでいたのか黒いスーツを着た男達が現れる。

おい、舐めんな！
ぶちぎれる僕を無理矢理に押さえつける黒スーツ。
もちろん、こんな奴らに勝てるわけもなく。
地面にうつ伏せ……情けない僕。
こんな姿……日和に見られたら、オワル。
心の中で殺意が沸き立つ僕に向かって、瑠菜がほざきだす。

「顔を上げなさい」

直後、黒スーツの一人に髪の毛を掴まれて。顔を上げさせられる。
超不愉快。マジ不愉快。
本気マジ切れで、瑠菜を睨みつける僕。
不意に瑠菜がしゃがみ込んで、僕に顔を近付ける。

「いいざまね」
「お前、ぶっ殺してやるからな」
「そんな事を言っても、何もできないくせに……」
「こいつらをどうにかできたら。すぐにでもお前の首をへし折ってやる」
「そんな事ができるの？　いつも引きこもっているくせに」
「何だよ？　まるで、僕の私生活を知っているような言い方……」

まさか……。
蒼白する僕。瑠菜が微笑む。

「こんにちは、上野進一。面と向かって話をするのは初めてね」
「お前が盗聴器を……。一体、僕に何の用だよ？」

僕が問いかけても、答える気のない瑠菜。
代わりにいらぬ行動に出る。

僕に顔を近づけてきて……。触れ合う唇。
マジ萎(な)える……。

＞i14355―231＜

頑張ります！　〈ハル編〉　★（前書き）

イラストは超手抜き。
所詮、ハルは犬だった。
それにしても、ヒッキー……。
まるでさえない悪役の逃亡劇場みたいだ。（笑）

メモリーさんが帰ってこなくて、お弁当を食べ終わる。
その後、数分待つけれど。いつまで経っても顔を見せない。
不安げな秋山さんが僕に向いて、口を開く。

「上野君……遅いね」
「変ですね。探しに行きましょうか？」
「そうね……。だけど、どこにいったのか……。自動販売機って、たくさんあるし」
「任せて下さい。こう見えても僕、探しものは得意なのです」

そう言って、とりだしたのは紐のついた五円玉と地図。
そう……おわかりの人もいるだろう。
紐の先端を指で持ち、五円玉を地図の上で静止させる。
手を動かし、五円玉を移動。反応した場所がメモリーさんのいる所。

ここら辺の近辺を調べて、ある場所で反応。
青鶯学園の校舎内。
何でこんな所にいるの？
首を傾げる僕に、秋山さんが話しかけてくる。

「もしかしたら、上野君……。あの半分の子が誰なのか調べに行ったのかな？」
「あぁ……なるほど。だけど、わざわざメモリーさんが？」
「う～ん。もしくは、知り合いに会ったとか」
「そっちの方がしっくりきます。あのメモリーさんがわざわざ人助けのために、手間を掛けるとは思えませんから」
「そんな事ないよ～。結構、上野君は親切だよ。たまに変な事をす

るけど」
「メモリーさんが親切なのは秋山さん限定です。変な事は秋山さん以外の人限定です」
僕が言ったら、秋山さんがクスクスと笑いだす。
結構、本気で言ったのだけど。
冗談だと思われたみたい？

とにもかくにもそういうことで、青鷺学園に向かって猛ダッシュ。
秋山さんは先に行ってくれって言っていたから、お先に失礼。
人外なスピードで学園の中に乱入し、目的の校舎へ向かって全速前進。
ハムスターの如く、チョロチョロダッシュでメモリーさんを探しまくる。
三階の廊下にて、それらしき人を発見するけど……。

状況が飲み込めない。
凍りつく皆の衆。
謎の黒スーツ達に両腕を押さえ込まれているメモリーさん。
そんなメモリーさんにキスをしているのは、お人形みたいな女の子。
メモリーさんは……硬直。
死後硬直じゃないよね？

とりあえず、メモリーさんに近づいて声を掛ける。

「生きてますか？」
「死にそうだよ！」

女の子から顔を逸らせて、メモリーさんが僕に向く。
そして、大声で僕に泣きつく。

「助けてよ、ハル！　もう、わけわかんない！」

メモリーさんに頼まれて、頷く僕。
メモリーさんを押さえ込む黒スーツ達を一発ノックで倒していく。
全部倒して、コンプリート。
唖然とする辺り一同。
僕が決めポーズをしていたら。
お人形みたいな女の子の後ろから、クールな男の子みたいな女の子が現れる。
その人も黒スーツ。
ラスボスかな？

そして、再度始まる戦い。
向こうも武器は使ってこない。
流石に学校内での使用は控えているのか？
しかし、なかなか強いじゃないか。
ちょっと余裕をかましていたら。お腹に一発、蹴りを食らう。

ぺぽっ！　と鳴いて、壁に飛んで行く僕。
クルリと反転、壁を蹴って、上手く着地。
僕がお腹を押さえていると、右から気配。
ヤバいと感じて、前に飛び出る。
蹴りが飛んできたけど、ギリギリ回避。

体勢を整えて、女の子に目を向けると。
女の子が指をクイクイ動かし、挑発してくる。
ムカッと苛立ち、女の子に言ってやる。

「今までは手を抜いていたのです。次は本気でいきますよ」
「フフッ……これで手を抜いていたの？　君は何者……？」
「その質問には答えられません。ですが、まぁ……人間ではないでしょうね」

そう言って、今まで制御していた魔力を解放。
身体中に魔力が駆け廻り、僕の姿が大人へと変貌。
まぁ、大人って言っても高校生だけど。
しかも、犬耳取れないし……。ちょっと期待していたのに。

僕を見て、仰天する観客達。
フフッ……何だか気分がいい。
女の子に指を差しながら。いい気になって、僕が言う。

「勝負再開です！　完全体の僕に勝てる人間など、この世にいま……」

言い終わる直前、誰かに後頭部を殴られる。
振りかえるとメモリーさん……。
何か……めちゃくちゃ不機嫌なのですけど。
メモリーさんが腕を組みながら、僕を睨みつけてくる。

「元に戻れるじゃない！　どうして黙っていたの？　それに、こんな所で戻らないでよ。話がややこしくなるじゃないか！　僕の世界では魔法なんてないんだから。もっと現実的な動きをして、目立たないようにしてくれないと困るんだよ。こんなのでニュースにでもなってみなよ。後が大変……」

うだうだうだうだ……お説教。

段々と涙目になってくる僕。
最後は魔力を再度制御して、子ども姿になる。
メモリーさんの足にしがみ付いて、本泣き。
小さくなりながら、ゴメンナサイを連呼する。

そうだよね……。
ここは別世界だものね。
その世界の常識に沿って生活しないといけないよね。
だけど、未来さんとか無茶苦茶していたよ。
あれはいいの？　駄目だよね？
何で僕にだけ注意するの？
まぁ、未来さんに注意したって。意味ないだろうから。
ある意味で、注意されるだけ。信頼されてるって事だよね？
だけど、凄く悔しい。
何か腹が立つ。
涙止まらない。

僕がしくしくと泣き続けていたら、急に身体が宙に浮く。
メモリーさんが僕を持ち上げたみたい。
メモリーさんの肩に担がれる僕。
そして、メモリーさんの声が聞こえてくる。

「今日の所は勘弁してやるけどな。次に会ったら、ぶっ殺してやるからな！　ちび助！」

口の悪いメモリーさんが反転して、走り出す。
僕の前にはたくさんの人。
だんだんと遠ざかる中、皆の様子を眺める僕。
ほとんどの人が目を丸くしながら、言葉を無くしている。
お人形みたいな女の子はこちらを見ながら嬉しそう。

その隣には、さっきバトルしていた女の子。
不意にその子が僕に手を振る。
思わず僕も振り返す。
次に会ったら、もう一度勝負したいな……。

校舎の外まで担がれて。その後、地面に下ろされる。
直後、メモリーさんが僕の頭をポンポンと撫でてくれる。
怒られてしょぼくれていた僕だけど、頭を撫でられると少し気分が楽になる。
そして、聞こえてくるのはメモリーさんの声。

「さぁ……帰ろうか」
「ん～……」
「どうしたの？　帰りたくないの？」
「メモリーさん……怒っていました？」
「うん、怒っていたけど。もう怒ってないよ。怒るのって体力いるから。まぁ、わかってくれたのなら、それでいいし……。それにしても、ハル……元の姿に戻れるのなら、そろそろ死神の世界に帰る？　皆が心配しているんじゃない？」
「ん～……まだ遊びたいです」
「別にいいけど。たまには帰らないと、世界には時間のズレがあるから。ここで一週間だけ過ごしたつもりでも、向こうでは一カ月経っていたなんてことはざらにあるよ。まぁ、逆もあるけどね。こっちで一カ月過ごしても、向こうでは一日も経っていないとか。とにかく、時間には気をつけてね」
「大丈夫です。僕らには寿命がありませんから」
「そう……。それなら、問題ないか」

もう一度、メモリーさんが僕の頭を撫でてくれる。
そしたら、何だか妙な安心感に包まれる。
ついでに甘えた症候群。
右手を延ばして、メモリーさんに言う。

「手を繋いで下さい。迷子になります」
「こんな所で迷子になるの？　方向音痴すぎるよ」

メモリーさんがヘラヘラ笑う。
笑いながら、手を繋いでくれる。
うーん、秋山さんが言っていた事もあながち間違いじゃないかも？

＞ｉ１４５０３―２３１＜

おしゃべり〈ハル編〉（前書き）

え？　何？　また挿絵、さぼってるの？
だって、お絵かき飽きちゃった（＾－＾）
駄目ですか？　駄目ですね。ん～。
次は頑張るから、許して……。

おしゃべり〈ハル編〉

青鶯学園の正門から、僕達が逃げ出そうとしていたら。急に声が聞こえてくる。
隣を向くと、半分の女の子。
手を振りながら、僕達に近づいてくる。

「皆、大丈夫だった？」
「えっと……日和？」メモリーさんが疑問文。
「うん、そう。この子……向こうの校舎裏にいたの。やっぱり半透明だったよ」
「僕はもう一人を見かけたよ。教室で授業を受けていたけど……。半透明じゃなかった。どういうこと？」
「そうね……。例えば、教室の中にこの子の存在を埋める何かがあったとか……」
「うーん……何だろう？」
「フフッ、案外に単純なものかも。私はわかっちゃったな」
「え？　何なの？」
「上野君、にぶ～い」

秋山さんがキャイキャイと楽しげにはしゃぎだす。
そのままメモリーさんの腕に抱きついて、口を開く。

「上野君、どうする？　このまま私達も授業受ける？」
「冗談じゃないよ。せっかく逃げてきた所なのに……。大体、僕は高校生じゃないし。大学生ですらないんだから」
「じゃあ、上野君は先生ね。上野君が先生か～……ちょっと見てみたいな」
「僕はパソコン専門だよ。勉強なんて教えられないし、むしろ教え

てもらわなきゃいけないくらい。日和が先生をしなよ。僕は遠くで見ているから」
「またそんな事を言う～。私だって教えられないよ。頭良くないもん」
「日和は頭いいよ……。僕なんて、教科書を開いたら三分で爆睡だよ。特に国語とか……」
「上野君って、文章が苦手だものね」

クスクスと笑う秋山さん。
メモリーさんはちょっと恥ずかしげに膨れている。
それで、どうするのかな？
僕が二人を見上げて問いかける。

「それで、本当に授業を受けるのですか？」
「ううん、帰るよ」

メモリーさんと秋山さんが二人同時に見事にハモる。
直後、二人で顔を合わせてケラケラと笑いだす。
凄いな、以心伝心だ。
不意に帰る雰囲気になり、二人がまたもやハモり出す。

「じゃあ、帰ろうか」

学校から少し離れて、騒ぎ出すのは秋山さん。
秋山さんが駄々をこねるようにメモリーさんに口を開く。

「お買い物したいなぁ～」
「買い物って……何買うの？」

「この子の服……一着だけじゃあ可哀そうだなぁ～」
「あぁ、別にいいけど。僕はそういうのよくわからないから、難しい事は聞かないでね」
「上野君が反応してくれるのは、水着選びの時だけだものね」
「え？　そうなのですか？」

急に口を挟むのは僕。
メモリーさんが大きく首を振りながら否定する。

「違う、違う！　僕はそんな事してないよ！」
「だけど、生前にそんな事あったもの。百貨店で私が服を選んでいた時に。上野君は、何でも『似合う』の一言で終わらせちゃって。本当に似合っているのかどうか、教えてくれなかったの。それで、ちゃんと見てくれているのか心配になっちゃって。夏場だったから、最後に水着を選ぶ事にしたのね。私が水着を試着したら。上野君は顔を真っ赤にして……。どう考えても、他の服選びとは反応が違ったのよ」
「あれは日和がめちゃくちゃいやらしい水着を選ぶからだよ！　大体、日和は身体が弱かったから。水着なんて買っても使わないのに……」
「だけど、上野君は私を止めなかったよ。使わない事を知っていたのに、買ってくれたよね」
「だって……日和が欲しいって……言うから」

メモリーさんの声がだんだんと小さくなっていき。
秋山さんがメモリーさんの顔を覗きこもうとする。
それに気づいて、メモリーさんが顔を赤らめながら、不満を言う。

「もう！　今の日和は優しくない！　昔の方が優しかった！」
「え～、そんなことないのにな。今も昔も変わらないよ」

「変わったよ。昔はそういう事言わなかったもの」
「うーん、それはね。上野君とずっとお喋りできなかったから。何だか色々と話したいの。今の私の事は……嫌い？」
「……」
秋山さんの言葉に黙り込むメモリーさん。
しばらくしてから、返事を返す。
「嫌いじゃないけど、好きでもない」
「えー！　上野君に嫌いって言われた！　じゃあ、私も上野君の事、嫌いになっちゃうよ」
「え……」
秋山さんの唐突な話に、メモリーさんが反応。
真顔で秋山さんに目を向ける。
秋山さんが首を傾げながら、口を開く。
「あれ？　冗談だよ、上野君。もしかして、本気だと思ったの？」
「あ……いや……。さっき、雫に会ってね。日和が今の僕を見たら幻滅する、って言われたから」
「へ～、雫ちゃんに会ったんだ。元気にしていた？」
「え？　うん、まぁ……。相変わらずだったね」
「そっか、そっか。だけど、そういう事を気にするってことは。上野進一は私の事が好きなのかー？」
「……」
ふざける秋山さんを見て、沈黙するメモリーさん。
どうするのかと思っていたら、最後は諦めて大きく頷きだす。
更に、大きな声で断言する。

「はいはいはいはい、好きですよ！　上野進一は秋山日和の事が大好きです！　好きで悪かったなー！」
「あはははははは」

秋山さんがお腹を抱えて大笑い。
続いて、口を開く。

「じゃあ、私も。秋山日和は上野進一の事が大好きなのだー！」

秋山さんが言って、二人で大笑い。
二人共、本当に好き合っているみたい。
二人を見ていると、何だかエアさんに会いたくなってくる。
元気にしているかな？
僕がなかなか帰らないから、心配しているかもしれない。

でも、まぁ……。
もう大人の姿に戻れるようになったから、やっと真面目にお付き合いできるし。
次に会ったら、何て声を掛けよう？
だけど、その前にこの犬耳どうしよう？
エアさんはネコ耳だから、ちょうどおそろい？
なんていうのはちょっとなぁ～……。

色々と悩む僕の横では、楽しげに話を進める二人。
秋山さんと一緒にいると、メモリーさん……凄く幸せそう。
正直言って、傍から見てると恥ずかしいくらい。
本人達は楽しいのだろうな。
恋ってそういうものだから……。

真面目に……〈メモリー編〉 ★

長い買い物を終えた後、ゲームセンターに寄ったり、レストランで食事をしたりして。
カラオケに寄ったら、もう夜中。
大荷物を抱えながら、何とか家に辿り着く。

ぐったりする僕とハルの前では、元気な日和。
日和が一番元気だなんて……何だか不思議な気分になる。
お風呂のお湯をいれに行く日和を眺めていたら、僕の足元で何かが動く。
下を見ると、ハル……。疲れ果てたのか、地面で丸まり爆睡だ。

ハルを抱きかかえて、ベッドに寝かせた後。
荷物の整理を始める僕。
これは日和ので、これはハルので、これが僕ので……。
僕が整理をしていたら、日和が現れて僕に言う。

「今日はありがとう。たくさん奢らせちゃったね」
「別にいいよ。僕も……楽しかったから」
「フフッ……私も凄く楽しかった」
「うん……」

不意に日和が真顔になる。
真剣な表情を浮かべながら、僕に囁く。

「ねぇ、聞いてくれる？」
「どうしたの？」
「あのね……上野君に心配を掛けるつもりじゃないけど。それでも、

聞いて欲しいことがあるの」
「……」

わかってる。
きっとあの事だろう。
僕が頷き、日和が話しだす。

「上野君……今は幸せ？」
「うん……」
「そう……。じゃあ……。もしも、次に……私がいなくなったら……」

日和がうつむき、僕から目を逸らす。
だけど、それでも続く言葉。

「上野君……ショックを受けて……」
「大丈夫だよ。わかってる」
「……ごめんね。でも、きっと……」
「言わないで。そんなことは聞きたくないよ」

いつの日か……日和は去っていく。
ううん、近くにいるのかもしれないけれど。
いずれは見えなくなる。
それはそうだろう。
日和の入れ物……安曇恵梨香が元に戻れば、日和には身体がない。

日和が不安げに僕を見て言う。

「私……心配だよ。上野君は一度落ち込むとなかなか立ち直れないから」

「大丈夫だよ。今もこうして生きているじゃない」
「生きている……今は。確かに今は生きているけど。ハル君が来る前の……ううん、もっと以前の生活は酷過ぎるよ。あんなの生きているなんて言わないもの。私……陰で見ていて辛かったよ。何度泣いたと思ってるの？」
「大袈裟だよ。僕は……別に普通の生活だと思っているし」
「……」

気まずい空気。
泣きそうな日和を目にして、この場から逃げ出したい気分。
何せ日和の言いたい事が……わからなくもないから。
今にして考えてみると……酷い生活をしていたかもしれない。
そんなことは言われなくても、僕が一番理解している……。

ちょっと不機嫌になる僕を見ながら、何も言わない日和。
何だか空気が重くなる。
どうしよう？
何とかして話を変えたい……。
僕がそんな事を考えていたら、急に日和が抱きついてくる。
目を丸くする僕に向かって、日和が言う。

「私……ずっとそばにいるからね。見えなくても……ずっといるんだよ」
「……うん」
「上野君は……一人じゃないの。だから……無茶しないで」
「うん……」

はぁ～、駄目だな。
日和に心配ばかりかけて。
これじゃあ、日和も成仏できないわけだ。

日和を抱きしめて、目を瞑る。
いつか消えてしまう大切な人。
出会った時から、始まる消失。
こんなにも離れたくないのにどうして……。

＞ｉ１４７１１―２３１＜

玄関で〈ハル編〉（前書き）

ちょこちょこと挿絵が抜けていますが。
決して、サボっているわけではありません。（言い訳）
ちょっと別編の話を考えていて、時間がないだけです。（言い訳）
……す、すみません。期待していた読者様に謝罪……。（謝罪文）

玄関で〈ハル編〉

目が覚めたら、お昼過ぎ。
昨日の記憶が途中で消えている。
えーっと、確か……マンションに帰ってきて……。
その後から、意識がプツリ。
僕……寝ちゃったのかな？

周りを見るけど、メモリーさんも秋山さんもいない。
どこに行ったのだろう？
立ち上がって、二人を探し始める僕。

玄関の前にて、二人を発見。
秋山さんは身体なし幽霊状態。
きっと入れ物……えーっと誰だったっけ？
安曇さんだった？
うん、確かそんな感じの名前だったよね？
その子の身体は学校へ行っているのだと思う。

じっとドアを見つめながら、黙っている二人。
何しているのだろう？
二人に近づいて問いかける。

「何をしているのですか？」
「わからないの」と秋山さん。
「……」

メモリーさんからは返事がない。
秋山さんがドアを見ながら、口を開く。

「上野君がずっとこうしているから、私もこうしているんだけど。かれこれ五時間は経過しているんだよね。どうしたんだろう？　上野君……」
「あの……メモリーさん、何をしているのですか？」
「……」

もう一度、メモリーさんに問いかけるけど反応なし。
じっとドアを睨みながら、口を開かない。
その様子を眺めていたら、不意に思う事。
僕も以前にこんな事していたよね。
まさかと思って聞いてみる。

「メモリーさん……まさかと思いますが。秋山さん待ちですか？」
「うん」普通に頷くメモリーさん。
「えぇー！？　私を待ってたのー！？　上野君、気が早過ぎるよ！」

騒ぎだすのは秋山さん。
そりゃ驚きだろう。
五時間も玄関の前で人を待つなんて。
犬の僕ですら、そんなに待っていなかったよ。
メモリーさん……ある意味で持久力あり過ぎ。
未だに座りこむメモリーさんに向いて、僕と秋山さんが説得だ。

「メモリーさん、他にするべきことがあるでしょ！？」
「上野君、お仕事は大丈夫なの！？　ご飯は！？　せめて昼食くらいは食べようよ！」
「ん～」

メモリーさんが生返事。

秋山さんの言葉は聞こえていなくても、僕の言葉は聞こえているはずなのに……。
そんな中、不意にチャイムの音が。
もちろん、反応するメモリーさん。
ちょっと嬉しげに立ち上がり、ドアを開くけど。
秋山さんの入れ物……安曇さんが自動的に帰ってくるわけない。
外から聞こえてきたのは、碌でもない声。

「わ、わ、わ、忘れ物～」

直後、メモリーさんがドアを閉める。
カギを掛けて、先程の定位置に座りこみ。
何事もなかったかのように口を開く。

「あ～、日和はまだかな？」
「あの～、メモリーさん。一言だけ言っていいですか？　秋山さん……ここにいますよ」と僕。
「え？　そうなの？　でも、見えないし。入れ物は自動的に帰ってこないのかな？」
「せめて授業が終わるまでは待ちましょうよ。ここで待つのではなくて。もう少し別の用事をしながら、待ちましょうよ」
「ん～。だけど、日和がいなくなって、どうも集中力がなくなって。仕事はする気がでないし、別にお腹はすいてないし。他にすることないし……」

メモリーさんが言い終わらないうちに、勝手にドアが開かれる。
入って来たのは、皆さんお忘れのＫＹさん。
ＫＹさんが怒鳴りだす。

「だからって、勝手にドアを閉めるなよ！　せっかく遊びに来たの

にまったくもう〜」

そして、続けざまに秋山さんを指差す。

「誰？　その青いけど美人のねーちゃん。どっかで見た事あるような……」

「秋山さんです。メモリーさんの彼女です。ただ……お亡くなりになっています」と僕。

「ヒッキーに彼女がいたのか。それ多分、脳内彼女だろ？　つーか、亡くなってるって……。見えるけど？」

「世界が違うから、見えるのだと思うよ」

秋山さんがＫＹさんに話しかける。

その後、ＫＹさんが眉をしかめながら真顔で言う。

「その理論でいくとヤバくね？　俺がこの世界を歩いたら、幽霊大量に見えるんだろ？　人口密度マックスじゃん。織田信長（おだのぶなが）さんに出会ったらどうしよう？　サインもらおうかな？」

ＫＹさんの言葉を聞いて、笑い転げる僕と秋山さん。

メモリーさんは首を傾げている。

秋山さんの言葉が聞こえない分、会話の内容も飛び飛びだから。

笑える所も笑えないらしい。

だけど、確かに……どうして秋山さんだけ見えるようになったのだろう？

僕が秋山さんに問いかける。

「だけど、どうして秋山さんだけなのですか？　ＫＹさんの言うように、他の幽霊が見えても不思議じゃないですよね？」

「うーん、どうしてかな？　もしかしたら、波長が合うのかも。私

は以前に『橋』をしていたから、他の世界と繋がっていたし。その関係かもしれないね」
「あー、成る程」

納得する僕達。
メモリーさんを見ると、話について行けず。
ちょっとつまらなさそうな顔している。
そんなメモリーさんを見て、ＫＹさんがいらない事を言う。

「どうした？　ヒッキー？　もしかして、お前……彼女見えないの？　可哀そうになぁ～。一人だけ置いてけぼりか。寂しい奴よのぅ～」

ＫＹさんが言った直後、メモリーさんがＫＹさんに殴りこもうとする。
すぐに僕が大人バージョン、メモリーさんを止めに掛る。
秋山さんはおろおろするばかり。

ギャーギャーと争う二人。
数分後に、大人しくなる。
ため息をつきながら、二人が同時に喋り出す。

「あー、疲れた」
「その台詞は僕が言いたいです」

続けざまに僕が言う。
そして、メモリーさんが立ち上がり。
やっとのことで玄関から移動する。
僕達も移動して、キッチンで始まるのはお喋り会。

お帰りなさい〈秋山編〉（前書き）

メモリー達が遊びに行ってから、帰ってくるまで。
二週間……っていうか、三週間は出かけてたんじゃないの？
イラストはないけど、更新しただけ偉いと思って下さいです。（^ー^）

それにしても、クロスワードがマジでやっかい。
誰だよ、八冊も買ってきた奴は？（^―^；）
三冊はメモリーにあげたから、後の三冊は江川先生にあげて。
ＫＹは二冊でいいわ。マジ十分ですから。

お帰りなさい〈秋山編〉

上野君とＫＹさんがお喋りをしていて。
ちょっとした事から、ＫＹさんの世界……『橋』で言えば、未来さんの世界ね。
そこへ遊びに行くという話になって。

私は幽霊だし、別世界へ移動するのは止めて。お留守番をする事に。
多分……私がついて行っても、向こうの世界への移動はできないから。
以前にも追い返された事があるし。
どうしても、セントラルまでたどり着けないの。
あの場所を通らない限り、他の世界へは移動できない。
実体のない私には、何か不都合があるのかな？

それでも、もちろん皆を止めずにお見送りする。
せっかく上野君がお散歩する気になったんだもの。
今のうちに、ちょっとは動いてもらわないと……。
最近の上野君は動かないから。
昔はチョロチョロ走り回っていたのにな。

私が行かない事を知り、一気にヤル気のなくなる上野君を無理矢理に連れて行くのはＫＹさん。
ハル君も二人に続いて、出て行った。
残った私はフワフワ漂って時間つぶし、暇だなぁ～。
でも、優しい上野君がテレビをつけて出て行ってくれたから。
そろそろ始まるドラマが楽しみ。
この間の続きはどうなるのかな？

ずっとテレビを眺め続けていたら、いつの間にか夕方。
あの子……橋の下に戻ってるかな？
テレビから目を放して、時計を見ると夕方の五時。
行ってみようか……？　どうせする事もないんだし……。

テレビを消す事も出来ないから、つけっ放しでマンションを飛び出る。
もちろん、扉なんて開けない。全部通り抜け。
だから、鍵の心配もしないで、橋の下へとまっしぐら。

橋の下に辿り着くと、あの女の子の姿が。
小さく丸まりながら、眠っているみたい……。
身体を見ると、やっぱり透けている。
まだ戻れそうにないのね。

寒そうだな……。
女の子に近づいて、頭に触れようとするけど。
私も別の意味で半分だから……。
スーッと通り抜けてしまう。
お互い半分者同士。
私が女の子の耳元で囁く。

「少し……身体を貸してね」

そのまま女の子の身体に入り込んで、また身体を借りる事に。
こういう事って、あまりしちゃいけないのだろうな……と思うけど。
それでも、やっぱり上野君とお喋りしたいから。

どうしても彼を……放っておけないの。

女の子の身体を借りて……。
さて、マンションに戻ろうかな？
でも、上野君達はまだ戻っていないし……。
うーん……。そうだ、迎えに行こう！

上野君はきっとあの道を通ってくるだろうから。
先に行ってお迎えしちゃおう。
どうせマンションへ行ったって、鍵がないから入れないし。
鼻歌を歌いながら、雑木林へと向かう私。
あ～ん、最近は凄く楽しくって、どうにかなっちゃいそうだな。

薄らと光が残る雑木林。
一人奥へと歩いて行くと、少し記憶が蘇る。
フフッ……懐かしい事を思い出して、思わずにやけちゃう。

ここで上野君に告白されたの。
それが、とても静かな告白で。
上野君も私も何も話さない。
言葉のない告白だったな。

そんな昔の事を思い出したら、居ても立っても居られなくて。
早く上野君に会いたい思いでいっぱいになる。
一人でキャーキャー騒いでいたら、近くの木が輝いて。
そこから出てきたのが上野君、続いてハル君も出てくる。

嬉しさ余って、上野君に飛びつく私。

上野君が驚きながら、口を開く。

「うわぁ！？　何！？　日和？」

「大当たり～」

「どうしたの？　もしかして、迎えに来てくれたの？」

「そうなの。上野君の顔を見たくて、堪らなかったから」

私の言葉を聞いて、上野君が顔を赤らめる。

その隣で、ハル君が私に言う。

「早く帰ろうって言ってるのに。メモリーさんがクロスワードにはまっちゃって。向こう時間で二週間以上も寛いでいました」

「クロスワード？　上野君、クロスワードにはまってるの？」

「うん……。これ、いくつか貰ってきちゃった。ＫＹが『数が多すぎて、もうムリンガー』だって」

上野君の手には紙袋。

中を覗くと、三冊もクロスワードの本が。

ＫＹさん……一体、何冊買ったのかな？

上野君が紙袋の中にある一冊を手に取り、開いてみせる。

「僕はこれを頑張ってるの。結構、できたよ。ほら」

「へ～。どんな感じかな？」

上野君の手元を覗き込んで、停止する私。

だって、上野君……凄く間違ってる。

変な言葉がいっぱい。

上野君は……国語とか苦手だったから。

言葉遊びが苦手なのかな？

新しい言葉を自分で作っちゃってる。

上野君が楽しげにページをめくりだす。

「ほら、ここもできた。これも。ね？」

笑顔満面で私にクロスワードを見せる上野君。
たくさん間違えているのに、ヘラッとした顔で楽しそう。
そんな上野君を見ていると、凄く可愛く思えてしまう。
上野君を抱きしめながら、私が騒ぎ出す。

「あーん。上野君、可愛い～」
「な、何が！？　どうしたの！？」
「メモリーさんの回答は子どもが見ても驚くほどに間違いが多いので。見る人の母性本能をくすぐるのですよ」

ハル君が上野君に向いて言う。
うん、本当にね。その通りよね。
間違いが多いと指摘されて、上野君が膨れだす。
拗ねる上野君のご機嫌を取りながら、マンションへと引き返す。
フフッ、今日の夕食はどうしようかな？

クロスワード〈ハル編〉　★（前書き）

久しぶりに絵を描いたら、画力が……。
それにしても、メモリーって何考えてるんだろう？
わけわからないですよねー。

クロスワード〈ハル編〉　★

秋山さんと出会い、メモリーさんの家に皆で帰る。
帰りがてらに、スーパーへ寄ってお買い物をして。
マンションへつくと、秋山さんが夕食作り。

夕食待ちの僕とメモリーさんは、キッチンの椅子に座って、個人でパズルを始める。
クロスワードのメモリーさんに対して、僕は例の箱。
メモリーさんから貰った、超難解パズル。
正直に言って、こっちの方がよっぽど難しい。
クロスワードどころじゃない。
まさに手のつけどころがわからないってこういう事。

僕がパズルにてこずっていたら、夕食が出来上がる。
今日のご飯はナポリタンスパゲッティ。
大喜びでパズルを放置する僕。
秋山さんが作ってくれたスパゲティに食らいつき、パズルの事など忘れてしまう。

メモリーさんを見ると、まだクロスワードをしている。
じっと考え込みながら、右手にはいつものボールペン。

＞ｉ１７２９３―２３１＜

っていうか、そのボールペン……そういう事に使用してもいいんだ。
世界を行き来するための『橋』だから、凄く厳かな物だと思っていた。

こうやって見ると、ただのボールペンだし。

それにしても、クロスワードをボールペンでするって強気だよね。僕なら絶対にシャーペンだ。

消すことができないボールペンだと、間違えた時の訂正が難しいから。

メモリーさんの場合は、字が汚い上に間違いだらけで。

もうわけわかんない事になっている。

子どもの落書きみたいなもの。

メモリーさんの回答を理解する事が、クロスワード以前の難問になっている。

秋山さんがメモリーさんの前に夕食を置いて、口を開く。

「上野君、ご飯できたよ」

「ん～」

「ほら、食べないの？」

「もうちょっと……」

止める気のないメモリーさん。

秋山さんが肩をすくめて僕に向く。

「上野君って、一つの事に集中しちゃうタイプなんだよね。こうなると、他の事なんてお構いなしになっちゃうの」

「何だかわかる気がします」

「食べ物でもそうだよ。好きな物を一つ見つけたら。さぁ、大変。毎日、それば かり食べ続けようとするの。一番困ったのがね。私達が学生だった頃の、夏休みの話で……。凄く暑い日があってね。その日を境に上野君の元気がどんどんなくなっていって……」

「毒キノコでも食べていたのですか？」

「ううん、そういうことはなかったんだけど……。異常な程にやつれていくから、私は無理なダイエットでも始めたのかと思って。上野君に、聞いてみたのね。そしたら、上野君……何て答えたと思う？」

「できた！　うん……今度は合ってる。よし、次は……」

僕が真面目に話を聞く中、急に声を出すのがメモリーさん。嬉しそうに、クロスワードの次のページを開けようとする。

秋山さんがそれに気づいて、メモリーさんからクロスワードを没収。目の前に夕食を置いてメモリーさんの頭を撫でると、メモリーさんがしぶしぶ夕食を食べ始める。まるで子どもみたい。

クロスワードをメモリーさんから離す秋山さんに僕が問いかける。

「それで、メモリーさんは何を食べていたのですか？」

「うん、それがね。何日か前に素麺を食べようとして……。それで、麺がなかったそうなの。だから、代わりに糸こんにゃくを湯がいて麺にしたのね。それが思った以上に美味しかったんだって」

「糸こんにゃく……ですか？　でも、こんにゃくって、カロリーが凄く低いのじゃあ……」

「うん、そうなの。ダイエット食には丁度いいけど……。それでも、毎日が糸こんにゃくだけって。いくらなんでもカロリーが低すぎるよ。あの頃の上野君はチョロチョロしていたから。エネルギーをよく使っていたんだろうね。だから、尚更……」

「別にいいじゃない。ちょっとくらい好きな物食べたって……」

メモリーさんが食事をしながら、口を挟む。

そんなメモリーさんに秋山さんが話しかける。

「よくないよ～。あの時、上野君……顔色悪かったよ。体調も悪そうだったし」
「だからって、その後……あんなに大量の料理を作られても、食べれないし。僕は『もういらない』っていうのに、日和ったら食べきれないくらいに食事を作るんだもの」
「だって、上野君が倒れる所を想像すると我慢できなくなって。たくさん食べささないといけないと思って。私、必死だったんだから」
「だけど……」
「ほら、上野君。夕食残したら、クロスワードは返さないよ。私が全部埋めてあげる」
「えー……」

残念そうな声を出すメモリーさんを眺めながら、秋山さんが微笑む。
その後、メモリーさんが素直に夕食の続きを食べる。
メモリーさんって、本当に秋山さんに弱いよね。

たまには仕事〈メモリー編〉（前書き）

なかなか時間が取れない。
時間がないと、挿絵を描けない。（^―^；）

たまには仕事〈メモリー編〉

夕食を食べて、三人で駄弁りながらクロスワードをする。
気が付けば、もう夜中。時間が経つのって、本当に早い。
ハルなんて既に寝ちゃってるもの。ハルって、いつも寝るの早いよね。
まだまだ遊び足りない僕に向いて、日和が言う。

「じゃあ、そろそろこの子を休ませてあげないと。一つの身体を二人で共有するのって、難しいよね。無茶をすると、身体が壊れてしまうから」
「まだ……大丈夫だよ。もう少しくらい徹夜したって……」
「駄目だよ。そんな事をして、この子が体調不良になると大変だもの」
「まぁ、そうだけど……」

面白くないな。もっと日和とお喋りしたいのに……。
僕の様子に気が付いて、日和が口を開く。

「大丈夫だよ、上野君。明日もあるんだから。それよりも、お仕事……サボりすぎじゃないかなぁ～？」
「仕事は……その……」
「遅れちゃったら、怒られるぞ～」
「んん……。だ、大丈夫だし……。今は調子いいもの……」
「本当かなぁ～？　頭を抱えて、『またエラーった！』って、叫んでいたのは誰だろう？」
「何でそんな事を知ってるのさぁ！？　仕事部屋には入らないでよ！」
「大声出しちゃ駄目だよ。ハル君も寝てるし、お隣さんに迷惑だか

ら」
「だって、日和が……」
「ほら、紅茶を入れてあげるから。お仕事を頑張ってね」
「……うん」

日和に見つめられて、思わず頷いてしまう。
ん～、今は仕事なんてしたくないのに。
紅茶をいれに行く日和。不意に振り返って、僕を見る。

「あ、そうだ。クロスワードで遊んでちゃ駄目だよ。じゃないと、ハル君と私が遊んでいる時に。上野君だけ、お仕事しなきゃいけなくなっちゃうからね」
「えー！」

日和に注意を受けて、仕事を開始する。
まったく乗り気になれなかったけれど、しばらくパソコンを眺めていたら。
何とか集中することができた。
と言っても、半分くらいは集中していないけれど。

少し仕事がはかどって、休憩を入れる。
ネットで面白いニュースがないか、確認。
ニュースなんて、まぁ、見ない方だけど。
稀に面白い事が乗っていたりするから。

じーっと眺めていたら、面白そうな話を発見。
解散したはずの大人気音楽グループ……。
そのリーダーが新しいグループを作ったらしい。

ライブの前売り券が完売だって。

へー……。

まぁ、ライブになんて興味はないけど。

新しい音楽を出すのなら、ちょっと期待。

結構、好きなグループだったから……。

そんな事を考えながら、他のニュースに目を向ける。

ムッ!?　嫌な奴が目に入る。

少し古い記事だけど……これが雫の言っていた……。

僕の目に入るのは、例の金持ちお嬢様……ちび助。

えー、なになに？

菊池財閥の一人娘が一般の公立高校に転入。そのわけは……。

長ったらしく書かれているけど、結論的にはわからないのか。

ただちび助が言うには『近いから』という事らしいけど……。

近いから？

何が？

まさか……僕の家？

いやいやいや、本気で止めてほしい。

正直に言って、マジで怖い。

恐怖のあまりに後ろを振り返る。

もちろん、誰も……いるわけない。

机の下とか、物の隙間に目を向ける。

探知機を使って、盗聴器を調べる。

だけど、見当たらない。うん、よし……。

……。

妙な恐怖心。

夜中に一人でこういう記事を読むんじゃなかった。

怖い話を聞くよりも怖い。

だって、凄くリアルな話だから……。

怖くなって、後ろを振り向く。

姿は見えないけど……日和はいるのかな？

「日和……」

返事は返ってこなくて、無音が続く。

それでも少し安心感。

きっと日和は近くに居るから……。

胸を撫で下ろしながら、一人で呟く。

「はぁ……まったく困るよね。日和はどう思う？」

不思議箱の中身は？　〈ハル編〉　★

朝起きて、伸びをして、欠伸をして。
二度寝しようと思ったら、人の声が聞こえてくる。

「ハル君」
「うみゃ？」

身体を起こして、振り返ると秋山さん……幽霊バージョン。
秋山さんが僕に言う。

「もう一度、お昼寝する前にお願いがあるのだけど……」
「何ですか……？」
「上野君がね。お仕事の部屋で寝ちゃったの。あのままだと風邪を引いちゃうから、毛布をかぶせてあげて欲しいの。いいかな？」
「はい……」

寝ぼけ眼で頷いて、毛布を持ってパソコンルームに向かう。
中に入ると、メモリーさんの後ろ姿が目に入る。
椅子に座って、机にうつ伏せ。
眠っているみたいだ。

近づいて行って、毛布をかぶせようとする僕。
不意にメモリーさんの身体が動く。
あらら、起こしちゃったみたい。
僕に振り向き、メモリーさんが口を開く。

＞ｉ１７４３７―２３１＜

「あぁ……ハル。ありがとう……」
「起きたのなら、向こうで寝た方がいいですよ」
「うん……そうするよ。もう……眠くて。あぁ、そうそう……。日和が朝食を作ってくれたから。キッチンにあるよ……。僕は……ちょっと寝るから。ご飯は全部食べていいからね」
「はい、ありがとうございます」

お礼を言う僕の頭を撫でて、メモリーさんが立ち上がる。
毛布をはおったまま、パソコンルームから出て行く。
ベッドで眠るみたい。
僕も続いて、外に出て。
二度寝をする前に、キッチンへ向かう。

わー！　豪華な食事がいっぱいだ。
急に目が覚めてきて、ご飯をよそって……。

「頂きます！」
「はい、どうぞ。ハル君、さっきはありがとう。たくさん作ったから、たくさん食べてね」

返事を返してくれるのは秋山さん。
メモリーさんはベッドに行って、眠っちゃった。
秋山さんに僕が顔を向ける。

「でも、メモリーさん……起きちゃいましたね」
「フフッ、そのほうがいいよ。お仕事の部屋で寝ると、いつも体調を崩すから。できれば、ベッドで眠って欲しかったし」
「メモリーさんは……ずっと起きていたのですか？」
「うん、お仕事ね。しっかり頑張っていたのよ」
「流石、お父さんです」

「フフッ、そうね。お父さんは頑張り屋さんね」

冗談を言う僕に乗って、秋山さんが答えてくれる。

秋山さん……何だか嬉しそう。

僕も何だか嬉しい。

本当にそうならよかったのにな。

秋山さんも生きていて……。

こんな家族って。結構、理想だったりする。

ご飯を食べた後、テレビを見ながらパズルを解く。

秋山さんはテレビに夢中。

僕はどちらかと言えば、パズルに夢中。

テレビも見ているけど、ほとんど音だけ聞いている感じ。

目はパズルに向いている。

ちょっと動く所を見つけて、調子がいいから。

まさか、こんな所が動くなんて……。こっちはどうだろう？

僕がカチカチしていたら、秋山さんがテレビを見終わる。

そして、残念そうに口を開いた。

「あ～ん、続きが気になるな。どうしてこんなに気になる所で次回予告が流れるの？　もっと続きが見たいのに～」

「テレビ局の作戦ですね。微妙な所で終わらせて、次回も見てもらおう大作戦です」

「どうせ見るんだから、連続で放送してくれたらいいのにな……」

秋山さんが物足りなさそうにテレビを見つめる。

そんな秋山さんに僕が言う。

「ママ～。このパズル難しいよ～。答え教えて」
「もう～、ハル君ったら、可愛い事を言って。そんな事を言われたら、ついつい教えたくなっちゃうね。だけど、教えちゃったら、パパがまた拗ねるから。ここは我慢して、ハル君が一人で頑張ってね」
「ん～。そういえば、秋山さんはこのパズルの答えを知っていますか？」
「もちろん。だって、私は上野君とずっと一緒にいるもの。フフッ……中身だって知ってるよ」
「答えはいらないので、中身だけ教えて下さい」
「だ～め」
「え～。どうして教えてくれないのですか？」

残念そうな顔をしながら、秋山さんに目を向ける僕。
そんな僕を見ながら、秋山さんが優しく微笑む。

「それはね。凄く大切な物だから。私が口にするには……少し重いな」
「何なのです？　気になります」
「具体的な説明はできないけど……。そうね、一言で説明するなら。その箱の中には上野君の気持ちが入っているの。本当に大切な物だよ。その箱を貰ったハル君は、上野君に信頼されているのね。だから、一人で頑張って」
「……はい」

頷いて、またパズルをカチカチ動かす。
メモリーさんの気持ちって何だろう？
わからないけど、この箱が凄く重要な物だという事はわかった。
秋山さんが言うのだから……そうなのだろう。
僕はメモリーさんに信頼されているのか。

それなら、裏切る事はできないな。

そろそろズルをしたくなってきた気持ちがスッと治まる。

これればかりは真面目に解かないと……。

ズルをしたら、何か大切な物が壊れてしまう気がするから。

ライブチケット〈ハル編〉　★（前書き）

うわぁ～、フラグが立った。
このフラグをつぶせるのは、懐かしのニートだろうが。
あの人がせっかくの展開をつぶすわけがない。
一人で本を読みながら、「頑張れ、メモリー」とか言ってそう。

ライブチケット〈ハル編〉　★

ゴロゴロと遊んでいたら、夕方になる。
そして、鳴り響くのはチャイムの嵐。
またＫＹさんだなと思い、玄関を開けに行く。
だけど、出てきたのは別の人。
その人が口を開く。

「こんにちは、進一お兄ちゃんはいますか？」
「えーっと……」

戸惑う僕。
僕の後ろで秋山さんが驚きの声を上げる。

「雫ちゃん！？　どうしたの？　上野君に用事？」
「えーっと……」

未だに戸惑う僕。
えーっと、何？
どうしたらいいの？
僕が秋山さんを見ると、秋山さんが僕に言う。

「こんな所で立ち話も寒いから、お部屋の中に入れてあげて。この子はね、北原雫と言って、私のいとこなの。昔はこんなに小さくて、可愛かったのよ～。今ももちろん可愛いけれど。背も伸びて、大人になったね～」
「えーっと、とにかく中へどうぞ」

昔を振り返り、懐かしむ秋山さんの言うとおり。

北原さんを部屋に入れる。
メモリーさんはまだ寝てる。
さぁ、どうしよう？
とりあえず、お茶をいれる？

キッチンの椅子を進めて、お茶をいれて。
メモリーさんを起こしに行く。
えーっと、メモリーさんって呼んでもいいのかな？
知り合いの前で、こんなあだ名を使われたら、ちょっと嫌だよね。
上野さんの方がいい？
でも、僕……子どもだし。
考えた末に、僕がメモリーさんを揺さぶり起こす。

「パパ、起きて。お友達だよ。ねぇ、パパ」
「ん～……？　眠い……」
「パパ！　お友達が遊びに来てるよ！」

メモリーさんの上でピョンピョンと飛び跳ねる僕。
流石のメモリーさんも飛び起きる。

「な……何なの？　ハル？」
「パパ、お友達が遊びに来てるよ。北原さんだって……」
「雫が……？　っていうか、パパって何？」
「お父さんのほうがいいですか？」
「いや……どっちも止めてよ。年を感じるから」
「ん～」

つまらなそうな顔をする僕を放って、メモリーさんが立ち上がる。
寝ぼけ眼で、キッチンへと歩いて行く。
もちろん、僕もついて行って。

メモリーさんにもお茶をいれる。
自分の分もいれて、準備満タン。
皆で椅子に座って、お喋りを始める。

部屋の中を見まわしながら、北原さんが口を開く。

「進兄、めっちゃ良い部屋に住んでるじゃん。雫の家より豪華だし」
「そう？　ずっと住んでいたら、わからないや」寝むそうなメモリーさんが答える。
「そういえば、その子は誰？」

続いて、北原さんが僕を指差す。
メモリーさんが答えようとするのを遮るように、僕がメモリーさんに振り向く。

「パパ。この人、だぁれ？」
「パパ……って、進兄に子どもいたの!?」仰天する北原さん。
「違う、違う。この子は、ただの友達」

思いっきり、首を横に振るメモリーさん。
何だか悔しくて、僕はそのまま演技を続ける。

「パパ～。今日のご飯は何？」
「相手は誰？　もしかして、新しい人いるの？」と北原さん。
「日和ママ」
「えぇー!?」

僕が言ったら、北原さんが大声を出す。
それを見て、メモリーさんがため息だ。

「冷静になってみてよ。ありえないじゃない」
「そっか～、日和お姉ちゃんと進兄の子どもかぁ～。頭が良さそうなのは、日和お姉ちゃんの遺伝かな？」
「雫……そろそろ、その冗談止めてくれない？」
「そういえばさぁ、学校でいきなり大きくなったじゃん。あのマジックの種明かしは？　後、子どもなのに凄いバトルしてたじゃん。あれって、何か習ってるの？」

北原さんがコロッと話を変えてきた。
メモリーさんはもう答えるのも疲れたみたい。
寝ているところを叩き起こされた上に、大量質問をされても。
答える気になれないのだろう。
代わりに答えるのは僕。

「僕、超能力者なのー。だから、いろんな事ができるの」
「超能力者!?　へー、すごーい！　あ！　そういえば、日和お姉ちゃんにもそういう気はあったよね。日和お姉ちゃんの遺伝が強いなぁ～。ところで、名前は？」
「ハル！」
「ハル君だね～。私は雫。よろしくね～」
「うん、よろしく」

二パッと笑って、愛想を振る。
そんな僕を見ながら、北原さんが僕に言う。

「じゃあさぁ、次は超能力で大きくなってみて」
「はーい」

元気よく返事をして、大人バージョンに変身！
キャーキャーと驚き騒ぐ北原さん。

メモリーさんが僕に向く。

「ちょっともう……わけのわからない事しないでよ」
「ごめんなさい、お父さん。やり過ぎましたか？」
「口調は成長したけど、内容は成長してないよね。僕の呼び方……何とかならないの？」
「パパのままがいいですか？　それとも、父さんにします？」
「もう……好きにして」

＞ｉ１７５４９―２３１＜

メモリーさんが諦める。
その隣では、秋山さんがハイテンション。

「大人の時はお父さんで、子どもの時はパパにしましょ。じゃあ、私はお母さんでママか～。あ～ん、夢みたいね」

僕が秋山さんの言葉に頷いていると、北原さんがまたもや話を変えてくる。
本当に話がポンポンと飛ぶ人だな。そう思いながら、北原さんの話を耳にする。

「そういえばさぁ、超レアな物を手に入れたから。二人にもあげようと思って」
「超レアな物？」

北原さんの言葉に興味をそそられるメモリーさん。
北原さんがニヤリと笑う。

「何だと思う？」

「何だろう？　レアって言えば、手に入りにくい物だよね？」
「うん、すっごくレアな物。なーんと、雫は手に入れましたよ～。この……」

北原さんが颯爽と取り出したのは、何かのチケット。
それを僕らに見せながら、自慢げに口を開く。

「今度行われるライブのチケット！」
「ライブ？　何の？」首を傾げるメモリーさん。
「ライブって言えば、リョウのライブでしょ！」
「リョウ……って。まさか……Ｒｅａｌｉｇｈｔ（リアライト）のリョウ？」
「そう！　超レアでしょ？」
「超レアっていうか……。え？　マジで？」
「マジだよ、マジ。嘘だと思うのなら、これ見てよ」

北原さんからチケットを受け取り確認するメモリーさん。
Ｒｅａｌｉｇｈｔって何？　音楽のチーム名？
僕が首を傾げていたら、秋山さんが教えてくれる。

「Ｒｅａｌｉｇｈｔは……音楽のグループ名ね。凄く人気のあるグループだったの。だけど、解散しちゃって……。リョウというのは、そのグループのリーダーをしていた人だよ」
「解散したのに、ライブですか？」
「新しいメンバーで再結成したみたいね。上野君が見ていたパソコンのニュース……。私も後ろから覗いていて、そこに載っていたの」
「へー、そうなのですか」

僕と秋山さんが喋っていたら、メモリーさんの嬉しそうな声が聞こえてくる。

「凄い！　本物だ！　え？　何、これ？　僕らの分もチケットあるの？」
「うん。ちゃんと三枚、手に入れてきたよ～。苦労したんだから～」
「うわぁ～。ありがとう、雫！　流石、雫だ！　こんなレアな物をどうやって手に入れたの？」
「フフフッ、それは秘密～」
「え～、気になるなぁ……。だけど、まぁ、いいや。やったー！　これは行かなくちゃ！　水曜日の午後六時からか……。全然問題ないよ。うわぁ～、楽しみ」
「じゃあ、チケットは進兄に預けておくから。雫と一緒に行こうね」
「うん、わかった。大切に預かっておくよ」

メモリーさんがチケットを手に取り、財布の中へと仕舞いだす。
それを見て、北原さんの目が光る。
ムムッ！？　あの視線は……狙われていますよ、メモリーさん！
僕の思惑通り、北原さんが猫なで声を出し始める。

「と～ころ～でさぁ～。進兄～」
「何？」
「雫、今月厳しくて……。お小遣いがね～、少ないんだなぁ～」
「へ～、いつも通りだね」
「進兄、お小遣い頂戴！」
「言うと思った。いつも僕から巻き上げて……。他に巻き上げる人いないの？」
「進兄が一番大金くれるんだよ～」
「借金取りより酷いよね。本当、雫はお金が掛るなぁ～」
「せっかくチケットあげたのに～。文句言うの～」
「まぁ、今回は珍しくただじゃないし。文句もそれくらいにしておくよ。はい、お小遣い」
「やったぁー！　久しぶりに見る万札。ラッキー！　ありがとう、

進兄！」
「どういたしまして。そうそう、ライブの待ち合わせは何時にするの？」
「えっと……学校が終わってから。雫が電話するから、携帯の電話番号教えて」
「うん、わかった。ついでにそっちの電話番号も教えて、後アドレスも」
「はーい、わかったよ～」

メモリーさんと北原さんが携帯をいじり初める。
暇な僕は秋山さんに囁く。

「二人共、何だか楽しそうですね」
「フフッ……何だかんだ言って、二人は仲がいいから。よく三人で遊びに行ったりしたもの」

楽しげな秋山さん。
メモリーさんが楽しそうにしていたら、秋山さんも楽しそう。
不意に北原さんが携帯を仕舞って、立ち上がる。
僕らに向いて、笑顔を見せる。

「じゃあ、そういうことだから。雫はそろそろ帰らなきゃ」
「うん、気をつけてね」とメモリーさん。
「それでは、またライブの日にお会いしましょう」

僕が言うと、北原さんが手を上げる。

「水曜日だね～。忘れないでよ～。雫が電話しても、出ないとか。そんな事になったら、雫は打ち切れだからね～」
「もちろん、忘れないよ。大丈夫、心配しないで」

「じゃあね～」

メモリーさんが答えて、北原さんが立ち去る。

玄関の扉を開けて、出て行った。

メモリーさんが凄く嬉しそうな顔をしながら、僕に振り向く。

「楽しみだね。新しいメンバーって、誰だろう？　新曲とか発表するのかな？」

家族計画〈ハル編〉　★（前書き）

ハル……言葉遣いまで変わってきた。
もう馴れ馴れしさが凄い。
メモリー……どんどん洗脳されてるなぁ～。

北原さんが家に帰り、秋山さんが例の女の子の身体を取りに行く。
しばらく経って、チャイムの音が……。
秋山さん……本体ありバージョンの登場。

メモリーさんが大喜びで、秋山さんに報告する。
さっきのライブチケットを見せながら、秋山さんに口を開く。

「日和～、雫がライブのチケットをくれたの。凄いレアな奴。みてみて～」
「すご～い！　Ｒｅａｌｉｇｈｔのライブチケットだね！」

驚く振りをする秋山さん。
だけど、本当は秋山さん……既にチケットの話は知っている。
だって、メモリーさんがチケットを貰うシーン。僕と一緒に見ていたもの。
それを知らないのはメモリーさんだけ。
でも、冷静になって考えたら、わかると思うのだけど……。
そんな事を考えながら、黙っている僕。
水をさすのは止めよう。
今のメモリーさんはとても幸せそうだから。

不意に浮かれるメモリーさんの顔に影が差す。
思い悩みながら、ちょっと落ち込み気味に話し出す。

「そういえば……日和とは一緒に行けないんだね。雫もいるし、チケットもないし。その上、その子……雫の友達みたいだから」
「私は構わないよ。幽霊姿で、参加するつもりだもの。ずっと上野

君の側に居るから、安心してね」
「……うん。後で……ライブが終わってから、お話しようね」
「フフッ……そうね」

秋山さんが微笑むと、メモリーさんの顔が赤くなる。
手遊びしながら、へにゃってる。
秋山さんとメモリーさんがお互いに顔を合わせて、笑顔で楽しそう。
そんな二人にそろそろ僕が口を出す。

「お母さん、お腹空いたー」
「はいはい、すぐにご飯を作るからね。お父さんはどうする？　一緒にご飯食べる？」

秋山さんがメモリーさんに顔を向ける。
僕らの会話を聞いて、メモリーさんが赤面。
顔を真っ赤にしながら、耳を押さえて、騒ぎ出す。

「ちょっと止めてよ、二人共ー！　そういう事をされると、洗脳されるじゃん！」
「お父さんもご飯食べるって。じゃあ、僕はお風呂のお湯をいれてくるね」
「ありがとう、ハル君。じゃあ、私は夕食を作るから。今日は何にしようかな？」

メモリーさんを完璧無視する僕達。
メモリーさんは未だに一人で騒ぎ散らかしている。
面白いし、嬉しいし、楽しいから。このまま家族計画を立てる僕。

僕がお風呂のボタンを押して帰ってくると、メモリーさんが秋山さんのお手伝いをしていた。

ちょっと恥ずかしそうな顔をしながらも、積極的にお手伝い。
僕が近づき、メモリーさんに言う。

「これが世に言うカジメンって奴ですね」
「ほら、ハルも手伝うの」
「はい。お父さんを見習って頑張ります」
「……」

メモリーさんの動きが止まる。
また注意をされるかと思っていたら、メモリーさんが吹っ切れた。

「もう……わかったから。ハルは鍋を用意して。今日はすき焼きだよ」
「すき焼き！　わーい！　パパ、大好きー！」

子どもになって大喜びする。
僕が走り回っていたら、メモリーさんに注意を受ける。

「ちょっと、走り回らないの。ほら、鍋を用意して」
「はーい！」

お鍋を用意しながら考える。
僕が子ども姿なら、メモリーさん……。
カジメンに次いで、イクメンもプラスされるな。
超現代お父さんだ！
フフッ、自慢のお父さん。
何だか凄く嬉しくなってきた。

＞ｉ１７５７７―２３１＜

家族を知って〈秋山編〉（前書き）

秋山さん……しっかりしすぎて、何ていうか。
二児の母みたい。メモリーは秋山さんの母親的なところに惚れたのか？
ただ、ちょっと心配症すぎるかもしれないけど。

家族を知って〈秋山編〉

皆ですき焼きを食べた後、洗い物をする私。
上野君とハル君はソファーに座りながら、アニメを見ている。
あの二人を見ていると、本当に……親子に見えるな。
フフッ、仲良し親子ね。

当初はハル君の事を鬱陶しがっていた上野君だけど。
今では居ても当たり前みたいに思っているようだし。
それにしても、ハル君が来てくれて本当に良かった。
こんなに楽しそうにしている上野君……長らくは見ていなかったから。

私が現れる事ができたのも原因の一つだろうけど。
きっとそれだけじゃないと思う。
ハル君が来てから、上野君の様子が少しずつ変わってきているもの。

紅茶とお菓子を用意して、二人の元へと運ぶ。
机の上に置いて、二人に言う。

「はい、食後のオヤツね」
「ママ、ありがとー」幼いハル君が笑顔で言う。
「どういたしまして」

私が言って、ハル君に紅茶を手渡す。
ハル君は紅茶を受け取ると、それを飲みながらテレビに目を向ける。
今は面白い場面みたいね。
だって、ハル君が必死にテレビを見ているから。
こうやって見ていると、今のハル君は子どもにしか見えないな。

続いて、上野君に話しかける。
「はい、パパの分はこれね。少し氷が溶けてからの方が熱くないかも」
「……」
ボーっとする上野君。
テレビの方を見ているけど、あまり目に入っていないみたい。
何だか……様子が変だな。
もう一度、上野君に話しかける。
「上野君、大丈夫？」
「……え？　あぁ……何？」
「紅茶をいれたの。これ、上野君の分……」
「あ……うん。ありがとう……」
上野君が頷いて、紅茶を受け取る。
不意にハル君が上野君に言う。
「ねぇ、パパ。パパの分もお菓子貰っていい？」
「……」
「あれ？　パパ？」
「え？　うん……、いいよ。好きなだけ食べて……」
「ワーイ、ありがとう！」
ハル君が楽しげに、上野君のお菓子を食べ始める。
食欲旺盛ね。育ち盛りかな？
なんて事を考えていたら、急に上野君が立ち上がりだす。
私が声を掛けるまでもなく、足早にお仕事の部屋に入って行く。
やっぱり……様子がおかしい。

テレビに夢中なハル君を置いて、私も上野君の後に続く。
お仕事の部屋の扉をノック。
だけど、返事が返ってこない。
流石に放っておくのも心配だから、ゆっくりノブを回してみる。
顔を覗かせて、声を掛ける。

「入っていいかな？」

目に映るのは、上野君の後ろ姿。
私の声は聞こえているはず……。
返答がないので、そっと部屋に入って扉を閉める。
そして、上野君に話しかける。

「どうしたの？　気分でも悪いの？」

後ろ姿のまま、上野君が首を横に振る。
そんな上野君に近づいて、顔を覗き込む。
上野君の様子を目にして、思わず口を開く。

「上野君……泣いてるの？」

目から涙を流す上野君。涙で顔が赤くなっている。
うろたえながら涙をぬぐう上野君に、私が優しく声を掛ける。

「少し……座ろうか？　ちょっと落ち着いてから、お話してくれる？」

上野君が頷いて、二人で床に座り込む。
私が上野君の背中をさすっていると、上野君が唇を動かす。

「ふ、二人が……変な親子ごっこを始めて……」
「うん……。それで？」
「僕も釣られて……父親役をして……」
「うん、うん」
「テレビを見ながら……その事を考えていたら……。何だか……わからないけど……。涙が出てきて……。どうしても……止まらなくて……」
「うん、うん……。そっか……」

話を区切ってから、深呼吸をして。上野君が口を開く。

「へ、変だよね……。僕……どうしたんだろう？」
「そうね……。あくまで私の考えだけど……言っていいかな？」
「……うん」

上野君がゆっくりと頷いて、返事をする。
私も同じように頷いて、ゆっくりと話し出す。

「上野君が子どもの頃……。上野君の家は荒れていたって、前にお話してくれたよね？　だから、きっと……今の家族ごっこにショックを受けたんだよ。あまりにもギャップが大きかったんだね。だけど……、本来の家族はこういうものなんだよ。皆で助け合って、生活するの……」
「……うん。……そうなの？」

首を傾げる上野君、私の胸に過る不安。
もしかして、上野君……家族がどういうものだか、わかってない？
急に心配になってきて、上野君の肩を掴んで捲し立てる。

「上野君、あのね！　家族って言うのはね、本来は仲良くしなきゃいけないものなんだよ。子どもがご飯を食べるのが遅いからって、食事を出さないとか。子どもが足音を立てただけで怒鳴るとか。子どもがお皿を一枚割っただけで、丸一日も真冬のベランダに放置するとか。そういう事は、絶対にしちゃいけないの。わかるよね！？」
「う……うん。だ、大丈夫だよ……。それくらいは……わかってるつもり」
「子どもが危険な事をしたら、怒る事はあるかもしれないけれど。上野君がされていたのは、躾(しつけ)じゃなくて、虐待だから。絶対にしちゃいけないんだよ。絶対に真似しちゃ駄目だからね」
「う……うん」

私の形相に上野君が怯え出す。
涙は止まったみたいだけど、顔色は良くない。
だって、私が凄く真顔で捲し立てたから。
でも、大丈夫……。上野君なら、大丈夫……。

そう言いながらも、上野君に手を伸ばして。ギュッと抱きしめる。
すると上野君も私を抱きしめてくれる。
やっぱり上野君を置いて行くのは……心配だな。
それはちゃんとした親になれるかどうかが心配なのじゃなくて。
私が去った後に、上野君が立ち直れるかどうかが心配。
ハル君がいるから、少しは気が楽なのだけど。
それでも、いつか来る……別れが不安……。凄く不安……。

私達が抱きしめ合っていたら、不意にハル君がやってくる。
扉を開けて、私達の方を見て少し沈黙。
その後、おもむろに口を開く。

「次は妹がいいなー」

「へ、変な事を言わないでよ！　ハル！」

上野君が私から手を放して、ハル君とお喋りを始める。

元気になったみたい。うん……もう大丈夫。

頑張ってるから〈メモリー編〉　☆☆☆☆（前書き）

ブライトハートさんから、たくさんイラストを頂きました。
ハルとメモリーと……懐かしのライさんです！
何か可愛いのがたくさん＾ｍ＾
特にハルが気に入りました。凄く可愛らしいです（＾ー＾）
色まで塗ってくださって……。
わーい＼（＾ｏ＾）／と大喜びしていました。（自分が）

頑張ってるから〈メモリー編〉　☆☆☆☆

三人でお喋りをしたり、遊んだりしているうちに、もう夜中。
楽しい時間はすぐに流れる。
本当に……瞬く間だ。

テレビを見ながら、ソファーに座る僕の隣には日和。
ハルは日和の膝上で眠っている。
もう疲れてしまったみたい。
そんなハルの頭を撫でながら、日和が口を開く。

「もうこんな時間……。早いなぁ～」
「本当にね。全然満足しないや」
「フフッ……。上野君なら、三日間くらい徹夜で遊んでも平気かもしれないね」
「ムリムリ、流石にできないよ。昔なら、できたかも。バイトの掛け持ちで、睡眠時間なんてほとんどなかったから。まぁ、授業は寝ていたけど……。あの頃は、ある意味で今より真面目だったなぁ～。いつからこんなぐうたら生活になったんだろう？」

僕が言ったら、日和が僕に振り向く。
僕の頭に手を伸ばして、優しく撫でてくれる。

「きっと生活に余裕ができたからね。悪い事じゃないよ。一生懸命に頑張った上野君に、恩恵が返って来たの」
「……」

恩恵かぁ……。
まぁ、それなりに努力はしてきたと思うけど……。

何となく甘えた心が出てきて、日和にすり寄り口を開く。

「そうだよね～。僕、頑張ってるよね～」
「う～ん？　上野君、猫なで声だぞ～。どうしたのかな～？」
「頑張っている僕に……日和もご褒美くれない？」
「私にできる事なら、考えてあげてもいいかなぁ～」

今の日和にできる事……。
本物の身体がなくても十分だ。
僕がしてほしい事は、些細な事だから。
とてもくだらない事。
一緒に食事をしたり、遊びに行ったり。
それだけで、十分に満足できる。
僕が日和に話し出す。

「あのさぁ～、次の日曜日とか……。もしも、都合がつくようなら、二人でデートしない？」
「あ～ん、デートのお誘いかぁ～。フフッ、私はもちろん。オーケーだよ。だけど、ハル君はどうするの？」
「ハルはお留守番。中身は高校生だから、大丈夫だよ。それより、どこに行く？　遊園地がいい？　それとも、映画館？」
「遊園地に行きたいな。絶叫マシーンとかに乗ってみたいの。生前は身体が弱かったから、そういう物には乗れなかったし……。後、お化け屋敷とかにも入りたいな。何だか楽しそうだもの」

うーん……僕の苦手な物ばかり。
でも、いいや。
死んでしまった日和とデートができるだけでも、とても幸せ。
すぐに頷いて、僕が言う。

「うん。じゃあ、後で調べておくよ。泊まりは無理だから、日帰りで……」
「楽しみだなぁ～。上野君とデート」
「フフッ、僕も楽しみ」

浮かれる僕達の下から、不意に声が聞こえてくる。

「僕も行きたいのー」
「うわぁ!?　ハル!?　起きてたの!?　いつから!?」
「パパがママにメロメロ光線を出している所くらいから」

ハルの言葉を聞いて、顔を赤らめる僕。
恥ずかしい所を見られたみたい……。
僕が言葉を無くしていると、日和がハルに口を開く。

「ハル君は一人でお留守番できないかな?」
「できなーい。パパとママと一緒に遊園地に行きたーい」

可愛い声で日和に駄々をこねるハル。
中身は高校生。
こんな姿で、こんな声を出していても、中身は高校生。
こんなのが付いてきたら、日和とイチャイチャできない……。
まるで雫とレベルが一緒だ。
僕が膨れていたら、日和が僕に顔を向ける。

「上野君、どうする?　ハル君にばれちゃったね」
「うーん……仕方ないなぁ……。雫が付いてきたと思って、我慢するか……。はぁ……」
「パパ、大丈夫だよ。僕は目を瞑っているから。ママとたくさんイチャイチャしてね」

「できるわけないでしょ？」

僕が不満げにハルを小突く。
ゆるく小突いたのに、急にハルが泣き出した。
泣き出したっていうか、泣く振りだろう……。
そのまま日和にしがみ付く。

「わーん！　パパに殴られたー！　ママー！　パパが苛めるよぉ～」
「よしよし、ハル君。いい子だから、泣きやもうね」

……。超気に入らない！
ハルの行動に苛立ちを感じる。
そんな僕の様子を見て、日和が口を開く。

「あら、パパまで泣きそうな顔をして。皆、泣き虫さんばかりね。
ほら、パパも慰めてあげる」

日和が僕に手を伸ばして、抱きしめてくれる。
すると、僕の苛立ちも吹っ飛んで、うっとり気分に目を瞑る。
僕が日和を抱きしめていたら、下から聞こえてくる子犬の鳴き声。

「あ～……ママをパパに取られちゃった。やっぱり二人はラブラブなの～」

＞ｉ１７８４６―２３１＜

＞ｉ１７８４７―２３１＜

＞ｉ１７８４８―２３１＜

>i17849—231<

ライブ当日〈メモリー編〉　★（前書き）

メモリーがどんどん過保護になっていく。
それに釣られて、ハルがどんどん幼児化していく。
二人共に依存症にならないように気を付けてほしいと思います。（^―^；）
あ、メモリーは無理かもね。過去に秋山さん依存症になっていたから（笑）

ライブ当日〈メモリー編〉　★

こうして楽しい日々が過ぎ、気が付けば水曜日。
日和とデートする事ばかりを考えていて、すっかり忘れていた行事……ライブの日。
僕にしてみれば、デートの方が大切だ。
確かに、レアなライブだけど……日和が来られないんじゃあ意味がないもの。
そんなわけで、夕触れ時に雫から来るメール。

『今からそっちに行くよ～☆彡』

寝ぼけ眼でそれを見て、頭の中のスイッチが入る。
大慌てに飛び起きて、ハルを揺さぶり起こす。
すぐに、準備。
必要な物を用意していたら、ハルが僕に近づいてくる。
寝ぐせか、アホ毛か……。とにかく、跳ねた髪に指を差して、僕に言う。

「パパ～。頭のアンテナが治まらないの～」
「大丈夫。しばらくすれば、落ち着くよ」
「パパもアンテナが出てるの～」
「大丈夫。僕、アホだから。問題ないよ」
「うん、わかった～」
「それよりも、ご飯食べた？　机の上に菓子パンがあるから、ちょっとだけでも食べておいたほうがいいよ。ハルはすぐにお腹を空かすから。会場じゃあ、飲食は禁止みたいだし。ご飯を食べたら、歯を磨いて、トイレに行って。そうそう、外は冷えるかもしれないから。暖かい格好をしなきゃね。確か、ハル……厚手の上着を持って

いたよね？　あれがいいんじゃないかなぁ～」

＞ｉ１８０７７―２３１＜

不意に感じる視線。

ハルを見ると、何だか嬉しそう……。

思わず、僕が問いかける。

「どうしたの？　ハル？」

「ううん、何でもないのー。ご飯食べてくる。パパはご飯食べないの？」

「僕は……いいや。食べるの遅いから。ライブが終わってから、食べるよ。せっかくだから、今日はどこかに寄ろうか？　ハルは何を食べたい？」

「ん～。焼き鳥！」

「焼き鳥かぁ……。今日のライブ場所は、あの会館だから……。あの辺りは、確か食べ物屋が多かったし。探せばすぐに見つかるかな……」

「パパ。時間が……」

「あ！　そうだ！　こんな事考えてる暇なんてなかったんだ。ほら、ハルもご飯を食べておいで。僕は出かける準備をしなきゃ。そろそろ、雫が来ちゃう頃だし……。遅れたら怒られちゃうからね」

そう言って、準備を始める。

鞄を用意して、財布は持ったし、チケットは財布の中。

家のカギは持ってる、携帯は持った……。

僕が準備をしていたら、聞こえてくるのはチャイムの音。

すぐに玄関の扉を開ける。

入って来たのは、もちろん雫だ。

雫が僕に口を開く。

「ライブの事、ちゃんと覚えてたじゃん。進兄の事だから、すっかり忘れているかと思ってたのに～」
「ううん、見事に忘れていたよ。雫のメールを見て思い出したの」
「それ、思い出したっていわないし～」

雫に睨まれる。
ヘラヘラと笑いながら、誤魔化す僕。
そのまま、雫を部屋に案内する。

キッチンではハルがご飯を食べている。
というか、もう食べ終わっている。
流石、早いな……。
僕ならまだ……半分も食べ終わっていないくらいだろう。

雫がハルに挨拶をして、僕が出かける準備を終わらせて。
しばらくお喋りをした後に、ライブ場所へと出発する。

ライブ場所は音楽専用の文化会館。電車で少し行った場所。
それほど遠くじゃないけど、近所ってわけでもない。
ハルと雫に僕を合わせて、三人で電車に乗る。
駅に付いたら、そこから歩きで数分。
見えてくるのは大きな会館。

それにしても、凄い人の数だ。
会館の外なのに、人がわんさか。
きっとチケットが手に入らなかった人とか、テレビの取材とか。色々といるんだろうな。

ふと横を見ると、路上ライブしている人も。
今回の騒動に紛れ込んで、名前を売ろうと頑張っている人達。
凄い……何か僕ら場違い？

人の多さに不安がよぎる。
日和がいないから、更に不安だ。
幼いハルを肩車して、迷子にならないようにする。
そして、雫の服を掴んで誘導してもらう。
雫は放っておくときっと消えるもの。
いつも気が付けば消えていたりするから、こんな時に消えられると凄く困る。

何とか人混みを押し分けて、入場用の列に並ぼうとした直後。
聞こえてくるのは女性の怒鳴り声。
思わず、振り返ってしまう。
女性の前には大泣きする女の子。
子どもに向いて、女性が怒鳴り散らす。

「どこに置いて来たのよ！？　このバカ娘！　だから、あれほど大切にしまっておきなさいって言ったのに！　チケットをなくしたら、入れないじゃない！」
「うわぁ～ん！」
「泣いて誤魔化したって駄目なんだから！　早くチケットを出しなさい！」
「うわぁ～ん！」

道端で気が狂ったように怒る母親。
泣き喚くのは、その子ども……。
眉をしかめながら、雫が口を開く。

「嫌だよね……ああいうの。あんな小さな子にチケットを預けること自体が変だし。こんな路上で子どもに怒鳴るのもどうかと思うよ……」

雫の声を聞きながら、なぜか足が動いてしまう。
その親子に近づきながら、自然と財布を取り出す僕。
中からチケットを二枚取り出して、母親の肩を叩く。
怖い形相で振りかえる母親に僕が言う。

「あの……よかったら、どうぞ。このチケットを使って下さい」
「あら、まぁ……」

母親がチケットを受け取った途端に、笑顔になる。
あの鬼のような形相はどこへ行ったのか？
問いかけると、僕が怒られそうだから黙っておく。
母親が僕に礼を言いながら、チケットを確認しだす。

「本当にいいの？　二枚もチケットを頂いて。あなた達もライブを見に来たんじゃないの？」
「いえ……僕達はそれほどファンでもないので」
「そう？　じゃあ、遠慮なく頂くわ。どこのどなたか知らないけれど、どうもありがとうね。きっと後で良い事があるわよ」

根拠のない言葉。
心にも思っていないだろう。
この人はライブの事しか頭になさそうだもの。
続いて、僕がお願いする。

「あの……チケットを渡す代わりに。この子の事を……怒らないでやって下さい。お願いします」

「もちろんよ。ほら、並ぶわよ。加奈子」
「うん……」

そして、二人の親子が列に並びに行こうとする。
不意に子どもが立ち止まり、振り返る。
僕の方を見て、頭を下げる。
僕も頭を下げると、子どもがもう一度頭を下げて、母親と一緒に列に並ぶ。
大人だな……。

ぼんやり立ちつくす僕の耳に入ってくるのは、ハルの声。

「パパ……」
「あぁ、ごめんね。ハル」
「ううん、いいよ。僕はパパと一緒にいるだけで楽しいから」
「フフッ、ありがとう」

伸ばしてくるハルの手を握ってやる。
僕達が和んでいたら、もう一人の怖い声が……。
雫が不満そうに口を開く。

「進兄～！」
「ご、ごめん……。本当に、ごめん。あ、でも、とりあえず、雫の分のチケットはあるから……」

雫にチケットを手渡す。
チケットを受け取り雫が黙る。
その後、ため息をついてから、チケットを丸めだす。
そのまま人混みの中へポイッ。
それを見て、僕がうろたえる。

「え？　捨てちゃっていいの？」
「いらないよ、あんな物。一人で行っても楽しくないし。それに、あの母親が隣だなんて、考えるだけで鬱陶しいよ」
「ご、ごめんね……」
「何で進兄が謝るの？　捨てたのは雫だし～。ほら、それよりさぁ。今から暇になったんだから、路上ライブを見て回ろうよ。せっかくライブを見に来たんだから、無料でも何か見ないと格好がつかないし。あ、そうだ！　夕食も豪華な物を食べなきゃね。イタリアンとか食べたいなぁ～。もちろん、進兄の奢りね～」

雫の反応を見て、思わず笑いが込み上げる。
僕がクスクス笑っていると、雫が不満げに口を開く。

「何さぁ～？　急に笑い出して。雫の何が面白いのさぁ～？」
「こういう時の雫って……日和に似ているの」
「日和お姉ちゃんに？　うわぁ～、それは嬉しいかも～」
「何だか大人だよね……。でも、十分もしないうちに子どもに戻るけど」
「それどういう意味～？」
「ほら、戻った」

ヘラヘラと僕が笑って、膨れる雫と一緒に路上ライブを見て回る。
しばらく、無料でライブを見ていたら、会館への入場が始まった。
それに伴い、路上ライブも数を減らしていく。

いつしか聴く物もなくなり、テレビカメラと野次馬だけになってしまう。
そろそろ食事へ行くことにして、三人で駄弁りながら会館裏へと回る。

裏通りは人が少ない。というか、ほぼいない。
今は表通りが忙しいみたい。
不意にハルが僕を突く。

「ねぇ、パパ……」
「何？」
「嫌な気配がするよ」
「嫌な気配……？　それって、狭間関係？」
「うん、そんな感じ。あっち見て、あっち」

ハルが指差す方向。そちらに目を向けていたら、確かに嫌な者が現れる。
空の空間に出現するのは未来……。
ちょっとお疲れ気味だ。
何で未来がこんな所に？
未来の出現を見て、雫が騒ぎ出す。

「キャー！　人が急に出てきた！？　すごーい！？　マジック！？」
「やば、人に見られ……」

未来と僕の目が合って、空気が固まる。
やば、未来に見つか……。
そんな事を考えるまでもなく、未来が全速で駆けてくる。
僕の肩を掴んで、捲し立てるように口を開く。

「メモリー！？」
「な……なに？　どうしたの？　未来？」
「何でこんな所にいるの！？」
「何でって……それは僕の台詞だけど」

僕がおどおどしていたら、未来が超満面の笑み。
めちゃくちゃ安心した顔で、僕に話し出す。

「良かったぁ～。今、凄く困っていたの。シバ君が急用でさぁ～。急に来られなくなって、人の数が足らなくて。あ～、本当。メモリーがいたら、助かるよ。姫様なんかに頼めないし。マジで困ってたの」

「な、何の話？」

「ちょっとだけ手伝ってほしいんだけど。難しい事じゃないから。メモリーになら任せられるよ。本当にお願い。今日だけはマジでお願いします」

「まぁ、僕はいいけど……。ハルと雫はどうする？」

僕が雫に向くと、雫が楽しげに言う。

「雫はいいよ。何でもお手伝いする～。だって、暇だし～」

「ハルは？」ハルを見上げる僕。

「僕はパパと一緒がいいの～」

ハルが可愛く言って、僕の髪を軽く握る。
そんなハルの様子を見て、未来が口を開く。

「パパ……？」

「え～っと、家族ごっこをしてるんだよ。ね？　ハル？」はにかみながら僕が答える。

「違うの。家族ごっこじゃなくて、家族なの～」

すぐにハルがいらない事を言う。
未来を見ると、何だかニヤニヤして……気に入らない顔。
未来が面白い物を見るような目で、僕らを見比べる。

「へ〜、メモリーがハルの父親か。何だか面白い組み合わせだね。ちなみに、母親は？」
「日和ママ。美味しいご飯を作ってくれるし、凄く優しいの〜」
容赦なくハルが答える。
もちろん、未来が眉をしかめる。
「日和ちゃん？　でも、日和ちゃんは……」
「ママは幽霊で……」
「あー！　それで、未来。急ぎの用があったんじゃなかったっけ！？」
ハルの言葉を誤魔化すために、大きな声を上げる僕。
放っておいたら、ハルが全てを暴露しそうだ。
子どもになりきるのは構わないけど……こういう所は、自重しようよ。
訝しげな顔をする未来を急かして、話を進める。
未来が僕らに向いて言う。
「とりあえず、中に入ろう。裏口から入れるから」
「中って……リョウのライブが行われる会館？」僕が問いかける。
「うん、そうだよ。まぁ、とにかく入って。時間がないから」
未来に誘導されて、会館の中へと入る僕達。
運が良かったらライブをちら見くらいできるかも……。
雫も同様の意見らしい。妙に興奮しながら、楽しげだ。
会館の中では、ハルには歩いてもらう。
流石に肩車はちょっと……ハルが頭を打つとマズイし。

代わりに手を繋いだりしているけど、これって繋ぐ必要あるのだろうか？
わからないけど、何か離すに離せない。

会館の中に入ってからも、未来の後ろを歩き続ける。
関係者以外は立ち入らないのだろう。
人気が本当に少ない。
数人は見られるけど、外のように興奮した人々はまずいない。

それでも、ここまで響いてくる外の騒音。
それがこのライブの貴重さを表している。
きっとテレビとかでも報道されているんだろうな。
だって、あれだけ有名なグループだったから……。

道もよくわからずに、とにかく未来を追いかけていたら。
何だか暗い所に入る。そのまま奥へ進んでいくと、ざわざわと人の気配。
もしかして、ライブホールの近く？
ぼんやりと考えていたら、聞き覚えのある声が……。

「もうちょい待ってや。メンバーが揃ってからやさかい、後少しの辛抱や」

これって……もしかして、Ｒｅａｌｉｇｈｔのリーダー……リョウの声？
雫を見ると、超興奮している。
キョロキョロと辺りを見回しながら、火照った顔で僕を見る。
何かを期待している目……。
結構、僕もドキドキしている。
有名人が近くにいるの？

ドキドキワクワクと胸が高鳴る。

不意に光が差し込む所、目に映るのは確かにリョウだ。
しかも、近い！　かなり近い！
っていうか、ここ……ステージ裏？
え？　こんな所に入っていいの？
めちゃくちゃ嬉しげにそわそわする雫。
音は立てないけど、立てていいのなら大暴れしていそう。

ハルを見ると、よくわかっていないみたい。
子どもだからじゃなくて、元々はよその世界に住んでいたから。
Ｒｅａｌｉｇｈｔの有名具合がわからないのだろう。
首を傾げて、僕を見上げている。
うん……まるで純粋な子どもだ。
無知って凄いな……。

そこでやっと思い出す事……。
僕らは手伝いでここにいるんだよね？
何の手伝いだろう？
楽器を用意するのかな？　それとも、掃除とか？
未来に問いかけようとしたら、未来が不適な笑みを浮かべる。

僕が何かを言うまでもなく、未来が僕を突き飛ばす。
しかも……ステージに向かって。
ステージに突き飛ばされた僕は、地面に倒れ込んで唸り声。
すぐに状況を思いだして、横を振り向く。
暗いけれど……かなりの人がいる。
いや……もう……凄い数。だって、五階まであるし……。

ヤバい事になった……。

本番の真っただ中に、僕みたいなのが乱入だなんて。
かなりマズイ。
僕の顔が蒼白していく。
そんな僕に声を掛けてくるのは、リョウ本人だ。
うわぁ～、握手してもらおうかな？

「大丈夫か？　兄ちゃん？　ダイナミックな出現やなぁ～。もしかして、シバ君の代理してくれるん？」
「だ……代理？」
「ちょっと、兄ちゃん！」

急にリョウの目つきが怖くなる。
お……怒られる。ヤバいよ～。
リョウが未だに座りこむ僕に近づいて、僕の肩を掴み出す。

「兄ちゃん！　もう一回……喋ってくれへんか！？」
「ご……ごめんなさい」
「やっぱり！」

震える僕の肩をきつく掴みながら、リョウが続いて話し出す。

「わいの勘が正しければ、兄ちゃん……。満点やろ？」
「はぁ？」
「ほら、お嬢様の試験で満点取ったやろ？」
「試験……？　し、知らないけど……」
「そんな、遠慮せんでええよ。菊池お嬢様の試験で満点取った声やで。一瞬でわかったわ～」
「菊池……？　あのちび助の事……？　だけど、試験なんて、僕は知らない」
「まぁ、ええわ。お嬢様が勝手に点数付けたんかもな」

「はぁ……そうですか」
「ほな、兄ちゃん。行くでー。手を貸してやるから、立ち上がり。友情のスタンドアップや」

よくわからないけど、リョウに手を貸してもらって立ち上がる。緊張と恐怖と不安で震える僕に向いて、リョウが言う。

「何や、兄ちゃん。震えとるけど。寒いんか？」
「いや……そういうのじゃなくて。あの……じゃあ、すみませんでした。僕は帰りますので」
「ちょいちょいちょいちょい、どこ行くん？」
「どこって……。あの……多分、僕……。荷物運びで呼ばれただけなので。あの……その……あっちの隅で待機していますので」
「荷物運びはわいがやるさかい。はい、マイク持って」

リョウにマイクを押し付けられる僕。
わけがわからなくて混乱していたら、未来の声が聞こえてくる。

「じゃあ、手短に説明するね。何か知らないけど、俺とシバ君が勧誘されて。何かリョウと一緒に音楽をする事になって。それで、シバ君に急用が入って。メンバーが足らなくなったの」
「へ！？　そんな……急に言われても、僕は楽器なんて扱えないよ！」
「大丈夫。空いてるの、ボーカルだから。松元君がギターで、シバ君がベース。俺がドラムで、リョウがボーカル。だったんだけど。シバ君がいないから、リョウがベースに入るんだよね。何か知らないけど、リョウが言うには『両立はできない』そうだから」
「じゃ……じゃあ、未来がボーカルもすればいいじゃない！」
「いや、それがさぁ……音が低くて。俺はちょっと苦手なんだよね。俺の声って、基本は高いから」

「苦手って……いつも普通に歌ってるじゃん！」

僕が今にも泣きそうになっていたら、未来が僕に近づき悟ったような口ぶりで話し出す。

「まぁ、考えてもみなよ。こんな所で歌を歌える機会なんて、そうそうないよ。一生に一度の大イベントだと思って、楽しく演奏しようよ！」

「楽しくないし！　僕は帰る！」

「いいじゃん。大型のカラオケだと思ってさぁ～」

「良くないし、帰る！」

僕がステージ裏に引き返そうとしていたら、急にリョウが僕の道を塞ぎだす。

そのまま、地面に座り込み、土下座を始める。

「こんなん急に言うて、兄ちゃんが嫌がるのもようわかる！　せやけどお願いや！　今回だけでええんや！　お客さんの手前もあるさかい、手を貸してくれへんか？　この通りや！」

「……」黙る僕。

「俺達もこれでやられたの。リョウって、攻撃力高いよね。どうするの？」

未来が口にする。

こんな事をされて……断れるわけないじゃないか。

右手で頭を抱えながらため息をついて、僕が二人に問いかける。

「……曲は？　何を演奏するか、曲の予定……」

「ありがとう、兄ちゃん！　恩に着るわ！」

「これ……予定表ですけど」

リョウと未来を除いたメンバー……松元君だったっけ？
その子が予定表を見せてくれる。
僕が受け取り、皆でそれを見ながら相談だ。

観客席からは小さなざわめきが聞こえてくるが、案外に静か。
きっとそういう演出だと思っているのだろう。
こっちは必死だ。
僕が皆に説明する。

「この二つがわからないよ……。後は歌えると思うけど……」
「ほな、しゃーないな。それを避けよか。まぁ、アンコールが入ったら、時間も潰れるやろうし」とリョウ。
「僕の歌なんかでアンコールが入るとは思えないけどね」
「いやぁ～、でも以前にカラオケで歌っていたのを聞いた時は上手いと思ったよ。いや、冗談抜きでね。『橋』の合唱会の曲よりは、こういう曲の方が得意なんじゃない？」未来が口を開く。
「こんな時に褒められても、緊張するだけだよ」

打ち合わせが終わって、リョウが三回手を叩く。

「ほな、行こうか。皆、行くでー。最初で最後の本番や」

バッと持ち場に向かう皆。
僕はマイクを手に持って、呆れた顔で観客席に目を向ける。
きっと皆も残念に思うだろうなぁ～。
僕の歌なんて……そんなに上手くないもの。
リョウか未来が歌った方が絶対にいいのに。もう、知らない！

皆の演奏を聞きながら、大きく口を開いて声を出す。

どうにでもなれ！
吹っ切れてしまったら、気持ちも楽で。
何にも考えずに適当に歌を歌う。
ある程度は歌えるはずだ。
歌っていて、ふと思う事……。
あ、二番なんて覚えてない。
超ノリノリになりながら、二番の出だしを改造する。

「二番なんて～、覚えてるわけない～」

ドラムの音が掻き消えて、聞こえてくるのは未来の笑い声。
ベースの音まで消えている。リョウも大笑いだ。
目を丸くする松元君に、ざわめく観客。
しーらない。
三人が僕に近づき、話しかけてくる。
まずは未来から。

「さっき歌えるって言ってたじゃん。何で覚えてないのさぁ～」
「歌えるけど、それはカラオケを前提にしてだよ。歌詞カードがないと歌えないもの」
「歌詞カードなら、わいが持ってるで～。わいもすぐに歌詞を忘れるから、常備してるねん。ほら、兄ちゃんにプレゼントや」

リョウがメモ帳を取り出して僕にくれる。
お礼を言って、受け取る僕。

「あ、どうも」
「それにしても、歌……上手いですね。感動しました」と松元君。
「そうでもないよ。未来の方がよっぽど上手いし」
「だから、俺は高音担当だって。低いのは歌いづらくてしかたない

もん」未来が口を出す。
「でも、歌えるじゃん。っていうか、リョウが歌えば問題ないのに……」
「いや、わいのレベルじゃあ、兄ちゃんの足元にも及ばんわ。兄ちゃんの歌声に思わず惚れてしもた。後で告白してもええか？」
「ううん、止めて。そんなのいらないから」

僕が首を振って、再度ライブを開始する。
メンバーが元の位置について、演奏を始める。
歌詞カードを眺めながら、歌い続ける僕。
歌っていたら、時間が経つのも早い。

気が付けば、もの凄く会場が盛り上がっていて。
僕もその熱気に影響されて、かなり本気で歌っている。
凄く気分が清々しくて、何だか楽しい気分になる。
イライラした時に、雑木林で歌っている時の気分。

一通り歌い終えても治まらない興奮。
気持ちが高ぶるのは僕だけじゃなくて、他の皆も。
アンコールの嵐が殺到して、合計で五曲は歌った。
流石に僕も疲れてきて、リタイヤ宣言。
観客は未だに騒いでいるけど……。
もう、許して。喉が枯れそう。

ライブが終わって、次はサイン会があるそうだ。
三人は出るそうだけど、僕は……代理だから。
それに字が汚いし、ハルや雫もいる。

もう帰ろうとする僕に迫ってくるのは礼儀の知らない観客達。
サインを書いてくれって、言われるけど……。

僕は『書かない』で押し通す。
表からは帰りづらくて、裏道を通って帰る事に。

異常に興奮する雫を落ち着かせながら。
ハルの手を取り会館の外に……出ようとしたら、先回りされていた。
外にはテレビカメラと観客騒動。
警備の人が頑張ってるけど、あまり効果……なさそうだ。
僕の方へ来ようと目の色を変える人々に脅えて、思わずハルに言う。

「ハル……助けて。今日は何してもいいから。安全に逃げられる方法はない？」
「何してもいいのー？」
「うん、いいよ。怪我をするくらいなら、無茶したって大丈夫。もう……今更だしね」
「わかったのー」

ハルがテレビカメラの前にも係わらず大人に変身。
うん、もう……好きにして。
仰天する人々。
そんな事など気にもせず、ハルが僕と雫を担ぎあげる。
一言楽しげに口を開く。

「それではまた来週です」

そう言った後に、空を飛びだすハル。
うん、好きにしてって言ったけど……ちょっと後悔。
めっちゃカメラで撮られてるし。
雫の叫び声が聞こえる中、夜景に目を向ける僕。
夜の街って……綺麗だな。

居酒屋〈ハル編〉（前書き）

吹っ切れたら、きっと楽になるさ。（＾－＾）

居酒屋〈ハル編〉

とある居酒屋の中、メニューを見るメモリーさんと、その隣でメニューを覗き込む秋山さん。
その前には、一人で勝手に喋り続ける北原さんに。
店の隅に置いてあるテレビを眺めながら、ドキドキする大人バージョン……
まぁ、正しくは高校生バージョンの僕。

僕がドキドキしている理由は今から報道される番組が僕達に関係しているから。
Ｒｅａｌｉｇｈｔのリョウさんが集めた新メンバーが発表されて、歌が流れるそうだ。
更には、その後に何者かが空を飛ぶ……。って、それ僕じゃないの？

メモリーさん……呑気な事に、何も気にしないで注文を始める。
僕が言っていた焼き鳥も、選り取り見取りの種類を混ぜてくれる。
フフッ、覚えてくれていたんだ。何だか和やかな気分になる。

秋山さんもメモリーさんに欲しい物を言うけれど、メモリーさんには聞こえちゃいない。
メモリーさんが注文した物とかぶる物もあるけれど、まったく異なる物もある。
秋山さんが物欲しそうに言うので、僕がそれを注文する。
すぐに秋山さんが笑顔で言う。

「ありがとう、ハル君。私、どうしてもこれが気になって」

だけど……秋山さん幽霊なのに、食べれるのだろうか？

僕が首を傾げたら、秋山さんがすぐに気付いて話し出す。

「物が減るわけじゃないけど、少しくらいは味見できるんだ。ちょっと指で突いて、味見する程度ね」

それを聞いて、頷き理解を示す僕。
北原さんが僕を眺めて首を傾げる。
これ以上、妙な動きは控えよう。
秋山さんが見えているなんて言ったら、北原さんが更にうるさくなるもの。

料理を待っていると、番組が始まる。
まずはＲｅａｌｉｇｈｔの解説から。
長々と始まる解散前のＲｅａｌｉｇｈｔの話に次いで、リョウさんという人の歌っている姿が流れる。

その後、Ｒｅａｌｉｇｈｔの良し悪しについて司会者達が語り合い。
それくらいに、料理が運ばれてきた。
テレビを見ながら、夕食を食べ出し、静かになる北原さん。
もちろん、僕もテレビに夢中だ。
メモリーさんは一人でゆっくり食事している。テレビなんて見ちゃいない。
秋山さんはその隣で料理を突いて味見している。何だか楽しそう……。

それにしても凄く気になる。
テレビが気になるわけじゃない。
僕が気にしているのは、メモリーさんの目の前にある生ビール。
お願いだから、それを少しわけてほしい……。思わず、メモリーさ

んに問いかける。

「お父さん、あまり飲み過ぎないで下さいね」
「うん、気をつけるよ」
「……多くないですか？　僕が半分飲みましょうか？」
「ハルは未成年でしょ？」

ん～、いつもならそんな事言わないのに……。
好きにすれば？　って言ってくれるのに……。
今日に限って、何でそんなにケチなの？
秋山さんなんて勝手にビール……突いている。
いいなぁ～、羨ましい。膨れた顔でメモリーさんに言う。

「ちょっとだけ……ね？」
「だーめ」
「ん～」

僕が拗ねていたら、料理が運ばれてくる。
わー、美味しそうなネギマだ。
でも、ビールない……。
不意にメモリーさんが口を開く。

「帰ってからにしてよ。こんな所で何か言われたら面倒でしょ？」
「何か言われる事なんてないのに……」
「見て見て！　進兄が登場してるよ！」

急に話し出すのは北原さん。
僕とメモリーさんが同時にテレビを見る。
テレビの中にはステージに突き飛ばされたメモリーさんの姿が。
慌てふためくメモリーさん、本当にビビリ腰だ。

おどおどしながら、今にもステージの脇に消えて行きそう。

テレビを見ていた他のお客さん達の声が耳に入る。二人の男性のちぐはぐな話……。

「何だ、あれ？」

「Ｒｅａｌｉｇｈｔって有名ですよね～。年齢問わずに人気があって～」

「おい、お前もテレビ見てみろよ。何か変なのが出てきたぞ」

「あ～、僕も有名になりたいなぁ～」

「謎の助っ人、上野進一だって……。俳優か？　にしては、見たことないなぁ～」

「あ～、来週の面会が心配だなぁ～。僕にも助っ人来ないかなぁ～」

片方の人……かなり酔ってるな。ぐだぐだと一人で喋っている。他の席からは三人の年配女性の声が……。

「あら、スタッフさんかしら？　なかなか良い顔してるわね」

「私はタイプじゃないわ～。どちらかと言えば、リョウみたいなのがいいわね。　だって、その人……根暗そうだし、何だかおどおどしているもの。一緒にいたら疲れそう」

「私は解散前のグループの杉村君がよかったわぁ～。あの子は可愛い顔していたし、大人しかったから。もう見ているだけで、キュンときちゃうのよね。ウフフフフ……」

そこから盛り上がる解散前のＲｅａｌｉｇｈｔの話。

何だかんだと話をしていて、最後は結局『イケメン最高！』に落ち着く。

そして、三人で大爆笑。場をわきまえないで笑っている。

そんな年配女性達の話を耳にしたのかしていないのか。
メモリーさんがテレビを見ながら眉をしかめる。

「何か僕……えらく根暗そうだね。鬱陶しそうなキャラだなぁ～」
「そんなことないよ～。上野君はよく喋るし明るくて優しいよ～」
と秋山さん。
「前髪を切って、服装を変えて。もっと前向きになればいいんだよ」
と北原さん。
「初めの二つはできるけど、前向きになるのって難しいよ……」
「あ～ん、私が生きていたら、上野君……凄く前向きなのにな」
「さっさと日和お姉ちゃんを忘れて、次の恋に目覚めたら？　日和お姉ちゃんは怒らないと思うよ。むしろ応援してくれるかも」
「相手がいないし。出会いがないからねー」
「出会いがないわけじゃないよー。お母さんが色々と勧めてくれていたじゃない。あの子は良い子だから、一度くらい付き合ってみたらいいのに～」
「お見合いでもしたら？　ケイちゃんとかに相談したら、すぐに相手を探してくれるかもよ」
「そうだよ。私も賛成！　お見合いしようよ。お見合い」秋山さんが口を挟む。
「いや、この間……お墓に行った時に偶然に出会って。良い子がいるからって、めっちゃ勧められたし。日和の話なんて一分もしていないよ。ケイおばさんって前向きでいいよね～」
「上野君、すぐに断っちゃったでしょ！　早く私を諦めて次の恋へ進むのだぁ～！」

僕の知らない話を始める二人。
その二人の合間を縫って口を挟む秋山さん。
秋山さんがうるさすぎて、わけわからなくなってくる。

二人の話を耳に入れて、情報収集しようと思うけど、ちょっと混乱気味。
一つわかったことは、ケイさんというのは秋山さんのお母さんみたい。
何だか明るい人のようだ。

メモリーさんと北原さんが話をする中、周りの皆はテレビに夢中だ。
乱入者……メモリーさんの歌声が異常なまでに心に響くので。
それについてのお喋りが止まらないらしい。

メモリーさん……普通の人間なのに何でこんなに歌が上手いのか？
多分、生死を掛けた超猛特訓があったのだろうな。
まぁ、強制イベントだろうけど。
メモリーさんに歌を教えたのは、姫様だから。
歌姫から伝授された奇跡の歌声だ。

未来さんやシバルさんはきっと習っていないと思う。
だって、二人共に元々才能あるから。
一般人のメモリーさんが一番浮いていたのだろう。だから目をつけられて……。

こうやってテレビを通して、客観的に耳にすると。
メモリーさんの声って、ちょっと独特。
何だかどこか個性的。
何でそう思うのかは分からないけれど。
あまり耳にしない声だと思う。

更に、よーく聴いてみる。

メモリーさんの歌い方……。確かに姫様に似通っている。
隅の隅から教え込まれたのだろう。
息の吸い方から、声の発し方まで。凄く近い物を感じる。

じっくりと聴いてみて、メモリーさんの歌声が素晴らしい事を再確認していたら。
メモリーさんが赤い顔で、大きな声を出す。

「すいませーん！　ビール追加―！」

一瞬固まる店の空気。
だって、歌声と同じ声が店の中に響くのだから。
皆して、顔を見まわして、声の主を探しだす。
すぐに発見できた人はメモリーさんの姿を見て硬直している。
隣にいる人を突いて、メモリーさんの居場所を暴露する人の姿も見られる。

給仕人が来ないから、痺れを切らしたメモリーさんが今度は手を上げて言う。
しかも、結構な大声で。
メモリーさん……人に見られてもいいの？
とか思うけど、酔っているみたいだから多分気にしない。

ふと思う。メモリーさんがお酒を飲むなんて珍しいな。
普段ならまず飲まないのに……。
食べに行っても、お酒を飲む所なんて見たことない。
今日が初めて……。
ライブで歌って、気分が向上しているのかな？

流石の給仕人も気が付いて、メモリーさんの元へと駆け付ける。

注文を取った後、メモリーさんの顔を確認して。
テレビを見て、メモリーさんを見て。
それを二度ほど繰り返した後に、メモリーさんに質問だ。

「あの……もしかして、Ｒｅａｌｉｇｈｔの上野さんですか？」
「ううん、違うよ。僕はＲｅａｌｉｇｈｔとは無関係～。ただの代理～」
「上野君もＲｅａｌｉｇｈｔに入れてもらったら？　未来さんに言えば入れてもらえるかも。ほら、趣味を持つと前向きになるって言うし……」

何にでも口を挟む秋山さん。
幽霊だから暇なのだろうな。
給仕人がメモリーさんに問いかけてくる。

「えっと……今日のライブで歌っていましたよね」
「歌ったね～。もう喉枯れそうだよ～。だから、ビール」
「私はレモンチューハイが飲みた～い」と秋山さん。
「あ、はい！　少々お待ち下さい」

給仕人がペコペコしながら、去っていく。
レモンチューハイはまず来ないだろうけど……。
メモリーさんは結構酔ってるみたい？
何だか……顔が赤いし目が虚ろ。

秋山さんはどうなのだろう？
いつも以上に元気がありあまっているけど。
これって、酔ってるの？
それとも、メモリーさんがＲｅａｌｉｇｈｔに参加したのを見て、気分がハイになってるの？

よくわからない。

メモリーさんが僕の狙っていた料理を食べながら、話し出す。

「それにしても、死神の奴。迷惑な事をしてくれるよね～。これがよその世界なら構わないよ。何でよりによって僕の世界なのかなぁ～。凄く迷惑だし～。自分で首を突っ込んだのなら、最後まで責任を取ってほしいよね～」

「すみませんね～。どうしても外せない用ができてしまって……。こちらでは狭間の影響が酷いんですよ。最近では動物が神隠しにあう事件が勃発していまして。それがどんどん悪化して、今や人間が消えるんですよ。狭間のズレが大きな場所だけですけど……。日本では合計で五人の方が消えています。しかも、僕以外の人々……人間も神様も含んで。皆さんは、狭間という場所をご存じないので。人間達は国際的な拉致だと言い張り、神様達は神地界が絡んでいると言い張って。もう酷い大騒ぎで……。今回は神様間で緊急総会が行われて。僕も出席しなくてはいけなくなり、どうしても席を外す事ができなかったんです。これぱかりは許して下さい」

急乱入してくるのは大人シバルさん。

どこから現れたのだろう？

っていうか、人間が消えるって……知り合いは消えていないよね？

お願いだから、そんなの止めて。

ハルトと大杉さんで十分じゃないか。

これ以上、人が消える所なんて見たくない。

シバルさんに気づいて、メモリーさんが不満げな顔。

「死神……どうして僕達の居場所を？」

「未来さんから聞きまして。向こうは手が外せないそうなので、挨

拶だけでもしておいてくれと。僕もお詫びを言いたくて……」
「未来は……どうして僕達の居場所を……」

メモリーさんが急にしらふに戻り、立ち上がる。
自分の身体を調べ出して、僕に背中を向ける。

「何かついてない？」
「何かついていますね。埃じゃなさそうです。何かの機械みたいですけど……」

シバルさんがそう言って、メモリーさんの背中についている機械らしい物を外す。
メモリーさんがそれを受け取り、唸りだす。

「やられた……。僕を突き飛ばした時か。だから未来は嫌いなんだ」
「発信器ですか？」と僕。
「そうね。未来さんはこういう事が好きだから。スパイみたいで楽しいよね」と秋山さん。
「そうみたいだね……」

メモリーさんがチップを潰して、席につく。
っていうか、秋山さん……気づいていたのなら言ってくれればよかったのに……。
僕なんか全然気付かなかった。
片目が見えないから……そういう小さな物を凝視する事が少ないし。

丁度、それくらいに追加のビールがやってくる。
給仕人の人……メモ用紙を片手にそわそわしている。
メモリーさんにサインを貰いたいみたいだけど。
メモリーさんとシバルさんが真面目に話しこんでいるから、残念そ

うに去っていく。
あぁ……可哀そう。

不意にシバルさんが北原さんに声を掛ける。

「お隣よろしいですか？」
「うん、いいけど……」

訝しげにシバルさんを見る北原さん。
シバルさんが気づいて、口を開く。

「あぁ、申し遅れました。僕は神上シバルです。メモリー……上野さんに代理を頼んだ者ですよ。本当は僕が出るはずだったんですけど、ちょっと用事ができてしまって。上野さんにご迷惑をお掛けしてしまったようで。ところであなたは？」
「えっと……北原雫です。えーっと、進兄の彼女の日和お姉ちゃんのいとこです」
「あぁ、噂の……確か秋山さんという方でしたね。僕はお会いした事がありませんが……。ところで非常に気になっていたんですけど。そちらの方……えらく青いですね」

シバルさんが秋山さんを見る。
幽霊だと気づいていないみたい。
凄い……普通に話しかけた。秋山さんが返答する。

「初めまして、秋山日和です。シバルさんですね。いつも上野君がお世話になっています」
「いえいえ、こちらこそ……。って、えぇ！？　秋山さん！？　生きていたんですか！？」
「いえ、死んでます。私、幽霊なの」

「あぁ、成る程……幽霊ですか。道理で青いわけです」

シバルさんが頷いて、数秒間停止。
すぐにメモリーさんに顔を向ける。

「秋山さんが見えますけど!?」
「見えるらしいね～。ハルも見えるよ。僕には見えないけど……。こっちも狭間の影響が出てるね～。他にも異常が起きてるし～。人が消えるのも時間の問題かなぁ～。あ～、もう僕が消えたい」
「狭間の影響ですか……。こちらではこういう形で……」
「だけど、死神に幽霊が見えなかったら。それこそ変な話だよね～」

おかずを突きながら、ちびちびとビールを口にするメモリーさん。
二人の話を耳にして、北原さんが騒ぎ出す。

「え!? 何、何!? 日和お姉ちゃんが見えるの!?」
「はい、僕には見えます。ハルさんにも見えるんですか?」とシバルさん。
「はい、見事に」頷く僕。

北原さんがキャーキャー騒いで、秋山さんとお喋りしたいと言いだす。
シバルさんが二人の仲介になり、僕は追加注文だ。
メモリーさんに食べられてしまった料理を再度注文する。

秋山さんまで巻き込んで四人で話をしていたら、どんどん盛り上がってくる。
他の人達はむしろ静かでうるさく喋っているのは僕達くらい。
僕達の会話を耳にしようと、ちらちらこちらを見る人が後を絶たない。

まぁ、気にもなるだろう。
シバルさんが幽霊を見る事ができるという話をして、テレビでは僕が超能力者で、メモリーさんは例の歌だ。もうハチャメチャだ。
その上、メモリーさんはかなり酔ってきているし。更には、シバルさんまで飲み出して……。

酔ったメモリーさんが口を開く。

「誰か一発芸してー！」
「はい、僕が行きます！」とシバルさん。

はい、シバルさんも酔ってます！
シバルさんが大声で言う。

「物質を通り抜けます！　誰か僕を叩いて下さい！」
「よーし、僕が叩いてあげる！」

メモリーさんが言って、シバルさんを思いっきり叩く。
ドゴンッと大きな音が鳴って、シバルさんが頭を押さえる。
通り抜け……てない。どう考えても失敗だ。
それを見て、メモリーさんが大爆笑。すぐにシバルさんも爆笑する。
傍から見るとわけわからないだろう。

そして、今度はメモリーさんが手を上げ出す。

「僕は何にもできません！」
「あはははは！　流石、メモリーさんです！」

シバルさんがなぜか受けてる。そこへ北原さんが口を出す。

「じゃあ、Ｒｅａｌｉｇｈｔの曲を歌って～」

「リクエストはー？」とメモリーさん。

北原さんが曲名を言うと、メモリーさんが口を開く。

「よーし、いくよー。死神、メロディーよろしく」

「はい、了解ですー」

シバルさんが言って、神力を使い真っ赤なギターを作りだす。

ざわざわと他のお客さんが騒ぐ中、シバルさんがメロディーを引き始める。

凄く上手い、めっちゃ上手い。流石、シバルさんだ。酔っていても普通に上手い。

メロディーが進み、歌に入る。

メモリーさんが歌いだし、周りの皆が静まり返る。

シバルさんは別だ。メモリーさんと一緒になって歌っている。

シバルさんもメモリーさんと同様に凄く歌が上手いから、皆もたまげて二人を見ている。

曲が終わり、拍手喝采。

皆の歓声を耳にして、二人が調子に乗り始める。

次のリクエストにお答えして、二人の店内ライブが開始される。

メモリーさん……喉が枯れそうだって言ってなかった？

普通の人がこんな事をしたら止められるだろうに。

この二人が騒いでいても、誰も止めない。店長だって止めやしない。

そりゃあお客さんが大喜びするのだから、止めるわけにはいかない

だろう。

しかも、時間経過と共に人の数が増えていってる。
きっと外にも声が漏れているのだろう。
拍手の音だってかなりのもの。
皆が盛り上がっていたら、最後はメモリーさんがぶっ倒れる。
シバルさんが爆笑して幕切れだ。

メモリーさんの代わりにお会計を済ませようとしたら、
店長が出てきてなぜか無料にしてくれた。ラッキー。
代わりにまた次回もよろしくと言われた。
まぁ、食事も美味しかったから。次回も寄らせてもらうとしよう。

酔い潰れたメモリーさんを背負い、フラフラなシバルさんを誘導しながら外に出る。
北原さんと別れた後、何とかタクシーを拾って。メモリーさんの家に帰る。
その後、シバルさんをどうにか家まで連れて行き、柊さんにお礼を言われる。
そして、柊さんがシバルさんに注意するのを確認してから、サヨナラを言う。

そうだ……せっかくだから、一度くらい城に戻ろう。
色々と事件が起きているらしいし。皆も心配しているだろうから……。
故郷に帰る気持ちで、城へと向かう。
僕の家はどちらだろう？
例の城か……メモリーさんの家か。
両方を選択する事は……いけない事なのかな？

二人で大泣き〈秋山編〉　★（前書き）

動物属性は耳に弱いらしい……。

二人で大泣き〈秋山編〉　★

ライブを終えた日の夜の話。
いつも通り安曇さんの身体を借りた私が家で待っていたら、二人が帰って来た。
二人共に同じような顔をして、私の前でしょんぼりする。
顔は真っ赤で泣いた形跡。
どうして二人が泣いているのか。
話を聞いてみたら、理由は個人に起きた出来事。

ハル君は……シバルさんを家に送った後。
一度、自分の家に戻ったらしい。
ハル君がずっと住んでいた城の事。
そうしたら、色々な人に怒られてしまって、泣いちゃったの。

ハル君……家の人に定期連絡をしていなかったみたい。
初めに一言だけ言い残して、消えてしまったから。皆が心配していたようね。

上野君は……目が覚めた時。
ハル君がいなくて、私は幽霊だったから。
一人残された気分になったみたい。
だから泣いたわけではなくて。問題は次の話。

一人の寂しさを紛らわすために、一人で二次会をして。
調子が出てきたのか、そのまま未来さんの世界に遊びに行っちゃって。
そこでニートさん達と出会って、三次会まで飲み出して。
おふざけで、部屋に落ちていたネコ耳と尾をつけたら……外れなく

なったみたい。

＞ｉ１８３７４―２３１＜

しくしくと泣き続ける二人の頭を撫でて、紅茶をいれる。
二人に配って、背中を撫でて、落ち着かせて、励まして。
バタバタと慌しく過ごしていたら、いつの間にか夜中の十二時。
その頃には、二人も落ち着きを取り戻し。
ハル君はベッドで眠りだして、上野君と私はソファーに座りながらお話をする。

上野君が小さく呟く。

「情けないよね……。飲んで、帰ってきて。飲んで、出かけて。飲んで、ネコ耳付けて。最後は泣きながら帰ってくるなんて……」
「そんなことないよ。今日の上野君は頑張ったんだから。少しぐらいドジをしたって構わないよ」
「少しじゃないよ……。大ドジだよ……。こんなの付けて外なんて歩けないもの」
「そうかな？　凄く可愛いよ」
「みっともないし。ハルは……子どもだからいいけど。僕は大人だよ。バカみたいに思われるかも」
「そんなことないよ～。よく似合ってるよ」

私が手を伸ばして、上野君の頭を撫でる。
するとネコ耳がピコピコ動いて何だか可愛い。
思わず、ネコ耳に手を伸ばして。クニクニと触ってみる。
やーん、気持ちいい～！
今度は両手で触ってみる。
あーん、これいいな。

必死になりながら、上野君のネコ耳を触る私。
ふと気が付くと、上野君が小さく縮こまっている。
顔を赤らめながら、荒い息。
どうしたのかな？　もしかして、お酒に悪酔いしたの？
上野君に話しかける。

「どうしたの？　上野君？　悪酔いかな？」
「ち……違うの。日和が……ネコ耳を触りだしたら。何だか……凄く……気持ち良くて。頭……変になりそう」
「もしかして、神経が敏感なのかな？」

付け耳なのに……不思議だな。
そんな事を思いながら、クニクニを止めないでいると。
上野君が私にしがみ付いてきた。

「はぁ……あぅ……。ふ……ふぁ……。もう……や、止めて。これ以上……触られると……」
「そんなに気持ちがいいの？　凄く不思議だね」
「んんっ……。ダ……メ」

上野君が倒れてきて、私の膝を枕にする。
心地よさそうな顔をして……。何だか幸せそう……。
もっと幸せにしてあげよう。クニクニクニクニ……。

気持ちのよさに耐えきれずに抵抗しようとする上野君。
ちょっと恥ずかしい声を出しながらも、身動きは取れないみたい。
私も触っていて気持ちがいいから、何だか止める気になれないな。

いつの間にか、テレビに集中している私。

それでも手は上野君のネコ耳に……。
あ……上野君……気持ちのよさに眠ってしまった。
あーん、ネコ耳上野君の寝顔も可愛いな。
不意に目に付くのは上野君の尻尾。
こっちも……触っていいのかな？

チャイムがうるさい〈ハル編〉

チャイムの音で目が覚める。
何なの？　誰なの？　今は忙しいから、後にして。
忙しい理由は眠いから二度寝したい。ただそれだけだ。

僕が布団に潜り込んでも、鳴りやまないチャイム。
我慢していたら、何とか静かになる。
そして、何分経過しただろう。
またもや聞こえてくるのはチャイムの音……。

あまりのしつこさに耐えきれず、不満げに目覚める。
メモリーさんはどこに行ったの？
ベッドから下りて、玄関に向かう僕。
軽く宙に浮いて、覗き穴から向こうを見ると。報道陣らしき人達の姿が。

それを見て、昨晩の出来事を思い出す。
あー、派手にやったからなぁ～。居留守（いるす）でも使おうか？
そんな事を考えながら、とりあえずメモリーさんを探してみる。
そしたら、ソファーで眠るメモリーさんを発見。
毛布をかぶりながら、心地よさそうに眠っている。

眠るメモリーさんに話しかける。

「パパ～、お客さんだよ～」

無反応。今度はメモリーさんを揺さぶりながら、口を開く。

「ねぇ、パパ。テレビの人が来てるよ～」

そして、返ってきたメモリーさんの返答。

「ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ……」

……喉を鳴らしだした。凄く気持ちがいいみたい。
じゃなくて、どうやってこの音を出しているのだろう？
というのでもなくて……。
メモリーさん、ネコ耳の影響受け過ぎですよ。
猫じゃないのだから、そんなにゴロゴロ言ってないで、起きて下さい。

言ってもいいのだけど、きっとメモリーさん起きやしない。
幸せそうに眠っている。
何だか僕も面倒になってきて、イヤホンをつけて、音楽を聞きだす。
微かな騒音、チャイムの音が聞こえてきて。音楽の音量を上げてみる。

ご飯を食べた後に、漫画を読んだり、例のパズルをしたりしていたら。
やっとのことでメモリーさんが目を覚ます。
伸びをしながら、大欠伸。
尻尾をフニャフニャ動かして、眠たげな顔。

ボーっとしながら立ち上がり、動きだす。
メモリーさんがノロノロと昼食を食べていたら、チャイムの音が。
あー、もうやんなっちゃう。
その頃には僕もイヤホンを取って、メモリーさんと一緒にご飯を食べていた。

メモリーさんが僕に言う。

「ハル、誰が来たのか見てきて～」
「はーい」

椅子からおりて、玄関に向かう。
覗き穴から覗いてみると、やっぱり取材の人。
僕が戻って、メモリーさんに言う。

「テレビの人」
「うん……。じゃあ、僕はいないって言っておいて」
「はーい」

メモリーさんに言われた通り、玄関に行って。
報道陣の皆さんに、嘘をつく。
報道陣の人達はとにかく何でも気になるようで。
メモリーさんがいないならと、僕に大量質問だ。
何せ僕も取材の対象だから。
あんな所で大人になったり、空を飛んだりするんじゃなかった。今更後悔。

面倒くさいから、何を聞かれても『知らな―い』で返答する。
とりあえず、例の異常能力の事を聞かれた時だけ『僕、超能力者なのー』と答えておいた。
これぱかりは、知らないで通せないと思ったから。

そしたら、今度は『昨晩のように大人になってみて』だの、『空を飛んでみて』だの。
更には『もっと他にできる事はないの？』なんて話をおっぱじめる。

うんざりしてきたので、大人バージョンになって、一言。

「今日は疲れたので、続きは後日でお願いします」

言って、すぐに扉を閉める。

扉の向こう側では、凄いざわめきだ。人の声がなかなか尽きない。

たかが子どもが大人になっただけの話なのに、どうしてこうも盛り上がるのだろう？

そんな事を考えながら、話に飽きてきた僕がメモリーさんの元へと戻る。

途中で子ども姿に戻って、メモリーさんの膝によじ登り。口を開けて、ご飯をねだる。

文句を言いつつもメモリーさんが僕にご飯を食べさせてくれて。

僕はそれに甘えて、バカな子の振り。

あんな所で取材を受けるより、こっちの方がよっぽど楽しい。

昼食を食べ終わり、次にメモリーさんがした行動。

まずはチャイムの音が出ないように本体の電源コードを抜きとる。

楽し気なメモリーさんの様子を眺めながら、僕が問いかける。

「どうして、僕のお家はマンションなのにインターホンじゃないの？」

「それはね。ハルが来るより少し前に……僕がね。ちょっとしたミスで壊しちゃったの。新しく買い替えようと思ったんだけど……。インターホンよりもチャイムの方がいいかなと思って……。それで、適当に安いのを買ったの」

「どうしてチャイムの方がいいの？　インターホンの方が便利なのに……」

「それはね。それくらいしないと……僕がね。動かないの。私生活

で、動く事がほとんどないんだよね。せめて玄関までは歩こうかと思って……。それで、チャイムにしたんだよ」
「うん、よくわかったの」

……でも、僕に頼んでいたら意味ないよね？
微かに頭の中をよぎる言葉。
ううん、気のせい。そんなこと……考えてないよ。考えていないもの。

メモリーさんがチャイムを止めてくれたので、耳障りな音が無くなった。
きっと訪問者はチャイムのボタンを押すだろう。しかし、音はならない。
何度も試してみて、反応がない事を知り。
次にするのは、扉のノック。
それでも無反応だったなら、声を出して呼んでみる。
最後の最後は、諦めて帰るに違いない。

昼食を食べ終わった後に、ソファーへと移動。
クロスワードをするメモリーさんの隣で、パズルをする僕。
わからなくなって、いつもの言葉を口にする。

「パパ―、わかんなーい」
「僕も……わからないや」

メモリーさんがクロスワードを真剣に眺めながら、口を開く。
僕もクロスワードを覗き込んで、メモリーさんに話しかける。

「どれー？」
「これだけど……」

メモリーさんが問題を指差す。
あ、わかった。結構、単純だ。
わかったにも関わらず、もちろん僕は知らない振り。

「わかんなーい」
「ハルにもわからないか……。じゃあ、仕方ないよね」
「パパー、これはー？」
「それはハルが解かないと。僕は答えを知っているもの」
「ヒント、ヒント頂戴」
「ヒントはあげない。だけど、どこまでできたのか……見せてくれる？」
「うん、わかった」

頷いて、カチカチとパズルをいじりだす。
こうやって……ここはこうして……。
で、ここで、これが難しくて……。この微調整で……ん～……。
しばらくして、できた状態をメモリーさんに見せる。

「はい、できた！」
「へ～、もうこんなに……。なーんだ、もう少しじゃない。ただ、最後は少し引っかかるかもね。もしも、行き詰ったら、少し……引き返してみるのもいいかもしれないよ」
「引き返すの？　もったいない」
「もったいないけど、間違った道に進んでいたら。もっと損するもの。一度くらい戻ってみるのも、価値ある行動だと思うよ」
「ん～、頑張ってみる」

僕がパズルを見ながら答えたら、メモリーさんが頭を撫でてくれる。

それが妙に嬉しくて、パズルを机の上に置いて、メモリーさんに構ってもらう。
メモリーさんに頭をわしゃわしゃしてもらったり、ギューっと抱きしめてもらったり、高い高いをしてもらったり。
最後は高い高いをしたままグルグルと回してもらった。

この年になってまで、こんなにくだらない事を本気で楽しいと思えるなんて想像もしていなかった。
本来なら恥ずかしがるべき物なのだろうか？
それとも、興味すらもてない物なのか？
実は単に見栄を張っているだけで、本当は誰しもが求めている物なのかもしれない。

僕が凄く楽しんでいたら、メモリーさんが僕を地面に下ろす。
ポンポンと頭を撫でて、終わりの合図。
やー、もっとー！
だだをこねる僕を見ない振りして、メモリーさんがソファーに寝転ぶ。

「あー、疲れた」
「パパー、高い高いして！」
「ほら、ハル。テレビ見よう。昨日録画しておいたアニメ、まだ見てないでしょ？」
「テレビ見る。でも、高い高い……」
「ほら、始まるよ。テレビに注目。飲み物とお菓子を用意するけど、ハルは何を飲みたい？」
「オレンジジュース」

僕が言ったら、メモリーさんが立ち上がって、おやつの用意を始める。

テレビを見ると、アニメのオープニング……。
じーっと見ていたら、メモリーさんが帰ってきて。
僕にジュースとお菓子をくれる。
そして、二人でアニメを見る。
あれ？　そういえば、高い高いをしてもらおうとしていたのに……。
上手く話を誤魔化されたかも。

大荷物〈メモリー編〉　★

ハルと一緒にグダグダと過ごしていたら、扉を叩く音が聞こえてくる。
これで何度目だろう？　もう覚えていない。
また報道陣か。そんな気分でスルーする。
しばらく放置していたら、外から声が聞こえてくる。

「進ちゃーん！　開けてくれへんかー？　怪しい者やないでー、お友達のリョウやー！」

一番ややこしそうな奴だ。
報道陣以上に会いたくない。
ネコ耳を伏せて気付かなかった振り。

はぁ……日和の身体はまだ帰ってこないのかな？
昨晩みたいにネコ耳をクニクニしてもらいたいのに……。
あれ……凄く気持ちよかった。
妄想しながら、ハルに問いかける。

「ねぇ、ハル……。日和はいる？」
「ママはいないの。朝からいないの」
「え……」

お出かけ中？　なーんだ、つまらないの。
早く帰ってきてよ、日和と日和の身体。
ぼうっとテレビを見ていたら、外からギターの音が。
続いて、聞こえてくるのがリョウの歌声。
それを耳にし、苛立ちを感じて立ち上がる。

上着のフードをかぶって、尻尾を服の中に入れて。
玄関まで行って、扉を開けるとリョウの姿が。ギターを片手に持ち、僕に向かって手を上げる。

「進ちゃん、おはようさん」
「人の家の前で、恋愛の歌なんて歌わないでよ。歌うのなら、せめて他の曲にして」
「わい、この曲お気にやねん。歌ってると、何か思い出しそうで」
「こんな所でそういう曲を歌われると、見た人が変な勘違いするかもしれないじゃない」
「別に構わんやん。現に仲良しやし」
「仲良しじゃないし！　事実、出会ったのは昨晩が初めてだよ。まだ友達ですらないよ」
「今の世の中、出会った日から、親友が普通やで」

楽しげなリョウ。それを見ながら、僕が考える事は一つ。
どうやってこいつを追い払おう？　警察を呼んでもいいのかな？

僕が眉をしかめていたら、不意にリョウが僕の肩を叩く。
そのまま僕を押しのけ、勝手に部屋の中に入ってくる。
打ち切れそうな僕を無視して、リョウが言う。

「まぁ、こんな所で立ち話もなんやし。部屋に入らせてもらうでー」
「既に入ってるじゃん！　っていうか、出て行ってよ！」
「そんな事言わんといてや。ほんのちょっとやさかい、お邪魔してもええやろ？」

ズカズカと部屋に侵入するリョウ。
僕がいくら苦情を言っても聞き入れてくれない。

部屋の中を見まわしながら、観察している。
そんなリョウを見ていると、何か……胃が痛くなってきた。
蒼白しながら、お腹を押さえる僕。そんな僕の足元へと駆けてくるのはハル。

「パパ～、大丈夫？」
「うん……大丈夫」
「ねぇ、あの人……」
「大丈夫、すぐに追い返すから。ハルは……心配しなくていいよ」
「うん……」

よじよじと僕の手の中に潜りこむハルを抱っこして、扉のカギを閉める。
とにかく要件を聞いて、さっさと追い出そう。
リョウをキッチンへ誘導して、椅子に座らせ。お茶も出さずに話を始める。
僕も椅子に座って、ハルを膝の上に置く。

「それで、何の用？」
「それがやな。なっがい話やねん。全部説明しようと思ったら、丸一日は掛るかもしれんのや」
「一分でまとめて。一分経ったら、強制的に追い出すから」

そう言って、リョウから目を逸らして。ハルに目を向ける。
不安げなハル。僕とリョウを交互に見て、最後はじっと僕を見上げる。
そんなハルの頭を撫でて和んでいたら、リョウの声が返ってきた。

「わかった、手短に言うから。よう聞いてや。ミラッチとシバ君がグループを抜けてもうてん。それで、新メンバーが必要やねんけど

……」
「僕は嫌だよ」
「こんなこと頼めるの……。進ちゃんしかおらんねん」
「知り合い少ないね。でも、嫌だよ」
「そんなこと言わんといてや。一回でいいねん。今回限りやさかい、お願いでけへんやろうか？」
「今回限りって言葉。昨日も聞いたよ」

僕が言ったら、リョウが黙り込む。後、十秒程……リョウが口を開く。

「ほんまに頼めるの進ちゃんしか……」
「あ、一分経ったね。じゃあ、サヨナラ」
「ちょい待ってや！　いくらなんでも、愛想なさすぎやで！」
「愛想なんてなくて結構。僕には僕の生活があるの。いい加減に、そろそろ出て行ってくれない？」
「嫌やで～。そっちがその気なら、わいもグループに入ってもらうまでは出て行かへんで～。ねばったるわ。わいはしつこいからなぁ～」

そう言って、無駄に机にしがみ付くリョウ。
うわぁー、ＫＹと同じオーラを感じる。
ため息をついて、ハルを見ると僕の手を握って遊んでいる。
可愛い顔して遊ぶハルに僕が囁く。

「ねぇ、ハル……。お願いがあるんだけど……」
「なぁに？　パパ？」

ハルが僕を見上げる。そして、僕がハルに口を開く。

十数分が経過して、ダンボールを組み立てる僕。
その隣では、ハルがリョウを突いている。
ハルにお願いして、リョウに一撃必殺を入れてもらったんだ。
リョウは気を失っているから、しばらくは動かないはず。

以前、ＫＹから貰ったダンボール。案外に大きくて役に立つ。
初めはタマゴが入っていたものだけど、これなら人間も入りそうだ。
頑丈にダンボールを組み立てて、今度は紐を用意する。

リョウの手足を紐で縛っていたら、ハルがその様子を見て話し出す。

「パパはこういう事するの好きなの？」
「好きじゃないよ。何でそんな事を聞くの？」
「僕も前にガムテープでグルグルされた」
「あぁ……それはね。それくらいしないと、ハルが付いてきそうだったから。まぁ、意味なかったけどね」
「この人も付いてくるの？」
「付いてきそうだね。だから、早く追い出さないと……」

よし、手足は縛った。後は口か……。
ふとハルを見ると、目を輝かしながら手を前に出している。
縛って欲しいの？　聞くのも面倒だから、縛ってみる。
ハルの手に軽く紐を巻いてリボン結び。一人でも簡単に解ける結び方。
リョウの場合はまる結び？　とにかく固く結んでおいた。一生解けないように……。

ハルが楽しげに手を振りながら、僕に言う。
「パパもグルグルにしてほしい？」
「いや、僕はいいよ。これを片付けないといけないから」
「楽しいよ～」
「じゃあ、ハルが僕も分もグルグルになってね」
「わかった～」
そう言って、ハルが余った紐で遊び出す。
その間に、僕は薄いタオルを探して。
リョウの口にしばりつけて、リョウをダンボールに押し込めて。
ダンボールの蓋を閉めて、ガムテープを貼って。ふぅ……完成だ。
＞ｉ１９０３０―２３１＜
さて、これをどうしようか？
紐で遊ぶハルから、紐をもぎ取って。後片づけをしながら、考える。
ゴミ捨て場に持っていく程の勇気は流石にないし……。
誰か貰ってくれる人はいないかな？
そんな時に、手頃な電話が掛ってくる。
相手は雫。これはいい。雫と話をしていると、向こうからもグループへの誘い話。
松元君という子がお願いしているそうだけど、もちろん僕はお断りだ。
雫も僕の考えている事を、何となく理解しているのだろう。無理を言ってはこなかった。
次の話で、僕が雫にお願いをする。

この大荷物を移動させてもらう話。
松元君の所へ持って行ってもらおう。
まぁ、こんなに重い物なんて、雫は持てないだろうから。
荷物持ちはハルに頼んで、雫は道案内で。僕は居残り。これで何とかなりそうだ。

僕らが雫を待っていたら、すぐにチャイムの音が鳴った。
早いな……。丁度帰り道だったのかな？
フードをかぶって、尻尾を仕舞って。玄関を開けると、雫がいたけど……。
他の三名を見て、ギョッとする。だって、その中に日和の身体が……。

わかってはいるけど……〈メモリー編〉（前書き）

いまやハルはメモリーに敬語もつかわない。
完璧に家族です。

わかってはいるけど……〈メモリー編〉

妙な事が起きるのかと警戒していたけど、そういう事もなく。
普段と同じように時間が流れる。
皆で少しお喋りをした後に、例のダンボールを松元君の元へと持って行ってもらう。

お喋りをしている間に……半分の子の一人と一対一で話をする機会があったので。少し話を伺ってみた。

日和が身体を使わせてもらっているのは、恵梨という子らしい。
その子はここ最近、頻繁に夢を見るようだ。
楽しい夢……それはきっと僕と日和の日常の事。
もちろん、本人は気づいちゃいない。
その夢が僕達の生活風景だという事に……。

もう一人の梨香という子は、そういう夢を見ないらしい。
という事は、きっと日和に取り憑かれた事がないのだろう。
気が強そうな性格をしているから、恵梨のように半透明になる事が少ないのかな？
それとも、単に日和と会う機会がないだけ？
とにかく、こちらは問題ないようだ。

だけど……困ったな。日和の影響を受け過ぎている。
夢に見るのはまだいいとして。
恵梨が僕のためにいれてくれた紅茶に氷が入っていたのには驚いた。
僕が猫舌である事は説明していなかったから。
無意識のうちに、身体に染みついた習慣だと考えるべきだけど……。

このままいくと心まで影響されかねない。それは……困る。
あの子が勘違いをして、日和の考えを自分の考えだと思い込んでしまうと。
下手をしたら、あの子達を元に戻せなくなってしまう恐れがある。

本当はもう……元に戻してあげるべきだろう。
だけど、今の生活を手放す事が恐ろしい。
もう二度と日和と会う事ができないなんて。
考えるだけで、悲しくて、辛くて。
今の僕に……耐えられるだろうか？
正直に言って、自信はない。

まだ……少し。後……少しくらい。
そんな事を言い続けたとして、いつまで許されるのだろう。
許される領域を超えてしまったなら、その罪は誰に振りかかるのかな？
きっとそれは……選択肢を与えられた僕の責任。

フフッ……まぁ、いいさ。
その責任……一つ残らずかぶってやろう。
だから、今だけは……。

仕事をしながら、日和とハルを待つ。
それにしても、日和の中身……。どこに行ったんだろう？
後で話を聞いてみないと、気になって仕方がない。

しばらくして、チャイムの音が。
玄関に向かうと、大人姿のハルが帰ってきていた。

ハルには合鍵を渡してあるから、とりあえずチャイムだけ押したみたい。
ハルが鍵を閉めながら、僕に言う。

「リョウさんを渡したら、松元君は驚いていたよ」
「だろうね」
「そうそう。今日はお母さん、帰ってくるの遅いみたい」
「え？　日和に会ったの？」
「うん、あの……恵梨さんと梨香さんがどういう状況にあるのか調べているんだって。『私は研究家なのだ～。えらいでしょ？』とか言ってたよ」
「ということは……雫達が来た時に。日和もいたの？」
「うん、ちゃっかりね。凄く僕にアピールしてきたけど……。あまりにもうるさかったから、スルーしてたの。そろそろ僕、ノイローゼになりそう」
「最近の日和は元気だから。フフッ、我慢して、構ってあげて。僕には見えないし……」

僕が言ったら、ハルがクスクス笑い出す。

「その元気が余って、まだ研究するんだって。恵梨さんに付いてったよ。それでもって、帰りに本屋に寄るかもとか言っていたよ」
「そっか……じゃあ、帰りは遅れるかな？」
「ご飯はどうするの？」
「仕方ない、たまには僕が作るか」
「お父さんの手作りかぁ～。メニューは何？」
「そうだね……シーフードカレー……」
「わー、豪華！」
「……うどん、とか」

僕の言葉を聞いて、ハルが言葉を無くす。続いて、眉をしかめながら言う。

「ねぇ、お父さん。お父さんの料理って……麺類から離れられないの？」

「無理だね、好きだから」

「一日一食は必ず麺類だよね」

「大丈夫だよ。ご飯と大して変わらないもの」

「うーん、そうなのかな？」

首を傾げるハルに声を掛けて、夕食の支度を手伝ってもらう。

さぁ、美味しい夕食を作らなくちゃ。

日和が驚くくらいに美味しいカレーに……なるといいな。

プレゼント〈秋山編〉　★

ラッラッラ～。あの子の後をつけて、皆が解散して。
あの子が……一人で橋の下に向かおうとした頃に、身体を借りる。
そのまますぐに財布の中を確認。
うーん、大丈夫！　後で返すから、今だけ使わせてもらおう。

本屋に寄って、本を買って。
その足で、雑貨屋さんに寄って。必要な物を買っていたら、ふと目に付く物。
これ……上野君が好きそうだな。
あ、こっちはハル君が気に入りそう。
フフッ、二人にお土産ね。

たくさん買い物をした後に、浮かれた気分でマンションに向かう。
二人共、喜んでくれると嬉しいな。

家に帰って、チャイムを鳴らすと。ハル君が鍵を開けてくれる。
部屋に入って、気づく事。何だか良い香りがするな。

「この香りはカレーうどんかな？」
「うーん、おしい。正解はシーフードカレーうどんだよ。だけど、凄いね……お母さん。躊躇なく最後に『うどん』って言葉を入れるなんて」
「冷蔵庫の中にうどんが入っていたから、上野君なら絶対にカレーご飯よりもカレーうどんだと思ったの。だけど、シーフードはちょっと予想外」

私とハル君がお喋りをしながら、キッチンへ向かうと。
上野君がしっかりと料理を作っている。振りかえって、私に言う。

「お帰り、日和。ご飯できたけど、先に食べる？」
「あーん、まるで亭主になった気分。『お風呂が先？　ご飯が先？』って言葉、本来は私が使うのにな。上野君に言われるなんて思ってなかった。何だか嬉しい～」
「もう～、何か恥ずかしいから。そんな事で浮かれないでよ。それより、どうするの？」
「もちろん、ご飯を食べましょ。せっかく暖かいご飯があるんだもの。早く食べたいよね、ハル君？」
「うん、食べたい。おかわりはできそう？」

ハル君が上野君に問いかける。上野君が笑顔で返答。

「大丈夫。ハルがたくさん食べると思って、多めに作ってるから」
「凄く美味しかったら、私もおかわりしちゃうかも」
「それでその子が太ったら、日和のせいだね」

上野君がニヤニヤしながら、私を見る。すぐに私が言ってやる。

「大丈夫だよ。若い時には太らなきゃいけないって、お母さんがよく言っていたもの」
「そんな事言ってたっけ？」
「健康の印だよ、健康の印」

適当に誤魔化して、お皿を用意する私。
ハル君がコップを用意してくれて。上野君が最後の仕上げ。
完成した夕食を並べて、皆で席につく。

手を合わせて、頂きます。
お喋りをしながら、楽しい夕食。
プレゼントは……後のお楽しみ。

夕食の後。ソファーに座って、紅茶を飲みながら。皆でテレビを見る。
ハル君は子ども姿に戻って、テレビに夢中。
私は本を読んで、上野君はクロスワード。
上野君……学習してなーい。
前に間違えた問題を同じように間違えて首を傾げている。
そんな上野君が微笑ましい。

そろそろかな？
おもむろに立ち上がり、プレゼントを取りに行く。
小さな紙袋を持ってきて、元の位置……上野君の隣に座る。

「今日は二人にお土産があるのだぁ～」
「お土産？　何だろう？」と上野君。
「何？　何なの？　ママ？」

ハル君が尾を振りながら、私に近づいてくる。
それを見て、袋の中に手を入れる私。
ハル君へのお土産を取り出して、ハル君にプレゼントする。

「ハル君へのお土産は、手で握るとピーピー鳴るぬいぐるみだよ。
その名もピーピーちゃん！」
「……日和。いくらハルでもそんな物」

呆れ顔を見せる上野君の下で、ハル君がぬいぐるみを凝視する。
駄目だったかな？
そう思っていたら、次第にハル君の尾の振れる速度が上がっていく。
ぬいぐるみを何度か握って、音を鳴るのを確認して。更に尾がパタパタと揺れる。
ハル君の目が輝きだして、一人で興奮しだす。
テレビもそっちのけに、ぬいぐるみを投げて、取りに行って。投げて、取りに行って。を繰り返す。
ドタバタと走り回るハル君を見て、上野君が注意。

「こら、ハル！　夜中だから、静かにしてよ！」
「はーい！」

ハル君がぬいぐるみを持って帰ってくる。私に向いて、口を開く。

「ママー。ありがとー！」
「よかったね～、ハル君」
「うん、すっごく嬉しい！　大切にする！」
「フフッ、ありがとう」

気に入ってくれたみたい。良かった。
ぬいぐるみを握りながら、遊ぶハル君を見て。ホッとする私。
その隣で、上野君が呟く。

「やっぱり犬だね……」
「可愛いね」と私。
「ねぇ、日和……まさかと思うけど」

上野君が私に目を向ける。ちょっと困り顔。
まさかなんだけど、駄目だったかな？

私がそっと上野君に袋を見せる。
上野君が袋の中に手を入れて、取り出したのはマタタビと猫じゃらし。
それを見て、上野君が膨れ上がる。

「僕……猫じゃないし」
「気に入ると思ったんだけどな」
「どうするの、これ？　使い道がないよ」

上野君に突き返されるプレゼント。
うーん、とりあえず……。
クロスワードを再開する上野君の隣で、マタタビの袋を開いてみる。
これは木の枝のマタタビ。
粉とかスプレーもあったけど、マタタビって言えば木のイメージだったから。

一本取り出して、上野君の隣でちらつかせる。
反応なし。やっぱり興味ないのかな？
そう思い始めた頃に、上野君が私に振り替える。不満げな顔で私に言う。

「日和～、いくら何でも……」
「ほら、良い香りだよ。上野君」

文句を言いたげな上野君の鼻先にマタタビを持ってくる。
すると上野君の様子が一変。
不満げな顔が見る見るうちに、うっとりした顔に変貌。
クンクンとマタタビの匂いを嗅いだ後、ペロペロとマタタビを舐め始める。
あ、やっぱり好きだったみたい。

上野君の様子を見て、安心する私。

　マタタビを嗅いだり、噛んだり、舐めたり。しながら、最後は私にすり寄ってくる。
私の膝を枕にしながら、ゴロゴロと喉を鳴らす上野君。
せっかくだから、猫じゃらしも使わないと。
マタタビを取り上げて、代わりに、猫じゃらしを前に持っていくと。
上野君がその先を手で掴んで、噛み始める。
フフッ、すっごく幸せそう。

＞ｉ１９２３０―２３１＜

　次第に眠くなってきたのか、目を瞑りだす上野君。
その頭を撫でてあげて、ネコ耳をクニクニしながら、尻尾もウニウニさわる。
あーん、気持ちいい。猫って、サラサラね。

　上野君と私の様子に気が付いて、今度はハル君がやってくる。
私の隣、上野君のいない方に座って、尾をパタパタ。
そんなハル君の頭を撫でて、耳をクニクニしたら。
こちらも気持ちよさそうに、眠り始めた。
二人共、耳をクニクニされるのが好きみたい。

　私の家は動物を飼えなかったからな。
お母さんが昔に愛犬を事故で亡くして以来、悲しみのあまりに動物を飼えなくなったそうだから。
私は動物が好きだったけど、自分自身の体調管理もできないから。
飼いたいなんて言えなかったし。

　今は凄く幸せ。

好きな人がいて、子供もいて、動物もいて。
ちょっと形は違うけれど、なんて素敵な家族像。

依存症〈ハル編〉（前書き）

中毒になっています。（＾－＾）

ガサゴソという音が聞こえてきて目が覚める。
今は何時？　わからないけど、朝っぽい。
カーテン越しから、光がさしているから。夜中ではないと思う。
何の音かと思い、ベッドから起き上がってキッチンへ向かうと、メモリーさんを発見。

棚という棚を開け散らかして何かを探しているようだ。
その後ろでは、幽霊バージョンの秋山さんがメモリーさんの様子を窺っている。
美味しそうな朝食の香りが漂う中、僕がメモリーさんに問いかける。

「何してるの？　パパ？」
「探し物みたいね」

答えたのは秋山さん。
メモリーさんは必死になりながら何かを探している。

「あれ～？　ない～、ない～」
「ねぇ、パパ。聞こえてる？」
「え？　あぁ、おはよう。ハル。あ、そうそう。日和が朝食を作ってくれたみたいだから。勝手に食べてね」
「今日の朝食は洋食風味にしてみました。パンに合うおかずだよ。だけど、ご飯がよかったら。炊いてあるから、好きな方を食べてね」
と秋山さん。
「ありがとう、ママ」

ヘラッと笑顔で秋山さんに目を向けると、秋山さんも微笑んでく

れる。
そして、僕がメモリーさんに再度質問。
「それで、パパは何をしてるの？」
「え……？　ちょっと……探し物だよ」
そう言って、三秒ほど僕を見つめるメモリーさん。
不意に思いきったような顔で僕に言う。
「ねぇ、ハル……。日和は……ここにいる？」
「うん、パパの後ろ」
「あのね、聞いて欲しい事があるんだけど……」
「なぁに？　上野君？　私にわかる事かな？」
秋山さんが口を開く。
それを知ってか知らずか、メモリーさんがもじもじしながら小声で囁く。
「あのね……。昨日のマタタビ……どこに置いたのか、聞いて欲しいの」
「……マタタビ？」
「いや……その……」
みるみるうちにメモリーさんの顔が赤くなって、ネコ耳と尻尾がフニャフニャ動きだす。
ふーん……マタタビか。あんな物のどこがいいのだろう？
ピーピーちゃんの方がよっぽど萌えるのに。
僕が秋山さんに目を向けると、秋山さんがベッドを指差す。
「ベッドの横の引き出しに入れたよ」

「ヘッドの横の引き出しだって」僕がリピート。
「ありがとう！　助かるよ！」

　メモリーさんが言って、ベッドに駆けて行く。
引き出しを開けて、マタタビの入った袋を発見して。めちゃくちゃ嬉しそうな顔をする。
そのまま袋からマタタビを一本取り出し、残りのマタタビを大事に仕舞って。
取り出したマタタビを持ったまま、ベッドにゴロンッ。
かじかじとマタタビをかじりながら、布団の中に潜って行く。

　ちょっとー！？　せめて部屋を掃除して下さいよー！
ベッドに駆けよって、僕が言う。

「パパー、お部屋のお掃除しなきゃいけないよ」
「ニャ～」
「ねぇ、パパ。マタタビもいいけど、お掃除は？」
「ハルのピーピーちゃんも引き出しに入っていたよ」

　メモリーさんの言葉を聞いて、すぐに引き出しを開けてみる。
ピーピーちゃんを発見。
ワーイ！
大喜びでそれを取り出し。
フニフニと押して、投げて、取りに行って、遊び出す。
お掃除なんて後でいいや。

　僕らが好き勝手なことをしていたら、秋山さんが苦笑しながら一言。

「何だか大変な物をプレゼントしちゃったみたいね。二人共、玩具

にあまり依存しすぎちゃ駄目だよ。って言っても、何だか無理な気配かな？　今度から二人のわからないところに隠して、遊ぶ時間を決めなくちゃいけないね」

楽しい日々に変化が訪れると、背筋が凍りつくような恐怖を覚える。
何事も少し道を間違えれば、反転するんだ。
それは、ずっと昔に学んだ一つの法則。

何の不満もない暮らしが訪れてから、何日が経過しただろう？
まだほんのわずかな気がして仕方がない。
そんなある日……あの子が家にやってくる。
普段から日和が身体を借りる子。恵梨という名の子……。

昼間に姿を見た時は驚いた。
だって、学校に行っているとばかりに思っていたから。
日和が入っているのかと思ったけど、そうではないらしい。
おどおどしながら、話し出すのは恵梨の姿。

恵梨の話を聞いて、すぐに理解する。
授業は梨香が受けているらしい。
だから、恵梨の行き場がなかったのだろう。
部屋を勧めて、一緒に昼食を食べる事に。

その後、いきなり真面目な話をするのも、乗り気になれなくて。
ハルを連れて、三人でゲームセンターに遊びに行く。
ゲームセンターでは偶然にも江川先生と出会い。喋り込んで、ゲームでバトルして。

途中でちび助が乱入してきて、少しゴタゴタしたけれど。難なく話が進んでいく。

どうせ行く宛てもないだろうから、恵梨を連れて家に帰って。夕食を作り始める。
　ちび助が付きまとってくるから、外で食べる余裕はなかった。
あのちび助は一体何を考えているんだろう？　鬱陶しいったら、ありゃしない。

　夕食を食べた後、恵梨に真実を話す僕。
僕が『橋』をしていて、恵梨達の分離に気づいている事。
恵梨の夢と日和について。
全てを語った後……恵梨に選択肢を与える。
今すぐにもとに戻してほしいか……。もとに戻るのは後にするか……。

　選ぶのは恵梨だ。僕じゃない。
自分の立場や日和の事について、黙っていてもよかったのだけれど。
何となく……話の流れで話してしまった。
話し終わった後に、少し後悔しながら仕事部屋に行く。

　どちらにするか……。
気持ちが決まったら、僕の所へ来るように言っておいた。
仕事部屋の椅子に座りながら、考える。
もしも、戻りたいなんて言われたらどうしよう？
もとに戻すしか……ないよね。

　パソコンに向かいながら、じっと時を待つ。
時間が経てば経つほどに、不安が心に増していく。
これをきっかけに日和と会えなくなるなんて、考えるだけで気分が滅入ってきて。

どんどん悪い方向へと想像してしまい、何か涙まで出てきた。

一人でため息をついていたら、ノックの音が聞こえてくる。
僕の身体がビクついて、ゆっくりと扉に振り替える。
少ししてから、遅れた返事。

「入って……いいよ」

不安げな顔で待っていたら、扉が開いて恵梨が入ってくる。
僕の前まで歩いてきて、立ち止る。
急に怖くなって、僕が恵梨から目を逸らす。
パソコンをする振りをしながら、口を開く。

「それで……どうするの？」

僕が問いかけても、なかなか返ってこない返事。
あ……オワタ。
そう勝手に思い込んで、今後の引きこもり生活の予定を立てていたら。
背中に感じる人の気配。
不意に恵梨が僕の両肩に手を置き、そのまま僕の身体に手を回す。
背後から聞こえてくるのは恵梨の声。

「優しいね……」
「……日和？」

同じ声でも違う雰囲気。それを敏感に感じ取る。
僕から手を離す女の子に対して、すぐに椅子を回して身体を向ける。
僕と女の子の目が合って、彼女が僕に微笑んでくれる。

「もう少し……時間をくれるって。自分も辛いのにね……」
「……ありがとう。本当に……ありがとう」

良かった……良かった。
安心でどっと疲れが噴き出てくる。
胸を撫で下ろす僕に向いて、日和が言う。

「上野君、泣いていたのかな？　顔が赤いよ」
「だって……もう無理だと思っていたもの。もう日和に会えないと思ったら、凄く気持ちが塞いじゃって……」
「上野君……。でもね……」
「わ、わかってる。こんな事をしちゃいけないのはわかってるつもりだよ。どうせいずれは会えなくなる事だって、ちゃんと理解しているよ」

何か言いたげな日和を見て、凄く悲しくなってくる。
目から涙がこぼれてきて、胸が痛くなってくる。
僕が落ち込んでいたら、日和が手を伸ばしてきて。僕を優しく抱きしめてくれる。
すると、不安も消し飛んで暖かい安心感に包まれる。

僕を抱きしめながら、日和が口を開く。

「大切にしなくちゃね……。普通は貰えない貴重な時間だから……」
「うん……」
「いつの日か……今日を振り返って、良かったと思える。そんな暮らしをしようね」
「うん……」

日和の言葉に頷きながら、日和をギュッと抱きしめ返す。

これが幸せなんだと肌で感じながら、目を瞑る。
いつかは消えてしまう幸せ。
とても貴重で、とても脆い。平凡な日常。
きっといつの日か……今日を思い返す日がくるのだろうな。

調教〈メモリー編〉　★（前書き）

今回の目標は、ちょいエロっぽい話。
エロではない……だろうか？　一般小説だし。（＾－＾）
無茶な部分は時間軸が吹っ飛びます。
ちなみに、この話の一つ前の運動会は『彼女のカ・タ・チ☆』で公開予定。
今回の話を一言でまとめれば『メモリーが崩壊していく道のり』みたいな？

調教〈メモリー編〉★

ゴージャスな部屋。扉には鍵が掛り、窓を開けることもできない。
放心気味の僕はベッドの上に座り込み、とある人を待っている。
日和でもなく恵梨でもない。僕が待つのはお嬢様……菊池瑠菜だ。

フフッ……フフフッ……。今日は何をされるんだろう？
想像するだけで、身体が熱い……。
お嬢様との約束は一週間。
それまでに、僕の気が変になる確率１００％。
逃げ場のない空間。僕はもう……駄目かもしれない。

どうしてこんな事になってしまったのか。
思い返せば、運動会……。
あんな約束するんじゃなかった。
たったの一言、口から漏れた言葉が僕の人生を崩壊させる。

白組が勝つか、赤組が勝つか。
僕が賭けたのは白組だ、お嬢様は赤組。
賭けに負けた方は勝った方の願い事を一つ叶えるという約束。
確実に無理な願いは排除されるが。それ以外は何でもあり……その条件が悪かった。

僕の願いは『ストーカーを止めてもらう事』。
鬱陶しいお嬢様がいなくなれば、僕の気分も楽になるから。
それに対して、お嬢様の願いは『一週間の間、僕に命令できる権利』。

勝てると思ったんだ。こっちには雫がいるし、恵梨だっている。
お嬢様は不参加だから、手を抜く奴もいない。
未来まで途中参加してくれて、確実に良い方向へと話が進んでいたのに……。

全ての原因はリョウの奴。あいつが最後の最後で捻じ曲げやがった。
未来が言っていた通り、最低な奴だ。

リョウのおかげで赤組が勝利してしまい。
僕が逃亡しようとしていたら、未来に捕まってしまう。
良し悪しは置いておいて、未来は約束を守る主義だから。
薬で僕を眠らせて……。多分、僕をお嬢様に渡したのだろう。

僕が目を覚ました時には、この部屋にいた。
家庭的な空気はなくて、高級ホテルのような部屋。
扉も窓も鍵が掛って、開かない。
ズボンに入れていた携帯電話もなくなっていて。
あげくの果てには、胸ポケットのボールペン……『橋』が消えている。

＞ｉ２００１８―２３１＜

蒼白する僕。そんな中、ふと気が付けばちび助が立っていた。ちび助が僕に微笑む。

「あら、おはよう」

「おい、ちび助。何のマネだよ？　早くあのボールペンを返せよ！」
「駄目よ、約束したじゃない」
「約束……？」
「もう忘れたの？　私が賭けに勝ったんだから。一週間の間、上野は私の言いなりよ」

バカらしい。負けた僕には関係ない。面白くないから、言ってやる。

「証拠は？　そんな約束……した覚えはないよ」
「知らない振りをしたって駄目よ。あなたのビデオカメラに証拠が入っているもの。あなたが自分で言っているわ。それに、あれだけ人がいたのよ。今更、何か言える立場かしら？」
「くっ……」

あんなビデオ取るんじゃなかった。
ちび助が負けて白を切った時に、証拠として見せつけてやろうと思っていたら。
まさか自分に降りかかってくるなんて……。

僕が押し黙っていたら、ちび助が僕に近づいてくる。
僕に手を伸ばそうとするけど、すぐに僕がちび助を避ける。
ちび助に警戒しながら、僕が言う。

「バカみたい、こんな約束を真に受けて。大体、君は何なの？　僕の生活の邪魔ばかりして。嫌がらせなら他でやってよね」
「……」

不満げな顔をするちび助。その姿を見ていると清々する。
僕がちょっと調子に乗っていたら、ちび助が膨れながら口を開く。

「上野は……私の事が嫌いなの？」
「うん！」

笑顔で返答する僕。
それを目にして、ちび助からどす黒いオーラが発せられる。
構うもんか。本当に嫌いなんだから。

この時、僕はまだ気づいていない。
バカだから、ここがどこだかちゃんと理解していなかった。
少し考えればわかったはずだ……。
ちび助に対して、勝ち目がない事に。
ただ自分が優勢だと思いたかったのだろう。
ここで静かにしていれば、救われたかもしれないのに……。

強気な発言をする僕をしばらく眺めていたちび助が、不意に冷笑を浮かべる。
ちび助の様子を見て、ゾッと背筋が寒くなる。
少しビビる僕に向いて、ちび助が思わぬ発言だ。

「そう言えば、上野……好きな物はある？」
「好きな物？　まさか、僕のパソコン……」
「そんな物じゃないわ。もっと癖になりそうな物」
「癖……？　ラーメン？」

質問の意味を理解できなくて、僕が首を傾げる。
ちび助は楽しげだ。何やらよからぬ事を企んでいる。
じっくりと考えた後、僕の脳内をかすめる言葉。
サッと顔色が悪くなり、鼻を押さえてちび助を見る。すぐにちび助が口を開く。

「やっと思い出したの？　私の可愛い子猫ちゃん」
「君、バカでしょ？　僕はマタタビの一本や二本で懐かないよ」
「私を誰だと思っているの？　そんな小さな量、あっても無意味に等しいわ。どうせなら、多い方がいいわよね？　上野もそう思うでしょ？」
「さぁ……どうだろうね？」

マズイ……。
こんな所に大量のマタタビなんて持って来られたら、気絶する。
正直に言って、一本でもかなりヤバいのに。
大量なんて……呼吸困難になるかもしれない。

早く逃げないと！　殺される！
でも、どこへ逃げればいいのだろう？
逃げる場所がない。
僕がキョロキョロと辺りを見回していたら、ちび助が扉横の壁に手を伸ばす。
ちび助が壁に触れると妙なスイッチが現れる。
何の隠しスイッチだよ？　バカな突っ込みをしている間に、ちび助がボタンを押してしまう。

直後、部屋のあちこちからシューという何かが漏れる音。
それと共に、部屋の香りが一変する。
部屋に散漫するのはマタタビの香り。
しかも、超高濃度。鼻を塞いでいても意味がない。

すぐにベッドに駆けよって、布団を手に取り鼻を隠す。
これで一体、何分持つだろう？　多分……持って一分がいいところ。
必死にマタタビの香りから逃げ惑う僕を見ながら、ちび助は嬉しそ

う。僕に近づいて、口を開く。

「マタタビになんて、興味ないんでしょ？」

「や、止めてよ……。こんな事したら、僕……息ができなくなっちゃう……」

「さっきは興味ないって言ったじゃない」

「ふぅ……ふぃ……」

はぁ……はぁ……はぁ……。

ちび助と会話ができない。

身体が熱くなって、目眩がする。

頭がぼうっとしてきて、足に力が入らない。

気持ちいいを通り越して、逆に辛くて。目に涙を浮かべる僕。

僕が死に掛けていたら、ちび助が僕の顔に手を伸ばす。

ちび助の手が僕の頬に触れた瞬間、身体が勝手に反応する。

ビクッと動いて、泣いてしまう僕。身体が熱くて、凄く……変な気分。

必死に呼吸する僕の頭を撫でながら、ちび助が言う。

「気持ちいいの？　上野？」

「あぅ……あぅ……あ……はぁ……」

「フフッ……。そんなに気持ちがいいのなら、もっと香りを吸いなさい」

そう言って、僕の持っていた布団を取り上げる。

力が出ないから、ちび助に布団を取り上げられて。

香りを防ぐ物がなくなり、ベッドに仰向けに倒れる僕。

辛うじて保たれる意識はほんの些細なもの。
僕が半死していたら、ちび助の顔が眼に映る。
またもや僕に手を伸ばしてきて、今度はネコ耳を触りだす。
まさかこんなに敏感な場所を触られるなんて思っていなかった僕は反射的に叫んでしまう。

「はぁう！？　あ……やぁっ！？？　あ……あぁ！？」

ヤバエロい声だ。自分で言うのもなんだけど……。
耳を触られただけで、こんな声を出す奴、未だかつて見たことない。
エロゲーですら、見たことない。
僕の反応を目にして、ちび助がもの凄く嬉しそうな顔をしている。
ドSな予感。

その後、ちび助に撫でまわされる。
服の上からペタペタ触られるだけなのに、凄く感じてしまう。
もう死ぬ……。
普通ならこんな事にならないのだろう。
マタタビの力は強大だ。
半開きになった口を閉じる事もできなくて、よだれが出てきた。うわぁ、汚い。

気を失いそうな僕を見ながら、ちび助が話し出す。

「今日の上野は可愛いわ。いつもは可愛くないのに」
「あ……あ……」
「フフッ、良い子ね。せっかくだから、キスをしてあげるわ」

ちび助の顔が近づいてきて、僕達の唇が触れる。
そのままドエロいキスだ。エロゲー並の超ハイレベルな奴。

口の中を舐めまわされて、そのまま気が遠くなる。
遠のく意識。聞こえてくるのは、ちび助の笑い声。

「フフッ、こんなのはまだ序の口よ。明日はもっと楽しい事をするわよ」

調教〈メモリー編2〉（前書き）

メモリーが詰んだ……。
早っ！　マジ弱い、この主人公。
まぁ、題名の時点で詰んでるけど。

調教〈メモリー編2〉

ここは……どこ？
目を覚まして、身体を起こす。
見覚えのない部屋。
僕は……何をしていたんだっけ？
ぼうっとしながら、考える。
最後に覚えている事は、ちび助とのあのやり取り。思い出すだけで、イライラする。

注意すれば香るマタタビの匂い。
だけど、鼻がイカれてしまって。ほとんど香りがわからない。
それなのに、身体はだるくて妙に火照っている。
マタタビの効果は消えていないよう。

何とか立ち上がって、辺りを見回す。ちび助はいないみたいだ。
不意に目に付くのは、机の上のメモ用紙。
近づいて覗き込むと、可愛い文字で僕宛てに文章が書かれている。

『おはよう、気が付いたようね。私は学校があるから、上野はその部屋で大人しくしていなさい。欲しい物があれば、玲を呼ぶと良いわ。机の上にあるベルを鳴らして。外に出ようとしても無駄よ。扉や窓には鍵が掛っているし、玲から逃げられるわけもないから。それじゃあ、そこで遊んでいるのよ。私の可愛い子猫ちゃん』

殴ってやりたい気分になる。
何が子猫ちゃんだ。こいつ、僕を舐めてるのか？
ため息をついて、扉に近づき、ノブを回すけど開かない。
窓も無理だろう。他に出口は……。

天井裏や床下など、逃げ場はないか探し回るけど。出られる場所は一つもない。
疲れてきたから、勝手にお風呂に入って、勝手に食事をして。
ちょっと休憩しながら、考える。
だけど、やっぱり……名案はない。

どうしよう？　試しに玲を呼んでみるか？
隙をついて逃げられるかも……。
いや、無理だな。あんな超人に勝てるわけない。
ハルなら勝てるかもしれないが、僕には無理だ。

全ての希望が断たれてしまい、落ち込む僕。
しばらく落ち込んだ後に、やけくそになって扉の前で騒ぎだす。

「ここから、出してよ！　僕は何も悪い事してないじゃない！　警察呼ぶぞ、こらー！」

扉を本気で叩きながら、暴言を吐き続ける。

「だせっつってんだろうが！　ぶっ殺すぞ！　お前ら！　今の僕はマジ切れなんだからな！　ここから出たらただじゃおかないからな！」

騒いで、騒いで、騒いで、騒いで。
最後は力尽きて、地面に座り込む。
流石……高級ホテルだ。扉をいくら叩いても、壊れそうにない。
今度は心が萎えてきて、泣きそうな声で叫び出す。

「お願いだから、出してよ！　僕が悪かったから！　反省するから

！　今度から、嘘つかないから！　許してよ！」

僕の声……いくら騒いでも、優しい人には届かない。
聞こえている人もいるだろうけど、全てはお嬢様……ちび助の味方だ。
何せ、ここはちび助の家みたいだもの。
いくら僕が騒いだところで無意味なのか……。

気持ちが塞いで、寂しくなってきて。
ベッドに行って、布団に潜る。
今頃、日和はどうしているんだろう？
僕の近くにいるのかな？
それとも、ハルと一緒にいるのかな？
後、六日なんて……。僕、耐えられないよ。

心地よい眠りの中、不意に音が耳に入る。
鍵を開ける音、次に扉を開く音。
誰かが部屋に入ってきたな……。だけど、眠くて確認できない。
眠り続ける僕の耳に聞いた事のある声が聞こえてくる。

「あら……眠っているの？　朝から……ずっと？」

静かな声……。
眠っている時に聞こえてくる人の声は……何だか子守唄みたい。
誰かが僕の頭を撫でながら、話し続ける。

「フフッ……よく眠るわね」
「ん……」眠さのあまり答えられない僕。

「だけど、そろそろ起きましょう。私も一人じゃ、つまらないわ……」

その人が僕の身体を揺さぶって、僕の意識がハッキリしてくる。
目を開いた先に映るのはちび助の姿。なーんだ、ちび助か。萎えるなぁ……。

僕がちび助から逃げるように身体を転がす。
もう一度、眠りにつこうと思っていたら。ちび助が後ろから抱きついてくる。
鬱陶しい～！　嫌がる僕の身体を、ギュッと両腕で確保して。楽しげなちび助。

「上野、そろそろ起きないと明日になっちゃうわ」
「ん～……」

別に明日になっても構わないし……とか思っていたら。
何を思ったのか、突然にちび助が僕の首筋を舐めてきた。
流石の僕も飛び起きる。
不満げにちび助を睨みつけるけど、ちび助は反省しちゃいない。
寝起きの僕の頬に手を当て、唇にキスをする。
僕はすぐにちび助を突き飛ばし、怒鳴り散らす。

「何考えてるんだよ!?」
「何よ。昨日はあんなに大人しかったのに……」
「マタタビなんてズルイし！　どうでもいいけど、早くここから出してよ！　僕は家に帰りたいの！」
「約束の期限になってないわ。まだ六日間は私のペットよ」

当たり前のように言うちび助を見て、腹が立ってくる。

人を何だと思っているんだ。まったく最近の子どもは……。
ぶつぶつと文句を言い続ける僕を見て、最後はちび助が打ち切れる。

立ち上がって、扉に向かい。
出て行くのかと思っていたら、例のスイッチに手を伸ばす。
僕が止める間もなく、スイッチのボタンが押され。昨日と同じ状況に。
学習能力のない僕は泣きながら鼻を押さえるだけ。

ちび助が近づいてきて、布団を取り上げられて。
身体を押し倒されて、仰向けに寝転がる。
あぅ……息が……。
必死に喘ぐ僕の額にキスをするちび助。
そのまま顔を下ろしてきて、僕の耳元で囁きだす。

「上野はおバカさんね。そんなに言う事を聞かない子には、お仕置きしちゃうわよ」
「ふぁっ、あぅ……？」

お仕置き……？
怖がる僕から、ちび助が離れて行く。
どこかへ行ってしまった。
僕は仰向けのまま動けない。指先一つ動かす事さえできない。
とにかく体調を整えるために、深呼吸を試みる。
鼻がマヒしてきて、少し……気持ちが楽になる。

ギシッと急にベッドが揺れ出す。
僕の目に飛び込んでくるのはちび助だ。
出て行ったわけじゃないのか……うざぃ。
僕がぐったりしていたら、ちび助が僕に何かを見せつける。

初めは何なのか理解できなくて。
ぼーっとしていたら、急に頭が回転しだす。
目を丸くして蒼白する僕。
だって、ちび助が持っている物に恐怖を覚えたから。
ちび助が持ってきた物……それは果物ナイフ。

……え？　何も考えられない。
ただ、唖然と見ているだけ。
ちび助が冷笑を浮かべる。

「私の言う事を聞かないペットなんていらないわ」
「あ……や……」
「上野はおバカさんよね」
「やぁ……や……」

怖くて身体が震えだす。
泣きながら、ちび助を見上げる僕。
殺されるの……？　僕、殺されるの……？
ちび助ならやりかねない。何せ考えている事がわからないもの。

死ぬ事に恐怖はない。だって、日和が待っているから。
だけど、痛いのは嫌だ。苦しい以上に、痛いのは嫌い。
怖い、怖くて堪らない。脅えて震える僕を見降ろしながら、ちび助が口を開く。

「怖いの？」
「ご……ごめんなさい……。ごめんなさい……」
「謝っても遅いわ。もうこうするって決めたもの」
「ごめんなさい！　ごめんなさい！」

震える声で謝り続ける僕。
何を謝っているのかなんてわからない。
ただただ謝り続けたら、ちび助の気が変わるかもと思っているだけ。
そんな僕の耳元にちび助が息を吹き込む。

「動いちゃ駄目よ。動くと痛いわ」
「い、いやぁ。あぅ……あ……あ……」

怖がる僕の頭を撫でるちび助。
優しいのか怖いのか取りようのないちび助が、最終的に怖い動きを始める。
ナイフを僕の首に近付ける。死んだ……。

ギュッと目をきつく閉じて、人生を諦める。
お願いだから、ちびちびいたぶるのは止めて。
殺すのなら一瞬だ。できれば、安楽死がいい。

首筋が恐怖のあまりに寒くなる。
不意にチクリッと何かが刺さる気配。
痛い！　怖い！　誰か、助けて！
思わず目を開いてしまう。すぐに見るのは、自分の首筋。
見えるわけじゃないけれど……。ナイフが、軽く触れている。

このまま殺されると思っていたら、ちび助がナイフを僕の首筋から遠ざける。
あれ……？　殺さないの……？
不思議がる僕に何も言わないで、今度は僕の首筋に顔を近づけてくる。
そのままかぶり付いて、僕の首筋を舐め始める。

何なの？　この人？　もしかして、吸血鬼の一種？
殺されない気配により、恐怖心が消えて。代わりに何とも言えない妙な快感。
元々、マタタビの効果で身体が敏感になっているから。
首筋を舐められると、うみぃ～。思わず、僕が鳴いてしまう。

「みぃ……」
「上野は怖がりね。私に殺されるとでも思ったの？　そんな事、するわけないじゃない」

ちび助が僕の首筋から口を離す。
次にナイフで自分の人差し指に傷を入れて、そのまま人差し指を僕の口に突っ込んでくる。

「ほら、上野も吸いなさい」
「んぐっ？」
「菊池家の言い伝えよ。くだらない事だけど。菊池家は昔から、悪魔付きで有名なの。生まれてくる子どもは皆して美女で、一人っ子。能ある男を呼びこんで、物にするんだって。だから、私……いえ、菊池家の女は魔女とも呼ばれているのよ。嫌な言い伝えね」
「んんっ……」

ちび助……どうでもいいから、僕の口から指出せよ。
口に指が入っているから、物言えない。ちび助が一人で喋り続ける。

「まぁ、その言い伝えの中の一つだけど。菊池家の女は好きな男を選べるの。その儀式が血の交換。今、私達がしているこれよ。これをしたら、相手は自分から逃げられなくなる。って、まぁ、ただの言い伝えだけど……」

「ん～」
「でも、気がいいじゃない。デマでもいいわ。指をくわえる上野も可愛いわね」

無茶苦茶しやがる。
この話、デマだと信じたいだけれど……。
それがもしも真実なら、最悪な状況だ。
ちび助が魔女だと言われても、僕は否定できない。
現に魔女的要素はあるし、『橋』をしている僕は……ファンタジーというもの自体を否定できないから。

やっとのことで僕の口から指を出して、ちび助が僕のネコ耳を撫で始める。
緊張がほぐれてぐったりする僕は反抗もしないで、ただ大人しく撫でられ続ける。
そんな僕にちび助が言う。

「いい子ね。ちゃんと大人しくしていたじゃない」
「ん……」

あ……眠い。疲れた……妙に疲れた。
僕が眠ろうとしていたら、ちび助に揺さぶられる。
ぼんやりしながら、ちび助を見ると不満げ。
何？　まだ……何かあるの？　僕がちび助に問いかける。

「何……？」
「上野、寝過ぎよ。私がいない間も寝ていたんでしょ？」
「うん……」
「それじゃあ、起きなきゃいけないわ」
「眠い……」

「大丈夫。私が起こしてあげるから。フフフ……」

そう言って、ちび助が僕の唇にキスをする。

こいつ……キスするの好きだよな。お嬢様なのに、大した奴だ。

目を瞑って、そんな事を考えていたら。よからぬ気配。

ちび助が僕の服の中に手を伸ばしてくる。

ちょいまっ！！？

眠気も吹き飛んで、起き上がろうとするけど身体に力が入らない。

え……？　これ、無理じゃない？

調教〈メモリー編3〉（前書き）

上手いイラストを見たら、
それに影響されて、
自分のイラストを見た時に、
あまりのレベルの低さに涙出てくる。（／＿；）
これは公開できないな……。

調教〈メモリー編3〉

今日で……三日目。

逃げられないってズルイと思います。
エロゲーにだって、選択肢はあるはずだ。
何でリアルエロゲーで選択肢が一つもないのか？
いや、本当はあったのか？　僕が気づいていないだけか？
じゃあ、二周目になれば選択肢が増えるんだろう。それじゃあ、遅いし！

いたぶられた……。かなりいたぶられた……。
ベッドの隅で枕を抱きしめながら、布団に丸まり、昨晩の事を思い出す。
一言で説明するなら、そうだね……。ＳＭプレイありのリアルドエロゲーみたいな感じ？

未だに身体がガクガクだ……。心もガクガクだ……。
犯されるってレベルじゃなかった。
現実で、あんなのありか？
正直に言って、マジでゲームレベルだ。
要するに、かなりハード。

うぅ……。まさか、ちび助にあそこまで殺られるなんて。
背は小さいけど、顔は可愛らしくて。女子高生で、Ｓ気のあるお嬢様。
僕の年を考えるなら、リアルではまずありえない。
このストーリーはゲームだろ？
できれば、フィクションで出会いたかった。

僕の願いはただ一つ。日和が見ていない事……。
日和に見られていたとしたら、僕は自殺する。
あ、でも、自殺したら、日和と顔を合わせる事に。じゃあ、死ねない。
国外へ逃亡しよう。深い海に沈みたい……。

少し……頭を空にしたいな。
歌でも歌おうか？　そうすれば、気がまぎれるかも……。
現実逃避をするために、口を開く。
直後気付く恐ろしい出来事……。
両手で喉を押さえながら、声を出そうとする。

「っ……！？　みゃ……！　みぃ！？」

声が……でない？
何とか声を出そうとするけど、口にできる言葉が猫みたいな発音だけ。
人の言葉が喋れない。
何……これ？

パニックになって、ベッドから飛び降りる。
転げながらも、机にあるベルをひっきりなしに叩く。
すぐに入ってくるのは玲という子。
玲に向かって、僕が口を開くけれど……。やっぱりどうしても声が出ない。

僕の必死な形相を見て、玲が勘付いてくれる。

「医者をお呼びしましょう。少々お待ち下さい」

こうして、診察してもらうけれど。結果はいまいち。原因がわからないらしい。

ネコ耳によるものか、ストレスによるものか……。

医者と玲が出て行き、また僕は取り残される。

一人でシクシク泣きながら、布団に潜って目を瞑る。もう……やだよぅ……。

眠っている時は幸せ……。心地よくて、怖い事も何もない。

不意にドタバタと忙しない音が聞こえてくる。

扉が開く音がして、人の気配を感じる。

また……ちび助か。

僕の勘が的中して、ちび助の声が聞こえてくる。

「上野……起きてる？」

「みぃ……」

目を開いて、身体を起こす僕。

今や寝過ぎで、熟睡できない。

半分くらいは意識がある状態で眠っている。

それでも、心地いいから眠っている。

ちび助が僕に声を掛けてくる。

「何か……喋れる？」

「みゃ～う」

「私の名前を呼んでみて」

「みゅ～み、みゅに」
「自分の名前は？」
「みゅ～にょ、みいみい」
「本当に……喋れないのね」
「みぃ……」

僕の様子を見て、考え込むちび助。
しばらく、考えた後に僕に向いて手を伸ばしてくる。
不安げな僕を抱きしめて、僕の頭を撫で始める。

「大丈夫よ。きっとすぐに戻るから」
「みゅい？」
「こういうのは一時的な事が多いもの。安心しなさい」
「みぃ……」

ちび助に元気づけられて、少し不安が軽くなる。
まぁ、言われてみればそうだな。
どうしようもなければ、未来に頼めばいいんだ。
未来ならきっと何とかしてくれるから。

……っていうか、一番の原因はちび助じゃないのか？
冷静になって考えてみたら、こんな事になったのも。ここに来てからだし。
じっくりと考えだしたら、面白くなくなってくる。
何か……ちび助が聖者に見えた僕の頭が憎い。

平常心を取り戻した僕がちび助を突き返す。
プイッと横を向いて、素知らぬ顔。
布団に潜ろうとしたら、ちび助の声が聞こえてくる。

「また言う事を聞かないつもりね。いいわ……。今日は昨晩以上に苛めてあげるから」

ちび助の言葉が恐ろしい。

昨晩……以上に？　あれより……上なの？

布団に潜るのを止めて、顔を赤らめながらちび助を見ると。ちび助が嬉しそうに僕を見る。

不意に手を伸ばしてくる。

それに対して、逃げられない僕。物理的にじゃなくて、精神的に……。

ちび助にキスをされて、そのまま昨晩同様に……。

ふぇ……熱い。

自分がどうなっているのか……わからない。

変な声を出している……ような気がするけど。

実際はどうなっているんだろう？

頭の中……変になる。

聞こえてくるのは……お嬢様の声。

お嬢様が僕に命令する。

僕はそれに従って……。

あうっ！？　止めて……そんなの嫌……。

僕が泣いていたら、お嬢様が優しく声を掛けてくれる。

怖いけど優しいお嬢様……。

僕の頭を撫でてくれて……。

これって……毒されてないか？

　微かに残る一般常識。消えうせるのも時間の問題。

時に冷たく、時に優しく。

お嬢様の言動はクルクルと回転して、僕の心をえぐりとっていく。

これを魔女と呼ぶのだろう。

まるで蜘蛛の巣に掛った気分だ。

逃げ場がない世界。少しずつ……糸を巻かれていく。

調教〈メモリー編４〉　★（前書き）

食うなよ！　Σ（ ゜Д ゜；）
って、突っ込みたい。

それにしても、呼び名が
「ちび助」から「お嬢様」にレベルアップしていますけど。
ヒッキー既に崩壊してるんじゃない？

調教〈メモリー編4〉　★

四日目に入る。
精神崩壊気味の僕がベッドの上に座りながら、じっとしている。
お嬢様は学校だ。帰ってくるまで数時間……。

昨晩は……酷かった。お嬢様のする事……本当に容赦ない。
僕をロープで縛ったり、目隠ししたりするのはもちろんのこと。
……。いや、これ以上は口にできないな。これ以上は……話せない。

とにもかくにもボロボロだ。身も心もボロボロだ。
僕にM属性が付くのは時間の問題……。
いや、既に付属しているかもしれない。
このままじゃ、Mを通り越してドM属性をつけられる。

だからと言って、逃げ場があるわけじゃない。
状況は変わりなく、僕の精神崩壊だけが徐々に進行していく。
枕を抱えて、ベッドに寝転び。ぼんやり気持ちを楽にする。

お嬢様……まだかな？
早く帰ってこないかな……？

一人は寂しいよ……。
何してもいいから……。

だから、僕を一人にしないで……。

ふと現実を思い出す。今……かなりヤバい事を考えていた気がする。
この発想は駄目だ。ついに毒がまわりだしたか。
首を振って、気をしっかりと持ち直す。

とりあえず、起きて何かしよう。
何かしないと……気が変になる。
立ち上がって、ウロウロして……。することなくて、考える。
パソコンは……きっと持ち込みはできても、ネットは繋がらない。
というか繋げてくれないだろう。
じゃあ、他に何か……。あ、そうだ！

ベルを鳴らして、玲を呼ぶ。
僕が紙に文字を書いて、それを玲に見せると了解してくれた。
これくらいはいいだろう。これが駄目なら、何でもアウトだ。

しばらくして、玲が荷物を持ってきてくれる。
すぐに荷物を置いて、出て行ってしまう。
鍵を閉める音……。
やっぱり開けっぱなしにはしてくれないのか。まぁ、いいや。
玲に持ってきてもらった物に目を落とす。そう……最近流行りのクロスワード。

クロスワードを解き始めると、少し気分が楽になる。
大丈夫、まだ……僕は大丈夫。
気がしっかりしてきて、頭の中が冷静になってくる。
クロスワードをしながら、考える事。
どうにかして、ここから逃げないと……。流石にマズイ。
７０％は崩壊気味だ。１００％になったら、僕はお嬢様の玩具にな

るのか。
それは流石に止めてほしい。

日和やハルは今頃どうしているんだろう？
元気にしていたらいいんだけど……。
ハルなら僕を助けに来てくれそうだけど……。
やっぱり未来に止められているのかな？
日和は……今、ここにいない事を祈るだけだ。
元気に向こうで過ごしていて、本当にお願い。
わざわざ僕を心配して、ここで様子見なんて本当に止めて。
それだけは勘弁してほしい。

僕が一人でクロスワードに集中していたら、扉の開く音……。あ、お嬢様。
お嬢様の姿を見て、怖気だす僕。
クロスワードを閉じて、ちょこちょことベッドに向かう。
枕を抱えながら、布団に潜って。息を殺す。すぐにお嬢様の声が聞こえてくる。

「出てきなさい」
「みぃ……」

お嬢様に命じられて、布団から顔を出す。
お嬢様が手を伸ばし、僕が頭を下げる。
すると、お嬢様が頭を撫でてくれる。
うみぃ……気持ちいい。
お嬢様が僕に顔を近づけてくる。軽くキスをしてから、僕に言う。

「今日は散歩をするわよ」

お嬢様に首輪を頂いた。凄く立派な首輪。
鍵が掛っているから、自分で外す事は出来ない。
この首輪には発信器が付いているらしい。
僕が迷子になったとしても、すぐに見つけられるように……。

紐で引っ張られるのは嫌だと、僕が喚いていたら。お嬢様からのお許しが出る。
どうせ逃げる事はできないからと。首輪の紐なしで散歩してもいいことになる。
お嬢様に呼ばれて、お嬢様の後に付いて行く。
久しぶりのお外……。あぁ……きっと凄く楽しい。

廊下を歩きながら、お嬢様の話を聞く。ここはお嬢様のお屋敷だそうだ。
都会よりも少し離れた場所。
もし僕が外に出られたとしても、歩きでは家に帰る事ができない場所。
お嬢様はヘリで登校しているらしい。ということは……山手のほうなのか？

お嬢様に連れられて、お屋敷内を歩き回る。
流石、広いな……。日本一の大金持ちなだけはある。
僕がキョロキョロ見回していたら、お嬢様が振り返る。
僕を見ながら、可愛い笑顔で微笑んでくれる。

「今からバルコニーでお茶をしましょ」
「みゃ～み？」
「向こうに素敵な場所があるのよ。上野もきっと気に入るわ」

「みぃ……」

お嬢様に連れられて、バルコニーに出る。
華やかな椅子や机の周りには、手入れされた草花。
バルコニーを一目見て、感嘆する僕。
美しくガーデニングされたバルコニーは幻想世界のよう。
きっとプロの人が手入れしているのだろうな。

草花を眺める僕の前で、お嬢様が手を鳴らす。
数人のメイドが現れて、手慣れた手つきで準備を始める。
瞬く間に準備がされて、お嬢様と僕が椅子に座る。
机の上には、紅茶とお菓子。僕の紅茶は氷入りだ。
僕が猫舌だってこと……よく知っているみたい。

お嬢様の話を聞きながら、紅茶をすする。あぁ……美味しい。
甘い香りが漂う紅茶、豊富な種類のケーキやクッキー。
楽しげに笑う少女、その少女に調教されつつある僕。
話をしているお嬢様は、きらびやかな令嬢だ。
笑ったり、悲しんだり、怒ったり。感情豊かに、僕を見つめてくる。
昨晩、僕にあんな事をしたドS譲だとは思えないけど……。

お嬢様があまりにも普通にしているため、ホッと気を抜いたのが悪かった。
緊張のほぐれた僕の顔前に、気が付けばお嬢様の顔。
僕達の唇が触れ合って、僕の口の中に何かが入ってくる。
甘い物……クッキー？　お嬢様が僕から口を離して言う。

「美味しいでしょ？　私のお気に入りよ」

口移しで物を食べさせられるなんて……。僕は赤ん坊じゃないの

に。
不満げな気持ちの中、妙に胸が熱くなる。
だってもう……僕はお嬢様に逆らえない。
吐き出す事もできずに、口に入れられた物をモグモグ食べる。
食べ終わってから、お嬢様に返事。

「みゃう」
「フフッ、上野も気に入った？　これよ、このクッキー。まだまだあるわ、好きなだけ食べなさい」
「みぃ……」

お嬢様にクッキーを手渡されて、それもモグモグ食べる。
僕が紅茶を飲んでいたら、不意に玲がやってくる。お嬢様に向いて言う。

「そろそろお時間です」
「今は嫌よ。明日にするわ」
「お気持ちは察しますが、小口先生がお呼びです。発表会は来週……せめて先生に一言……お声を掛けられては？」
「……」

お嬢様が黙り込む。不意に立ち上がって、口を開く。

「わかったわ。今週は練習をサボるって、私から言えばいいのね」

ぶっきらぼうに言って、僕に手を伸ばす。
僕をギュッと抱きしめてから、頭を撫でて、キスをして。優しく微笑みながら、僕に言う。

「上野はここで待っていなさい。大人しくしているのよ」

「みゃ～う」
「フフッ、良い子ね」

僕の耳をクニクニしながら、お嬢様が玲に振り向く。

「玲、あなたもついてきて。あの人がうるさくなったら、後は頼むわ」
「はい、かしこまりました」

そんな事があって、お嬢様が去って行った。
取り残された僕は、たった一人でお茶をすする。
他に大してする事がなくて、ずっとお茶を飲んでいたら。
何だか……もう飲めなくなってきた。

お嬢様の言いつけを守って、逃げる事もせずに。バルコニーでウロウロする。
綺麗なお花がいっぱいだ。順番に見て回って、気持ちが和む。
あ、この花……可愛いな。あ、これって、未来が好きな花。

日和が好きな花はあるかな？
キョロキョロしていたら、良い香りがする木を発見。
クンクンと鼻を動かしながら、木の香りを嗅いでみる。
美味しそうな匂い……。これって、食べれるのかな？
ちょっとした興味。葉っぱを一枚ちぎって、様子を見る。

虫もないし、病気もなさそう。
口に入れて、噛み切る。
葉っぱの半枚くらいをモグモグモグモグ……。苦い……。
僕がモグモグしていたら、後ろから人の声……。

「何してるの！？」

声にビビって、思わず飲み込む。

振り返る先は、お嬢様。蒼白しながら、僕を見ている。

ヤバい……怒られる。勝手に植木をいじって、荒らしちゃった。

僕が小さくなっていたら、お嬢様が近づいてきて、僕の腕を乱暴に掴む。

ちぎった葉っぱを目にして、鋭い目で僕を睨んでくる。

＞ｉ２０１９１―２３１＜

僕は地面に座り込んで、反省……。

怒られる事を覚悟の上で、お嬢様に頭を下げる。お嬢様が僕に言う。

「この葉っぱ……半分ないけど、それはどうして？」

「みゃあ……」

「上野……まさか、食べたの？」

「みぃ……」

僕が頷くと、お嬢様の顔色が蒼白する。

すぐに僕の肩を掴んで、大声で叫び出す。

「上野、吐きなさい！　今、食べた物を全部吐きなさい！」

「にゃ、にゃ～？」

お嬢様の形相に脅える僕。

泣きそうな僕を見ながら、お嬢様が焦っている。

何がどうしたの？　わけがわからない状況で、急に感じるのは胸のムカつき。

思わず、食べ物を戻してしまう。
続いて、目眩、呼吸困難。寒気まで感じて、身体の自由が効かなくなる。
倒れる僕の耳に、聞こえてくるのはお嬢様の叫び声。

何度吐いても治まらない胸のムカつき。
気分の悪さがピークの時は真面目に死ぬかと思った。
まさかあの木に毒があったなんて……通りで虫が付かないわけだ。
解毒剤を投与されたおかげで、何とか死は免れたけど。

それでも、体調は良くなくて。止まらない吐き気と寒さにぐったりする。
いつもの部屋、ベッドの中で死に掛ける僕の頭を撫でながら、お嬢様が話しかけてくる。

「どうしてあんな物を口に入れたの？」
「……」
「猛毒があるって……知っていたの？」
「みぃ……」

不安げな顔のお嬢様。
目に涙をためるお嬢様を眺めながら、ゆっくりと首を横に振る僕。
お嬢様が目を丸くしながら言う。

「知らなかったの？　知らずに食べちゃったの？」
「みゅ……」

僕が返事を返すと、お嬢様が少し安心した表情になる。

僕の耳に顔を近づけて、小さな声で僕に囁く。

「上野はやっぱりおバカさんね……。今度からは勝手に変な物を食べちゃ駄目よ」

調教〈メモリー編5〉

気が付けば、朝になっていた。
今日は……五日目。
何だか……寝た気がしないな。
ぼうっとする僕の隣で動く物。
横に目を向けると、お嬢様。
いつの間にか僕のベッドに潜り込んでいたみたい。
スヤスヤと気持ちよさそうに眠っている。

今の状況……かなり有利だ。
僕の首輪は外されていて、お嬢様が部屋の鍵を持っている。
ボールペン……『橋』さえ見つける事ができたなら、すぐにでも逃げられるだろう。
『橋』のありかは……何となくだけど、直感でわかる。
僕はずっと『橋』と共に過ごしてきたもの。わかって当たり前。

今がチャンス。最初で最後かもしれない。
きっと初めての選択肢だ。逃げるのなら、今のうち……。
それなのに、どうしてだろう？　まったく逃げようと思わないのは。
まぁ、あれだけやられた後じゃあ……逃げる気がなくなるのも当然か。

それに、逃げたって仕方がないし。
相手は大金持ちのお嬢様。
僕が逃げた所で、家を押さえられて、仕事場を押さえられて。
この世界で……僕の生きて行く場を全て支配される。
僕が捕まって、結果的に今より悪い状況に。

それなら、一週間……我慢しよう。
これを耐え抜けば、もしかしたら逃がしてくれるかも。
まぁ、無理かもしれないけれど。
僕の超ドエロい動画をビデオカメラでもろに撮られているから。
あれで脅されたら、太刀打ちできない。

ベッドから這い出て、立ち上がる。
もう大丈夫そう。吐き気もしないし、目眩もない。
だけど、何か……身体がベタベタする。
昨晩は寝苦しかったから、妙な冷や汗が止まらなかったし……。お風呂に入ろう。

足音を立てずに、ちょこちょこと風呂場へ向かう。お湯を入れて戻ってくる。
冷蔵庫を開けて、飲み物を取り出して口にする。
数分してから、着替えを用意して、風呂場へ向かう。

僕が浴槽につかりながら、半分寝掛けていたら。外から騒がしい音が聞こえてくる。
続いて、お嬢様の声。当然、僕が飛び起きる。

「上野！　上野、どこにいるの！？」
「み……みぃ……」

思わず、返事をしてしまう。
すぐに風呂場の戸が開いて、お嬢様の姿が。
浴槽で小さくなる僕を目にして、胸を撫で下ろす。安堵した声で僕に言う。

「何だ……そんな所にいたの」

「みゅう……」お嬢様から目を逸らして、頭を下げる僕。
「別に怒ってないわ。上野が逃げ出したかもしれないと思って……ちょっと焦っただけよ」
「みぃみぃ？」
「そうよ。それよりも、上野……。元気になったのね。もう大丈夫？」
「みぃ……」

僕が頷くと、お嬢様が冷笑を浮かべる。急に服を脱ぎだして、僕に言う。

「私も一緒に入ってあげる。上野はまだ病み上がりだもの。よからぬ不具合で倒れたら大変だから」

そう言って、風呂場に乱入。
今や反抗できない僕は、お嬢様の行動を見ているだけ。
浴槽の中にまで乱入してきて、僕に抱きついてくる。
熱いキスした後に、僕の身体を撫で回す。あ……強姦モードだ。

わかっているけど、逃げられない。
というか、むしろ逃げたくない。
何だろう……？　この気持ち……。僕……相当にヤバいかも。
お嬢様に苛められつつも、喜んでいる自分がいる。
もっと苛めてくれないかな？　なんて考えだしたら、もう駄目だ。

あー、成る程。こういうことか。
ＳＭプレイって案外に楽しいかもな……。
お願い誰か、僕を殴って。
この発想は正気じゃない。
楽しそうなお嬢様、駄目な方向へと目覚めて行く僕。

あぅ……お嬢様……。僕はあなたのペットです……。

朝からお嬢様に苛められて、凄く変になった。
未だに身体が熱くて、お嬢様の顔をまともに見れない。
お嬢様は相変わらずで、すぐに僕に手を伸ばしてくる。
油断したらキスをされて、あげくの果てには苛められる。

だけど、何だか……日に日に犯される事に慣れて……。
っていうか、快感を覚えていくのはマズくないか？
これって、もう……変態レベルだよね？
どう考えても、僕……M属性が付いてる。

調教〈メモリー編6〉　★（前書き）

ネコ耳すら描いていない……。
ラフっていうか、手抜き？

調教〈メモリー編6〉　★

……。

……。

……あぁ。

えーっと……今日で六日目？

昨日はお嬢様が学校を休んで、ずっと僕につきっきりだった。
猛毒を口にした僕の様子を窺っていたみたい。
病み上がりだからかどうか知らないけれど、思っていた以上に僕に優しくしてくれた。
優しく……してくれた？

今日は日曜日。
昨日は一日中、部屋にいたから。外に出られるのは嬉しい。
一昨日とは、別の場所を案内してくれるそうだけど。
一体、どんなところだろう？　お嬢様の後に続きながら、考える。

書斎、テニスコート、カラオケボックス……ここって、個人の家だよね？
何でそんな部屋があるんだろう？　と思ってしまうような部屋まで存在する。
家の広さに驚く僕。不意にお嬢様が僕に振り替える。

「来週、ピアノの発表会があるの。その発表会の会場もあるのよ」
「みゃあ……」

「フフッ、私も参加するの。上野にも見物させてあげるわ。私が口先だけじゃないってことを、知ってもらいたいもの」
「みぃ……」
「会場は向こうにあるの。見に行きましょ」

お嬢様が僕の腕を掴んで引っ張り出す。
僕は釣られるままに歩くだけ……。
廊下をテクテク歩き続けて、大きな扉の前で立ち止まる。
お嬢様が扉を開けると、中は広いコンサートホールのよう。

ずらりと並んだ椅子、完全設備された部屋。
僕にへばり付き嬉しそうなお嬢様。
だけど、僕の注意を引くのはもっと別の物……。

ステージの中央に、枯れ果てた一本の大木がある。
何の目的で植えつけられているのか、そんな事は知らないけれど。
この木は……凄く神聖な物だ。
まさか、こんな所にあるなんて……。

僕はずっと『橋』をしてきたけど、出会った事はなかった。
未来は既に所持していて、死神はこの間見つけたって言っていたけど。
姫様はどうだろう？　多分、まだ出会っていないと思う。

お嬢様の言葉も耳に入らず、大木に足を向ける。
大木に手を当てて、上を見上げる。
あぁ……間違いない。ここが中心だったのか……。
僕の世界の中心部、セントラルに一番近い所……。

僕が大木を見上げていたら、不意にお嬢様の声が耳に入る。

「上野！」

驚いて、振り返ると。お嬢様が心配そうに僕を見ている。僕に近づいて、怒り出す。

「その大木から離れなさい」

「みぃや……」そっぽを向く僕。

「離れなさい」

お嬢様の声が鋭くて、思わずたじろいでしまう。

おずおずと大木から離れる。そんな僕に抱きつくお嬢様。

あれ……？　お嬢様……なぜか震えている。

僕がおどおどしていたら、お嬢様が口を開く。

「上野は……どこにも行かないわよね？」

「みぃ？」

どこにも行かない……というか行けないんだけど。

お嬢様……何の話をしているんだろう？　よくわからない。

首を傾げながら、ふと大木に目を向ける僕。

それを阻止するように、お嬢様が僕を押し倒す。

僕の上に乗って、僕にキスして抱きついて。まるで、大木から僕を遠ざけようとしているみたい。

大木に嫉妬なんて……変なお嬢様。

＞ｉ２０３５４―２３１＜

調教〈瑠菜編〉　★（前書き）

イラストは……セントラルに戻った後、
ストレスで自分の尾をカミカミするメモリーです。
その後、未来に止められますけどね。

調教〈瑠菜編〉　★

木々が怖いと思うのは、上野がいつも消えてしまうから。
上野が普段から持ち歩いているボールペン。
それを木々に当てると、木々が白く輝いて。上野がそこへ入って行く。

しばらく後に、また木々が輝いて上野が帰ってくるのだけど。
輝く木々はランダムのようで、いつも同じとは限らない。
それに、時間もまばら。
数分で帰ってくる事もあれば、一か月近く帰ってこない時もある。

私が上野のボールペンで試してみても、そういう出来事は起こらずに。上野の行先は得体が知れない。
上野は……いつもどこへ消えて行くのかしら？

今の上野は見入られていた。
お父様がお気に入りの大木。
ルーシュ・ルーディーと呼ばれている少しいわくつきの大木。
いくつもの呪われた伝説があり、恐れられている。

伝説の一つを要約すれば、こんな話。
この大木の中には悪魔が棲んでいて、人々を誘惑する。
悪魔に魅入られた者は、この世界から消えてしまう。単純だからこそ、却って不気味。

この大木の伝説で、唯一良い話は一つだけ。
大昔、この大木には神が宿っていて。
その神に選ばれた巫女が歌を歌えば、花が咲いたという。

神は巫女に世界を伝える。これから起きる未来や、世界で起きている出来事など。
人々はその話を聞いて、色々と生活に役立てていたという話。

こんな奇妙な大木にじっと見入られる上野が怖い。
何を考えているのかしら？　上野の考えている事がわからない。
わからない……ということが怖い。

どうして上野は私の事が嫌いなのかしら？
私はこんなにも好きなのに。私が苛めるから？
それとも、秋山日和を忘れられないの？
上野はいつも……私から距離を置いている。

手に入れたと思っていたのに……。
この一週間で上野の全てを手に入れたと思っていたのに……。
身も心も私の物。そう思っていたけど、何かがおかしい。
上野が見ているのは私じゃなくて。もっと別の見えない何か。
私には見えない物……。

嫌よ、嫌！　私は全てを手に入れたいの。
今まで手に入らなかった物なんて一つもないわ。
それなのに、どうして上野だけ振り向いてくれないの？

上野を連れて、会場を離れる。
ぼんやりする上野の興味を引くために何でもする。
上野の腕に抱きついて、大きな声で話しかけて。
上野は返事をするけれど……。だけど、どこかで別の事を考えている。

一体、何を考えているの？

上野の部屋に戻って、話をする。
楽しい時間に焦る私。
今までみたいに、上野が私だけを見てくれない。
私とは違う何かについて考えている。
それが悔しくて、上野に意地悪をして。
嫌がる上野を無理矢理に押さえつけて、注意をして。
最後は上野が泣きながら、私に口を開く。

「みぃ……みゃあ……」

あぁ……可哀そう。何て可哀そうなの。
上野は何もしていないのに……。
いくら理解していても、別の気持ちが溢れ出る。
私だけを見て。押さえつけようのない気持ち。
乱暴に上野に扱う。無理矢理にキスをして、上野の身体に手を伸ばす。
今はもう逃げようとしない上野……。可愛らしい、私だけの上野。

暖かい眠りから、目が覚める。
ぼうっとしながら、時計を見ると。夜中の二時……。
ふと周りを見回すけれど、上野の姿がない。
またお風呂かしら？　そう思い、お風呂場へ向かうけれど。そこにもいない。

上野の名前を呼びながら、部屋の中を探しまわる。
いない……。どこにもいない……。

今は玲も付いていないから、外に逃げたの……？
蒼白しながら、扉を開ける。
左右を見回し、パニックになる。
上野はどこに行ったの？

玲を呼んでも姿はなく、今の時間は皆が眠っている。
門番はいるけれど、上野には別の移動手段が……。
ハッと思い出して、走り出す。私の部屋に例のボールペンがあるから。

部屋の前、扉に手を伸ばす。軽く開く扉。
いつもは鍵を掛けているのに……。
中に入ると、いつも通りの部屋。上野の姿はない。
机に行って、引き出しを開ける。
保管しておいたはずのボールペンと携帯電話がない。
上野の持ち物が……消えている。

逃げられた……？
背筋が寒くなる。怒りと悔しさで吐き気を覚える。
まだ……逃げるつもりなの？
逃げて当たり前だとは思う。思うけど、やっぱり不満。
上野の行く先を考える。
きっとあの場所……あの場所にいなかったら、どうしよう？

全力で走る。
上野が興味を示した大木がある部屋。
中に入ると、大木の前に上野の姿が。
大木に耳を当てて、何かを聞いている？

私が上野に声を掛ける。

「上野！」

振り返る上野。仰天しながら、私を見つめる。私が上野に優しく声を掛ける。

「こっちに来なさい。ほら、早く」

手を伸ばす私を見る上野の目は、今までのそれとは異なる。まるで、興味がないといった感じ。

羞恥も恐怖も何もなくて、ただじっと私を見つめている。

不意に上野がズボンのポケットから取り出す物。それはあのボールペン。

それを見て、泣きそうになる私。

上野はまた……行ってしまうの？

泣きそうな私に向いて、上野が口を開く。

「……や……やくそく」

「上野……喋れるようになったの？」

「や……約束。今日で……七日目……。もう……いいでしょ？」

「駄目よ！　まだ時間が残っているわ！」

「もう……許して。僕……我慢したよ。ちゃんと……言う事……聞いたよ」

「でも、まだ時間があるのよ！　帰ってきなさい」

「帰ったら……もっと縛られる。君は……僕を……何だと思ってるの？　僕は……ペットじゃない……よ」

「そんな事はわかっているわよ！　だけど……」

頭ではわかっている……でも、気持ちが追いつかない。
上野の気持ちまで考えてあげられない。
自分勝手な私。上野が咳き込みながら、話し出す。

「君と……いると……。僕は……ダメになる。これ以上は……付き合えない」
「そ、そんな事を言っていると。例のビデオをテレビ放送するわよ」
「そんな事……するの？」

やけくそになる私を見て、寂しそうな上野。
あぁ、駄目……そんな事を言っては逆効果。上野が傷つくだけ……。
悔しくて悲しくて、気づけば目から涙がこぼれている。不意に上野が話を変える。

「命を……助けてくれたのは……。ありがとう……。お礼に一つ……良い物を見せて……あげる」
「何よ？　帰ってきてくれるの？」

私の問いには答えないで、上野が大木に目を向ける。
口を開いて歌いだすのは、私の知らない歌。
日本語じゃなくて、外国語でもない。
もっと違う……聞いた事のない言葉。
まだ言葉が上手く話せないのか、ぎこちない歌声だけど。
それでも、やっぱり……上野の歌は綺麗。

上野が歌っていると、急に大木がざわめき出す。
ほんのりと光り輝く大木。
私が声を出す間もなく、枝に緑が広がって、いくつものつぼみが付き始める。
そして、開花。まるで天国を形にしたみたい。大木を見ながら、思

わず呟く。

「綺麗……」

私が唖然としていると、上野の歌声が途切れる。
ふと気付けば、上野がいない……。
それなのに、負の感情が湧き出てこない。
なぜなら、私も大木に見入ってしまったから。
上野の歌声がなくなり、大木の花が散りだす。

一瞬にして、桜のように。
呆気なく散る様は何とも美しく物悲しい雰囲気を醸し出している。
私がぼうっとしていたら、後ろから人の声。
振りかえると、お父様。目を丸くしながら、私に問いかける。

「今の人物は誰だね？」

あぁ、そっか。そういえば、まだ両親には話していなかった。
上野に振り向いてもらう事で必死だったから。私が笑顔でお父様に言う。

「フフッ、私の彼氏よ。上野進一。この一週間で凄く親密になったの。彼の身も心も何もかも私の物になったのわ。今度、お父様にも紹介するわね」

「……」

呆れた顔で私を見るお父様。
あら、怒らないのかしら？　冗談でも怒ると思っていたのに。
私がお父様の反応に驚いていたら、お父様が小声で呟く。

「親子揃って……」

＞i20408―231＜

調教〈ハル編〉　★（前書き）

挿絵に意味はない！

調教〈ハル編〉　★

何が起きたんだろう？
僕が城から帰ってきたら、この通り。
僕の前に広がる光景は意味不明だ。

右手に猫じゃらし、左手にマタタビを持つのは、身体ありのお母さん。
ベッドの前で猫じゃらしをパタパタさせながら、口を開く。

「ほら、上野君。こっちにおいで～。猫じゃらしだよ～。ほら、こっちはマタタビ。上野君の好きな物ばかりだよ～」
「フー！」

返答するのはお父さん……。
ベッドの下に潜り込んで、奥の方からこちらを睨みつけている。
何て言うか……威嚇モード。
僕がお母さんに問いかける。

「どうしたの？　喧嘩？」
「うーん……喧嘩というよりもね。上野君が拗ねちゃったの」
「どうしたの、お父さん？　向こうで何かあったの？」
「……」

僕がベッドの下を覗き込みながら問いかけたら、お父さんが赤い顔をしながら目を逸らす。
これは何かあったな……。
口を開かないお父さんに向いて、お母さんが話しかける。

「ほら、上野君。ご飯にしよう。もう夜だし、晩ご飯はまだでしょ？」
「いらないっ！」
プイッと反抗的なお父さん。
ベッドの下でうつ伏せになりながら、拗ね続けている。
僕がお母さんに振り替える。
「ねぇ、お母さんは知ってるの？　お父さんが拗ねている理由」
「ううん、知らないよ。だけど、上野君の様子を見る限り。菊池さんに何か気に入らない事をされたみたいね。菊池さんは上野君の事を好きみたいだから、もしかしたら……」
「違うの！　そんなんじゃな……」
お父さんの声。途中、ベッドの下から何かがぶつかる音が聞こえてくる。
お父さんが頭を打ったみたいだ。
呻きながら、ベッドの下からはいずり出てくるお父さん。
泣きそうな顔でお母さんに訴える。
「違うの！　僕は嫌だったのに、ちび助が無理矢理に酷い事してきたの！　逃げようと思っても逃げられなくて。誰も助けに来てくれなくて。僕……僕は……」
混乱気味のお父さん。
お母さんがお父さんを抱きしめて、お父さんの背中をよしよしする。
「大丈夫だよ、上野君。心配しないで。私はよくわかってるから。きっと上野君は凄く頑張ったのね」
「……うん」

お母さんの優しい言葉に、お父さんが落ち着きを取り戻す。
お母さんを抱きしめながら、ちょっと嬉しげなお父さん。
不意にお母さんが口を開く。

「さぁ、ご飯にしようね。皆もお手伝いしてくれるかな？」
「うん、する。今日は何？」とお父さん。
「今日のご飯は和風ハンバーグオムレツです。もうほとんどできているから、後は具をタマゴで巻くだけだよ」

ワー、美味しそう！
名前だけでも美味しそう！
お母さんに誘われて、僕達二人もお手伝い。
気づけばお父さんのご機嫌が戻っている。
お母さんの力って、本当に凄い。

夕食を食べて、日常が戻ってくる。
キッチンの椅子に座って、例のパズルをする僕。
その隣では、お母さんが読書。
お父さんはどこにいるのかと言うと……ベッドの上で転がっている。
じーっとお母さんを見つめながら、尻尾をクニクニと動かして。
凄く構ってほしそうな顔をしている。

しばらく経過して、お父さんが鳴き始める。
ニャーニャーうるさい。
お父さんがうるさくて、パズルに集中できない。
お母さんもちらちらとお父さんの様子を窺っている。
不意にお父さんが喋り出す。

「日和～」
「どうしたの？　上野君？」本に目を落としながら、返事をするお母さん。
「日和～」
「なぁに？　上野君？」
「日和～」
「……」

お父さん……お母さんの名前しか呼ばない。
具体的に用事があるわけじゃあないみたい。
それを幾度も繰り返し。最後の最後は、お母さんが黙り込む。
お母さんの反応がなくなり、つまらなそうな顔をするお父さん。
そんなお父さんが次に出た行動……。

今度はちょっといやらしいポーズをしながら、お母さんに呼び掛ける。
お父さんの妙な行動に、お母さんがついつい目を向けてしまう。
まぁ、嫌でも気になる。好きなら尚更かもしれない。
お母さんが反応したせいか。
お父さんが更にいやらしいポーズをとって、お母さんの名を呼び続ける。

それにしても、お父さん……。
どこで覚えてきたのだろう？
以前はこんな事しなかったのに。
今日は凄くエロっぽい目つきで、お母さんを誘惑しようとしている。
お母さんはちょっと恥ずかし気。
そっぽを向く振りをしながらも、お父さんの事が気になるみたい。

不意にお父さんがとんでも行動に移る。
お母さんが構ってくれないからだろうか？
急に服を脱ぎ始める。
流石のお母さんも立ち上がり、すぐにお父さんを止めに行く。

「上野く～ん！」
「ニャ～」半裸でお母さんを見上げるお父さん。
「そんな事しちゃ、駄目でしょ！」
「キスくらい、いいでしょ？　減る物じゃないし」
「駄目だよ～。もう～、私を誘惑しないで。ほら、服を着るの」
「ん～」

お母さんに注意をされて、お父さんがしぶしぶ服を着始める。
ちゃんと着終えた後に、お母さんに向いて手を伸ばす。
お母さんがお父さんを抱きしめると、お父さんが静かになった。
そのままコロンと寝転んで、お母さんに頭を撫でてもらう。
お母さんがお父さんを構いながら、口を開く。

「上野君は向こうで何を習ったのかな？」
「相手を身体で落とす方法～」
「もう～、菊池さんったら。上野君に変な事を教えちゃったな」
「そうだよ～。僕……あのちび助に強姦されたの。しかも、ＳＭ系。僕……もう駄目になっちゃった。日和も僕を強姦して～」
「あ～ん、人の身体って辛いよ。何で私、死んじゃったんだろう？
上野君がこういう事に誘ってくれるなんて、凄く珍しいのにな。
だけど、人の身体だし。とっても残念だけど、できないなぁ～」
「キスは～？」
「それもだ～め。お願いだから、誘惑しないで～。もどかしい気持ちが治まらないよ～」

お母さんが顔を赤らめながら、お父さんのネコ耳をクニクニする。
お父さんは嬉しそう。
ちょっと物足りなさそうだけど、それでもやっぱり嬉しそう。

それにしても、この二人……たまに周りが見えていない。
僕がいる事……わかっているのかな？
ちょっと人前では話せない話を普通に喋っている。
いくら子どもの前でも……っていうか、子どもの前なら尚更に話せないよね。
きっと僕がいなかったら、もの凄くイチャイチャするのだろう。
他人が見て、恥ずかしいくらいに……。

ラブラブな両親の話を聞きながら、パズルをする僕。
あ！　今、いい感じに動いた！　もしかして、これはこうで……。
スムーズに進み出すパズル。
耳に入るのは楽しげな二人の会話。

っていうか、お父さん……菊池さんに犯されたのか。
えーっと、菊池さんは……十五歳くらいだよね？
お父さんって何歳だろう？　未だに気になる疑問。
まぁ、結構な年らしいけど。年が読めない容貌だからな……。
色々と考えていたら、パズルが詰まった。
後少しなのに……また手詰まりか。

＞ｉ２０４４７―２３１＜

世界の掃除〈メモリー編〉

責任って言葉は嫌いだ。
だけど、人間は誰しも何らかの責任を課せられる。
大人である僕は尚更。重荷を背負いながら、向かう先は青鷺学園。

未来に怒られた。
というのも、狭間の乱れが原因で、僕の世界が濁ってきているから。
狭間の影響を受けると、空気が悪くなる。
気付かぬ振りをして、放っておけば。
異様な現象が次々と起きて、最後は収拾の付かない状態になってしまう。

そうなると、お仕舞いだ。
狭間に飲まれて、世界が崩壊。
立て直しの聞かぬまま、皆して狭間に消えてしまう。
僕はそれでも構わないけど……。
なんて言ったら、未来に注意されてしまう。
うん、そりゃね……流石に怒るよね。

そういうわけで、世界の濁りを取るために。青鷺学園に向かう僕とハル。
なぜ青鷺学園なのか？
それは、一番濁りが溜まっている場所だから。

まずは雫にハル特製のお守りを手渡し。そのまま、ちび助のいる教室へ向かう。
ちび助に興味はないけど、あの場所には恵梨の片割れ……梨香がいる。

彼女は何とかして守ってあげたい。

教室に向かう途中、僕が廊下を歩いていたら、凄くカッコいい人を発見する。

話を聞いてみると、ちび助の護衛らしい。

黒松という名の人。

僕はリチャードと呼ぶ事にした。

それはとあるゲームのキャラクターの名前。

だって、似ているんだもの。

それにしても、今のハル……犬耳を取って、学生服。

転校生として、授業まで受けている。

何て言うか……子どもがいきなり大人になったみたいで。僕的にはちょっとショック。

僕のネコ耳は未だに取れないし。ハルも犬耳……つけっ放しでいいのに。

少し時間が過ぎてから、恵梨を探しに外に出る。

ちょっと狭間が荒れそうな気配だから。

校舎裏なんて、いかにも空気の濁りそうな場所にいる恵梨の腕を掴んで、無理矢理に連れてくる。

危ない、危ない。

あんな所にいたら、危険だ。

真っ先に、狭間に飲まれてしまう。

そのまま何事も起きることなく、放課後に入る。

やっぱり事が起きるなら夜中か……。

僕とハルが学園に泊まる話をしていたら、お嬢様やリョウまで乱入してきて。

最後は超大人数でお泊まり会みたいな話になりだした。

まったくもって、危険性を理解していない。

不愉快な僕の前には、結構な人。
僕とハルに、梨香。
お嬢様、リチャード。
斎藤君、松元君。
プラス、疫病神……リョウの奴。

恵梨は……僕の家で大人しくしているように言っておいた。
もしも、何かあったら大変だもの。
梨香には言えない。
恵梨ほどに親しくないから、言ったら何か……話がややこしくなりそう。

途中で未来がやってきて、少しお喋り。
僕らの様子を見に来てくれたみたい。
僕はドジだから心配だなんて言って。
それなら未来が全部やってくれたらいいのに……。
最後は、ハルがいるから大丈夫。よく言う事を聞くんだよって、僕の頭を撫でだす始末。
そんなに僕は役立たずなの？

膨れる僕の前では、楽しげなお泊まりメンバー。
まったく……どうなっても知らないからね。
ぼうっとしながら、考える。
今頃、日和……どうしているんだろう？
恵梨と一緒にいるのかな？

世界の掃除〈メモリー編2〉

この学園には、茶道部という部活が存在して。その部室が寝るのに最適な部屋らしい。
行ってみると、すぐに理解できる。
部屋は十畳間で、邪魔になるような物はなく。スッキリとしている。
ここに布団を並べれば、八人くらい余裕だろう。

荷物をまとめながら、お喋りをする学生達。
学生じゃないのも混ざっているけど……。
そういえば、リチャードはどこに行ったんだろう？　もしかして、外かな？
皆のお喋りに入る気分でもないから、リチャードを探しに外に出る。

廊下に出て、すぐ横を向くと。リチャードが立っていた。
僕がリチャードに話しかける。

「何してるの？」
「警備です」
「部屋に入らないの？」
「仕事ですので。どうぞお気になさらずに」
「うん、わかった」

リチャードの言葉を受け止めて、そのままリチャードの隣……扉がない側に移動して、座り込む。
僕がぼんやりしていたら、珍しくリチャードの方から話し掛けてきた。

「上野様……」

「どうしたの？」
「私は好きでここにいるのです。お気遣いは必要ありません。上野様は皆様とご一緒に、お泊まり会を楽しんでください」
「別に気遣いなんてしていないよ。僕も好きでここにいるの。ここは静かでいいよね。中はうるさいもの。ちび助もリョウもうだうだうだうだ僕に話しかけてきて。他にも人はいるんだから、別の人とお喋りしたらいいのに」
「……」

コメントに困るリチャード。
変な事は言えないだろう。だって、ちび助にバレると怒られるもの。僕もあまり文句を言うのは好きじゃないから、黙って廊下を眺め出す。
今は夜の六時くらい……。
今日じゃなければ、明日になるのか……。
できれば、早く終わってほしい。

僕らが取りとめのない話をしていたら、急に茶道部屋の扉が開く。飛び出してくるのは、ちび助だ。キョロキョロと辺りを見回している。
何をさがしているのだろう？　なんて思っていたら、僕と目が合う。

途端に、獲物を狙う猛獣の目つき。硬直する僕の身体。
立っていたら、走って逃げただろう。だけど、座っていたから……逃げられない。
僕が蒼白していたら、ちび助が僕の前まで飛んでくる。
よく見ると、靴を履いてないし。
震える声で、僕が問いかける。

「何……？」
「私が悪いわけじゃないわ。ゲームをしようって言い出した人が悪いのよ」
「ゲーム……？」
「大人しくしていなさい。逃げたら、どうなるかわかるでしょ？」
ちび助の怖い言葉に、身動き取れない僕。
ちび助の手が伸びてきて、僕の顔を掴む。そのまま無理矢理にキスしてくる。
もう何が何なのか、わけがわからない。
わけがわからないけれど、逃げる事などできるわけなく。無抵抗に、ちび助に従う。
あの一週間の調教により、僕はちび助……お嬢様には逆らえない身体に改造された。
口では強気を言っているけど、いざ物理的に触られると……もう駄目。
一気にへにゃって、受け身モードになる。
お嬢様に口の中を舐めまわされて、熱く火照る身体。
時間経過と共に、意識が薄れてくる。
真っ白になる頭の中、快感だけが身体に走る。ふわぁ……気持ちいい……。
やっとのことで口を離してもらうけど。
今度は身体を……なんて求めてしまうのは、やっぱり毒された証拠だろう。
両手で口元を押さえながら、必死に喘ぐ僕。

もっとされてしまいたい気持ちを抑えて、心を落ち着かせる。
不意に聞こえてくるのは、リョウの声。

「お嬢様、それはルール違反やろ？　進ちゃんはゲームの参加者ちゃうで」
「別にいいじゃない。誰かにキスすればいいって言ったのはあなたよ」
「そりゃそうやけど……本来はサイちゃんにキスせなあかんねんで。ちょっとルールに自由を入れたら、大幅にズレた事しよるね」
「うるさいわね。そんな事を言うのなら、次からＲｅａｌｉｇｈｔのスポンサーを止めるわ。上野だって、メンバーに入れさせないから」

お嬢様がツンッと言ってのける。
それ以前に、僕……Ｒｅａｌｉｇｈｔのメンバーじゃない。
だけど、口出しできるわけなく。黙って、お嬢様とリョウのやり取りを眺めている。

それにしても、未だにゾクゾクする身体。
はぁ……キスだけで、こんなに感じてしまうなんて。ヤバいな、僕……。
きっとお嬢様が本気で襲ってきたら、手も足も出ない。
っていうか、むしろ襲ってほしいなんて、心の片隅で願っている自分がいる事に恐怖だ。

トリプルＭ属性……。
駄目だって、わかっているのに……。
何とかしなきゃって、わかっているのに……。
これって、麻薬レベルだよ。どうにもならない。
僕が赤い顔で自分の指をくわえていたら、リョウの言葉が聞こえて

くる。

「それにしても、進ちゃん……。キスされただけで、めちゃくちゃエロい顔つきしとるね。見てるこっちが気恥ずかしいで。何なん？　進ちゃんって、感性が鋭いん？　っていうか、キスでこれやったら、お嬢様に襲われた時はどんな顔をしとったん？」

世界の掃除〈メモリー編3〉　☆（前書き）

友達から、メモリーのイラストを頂きました。（＾－＾）
メモリーの癖にクールです。なぜだ～？　＜゜）））彡

世界の掃除〈メモリー編3〉　☆

茶道部の部室の中、お嬢様の命令に従い……ここにいる僕。
本当はリチャードとお喋りしていたかったのだけど。お嬢様に言われたら逆らえない。
キスをされた後とか……特に逆らえない。
仕方なく、部屋の隅でじっとしている事にする。

お嬢様にキスされてから、妙な気分が治まらない。
このままじゃあ、いろんな意味で殺られてしまう。
なるべく、お嬢様から目を逸らし、お嬢様から意識を遠ざけようとするけど。
そうしたら、今度はお嬢様が許してくれない。

存在感を消しながら、空気のように部屋の隅にいても。お嬢様にはバレバレだ。
すぐに僕に近づいてきて、話しかけてくる。
愛想のない返事を返していたら、今度は僕の身体に触れてくる。

こんな事をされたら、流石に言う事を聞くしかない。
今や、抵抗できない僕は……お嬢様の言いなりだ。
お嬢様が求める物を全て提供しなければいけない。
それが言葉であれ、身体であれ……。僕のできる限りの事を……。

僕の態度が急変したことに心配したのか、リョウが話しかけてくる。

「進ちゃん、どうしたん？　お嬢様にキスされてから、様子が変やで。それまでは、もっとツンツンしていたのに。今はナヨナヨやな。

調子でも悪いん？」
「……うん」と僕。
「上野、気分が悪いの？　大丈夫？」

僕を心配してくれるのはお嬢様……。
だけど、調子が悪いというのは……そういう意味じゃない。
僕が畳に寝転んだら、お嬢様が頭を撫でてくれる。
尻尾を触りながら、耳をクニクニ……。ふみぃ～、幸せ……。
意識が遠くなってきて、聞こえてくるのは楽しげな人の会話。
凄く心地よくて、何だかこのまま眠ってしまいたい気分に……。

誰かに揺すられ、目が覚める。僕の前にはお嬢様。眠たげな僕に向いて、口を開く。

「上野、付いてきて。一人で行くのは怖いから」
「どこ……に？」
「シャワーを浴びたいの。今、安曇さんが終わった所だから」
「ん……」

眠い……けど、起きなくちゃ……。何とか上体を起こして、お嬢様に振り向く。

「シャワーなんてあるの？」
「少し離れに、シャワー室があるのよ。もちろん、男女別室よ」
「そう……」
「上野もシャワーに浴びるのなら、準備していかなくちゃ」
「僕は……いい」
「シャワーに浴びないと、夜に寝付きが浅くなるわ。そうでしょ？」

「はい……」

逆らっちゃあ駄目な気配。この後、どうなるのかを想像。
きっとお嬢様は僕と一緒にシャワーを浴びる気だ。絶対にそうだ。
僕のためを思っての言葉じゃない。僕を犯す事を想定しての言葉だ。

まぁ、今更……逃げる気にもならないけど。
お嬢様に言われるままに準備をしながら、皆に話しかける。

「皆はシャワー……終わったの？」
「ビックリしたで～。蛇口をひねったら、血の海や～」とリョウ。
「リョウさんが使用禁止のシャワーを使うから、サビくさいシャワー室になっちゃったんですよ」松元君が言って。
「一瞬、事故でも起こしたのかと思ったよな」

斎藤君が続ける。賑やかな人達だな。
僕がハルに向くと、ハルが例のパズルをしながら視線を送ってくる。

「僕は大丈夫です。さっきダッシュで家に帰って、お風呂に入ってきましたから。どうにもシャワーだけじゃあ、落ち着かなくて」
「そっか……。じゃあ、僕らが最後だね」
「楽しんで下さい。邪魔する人はいませんから」
「酷い……。そこまでわかってて、そんな事を言うの？」

楽しげなハルに、しおれる僕。
お嬢様に僕が犯されても何も思わないの？
少しくらい不満げな顔してくれないの？
ハルにとっては他人事みたい。ヘラヘラ笑いながら、手を振っている。

寝起きで頭が回らないのか、お嬢様にキスされて未だに受け身モードなのか。大した嫌悪感もなく、お嬢様の後に続く。
外に出ると、リチャードを発見。思わず、リチャードに話しかける。

「リチャードはシャワー浴びた？」
「いえ、仕事ですので」
「シャワー浴びないと、寝付きが悪くなるよ」
「いえ、徹夜ですので」
「寝ないと気分悪くなるよ」
「大丈夫です。明日には玲様と交替させて頂きますので」
「えー」

残念そうな僕を無理矢理に引っ張るのはお嬢様。
あー、リチャードが離れて行くー。もっとお喋りしたいのに。
ふと気付くと、お嬢様が不満げに僕を見上げている。
何？　もしかして、嫉妬？
リチャードに嫉妬しているの？
面白いお嬢様……。

＞ｉ２３２６６―２３１＜

案の定、シャワー室で相当に犯されて。いたぶられて、なぶられて……。
ヤバい声を上げながら、お嬢様に泣きついて。
そして、M属性への階段を一段登りきる。

僕はただ……人に聞かれていない事を祈るだけ。
僕の声なんて、シャワーの音で掻き消えてしまえ。
本当に、人に聞かれたら僕……生きていけない。

たかがシャワーを浴びるのに、どうして一時間も掛るのか？
シャワーの後……お嬢様にドライヤーで髪を乾かしてもらう僕。
お友達どころか、恋人どころか、夫婦レベルか？　いや、それ以上か……。

ドライヤーは熱いから苦手だ。
ドライヤーから逃げようとする僕の頭を押さえながら、お嬢様が口を開く。

「駄目よ、上野。ちゃんと乾かしておかないと、風邪を引いちゃうわ」
「大丈夫。いつも自然乾燥だし」
「学校は冷えるから。乾かさないと駄目よ。ほら、耳も立てなさい」
「いや！　風が耳に入ると気持ち悪いの！」
「もう、仕方ないわね。じゃあ、耳はタオルで拭いてあげるから。ほら、立てて」
「やあん！　あっ……。クニクニはダメぇ……。んんっ！！」
「ほら、しっかり拭いておかないと……」

「ああんっ！　ダメっ！！　そんなに奥まで指入れちゃあ……。はぁう！　あ、あっ！　やぁん……！」
「……」
不意にお嬢様が手を止める。
僕が目を開いて、鏡を見ると恥ずかしげなお嬢様。鏡の僕を見ながら、口を開く。
「上野がそういう声を出すのは……私を誘っているの？　それとも、天然？」
「なぁに？」
「私の事が嫌いなら、もう少し黙っていなさい」
「はぁう！？　痛い！　や、止めて！　乱暴は嫌！」
ゴシゴシゴシゴシ……お嬢様に頭を拭かれて。ちょっと痛い……。だけど、尻尾までしっかり拭いてもらってスッキリ。
お嬢様からオーケーの合図が出ると、すぐさまドライヤーから離れる。
二メートル程離れた位置から、お嬢様を待つ僕。またドライヤーを掛けられると嫌だもの。
＞ｉ２３２６８―２３１＜
耳をパタパタ動かして、尻尾をフニフニ動かして。ドライヤーの熱を取る。
僕が尻尾の毛づくろいをしていたら、お嬢様がやってくる。僕の顔に手を伸ばして言う。
「髪を乾かしてあげたんだから、少しくらい感謝しなさい」

「感謝？」
「そうよ。キスくらい、いいでしょ？」
「でも、さっき……あっちで凄い事された……」
「それとこれとは別よ！」
「んん～……」

別じゃないと思うけど……。
これ以上は苦情を言えなくて、お嬢様の求めるままに唇を譲る。
気を失いそうになる程の濃厚なキスをされて、口を離した時にはもう半死。
身体の芯からゾクゾクしてくる。うわぁ……ん、凄い……。

お嬢様が大人しくなった僕を引き連れて、さっき来た道を戻る事に。
何だか凄く疲れた……。早く寝たい……。
ぼんやりしながらお嬢様に引っ張られる僕。
楽しげなお嬢様は僕の腕を離さない。

バカになっていたのだろう。のろけに走っていたのかな？
とにかく、この時の僕は一時たりとも周りに気を使っていなかった。
お嬢様の事で頭がいっぱいだったから、他の事を考える余裕がなかったのだろう。
本来は、もっと注意するべきだったんだ……。

世界の掃除〈メモリー編5〉　★（前書き）

挿絵は関係ありません。
アナログ絵は難しいです。

世界の掃除〈メモリー編5〉　★

お嬢様と一緒に廊下を歩く。
暗い廊下、光はわずか。非常用照明の灯りと、外の月明かり。
ほのかな明かりを頼りに、茶道部屋を目指す。
話しかけてくるお嬢様に返事をして、お嬢様に抱きつかれて。
何とも言えない空気の中、ちょっと清々しい気分。

お嬢様とお喋りをしていたら、ふと感じる違和感。
あれ……？　何か忘れてない？　歩きながら、考える。
タオルは持った、衣服は持った。携帯は持ってる、財布は……元々、持ってきてない。

……。

……。

……ヤバッ。

蒼白する僕が見るのは、自分の胸ポケット。ボールペン……『橋』がない？
まさか、うそぉ！？　更衣室に忘れてきた！！？
後ろを向くと、薄暗い廊下。
走って取りに行かなくちゃ！
大慌てになりながら、お嬢様に口を開く。

「ご、ごめん！　先に帰っていて！」
「どうしたの？」
「ちょ、ちょっと忘れ物！　すぐに戻るから！」

「待って、上野！」

お嬢様の返事も聞かずに、シャワー室に足を向ける。全力疾走。
まさか、あんなに大切な物を忘れるなんて……。
僕、どうしちゃったんだろう？
お嬢様にやられすぎて、頭がバカになってた！？
もうヤダ、恥ずかしい！

更衣室に向かう途中、思わぬ事態が発生する。
大きな爆発音が鳴ったかと思うと、今度は大量の水音。
雷雨か……？　マズイ……こんな時に雨なんて降ったら。
どっと空気が重くなる中、必死になって走り続ける。

何とか更衣室に辿り着いて、ボールペンを探すけど……。
見当たらない！　ない、ない、ない、ない！
何で、どうして！？　ここに置いたはずなのに！
あれがないと……あれがないと僕は……。
僕が動転していたら、聞こえてくるのは人の声。

「お探しの物はこれですかな？」

バッと振り返ると、更衣室の入り口付近に……男が一人立っていた。
知らない顔。一言で言えば、ジェントルマン？
見た目は紳士的。片眼鏡を付けていて、シルクハットにマントって。
あなたは日本人ですか？　日本人だったら、きっとオタクだ。

言葉をなくす僕の目に止まる物。
ジェントルマンが右手に持つのは、僕のボールペン。
ジェントルマンに駆けよって、ボールペンを奪い取る。

壊れてないか、確認……。良かった、無事みたいだ。
ホッと安心した直後、興味対象が移動する。
『橋』が見つかれば、次に気になるのは目の前の人物。

ゆっくりとジェントルマンから離れながら、問いかける。

「あ……ありがとう。ところで……あなたは誰？」
「ソル・シ・エールと呼びます」
「えーっと……ソルさん？　それとも、エールさん？」
「君の好きに呼べばよろしい」
「えっと……じゃあ、エールさん。あなたはもしかしなくても……狭間の人？」
「そうではありませんが、こちらの者です」

こちらの……という事は、僕の世界の人？
だけど、それにしてはえらく詳しい。
狭間の存在を知っているようだし。僕が『橋』の所持者って事も気づいていそう。
何なの、この人？　ちょっと不気味……。
僕がそわそわしていたら、エールさんが話し出す。

「今の君には、蟻一匹の価値もありませんが。いずれ事は変わるでしょう。それまでに、死なれるのは厄介です。私の手に余らないよう、行動は慎んでいただきたい」
「はい、すみませんでした……」なぜか謝罪する僕。

不意にエールさんが近づいてきて、僕の耳元で囁く。

「それでは、愛しの君。ごきげんよう」

直後、窓の外に稲光が走り。エールさんが忽然と消えてしまった。
何だったの？　よくわからないけれど、エールさんの最後の言葉が怖い。
『愛しの君』……何それ？　どういう意味？　何だか、どうにも気味が悪い。

だけど、そんな事を考えている暇はないな。
この雨で狭間が揺らぎだした。
開いてしまった狭間を閉じていかなくちゃ……。
いくつあるだろう？　かなり多そう。

廊下に出て、窓の外を覗き込む。
大雨・雷警報に、暴風警報。凄い雨と雷に風。
今、外に出るのは危険だな。
窓の下に目を向ける。ちらちらと黒い影。
狭間の生き物が外に溢れだしたか……嫌な感じ。

とにかく、皆の所に戻りながら。片っ端から、目に留まる穴を閉じていこう。
ハルに会えば、行動力が広がるし。穴が開いた場所も大体は把握しているだろうから。
この後の作戦を練りやすい。

皆の所に戻りながら、胸に過る不穏な気持ち。
そういえば、お嬢様……途中で放ってきちゃったけど。皆の所に戻っているよね？
まさか、僕の後を追いかけたりしていないよね？

考えれば考える程に不安が増してきて、気づけば周りに狭間の生き物がうじゃうじゃ。

僕のマイナス思考がこいつらを寄せているのだろう。
狭間の生き物はそういうのが好きだから。

ちょっとマジでウザい。道が塞がれている。
苛立ちを感じて、『橋』を手に取る。
面倒だけど、一掃しよう。
僕の気持ちに影響されて、『橋』がほんのりと光り出す。
それで、宙に魔法陣を書いて、『橋』を魔法陣の中心に突き立てると。
魔法陣から電流が飛び出し、狭間の生き物を片っ端から削除。

おー、何か魔法使いになった気分。
日和に色々と教えてもらったのだけど、難しい事は覚えられないから。これくらいなら、まだ何とか……。

それにしても、僕……よく今まで生きてこられたな。
『橋』の使い方なんて、別の世界に移動するか時か、狭間を閉じる時に使うくらいしか知らないし。
そもそも、攻守という言葉を知らないままに、逃げるだけで過ごしてきたけど。
今にして思えば、かなり無茶していたかも。

スッキリした廊下を駆け続ける。
あー、もう息が切れてきた……。しんどいから、歩こう……。
ペースを落として、歩きだす。
あー、ダルい……。

＞ｉ２３２８０―２３１＜

世界の掃除〈瑠菜編〉　★（前書き）

挿絵は関係あるような、ないような。
とにかく、ラフ画でサイズが大きいです。
ペン入れをする前の段階で、ストップしました。
なぜなら、飽きたから。

上野が更衣室に向かって駆けて行った。
忘れ物だと言っていたけれど……。
そういえば、上野がいつも大切そうに持ち歩いているボールペン……。
普段は胸ポケットに入れているけれど、今はなかった。
もしかして、あれを忘れたのかしら？　上野にしては珍しい忘れものね……。

先に戻れと言っていたけれど、どうしても気になって、立ち往生。
上野を追いかけるには少し時間が立ち過ぎた。
上野を待っている間に、雷に雨まで降ってきて、嫌な天気になる。

廊下の隅で、じっと上野を待っていたら。何だか落ち着かない気分になってくる。
周りの空気が重くなり、まるで真夏の深夜に大雨が降っているみたい。
ねっとりと湿度の高い廊下。これなら、肝試しができそうね。

上野はまだかしら？　本来はこういう所を怖いと思う事はないけれど。
先程までいた上野がいなくなっている事が少し面白くない。
上野以外には興味ないけれど。上野がいないと何だか寂しい。

一人の時間に嫌気を感じだした頃、人の足音が聞こえてくる。
振りかえる先には、上野。
良かった……帰って来た。
どっと安堵を覚えて、上野に駆け寄る。上野に向いて、口を開く。

「忘れ物は見つかった？」
「……」

反応のない上野。私を無視して、立ち去ろうとする。
上野の態度に不満を覚えて、上野の腕に掴みかかる。声を荒げながら、上野に訴える。

「無視しないで！　わざわざ待っていてあげたんだから、返事くらいしてよ！」

上野と目が合う。表情の読めない顔。
何を考えているの？
上野の頬に手を伸ばす。
あぁ……私にはわからない。
上野にキスをしようとしたら、急に上野の手が伸びてくる。
私の首に巻きついて、きつく首を絞めてくる。なぜ……？

息ができない。このままじゃあ、死んでしまう。
死んでしまう……事はどうでもいい。
それよりも、上野に……殺したいと思われる程に嫌われていたという事実が辛い。
どうして？　私はただ……あなたの事が好きなだけなのに。

遠のく意識。上野の力が強すぎる。抵抗できるわけがない。
あぁ……どうして私は秋山日和じゃなかったのかしら？
次に生まれ変わるとしたら、きっとあの人に……。

静かな世界を打ち破るのは、誰かの大声。
重い目蓋を持ち上げると、目の前には上野の姿。
私を殺した……大好きな彼。私と目が合い、安堵のため息をつく。

全く身体に力が入らない私に、上野が手を伸ばしてくる。
私の肩を抱いて、ギュッと強く抱きしめる。首を絞める時とは違った、暖かい感触。
心地のいい気分に浸っていたら、上野の声が耳に入る。

「良かったぁ～。生きてた……」
「生きて……た？」
「一足遅かったら、殺されていたよ。ごめんね。こんな時に一人ぼっちにさせたから……」
「私は……生きて……いるの？」
「うん、もう大丈夫。僕がいるから、安心して」

上野が優しく頭を撫でてくれる。
何が夢で……何が現実なの？
少し前は首を絞めてきたのに……。今は、凄く優しくしてくれる。
上野の意図がわからない。
しばらくして、私の意識がハッキリしてくる。
上野が私に問いかけてくる。

「もう大丈夫？　立てそう？」
「うん……」

一度頷いてから、どうしても気になる事を聞いてみる。
今の上野なら、真実を教えてくれると思うから。

「ねぇ……上野」
「何？」
「上野は私の事が……嫌いなの？」
「どうして？」
「だって……さっきは首を絞めてきたから」

私の言葉を聞いて、目を丸くする上野。すぐに顔を横に振って、真顔で言う。

「あれは僕じゃないよ。君の不安に影響されて、変化した狭間の生き物。あ……えーっと、もっと分かりやすく言うと。化け物が僕の姿をマネしていたの。あの……嘘じゃないからね。これ、本当だよ。僕が君の首を絞めるはずないじゃん」
「そう……上野じゃないの」
「あ、信じてないでしょ！？　本当だよ！　そんな殺人まがいな事はしないって！」

私の顔を見て、上野が必死に訴えている。
きっと私が暗い顔をしているから、信じていないのだと思っているのね。
だけど、違う。上野の言葉は信じている。信じているけど……。

「それでも、上野は……私の事が嫌いよね？」
「え……」
「好きじゃないんでしょ？」
「……」

上野が気まずそうに押し黙る。
これが結果。何を間違えたのかしら？

出会い頭に、キスしたのがいけなかったの？
それとも、上野の気持ちを無視して、襲ったのがいけなかったの？
だけど、好きで好きで堪らなくて、気持ちを抑える事ができなくて……。
涙目になる私に向いて、上野が囁きだす。

「違うの……」
「え……？」
「君の事が好きだとか、嫌いだとか。そういう理由で付き合えないわけじゃないよ。僕はただ……。日和……いなくなってしまった彼女の事が忘れられなくて。まだ……気持ちが整理できていないだけ」
「じゃあ、私の事は……好き？」
「う、うーん……。まぁ……普通……かな？」

面白くない答え。上野が私から目を逸らして、首を傾げている。
だけど、まぁ、いいわ。殺したい程に嫌いってわけでもないのね。
私の気持ちも落ち着いて、不安や恐怖も和らいでいく。不意に上野が話を変えてくる。

「それにしても、痕（あと）が残ると困るね。女の子なのに……」

上野が私の首筋をそっと撫でる。少しくすぐったい。私が上野に口を開く。

「構わないわ。皆はうるさいだろうけど……私は気にしないもの」
「だけど……」
「大丈夫よ。きっと、すぐに消えるわ」
「……」

上野が私の心配をしてくれるなんて。この絞め痕……悪くないか

も。
なんて事を考えていたら、上野が妙な発言を口にする。
「舐めたら消えるかな？」
「え……？」
私が口を開く前に、上野が私の首筋に顔を近づけてくる。
そのままペロペロと舐め始める。
やぁ……あぁ……。上野にしがみ付きながら、注意をする。
「上野……止め……て……。ダ……メッ……」
「絞めてるって事は、逆に吸えばプラマイゼロで元通りになるかも……」
上野が妙な提案を出して、実行する。
私の首を甘噛みしながら、吸ってくる。思わず、声を荒げる私。
「あっ……そんなに吸っちゃあ……。んんっ……痕が……付いちゃう……」
「あ、何だかいくぶんマシになったみたい。こっちも試してみよう」
「ちょっ！？　上……野……。あ……んっ……。はぁ……ぅん……」
上野なんかにいたぶられる。
いつもは私が襲う側なのに……。
上野は天然……。きっと悪気もないし、そういうつもりでしているわけじゃないのだろうけど。
凄い……頭が変になりそう。
しばらくして、満足したのか上野が私の首から口を離す。

その時には、私はイク寸前。
上野……本当におバカで可愛い人。
上野が私を眺めながら、首を傾げる。

「あれ……何だか赤くなっちゃった」
「上野の……せいよ」
「ごめん……。そんなつもりはなかったんだけど。もしかして、放っておいたほうが良かったのかな？」
「どう……かしら？」

はぁ……もう……。この上野も偽者じゃないの？　思わず、問いかけてみたくなる。
普段の上野はツンツンしているのに。今日の上野は妙に変。
偽者が私にした事に対して、責任を感じているのか。
それとも、私が上野を犯したから、甘えたになっているのか。

じっと私を見つめる上野、じっと上野を見つめる私。
そろそろ立ち上がらないと……。ぼんやりと考えていたら、上野の顔が近づいてくる。
私達の唇が一瞬だけ触れ合って、又、離れて行く。

上野が私の手を取り、私が立ち上がる。夢心地。
もしかして、今……上野にキス……された？
実感がないけれど、唇に触れたのは事実。
何を思ってキスしたのか？　上野は何も答えない。
だけど、問いかける必要はないと思う。
キスされた……この事実が大切なのだから。

＞ｉ２３３２７―２３１＜

世界の掃除〈瑠菜編2〉　★（前書き）

イラストに必要ない人が載っている。

世界の掃除〈瑠菜編2〉　★

上野の腕にしがみ付きながら、学校の廊下を歩き続ける。
辺り一面を放浪している不気味な影。あれは一体何なのかしら？
上野を見上げながら、問いかける。

「ねぇ……あの黒い人みたいな物は何？」
「あれはね、狭間の生き物と言うの。まぁ、僕らがそう呼んでいるだけだけど。本当は生き物ではなくて、記憶の欠片の一部だって……。未来が言っていたけど。生き物みたいに動くし、人の心に影響されて変化するから。さっき君が見たっていう、偽者の僕もこいつらの一人だと思うよ」
「何だか……不気味ね」
「怖がっちゃ駄目だよ。こいつらはマイナスの思考に引かれやすい性質があるから、なるべく明るい気持ちを持って。そうすると、近づいてこないから」

上野の言葉に頷いて、上野の腕を強く抱きしめる。
だけど、どうして？　上野はそういう事を知っているの？
この私でさえ聞いた事のない話なのに……。
それにどうして平気でいられるの？
普通なら不安で堪らない気持ちになるのに……。

黙っているのが怖くて、上野に問いかける。

「ねぇ、上野はどうしてそういう事を知っているの？」
「うーん、何て説明したらいいのかな？」
「上野がよく白い木の中に入って行くのも関係ある？」
「うーん、まぁ、無関係じゃないかな？」

「上野は……宇宙人？」
「うーん、何でそう思うの？」
「だって、上野の周りでは不思議な事がいっぱい起きるから」
「それは僕が『橋』をしているから……」
「『橋』って何？」
「えー、何て言うのかな？　まぁ、掃除係みたいな物？」
「そんな言い方じゃあ、わからないわ」
「えー、だって……」

話を渋る上野にねだって、詳しい事情を問いかける。
ずっと知りたかった事……。上野が何者かわからなくなる瞬間。知らない事が不安を掻き立てる。

私がいくら駄々をこねても、上野は答えてくれない。
上手く話を誤魔化して、その話を避けようとする。
そんなに私が信用できないの？
私が寂しそうな顔をしていたら、上野が話しかけてくる。

「そんな暗い顔をしないで。君が暗い顔をするから、どんどん化け物が増えちゃってるよ。このままじゃあ、いつか身動きが取れなくなっちゃうよ」
「上野が教えてくれないから……。どうせ安曇さんには説明しているんでしょ？」
「それは恵梨が狭間に影響されて、二人に分かれたから……」
「やっぱり安曇さんには喋っているのね！　上野の浮気者！」
「浮気者って……そもそも君と付き合った覚えはないし。安曇さんって言っても、話したのは恵梨だけだよ。梨香にはまだ話していないし……」
「恵梨さんとはどういう仲？　秋山日和の幽霊が取りつく以外に、怪しい関係があるの？」

「そう言う事は知っているんだ。君の知識って、微妙だよね」

上野がクスクスと笑いだす。笑って誤魔化すのなんてズルイわ。楽しげな上野の腕をグイグイ引っ張って、不満を訴える。教えてほしい。どうしても教えてほしい。私が上野を脅迫しようと、口を開く。

「話さないなら、こっちもそれなりの対応をしてやるんだから。皆に、私が上野に犯されて滅茶苦茶にされたって言ってやるわ。そうしたら、上野なんてひとたまりもないわよ。牢獄どころか死刑ね」

「君が僕に酷い事をしたのに、それは変だよ」

「そんな事は知らないわ。私が言った事が真実になるの。警察もテレビも、ただの駒に過ぎないもの」

「ふーん。じゃあ、僕もただの駒に過ぎないんだ」

「違う！　上野は違うの！」

「そう思うのなら、僕の自由にさせてよ。言いたくない事は言いたくないの」

上野にそっぽを向かれる。私はただ上野の事をもっと知りたいだけなのに。

口を尖らせて、膨れる私。上野は静かに私の手を引くだけ。つまらない。黙っている事もできなくて、ついつい何かを口にしてしまう。

「ねぇ……上野は怖くないの？　こんなに化け物がたくさんいるのに」

「……」

「上野？」

「え？　あぁ……何か言った？」

「どうしたの？」

「いや、何でもないよ……」
「嘘よ。今、考えていた事を教えて」

私の鋭い口調に上野がうろたえる。
私から目を逸らして、そわそわしながら口にする。

「いや……君が僕を好きな理由を考えていただけ。君も皆が言うように僕の歌声が好きなのかな……と思って。それで、ちょっと昔の事を思い出して……」
「全部よ。私が好きなのは、上野が吐いた息から、上野が口付けたコップまで。全部よ」
「いや、それは流石に引く……」
「そういえば、上野の昔ってどんな感じだったの？」
「昔か……」
「幼い頃とかどんな感じだったの？　写真とか残ってる？」

気になる上野の子ども時代。
私が勝手に妄想していたら、上野が首を横に振りだす。

「止めよう。今は……話したくない」
「え？　どうして？」
「狭間が歪んでいるから。元々、記憶が眠る場所だもの。変に刺激を与えるのは良くない」
「よくわからないけれど、ダメなのね……」

そればっかり。上野は本当に喋ってくれない。
私が知りたい事を見事に話してくれない。うー、面白くない。
上野が妙に暗い顔で黙るから、話しかける事もできなくなる。
私も静かにしていたら、もう到着。
せっかく二人きりになれたのに、もっと仲良くなりたかったのに…

…。

上野がノブに手を伸ばす。この先は皆が待っている茶道部室。
そういえば、黒松がいないけれど……。部屋に入っているのかしら？　持ち場を離れるなんて珍しい。
上野がノブを回して、ドアを開けると。待っていたのは別の風景。
ここは……どこ？

＞ｉ２３４８８―２３１＜

世界の掃除〈瑠菜編3〉（前書き）

子供に売られた親。金銭的には本業よりもよっぽど儲かりそう。
それにしても、メモリーは妙に売春が似あいますね。（笑）
変なオーラを出しているところは、ハルも同じか？　流石、親子だ。
ハルの場合は女子のみだけど、メモリーの場合は男女構わずにオーラ出してそう。
頼れそうで頼りない性格が原因だろうか？

世界の掃除〈瑠菜編3〉

見た事のない風景に戸惑っていたら、ドアの閉まる音が聞こえてくる。
まだ部屋には入っていないのに、いつの間にか部屋の中。上野が背後を振り返って、蒼白する。

「しまった！　飲まれた！」
「え？　何がどうしたの？」

状況無理解な私が上野に問いかけるけれど、上野の返事は返ってこない。
ドアに駆けより、外に出ようとノブを回すけれど。開かないみたい。ガチャガチャとノブを回す音だけが、部屋の中に響き渡る。

それにしても、ここはどこかしら？
一見、寂れたマンションの部屋に見えるけれど。ハッキリ言って、あまり住み心地は良くなさそう。
狭い上に、散らかっているし。せめて、もう少し掃除くらいすればいいのに……。

そんな事を考えていたら、上野が諦めて戻ってくる。不満そうな顔でベランダ方面を見ながら、口を開く。

「あんな話……するんじゃなかった。狭間に飲まれちゃったよ。出口も塞がれたし、しばらくは動けないと思う」
「え？　じゃあ……これからどうするの？」
「狭間の形が変わるのを待つしかないね」
「えっと……」

「今は、狭間の生き物もいないから。至って、危険な事はないよ。記憶が移り変わると、自然と道ができるから。変に行動するよりも、静かにしているのが無難」
「うん……」
何となくだけど、意味はわかる。
とにかく今は行動しないのが得策というわけ。
頷いて理解を示す私に向いて、上野が呟く。
「さっき……僕の昔を知りたいって言っていたよね？　どうしても知りたいのなら、ここで立ち呆けていれば……わかるかも。僕は……少し休むから。何かあったら、呼んで」
そう言って、上野が押し入れの襖を開く。
押し入れの下段に潜り込んで、襖を閉める。
私は一人残されて、押し入れの前で棒立ち。する事がなくて、押し入れの前に座り込む。
上野の言葉通り、ここで待っていたら何かが起きるのかしら？
私が襖にもたれていたら、部屋の外から足音が聞こえてくる。
乱暴にドアが開く音。聞こえてくるのは音だけで、実際にドアが開くわけじゃない。
鞄を放り投げる音や、靴を脱ぎ捨てる音。ガサツな音が充満する部屋。
そして、聞こえてくるのは女の声。
金切り声で叫び狂い、何かに怒っている様子。
どうも夫に対して不満があるみたい。

物が壊される音も聞こえてくるから、相当に暴れているみたいね。ひたすらに叫んだ後、勢いよく襖を開ける。これも音だけ、全て音だけの世界。

不満げな女が鬼のような声音で言う。

「帰っていたのなら、『おかえり』くらい言いなさい！　こんな所でひそひそして、お前は何様のつもり！？　私を何だと思っているの！！？」

耳元で音がするから、鼓膜が破れそう。

凄く不愉快になり、立ち上がる私。押し入れから離れて、様子を窺う。

静かな時間はあっという間。五秒も経たぬうちに女が話し出す。

「何か言ったらどうなの！？　喋りなさいよ！」

「ご……ごめんなさい」

答える声は……もしかして……。

「今日は……凄く怒ってるけど……。何かあった……？」

舌足らずで、高い声。声変わりの前だとしても、今と大きく異なる。

だけど、それでもきっと……これは上野の声。

あぁ、やっぱり……。

もしかしたらと思っていたけど、ここは……子どもの頃に上野が住んでいた所。

子どもの言葉に打ち切れて、女が子どもに罵声を浴びせる。

他人の私が聞いていても気分が悪くなるくらい。酷い言葉の羅列。
こんな言葉を吐いている女が……まさか上野の母親？
女が息を荒げながら、大声で怒鳴る。

「お前なんか、我が子でもない癖に！」
「だったら……良かったのにね……」

間髪を入れずに答える子ども。女が発狂し、狂乱に移る。
何か……棒のような物を振り回す音に次いで、人が逃げ回る音。
鈍い音が部屋に広がる。
直後、泣き叫ぶ子ども。

これって、虐待？
気が付けば、恐怖のあまりに部屋の隅で脅えている私がいる。
これは実際に起きた出来事なの？

私が硬直して、動けないでいたら。
不意に不気味な音が鳴り響く。
そして、子どもの声が聞こえなくなる。
今……何が起きたの？
女の声が聞こえてくる。

「箒の柄が首に当たっただけで、泣くな！　首を押さえて、可愛い子ぶるな！」

箒の柄が首に？
直後、物を吐く音。
すぐに女の怒り声。

「何してるの、バカ！　汚いじゃない！　もう、嫌！　私は外で寝

るから、明日までには綺麗にしときなさい！」

乱暴に人が歩く音、遠ざかって行く足音。
ドアが開いて、すぐに閉まる。
女が出て行った？
私の足元で、人が動く気配。三度程、小さく咳き込み……ドサリと倒れる。
こうして、部屋に訪れたのは音のない世界。

事の成り行きに茫然としていたら、押し入れの中から小音が聞こえてくる。
そういえば、上野は……。
押し入れに駆けより、ゆっくりと襖を開く。
下段の隅で小さくなりながら、身体を震わしているのは現実の上野。

だけど、どうも様子が変。
目の焦点が合わずに、呼吸が浅い。その上、酷い冷や汗。
必死に喘ぐ上野を見て、戸惑う私。
どうすればいいの！？　何をすればいいのかわからない。

そもそも、上野がこうなった原因は何？
やっぱり先程の音かしら？
あれで昔を思い出して、恐怖心で発作が……。
きっとそう。そんな気がする。
上野に抱きついて、背中をさする。
落ち着いた声で、上野に話しかける。

「大丈夫よ。今はもう……怖い人はいないわ。ほら、深呼吸をしま

しょ。吸って……吐いて……」

私が上野の背中を優しく撫でていたら、不意に上野が手を伸ばしてくる。
私に抱きついて、深呼吸を始める。何とか呼吸を整えて、落ち着きを取り戻す。
頼りない程に弱々しい声で話し出す。

「ごめんね……。君を守るどころか……僕がこんな調子で……」
「誰にだって怖い事はあるわ。私だって、怖かったもの……」
「……」
「少し……落ち着いた？」
「うん……」

上野が返事をした瞬間に、先程のような乱暴な音が聞こえてくる。
すぐにビクつく上野。そんな上野を強く抱きしめて、口を開く。

「少しお喋りしましょ。私の声だけ聞いて。わかった？」
「うん……」

上野が私の服を強く握りしめる。
乱暴な音が治まる事なく溢れる部屋。
それに負けず劣らず、大きな声で上野に質問を振りかける。
くだらない話でも何でもいいから、とにかく話を尽きさせない。
上野の興味を私に一点集中させる。

それにしても酷い話。あまりにも大きな音だから、嫌でも耳に入る。
この女……。上野に対して、身体的虐待も酷いけど。どちらかといえば、心理的虐待が多い。

この人の言葉にまともな言葉が見当たらない。

これって、一種の病気じゃないの？

この人、本当に上野の母親？

きっとそれ間違いよ。

こんな母親で、こんなに素晴らしい王子様が生まれるわけない。

あ、もしかして、父親が最高に素晴らしい人だとか？

って、思っていたら、そうでもない。

途中で登場する男。

声だけは、結構な好みだけど。

まぁ、上野には劣る。上野の声は独特だもの。

だけど、あれは……女に喉を傷つけられて……。

何だか上野の声を褒めたら、あの女を賛美しているみたいで気に入らない。

違うわ、違うの！　そうじゃない！

血筋も傷も関係ないわ。とにかく、上野は素晴らしいの。

声も顔も性格も、何もかもが素晴らしいの。

上野の両親なんて関係ない。

それで、男の方だけど……。

飲んだくれで、博打好きで、女好きで。聞いているだけで、もう最悪。

お酒を飲んでいる時は、調子がいいけど。それ以外は、かなり乱暴。

女を殴るのは構わないわ。上野を殴るのは止しなさい！

例えば、酔っている時に、上野にお小遣いをあげて。

酔いが覚めたら、なぜか上野を叱りつけて。殴って、蹴って、自分であげたお金をぶんどる。

本当に、この人達……理解に苦しむ。

私の手元には、唯一まともな幼子。
今はもう大人だけど、それでも幼く見えてしまう。
私を抱きしめながら、素直に質問に答える姿は最高。
あぁん、可愛い。特に今は凄く良い感じの表情をしている。

次第に外の音も気にならなくなり、私達の話も弾んでくる。
上野の発作も治まりを見せ、少し穏やかな空気に。
それにしても、上野があまりにも素朴な眼差しを向けてくるから、
私の気持ちが限界に近い。
ここで上野を犯したら、怒られるかしら？　ううん、むしろ今なら
落とせそう。
上野の気持ちが落ち込んでいるから、今なら私の物になってくれる
かも……。

私がいけない夢想を繰り広げていたら、何も知らない上野が微笑
む。
てへっと首を傾げながら笑う上野。それを見て、我慢できなくなる
私。
上野の頬に手を当てて、キスをする。唇にキス。そのまま上野の服
に手を伸ばす。

ヤル気満タンに、上野の服を脱がそうとしたら。上野が顔を赤ら
めて騒ぎだす。

「ダメッ！　こんな所で止めて！　人が来ちゃう！」
「来ないわよ。シャワー室だって、誰も来なかったでしょ？」
「場所が酷いよ！　シャワー室より、こんな所……あんっ！」
「大丈夫よ。すぐに終わるから～」
「やぁ……んんっ！　はぁ……ん」
「本当は上野だって、やってほしいんでしょ？　ほらぁ～」

「あぁっ！？　んあぁ……。わ、わかった！　じゃ、じゃあ、こうしよう」
「何？」
どうせくだらない事。
上野は逃げに出るつもりね。
そう思っていたら、ちょっと予想外の言葉が返ってくる。
「こ、今度……僕が君の家に遊びに行くから……。その時でいいでしょ？」
顔を赤らめる上野の言葉に面食らう私。思わず、真顔で質問してしまう。
「今度？　それはいつ？」
「えっと……三日後くらい？」
「三日後だけ？　四日後は？」
「何でそんなに頻繁なの？」
「頻繁じゃなければいいのね？」
「いや、そういう意味じゃあ……」
ためらう上野を無視して、口を開く。
「週に五回で！」
「いや、ムリムリムリ。仕事もあるし、ハルや日和だっているから……」
「仕事なんていらないじゃない。私の所へ来たら、何もしなくても豪華客船に乗れるわ。一生楽して過ごせるのよ。どう？」
「いや、『どう？』って言われても。そんないきなりムリムリムリ」

「じゃあ、週二回くらいでどうでしょうか？」

私の背後から声……。

振りかえる先には、上野の養子……ハルという人。

上野がハル君を見て口を開く。

「ハル！　助けに来てくれたの！？」

「お父さんの体力的に、週二回くらいですね。もちろん、報酬は出ますよね？」

「出すわ。何でも出すわよ」と私。

「では、食べ物でお願いします。お父さんを一晩貸すのに、大型トラックに満タンの食べ物を用意して下さい。それで手を打ちましょう」

「わかったわ。交渉成立ね」

「勝手に話を進めないでよ！」

上野が顔を真っ赤にしながら訴える。そんな上野に答えるのはハル君。

「実は来週の授業までに。身近な人の仕事を見て、今後の自分の就職について思う事をまとめないといけないの。だけど、お父さんはあんまりにも仕事している姿を見ないから。いつもぐうたらしているなんて情けなくて、作文にもならないでしょ？　せめて副業くらいは頑張ってほしいなと……」

「ちょっと待って！　副業で売春って、変じゃない！！？　っていうか、そっちの方が恥ずかしくない！！？」

「お父さんが頑張る姿を見てみたいな～」

「何を頑張るのさぁ！！？　っていうか、今の話、冗談だよね！！？」

「冗談じゃないよ。このまま行くと、家計が破綻するもの。お父さ

ん、知ってる？　僕の食費で、お父さんの貯金がなくなりつつある現状を」

「ハルが我慢すればいいだけじゃん！」

「子どもは我慢ができない生物なの。わかったら、しっかり働いて稼いでね」

「……」

恥ずかしそうな顔をしながら不満げに黙る上野。面白くなさそうに、小声で呟く。

「もう知らない。好きにすれば」

掃除後〈メモリー編〉（前書き）

地面で寝たら、身体だるくなりそう……。

掃除後〈メモリー編〉

早く……狭間を閉じないと。
わかっているのに、身体が重い。
瞼が上がらない。
心地よくて、凄く眠くて……。

誰かが頭を撫でてくれる。暖かい手……。
僕がどうにか目を開けると、視界に入るのは日和の姿。
日和が優しく微笑んでくれる。
ここは……僕の家みたい。
いつの間に家に帰って来たんだろう？
狭間を閉じる作業を終えた記憶はないけれど……。

僕が日和を眺めながらうっとりしていたら、日和が僕に話しかけてくる。

「上野君、頑張ったね。一人で狭間を閉じられるなんて、もう立派な『橋』だね」
「そんなことないよ。今回はたまたま上手くいっただけ……」
「違うよ。これは上野君の実力です」
「フフッ、そうかな？」
「そうだよ～。良くできた子にはご褒美に頭をなでなでしてあげよう」

日和が僕の頭に手を伸ばす。気持ちがいいけど、少しくすぐったい。
思わず、顔をそむけながら。その手に、自分の手を重ねる。
それにしても、日和の手って、とても細い……。色も白いし、凄く

綺麗。

日和の手に、自分の指を絡めながら遊んでいたら。日和が顔を近づけてくる。

僕の額にキスをして、そっと抱きしめてくれる。

おかげで、僕の気分が向上。

ぽうっと浮かれて、日和を抱きしめ返す。

あぁ……いい香り。

それが凄く幸せで、本当に幸せで。

このままずっとこうしていたいくらいに幸せで。

不幸って言葉を忘れそうになる僕の耳元で、日和が寂しげな声を出す。

「あのね、上野君……」

「うん？」

「上野君はもう大丈夫だよね？　『橋』のお仕事もしっかりできるし、お友達もたくさんできたし。もう……私がいなくても、大丈夫だよね？」

何を言っているの？

「あのね……。私はそろそろ行かなくちゃいけないの」

どこに行くの？

「やっぱりね……。ずっと一緒にはいられないの。上野君も知っているでしょ？　本当は、私……」

知らない！　知らない！　何も聞きたくない！　何も言わないで！

日和の話を聞かないで、日和を強く抱きしめる。
もう二度と離れて行かないように。
もう二度と見えなくならないように。
もう二度と……僕の手から離しはしない！

殺意にまで似た感情。
どんな物事も度が過ぎれば、危ういものだ。
僕の腕の中にいる、可憐で儚い彼女。
彼女の有無も聞かないで、無理矢理にキスをする。
彼女は怒る事も悲しむ事もしないで、ずっと僕の側にいてくれる。
これが当然、これが自然、これが妥当、これが……。

彼女を押さえつけて、彼女に手を伸ばす。
もういいじゃない。こんなにも好きなのに、どうして我慢する必要があるの？
彼女に嫌われる事もない。そう勝手に決め付けて、ひ弱な彼女を……。

身体の不調で目が覚める。
胸やけだろうか？　何だか身体の中が気持ち悪い……。
上体を起こして、今の夢を思い出す。
夢か……。そりゃそうだよね。
日和が生身の身体を手に入れている時点でおかしな話だ。
それを変だと思わないなんて、夢って本当に適当。

ふと隣を見ると、お嬢様……。スヤスヤと眠っている。

お嬢様なのに地面で眠っている。よっぽど疲れていたみたい。
携帯電話を取り出して、時間を確認。五時半か……。

え？　そういえば、僕……どうしたっけ？
狭間を閉じながら歩いていて、狭間に飲まれちゃって。
嫌な事を思い出して。ハルに会って。……で？

その後が思い出せない。
もしかして、寝ちゃった？　嘘？　どうしよう？　まだ狭間……閉じ終わってない。
それでなくても、今回はかなり穴の数が多かったから。今からやっても間に合わない。
というか、まさか広がっていないよね？　狭間の穴……広がっていたりしたら、発狂物だ。

胸ポケットにある『橋』に手を伸ばす。
ギュッと握ると、『橋』が反応する。
目を瞑り、集中するけど……。どうも狭間の気配を感じない。
どうして？　あ、もしかして、ハルが頑張ってくれたとか？
きっとそうだ。後でお礼を言わないと……。

眠るお嬢様の肩を揺すると、ゆっくりと目を覚ます。
あまり寝付けなかったのか、顔色が悪い。僕がお嬢様に声を掛ける。

「大丈夫？　顔色……良くないよ」
「上野こそ……目の下にクマができているわ」
「うん……そうかもね」
「うん……」

不意にお嬢様が僕の方へと倒れてくる。

撥ね退けるわけにもいかずに、お嬢様を支える。
僕が眠ってしまったから、もしかしたらずっと起きていたのかも。
一人で大変だっただろうな。今日ばかりは感謝しなくちゃ。

立ち上がる気力もなくて、腕の中で眠るお嬢様を撫でながら、時間を潰す。
誰かが来たら、動こう。とかいう甘い考え。
だけど、誰も来ないから。刻々と時間が過ぎる。

一時間ぐらい、ぼんやりして。僕まで眠くなってきた頃に、足音が聞こえてくる。
扉が開くと、向こうにはリョウの姿。僕らを見て、口を開く。

「何や、こんな所におったん？　二人共、えらい所で寝ててんな。そんなに二人でイチャイチャしたかったんかいな。それやったら、言うてくれれば、布団を別の所に持っていったのに」
「それじゃあ、気分が出ないでしょ？　こういうのは隠れてするほうが緊張感出るから」
「そりゃそうやな。一本取られたわ」

僕がアホな事を言って、リョウがケラケラ笑いだす。
今は疲労で頭が動かないから、結構……ヤバい事を言っても平気。
リョウの笑い声でお嬢様が目を覚まし、僕らも移動する事に。
早くハルに会って、話を聞かなきゃ……。

掃除後〈メモリー編2〉（前書き）

事件が終われば、のんびり、のんびり。

掃除後〈メモリー編2〉

皆に会って、話を聞いて、状況を確認する。
気持ちの悪いぬいぐるみや謎の少年、竜や例のジェントルマン……エールさん。
いろんな人達が現れて、何だかよくわからない。
とりあえず、わかった事はリチャードが消えたって事。
無事だといいのだけど……狭間に飲まれたのなら、もしかしたら……。

悪い方へと考えて、ちょっと気分が暗くなる。
皆とサヨナラをして、僕だけ先に帰宅する。
日和に報告してから、『橋』の皆に相談しよう。
駆け足で家に向かって、走り続ける。

マンションに着いて、部屋に入ると。聞こえてくるのはテレビの音。
顔をのぞかせると、ソファーに恵梨……か、日和の姿を発見。
今はどっちだろう？　口を開いて、声を掛ける。

「ただいま」
「おかえり、上野君。お疲れ様だね」

あぁ……日和だ。

「うん、こっちはどうだった？」
「変わりなく……あ！　だけど、一つ。連続ドラマが最終話なので

す。この録画を見終わったら、今晩がラスト。最後が気になって、仕方がありません」
「フフッ、それはお楽しみだね」
「そうね。これを見終わったら、次はどうしようかな？」

テレビに目を向ける日和の隣に座り込む。
僕がもじもじしていたら、日和が僕に振り替え話し掛けてくる。

「狭間はどうだった？　『橋』の使い方はわかったかな？」
「うん、日和に教えてもらったから。どうにか……」
「そっか、良かった」

日和が微笑み、続けて言う。

「だけど、一人で狭間を閉じられるなんて、もう上野君は立派な『橋』だね」

日和の言葉を聞いて、背筋が寒くなる。あの夢と同じ……。
震えそうになる身体を誤魔化すために。日和に手を伸ばして、ギュッと抱きしめる。
すぐに、首を傾げる日和の耳元で囁く。

「違うの。今のは嘘。本当は何にもできなかった。リチャードも狭間に飲まれちゃったし……。頑張ったのは僕じゃないの。僕は何もしていないの」
「どうしたの？　上野君？」
「何でもないの。何でもないから……」
「そう……何でもないのね」

日和はきっと勘付いている。

僕の考えている事……きっとわかっているはずだ。
だけど、何も言わないのは日和が優しいから。
僕が怯えないように優しくしてくれる。
日和が僕を抱きしめてくれて、僕の心が安定する。

落ち着きを取り戻した僕の頭を、日和がゆっくり撫でてくれる。
みぃ……。頭を撫でられて、心地よくて。
ボーっとしていたら、日和の声が聞こえてくる。

「ところで……上野君」
「みゃあ？」
「さっき、狭間に飲まれちゃった人がいるとか……」
「あ、そうだ。リチャードが飲まれちゃったの。背が高くて、黒いスーツを着ていて、凄くカッコいい人。お嬢様の護衛さん。本名は、黒松って言うんだって」
「そうなの。だけど、狭間に飲まれちゃったのなら。早く助けてあげないと。今ならまだ間に合うかも……」
「どうすればいいの？　僕は……狭間に入ったら、出られないよ」
「そうね。未来さんに連絡してみたらどうかな？」
「うーん、そうだね」

日和の言葉を受け入れて、未来に電話をする事に。携帯を取り出し、電話してみる。
出てくれるかな？
しばらくしたら、電話の向こうから声が聞こえてくる。

「はーい。毎年金欠、ディサストでーす」
「はーい。毎年ヒッキー、進一でーす」
「あれ？　何だ、メモリーか。誰かと思った」
「僕の電話番号教えてなかったっけ？」

「いや、新しい携帯になってから。登録してないだけ」
「あぁ、そっか」

思わず頷く僕。未来が話を変えてくる。

「それで、今日は何の用？」
「いや、それが……知り合いが一人、狭間に飲まれちゃって。どうしたらいいかな、と思って……」
「誰が飲まれたの？　リョウ？　リョウなら、スルーだね」
「ううん、リチャ……じゃなくて、黒松さん。黒いスーツを着た背の高い人……」
「あぁ！　っていうか、あの人は狭間に飲まれたわけじゃないと思うよ。そっか、ハルにも説明してなかったね」
「え？　リチャードは狭間に飲まれたんじゃないの？」
「えーっと、うん。まぁ、俺がなんとかするよ。心配しないで、気楽に待っていて」

電話が切れる。
聞きたい事が色々とあったのに、何だか誤魔化された気分。
今の話を日和に言ったら、『未来さんなら大丈夫』って言われた。
ということは、きっと大丈夫なのだろう。
するべき事がなくなって、日和に甘えてへばりつく。

そういえば、お嬢様とドエロい約束……じゃなくて、ド豪い約束しちゃったよな。
どうしよう？　これは……日和に相談できない。できるはずない。
そりゃそうか……。

掃除後〈ハル編〉（前書き）

たまに秋山さんの立場が
メモリーの彼女……じゃなくて、
メモリーの母親に見えるのはどうしてだろう？
息子に婚活を進める母親（笑）

掃除後〈ハル編〉

家に帰って、お父さんに一言『お疲れ様』と声を掛けよう。
そう誓ったのは、家の中に入るまで。
入ったら、一気に言う気が失せる。
というのも、僕が真面目に勉強していたというのに、この人はもう……。

ソファーでイチャイチャしている二人組。
お母さんの膝を枕にしながら、猫じゃらしで遊んでもらっているのはお父さん。
お母さんはテレビを見ながらも、邪魔をしてくるお父さんに猫じゃらしで対抗。
どちらも楽しげに、ウフフなオーラを出している。

イラッとして、思わず、お父さんの頭を殴ろうかと思った直後。
お父さんが話しかけてくる。

「おかえり、ハル。晩ご飯はお寿司だよ。冷蔵庫に入っているから、勝手に食べてね」
「はーい」

すぐに方向転換。
晩ご飯を買ってくれていたのか。
仕方ないな。今回だけは勘弁してあげよう。
冷蔵庫からお寿司を取り出して、ソファーの前にある机まで持っていく。
キッチンで一人食事なんてつまらない。

かと言って、ソファーでいちゃつく二人の隣に座るのは気が引けるので、地面に正座だ。
椅子なんて必要ない。日本人なのだから、床で十分。
僕が夕食を食べ出しても、二人のラブファイヤーは止まらない。

お父さんは大喜びだ。
尻尾がいつもよりも激しく動き回っている。
ハチャメチャに楽しいらしい。
くだらない猫じゃらしを噛みながら、ほのぼのしている。
そんなお父さんを見ていると、尻尾を引きちぎってやりたくなる。
夕食を食べ終わったら、実行しよう。

暖かい緑茶を飲みながら、テレビに目を向ける。
二人に目を向けると、むせそうになるから。テレビを見ながら、話しかける。

「それで、黒松さんはどうなったの？」
「未来がなんとかしてくれるって」
「未来さんが？　それは……不気味だね」

そういえば、あの時……未来さんの声が二つ聞こえた。
『早く帰れ』と言う未来さんに、『はいはい』と返事を返す未来さん。
もしかしたら、と思ったけれど……。僕の考えが当たっているのだろうか？

本来、自分に得がなければ未来さんは動かない。てこでも動かない。
だけど、例外がいくつか。よっぽど暇をしている時、又は、何か負い目を感じている時。

さては未来さん……何か隠しているな。
わざわざ僕らを助けに来てくれた理由。
それと、僕の予想では一つ説明不足な点がある。
未来さんは問いかけないと説明してくれない。
僕やハルトはそこまで気にしなかったから、聞く事もなかったけれど……。

未来さんとハルトの能力はほぼ同じだ。そう聞かされている。
だけど、ほぼという事は完全ではない。
未来さん……名前通り、もしかして？
だけど、そんな事が可能なのだろうか？
ちょっと本人に聞いてみないとな。

夕食を食べ終えて、例の宿題……『身近な人の仕事を見て、今後の自分の就職について思う事を作文にする』を始める。
すぐにお父さんに向いて質問だ。

「あのさぁ、お父さんの本業って売春？」
「違う！」
「でもさぁ、その……パソコンの仕事と比べて、収入はどうなの？　どっちが多い？」
「え……っと……それは……」
「え？　何？　上野君……お金がないからって、まさか……」

目を丸くしながら口を挟むお母さん。お父さんが否定し始める。

「違う！　違うの！　それはハルが勝手にお嬢様と取引したの！」
「お父さんったらね。自分の身体をレンタルするんだって、高額で例の菊池お嬢様に。これって、浮気かな？」

「ハル！　変な事を言うのは、止めなさい！」

お父さんがマジ切れ寸前。

だけど、僕もイライラしているから。

ちょっと口が出てしまう。

「だけど、今更言っても仕方ないじゃん。どうせこの間の一週間で、お嬢様に無茶苦茶されたんでしょ？　今回のお泊まり会だって、どうなの？　二人きりだったって、聞いてるし」

「うるさいな！　ハルはもう喋らないで！」

「ほらほら、二人共、落ち着いて。そんなに騒がないの。喧嘩は駄目だよ」

お母さんが仲介を始める。

それにしても、何でこんなにイライラするんだろう？

あぁ、そうか……あんまりにラブラブな両親を目にして、ちょっとちょっかいを出したくなったんだ。

だって、僕だけ除外された気分だったから。

可哀そうな振りして、お母さんに泣きつくお父さん。

そんなお父さんの頭を撫でながら、お母さんが口を開く。

「よしよし、上野君。大丈夫だよ。私は怒ってないからね」

「大体、お母さんがお父さんに甘過ぎるんだよ。もうちょっとドライにならないと、お父さんがどんどん甘えたになって……」

「あらあら、ハル君も甘えたいの？　ほら、こっちにおいで」

「……結構です」

違う……そんなのじゃない。

僕はその……二人の周りをわきまえない態度が……。

何て思っていたら、急に誰かに抱きつかれる。
驚いて振り返ると、お母さん。
ギューっと僕を抱きしめて、僕の頭を撫でてくれる。
今の僕は高校生の姿なんだけど、うーん……。

恥ずかしいような、嬉しいような。
何とも言えない気分を頭の中で分析していたら、ソファーで寝転がっているお父さんがいらない事を言いだす。

「顔が赤いよ～。もしかして、日和に惚れた？　お母さん大好きっ子？」
「違う！　変な事を言わないでよ、お父さん！」
「うわ～、マザコンだ～。マザコン発見」
「うるさいな！　マゾスター！」
「何、それ!?　ちょっと!!?　マゾにスターなんて付けて。僕はそんなんじゃない！」
「あんな背の低いお嬢様に襲われている時点で、マゾスターじゃん！」
「違うし！　もう、何なの、こいつ!?　反抗期!?」

口喧嘩が絶えまなく続き、最後はお父さんと僕が取っ組み合い。
別に殴るわけでも、乱暴するわけでもなくて。
単にお父さんが僕の所へ飛んできて、僕をギューっと抱きしめるだけ。
本気で取っ組み合いなんてしたら、僕が勝利するのは目に見えているもの。

じゃれあう僕達を眺めながら、お母さんが鋭い言葉を投げてくる。
「それで、もしも……上野君が菊池さんとできちゃったら、玉の輿

だね。すご〜い、漫画みたい。でも、年が少し離れすぎかな？　ううん、大丈夫。上野君は年齢読めない顔しているし。菊池さんは上野君の事を大好きみたいだから。後は、上野君が菊池さんの事を好きになれば問題なしかぁ〜。私的には、良い子だと思うんだけどなぁ〜。上野君、菊池さんと本気で付き合ってみたら？　将来性もあるし、相性だって良さそうだし。あ、でも菊池さんのご両親が了承してくれないかな？　うーん、こうなったら……」

お母さんが頭の中でドラマを制作しているみたい。
数秒考えた後、目を輝かしながらお父さんに口を開く。

「できちゃった婚狙いだ！」
「ハルー！　日和がー！」

今度は僕に泣きつくお父さん。
お父さんって忙しいな。何だかいつもバタバタしているイメージ……。
お母さんの言葉にショックを受けたお父さんが、うにゃうにゃ言いながら、僕にちょっかいを掛けてくる。
悪戯ならお母さんにしてほしい。

僕を振り回すお父さんに、勝手に夢見るお母さん。
これを平和と呼ぶのだろう。
ちょっとハルトに自慢したい。

掃除後〈瑠菜編〉（前書き）

秋山さんがあんな事を言うから～。

掃除後〈瑠菜編〉

私……何をしていたのかしら？　ここはどこ？
ぼうっとしていたら、辺りがハッキリしてくる。
ここは……私の部屋。そういえば、学校から帰ってきた所だったかしら？

何だか頭がしっかりしない。体調不良？
そんな事を考えていたら、背後に人の気配。
振りかえると上野の姿。
あら……？　今日は上野と約束なんてしていないのに。
不思議がる私に近づいて、上野が私を抱きしめる。

「ごめんね……。瑠菜」

え……？　何……？　どうして謝るの？
少し不安を感じる私に、上野がキスをしてくる。
あら……今日は行動的。何かあったのかしら？
私が黙っていると、上野が少し照れたような顔をしながら、続きを口にする。

「本当はね、僕……。君を一目見た時から……」

え？　え？　え？　え！？　嘘っ！？　まさか……。
心臓が高鳴り、身体が熱くなる。
もしかして、もしかして……。
期待と興奮で、耳が敏感になり。次の上野の言葉を待つ。

「君の事が……」

というところで、目が開いた。くだらない夢落ち。
面白くなくて、一人膨れながら、ぶっきらぼうな声を出す。

「こんなに良い夢……せめて最後まで見させなさいよ」

面白くない、面白くない、面白くない。
不満のあまり大の字にでもなってやろうと、勢いよく寝がえりを打ったら。腕が何かに激突する。
すぐに聞こえてくるのは人の叫び声。

「痛い！」

寒気を感じながら、声の方を振り向くと、上野の姿。
そういえば、上野と素晴らしい約束をしていたんだった。
上野が丸くなりながら、泣きそうな声を出す。

「何……？　僕……何かした？」
「ち、違うの！　今のは事故よ！　上野がいる事……すっかり忘れていて」
「んん～」

上野が布団にもぐりだす。
もしかして、今ので嫌われた？　どうしよう？
もぞもぞと上野に近づいて、様子を見ようとしたら。上野が布団から顔を覗かせてくれる。

「はぁ……。おかげで目が覚めちゃった。君って寝相悪いんだね」
「ち、違うの！　今のはちょっと……寝返りをうとうとして」
「凄くダイナミックな寝返り。これなら誰にも襲われないよ」

「……そうね」

ちょっと上野が不機嫌そう。
まぁ、眠っている時に叩かれたら怒っても不思議じゃない。
私が静かに黙っていたら、上野が話しかけてくる。

「ずっと起きてたの？」
「ううん、良い夢を見ていたら。途中で目が覚めたの」
「どんな夢……見てたの？」
「上野に告白される夢」
「フフフッ……」

上野が楽しげに笑いながら、また布団にもぐりだす。
上野のそういう動きを見ていると、何だか凄くキュンとくる。
何とも言えない好意を感じていたら、上野が布団から少しだけ顔を覗かせて私を見てくる。

「それで……どんな風に告白されたの？」
「えっと……私にキスをして。上野が言うの、『君を一目見た時から……君の事が』。そこでお仕舞いよ。良い所だったのに……」
「フフフフッ……」

上野が恥ずかしい程に楽しそうな声を出す。そんな上野を見て、私が口を出す。

「笑わないで。私にとっては……素敵な夢だったんだから」
「夢だけどね」
「わかってるわよ！」
「フフフフッ……」

何が面白いの？　怒りよりも、恥ずかしさの方が大きい。上野、笑い過ぎ。
楽しげな上野の行動を止めたくて、上野にちょっかいを出す。
身体中を撫で回したら、上野の笑いも吹っ飛んで、今度は私に謝りだす。

上野と戯れていたら、どんどん眠たくなってくる。
私が大人しくなりだした頃に、上野が私を抱きしめる。

「もう眠い……」
「上野は……暖かいわ」
「ネコ耳を付けてから、寒がりなの。体温も上がったみたい。今は三十八度が平熱。ちょっと高いね……」
「うん……気持ちいい」
「瑠奈は……ちょっと冷たい。僕より冷たいけど……でも、暖かい」
「うん？」
「フフッ、何でもない……」

夢と同じように抱きしめられて、心地いい気分になる。
私を抱きしめる上野は幸せそう。
ネコ耳をパタパタ動かしながら、ゴロゴロと喉を鳴らしている。
これは夢じゃないのね……。眠ったら、もったいないのに……。

朝方の話。人の気配で目が覚める。
隣を見ると、上野が座りながらぼうっとしている。
何だか顔色が悪い。どうしたのかしら？
青い顔をする上野を心配そうに眺める私。

「どうしたの？」
「ちょっと……嫌な夢見た」
「どんな夢？」
「君に告白される……夢」
「あら……」

昨日の私の夢が移ったのかしら？
フフッ、どんな風に告白されたのか聞いてみましょ。
上野に向いて、問いかける。

「どんな風に告白されたの？」
「……」

上野が私を見て、停止する。
どんどん顔が赤くなり、私から目を逸らして、うつむく。
ふいに私に近づいてきて、耳元で小さく囁く。

「僕と……君の間に、子どもができた。って、君に言われるの。凄くリアルで怖い話」
「フフフフッ……」
「わ、笑わないでよ。本当にビビったんだから！」
「だけど、上野。本当にできちゃったら、どうするの？」
「あ……えっ……うぅ……ん……」

指遊びをしながら、上野が真顔で考えだす。
できちゃった婚……それもいいわね。
私達、これだけ毎日ベッドを共にしているんだから、そろそろできてもいいと思うけど。
避妊なんてもちろんしているわけないし。
まぁ……上野には適当に言って誤魔化しているけど。きっと勘付い

ているわね。

赤ちゃんか……菊池家の子どもは女子が一人と決まっているから。遺伝か何かで、男子は生まれないし、女子も一人以上は授からない。私にしてみれば、却って楽ね。

子どもの名前は何にしよう？

なんて、本当はずっと前から決まっているのに。

ウフフフ、きっと上野も認めてくれるわ。だって、可愛い名前だもの。

結婚式はどうしよう？　子どもを産んでからにする？

上野はここに引っ越して来て、私と一緒に住むの。

やっぱりその方がいいわ。離れて住むのは寂しいもの。

私が先々の事を考えていたら、上野がぼそりと一段階前の話をする。

「せ……責任は取ります」

毛づくろい〈秋山編〉　★（前書き）

更新、遅れ気味ですね～。
なぜなら、３Ｄとかいう未知の世界に足を踏み入れようとしているから。
多分、すぐに帰ってきますよ。っていうか、追い返されますよ。難しすぎて。

毛づくろい〈秋山編〉　★

最近、気になる事がある。ベッドの上で転がりまわる上野君。
不意に上体を起こして、座ったままボーっとする。
その後、自分の手の甲をペロペロ舐めて、その手で頭をクシクシする。
自分の尻尾もペロペロ舐めて。最後は満足そうに、ベッドの上で眠りだす。

上野君……まるで猫みたい。
これって、わざと？　それとも、ネコ耳の影響？
可愛い……凄く可愛いけど……。これ……良くないよね？
だって、上野君は人間……。手をペロペロしたら、口の中に雑菌が入りそう。
なんとかして、止めなくちゃ……。

だけど、どうやって止めよう？
癖っていうのはなかなか直らないものだから。本人がよっぽど意識しないと難しいよね。
うーん……どうしようかな？　じっと考えて、名案を思い付く。
上野君には悪いけど、ここは許してもらおう。

冷蔵庫からチューブのワサビを取り出して、上野君に近づく。
ゴロゴロと喉を鳴らす上野君の手の甲に少しだけワサビを付けて、薄く延ばす。
私がワサビを片づけて、ソファーで読書していると上野君が目を覚ます。

ぼんやりしながら、また手の甲を舐め始める上野君。数回舐めた

後、動きが止まる。
そして、泣きそうな顔をしながら、布団の中に潜って行く。聞こえてくる上野君の声。

「にゃ～う！　な～う！」
「ごめんなさ～い！　上野く～ん！」

あまりにも寂しげな鳴き声を聞いて、思わず上野君の元へと駆け付ける。
そんなつもりじゃなかったの。私はただ……上野君を心配して。
私がベッドの隣で謝っていたら、上野君が布団の中から顔をのぞかせる。
そのまま私に抱きついて、ぐずりだす。

「日和が苛める～！」
「上野君のペロペロ癖を直そうとしただけなの～。別に上野君に意地悪しているわけじゃないよ～」
「そうなの？　だけど、ペロペロしないと落ち着かないの。何だか凄く気持ち悪いの」
「上野君は人間だよ。ネコちゃんじゃないんだよ。手が汚れていたりしたら、口の中に雑菌が入って、お腹を壊しちゃうかもしれないし……」
「それはそうかもしれないけど……。どうしても我慢できないの」

う～ん、困ったな。
上野君も我慢しようと努力した事はあるみたい。それでも駄目だったのね。
やっぱりワサビ作戦を続けてみようかな？
私達がお喋りをしていたら、玄関の扉が開く。ハル君が本屋から帰って来たみたい。

「ただいまー。それで、何してるの？　二人共？」
「上野君のペロペロ癖を直そうと思って、話し合いをしているの」
「ペロペロ癖？」
「それがね……」
私が説明をすると、ハル君が理解してくれる。不意にハル君が上野君に顔を向ける。
「お父さん、ペロペロ癖を直さないと。お母さんに嫌われるよ」
「みぃ！？」
上野君の顔が硬直。
どんどん顔色が悪くなって、最後は泣きそうな表情を浮かべながら私に顔を向ける。
上野君を嫌いになることなんてあり得ないけど。
そうね……ここはハル君の意見に乗ってみようかな？　頷きながら、上野君に言ってみる。
「ハル君の言うとおりだよ。私、上野君を心配するのに疲れちゃって。上野君の事を嫌いになっちゃうかもしれないよ」
「そ、そんなのヤダ。それだったら、我慢する。ペロペロ癖を直すから、そんな事言わないで」
「うん。それじゃあ、頑張ってペロペロ癖を直そうね」
「うん、頑張る」
真顔で頷く上野君。
上野君がこれだけヤル気を出してくれたら、なんとかなるかもしれないな。
少し安堵を覚えて、上野君の頭を撫でる。

それから数時間後、ソファーに座ってテレビを見る私の隣には、寝転ぶ上野君。
不意に上体を起こして、じーっと自分の手の甲を見る。
物悲しそうにため息をついて、寝転がる。
しばらくして、起き上がって、また手の甲を見て、ため息。

そんなにペロペロしたいのかな？
眺めていたら、何だか可哀そうに思えてくる。
不意に上野君が立ち上がり、ソファーを離れる。
しばらくして戻ってくる。手にはマタタビ。これで我慢するみたい。
マタタビをカミカミしながら、寝転がる上野君。
私がマタタビを持ってみると、凄く嬉しそうにゴロゴロと喉を鳴らしだす。

こうして、この日は上手い具合に我慢する事ができた。
上野君、明日も我慢できるかな？
マタタビをカミカミしながら、すり寄ってくる上野君を構いながら考える。

翌日になり、ハル君と恵梨ちゃんが学校へ出かけてしまい。
上野君は一人でお留守番。私も隣にいるけれど、身体がないから話し掛けられない。
上野君はパソコンの前でお仕事中。
ペロペロ癖は直ったのかな？　今日はまだ見かけていないけど……。

切りの良い所まで仕事を終えたのか、上野君が立ち上がる。
そのまま隣の部屋へと移動。昼食を食べるみたいね。今日は何を食

べるのかな？
上野君を眺めていたら、インスタントラーメンを取り出す。
またラーメンか……それなら、野菜も入れないと駄目だよ。

隣で騒ぐ私の声は聞こえていないみたい。
上野君……野菜を入れずにラーメンを炊きだした。後で注意しなくちゃ……。
いつも通り漫画を読みながら、ラーメンが冷めるのを待つ上野君。
長い時間が経過して、ラーメンを食べ始める。

食事を終えて、後片付けをして。再度仕事……というのは真面目な人。
上野君はのんびりだから、仕事を放置してベッドに寝転ぶ。
コロコロしながら、例の行動。手をペロペロ舐め始めた。

うーん、気になるな。どうにかして止めたいけど、今の私じゃあ……。
私がそわそわしていたら、上野君が我に返る。

「あ、舐めちゃ駄目なんだ……。昨日、日和と約束したっけ……」
「そうそう！　偉いよ、上野君！」
「舐めちゃ駄目……」

上野君が自分の両手を見ながらしょんぼりする。
そのままコロコロ転がって、何だか落ち着きがなくなってくる。
どうもイライラしているみたい。

私が心配していたら、上野君が布団に抱きつく。
そのまま両足で、ポスポスと蹴り始める。
次に、布団を噛んで引っ張って、枕まで蹴って。もう大暴れ。

凄く悔しそうな声を出しながら、転げまわってベッドから落ちる。

上野君……そんなにペロペロするの好きだったんだ。

上野君の行動を見て、何とも言えない罪悪感を覚える。

もういいよ。ペロペロしてもいいよ。

ストレスで暴れ回るくらいなら、少しくらい手をペロペロしても構わないよ。

言ってあげたいけど、身体がないし……。

最後は、上野君がマタタビを取りに行って、それで遊び始める。

マタタビでストレスを発散させるみたい。

後で、謝らなくちゃ。

まさか、こんなにもペロペロするのが好きだったなんて知らなかった。

それにしても、上野君……。日に日にネコちゃんみたいになってきてるな。

ネコ耳を付けだした当初はそうでもなかったのに……。

このままじゃあ、いつかネコちゃんに……なったとしても、今と大して変わらないか。

だけど、これ以上、上野君が可愛くなったらどうしよう？

もっと玩具を買ってきてあげたくなっちゃうな。

今度、買うなら何にしよう？　ネズミの形をした玩具がいいかな？

紐の付いた玩具……そういうのがあったと思う。うん、それにしよう。

私が次に買う玩具をイメージしていたら、ゴロゴロという音が聞こえてくる。

ベッドを見ると、上野君が眠っている。どうやらお昼寝モードみた

い。
本当に、最近の上野君は幸せそうだな。
＞i25624―231＜

スズメがね（ハル編）（前書き）

漫画小説なのに、イラスト描いてないよ。
今は３Ｄイラストを描こうと必死だよ。
だけど、どうも難しすぎて手に負えないなぁ～。

スズメがね（ハル編）

学校での話。黒松さんが帰って来た事をお父さんに告げたら、自分も会いたいとほざきだした。
そういうわけで、今日はお父さんもここにいる。
教室の後ろで駄弁るのは、お父さんと黒松さんに恵梨さん。
三人で授業とは関係のない話をしている。

それにしても、お父さんは黒松さんの事が大好きみたいだ。
べったりとまとわりついて、子どもみたいに大はしゃぎ。
黒松さんはお疲れ気味で、どちらかと言えばお父さんから離れたい気分だろう。
僕的には、子どもに集られて精神疲労している柊さんを見ている気分。
もちろん、子どもがお父さんで、柊さんが黒松さん。

教卓の前で、先生が面白くない程に初歩的な公式の話をする中。
それを無視して、少し難易度の高い問題集をする僕。
ムリムリ、当たり前過ぎて話なんて聞く気になれない。
聞く前から分かっている問題を聞いていたら眠くなる。
それなら、個人で勉強しているほうがいくぶんマシだ。

問題を解きながら、ふと思う事。この問題……先生は解けるのかな？
わからない振りをして、後で質問してみよう。
僕が先生苛めを企んでいると、教室の窓から何かが飛び込んでくる。

異物混入で、騒ぎだす生徒達。
バタバタと忙しなく飛びまわるのはスズメみたい。

蛍光灯のカバーの上とか、箒を入れるロッカーの上とか。
高い所にちょこちょこ止まる姿を見れば確信だ。やっぱりスズメだな。

たかがスズメ一匹で教室中が大騒ぎ。
真面目に授業を受けたいと思っていない生徒が大半だ。
少しでもサボれるきっかけを見つけたら、それに釘付け。
なんとかして授業から逃れようと必死になる。

授業を受けたい僕にとっては単なる迷惑……な～んていうのは嘘。
授業内容が低レベル過ぎて、丁度飽き飽きしていた所。
こういう事を勉強嫌いの人に言うと、しばかれるから黙っている。

教室中を飛びまわるスズメ。楽しくて飛んでいるわけではないだろう。
迷子になって困っている……これが妥当な意見。
捕まえてやろうかとも思うけれど。
確か、スズメって……凄く汚いって聞いた事がある。
手掴みするのは、ちょっと躊躇……。

皆の様子を観察して楽しんでいたら、急に騒ぎ声が聞こえてくる。
騒いでいるのは斎藤君。何せ斎藤君の机の上にお父さん……。
しかも、土足のまま、立ってる。
机の上のノートや筆箱を踏みつけ、じっとスズメを見上げている。
まるで獲物を狙う猫のよう。

まずいな……。お父さん、ターゲットロックオンモードに入っている。
周りの音なんて聞こえちゃいない。
耳と尻尾をピンッと立てて、半端なくスズメを凝視だ。

両手までタイミングを計ろうとテンポよく動いている。
今にもスズメに飛びかかりそうな雰囲気。

お父さんがジャンプして、スズメを捕まえたところで。
着地に失敗して、捻挫するのは目に見えているから。
それを止めるために、僕が立ち上がる。
お父さんが行動に移す前に、僕が乱入。
嫌がるお父さんを無理矢理に押さえつける。

僕達がギャーギャーともめていたら、プシュンという音。
同時に、ボトリッと何かが落ちる。
地面を見ると、スズメが横たわっていた。
次に顔を上げたら、黒松さんが目に入る。
手には灰色の拳銃……あれはきっと例のリングで作った物だろう。

ちなみに、リングというのは黒松さんがお出かけ中に手に入れた。
人間用魔力出力機。だけど、僕のように自由自在に魔力を操れるわけではない。
本来、人間が魔力を操ることなんて不可能なのに、無理矢理に出力させるので。
魔力の力が制限されてしまって、個人により能力に違いがでるらしい。
黒松さんの能力は武器化。要するに、武器専門店。

スズメの墜落により、教室中に悲鳴が響く中。黒松さんが口を開く。

「皆さん、落ち着いて下さい。これは麻酔銃です」
「なーんや、ビビったやん。リチャードがスズメをハントしたんかと思ったわ」とリョウさん。

「このような場所で、本物を扱うようなまねはいたしません」
「あー、僕のスズメ……」

お父さんが残念そうに、スズメを見降ろす。
まさか、持って帰って育てる気じゃないだろうな?
不満げな僕がお父さんを解放すると、スズメに近づいて、突きだす。
止めてよ、もう……。スズメは触っちゃ駄目だって。僕がお父さんに注意する。

「お父さん、スズメは凄く汚れているんだよ。触るのなら、後で手を洗ってね」
「はーい」
「本当にわかってるの?」
「うん、わかってる。じゃあ、逃がしてくるね」

わかってないような気がするお父さんがスズメを両手の平に置いて立ち上がる。

「リチャードと恵梨も付いてきて」
「はい、かしこまりました」
「う、うん! わかった」

立ち去り際に聞こえてくるお父さんたちの会話。お父さんが二人に話しかける。

「スズメって食べれるんだよ。知ってた?」
「人づてに聞いた事はありますが……。私は一度も……」と黒松さん。
「おばあちゃんに聞いた事はあるけど……。怖くて私は絶対に無理……」恵梨さんが口を開く。

「僕もないな。じゃあ、今日の晩御飯にしよう！　好き嫌いはダメだものね」

楽しげなお父さん。その話を聞いていたのか、斎藤君が僕に言う。

「おい、今日の夕飯だって」
「僕はベジタリアンなので」
「あぁ……。じゃあ、関係ないな」

斎藤君が言う中、まだまだ聞こえるお父さんの楽しげな声。

「二人はゲテ物を食べた事ある？」
「イナゴやカエルあたりは……。お嬢様に強制されて……食した事がございます」黒松さんが暴露する。
「私は……特にないかな？」と恵梨さん。
「へー。僕は共食いした事あるよ」
「は……？　共食いですか？」
「え？　まさか、人間……？」
「人じゃないよ。猫を食べたの」
「猫……ですか？」
「猫……って、食べれるの……？」
「うん、結果的にはね。だけど、本当は僕……猫だって知らなくて。その上、僕がひそかに可愛がっていたノラ猫だったのに……。嫌な奴に嵌められたの。本当、ひどい話。詳しく聞きたい？　ちょっとホラーも入るけど」

聞くから、ここまで戻ってきてほしい。
凄く気になるところで、お父さんの声が微かになる。
うーん、いくら耳を澄ましても聞こえない。
犬耳を付けていたら、まだ聞こえただろうに。今はまったく聞こえ

ない。

僕がもどかしい気分でいたら、椅子から立ち上がる音が聞こえてくる。

振りかえると、菊池さん。先生に何も言わずに教室を後にする。

もしかしなくても、お父さんを追いかけるつもりだろう。

流石、お父さんのファンだ。行動力が半端じゃない。

ファンでもない僕はやっぱり居残る事に。帰ってきたら質問しよう。

お父さんは未来さんじゃないのだ。

問いかけたら、すぐにでも教えてくれるだろう。

再度、授業が始まって。ヤル気も持たずに勉強に取り組む生徒達。

ふと斎藤君に目を向けると、ぐちゃぐちゃになったノートを眺めながら眉をしかめている。

あー、謝るの忘れてた。ごめんなさーい。

心の中で一言述べて、斎藤君から目を逸らす。

今は授業中。後で謝っても遅くはないよね？

そういえば〈ハル編〉　★（前書き）

さて、覚えていますか？　ストーリー……。
自分は半分以上……。
まぁ、久しぶりの更新だし……ね。（^―^；）

そういえば〈ハル編〉　★

お家での事。何だか気乗りしないから、学校を休んでお父さんと一緒にゴロゴロしている僕。
恵梨さんはちゃんと学校に行った。
偉いなと思いながら、ちびっ子モードで『行ってらっしゃい』と手を振ったら。
恵梨さんが『行きたくなーい』と喚いていた。
だけど、休んだら梨香さんに怒られるらしい。
今日は体育がある日だから。

そのままの姿で、お父さんの膝に座り。テレビを眺めていたら、ふと思い出す事がある。
そういえば、お父さんがかなり昔に話していた話……。あれって、本当だろうか？
真実を確かめるために、僕がお父さんに振り替える。

「ねぇ、パパ」
「なーに？」
「だーいぶ前にね。ここじゃなくて……えーっと、ニートさんがいる所で、お話していた事……。あれって本当なの？」
「どんなお話？」
「パパの世界は一年がグルグルしているお話」
「あぁ、その話ね」

一年がグルグルって言うのは、この世界の時間は止まっていて、一年がループしているって事。
以前に話を聞いて、驚いた事を……微かに覚えている。お父さんが微笑みながら答えてくれる。

「本当だよ。ただ……まったく同じ年はないんだよね。凄く良く似た年はあるけど……。以前にね、宝くじを買って……。あの……自分で数字を書く奴。それで見事に大ハズレだったの。賭け金が低かったからよかったけれど、大金を使っていたら泣いていたところだよ」

「それは楽をしようとするパパが悪いの」

「そうだね～。ハルは真似しちゃ駄目だよ～」

お父さんが僕を抱きしめながら、頭を撫でてくれる。僕の髪をいじりながら、口を開く。

「だけど、今回は異常だな。日和はもちろんの事……雫や瑠奈に出会ったのも、今回が初めてだし。まぁ、僕の行動が変わっているから。起きる出来事にも影響しているのだろうけど……」

「来年はまたループなの？」

「それだったら、瑠菜との関係もなかった事にできるね。そりゃ、いいや」

「えー、もったいないよ。せっかく菊池さんと仲良くなれたのに。上野君、このまま菊池さんと付き合ってくれないの？」

お母さんが口を出してくる。

もちろん、お父さんには聞こえていない。

分かっているにも関わらず、お母さんが話し続ける。

「大体、時間が止まっているのも。上野君が動かないからだよ。上野君が変えたくないって思うから、止まっちゃうの。上野君が思っている以上に、『橋』の力は大きいんだよ」

「へ～、そうなの」頷く僕。

「どうしたの？」

お父さんが問いかけてくる。僕がお母さんの言葉を簡単に説明する。

「パパの気分で止まってるんだって」

「へ～、そうなの」

罪悪感も感じていないお父さん。

まぁ、他の人も気づいていないのだから、いいのだろう。

急にお父さんが勝手な発言を始める。

「それじゃあさぁ、恵梨が帰ってきて。日和が恵梨の身体を乗っ取った後に。僕が『このまま一生一秒たりとも進むな！』って願ったら、ずっと日和と一緒に居られるの？」

「上野君、もう少し『橋』としての自覚を持とうね」とお母さん。

「パパは自分勝手なの～」

プーっと膨れる僕。お父さんがつまらなそうな顔をしながら、僕の髪をわしゃわしゃする。

「うーん、ダメか……。良い手だと思ったんだけどな」

「ねぇねぇ、パパ……。来年になったら、貯金残高増えるの？　そしたら、食べ放題？」

今年は僕が来て、食費で貯金が急激に減ったそうだから。

来年になったら、今年の初めの貯金まで回復する……。

ってことは、このループを利用して、食べ放題ができる。

僕が真面目に考えていたら、お父さんが呆れ顔で僕を見る。

「ハルも自分勝手だね～」

「フフッ……誰に似たのかしら？」

クスクスと笑うお母さんを見て、思わず顔を赤らめる。

どっちに似たんだろう？　お父さんか……お師匠さん……。

＞ｉ２６９６１―２３１＜

夜遊び〈メモリー編1〉　★（前書き）

人気投票を作りました。
目次の下の方です。
なぜか、秋山さんがいない。
ということで、メモリーに怒られたＫＹですが。
作りなおす気にもなりません。

夜遊び〈メモリー編1〉　★

いつものように、瑠奈の屋敷に遊びに来て、お喋りをしながら二人で過ごす。
ふと気が付くと、瑠菜が隣で眠っていた。
僕は昼寝をしていたから、全然眠たくない。
今は何時だろう？　デジタル時計に目を向けると、夜中の三時。
まだまだこれからの時間帯。

ちょっと遊びに出かけよう。
この時間なら起きている人もいるだろうから。
服を着替えて、布団を整えてから。瑠菜の額にキスをする。お出かけの合図。
これで瑠菜が起きるわけじゃないけれど。後で目が覚めて、何か言われた時に。
『さっきキスしてあげたのにな』とか言ったら、瑠菜が静かになるから。

音を立てずに、ちょこちょこと部屋を出る。
とりあえず、鍵を閉めて、移動。
さて、どこに行こう？　目的地もないままにウロウロ放浪することに。

まずは手始めに、食堂付近に行ってみる。
何か食べ物はないかな？　ちょっとお腹が空いたかも。
僕が食堂に顔を覗かせると、まだ灯りが付いていた。
静かに侵入して、人の気配がする方へと歩んでいく。
不意に鼻がムズムズしてきて、クシャミをしてしまう。

「へっぴし！」
「誰だ！？」

調理場の奥から出てきたのは、コック長さん。名前は忘れた。
ここに来てから色々な人に会ったけれど、会い過ぎて名前なんて覚えていない。
僕の姿を見て、コック長さんが口を開く。

「あぁ、上野様でしたか。こんな遅くにどうなさったのですか？」
「お腹空いたの。何か恵んで」

野良猫のような瞳で、物乞いを始める僕。
その姿を見て、コック長さんが返答する。

「今から何か調理しましょうか？」
「ううん、残り物でいいの。何かない？」
「はい、ありますが……。残り物でよろしいのですか？」
「うん。ここの料理は凄く美味しいから、残り物でも全然オーケー」
「ありがとうございます。それでは、ご用意させて頂きますね」

コック長さんが調理場へ行って、冷蔵庫から色々と取り出してくる。まるでマジックみたい。
凄い手際の良さで、どんどん料理を出してくれる。
残り物でいいと言ったのに、何だか残り物の気配を感じない料理。
これって、本当に残り物？

コック長さんとダラダラ喋って、食事を終える。あ、もう四時だ。
夜中に乱入してきた謝罪と、料理を作ってもらったお礼を言って。
食堂を離れる。
あー、お腹いっぱい。それにしても、コック長さん……いつ寝てい

るんだろう？　凄く不思議。

そのままトコトコ歩いていたら、お庭を発見。バラ園だ。
庭に出て、花の前に行くとライトアップされる。
人の気配でライトが付く仕組みになっているから。

お庭の中をウロウロウロウロ……。ん……何だか寂しい。
キョロキョロと辺りを見回しても、誰もいない。
それに、広いお庭だから尚更に寂しい。
急に孤独を感じて、屋敷に入る。

誰かに会いたいな。コック長さんはもういないだろうし……。
どうしよう？　夜中の四時に起きている人……。思い当たらなくて、
泣きたくなる。
あ、そうだ。セントラルに一番近い場所……。
あの場所に行けば、向こうの声が聞こえてくるかも。

目的ができて、足早に例のルーシュ・ルーディーの部屋に向かう。
あの木の名前……瑠菜が教えてくれた。

部屋に入ると、あの木が目に入る。
今は枯れて、くたびれたように見える大木。
だけど、凄く優しくて。僕にとっては飛びぬけて美しい草花や木々
を全て集めても、これに勝る物はない。
まぁ、他の人が見たら、くだらない大木に見えるのだろうけど。

大木を見て、孤独感が軽くなる。
小走りに近づいて、大木に耳を当てる。
歌声のように聞こえてくるのは、世界の声。
空では鳥が飛んでいる、陸では人が歩いている。海の底には、見知

らぬ生物。
テレビを見ているのに近い。
僕達『橋』には、世界の情報が画像や音として頭に映る。

大昔の事、現代の事、未来の事。色々な生き物の考え方。戦争も平和も、良い事も悪い事も。
全てを平等に移しだす。あるがままの姿を見せる。それがセントラルに一番近い……中心の形。

うっとりと大木を見上げながら、口ずさむ。
大樹様から教えてもらった、僕達『橋』のメイン曲。
大木に額を当てながら、小さな声で歌い続ける。
大声で歌ったりしたら、誰かに怒られるかもしれない。

僕が歌い続けていたら、大木が生き生きと動き出す。葉を付け、花を付け。それはもう……凄く綺麗。満開の花。普段では目にしないような、虹のような色の花びら。

そういえば、未来に一度見せてもらった。
歌い方によって、花の色が変わって行く……。あれを一度やってみたいな。
見よう見まねで、未来がしていたように歌ってみる。
失敗するかな？　とか思ったけれど、そんな事もなく綺麗に花びらが赤く染まった。

黄に、緑に、青に、紫。どっしりと重めに歌ってみたら黒になる。
真っ黒の花びらは、何だか不気味だ。歌い方で、色を変える。
少しずつコツが掴めてきて、最後は一番好きな歌い方。
桜色の花びらが風もないのに宙に舞って、踊るように旋回を繰り返す。

疲れてきたから、口を閉じて。大木にもたれかかる。
そのままズルズルと座り込んで、もう一度、幹に耳を当てる。
うん……綺麗な声。歌を止めたにも係わらず、花は未だに咲き誇っている。
僕がいるから、影響されているのかな？

まぁ……正しく言えば、僕は仮で、ボールペンが本物なんだけど。
ボールペンを通して、僕の声が大木に伝わっているのであって。
決して、直接に伝わっているわけじゃない。
そう考えると、何だか少し残念だ。
本物の『橋』になってみたい……とついつい考えてしまう。
でも、日和のボールペンだもの。このボールペンを手放すのは、それ以上に辛い事。

「見事なものだね」

人の声。心臓が飛び出そうになる僕。
ハイスピードで花が散る。空気に溶けるように消えていく花びら。
僕が振り返るのは、声が発せられた場所。そこに居るのは、一人の男性。

＞ｉ２７０４３―２３１＜

夜遊び〈メモリー編2〉　★（前書き）

挿絵は、ＫＹの最近の流行りです。

誰だかわからなくて、思わず間の抜けた声を出す。

「誰……？　いつからそこに……？」

「これは失礼な事をしてしまったようだね。決して、君を驚かせるつもりはなかったのだが……。つい見入ってしまってね。声を掛けるのが、遅れてしまったよ」

僕が警戒するように、その人を見ていたら。向こうが笑いながら、話しかけてくる。

「あぁ、まずは自己紹介が先だったね。私は菊池大雅（きくちたいが）という者だよ。君は上野君だね。話は瑠菜から聞いているよ」

一瞬、僕の脳内が停止する。

菊池大雅？　菊池って……まさか。いや、間違いないだろう。

訝しげに相手の様子を窺っていた僕の顔色が真っ青だ。

すぐに立ち上がって、大雅さんに頭を下げる。

「す、すいません。外部の者なのに無礼な事を……。あの……瑠菜の……いえ、お嬢様のお父様ですよね？」

「ははははは、そんなに固くならなくていいよ。私も元は外部の者だからね。君と大して変わりないよ」

「いえ、滅相もない」

だって、瑠菜の父親って事は……何をどう考えても、凄いお偉いさん。

僕なんかと比べちゃいけないようなお偉いさんだ。

うわぁ……どうしよう？　冷や汗出てきた。
瑠菜との関係がバレたら、殺されるかもしれない。
だって、恋する関係……じゃなくて、ただの売春だもの。
恋愛関係でも、暗殺されそうなのに。これじゃあ、拷問されるかもしれない。

緊張する僕に向いて、大雅さんが口を開く。

「一度は君に声を掛けたいと思っていたのだがね。どうにも、時間がなくて。今になっての挨拶ですまないね」
「いえ……僕の方こそ、もっと早くに挨拶に行くべきでした」
「それで、瑠菜とは上手くやっているかね？」

ヤバイッス！！？
既に大雅さんの中では、僕と瑠菜が付き合っている事になっている。
きっと瑠菜が変な事を言ったのだろう。実際は違うのに……。
僕はなんて答えたらいいの？　動かない口を無理矢理に動かして、返答する。

「ハイ。オジョウサマトハ、ナカヨクサセテイタダイテイマス」
「うん？　口調が堅いね。まさか他に目当ての者がいるなんてことは……」

ヤバい、死んだ。
日和との関係は置いておいても。
恵梨が僕の家に泊まっている時点で、これって浮気？　そう思われても不思議じゃない。
相手が相手だし。隠し事なんてできないだろう。
もしかしたら、既に知っているのかもしれない。
僕が放心状態になっていたら、大雅さんがヘラヘラと笑いだす。

「ははははは、冗談だよ。どうせ先走ったのは瑠菜の方だろう。私の時もそうだったからね」

あれ……？　本気で聞いていたわけじゃないの？
急に気が抜けて、気分が軽くなる。

「大雅さんの時も……？」
「妻がね。なぜか、ジャーナリストの私に惚れこんでしまってね。私はルーシュ・ルーディーの記事を書こうと思い、ここへ訪れたのだが。そのまま帰してもらえなくて。妻に引っ張り回され、今に至るというわけだよ」

何だろう、この親近感？
僕の本能がこの人は安全だと理解する。
僕が安堵を覚えるのを眺めながら、大雅さんが続きを話す。

「妻はね。それはそれは、常人よりも度が過ぎていてね。また我慢ができない性質なのだよ。ルーシュ・ルーディーのある場所を紹介してくれると言いながら、私をとある部屋に閉じ込めて。嫌がる私に、みだらなまねをして。あの時は、これは夢だと信じていたよ。だけど、今があるという事は、あれは夢じゃなかったのだろうね」
「何だろう！？　この親近感！！？」
「君も身に覚えがあるのかな？　まぁ、瑠菜は妻に良く似ているからね。そもそも、菊池家にはそういう気性の女性が多いそうだ。だから、世間一般で魔女だと噂されるのだろう。私も妻を魔女だと感じた事が、それはもう山のように……」
「その……奥様って、どのような方なのですか？」
「女神のような素敵な妻だよ。性格も外見も、素晴らしいの一言だね。まぁ、問題をあげるとしたら……。一日に百度は声を掛けない

と、拗ねるというところかね？　後は、私が他の女性と話をしたら、怒りだすところか……。とにかく嫉妬深いのだよ。まぁ、それが可愛らしいとも言えるのだけどね……」

何だか大雅さんを見ていると、未来の自分を見ているような恐怖心を覚える。
他人事のように思えない。
不意に大雅さんが近づいてきて、僕の肩に手を置き恐ろしい事を言いだす。

「仲間だね」
「いやー！」

このままでは、巻き込まれる。
この菊池家という魔に翻弄されてしまう。
なんとかしなければ！
僕が唯一助っ人になってくれそうな大雅さんに問いかける。

「あの……何か手は？」
「私の経験で良ければお答えしよう」
「はい、お願いします」

頭を下げる僕の前で、大雅さんが後ろに腕を組んで口を開く。

「うむ……。あの頃の私も君のように、束縛される恐怖から、逃げ出そうとした事があってね。色々な手を考えたよ。だけど、菊池家は大きいからね。人脈も、資産も。儚いジャーナリストが敵うわけないじゃないか。しかし、それでもと思い……調べてみたのだよ」
「何を？」
「過去に、菊池家の女性から逃げだせた者がいるのかどうか……。

色々な資料を漁ってね。調べれば調べる程に顔色が悪くなったのを覚えているよ。調べつくして最後にわかった事はだね。諦めろという事……」

「何の役にも立たないです、その情報！」

「まぁ、こんな事を言うのもなんだがね。君も暴れまわればいいよ。きっと最後は疲れ果てて諦めるだろうからね。諦めれば、諦めたで、楽しい日々がやってくるよ。君が思っていた以上にね。私くらいの年になれば、これで良かったと思えるように……」

「全然、良くない……」

＞ｉ２７０４５―２３１＜

夜遊び〈メモリー編3〉（前書き）

夜中っていうのは、口が軽くなる時間帯な気がする。
余計な事まですっかり喋っているメモリー。
相手を信用するの早すぎ＜（゜）＞彡

何だか無駄に疲れた。
しょんぼりする僕。
不意に大雅さんが大木を見上げる。

「ところで、君に聞きたい事があるのだが……」
「分かる事なら……」
「君はルーシュ・ルーディーをよく知っているようだ。君の知っている事を教えてほしいのだよ」
「え……いや、それは……」

大樹様の事や『橋』の話をするのは必要最小限にしなければいけない。
なぜなら、世界の形を知って悪用を考える者が現れると困るから。
あくまで『橋』の皆で相談した決まり事だけど……。
僕がうろたえる様子を見て、大雅さんが笑顔を見せる。

「別に無理にとは言わないよ。君が言えないのなら、それでいい。ただ少し気になってね。色々な伝説が残るルーシュ・ルーディーだが……。この木が花を付けたのを見るのはこれで二回目だ。一度目は、君が瑠菜から逃げ出した時だね」
「あの時……大雅さんもいたのですか」
「隠れていたわけではないがね。人の声が聞こえたので、顔を覗かせたのだよ。そうしたら、君が歌を歌っていて。瑠菜が側にいてね。君が立ち去った後に、瑠菜に話を聞いて。それで、初めて瑠菜が君の事を好いている事を知ったね。それ以前から、君を知ってはいたが……」
「あぁ、ライブの時……」

「フフッ、そうだね。面白い子がいるものだ、一度は顔を合わせてみたい。とテレビを見ながら思ったものだよ。そうだ。テレビに出てみる気はないかね？　きっと君は大物になるよ、ジャーナリストの血が教えてくれるんだ」
「いえ、それはちょっと……遠慮します」

テレビなんて嫌だ、嫌、嫌。そんなの恥ずかしい。
どう考えても、ドジって天然バカキャラ扱いされるに決まっている。
ブンブンと首を横に振る僕に目を向け、大雅さんが残念そうな声を出す。

「そうかね？　面白いと思うのだが……」
「それより……大雅さんはどうしてそんなにルーシュ・ルーディーにこだわるのですか？」
「あぁ、それはだね」

不意に大雅さんが列をなす椅子の一つに座る。
隣の椅子をポンポンと叩きながら、僕に言う。

「君もここに座りたまえ。長い話になりそうだからね。立っているのも辛いだろう」
「はい……。失礼します」

僕が緊張しながら、大雅さんの隣に座らせてもらう。
少し間を置いてから、大雅さんが話し出す。
それはルーシュ・ルーディーにまつわる伝説の数々。
怖い話や不思議な話。
結構、悪い話が多いのは普段の見た目が悪いからかな？
こんなに素晴らしい木なのに、世間の人は見る目がない。

それでも、話は面白くて。いつしか、真面目に聞き入っている自分がいる。
ワクワクしながら次を次をと急かす僕の前には、尽きる事を知らないたくさんの伝説。
目の前に広がるおとぎ話は、まるで絵本を読んでいるよう。

不意に大雅さんが話を区切って、姿勢を正す。

「さて、そろそろ一息入れようか。ここまで話をしてきたが、これらの話のほとんどは、私が祖母から聞いた話でね。祖母は誰から聞いたのかというと、更に上の世代からだそうだ。代々、受け継がれてきたのだろう」

次に、大雅さんが深呼吸をしながら、残念そうな口ぶりで言う。

「しかし、誰もその姿を見た者がいなくてね。祖母も『一目見たい』と言いながら、亡くなってしまったよ。その時にね、私は決心したんだ。私の命が尽きる前に、一度でいいからルーシュ・ルーディーの姿を見て、この目に深く焼きつけようと。その日から、ルーシュ・ルーディーを探す旅が始まったのだよ」
「それで、ここにこの木があると知ったのは……」
「私が数多くの土地を歩き、数多くの密林に足を向け。数多くの噂を元に、走り回った後の事だ。私の知人の新聞記者がね、ふと妙な事を言いだしてね。『菊池家のお屋敷に枯れた木があるのはどうしてだろう?』とね。私はこの一言が気になり、ここへ訪れたわけだが……」
「奥様に捕まったと……」
「まぁ……そういうことだね。妻にいたぶられた後に、ルーシュ・ルーディーを目にしたが。その時は、それどころじゃなかったからね。妻から逃げる事で必死だよ。何が何でもと走り回って、今や夫

婦。初めてルーシュ・ルーディーを目にした時に、何の感情も湧いてこなかったのは、今でも残念だと思うよ」

「まぁ、仕方ないと思います……」

僕の言葉を聞いて、大雅さんが苦笑する。

「しかし、人間というのは皮肉なものだね。ルーシュ・ルーディーを目にする事ができ、長年の願いが叶ったというのに。次はこれの花が見たいという欲求が湧いてくるのだ。妻と結婚もして、子どもも生まれ。楽しい日々の間に、ルーシュ・ルーディーの世話を絶え間なく続けたよ。肥料や水、全てをルーシュ・ルーディーにとって最適であろう環境にしたにもかかわらず。花どころか、葉一枚も付ける事はなかった」

「……」

「そんな事をしているうちに、人生も折り返し地点だ。私の世代では難しいかもしれない。そう思い始めた頃に、君が現れた。初めは理解できなかったよ。ついに私の頭がダメになったのかと思ったね。だけど、いくら経っても幻は消えることなく。夢でもなさそうだ。君が立ち去り、瑠菜から話を聞き。君が原因で、ルーシュ・ルーディーの花が咲いたと耳にする」

何だか恥ずかしい……。

大雅さんの人生最大の夢を僕が叶えたみたいになっている。

考え込む僕の隣で、大雅さんが続けて言う。

「話してくれないかね？　君の知っているルーシュ・ルーディーについて」

「駄目です……。これは僕達『橋』の決まり事だから。言ったら皆に怒られるし」

「そうか……残念だね」

かなり残念そうな大雅さん。
ルーシュ・ルーディーの開花を見たら、次はその理屈をしりたいのか。
人間って、永遠に何かを求めるものなのかな？
あまりにも残念そうな大雅さんを見て、つい話をしてみたくなる。

「人に言ったら怒られるけど……。独り言なら、怒られないよね？」
「それはいいね。私も年だから、耳は遠いよ。君がここで何を話しても、きっと聞こえないから。安心して話をしてくれるといい」
「それって……人には言わないでくれるって事？」
「まぁ、それ相応の対応をするという事だよ」
「うん……じゃあ、次は僕の独り言」

まずは世界の形の話。恵梨には説明したはず、他の人は知らないだろう。例外は存在するけど。
セントラルを中心とした放射状に広がる各世界。それのリーダー、『橋』の話。
そして、各世界にはルーシュ・ルーディーのような、その世界の中心となる木々が存在する事。

そういう話をした後に、少し加えて、他の世界の様子も話してみる。
話せば話す程に楽しくなってきて、何だかいらない事まで話してしまったかも。
長い話を終えた後に、僕が大雅さんに目を向ける。

「そんなに面白い事はないでしょ？　期待外れだったかも……」
「いやいや、そんな事はないよ。驚きでいっぱいだよ。そうか……君がこの世界のリーダーなのだね」

「いや、僕って言うか……。このボールペンですけど」
「それを触らせてはくれないかね？　もちろん、すぐに返すよ」
「えっ……。まぁ、壊さないなら……」

期待で目を輝かせる大雅さんに、ボールペンを手渡す。
ボールペンをじっくりと眺めながら、大雅さんが口を開く。

「至って、普通のボールペンだね」
「凄いって言われたら、そう見えません？」
「言われてみると……。しかし、言われなかったら、わからないね」

真面目に答える大雅さんの姿が面白くて、クスクス笑い転げる僕。
大雅さんがボールペンを返してくれたので。
せっかくだから、立ち上がって、ルーシュ・ルーディーに近づく。
僕がボールペンを幹に当てると、ルーシュ・ルーディーが白く輝きだす。

「あっちがセントラルです」
「ほぅ……。私にも行けるのかね？」
「今は道を開いているから。でも、道案内がいないと、きっと迷子になって。戻ってこられなくなります」
「君が道を案内してくれれば……」
「駄目ですよ。こんな事、他の『橋』にバレたら、怒られますから」
「うーん、それは残念だね」

大雅さんがつまらなそうな顔をして、膨れ上がる。
僕がセントラルへの道を閉じた瞬間、ガタンッと扉の開く音が。
僕達が振り返ると、メイドさんが一人立っていた。

「旦那様、奥様がお探ししておられます。上野様は、お嬢様が。お

二人共に、ご機嫌斜めでいらっしゃいます。早くお顔を見せられた方がよろしいかと……」
「おや、今は何時かね？」
「今は七時過ぎでございます。本来なら、朝食のお時間です」
え？　七時？　もうそんな時間なの？
急に眠気が増してきて、頭がボーっとしてくる。
大雅さんを見ると、同じ気分みたい。何だかぼんやりしている。
不意に僕らの目が合って、大雅さんが口を開く。
「さて……行こうかね？　とりあえず、君の紹介で妻のご機嫌を取る事にしよう」
「一回限りの荒技ですね」
「瑠菜の機嫌も良くなって、君にとっても得になるよ」
「そのまま結婚じゃあ、得にもならないです」
「いいじゃないか。私が言うのもおかしな話だが、瑠菜は良い子だよ。別段、悪い話だとも思わないがね。私も君を気に入ったし、きっと妻も気に入るよ。何も問題ないと思うが……」
「できれば、大雅さんに瑠菜を説得してほしいくらいなのに。どうして、僕を説得しようとするんですか？　普通は逆でしょ？　『そんな男に娘はやらん！』くらいは言って下さいよ」
「そういえば、そうだね……。しかし、瑠菜を説得したところで効果は期待できないね。それができたなら、まずは妻を説得しているよ」
「まぁ、……そうですね」
うだうだと喋りながら、食堂に向かう僕達。
たったの一晩で、瑠菜の父親と打ち解けてしまった。
こんなノリだから、どんどんのまれていくのだろうな。本当に、菊池家って、恐ろしい……。

自己責任〈ハル編1〉（前書き）

最近は更新が遅いのです。
なぜなら、ゲームを買ったから。
しかも、牧場物語。永遠ループ永続トラップにハマっています。

自己責任〈ハル編1〉

どうしたものかな？
ここは学校、教室の後ろでシクシクと泣き続けるのはお父さん。
先日、バードウオッチングを行い。
丁度、その日にお父さんが未来さんに対して行っていた悪行の数々が、未来さんにバレてしまった。
そして、未来さんに怒られてからずっと落ち込んでいるお父さん。
まぁ、未来さんに対して不快に思う気持ちは理解できるけど。
だからといって、未来さんのパソコンにウイルスを送りつけるお父さんにも非はあると思う。

それにしても、お父さん……まったく立ち直りそうにない。
シクシクと泣いては、僕に話し掛けてくる。
慰めても泣きやまず、かといって家に帰ってくれるようすもない。
僕に付きまとって、何を求めているのだろう？

いい加減、疲れてきた僕が地雷発言を口にする。

「あまりメソメソしないでよ。お父さんは男でしょ？」
「男だったら、メソメソしないもん！」

僕の言葉に反発してくるお父さん。
それでは、お父さんの言葉を理解できないあなたにご説明しましょう。

昨日、お父さんは未来さんに怒られたあげくの果てに、未来さんの作った『何が起こるかわからな～い』という怪しい薬の実験台にされました。

とりあえず、それで未来さんの気は治まったのですが。代わりにお父さんが泣き喚く破目に……。
どうしてかって？　もうわかるでしょ？
怪しい薬の作用によって、お父さんの身に起きた事。
性別転換、お父さんがお母さんに変身です。
泣き喚くお父さんを見ながら、ケラケラと未来さんが笑い転げます。
ちなみに、『しばらくは、その格好で過ごしなよ。結構、似合ってるし』というのが未来さんのお言葉です。

そういうわけで、昨日からお父さんがへなへなしているんだけど……。
それにしても、こんな事をいうのもなんだけど……。お父さん……本当に似合ってる。
背が縮んで、本当に女性だ。
菊池さんのせいかどうかはわからないけれど、元々、変に色気のあるお父さんだし。
元が大柄ではないからか、女性になったら小柄な感じで、可愛らしい。
その上、性格がこんなだから。
傍から見ていると、僕とお父さんが恋人同士で、痴話喧嘩をしているように見られてるかもしれない。
だから、却って嫌なんだ。早く元気になってよね。

授業もほったらかして、お父さんを慰めていたら、段々と大人しくなってくる。
大体、周期があるのだ。喚いた後は静かになって、眠って、起きて、しばらくして泣き喚く。
昨日からこれの繰り返しだ。お願いだから僕じゃない人に相談してほしい。

うつらうつらと眠そうなお父さんが、教室の後ろに敷いてあるシートの上で寝転がる。
あ、お休みモードだな。そう思っていたら、案の定。目を閉じて、お昼寝タイムだ。
あー、やっと大人しくなった。まるで赤ん坊を見ている気分。

眠るお父さんの姿をビデオカメラで撮影するのは菊池さん。もの凄く嬉しそうだ。
大はしゃぎになりながら、写真を撮ったり、ビデオを撮ったり。
とにかく、お父さんであれば、男性だろうが女性だろうが何でもいいらしい。

静かな時間が訪れた後、二時間と三十分後のお話だ。何の気なしに、お父さんが目覚める。
係わりたくない僕はなるべく存在感を消して、お父さんの視界に入らないよう心がける。
眠たげなお父さんが目を擦りだし。その後に、いつも通り毛繕いを始める。
気が済んだのか、ぼーっとしながら、辺りを見回す。僕を探しているのだろう。絶対にそうだ……。
案の定、僕を見つけると、ちょこちょことこちらへ歩いてきた。えー、そろそろ勘弁してよー。

お父さんがネコ耳をパタパタさせながら、僕に話し掛けてくる。

「ねぇ、ハル……」
「しっ！　お父さん、それ以上は口を開いちゃ駄目だよ。次の言葉は呪いの言葉だから」

「未来がね……酷い事をしてきたの。僕……どうすればいいの？」
「もう～、また泣き出すの？　そろそろ前向きになろうよ～」
「ハルも……怒ってる？」
「怒ってないけど、疲れてきたよ。次に何か言いたい事があるのなら、菊池さんの所へ行ってね」
「んんっ……」

グズグズと泣きそうな顔をしながら、お父さんが菊池さんの元へと歩いて行く。
はぁ～、やっと楽になった。しばらくは、菊池さんに任せよう。
そう思っていたら、お父さんの声が聞こえてくる。

「瑠菜ぁ～、聞いてよ～」
「大丈夫よ、上野。ちゃんと上野用に新しいお洋服を用意してもらっているから。後で、可愛くコーディネートしてあげるわ」
「そ、そんなの……。いらない……」
「いらない事はないわよ。せっかく女になったんだから、女の良い所をたくさん教えてあげるわ。ウフフフフフッ……」
「いらな……やぁっ！？　な、なぁに！？」

何をしているのかと思って、振り返ると日常の風景。
菊池さんがお父さんに熱烈なキスを繰り広げている。
だけど、傍から見ると、普段の数十倍以上に色気のある光景だ。
生徒の大半が二人の様子に釘付け。
もう見慣れたはずの光景なのに、お父さんが女性になっただけで、凄く新鮮味のある絵図になっている。
うわぁ～、エロいなぁ～。そろそろ教室の扉に十八禁の紙を貼らないといけないかも。
僕がそんな事を考えていると、お父さんのいやらしい声が聞こえてくる。

「あっ！　あんっ！　そんな所……触っちゃ……やだぁ……ん！　ダ……メッ」

気が付けば、目の前に広がる光景は奇妙なものだ。
菊池さんがお父さんを背後から抱きしめて、思いっきり胸を揉み込んでいる。
いや、もう、本当に思いっきり。しかも、超真顔だ。何を考えているのか、怖くて聞けない。
不意に菊池さんが口を開く。

「どうして、上野の癖に私より胸があるのよ！？　しかも、上野！　ブラしてないでしょ！　女なんだから、ちゃんと身だしなみくらいは整えなさい！」
「元男だし！　そんな物を付けたら、変態だし！　だから、もう……やぁん！　あ……それはダメ！　あ……そんなの……、あ……やぁ……」とお父さん。
「ブラ付けないなんて、男を挑発しているようなものよ。上野が変な男に犯されたら、私が面白くないんだから。玲！　お洋服はまだ！？」
「丁度、ご用意できた所です。それでは、上野様。こちらへ」

颯爽と玲さんが現れ、教室の外に手を向ける。
お父さんは菊池さんに襲われて、感じすぎたのか、静かに連行されていった。
もちろん、菊池さんも教室を後にする。
成る程、お父さんを黙らせるには、エロっぽく胸を揉めばいいのか。
って、これは流石にマネできないな。
いくら相手がお父さんでも……いや、むしろお父さんだからこそ、僕が手を出せるわけがない。

紳士の名どころか、人の名が廃れてしまう。
そういえば、僕……人じゃなかった。じゃあ、今度にでもチャレンジしてみよう。

自己責任〈ハル編2〉（前書き）

一生に一度あるかないかの……ねーよ！
ハルのセリフにツッコミを入れたい。

自己責任〈ハル編2〉

しばらく時間が経過して、やっと授業に集中できそうになってきた頃に。お父さん達が帰ってくる。
イメチェンしたお父さんの姿を見て、教室中が言葉に詰まる。
僕も例外じゃない。だって、お父さん……まぁ、可愛くなった事。スカートをはいて、お化粧までして。こりゃもうあれですね……。

「お姉ちゃん……」
「お母さんですらないの!?」変な突っ込みをする元お父さん。
「いや、だって……。えらく若々しいし……。高校生くらいに見えるよ。僕がこの格好だと、まるで兄弟だね」
「そういう事を言うのなら、男の時に言ってほしいし……」
「お父さんの時は、年齢不詳だよ。高校生には見えないけど、勉強をサボっている大学生くらいには見えるかもね」
「うーん、複雑な気分……」

面白くなさそうな表情を浮かべながら、お姉ちゃんがそわそわしだす。
不意にうっとり顔の菊池さんに向いて、口を開く。

「顔……洗いたい」
「駄目よ。お化粧しているんだから。洗ったら、取れちゃうわ」
「気持ち悪い……」
「毛繕いもダメよ。お化粧が手やお洋服に付いちゃうし」
「ううっ……」
「上野、我慢して。これでもかなりの薄化粧なんだから。ほとんどノーメイクなのよ」
「女って辛い」

「我慢、我慢。すぐに慣れるから」

優しくお姉ちゃんの頭を撫でる菊池さん。僕が続いて口にする。

「そうだよ。せっかくなんだから、そのままお姉ちゃんを楽しんでよ。女性になれる機会なんて、一生に一回もあるかないかの大イベントだよ。祭り事は落ち込むよりも、楽しく過ごさなくちゃ。案外に、元に戻った時に物足りなさを感じたりして」

「感じたら、僕……男止めるよ」

「うん……わかった。僕も……心の準備しておく」

真顔で答えるお姉ちゃんの姿を見て、思わず僕も真顔で頷く。

うん……心の準備しておかなくちゃ……。そんな中、不意にリョウさんが口を開く。

「進ちゃん……、一つ言ってええか？」

「なに……？」

「尻尾はスカートの下から出した方がええと思うで」

「何で……？」

「尻尾の加減でチラリと見えるパンツが素敵やと思うねん。後、もうちょい派手な服はなかったん？　今のも凄いええねんけど、ちょっと地味やな」

「私も初めはそう思ったの！　もっと可愛くて、良い感じのお洋服もあったし。だけど、可愛い上野に引かれて、変な虫が付くと困るから。可愛い上野は見たいけど……。うぅ……凄く辛い選択だわ……」

菊池さんがリョウさんの意見に同意する。

二人で盛り上がるのは、下ネタ混じりのファッションデザイン関係。

賑やかな二人を余所に、お姉ちゃんが僕に言う。

「じゃあ、僕はリチャードをからかってくる。頑張ったら、誘惑できるかな？」
「黒松さんを誘惑したいの？」
「うーん、反応が面白そう」
「……まぁ、黒松さんならいいけど。他の人は止めてね。本気で誘惑されると思うから」
「うん、わかった」

テケテケと嬉しそうに教室を出て行くお姉ちゃん。
黒松さんなら、まぁ、誘惑される事もないだろう。
されたとしても、変な行動にはでないと思う。
あの人には、柊さん要素を感じるから。

そんなこんなで授業が終わり、お喋りが始まる教室。
もちろん、先程のお姉ちゃんの話で持ち切りだ。
本人がいないから、好きな事を言っても怒られない。
『女性の方がいいんじゃないの？』という声で耳が潰れそうになるけど……。
本当に……正体を知らなかったら、結構な男性が寄ってくると思う。
菊池さんが変な事を教えたから、魅力の眼差しまで覚えて。

まさか、襲われたりはしないと思うけど……。
とりあえず、今日から夜道を一人で歩かさないように気を付けよう。
まさか、大丈夫だと思うけど……。
とりあえず、知らない人とはお喋りしちゃいけないと念を押しておこう。
まさか、拉致られることはないと思うけど……。
とにかく、注意しておこう。
……これじゃあ、お姉ちゃんじゃなくて妹だな。

無防備な妹を見ている気分。うん、何だか僕が疲れそうな予感……。

自己責任〈メモリー編1〉

リチャードはどにいるんだろう？
あっちこっちフラフラと歩いていたら、校門の前にてリチャードっぽい後ろ姿を発見する。
他の護衛の人と立ち話をしているみたい。
瑠菜の護衛って何人いるんだろう？
普通に歩いていても出くわさないけど、この学校の敷地内にも結構いるんだろうな。

テケテケと歩いて行って、背後からリチャードを抱きしめる。そのままリチャードに問題だ。

「だーれだ？」
「……」

思わず振り返ろうとするリチャード。そんなのズルい！　僕が不満げに口を開く。

「あーん、駄目ぇ！　振り返っちゃ駄目！」
「上野様。何をしているのですか？」
「あれー？　バレてたー？　何でわかったの？」
「わかりますよ。このような事をする人は上野様くらいしかいませんから」
「ん～、面白くないの」

プーっと膨れる僕の顔を見て、リチャードが言葉を無くす。
そういえば、着替えたんだ。ハッと思いだして、リチャードに自慢してみる。

「リチャード、見て見て！　瑠菜にコーディネートしてもらったの！」
「これはまた……」
「似合う？」
「……言ってよろしいのかどうか」
「言って。嘘付いちゃ駄目だよ」
「申し訳ありませんが、非常に似合っております」
「えへへ……」

リチャードに褒められた。何だか嬉しい。せっかくだから、リチャードに問いかける。

「リチャード、暇？　暇？　ねぇ、暇だよね？」
「いえ、私は仕事が……」
「暇？　暇？　暇？　ねぇ、今から本屋に行くの。付いてきて」
「はい……かしこまりました」

リチャードがちょっとため息交じりに返事を返す。
無理を言いながら、リチャードの腕を引っ張る僕。
そんな僕達の様子を見て、リチャードと立ち話をしていた護衛の人がニヤニヤしている。
顔にはほとんど出ていないけれど、微かに口先が引きつっている。
笑いをこらえているみたい。

不意にリチャードが僕から目を離し、護衛の人に目を向ける。
護衛の人が慌てだし、リチャードが不満げな表情を見せる。
蒼白する護衛の人にリチャードが何かを呟き、護衛の人がペコペコしながら走り去って行く。

もう大丈夫かな？　出発できる？
目を輝かしながら、リチャードを眺めていたら、リチャードがこっちに向いてくれる。

「それでは出発しましょうか」
「うん！」
「ところで、どちらの本屋まで？」
「近所の本屋。あっちの方」

リチャードが頷いて理解してくれる。
うーん、何だか普通で面白くないな。
ハッと名案を思い付いて、リチャードに向いておねだりする。

「抱っこして！　抱っこ！」
「え……」
「お姫様抱っこして、本屋まで連れて行って！」
「……」

恥ずかしいだろうな。とか思うけど、一度くらいお姫様抱っこをしてもらいたい。
せっかく女になったんだから、今してもらわないと一生してもらえない気がする。
僕がリチャードにしがみ付いていたら、急に身体が宙に浮く。
軽々しくお姫様抱っこをしてもらった。

わぁ～！　感動する僕とは裏腹に、リチャードはちょっと恥ずかし気。
顔には出ていないけれど、きっとそうだろう。
だって、リチャードの耳が赤い。

思わず、耳を触ったら叫ばれた。
そして、『止めて下さい！』と注意まで受けた。

リチャードって、背が高いから。抱っこをしてもらったら、凄く目線が高くなる。
ちょっと怖いくらい。しかも、速い、速い。
リチャードは背が高い分、足も長いから。一歩の幅が広くて、歩くスピードが速く感じる。
僕が大はしゃぎしていたら、リチャードのスピードが上がって行く。
恥ずかしくって、人に見られたくないのかな？　何だか新幹線みたいで楽しい～。

面倒な人……上野様に見つかった。
なるべく顔を合わさないように心掛けても、向こうからやってきてはどうしようもない。
その上、相手がお嬢様の意中の人となると尚更だ。
下手に避けてしまっては、後でお嬢様に注意をされてしまう。

しかしながら、普段でも厄介な上野様が女性になると数十倍面倒な事になる。
こんな所をお嬢様に見られたら、お仕舞いだ。
嫉妬深いお嬢様の事だから、きっと変な勘違いをして、気が狂ったようにヒステリックに喚くだろう。
そして、私は玲様の手により、あの世とこの世の境目まで連れて行かれる……。
考えるだけで億劫だ。避ける事も係わる事もできない私はどうするべきなのか？

何も知らない上野様は呑気なものだ。
キャイキャイとはしゃぎながら、私の顔に手を伸ばしてペタペタと触ってくる。
あー、もう鬱陶しい……。が、そんな思いを口にできるわけなく。
仕事だからと割り切って我慢……。しかし、我慢にも限界がきて、上野様に注意を促す。

「上野様……私がノイローゼになる前に、その手を大人しくさせてもらいたいのですが」
「無理。やんちゃだから、言う事を聞かないの」
「頑張って、躾けて下さい」

「サングラス～、サングラス～。リチャードはサングラス取ったらどんな顔～？」
「ちょ、ちょっと、止めて下さい！　上野様、もう下ろしますからね！」

私の言う事を聞きもせずに、私のサングラスに手を伸ばす上野様を地面に下ろす。
サングラスを奪われる前に、なんとか地面に下ろした。
サングラスを整えながら、残念そうな顔をする上野様に目を向ける。

「上野様。もうすぐ本屋ですので、ここからは歩いて行きましょう」
「サングラスは～？」
「これは私の身体の一部なので外せません」
「んん～」

上野様が愚図りながら、私の右腕に抱きつく。
一体、私に何を求めているのか？
そもそも、こんなにへばり付いてくるっておかしくないか？
まさか、上野様はそういうご趣味が……あっても不思議ではないと思うのは、今の姿が目に入るからか？

頭が痛くなりそうな私の前で、上野様が元気にはしゃぎだす。

「本屋、本屋。リチャードのサングラスは帰りの抱っこで取ってみるね」
「帰りは歩きです。荷物が出ますので」
「えー」

演技だろうかと思う程に残念そうな表情を浮かべる上野様。
そんな上野様を無視しながら、歩きだす。

とにかく、早く用事を済ませよう。じゃないと、用が長引く程に、私の寿命が縮んでいく。

すぐ目の前なのに、無駄に時間が掛った。

上野様がいらない事ばかりするから……いや、文句を言うのは止めておこう。

やっとのことで本屋に辿り着き、私が安堵していたら。上野様が本屋の中へと入って行く。

私は後ろに続くが……買い物をするわけではない。上野様を護衛するためだ。

小さいが品物が充実している本屋の中で、上野様の様子を窺う。

漫画売場へ直行し、次に雑誌などを見漁っている。

文字だけの本は苦手だと言っていたが、それは真実のようだ。そういった本には目もくれない。

時間が掛りそうだな。そう思い、私も本に目を向け出した頃に。

外で車の止まる音が聞こえてくる。

ぞろぞろと入って来たのは、うっ……あまり出会いたくない人物だ。

私のような護衛を背後に先頭を切るのはお坊ちゃま。

オシャレな衣装をまといながら、つまらなそうな面をしている。

この人物の名前は吉川伊吹（よしかわいぶき）。

菊池家に並ぶ資産家、吉川家の長男であり、この方とお嬢様は非常に仲が悪い。

ライバル心を抱いているのか、似た者同士なのか。

とにかく、普段から言い争っている。

どちらも諦めが悪く、執念深い性格なので、ひとたび喧嘩を始めるとこの通り。

十年にもわたる長い喧嘩だ。

しかし、どうしてこの方が……。

そういえば、吉川様は大の本好きだと聞いた事がある。

何か買い物にでも来たのだろうか？

とにかく、あまり深入りをしないよう気を付けないと……。

不意に吉川様がレジへと向かう。

「ねぇ、頼んでおいた物は用意してある？」

「あ、はい。吉川様ですね。ご用意しております」

カウンター先で、返事をするのは店員。

不意に向こうの護衛と目が合いそうになり、背を向ける。

あまり係わりたくはないが、気になって仕方がない。

警戒を怠らない私の元へと駆けてくる無邪気な上野様の耳元で小さく囁く。

「上野様、本は決まりましたか？」

「ううん、まだ」

「なるべく早く選んで下さい。少し厄介な者が現れましたので」

「厄介な者？」

興味本位で上野様が吉川様の方に顔を伸ばす。

「あれは誰？」

「お嬢様のお知り合いでございます」

「へー、挨拶しなくていいの？」

「少々、問題の人物でして。係わり合うなとお嬢様から承っておりますので」

「そうなんだ……」

「上野様、あの方と係わり合いにならないで下さいよ」
「うん、わかった」

返事はするけど、理解していない上野様が興味深げに吉川様を眺め出す。
そんな上野様の背を押して、本選びを薦める私。
この二人が係わり合うと、後で嫌な事が起こりそうだ。
上野様が本選びを再開する中、吉川様の声が聞こえてくる。

「それにしても、ボロイ本屋だね。こんな所にボクの探していた本があったなんて信じられない。ねぇ、まだ？　さっきから、かなり待ってるけど」
「も、もうしばらくお待ちください」
「トロイな。早くしてよ」
「す、すいません」

今日の吉川様は酷く苛立っているな。
まぁ、普段からイライラしている方であるが……。
相変わらずだなと思っていたら、吉川様と視線が合う。
マズイ、しまった……。私に向いて、吉川様が口を開く。

「うん……？　お前、どこかで見た事あるな……。誰だったっけ？」
「いえ、私はあなた様をご存じありません。初めてお会いするかと思いますが……」
「うん？　そうだった？　まぁ、別に良いけどね。それにしても、結構強そうだね。何か武術でもしてるの？」
「はい、柔道や剣道を少々……」
「ふーん、良かったら雇ってあげようか？　ボクのボディーガードに。給料はそこそこだよ」
「残念ながら、ご希望に添い兼ねます」

私の言葉を聞いて、不満げな表情を浮かべる吉川様。
緊迫する空気が漂う中、場違いな空気を背負いながら、上野様が楽しげに戻ってくる。

「リチャード、これにする。これ。間違い探しの本。後で一緒に遊んでね」
「はい、かしこまりました。上野様、レジはこちらです」
「はーい」

上野様が両手で本を持ちながら、嬉しそうに順番を待つ。
丁度、そのタイミングで定員が吉川様の本を用意し終える。
直後、問題発生だ。不意に、上野様の手に持つ本を吉川様が取り上げる。
私が前に出ようとしたら、吉川様のあらぬお言葉……。

「ボクが……買ってあげる」
「へ……？」何が起きているのか理解できずに、唖然とする上野様。
「どうせボクも本を買うから……。君のも一緒に払うよ……」
「でも、あの……。悪いよ」
「いいよ。ボクはお金なんて有り余っているから……」
「本当にいいの？」

上目遣いで心配そうな表情を浮かべる上野様。
そんな上野様を見て、真っ赤に顔を赤らめる吉川様。
予想以上に面倒な事になった。これなら喧嘩してくれた方がまだマシだ。
どこからどう見ても、吉川様が上野様に一目惚れしたらしい。
しかし、それはかなり問題になる。二人の間に割って入って、吉川様が手に持つ本を奪い返す。

「こちらの代金は私持ちですので、あなた様はお気持ちだけで結構です」
「払うよ、払う。ボクに払わせて！」吉川様が声を荒げながら、私に訴える。
「ありがとう。でも、気持ちだけでいいよ……。リチャードが払ってくれるみたいだし。その……ごめんね」と上野様。
「そう……」

変に優しい上野様に向いて、吉川様が質問を投げかける。

「ねぇ、君の名前は？　ボクは吉川伊吹。資産家で有名な吉川財閥の長男だよ。知ってるでしょ？　結構、テレビとかに出ているから……」
「え……ごめん。僕はあまりテレビのニュースとか見ないから……」
「ううん、いいよ。知らなかったのなら、説明した甲斐があるし。それで、君は何て言うの？」
「えっと……僕は上野。上野……」
「上野？　上野、何？」
「上野……ミャラ」

上野様―！　嘘をつくのなら、もう少しマシな名前は思いつかなかったのですか！？
よりによって、ゲームキャラクターの名前なんて。
上野様がご自分に似ていると仰ってはいたが……現実的な名前ではない。
唖然とする吉川様を見て、上野様が炎上する。
ご自分でもこの失態に気づいておられるらしい。
もじもじする上野様を見ながら、吉川様が口を開く。

「変わった名前だね……」
「えっと……」
「だけど、可愛いね」
「あ……ありがとう」
「君は高校生？　それにしても、こんな時間にウロウロしているなんて……。あ、もしかして、ボクみたいにお金持ちで、特別な学校に行ってるの？　何せボディーガードもいるみたいだし」
「えっと……」
「上野様、そろそろお時間です」

二人が話をしている間に、会計を済ませた私が上野様に口を開く。
オロオロする上野様の手を引いて、吉川様に頭を下げる。
なんとかして二人を切り離さないと……。
名残惜しそうな表情を浮かべる吉川様に上野様が余計な笑顔を向ける。

「えっと……ごめんね。そろそろ行かなくちゃ」
「そう……。また会える？」
「うーん……どうだろう？」
「上野様！」

上野様を急かし、無理矢理に腕を引き連れて行く。
楽しげに手を振る上野様の頭に拳を入れたいが、そんな事をして許されるわけがない。
本屋から距離を置き、尾行されていないかを確認した後に上野様に口を開く。

「上野様……あの方には係わらないで下さいと申し上げましたのに」
「だって、あの子が僕の本を取るから……」
「ですが、上野様が優しいお声を掛けるので、吉川様が上野様に興

味を持たれていましたよ。あの方はお嬢様に並ぶしつこさですから、後で面倒な事になるかも……」

「えー。だけど、あれ以外に何を言えば良かったの？」

「とにかく、その笑顔が問題です。何にでもニコニコしていたら、余計な者が寄ってきますよ」

「だって～。んん～」

上野様が不満げな表情を浮かべながら、膨れ上がる。

最後は私に抱きつき口を尖らせながら言う。

「抱っこ」

自己責任〈ハル編3〉

珍しく授業がはかどる。
普段から授業がはかどらない原因はお姉ちゃんにあったのか。
まぁ、そうだよね。っていうか、何でお姉ちゃんまで学校に来ているの？
特に最近は頻度が高いんだけど……。ちゃんと仕事をしているのかどうか心配になってくる。

安らかな一時も、お姉ちゃんが帰ってくる事で終わりになる。
丁度、昼休みに入った頃、黒松さんが教室に入ってくる。
黒松さんの腕の中ではお姉ちゃんが白い袋を抱えながら、不満げな表情を浮かべ、膨れ上がっている。
それを見て、リョウさんが口を開く。

「進ちゃん、お姫様抱っこしてもらいながら。めっちゃ不満顔やね。嫌なんやったら、下ろしてもらったら？」
「違うの。そうじゃなくて、さっきリチャードに怒られたから、拗ねてるの」
「黒松！　上野に何を言ったの!?　というか、どうしてお姫様抱っこなんてしているのよ!?」

菊池さんが黒松さんを鋭く睨みつける。
黒松さんはたじたじしながら、お姉ちゃんを地面に下ろす。

「違います、お嬢様。私は上野様にご用心するよう申し上げただけです。それと、抱っこをしろとおっしゃったのは上野様の方です」
「抱っこ！　抱っこしてくれないと怒るよ！」とお姉ちゃんが黒松さんによじ登りながら訴える。

「上野様、先程の本で遊びましょう。抱っこはまた今度ということで……」
「うん、遊ぼう」

急にご機嫌になり、白い袋から本を取り出すお姉ちゃん。
お姉ちゃんが用意をする間に、黒松さんが菊池さんに近づき、耳元で何かを囁く。
黒松さんの話を聞いて、眉をしかめる菊池さん。
何だろう？　何か嫌な事があったのかな？
気になる僕はお姉ちゃんに声を掛ける。

「ねぇ、お姉ちゃん。本屋さんに行って来たの？」
「うん、そう。間違い探しの本を買ってきたの」
「他に何か変わった事はあった？」
「えーっとね……。瑠菜の友達に会ったよ。吉川君だって」
「友達じゃないわ！　ただの知り合い。顔と名前を知っているだけの人物よ」

口を出してくるのは菊池さん。凄く不機嫌だ。
もしかしなくても、その吉川君という人の事が嫌いなのだろう。
菊池さんがそのままの表情で、お父さんに顔を向ける。

「上野、あの人には係わっちゃ駄目よ。凄く嫌な奴だから」
「え？　そうでもないよ。本を奢ってくれるって言ってくれたし。良い人だよ」
「そういう事を言っていたら、危ない男に絡まれるわよ！　あいつは良い人の振りをしているだけだから。絶対に近づいちゃ駄目！　わかった？」
「うん……」

菊池さんに注意をされて、しょぼんと落ち込むお姉ちゃん。
せっかくだから、黒松さんにも意見を述べてもらおう。僕が黒松さんに問いかける。

「それで、その吉川君という人はどういう人なのですか？」
「吉川様は、資産家で有名な吉川家の長男です。本名は吉川伊吹と仰います。御覧の通り、お嬢様とは不仲でありますが……」
「が？」
「どうも吉川様は上野様をお気に召したご様子で……。吉川様は非常にしつこい性格ですので。今後、面倒な事になるのではないかと……」
「うわぁ……」

お姉ちゃん……何しでかしたんだろう？　そんなしつこい人に好かれるなんて。
まぁ、お姉ちゃんの事だから、無防備にニコニコしていたんだろうな。
もう～、少しは警戒心を持ってほしい。
黒松さんの腕を引っ張りながら、お姉ちゃんが構ってほしそうな顔をする。
逆らえない黒松さんはお姉ちゃんの言いなりだ。一緒になって、間違い探しの本で遊び出す。

うーん、だけど面倒だなぁ……。
一日中、僕がお姉ちゃんを見張り続けるなんて事はできないし。
こうなったら、しばらくの間、黒松さんを借りようかな？
それか、お姉ちゃんを菊池さんに預ける？
危険は危険だけど、まぁ、男性に襲われるよりはマシだろうし。

僕がこうやって悩んでいる間にも、ご本人はお気楽だ。

楽しげに間違い探しで遊んでいる。
子どもみたいにはしゃぎながら。結構、本気で取り組んでいる。
いつの間にか、リョウさんまで乱入してきて。皆でワイワイと盛り上がる。

自己責任〈ハル編4〉

そんなこんなでお父さんがお姉ちゃんになった大事件。終わることなく翌日へと続く。
早朝から、大騒ぎだ。なぜなら、お姉ちゃんが青鶯高校のセーラー服を着て、鞄を手に持ち、忘れ物がないかと騒いでいるから。

っていうか、あれ？　お姉ちゃん……何でセーラー服なんて着ているの？
不思議に思って問いかけたら、菊池さんに命じられたという言葉が返ってくる。
すんなりと言う事を聞くあたり、それなりに楽しんでいるように見えるけど……。

元気が有り余っているのはお姉ちゃんだけじゃない。
お母さんまでも、バタバタしている。
お姉ちゃんにお化粧をしたり、身だしなみを整えたり、注意をしたりで大忙しだ。
よく考えたら、高校生で化粧してもいいのかな？　後で先生に怒られるかもしれない。
まぁ、その時は僕が説明しよう。

昨日とは打って変わって、元気溌剌なお姉ちゃんと共に登校。
お姉ちゃんが元気になった分、なぜか僕が精神疲労。
この無邪気な生き物を保護しなければいけないと考えるだけで億劫だ。
天然記念物なだけに、変な虫が寄ってきそうで……。

恵梨さんからお母さんが抜けて、三人で駄弁りながら登校する。

いつもはバラバラに登校するのだけど、お姉ちゃんが一緒に行きたいと駄々をこねるから。
今日だけは一緒に行く事になった。
まぁ、一度くらいなら、途中で偶然に出会った説で通せるだろう。

学校が見えてきた頃に、何やら奇妙な気配を感じる。
いつもとは違う空気。校門の前には、見慣れない高級車がズラリと一列に並んでいる。
何て邪魔なんだろう。駐禁にでも会えばいいのに。
だけど、人が乗っているみたいだから、意味ないか。

学生達が車を気にしながら、園内へと入って行く中、僕達も後ろに続く。
だけど、あれだけの車……。菊池さんの物ではないとしたら、考えられるのはただ一人……。

教室に向かう途中、廊下での話。
何やら人が集まっている。近づくのは嫌だけど、遠回りしたって同じだろう。
見つからずに通過できればラッキー。
それくらいの気持ちで、廊下の端を通過しようとしたら。誰かの大きな声が聞こえてくる。

「ミャラちゃん！」

人混みの中から登場するのは見た事のない男の子。
お金持ちそうなオーラを出しながら、手には花束。
何だ、こいつは？　その男の子がお姉ちゃんに近づいて、もの凄く

嬉しそうな顔をする。

「おはよう、ミャラちゃん」

「おはよう……えーっと、吉川君。どうしたの？　こんな早朝から？」

「えっと……昨日の事を謝りに来たんだ」

「謝る？」

「昨日は、その……ごめんね。忙しそうだったのに、足を止めて……」

「あぁ……。ううん、そんな事ないよ。大して重要な用事があったわけじゃないし……。だけど、心配してくれて、ありがとう」

お姉ちゃんがエヘッと笑ったら、吉川君の顔が炎上だ。

うわー、一発ノックアウト。お姉ちゃん……わざとだろうか？　いや、天然だな。

だけど、本当に可愛らしく笑うから、吉川君がかなり熱愛モードに入ってる。

花束をお姉ちゃんに向けて、吉川君が口を開く。

「あの……これ。よかったら受け取って。昨日のお詫びに……」

「え？　いいの？　ありがとう」

「う、うん。もちろんだよ」

「うわぁ～、凄く綺麗。こんなに綺麗な花束を見るのは初めてかも。ありがとう、吉川君」

「ど……どういたしまして」

もの凄く恥ずかしげに顔を赤らめながら、地面に目を落とす吉川君。

お姉ちゃんの顔を直視できない程に惚れているらしい。

見ていて哀れというか、笑いが込み上げるというか。

真実を知る者としては、非常に微妙な気分になる。

お姉ちゃんと楽しげにお喋りをする吉川君の姿を見ている限り、悪い人には見えないけど……。

というか、そろそろ真実を教えてあげた方がいいのかな？

時間経過と共に、吉川君のお姉ちゃんに対する好感度が急上昇していくから。

最後は取り返しのつかない事になるかも。

早く教えてあげないと、吉川君の心の傷が深くなる。

わかってはいるけれど、今は凄く口にしづらい。

だって、吉川君……もの凄く嬉しそうだから。

しばらくは様子見だな。と思っていたら、聞こえてくるのはお姉ちゃんの熱烈ファン第一号の声。

菊池さんの登場だ。

「上野！　その人と話をしないで！」

大きな声で怒鳴って、お姉ちゃんの腕を引っ張る。

お姉ちゃんを自分の後ろに隠して、吉川君を睨みつける。

じりじりとした睨み合い。不意に吉川君が菊池さんに向いて話し出す。

「誰かと思えば、バカ嬢か。ミャラちゃんはボクと話をしているんだから、お前は出しゃばるなよ」

「上野は私の物よ。大体、どうしてあなたがここにいるのよ？　あなたはこの学校の生徒じゃないでしょ？　用が済んだのなら、早く出て行きなさい」

今にも殴り合いが始まりそうな空気に、たじろぐのはお姉ちゃん。

二人の間に割って入って、小さくなりながら口を開く。

「あの……喧嘩は良くないよ」

「ミャラちゃんの言うとおりだね。こんな所でいがみ合ったって仕方がない」

「そうね。もう授業も始まるし……。あなたが出て行けば、すぐに解決するわ」

吉川君に続いて、菊池さんが毒を吐く。

菊池さんの言葉に不快な表情を浮かべる吉川君。

二人を交互に見ながら、お姉ちゃんが提案する。

「ちょっと瑠菜……そういう事を言っちゃ駄目だよ。吉川君、気にしないでね。こんな事を言っているけど、瑠菜は良い子だから。それと、その……よかったら、授業を見学していってね。そんなに面白くないかもしれないけど……」

「うん……大丈夫だよ。ありがとう……」

お姉ちゃんの言葉に、優しい眼差しで答える吉川君。

というか、お姉ちゃん……吉川君に気を遣いすぎ。

よそ者である吉川君の事が気になるのはわかるけど……。

これ以上、吉川君の恋心を射止めないでほしい。

これはゲームじゃないんだ。射止めたら最後、不幸になるのはお姉ちゃん自身。

こうして始まる奇怪な授業。

授業自体は普通だけど、状況が奇怪だ。

お父さんがお姉ちゃんになり。

以前からいる彼女と新しくできた彼氏の間を優柔不断に動き回る。

これはもう三流ドラマにもならないな。

一体、お姉ちゃんはどうするつもりなんだろう？

自己責任〈ハル編5〉（前書き）

ハルの心境が可愛すぎる。
しかし、無茶苦茶しない辺りがハルトの遺伝を感じるなぁ～。
ちなみに、世界が違うので出来事も異なりますよ。
パソコンで調べたって、吉川君の言っている話は出てこない。
要するに、ロッド・ウルジーさんはこっちにはいない……。

自己責任〈ハル編5〉

一時間目は現代国語。
お姉ちゃんの席は僕の隣。
一番後ろの席は大人気だ。
菊池さんの隣に、リョウさん。リョウさんの隣に僕。僕の隣にお姉ちゃん。
何て言うのかな？　一般人除外フィールドになっている。

ちなみに、吉川君は後ろのロッカーの前に立って、授業を見学している。
静かにしている分、常識のある人に見えるけど……。
今の所、何に部類していいのかわからない。
わかるのは、菊池さん嫌いのお姉ちゃん好きって事だけ。

つまらない授業を聞きながら、ぼんやりしていたら、隣から気配を感じる。
振りかえると、お姉ちゃんがオロオロしながら何かを探している。
僕が小声で問いかける。

「どうしたの？」
「あの……リチャードは？」
「黒松さんなら、外の持ち場に行くって」
「そう……」
「何？　わからない問題でもあったの？」
「う、うん……ちょっと……」

僕達の会話を耳にしたのか、不意に近づいてくるのは吉川君。お姉ちゃんに向いて口を開く。

「よかったら、ボクが教えようか？」
「えっと……」
「丁度、いいじゃん。教えてもらいなよ」と僕。
「う、うん……」

お姉ちゃんが頬を赤らめながら、小さく頷く。
きっと恥ずかしい程に基礎の問題がわからないのだろう。
お姉ちゃんは国語が大の苦手だからな……。
とりあえず、お姉ちゃんが恥を掻く前に吉川君に忠告をしておく。

「お姉ちゃんは国語が大の苦手なので、基礎問題からよろしくお願いします。後……もの凄く字が汚いので、ペンの持ち方を教えてもらえたら光栄です」
「あぁ……わかった。ところで……君は以前にテレビで見た事があるけど」
「はい、僕は上野ハルと言います。お姉ちゃん……上野ミャラの弟で、上野進一は僕達のお父さんです」
「ふーん、そう……」

うん？　何？　この殺伐とした返事は？
僕には感心がないのか、すぐにお姉ちゃんの方を向く吉川君。
あー、もしかして、あれか？
好きな人には優しくするけど、他の人には冷たいタイプ？
あの……人に対する態度のギャップが激しいタイプ？
かなり面倒なタイプじゃないか。

僕が嫌な気分で考え事をしていたら、隣から楽しげな声が聞こえてくる。
先程の態度とは裏腹に、吉川君が笑顔でお姉ちゃんとお喋りしてい

る。

「この本の著者はね。ロッド・ウルジーと言って、イギリスでも有名な作家なんだ。本来は学校の教師をしていたんだけど……。趣味で書いていた本がベストセラーになって、その後は作家に転職したんだよ」

「へー、そうなんだ」

「色々な作品を出していてね。その中でも、『妖精の灯（ともしび）』は有名だよ。凄く夢のある作品で、ボクも大好きなんだ。その続きの作品もあるのだけど、未完成のまま……ロッドは亡くなってしまった」

「そう……可哀そう」

「うん、１７４２年の暴動に巻き込まれてね。未完成の作品を抱えたまま死んでいたそうだよ。銃で撃たれていたそうだから、その作品もほとんど読めない物になっていて。ただ一つ、わかったのが『妖精の灯』の続きにあたる作品だろうという事だけ……」

「うん……」

「だけど、きっとロッドは幸せだったと思うよ。自分の信じた作品を抱えながら死ねるなんて、それは作家にとって凄く幸せな事なんじゃないかな。ボクはそう思っているんだ」

「うん、そうだね」

まぁ、喋る喋る。

『ふーん、そう……』という先程の一言が超冷たく聞こえるのは僕の気のせいか？

それにしても、この人は物知りだな。

かなりの本好きじゃないと、知らないような事まで知っている。

お隣でイチャイチャする人達を見て、嫉妬心を抱きそうになる僕だけど、シスコンじゃないから余計な事は言わない。

とりあえず、僕はファザコンで通しているから。

って、冗談ですよ。冗談。
え？　何ですか？　その目は？
あまり人を疑うと、後で痛い目を見ますよ。

それはさておき、本気で怒っているのは菊池さん。
僕と菊池さんの間には、リョウさんを挟んでいるはずなのに。
それを超えてどす黒いオーラが向こうから飛んでくる。
なんて威力だ。殺意すら感じる。

そろそろ菊池さんが打ち切れるのではないかと、ヒヤヒヤしていたら、授業が終わる。
ふぅ～、良かった。無事に授業を終える事ができた。先生も一安心だろう。

次の授業は、体育だ。
男女別で更衣室に入り着替えるのだけど、お姉ちゃん……女の子達に連行されていった。
誰も突っ込みを入れなかったから、何も言わなかったけど……。

え？　それで良かったの？
お姉ちゃん……本当は男ですよ。
皆して忘れているのだろうか？
呆気に取られる僕の後ろで、斎藤君がぼそりと呟く。

「なぁ……あんなのありか？」
「さぁ？　女子の皆さんがいいのなら、ありなのでしょう」
「まぁ、そうか……」

これ以上、話をしても仕方がないので僕達も着替える事に。
今日の体育は運動場。
男子はサッカー、女子はバドミントン。
ふと気が付くと、吉川君まで体操着だ。
え？　もしかしなくても参加するの？
僕の代わりにリョウさんが聞いてくれる。

「何や、君も参加するんか？」
「暇だから……」
「おー！　じゃあ、わいのチームに入ってや。向こうにはハル君がおるさかい、負けそうな気がしてしゃーないし」
「……」

返事をしない吉川君。チラリッと僕を見て、問いかけてくる。

「強い？」
「まぁ、それなりです」
「ふーん……」

それだけ言って、お姉ちゃんの所へと歩いて行く。
ゲームが始まるまで、お姉ちゃんとお喋りをするつもりらしい。
その前に、お姉ちゃんの前で威嚇する菊池さんと怒鳴り合い。
お姉ちゃんが仲裁に入る。
吉川君の釣れない態度を見て、リョウさんが口を開く。

「何や、えらい愛想ないやん。進ちゃん……ちゅーか、ミャラちゃんとはあんなに仲良うしとんのに」
「僕が思うに、お姉ちゃん以外には興味がないのでしょう。興味対象外には冷たく当たるタイプですね。こういうタイプは好きになれないな……」

「もしかして、ツンデレちゅーやつか？」
「僕達にはツンツンです。お姉ちゃんにはデレデレです。ツンデレはツンデレでも、本来のツンデレとは異なります。仲良くなるには、相当の努力が必要ですね」
「ようわからんけど、面倒くさそうな子やね」
「できれば、係わりたくないタイプですね」

ふと吉川君に目を向けると、お姉ちゃんとお喋りしている。
菊池さんは不満げな表情を浮かべているけど、お姉ちゃんに頭を撫でられているから大人しい。
それを見ている吉川君は、内心どう思っているのだろう？
きっと菊池さんをお姉ちゃんから離したい気分なんだろうな。いい気味だ。

こうして始まるサッカーゲーム。ちょっと本気で勝つ気の僕。
本来ならば、手加減を惜しまないけれど。相手が相手なだけに、負けたくない。
リョウさんには悪いけれど、吉川君を負かしたいから、それなりに本気で取り組む。

と言っても、魔力の使用は禁止だ。だって、相手が死ぬもの。
サッカーゲームで殺人事件は流石にマズイ。
それとスピードも人間と認知できるレベルにしよう。
僕が本気で動いたら、きっと人の目に見えない。それもちょっと……ズルイよね。

ゲームが始まり、ボールを蹴り飛ばす。
ゲームを始めて、数分も経たぬうちに気づく事。
吉川君……思った以上に、強い。
人間ってこんなスピードで動けたっけ？　と思うくらいに、動きが

速いし。
ボールの扱いが非常に上手い。

え？　この人、サッカー選手じゃないの？　とか思うけど、そんなわけはないだろう。
だけど、知識人でスポーツマンってズルくない？
僕が言うのも変だけど、何でそんなにオールマイティー。
江川先生は別として、オールマイティーって言葉……使いたくないけど、使いたくなる。

僕が余計な事を考えていたら、隙をつかれて、ボールを奪われる。
そのままシュートまで決められた。
あ、ちょっとイライラしてきた。
魔力を使って、吉川君をぶん殴りたい。

前半が終わり、小休憩。
僕が不満げな気分で、女子のバドミントンに目を向けたら、苛立ちも吹っ飛んでしまう。
というのも、お姉ちゃん……。バドミントンをした事がないのだろうか？
恵梨さんと打ち合い……ラリーをしているのだけど。
なぜかラケットのハンドルを両手で握っている。
バドミントンで両手を使う必要はないと思うけど……。

ポーンと恵梨さんがシャトルを放ち、空高く舞い上がる。
フワフワと落ちてくるシャトル。
普通なら、余裕で返せる程に弱々しいスピード。
それを超真顔で見上げるお姉ちゃん。
まるで刀を扱うかのように、ラケットを振り上げる。
そして、シャトルが落ちてくるだろう場所を計りながら、バックす

るけど。
途中で滑って、仰向けに倒れる。
ゴツンッと後頭部を地面に打ち、震えながら頭を押さえる。
そんなお姉ちゃんの頭にシャトルがコツンッと当たって、地面に転がる。

萌え萌えだー！！？　何、この可愛いキャラ？　天然ドジっ子キャラじゃないか。
狙っているのかと思う程に、ドジっているお姉ちゃん。
アニメじゃないんだから、程々にしなよ。って言ってやりたい。

この僕ですら顔を赤らめるのだから、あの場面を見ていた人達は硬直している。
吉川君なんて炎上だ。いや、だって今のは……いくらなんでも可愛過ぎる。
あれが本当に天然なのだから、尚更だ。

ふと気付くと、お姉ちゃんの周りに人だかり。
恵梨さんと菊池さんに、他の女子生徒も集まっている。
それに加えて、吉川君まで駆けて行った。大人気だな……。
僕の隣で、斎藤君が口を開く。

「ありゃ、反則だろ？」
「反則ですね……」
「わいが言うのも変やけど、めっちゃ可愛いやん。ミャラちゃん……」

リョウさんまでが話に加わり、僕と斎藤君がリョウさんの意見を賛同する。
僕達は正体を知っているから手を出さないけど……。

本当に知らなかったら、放っておけないキャラだな。
お姉ちゃん……もう元に戻る必要ないんじゃないの？　って、本気で思う。

自己責任〈ハル編６〉（前書き）

頑張っていいところを見せようとすればするほどに、おかしくなっていく事ってあるよね～。空回りという奴だろうか……。

自己責任〈ハル編6〉

お姉ちゃんのドジで、少し騒いだ二時間目も終わり。
次は三時間目。今日は調理実習だ。
三時間目の前半に教室で調理方法の話をして。その後、作業に移る。
四時間目も家庭科だから、続けて実習の時間だ。
上手くいけば、昼休みがそのまま手に入る。
要するに、食事をする時間が遊ぶ時間に早変わりって事。

三時間目の前半は何事もなく時間が過ぎて、次に家庭科室へと移動する。
グループ分けの話だけど……。
普段のメンバーよりも人数が増えているので、分かれる事になる。
僕のグループはお姉ちゃんと菊池さんに吉川君。
ある意味で最悪のメンバーだ。
だけど、菊池さんも吉川君もお姉ちゃんと同じグループがいいと言うのだから仕方がない。
僕は非常事態に備えて、このメンバーに含まれているだけだ。
何かあったなら、お姉ちゃんを保護しなければ……。
弟としての責任だと思っている。

今日の課題料理は、ハンバーグとスープに白飯。なかなか好みな組み合わせ。
すぐにグループに分かれて、調理を始める。
吉川君が包丁を手に持ち、早速やらかしてくれる。
想像はしていたけれど、この人……料理もお得意のようだ。
包丁を片手に、皮むきから千切りまでくまなくやってのける姿はカッコいい。
僕もやってみたいけれど、マネをしたら、左手首から下がなくなる

かもしれない。
まぁ、なくなっても再生できるからいいんだけど。
ここでそれをすると、ちょっと食欲失せるよね。ダイエットには丁度いいけど……。

その隣ではお姉ちゃんが楽しげに野菜を並べている。
自分でするのが嫌だから、吉川君に頼むつもりだ。
可愛らしく野菜達の配列を決めるお姉ちゃんを横目で意識する吉川君。
そんな吉川君に苛立ちを感じたのか、菊池さんが行動に出る。
吉川君の後ろに回って、軽くタックルだ。
そのせいで吉川君の手がずれて、包丁が指にかする。
菊池さんが楽しげに口を開く。

「ごめんなさい。ここ狭いから、ぶつかっちゃった」
「……」ムッとした表情を浮かべながら押し黙る吉川君。
「菊池さん、今のはわざとですね？　いくらなんでも、悪ふざけでそういう危険な行動に出るのは止めて下さい」

流石の僕も注意をする。ツンッと余所を向く菊池さん。
実はこの人、勉強ができて運動に音楽もできるのに、家庭科が大の苦手だ。
料理や裁縫で苦戦しているシーンをたびたび目撃する。
だから、そつなく作業をする吉川君を見ていると腹が立つのだろう。

怪我をした指を眺めながら、ピリピリと菊池さんにオーラを放つ吉川君。
菊池さんも菊池さんで、吉川君の顔を見ずに苛立ち気分全開だ。
あー、まったく嫌なグループだな。
僕がため息をついたタイミングで、牙のない小動物が動き出す。

お姉ちゃんが吉川君の怪我した方の手を両手で掴んで、傷口に目を向ける。

「大丈夫？　痛い？」

「え……？　あぁ……大丈夫だよ。これくらい……。ただのかすり傷だから」

絶対にいらない事をするぞ。僕の頭にかすめる予感はすぐに的中する。

お姉ちゃんが口を開いて、かぷっと吉川君の指をくわえる。

あー、やっちゃった。これ……以前に家でも同じ事をしていたんだ。

お母さんが料理中に指を切って、お父さんがペロペロ舐めていた。

お父さん……お姉ちゃんがこういう事に鈍感になったのは、きっと菊池さんのせいだろう。

目を丸くしながら、顔を真っ赤にする吉川君の前では。

結構、必死になりながら、傷を治そうと吉川君の指をペロペロ舐めるお姉ちゃん。

しばらくして、傷口が癒えたのか。お姉ちゃんが満足げに微笑む。

「うん、もう大丈夫」

「……」口をパクパクしながら言葉に出来ない吉川君。

「あれ？　どうしたの？　顔が赤いよ。熱でもある？」

お姉ちゃんが吉川君の額に手を伸ばして、温度を計る。ここで、ダブルパンチ。

「あれ？　ちょっと熱い？」

今度は、背伸びをして自分の額を吉川君の額にくっつけようと試

みる。
トリプルパンチを入れる気か！？
思わず、お姉ちゃんの行動を見守っていたら。えらい事件が起きてしまう。

　案外に背の高い吉川君。
その身長に合わせようとするから、本気で背伸びをして足元がフラフラなお姉ちゃん。
額で温度を計る事ばかり考えていたのだろう。
だけど、誤って、吉川君にキスをしてしまう。
ほんの一瞬の事だけど、誤魔化せない程に明らかだった。
すぐにお姉ちゃんが背伸びを止めて、失敗した感を漂わせながら、顔を真っ赤にする。

「ち、違うの！　い、今のは間違い……」
「お姉ちゃんのバカ……」呆れて果てる僕。
「ご、ごめんなさーい！」

　両手で口元を覆いながら、お姉ちゃんが座り込む。
吉川君はもう頭の中が真っ白だ、硬直して動かない。
菊池さんを含む目撃者は、自分に関係ないにも関わらず、顔を赤らめながらショックで停止。
だって、今のは他人が見ても気恥ずかしくなるような光景だった。

　それから先はぎこちない空気が辺りを漂い、グループ内で口を開く事はほとんどなかった。
とりあえず、調理をし終えて。お食事の時間になる。
あー、喉が詰まりそうだ。
さっさと食事を済ませて、僕だけ逃亡しよう。
もうお姉ちゃんなんて知らない。

頂きますの合図と同時に、昼食を飲み込んで逃亡する。
ムリムリ、あんなに気恥ずかしい空気の中に、ずっといたら気が狂ってしまう。
発狂しない吉川君を尊敬するくらいだ。

それにしても、お姉ちゃん……今日に限って、どうしてこんなにもドジるのだろう？
まぁ、元々、授業には参加していなかったから。調子が狂っているのかな？
とにもかくにも、これだけバカをしていれば、吉川君が惚れても仕方ないと思う。

自己責任〈メモリー編2〉（前書き）

最近は友達が増えて浮かれ気味の上野君。
社交性が上がっています。
きっと今は一番楽しい時期だと思う……。

ぼそぼそと昼食を食べながら、困惑する。
どうしよう？　間違えて、吉川君にキスしちゃった。
相手が瑠菜なら笑って誤魔化せるけど……吉川君だもの。怒ってないか、凄く心配。
しかも、その一件以来、吉川君は無表情だから。何考えているのかわからない。
やっぱり怒っているのかな？
こういう時に限って、ハルがどこかへ行っちゃうし……。

僕が心配げに吉川君の様子を窺っていたら、不意に視線が合ってしまう。
すぐに吉川君が視線を逸らす。やっぱり怒っているみたい。
そうだよね、僕も瑠菜にいきなりキスされた時は打ち切れていた気がする。

せっかく友達ができたのに、いきなり嫌われたら何だか悲しい。
しょんぼりしながら、昼食を食べていたら。リョウがやってきて、瑠菜に口を開く。

「なぁ、お嬢様。ちょい、聞きたい事があるねんけど。今から、音楽室に来てくれへん？　どうせ次の授業は音楽やろ？」
「嫌よ」と瑠菜。
「ええやん。ちょっとだけやから。ホンマに頼むわ～」
「……」

不満げな表情を浮かべる瑠菜。不意に吉川君に視線を送る。

「上野に手を出したら、承知しないんだから」
「……」返事をしない吉川君。
「行きましょ、リョウ。上野、食べ終わったら直で音楽室ね」
「う、うん……」

了承はするけど、僕……食べるスピードがもの凄く遅いから。
瑠菜の期待に答えられないかもしれない。
だって、授業に間に合うかどうか不安なくらいだもの。
まぁ、昼休みを全部食事に使えば、なんとか……。

リョウと瑠菜が出て行って、更に気まずくなる。
うぅ……泣きそうな気分でご飯を口にするけど。もう味なんてわからない。
チラリッと吉川君に目を向けると、昼食に手を付けず、お箸を持ったまま停止している。
な……何か話さないと。くだらない事でもいいから、とにかく口を開いて、仲直りを試みる。

「あの……ご飯食べないの？」
「……」吉川君は黙ったまま。
「その……怒ってる？」
「……え？　あぁ……何か言った？」
「あの……さっきはごめんなさい。そんなつもりじゃなかったの……」

今にも泣きそうな僕を見て、吉川君が首を左右に振る。

「別に謝る事はないよ。ボクは気にしてないから……」
「本当に？」
「う、うん。もちろん……」

僕が上目遣いに吉川君の顔を覗きこんだら、吉川君の顔色が赤くなる。
吉川君って、すぐに赤くなるよね。暑さに弱いのかな？
でも、この部屋……結構涼しいのに。不意に吉川君が話を振ってくる。

「それにしても、ミャラちゃんは食べるのがゆっくりだね」
「僕は……昔から飲み込むのが苦手だから。熱い食べ物も苦手だし……。だけど、量的には結構食べるの。時間は掛るんだけどね」
「時間を掛けて食べる方が身体には良いらしいね」
「フフッ、そう聞くけど。時間がない時は必死になっちゃうから。食べるのが早い人って、ちょっと羨ましいな」
「急いで食べて、喉に詰めないように気を付けないといけないね」
「えへへ……。前にもね……」

少し会話が弾んで、先程のぎこちない空気が和らいでくる。
気付けば、周りの人達が皆して食べ終わっていて。残りは僕達だけになっていた。
先生も鍵を僕達に預けて、出て行ってしまう。
時計を見ると、後十分……。早く食べないと……。

必死になって食事をする僕の前では、吉川君が楽しげに僕を観察している。
吉川君は食べ終わっているから、わざわざ僕を待ってくれているみたい。
迷惑を掛けないようにしないと……。
そう思って、口の中に食べ物を詰め込んだら、喉を詰めてしまう。
すぐに吉川君が水を用意してくれて、『急がなくていいから、ゆっくり食べなよ』って言ってくれた。

吉川君に余計な心配を掛けてしまい、恥ずかしさで燃えちゃいそう。
なんとか時間内に食べ終わって、家庭科室を後にする。

自己責任〈ハル編7〉

音楽室にて、繰り広げられるのは菊池さんのピアノ演奏。
ハードな曲だけど、今の菊池さんにはピッタリだ。
菊池さんの苛立ちが旋律に乗って、暴れ回る。
まるで戦争を見ているよう。
曲名を付けるとしたら『攪乱(かくらん)』か？

皆で感心していたら、チャイムが鳴る寸前に、とある人物が入室してくる。その人の第一声。

「相変わらず乱暴だな。素人同様じゃないか。繊細さに欠けるし、曲のタイトルにもそぐわない。まったくもって、耳に悪い雑音だよ」

扉の前には、不快げな吉川君。
まぁ、吉川君の毒舌は諦めよう。
文句を言いたいのがお姉ちゃん。
吉川君に抱えられながら、爆睡している。
ゴロゴロと喉を鳴らして、もの凄く気持ちよさそうに爆睡している。
お腹が満腹になって眠くなるのはわかるけど、せめて教室までは自分で歩こうよ。

僕がため息をつくのと同時に、鍵盤を叩き付けるような荒い音が聞こえてくる。
振りかえると、菊池さん……もの凄く怖い形相で吉川君の前まで早歩き。

「上野を返して！」
「大きな声で怒鳴るなよ。それと楽器を乱暴に扱うな。演奏者とし

ての自覚もないのか？」
「返しなさいって言ってるでしょ！」
「うるさいな。ミャラちゃんが起きちゃうじゃないか」

お姉ちゃんに手を伸ばそうとする菊池さんから、お姉ちゃんを遠ざける吉川君。
そして、二人で睨み合いだ。あー、面倒くさい。
僕が二人の間に割って入って、吉川君に口を開く。

「わざわざお姉ちゃんを運んでくれてありがとうございます。ここからは僕が引き取りますので……」
「別にいいよ。ミャラちゃんは軽いし。君は授業があるでしょ？」
「いえいえ、流石にそれは……。これでも僕は弟ですので」

家族である事を主張して、自分には責任がある事を強く口にし、無理矢理にお姉ちゃんを奪い取る。
放っておいたら、お姉ちゃん争奪戦が勃発しそうだったから。
安全面を考慮して、僕が保護するのが無難。

流石に、お姉ちゃんの弟である僕には文句を言えないらしい。
吉川君がしぶしぶ諦める。菊池さんの怒りも少しは治まるけど、二人の不仲には変わりない。
お姉ちゃんを取られて、面白くなくなったのか。吉川君がピアノの前まで歩いて行く。

「大体、お前はガサツなんだよ。ちゃんと曲名を理解しているのか？　この曲の名前は『乱花（らんか）』だぞ。力強い弾きは良いけど、あんなに粗暴な音じゃ駄目だ。お前には、もっと繊細さを要するね」

そう言って、ピアノ前の椅子に座り。先程、菊池さんが弾いてい

た曲と同じ物を弾き始める。
聞いていて、思う事……。
あぁ、成る程。確かにこちらの方が綺麗だな。
菊池さんには悪いけれど、直感的にそう思った。
不意にリョウさんが口を開く。

「せやな、お嬢様には悪いけど、こっちの方がしっくりくるわ。ところで、君に聞きたいんやけど。この曲の序盤で変な音があるやろ？　あれって、間違いやないの？」
「あぁ……もしかして、この音？」
「それや、それ。この間、テレビを見ていて。同じ曲が流れてな。わい的には奇妙で仕方ないんやけど。ここの音って、何か耳の裏がかゆくなるわ」
「そうだね。本来、この音は必要ない……。却って、耳障りなくらいだ。だけど、アンゼルム・アーベルはあえてこの音を入れた。それにはわけがあって、この頃のアンゼルムはヘラとの婚約に成功し、この上もない至福を感じていた。そんな幸せの中にも、たった一つの不安があったんだ。それは、いつの日か必ずやってくる別れの日。二人が同時に亡くなる事なんて、ごく稀な事だし。ヘラは少し病弱だったから……。アンゼルムは一人残される事を不安に思って、ここに無駄な音を入れる事にした。これはアンゼルムの気持ちを表現していると言って、いいのかもしれないね。どんな幸せの中にも、小さな不安は付き物だと……」
「成る程なぁ～。これで、スッキリしたわ。めっちゃ分かりやすい回答ありがとうな」

笑顔を見せるリョウさん。
ふと気が付くと、菊池さんは吉川君の事なんて無視して、僕の手の中でゴロゴロ言っている猫を撫でている。
ネコ耳がピコピコ動いて、もぞ痒い。

尻尾がふにゃふにゃと僕の身体に触れる。痒いし……ウザい。

地面に置きたいけれど、置いたら菊池さんか吉川君に拾われるだろう。

首輪を付けておいたら、安全だろうか？　いや、無理だな。

これだけ可愛らしい猫なら、飼い猫であったとしても、拾われる。

首輪なんて外されたらお仕舞いだ。

すぐに捨て猫扱いされて、拉致られるのは目に見えている。

保健室に連れて行こうか？　いや、でもなぁ……。

きっと吉川君が付いてくるし、菊池さんも来るだろうな……。

手放すのも危険だし。どうしたものか？

今日は早退しようかと考え始めた頃に、お姉ちゃんが目覚める。

「ふぁ～……、おはよう……」

「もうお昼だよ。というか、食後に寝たら太るよ」

「眠い……。まだ眠い……」

お姉ちゃんがぶつぶつ言いながら、僕にしがみ付き二度寝しようとする。

おかげ様で、二人の鬼神に睨まれる。

大丈夫……僕が本気を出したら、この人達なんて瞬殺できる。

そういう思いを抱えないと、ビビって逃げ腰になってしまう。

心を落ち着かせ、逃げ出したい気分を押さえ込み、冷静に口を開く。

「お姉ちゃん、起きたのなら自分の席で寝てよ。もう抱っこはしないからね。下ろすよ。ほら、自分で立って」

「んん～……」

僕がお姉ちゃんを下ろして、お姉ちゃんが自分の足で立つ。まる

で子供だ。
僕が背中をポンポン押して、お姉ちゃんを席に座らせる。
ふぅ……なんとか席に座らせる事ができた。
お姉ちゃんがぼんやりしながら、僕に目を向ける。

「次の授業は？」
「音楽だよ」
「あぁ……じゃあ寝れる」
「寝ないでよ。今まで寝ていたんだから、今から起きるの。ほら、教科書出して」
「んん～」

お姉ちゃんが不満げに教科書を開く。
今日の授業内容は皆で合唱。『白雪』という歌を歌うはず……。
前回の続きなんだけど、お姉ちゃんはこの歌を知らないはずだ。
お姉ちゃんが音符を見ながら、バカな事を言う。

「オタマジャクシがいっぱい」
「いらない事を言わないで」
「一つ、二つ、三つ、四つ……」
「オタマジャクシの数を数えないの。寝ぼけてないで、もう先生が来ているからね。ちゃんと歌うんだよ。わかった？」
「うん……。でも、この歌知らない」
「先生が教えてくれるから。黙って授業聞いて」
「うん、わかった」

にぱっと笑う無邪気な生き物。あー、頭痛がする。
アホなのか、バカなのか、天然なのか、何なのか？　この人はもう……。
しっかりしているのかと思えば、変な事を言うし。真面目なのかと

思えば、不真面目だし。

やっと授業に入れそうだ。

いつの間にか、出現していた気の弱い先生に向いて、手を上げる。

「準備が整いました。それでは授業をお願いします」

「は、はい……！」

先生が授業開始の挨拶をして、授業が始まる。

不意に、吉川君が余っている椅子を持ってきて、お姉ちゃんの隣に座りだす。

それを見ていた菊池さんが自分の椅子を持って、お姉ちゃんの隣に座りだす。

お姉ちゃんは二人の間に挟まれている形。

ある意味、両手に札束で。ある意味、両手に核兵器だ。

良いのか悪いのかわからないけれど、よくよく考えたら凄いよね。

お姉ちゃんってどうしてこんなにもお金持ちにもてるんだろう？

不思議で仕方がない。

殺意を抱きながら睨み合う二人の間に挟まれて、何だか嬉しそうなお姉ちゃん。

二人の不仲を気にしていない。一人でニコニコしながら、先生の話を聞いている。

確かに、真面目に授業を聞いているけど。何だか不気味な光景だ。

不意にお姉ちゃんが二人に問いかける。

「二人は音楽とか得意？」

「もちろんよ。一番の得意科目だもの」と菊池さん。

「その割には、大雑把だけどね」

「何か言った？」

吉川君の毒のある言葉に対して、菊池さんが鋭く突っ込む。

そんな二人を見て、お姉ちゃんが苦笑する。菊池さんの頭を撫でながら、口を開く。

「ほらほら、そんなに睨まないの。だけど、そうだね……吉川君の言うとおり、瑠菜は少し大雑把かもしれないね。でも、それ以上に音楽性に長けているよね。全体をとらえる力に関してはピカイチだもの。これも一つの才能だよね」

「それは褒めてるの？」ちょっと不満げな菊池さん。

「褒めてるよ。僕なんて勉強も運動も苦手だよ。音楽だって、歌以外はわからないもの。こんなにいっぱいオタマジャクシが並んでいても、まったく意味がわからないよ。誰が考えたの？　このオタマジャクシ……」

お姉ちゃんが真面目に呟き、吉川君が思わず噴き出す。すぐにお姉ちゃんが反応する。

「笑わないでよ。このオタマジャクシのせいで、僕はいつも赤点なんだから。早くカエルになって、どこかへ行っちゃえばいいのに……」

「どこかへ行っちゃったら、いくらボクでもわからなくなっちゃうよ」と楽しげな吉川君。

「楽譜が読めない割には、上野は歌が上手よね」菊池さんが話を変える。

「ミャラちゃんは歌が得意なの？」

吉川君がお姉ちゃんを見て、お姉ちゃんがヘラヘラ笑う。

「皆は上手いって褒めてくれるけど……。もっと上手い人を知っているから、僕はまだまだだと思ってるよ。吉川君はどう？」
「ボクは聖歌隊に入っているから、それなりかな……」
「そうなんだ……。吉川君って何でもできるんだね。苦手な事はないの？」
「苦手な事か……。あまりピンッとこないね」
「うわぁ、凄い。僕とは正反対だね。僕なんて得意な事があまりピンッとこないや」
「そんな事はないわ。上野は歌が上手いし、パソコンだって得意じゃない」

菊池さんが割って入り、話が盛り上がっていく。
凄いよ、お姉ちゃん。あの鬼神達を大人しくさせるなんて、まるで神業だ。
これこそ才能じゃないの？　とか思ってしまう。
ちょっと二人が落ち着いた頃に、皆で合唱が始まった。

起立をして、先生の弾くピアノの音を聞きながら、歌い始める。
直後、予想通りの展開だ。吉川君……説明するまでもなく、ずば抜けて歌が上手い。
凄く声が通っていて、聞き心地抜群だ。流石、聖歌隊。
というか、この人は本当に何でもできるのか？
それなら、今度から江川先生第二号と呼ばせてもらおう。

もちろん、菊池さんだって非常に上手だし。リョウさんも滅茶苦茶に上手い。
このクラスで歌を歌えば、新聞記者だって取材に来る。
まぁ、来ても追い返されるだろうけど。
というか、きっと今までに結構な数の記者達が、学校の入り口辺りで追い返されていると思う。

リョウさんに菊池さん、そこへお父さんがいたんだから取材に来ない方が不自然だ。

とまぁ、歌っているのだけど。お姉ちゃん……聞いているだけで歌わない。

きっと歌を知らないから、とりあえず聞いてみようという事だろう。

歌い終わり、お姉ちゃんが拍手する。

「凄い、凄い。瑠菜も吉川君も凄く上手いね」

「上野も次は歌って。上野の歌声は好きよ」と菊池さん。

「うん、頑張ってみる。皆で歌えば楽しいものね」

お姉ちゃんが言って、先生が皆に合図をする。

もう一度歌うのだけど、僕はもう口パクだ。

だって、上手い人ばかりで、歌う気にもなれないんだもの。

何で僕が歌わなきゃいけないわけ？

必要ないじゃん。どうせそんなに上手くないんだから。

ちょっと拗ねながら、口を開く。

伴奏が始まり、歌が始まる。

そして、異常なまでに目立つ声……お姉ちゃんの歌声だ。

女性になって声が高くなったからだろうか？

非常に姫様の歌声に似ている。めっちゃ似ている。

多少違いはあるけれど、誰に近いって聞かれたらやはり姫様だ。

いつにも増して、洗脳的な声。

おかげ様で、歌う事を忘れている生徒が半数。

最後の最後は、歌っているのがお姉ちゃんだけ。

歌が終わって、お姉ちゃんがうろたえだす。

「何で誰も歌わないの？　僕だけ歌うのなんて恥ずかしいじゃない」
「だって、上野の声が心地よくて……」うっとりとする菊池さん。
「いや……あまりにもミャラちゃんの歌声が魅力的だったから……」
目を丸くしながら、吉川君が呟く。
「褒められるのは嬉しいけど……。一人は恥ずかしいよ……。次は皆も歌ってね」

お姉ちゃんが恥ずかしげに教室を見回す。
うん、きっと無理だろう。お姉ちゃんが歌えば皆が黙る。
だって、お姉ちゃんの歌声を聞きたいから。
どうしても皆に歌ってほしいのならば、お姉ちゃんは口パクか超小声で歌うしかない。

自己責任〈ハル編8〉

音楽の授業が終わり、今日の授業はこれにて終了。
後は、掃除当番だけが居残り、残りの人達は帰宅だ。
僕とお姉ちゃんは掃除当番に含まれていなかったので、先に帰らせてもらう事にする。
何せ今日は凄く疲れた。

お姉ちゃんが女子生徒達にサヨナラを言いまわる。
何て言うかお姉ちゃん……女友達を作るの早過ぎ。
今日でほとんどの女子生徒達と仲良くなったみたい。
お父さんだった頃は、知らない人とは一切喋らなかったのに……。
お姉ちゃんになって、積極的になったのだろうか？

ふと気が付くと、お姉ちゃんが菊池さんに話し掛けている。

「バイバイ～、瑠菜～」
「上野、覚えてる？　明日は約束の日よ」
「うん、覚えてる……。大丈夫だよ」苦笑するお姉ちゃん。
「私の家にお泊まりよ！　夜中に二人でイチャイチャするの！　人に言えないような事をたくさんするんだから！」

菊池さん……もの凄く声が大きいですよ。
むしろわざと強調しているでしょ？
教室中の誰もの耳に入っただろう。
もちろん、それは吉川君の耳にも……。
僕が億劫な気分になっていたら、お姉ちゃんが赤面しながら小声で呟く。

「あの……大きな声で言うのは……止めようよ」
「大丈夫、安心して！　私は上野の良い所全部知ってるから！」
「あの……その……」真っ赤なリンゴになりながら、うろたえるお姉ちゃん。
「おい、バカ嬢……。聞き捨てならない言葉が聞こえてきたけど？」
超不満げな吉川君が近づいてくる。
そんな吉川君を鼻で笑う菊池さん。

「あら、知らなかったの？　私達はそういう仲なの。上野だって、了承しているんだから。そうよね？　上野？」
「えっと……あの……」お姉ちゃんが未だに顔を真っ赤にしながら、指遊びを始める。
「ミャラちゃん……そうなの？」

心配げな吉川君に目を向けられず、お姉ちゃんが俯きながら返事をする。

「……うん」
「……」黙り込む吉川君。
「ほら、言った通りでしょ？」菊池さんが強気に言ってのける。
「だとしても、どうせお前が無理矢理に押しつけているんだろ！？」

吉川君が鋭い目つきで、菊池さんを睨む。
菊池さんが口を開こうとする中、面倒くさいのでさっさと話を終わらせに掛るのは僕。

「話せば長くなるので省略しますが……。実は、お姉ちゃんと菊池さんは、ある契約をしていまして。それが、お姉ちゃんの身体と引き換えに、食べ物を譲ってもらうという話なのです。正直に言って、

お姉ちゃんには大変悪いのですが、僕達の家は食糧難に悩んでいまして……仕方なく……」

まるで超貧乏な家の子みたい。だけど、嘘は付いていないはずだ。まぁ、食糧難の原因は僕で、貰える食べ物がトラック一台分とか。この辺りは黙っておこう。

変な事を言ったら、僕が吉川君に睨まれてしまうから。

話を聞いて、吉川君が深刻そうな表情を浮かべる。

「だからって……ミャラちゃんがそんな……」

「あのね……気にしないで、吉川君。何だかんだ言って、僕は瑠菜の事……嫌いじゃないし。その……心配しなくても大丈夫だよ」

「ミャラちゃん……」

誤解ばかりが広がって行く吉川君の頭の中。何て言うか、これはこれで面白い。

どこまで誤解するのだろう？

正直に言って、吉川君って出来過ぎる人だから、少しは恥を掻いてほしい。

このまま吉川君の中で、ミャラちゃんフィーバーを繰り広げてやるか。

どす黒い考えが、僕の脳裏に浮かび上がる。不意に吉川君が案を出す。

「だったら、ボクが食料を譲るから。こいつとの契約なんて止めてしまえばいい」

「そんなの許さないわよ！　契約書がある限り、この契約は経ち切れないわ！」

反発する菊池さん。
いや、契約書なんてないですけど。突っ込むのは止めておこう。
吉川君が調子に乗りだしちゃいけないから。
お疲れ気味のお姉ちゃんが、吉川君に笑顔を見せる。

「吉川君、大丈夫だよ。これはいつもの事だから……。心配してくれて、ありがとう」
「そう……。ごめんね……力になれなくて」

心痛な表情を浮かべながら、吉川君が呟く。
非常に嬉しそうな菊池さんの頭を撫でながら、お姉ちゃんが二人に別れの挨拶をする。

そういうわけで、帰宅する事に。
途中で恵梨さんと合流し、スーパーに寄ってから、家に帰る。
家に帰ったら、お母さんが恵梨さんに身体を借りて、夕食を作り始める。
料理をしながら、お母さんが僕達に話しかけてくる。

「それで、今日はどうだった？」
「昨日、お姉ちゃんと知り合った吉川君という人が学校に来たよ。何だかお姉ちゃんの事が気になるみたい」と僕。
「あら、上野君。もう彼氏が出来たの？　すご～い、おめでとう～！」

大はしゃぎするお母さん。そんなお母さんに、お姉ちゃんが口を開く。

「違うよ。吉川君はただの友達。大体、僕は男だよ。彼氏を作ってどうするのさ？」
「だけど、お姉ちゃん。家庭科の授業の時に、ドジをして。吉川君にキスしたんだよ」
「あ、あれは本当にミスったの！　ちょっと眠くて、ボーっとしていたから……。本当にバカをしたと思ってるよ……。だけど、今更どうにもならないし……」

僕の言葉に対して、お姉ちゃんが赤面しながらため息をつく。
お母さんは非常に嬉しそうだ。
嫉妬心も嫌悪感も抱くことなく、お姉ちゃんに彼氏ができたと喜んでいる。
お姉ちゃんが首を振って否定する中、不意にお母さんが話を変えてくる。

「そういえば、吉川君で思い出したんだけど。私と上野君がとびっきりにイチャイチャしていた頃の話でね。上野君はニュースとかあまり見ないから知らないと思うけど……。吉川君って、よくテレビに出ていたのよ。運動神経が抜群で、その上に、飛びぬけて秀才で。何をさせても、鬼才を発揮するから。人からは『神童（しんどう）』なんてあだ名まで付けられて。あの頃は幼い子供だったけど、もう立派な青年なのね。時間が過ぎるのって、早いね～。だけど、上野君の彼氏になるなんて、想像もしていなかったな」
「彼氏じゃないって！　もう日和はドラマの見過ぎだよ！　あんまりに変な事を言うなら、明日からドラマは一日一時間までにするよ」
「そんなの駄目～！　私のと～ってもなお楽しみを、上野君は奪っちゃうの～！？」
「代わりに僕が一緒に遊んであげるから。ねぇ、たまには構ってよ。ドラマなんて見てないで、僕を見て」
「あら、上野君。彼女もできて、彼氏もできたのに。まだまだ甘え

たりないのかな？」
「甘えたりな～い。日和が構ってくれたら、満足するかも」
「ん～、仕方ないな。ご飯を食べたら、遊んであげよう！」
「ねぇ、キスして。ほっぺでいいから、キスして～」
「ど～しよっかな？　恵梨ちゃんと相談しなきゃね～」

途中から、のろけに入る二人組。
お父さんがお姉ちゃんになったにも関わらず、お母さんとのラブラブ度には変わりがない。
毎日、こんなにラブラブオーラを放たれちゃあ、子供にも悪影響が出てしまいそうだ。
僕の頭が変になりそうな中、出来る限り二人のラブ会話をスルーする。

天才君〈ハル編〉　★（前書き）

そろそろ絵を描かないと……。

天才君〈ハル編〉★

さて、今日が終わり明日になる。
学校へ到着すると、新キャラ……吉川君の姿はなく、リョウさん達が寄り集まって話し合いをしていた。
お姉ちゃんは話に入らず、猛ダッシュで黒松さんに集りだす。
青い顔をする黒松さんを無視して、僕はリョウさん達の話に乱入だ。
不意に斎藤君が口を開く。

「家で吉川の話をしたら、両親が驚いていたぜ。あいつって、昔から有名人なんだってな。天才か秀才か知らねーけど。皆から特別視され続けてるんだって。だけど、最近はあまりテレビに出てないらしーぜ。切りがないとかいう理由かなんかで、本人が断っているらしいし。まぁ、俺はニュースなんて見ないから、よくは知らねーけど」
「わいは音楽以外の事にはそんなに興味ないから、吉川と聞いてあまりピンとこえへんかったけど。よくよく思い返せば、昔にな。凄い天才少年がいて……初めてピアノを触った時に、まるでプロのように演奏したっちゅう話があってな。あれはもしかしたら、あの子ちゃうかな～思うねんけど」とリョウさん。

そんな感じで止まる事のない吉川君の英雄伝説。
あんなに普通に登場したから、どうせ人間レベルだろうと思いきや。
それなりに超人レベルだった。
しかし、僕も負けていない。マジシャン的要素は僕の方が上だろう。

吉川君の話で盛り上がる僕達を余所に、お姉ちゃんったら菊池さんと『おちゃらかほい』をしている。
というか、それは余所の世界の遊びじゃない？　まぁ、突っ込んで

もしかたないか。
菊池さんは非常に楽しそうだ。お姉ちゃんが構ってくれるから、凄く嬉しいみたい。

そんなこんなで始まる一時間目は自習時間。
先生が急用で学校に来られなくなったらしい。だから、別名自由時間。
僕達の話が拡大して、教室中が吉川君の話で騒がしくなる。
誰も勉強なんてしていない。来週からテストなのに、皆で談話だ。

それでは、皆の話をまとめてみよう。
吉川君という人物について。全てにおいて並外れた異才を放つ天才青年。
勉強も運動も芸術も関係なしに、人外である。
次いで、眉目秀麗（びもくしゅうれい）。
何やら欧米とのハーフらしい。
噂ではイギリス系の血が混ざっているとか……。
性格は見ての通り、結構な冷血主義。
お姉ちゃんに対するような態度は前代未聞だという。
テレビでもまずは笑顔なんて見られないらしい。
普段からツンとしていて、人を寄せ付けないオーラを出している。
というのが、吉川君のファン達のお言葉だ。

あんなに冷血な吉川君だけど、だからこそ却ってファンが多いらしい。
まぁ、天才にツンは付き物だよね。
他の能力が勝るだけに、性格だけは少しひねくれている。
これが一つの萌え要素。どこの少女漫画の王子様か？

あんまり言うと、僕もツンツンになりますよ。

ツンツンして大暴れしてやりますよ。
こんな天才が出てきたら、ちょっとくらい拗ねたくなる。
天賦の天才なんて大嫌いだ。だって、僕は努力の塊。
運動能力はまだしも、勉強や魔術に武術は全てが、努力でここまでやってきたんだ。
今更、天才なんて止めてほしい。
江川先生は良いけれど、他の人には弱点を入れてくれ。

僕達がうにゃうにゃと吉川君の良し悪しについて語っていたら、不意にお姉ちゃんが僕に言う。

「喉が渇いたから、ジュース買ってくるね」
「気を付けてね。どこに野獣が住み着いているかわからないから」
と僕。
「黒松に付き添わせた方がいいかしら？」不安げに言う菊池さん。
「大袈裟だよ～。ここは学校だから、大丈夫だって。すぐに帰ってくるから」

ヘラッと笑うお姉ちゃん。
現在、フラグがフィーバー立ちしている事に気づいていないのか？
まぁ、別にいいけど。
一度くらい誰かに襲われないと、この人は学習しないし。
僕はもうお姉ちゃんを守る事に全力を尽くすのは止めた。
自分で踏んだフラグは、自分で回収してほしい。

あえて止める事もないだろう。
僕の予想ではまだ大事件は起こりそうにない。
今までの経験だ。
もしも、本気でヤバくなったなら、ニートさんが連絡してくれるだろう。

え？　何？　読者に期待するなって？
そんな事を言わないで下さい。こっちの視点は一つなのです。
たまには役に立たないと、ニートの名が廃りますよ。まぁ、元から廃ってますけど。

　お姉ちゃんが嬉しげに教室を後にする。
それにしても、天才が惚れた人物があれなんだよな～。
案外に天才って普通に憧れるものなのか？
今度、江川先生に出会ったら聞いてみよう。

＞ｉ３０４１６―２３１＜

天才君〈メモリー編1〉　★（前書き）

上野君はウサギの数え方を間違えていますが、お気になさらないでください。

それにしても、相性がいいな上野君と吉川君。菊池さんにとっては、天敵である吉川君。上野君にとっては、気の合うお友達のようです。決して恋愛的感情はないけれど、少しは自分もできる人間だと思われたいらしい。まぁ、今のところ全敗してますけどね。ちなみに吉川君に護衛はいないのか？　実は近くにこっそりいたりする。きっと吉川君は前もって言っているだろう。『ミャラちゃんがボクに近づいても手を出すなよ！』と……。

天才君〈メモリー編1〉　★

何だか今日は凄く楽しい。
数日前から女の子をしているけど、皆がちやほやしてくれるから、ついつい甘えたくなっちゃって。
えへへって笑ったら、更に皆がちやほやしてくれて。女の子って得だよね。

そんな事を考えながら、ルンルン気分で購買へと向かう。
ジュース、ジュース。何を買おうかな？
購買に入り、ジュース売場へ向かおうとしたら。本売場の前に、見た事のある後ろ姿。

あー！　吉川君だー！
凄く真面目に本を読んでいるのは、どう考えても吉川君。
ちょっと驚かしてみよう。音を立てずに忍び寄って、後ろから抱きついてみる。

「だーれだ？」
「へっ？」振りかえろうとする吉川君。
「あー、ダメー！　振り返っちゃダメー！」
「あはは。ごめん、ごめん」

吉川君が振りかえるのを止めて、首を傾げ出す。

「うーん、誰だろう？　ヒントはないの？」
「えーっと、耳がピコピコしているの」
「難しいなぁ～。もう少しヒントをくれない？」
「えーっと、尻尾がフニフニしているの」

「あぁ、わかった！　ミャラちゃんだね？」
「あったりー！」

凄くノリが良い吉川君の反応に、思わず大喜びしてしまう。
こういう反応を待っていたんだ。
リチャードは真面目だから付き合ってくれないし。
それはそれで面白いのだけど、たまにはこういう風に遊んでほしいな。
吉川君が僕に向いて、口を開く。

「せっかく正解したんだから、何かご褒美をくれないの？」
「へっ……！？」

ご褒美！？　そんなの考えてなかった……。うーん、どうしよう？
必死になって悩む僕の前には楽しげな吉川君。
うーん、どうしよう？　考えて、考えて、考えたあげくに、僕が答える。

「えっと……ジュースを一本奢るとか……どう？」
「ミャラちゃん……お金は大丈夫なの？」
「へっ！？」

あぁ、そうだ。きっと吉川君は勘違いしている。
僕が売春しているから、僕の家は貧乏だって……そう思っているに違いない。
だけど、それ以外にご褒美を思い付かないから。僕が真顔で発言する。

「だ、大丈夫だよ！　ジュースくらいは奢れるよ！」

「フフッ、無理しなくてもいいよ。気持ちだけ頂いておくね」
「そ、そんなことないよ。大丈夫だよ」
「そんなに気を遣わなくてもいいよ。ボクの方こそ、ご褒美なんて無理を言って、ごめんね」

必死に訴える僕の頭を撫でながら、吉川君が口を開く。
うーん、恥ずかしい……。何だか僕って、吉川君の前では恥ばかり掻いてるな。
しっかりしている所を見せたいのに、ドジったり、バカしたり。本当に自分が嫌になっちゃう。

少し立ち話をした後に、自分のジュースだけを買って、購買を後にする。
吉川君も一緒についてくるらしい。
廊下でもお喋りしながら歩いていたら、家庭科の先生と偶然に出くわす。先生が僕に言う。

「あら、上野さんに吉川君。おはよう」
「おはようございます」

笑顔で返事をする僕。この先生は大好きだ。
だって、僕を一般生徒として扱ってくれるから。
大抵の先生は頭を下げて、僕にペコペコしてくるのに。
そういうのが全然ない。先生が続けて言う。

「授業はどうしたの？」
「一時間目は自習らしいです」
「あら、丁度良かったわ。少しお願いを聞いてくれないかしら？」
「何ですか？」
「上野さんは、動物とか好き？」

「はい」
「じゃあ、お願いできるわね。実は飼育小屋の当番の生徒が、今日からしばらくの間、お休みすることになってね。代わりの生徒を探さないといけないのだけど……。嫌がるのよ、うちのクラスの生徒達。本当は私が世話をすればいいのだけど。私……実は動物とか苦手なのよね。だから、上野さんが手伝ってくれたら、大助かりなのよ」
「はい、わかりました。それで……何をすればいいのですか？」
「フフッ、ありがとう。それじゃあ、説明するわね」

先生が色々と説明してくれる。
それを聞きながら、理解したように頷く僕。
だけど、半分以上わかっていない。
わからなくなったら、どうしよう？
まぁ、吉川君も聞いてくれているみたいだから、吉川君に質問すればわかるかな？

先生とサヨナラをした後に、時間が余るから今日の作業を終わらす事にする。
職員室に行って、飼育小屋の鍵を貰い。
家庭科室へ行って、白菜やニンジンの切れ端をゲットする。
その足で飼育小屋へと移動。飼育小屋って、どこにあるのだっけ？
いきなり難問が生じて、吉川君に質問だ。
すぐに吉川君が先頭を切って、飼育小屋へと誘導してくれる。
本当に、この学園は広いからわけわかんないんだよね～。

それなりに大きな飼育小屋を発見して、中を覗くと。
ウサギが五匹、チャボが五匹に、インコがワラワラ。わぁー、可愛

い。
ウサギとチャボは別室で、インコは自由に空を飛んでいる。
まぁ、自由と言っても小屋の中の話だけど……。
早速、鍵を開けて中に入ると、二重扉になっている。
動物が勝手に逃げ出さないようにかな？

さて、ウサギとチャボをお外に出して、お散歩させてあげないと……。

まずはウサギのお部屋に入り、僕がウサギに近づくと皆でワラワラと逃げて行く。
あ、そっちじゃない。こっち、こっちに行ってほしいのに～。
なかなか言う事を聞いてくれないウサギ達。
捕まえようと思うけど、持ち方がわからない。
すぐに逃げられちゃう。うわぁ～、どうしよう？

僕が困り果てていたら、後ろから笑い声。
振りかえると、意外にも吉川君。飼育小屋の中まで入ってきている。
目を丸くする僕を見て、吉川君が首を傾げる。

「どうしたの？」
「ううん……。吉川君って、こういう所は苦手なのかと思って……」
「え？　あぁ、そうでもないよ」
「へー、意外。瑠菜なら絶対に嫌がるのに。汚いとか臭いとか言って」
「あぁ、あいつはお嬢様だからね」
「吉川君は王子様じゃないの？」

僕があまりにも真面目に聞いたからか、吉川君がクスクスと笑いだす。

「家がお金持ちなだけだよ。個人的には一般人と変わらないよ」
「そんな事はないよ。吉川君は凄い人だよ。何でもできるし」
「そうかな……？」
「うん、カッコいい」

僕が言ったら、吉川君の顔が真っ赤になる。
あ、また体調不良かな？　僕が首を傾げたら、吉川君が話を変えてくる。

「そ、それより。ほら……こいつらを移動させないと」
「そうだ、忘れてた。ねぇ、ウサギってどうやって持つの？　耳とか持っていいの？」
「それは駄目だよ、耳を掴むのは可哀そうだよ」
「漫画とかでは、よく耳を掴むよ」
「それは漫画だから……。よく考えてごらんよ。ミャラちゃんは耳を掴んで持ち上げられたら、どんな気分になる？」
「ちぎれる……」

恐ろしさのあまり思わずネコ耳を伏せてしまう。
怖い、怖い。こんなに敏感な所を引っ張り回されたら発狂物だ。
ビビり脅える僕の前で、吉川君がお手本を見せてくれる。

「こうやって、持つんだよ」
「わぁ～、凄い」
「いきなり持っちゃ駄目だよ。ウサギを驚かせないように、ちゃんと『これから持つよ』って、頭を撫でて合図をしてあげてね」
「うん、わかった」

吉川君がもう一度お手本を見せてくれて、それをマネする僕。
なんとか持てるようにはなったけど、ちょっと暴れられてしまい。

怖くなって、ゆっくり地面に下ろしてしまう。
それでも、何度かチャレンジしていたら、しっかり抱けるようになった。

ウサギを外のお遊び広場に連れて行く。
お遊び広場と言っても、単に砂場の上に柵があるだけなのだけど。
ウサギ達は嬉しそうに、目を開けたまま……動かない。
何を考えているんだろう？
よくわからないけれど、口をモグモグしている子が多いな……。

次に、チャボ達をウサギとは別の柵に放牧して、小屋の中の掃除を始める。
それにしても、吉川君……手際が良い。何か動物を飼っているのかな？　僕が吉川君に振り向く。

「吉川君って、何か動物を飼っているの？」
「うん、フェレットを飼っているんだ。チロっていう名前のね。僕が全て世話をしているから、凄く懐いてくれて。今じゃあ、無二の親友だよ。それに、チロの奴はとても賢くてね。この前も……」

チロの話をする吉川君はとても楽しそう。本当に親友なんだろうな。
尽きる事のないチロの話を熱心に聞いていたら、掃除が終わる。
餌や水の用意も終わって、外にいる動物達の様子を見に行く。
あ、そうだ。皆におやつをあげないと。せっかく野菜を貰ってきたんだものね。

浮かれた調子で、貰ってきた野菜を袋から出していたら。不意に、吉川君が真顔で呟く。

「大変だ、ミャラちゃん……。ウサギが一羽いなくなってる……」
「へっ!?」

すぐに柵を覗き込む。
一匹、二匹、三匹、四匹……それだけ？　後の一匹は？
頭の中が真っ白になる僕とは違い、吉川君が冷静な言葉を口にする。

「ここから逃げ出したみたいだね」
「穴……？　さっきまではなかったのに……」
「ウサギは穴を掘るのが得意だから、自分で掘ったのだろうね」
「ど、どうしよう？　早く見つけないと……」

半パニックになる僕に向いて、吉川君が口を開く。

「ミャラちゃん、まずは落ち着いて。ボクは他の動物を小屋に戻しておくから、ミャラちゃんは逃げてしまったウサギを探して。ウサギは狭い所や暗い場所を好むから、そういう場所を注意して探せば、きっと見つかるよ」
「う、うん。わかった」

吉川君の言葉を頭に入れて、すぐにウサギを探しだす。
ウサギがいなくなってから、まだそんなに時間が経過していないから、きっと近くにいるはずだ。
倉庫の中や、ブロックの隙間、花壇の周りをくまなく探す。だけど、なかなか見つからない。

必死になって探していたら、物置小屋の下にある小さな隙間に、何かを発見する。
キラリッと赤い目が光るのは、猫じゃなくてきっとウサギだ。
いた！　発見はした、発見することはできたけど……。

手を伸ばしても届かない。どうしよう？
野菜でおびき寄せてみようか？
白菜を手に持って、ウサギに自慢してみる。

「ほら、美味しいお野菜だよ～」
「あの……ミャラちゃん……」聞こえてくるのは吉川君の声。
「ちょっと待って。今は忙しいの。ほら、こっちにおいで」
「そんなエロいポーズで何してるの？」

突然に聞こえてくるのは違う奴の声……。
狭い隙間から手を引いて、後ろを振り返る。
目に入るのは、顔を真っ赤にした吉川君と呆れ顔の未来の姿。未来が僕に口を開く。

「ポーズがエロい上に、パンツが丸見えだよ。そんな事をしていたら、仕舞いには誰かに襲われるよ。まぁ、襲ってほしいのなら、別にいいんだけど……」
「誰が！」

思わず、炎上しながら怒鳴ってしまう。
また恥を掻いた！　もうヤダ！
羞恥心で死にそうな僕が、誤魔化すために話を変える。

「大体、何で未来がいるのさ！？　何か用！？」
「そんなに怒らなくてもいいじゃない。合唱会の予定日を伝えに来ただけなんだから。それにしても、何でそんなにエロいポーズしてたの？　もしかして、この子を挑発してるの？」
「してない！　違うよ、ウサギがこの下に入り込んじゃったの。だから、野菜でおびき出そうと思って……」

「あぁ、なんだ。てっきり、そういうプレイに興味を持ちだしたのかと……」
「そんなわけないでしょ！　大体、何でそうなるのさ!?」
「だって、考えてもみなよ。こんな人気のない場所で、女の子がエロいポーズをしながら、パンツ見せていて。それを男の子が赤面しながら眺めているなんて。普通は何かあるのかと誤解するでしょ？」
「もう、そんなのどうでもいいから、ウサギをなんとかしてよ！」

これ以上、この話をのばしたくないから。
とにかく、ウサギをどうにかしろと未来に訴える。
流石の未来も飽きたのか、ウサギの話に乗ってくれる。
未来が軽く返事をして、口笛を吹くと。
すぐにウサギが小屋の下から、飛び出してくる。
やっぱり凄いな……未来は。僕達が感心していたら、未来がウサギを持ち上げて言う。

「じゃあ、予定を言うよ。ちゃんとメモしてね」
「ちょ、ちょっと待って」

ボールペンと紙を用意して、合唱会の予定を書き込む。
うーん、この日はどうだろう？　もしかしたら、きついかな？
未来にこちらの具合を説明して、なんとか都合を合わせる事に。
用が済むと、未来がウサギを吉川君に手渡す。

「もう逃がさないようにね。この子は好奇心が旺盛みたいだから」
「あぁ……」と吉川君。
「後、ミャラちゃんを物にしたいなら。マタタビを与えるといいらしいよ。凄くエロっぽくなって、襲いやすくなるそうだよ。まぁ、基本はネコだからね。猫じゃらしとかで遊んであげても、よろこ……」

「こら、未来―！」

僕が掴みかかろうとしたら、未来が消えてしまう。狭間に飛んだらしい。
まったく余計な事を言う奴だ。未来が忽然と消えてしまい。
状況を理解できない吉川君が茫然としている。
そんな吉川君に向いて、話を進める。

「い、今のは気にしないでね。きっと幻覚だから……」
「え……？　うん……」

話がややこしくなる前に、吉川君の腕を引っ張って、飼育小屋まで連れて行く。
ウサギを小屋に入れて、野菜を与える。
そしたら、皆で嬉しそうに食べ始めた。
チャボも野菜が好きらしい。
だけど食べ方が穏やかじゃないな。
突き散らかしている。せっかく掃除をしたのに……。

動物のお世話を終えて、飼育小屋を後にする。
鍵を返しに向かう中、吉川君が話しかけてくる。

「さっきの人は誰？」
「僕の友達。あの……合唱会の仲間かな？」
「そう……。あの人、急に消えたね」
「え、えっと……マジシャンなの。だから、急に消えちゃうの」
「へー、そうなんだ……」

凄く下手な言い訳だけど、これ以外に思い付かない。
バカな未来のせいで、吉川君が不審に思っている。

変な事を聞かれないかな？　僕がドキドキしていたら、吉川君が別の話を口にする。

「あの人が言っていたけど……。あの……ミャラちゃんって、マタタビが好きなの？」

「えっと……あの……。うん……大好き……」

「あの……、一つ聞いてもいいかな？」

「え……何？」

「そのネコ耳って……本物？」

「うっ……」

微妙―。本物じゃないけど、神経が通っています。なんて言ったら、どう思われる？

そういう手術をしたのかと思われる？

何かの実験台にされているのかと、誤解される？

でも、何て言えばいいのだろう？

僕が困り果てていたら、不意に吉川君がネコ耳に手を伸ばしてくる。

吉川君の手が触れた瞬間に、ゾッとするような快感を覚える。

思わず、変な声を出してしまう。

「やぁん！？　あぁ、それ駄目……」

「ご、ごめん……」

すぐにネコ耳から手を離す吉川君。赤面しながら、僕に謝る。

僕は自分でネコ耳を触って、変な快感を吹き飛ばす事に。

あうー、人に触られるとやっぱり感じる。

このネコ耳って本当に繊細。

頭を撫でられる時に触れるくらいなら平気だけど、ネコ耳を掴まれると、もう駄目だー。

ネコ耳を押さえながら、僕が言う。

「ここ……凄く敏感なの。触られると気持ち良くて、変になりそう。尻尾も敏感なんだけど、耳の方が感じるの……」
「し、神経が通っているんだね。てっきり機械で動いているのかと思っていたよ……」
「普通はそう思うよね」

苦笑する僕に向いて、吉川君が質問をしてくる。

「それって、生まれつき？」
「えっと……うん、まぁ……。突然変異……かな？」
「可愛い突然変異だね」
「えへへ……。だけど、敏感すぎるのは困るかな？　ここを触られると身体の力が抜けるから。こんなに見え見えの弱点なんて、必要ないのにね」
「そう……？　ボクは素敵だと思うけど」

話をしながら、もう一度手をのばしてくる吉川君。
僕のネコ耳を触りながら、問いかけてくる。

「こうされると気持ちが良いの……？」
「やぁ……あまりクニクニしないでぇ……」
「本当に敏感なんだね」
「あっ、あぁ……やめてぇ……」

身体の中がゾクゾクする。
ネコ耳を触られるだけでも、気持ちが良いのに。
吉川君……ネコ耳を触るの凄く上手い。
あ……あぁ……。そこ……そこ……ヤバい。
見事にツボを押さえてくるから、堪らなく気持ちが良くて。

身体の力が抜けてしまい、吉川君の方に倒れ込む。
それでも止めてくれない吉川君。今や僕は息をするのも必死だ。
吉川君の片腕に支えられながら、もう片方の手でネコ耳をこねくりまわされる。
もうダメ……意識が持たない……。

＞ｉ３０４５８―２３１＜

天才君〈ハル編2〉　★（前書き）

そういえば、この場面の挿絵があったのに……
違う挿絵を使ってる。（笑）

天才君〈ハル編2〉　★

遅い……。いくらなんでも遅すぎる。
お姉ちゃんがジュースを買いに行って、一時間は経過した。
それなのに未だに音沙汰なしだ。
すでに次の授業が始まっている中、どうしようかと考える僕。

菊池さんは何やら真剣に悩んでいる。
何を悩んでいるのだろうか？
どうせ吉川君を追い払う作戦でも考えているのだろうな。

時間が刻々と過ぎる中、流石に痺れを切らした僕が、学園のパンフレットを用意する。
五円玉に紐を通して、それ以上は語らない。
語っても仕方がないだろう。やる事はいつもと同じだ。

いつもと同様のノリで、お姉ちゃんの居場所を確認。
校舎のこの部分……。でも、何階だ？
この方法で物探しをする際、一番厄介な事。高さがわからない……。
だから、嫌なんだよ。ビルとか学校とか、そういう高さのある建物は……。

文句を言いながら、とりあえず近い順で探す事にする。
先生に言って、教室を出た後に、未来さんから貰った変身錠剤を口に入れる。
この錠剤、飲めば動物に変身する事ができる。
人の体質により、変身できる動物は異なるのだけど。僕が飲めばツバメに変身できる。

ツバメの方が、人の姿の時よりもスピードが速いから、楽なんだよね。
だから、僕にとっては、それなりにお役立ちアイテムだ。
薬を口にして、ツバメに変身し。お姉ちゃんを探し始める。
ただ一つ問題点を挙げるとすれば……どうやって扉を開けよう？
結構、重大な問題だな……。

飛びまわって、飛びまわって。
え？　どこにいるの！？　とか思っていたら、最後の最後に屋上にて発見だ。
何で屋上？　とか思うけど、お姉ちゃんを見て理解する。
どこから現れたのか、一緒にいるのは吉川君。

屋上にある扉の裏手、壁際に座り込む吉川君。
その膝上に座りながら眠るのはお姉ちゃん。
まったくもう……また吉川君にへばり付きながら眠って……。
こんな場面、菊池さんに見られたら面倒じゃないか。

ブツブツと文句を言いながら、二人の様子を窺う事に。
二人から少し離れた場所に座って、休憩する。
何か良い感じの場所がなかったから、地面に直接座ってる。
ツバメの姿で地面に座ってる。
傍から見たら、ツバメが地面？　みたいな顔をされそうだ。

じーっと吉川君の様子を覗き見る。
何かやらかしたら、とっちめてやろうと思うのだけど。
何もやらかさないから、とっちめられない。
思った以上に、大人しいな。

菊池さんレベルなのかと思っていたのに、そうでもないみたい。

眠るお姉ちゃんを眺めながら、嬉しそうにお姉ちゃんの頭を撫で続けている。

本当に愛おしそうに撫でるものだから、ついついこのカップルありじゃないの？　とか思ってしまう。

だけど、お姉ちゃん……元男なんだよね。これが真実。

吉川君がそれを知ったらと考えると恐ろしい。

恐ろしすぎて、逃げ出したくなる。

刻々と過ぎる時間。本当に何も起こらない。

吉川君はお姉ちゃんの頭を撫でて、たまに抱きしめたりするけど。

他の行動にはでない。

男なんだから、もう少し行動しろよ。

余りにも暇すぎて、余計な言葉が脳裏に過る。

そんな中、屋上への扉が開き、現れたのがそれなりに高齢っぽい爺さん。

だけど、キリッとしていてカッコいい。

年を取っているにも関わらず、衰退感を漂わせていない。

まるで、どこかの富豪の執事だ。

まぁ、もしかしなくても、執事なのだと思うけど……。

執事さんが吉川君の所まで歩いて行く。そして、吉川君に頭を下げる。

「坊っちゃん、午後二時から行われるパーティーにはご出席されますか？」

「行かない。それと、いい加減にその呼び方止めてくれない？　ボクはもう大人だよ。坊っちゃんなんて、背筋が寒くなるくらいに気

持ち悪い……。って、この話……過去に一万回はしたと思うけど。そろそろ学習してくれないの？」
「それでは、伊吹様。パーティーにはご欠席という形で……」
「うん、そう伝えておいて」

執事さんの言葉に対し、ぶっきらぼうに答える吉川君。
執事さんが頭を下げて立ち去ろうとする中、吉川君が呼びとめる。

「ねぇ、爺や」
「はい、何か？」
「後で買っておいてほしい物があるんだけど……。人間用のマタタビとか……ある？　何かプレゼントに使えそうな奴」
「マタタビ酒やマタタビ茶という物は存じておりますが」
「お酒はダメだな……。じゃあ、お茶の方を用意しておいて」
「はい、かしこまりました」

執事さんがもう一度頭を下げて、立ち去る。
吉川君め、お姉ちゃんに餌付けするつもりだな。
しかも、マタタビなんて……。お姉ちゃんの大好物じゃないか。
ムッとした気分で吉川君を眺める僕。
お姉ちゃんは眠ったままで、吉川君はお姉ちゃんを手放さない。
かと言って、何かが起きるわけでもなく。時間だけが刻々と過ぎて行く。

それから数十分が経過して、僕まで眠くなってきた頃に。またもや扉が開きだす。
次に出てきたのは、先程の執事さんだ。吉川君の前に出て、話をする。

すぐに扉に戻って行き、今度は玲さんを連れて現れる。
玲さんが吉川君に向いて口を開く。

「吉川様、ご無沙汰しております」
「うん……。それで、何か用？」
「大変恐縮ですが、上野様をお迎えに上がりました」
「嫌だ……と言っても引き下がらないね」
「……」
「わかったよ。だけど、ミャラちゃんを連れて行くのはボクだ。それでいいだろ？」
「はい、結構でございます」

玲さんが言って、吉川君がお姉ちゃんを抱きかかえる。
吉川君が立ち上がり、玲さんと一緒に屋上から立ち去る。
さぁ、僕も立ち去ろう。
羽を広げて優雅に空を飛ぶ。
うん？　何だ、あれは……？
向こうから黒い影が飛んでくる。
マッハの如く近づいてくる恐怖の大王は……。
いやー！　カラスだー！！

＞ｉ３０６５９―２３１＜

眠い……気持ちがいい。誰かに抱きかかえられている気がする。
誰だかわからないけれど、暖かくて気持ちがいい。
ふぅ……もっと寝たい。寝たいけど、少しずつ意識がハッキリしてくる。
重い目蓋を開くと、目に映るのは吉川君の顔。何だか不満げに誰かと話をしている。

えっと……僕は何をしていたんだっけ？
あぁ、そうだ……。ウサギを探していたんだ。
ウサギが……いなくなって。早く見つけないと、まだ頭の回転が遅い中、僕が小さく口を開く。

「ウサギは……？」
「ミャラちゃん、起きちゃったの？」吉川君が驚きながら僕に目を向ける。
「ウサギ……いなくなった」
「ウサギは見つかったよ。ミャラちゃんが見つけたんだ。覚えていないの？」
「見つかった……？」
「そうだよ。ミャラちゃんが見つけて……。ミャラちゃんの知り合いの……黒いコートを着た人が助けてくれたんだ。どう？　思い出した？」
「そう……だ……った」

あぁ、そうだ。未来が来て……話をして。
その後、職員室に向かおうとして……。寝ちゃったんだな。
確か、吉川君にネコ耳をウニウニと触られて、凄く気持ちよかった

のを覚えている。
それにしても、本当に気持ちが良かった。こんなに爆睡できたの、久しぶりかもしれない……。

このまま二度寝したいけれど、流石に迷惑だと思うから。
吉川君に声を掛けて、地面に下ろしてもらう事に。
欠伸をする僕に抱きついてくるのは瑠菜だ。
凄く不満げな顔で吉川君を睨みつけている。
相変わらずだな。と思いながら、瑠菜を構ってあげると、すぐにご機嫌になる。
フフッ……瑠菜のこういう所って、何だか可愛い。

そういえば、ハルの姿がない……。
話を聞いてみると、どうも僕を探しに行ったらしい。
じゃあ、すぐに帰ってくるかな。
ちょっと心配しながらも、授業を受けながらハルの帰りを待つ事にする。

しばらくして、教室の扉が乱暴に開かれる。
その先には、ハルの姿が。だけど、何だか凄くお疲れだ。
しかも、ちょっと不機嫌。教室中が緊迫する中、自分の席について授業の用意を始める。
そんなハルに問いかけるのは、リョウの奴。

「どないしたん、ハル君？　えらい遅かったやん」
「壮絶なバトルを繰り広げていました」
「バトル？　喧嘩でもしとったんか？」
「はい……カラスと」
「何やカラスかいな」
「カラスを舐めちゃダメです。奴らは集団でリンチしてくるのです。

まったくこっちが小さいからって、調子に乗り過ぎですよ。今度出会ったら、あの羽をもぎ取って、海に沈めてやります」

カラスと戦ってきたのかな？　よくわからないけど……。

僕が心配げにハルを眺めていたら、ハルがこちらに振り向いてくれる。

「あれ？　お姉ちゃん、いつの間に戻ってたの？　かなり探してたんだよ」

「ごめん、覚えてないの。僕、途中で寝ちゃったみたいで……。今、起きた所だから。それより、ハルは大丈夫？　よくわからないけど、カラスに襲われたんでしょ？」

「カラス如きにやられはしないよ。まぁ、足を引っ張られたのは確かだけど」

「本当に大丈夫？　怪我してない？」

「怪我をしてもすぐに治るからね。手足が吹っ飛んでも生きていたんだから、そんなに心配する事ないって」

「うん……そう……。でも、あまり無茶はしないでね」

「……」

最近のハルは無茶をするから、心配だ。

いくら人間よりも強いからって、元はお札なんだから。

少しは自分の身体をいたわって欲しい。

それに、怪我をしても大丈夫なんて言っているけど。

本当は魔力を大量に消費してしまうから、それなりに危険だ。

ハルの身体はお札と魔力でできているんだから、魔力がなくなれば壊れてしまう。

その事はハルの方が詳しいくらいだ。わかっている癖に本当にもう……。

考えれば考える程に不快な気分になってくる。
僕がプーっと膨れていたら、僕の机で一緒に授業を受けている瑠菜が声を掛けてくる。

「どうしたの？　上野？」
「ハルが無茶をするから怒ってるの。最近は特に酷いんだよ。もう～、何考えてるんだろうね？」
「ねぇ、ミャラちゃん……」不意に口を開くのは吉川君。
「うん、何？」

僕が振りかえると、吉川君が問いかけてくる。

「ミャラちゃんと弟さんって、実の兄弟？」
「ううん、違うよ。ハルはね、少し前に僕の家にやってきたの。その頃の僕は人と会うのが嫌で仕方なかったから、鬱陶しいのが来たな。とか思っていたんだよね。だけど、ずっと一緒に暮らしているうちにね。それが当たり前になってきて……」

今考えると、僕がこんなに明るくなったのもハルのおかげだな。
ハルがいなければ何も始まらなかっただろうし、僕はずっと一人であの頃の生活を送っていたのだと思う。
不幸も幸せもない生活。安定はしているけど、刺激のない生活。
本当に生きるという事は、今みたいに刺激の中で生活する事なのだろう。
今になって、そう思う。うん、幸せ……幸せだ。
じっと一人で考え込んでいたら、心配そうな瑠菜の声が聞こえてくる。

「大丈夫、上野？　泣いているの？」

「へ……？　あぁ……嬉し涙。フフッ、幸せだなって思ってるの。これもハルのおかげだね。ハルのおかげで、今の僕は凄く幸せなの……」

僕がヘラヘラ笑っていたら、隣からハンカチが飛んでくる。
横を向くと、ハルが恥ずかしげに黒板を見ている。そんなハルが口を開く。

「もう……気恥ずかしいな。よくまぁ、そういう事をこんな場所で言えるね。さっさと涙を拭いて、授業を受けなよ。大体、僕はお姉ちゃんのためにここへ来たわけじゃなくて。自分が暇だから遊びに来ただけで……」
「ツンデレだ」
「うるさい！　あー、もう！　先生の声が聞こえないから静かにして！」

そう言って、ノートに文字を書きだすハル。
えへへ、怒られた……。僕が嬉しそうにしていたら、吉川君がぼそりと呟く。

「仲……いいね」
「そうね……」

続いて、瑠菜。あれ？　二人共なんだか不機嫌？
どうしたんだろう？　また喧嘩？
ちょっと機嫌が悪そうな二人の様子を見て、オロオロしながら授業を受ける僕。
うーん、人間って難しい……。

天才君〈ハル編3〉　★（前書き）

目が痛いイラストです。
凝視はきっと目に良くない。

天才君〈ハル編3〉　★

まったく……。お姉ちゃんが変な事を言うから、鬼神達に睨まれたじゃないか。
鬱陶しい視線を感じながらも、授業に集中する僕。
そろそろ集中できそうになってきた頃に、授業が終わる。
何だか物足りない。何せ、途中参加だったから。

少し長い休み時間に入り、教室中が騒がしくなる中。
教室に入ってくるのは、先程の執事さん。
手にはオシャレな紙袋。
執事さんが吉川君に近づく前に、お姉ちゃんが反応する。

タタタタッと執事さんに近づいて、紙袋に興味津々だ。
クンクンと鼻を動かしながら、物欲しそうに紙袋を眺める。
そして最後は、じーっと執事さんを見上げながら、子猫のように瞳を輝かせる。
そんなお姉ちゃんを見て、身動きの取れない執事さん。
前に進もうにもお姉ちゃんが邪魔だ。
執事さんが困り果てていたら、吉川君が二人に近づいて行く。

「ありがとう、爺や。それにしても、ミャラちゃんは気が早いね」
「何？　これは何？　何が入ってるの？」とにかくお姉ちゃんは中身が何なのか知りたいらしい。
「フフッ、ミャラちゃんにプレゼントしようと思って。買ってきて貰ったんだ」

吉川君が執事さんから紙袋を受け取ると、執事さんが引き下がって行った。

そのまま吉川君がお姉ちゃんに紙袋を手渡す。
「開けてみて。気に入ればいいのだけど……」
「わぁ、ありがとう！」
プレゼントを貰って大喜びのお姉ちゃん。
早速、中身を開けるのかと思いきやそうではない。
紙袋に顔を突っ込んで、クンクンクンクン……。
麻薬中毒者じゃないんだから止めてほしい。僕がお姉ちゃんに注意をする。
「ちょっと、お姉ちゃん。行儀が悪いよ」
「いい香り！　凄くいい香りがするの！」
「へー、それで中身は何なんだ？」
乱入してくるのは斎藤君。プレゼントの中身を知りたいらしい。
僕は知っているから何も言わない。
お姉ちゃんが紙袋の中から、可愛らしく包装された小包を取り出す。
そしてまたもや、包装紙を開くことなく、小包をクンクンクンクン……。
クンクンクンクンクンクンクンクンクンクン……。
「じれったいわ～！」
お姉ちゃんの後ろから眺めていたリョウさんが、お姉ちゃんから小包を奪い取る。
そして、勝手に包みを開く。吉川君は不満げだけど、何も言わない。
結構、我慢ができる性質なのか？　それとも、自分もじれったく思っていたのか？

とにもかくにも、リョウさんが包みを開けて中身が明らかに。
超特選マタタビ茶セット。なかなか興味深げな……。
これが緑茶セットだったなら、僕が飛びつくところなのだけど……。
マタタビ茶だから自重できる。
品物を目にして、リョウさんが声を出す。

「へー、こんなんあるんやね。おもろいなぁ～」
「あー、あー、あー……」

もの凄く物欲しげなお姉ちゃん。
そんなお姉ちゃんに、リョウさんがセットの中身を一つ手渡す。
マタタビ茶三十パック入りの一パック。要するに、マタタビ茶一人前の茶葉。
こんな些細な量でもお姉ちゃんにとっては特別だ。
必死になりながら、クンクンと鼻を動かし、もの凄く嬉しそう。
そんなお姉ちゃんの姿を見て、吉川君が口を開く。

「ミャラちゃんは本当にマタタビが好きなんだね。そんなに気に入ってもらえるなんて思ってなかったよ」
「ふぅ……みぃ……」

お姉ちゃん……聞いちゃいない。いや、正しくは聞こえちゃいない。
吉川君の言葉なんて蚊帳の外。今はマタタビ茶以外に興味がない。
余りにもお姉ちゃんがマタタビ茶に夢中なので、吉川君は対応に困っているみたいだ。

こういう時の対応術に優れているのが菊池さん。
いつの間に現れたのか、玲さんが手に持つ丸盆（まるぼん）の上にはお茶を淹れ

るための食器。
しかも、既に茶杯（ちゃはい）の中にはお茶が用意されている。
そのお茶の茶葉はどこから……？

ふとリョウさんのいた場所を見ると、近くの机の上にお茶セットの残骸が……。
残骸っていうか、もう箱だけになっていて中身がない。
え……？　あの茶葉達はどこへ行ったの？
菊池さんが使用したと考えても、全部はなくならないはず……。
僕が眉をしかめていたら、不穏な空気が辺りを包む。
菊池さんと吉川君の睨み合いだ。

バチバチと睨み合う中、菊池さんが丸盆の上に乗る茶杯を手に持つ。
そして、茶杯を口に付けて。一口飲んだ後に、吉川君に目を向ける。

「あら、美味しい。わざわざ皆のために、プレゼントなんて用意してくれて。あ・り・が・と・う」
「……」

もの凄く厭味ったらしい菊池さんの口ぶりに、怒りの表情を浮かべる吉川君。
ぶちぎれるような怒りじゃなくて、冷やかな怒り。
吉川君、マジ切れした時は黙るタイプらしい。

今にも戦争が起きそうな場面で、お姉ちゃんは何をしているのかと言うと。
菊池さんの方をじっと見て、クンクンクンクン……。
あ……マズイな。まぁ、菊池さんもそれを狙っていたのだろうけど。
お姉ちゃんが菊池さんに近づき、キスをする。

菊池さんは驚く事もなくお姉ちゃんにキスをされてうっとり。
もちろん、吉川君にとっては面白くない。
面白くなさ過ぎて、二人から目を逸らす。
お姉ちゃんと菊池さんはラブラブだ。
子供には見せられないキスを繰り広げている。

時間経過と共に、悪化していく吉川君の苛立ち。
腕を組みながら、指をトントンと動かしている。
お姉ちゃんを菊池さんに奪われて、どうにも落ち着かないようだ。
最後は、独り言のように呟く。

「帰る……」

教室から出て行こうとする吉川君。
それを狙ったかのように現れるのは、バケツを手に持つリョウさん。
教室の廊下から颯爽とスライドしてきて、扉の前に立ち口を開く。

「よっしゃ出来たでー！」

口を開くと同時に、手に持つバケツを思いっきり振り上げる。
遠心力の付いたバケツは、リョウさんの手から離れて、宙に舞う。
クルクルと回転し、向かう先は吉川君のいる場所。

吉川君の頭にバケツがジャストヒットして、中に入っていた水がザッパァー！
やろうと思って出来る業じゃない。
これが芸でも奇跡物だ。
その場面を見ていた斎藤君が感心したように口にする。

「おぉー！　すげーなぁー！」
「お見事です」

僕が続ける。ふと気が付くと無意識のうちに拍手をしていた。
うわぁ、ＫＹさんレベルだ。
すぐに拍手を止めて、手を後ろに回す。

バケツをかぶった吉川君は半端なくお怒りであろう。
だって、口が引きつって、手が震えている。
今にも、『ここにいる奴らを皆殺しにしろ！』って、護衛の人に命令しそうだ。

菊池さんの笑い声が止まらない中、吉川君が頭にかぶったバケツを手に取る。
それをロッカーの上に置いて、髪留めのゴムを外す。
首を振って水気を飛ばし、教室中を睨み回す。まるで世界を恨むかのように……。
おかげ様で、先生が教室に入った途端に出て行った。
見て見ぬ振りして、出て行った。
ちょっと先生、こういう時こそ先生が必要なんじゃないですか？
なんて言っても、ビビって首を横に振られるだけだ。

うわぁ……重い空気。吉川君……帰るなら早く帰ってくれ。
じゃないと、息苦しくて堪らない。
困ったなと思いながら、ふと横を向くと、菊池さんに続く変わり者が。
ケラケラ笑い転げる菊池さんとは別に、お姉ちゃん……もの凄く目を輝かしながら。
それがもう本当に、猫がネズミを見つけた時みたいに瞳孔を開かしながら、吉川君をガン見。

だって、吉川君に振り掛ったのは大量のマタタビ茶だろうから。

行ってらっしゃい、心の中でそう言って、心の中で手を振る僕。
もう止めはしない。というか、今は止めれない。
だって、吉川君が余りにも不機嫌なんだもの。
お姉ちゃんが行ってくれれば、少しはご機嫌になってくれるだろう。

突撃開始！　お姉ちゃんが吉川君の元へと走り寄って、スーパージャンプ。
よくまぁ、こんなにもジャンプができるな。と思うくらいに、高くジャンプをしながら、吉川君を押し倒す。
不意打ちを食らった吉川君は、地面の水で滑って転んで、仰向けだ。
その上にはお姉ちゃん。ターゲットロックオンモード。
吉川君は怒りも吹っ飛んだのか、目を丸くしながら、お姉ちゃんを見る。

「ミャラちゃん……？」

吉川君の声に反応することなく、お姉ちゃんが行動に出る。
ペロンッと吉川君の唇を舐めたかと思えば、吉川君の顔中を舐めまわす。
というか、吉川君を舐めまわす。
服も顔も首も何でも、区別することなくペロペロペロペロ。
何て恐ろしい事か、マタタビの力は偉大なり。

「ミャラちゃん……！　落ち着……っ！？　ちょっ！！　待って……！」

吉川君が騒いだところで、お姉ちゃんは止まらない。
吉川君を舐めまわしては、顔や身体を摺り寄せて。

ちょいエロいんですけど、気のせいですか？
いや、気のせいじゃないだろう。だって、顔を赤らめながら眺めている人がいるし。
というか、ファンの人達なんてどさくさにまぎれて携帯で写真を撮っている。
お姉ちゃんファンか、吉川君ファンか……どちらかはわからないけれど。
結構、お姉ちゃんのファンとかもいるんだよね。世の中は謎だ。

菊池さんがお姉ちゃんを止めようとするけれど、お姉ちゃんに威嚇される。
流石にやり過ぎだと思い、僕が手で抑え込もうとしたら、お姉ちゃんに噛みつかれた。
『フー！』とか唸りながら……。
まぁ、甘噛み程度なので、血は出なかったけど。かなり頭にくる。

仕方がないから、おずおずと教室に入ってきた先生に授業開始を薦める。
え？　お姉ちゃん達？　もちろん、放置だ。だって、噛みつかれるもの。
菊池さんが面白くなさそうな顔で膨れ上がる中、お姉ちゃんのゴロゴロと言う声が聞こえてくる。
ちなみに、吉川君は瀕死状態。もう声も聞こえない。

＞ｉ３１３５５―２３１＜

天才君〈ハル編４〉

三時間目の授業が終わりに差し掛かった頃、後ろを振り返ると。
上体を起こした吉川君が、座ったままロッカーにもたれかかり、ボーっとお姉ちゃんを眺めていた。
お姉ちゃんは吉川君の膝上に寝転び、吉川君の手の指をくわえて眠っている。
きっとあの手を引くと、別の場所をペロペロ舐め始めるのだろう。
一時間近くお姉ちゃんに襲われ続けた吉川君の最終手段だ。

ちなみに、菊池さんはふて寝中。
吉川君にお姉ちゃんを取られて不愉快らしい。
というか、この二人……どこか似ている気がするのは僕だけか？
兄弟だと言われたら、普通に信じてしまいそうだ。

チャイムが鳴り、三時間目の授業が終わる。
ぞろぞろと集まってくるのは、余所のクラスの生徒達。
吉川君が乱入した事により、このクラスの株は上がっている。
まぁ、それ以前から人気クラスだったけどね。
だって、色々と物珍しい人達が揃っているから。
だから、余所のクラスの生徒達にとっては、見物する価値があるクラスなのだ。

それにしても、凄い廊下の人溜まり。これで、吉川君の人気度が明らかになる。
お金持ちで天才君。王子様キャラは女子生徒を呼び込むらしい。
菊池さんの時は男子生徒が多かったのかな？
その頃には、僕達はまだ生徒じゃなかったから、よくは知らないのだけど。

でも、菊池さんもお姫様みたいなものだから。きっと凄い事になっていたと思う。

廊下でざわめく生徒達。何を見て騒いでいるのかは一目瞭然だ。
吉川君とお姉ちゃん……。この奇妙な組み合わせに驚いているのだろう。
昨日もかなりの数の女子生徒がキャイキャイ騒いでいたからなぁ……。
お姉ちゃんを男だと知っているだけに、却って、話が盛り上がるらしい。
漫画研究部とか行ったら、えらい事になっていそうだ。
恐ろしくて想像するのも嫌だけど……。

だけど、本当に……。誰か吉川君に教えてやれよ。
お姉ちゃんの真実を。何で誰もが黙っているのだろう？
菊池さんもそれで攻めれば勝てるんじゃないの？
とか思うのに、その話は持ち出さない。何か裏があるのだろうか？
まぁ、そういう僕も話さないけど。だって、今更話せないし……。

僕が変な推理をしていたら、菊池さんが吉川君の前に立つ。

「上野を返して」
「返せって言われても……」

ブツブツ言いながら、吉川君がお姉ちゃんの口から指を引くと。
お姉ちゃんが目を覚ます。
そして、うにうに言いながら吉川君にすり寄って、今度は吉川君の袖をかじりだす。
そんなお姉ちゃんを見て、菊池さんが不満げに吉川君を睨む。

「このままじゃあ、上野が風邪を引くわ」
「うん、そうだね……」

吉川君が頷いて、珍しく菊池さんの意見に理解を示す。
まぁ、びしょ濡れの吉川君にすり寄っているんだ。
もちろん、お姉ちゃんもずぶ濡れ。
下手すりゃ、下着が透けて見えそうなくらいに濡れている。
最近のお姉ちゃんは破廉恥だな。吉川君がお姉ちゃんを揺さぶり起こす。

「ミャラちゃん、起きて。着替えないと風邪を引くよ」
「みゅ～」
「ほら、起きて。ミャラちゃん」

吉川君のおかげでなんとか目を覚ましたお姉ちゃんが、もの凄く眠たげに吉川君をじっと見つめる。
あ、目を瞑った。しかも、ゴロゴロ言ってる。
そんなお姉ちゃんに吉川君が口を開く。

「バカ嬢が服を用意してくれているみたいだから。それに着替えて。風邪を引く前にね」
「みゅ～」

未だに寝ぼけているお姉ちゃん。
目の前の吉川君をお母さんと見間違えたのか、吉川君の顔に自分の顔を近付ける。
そのまま唇にキスをする。
軽いキスだけど、お姉ちゃん……少しは状況を理解してほしい。
真っ赤になる吉川君と怒りだす菊池さん。
その後すぐに、お姉ちゃんは菊池さんに連れて行かれた。

どこかで着替えさせるつもりだろう。
もしかしたら、先程の行動について、お仕置きされるかもしれない。
まぁ、その辺は好きにしてもらおう。

吉川君はいつの間にか現れた執事さんからタオルを受け取り、服の上から軽く身体を拭きながら教室を後にした。
こんな所で着替えるつもりはないらしい。
天才は天才なりのプライドがあるのか？
まぁ、とにもかくにも出て行った。
やっとのことで教室が静かになる。

だけど、一つ問題が……。ぐしょぐしょに濡れた教室の地面。
これは誰が掃除するの？　もしかして、セルフサービス？
僕が眉をしかめていたら、リョウさんが口を開く。

「ちょい、掃除くらいしていってーや。誰やねん、こんなんした奴は？」
「リョウさんですよ。さっきバケツをひっくり返していたじゃないですか」と松元君。
「全部、リョウの責任だな。そういうわけで、掃除頑張れよ」斎藤君が続ける。
「マジかいなー」

残念そうな声を出しながら、リョウさんがロッカーからモップを取り出す。
真面目に掃除をするらしい。これでやっと日常の風景か？
とにかく、お姉ちゃんが帰ってきたら注意しよう。
ちょっと本気で注意しよう。
このままじゃあ、お姉ちゃん……菊池さんどころか、吉川君にまで犯される。

天才君〈瑠菜編〉　★（前書き）

楽をしようとした結果
イラストが崩壊しています。

もう……よりによって、どうしてあいつが現れるのよ？
しかも、上野にちょっかいを出すし、面白くない。
ここは菊池家の屋敷、上野の部屋。
私が不満げに膨れていたら、上野が後ろから抱きついてくる。

「だーれだ？」
「う・え・の」
「あったり～」

楽しげに身体を摺り寄せてくる上野。
私が振りかえって、上野の顔を見る。

「まさか、上野……。こういう事をあいつにまでしていないわよね？」
「あいつって？」
「あの天才お坊ちゃま」
「吉川君？」
「そうよ。あいつにこうやって、挑発したりしていないわよね？」
「ん～……」

上野がうやむやな返事をしながら、ベッドに向かい、布団の中に潜りだす。
その動きを見て、すぐに悟る。
上野の奴、あいつにまでこういう事をしているの！？
ベッドに近づき、布団の中に手を突っ込んで、上野の尻尾をきつく掴む。
すると、上野が叫び出す。

「みゃあん！　痛い！」
「駄目じゃない！　上野がそういう事をするから、あいつが近づいてくるのよ！」
「瑠菜は怖い～。すぐに僕を苛める～」
そういうつもりじゃないのに……。
私はただ心配しているだけなの。
尻尾を掴む手を離して、少し布団をめくって、中にいる上野に声を掛ける。
「上野、出てきて」
「苛めない？」
「苛めないから」
「ん～」
上野が布団の中から、顔を覗かせる。
首を傾げて、可愛い目つきで私を見つめる。
当初は凄く不機嫌な表情ばかりしていたけど、最近はこういう表情を見せてくれるようになった。
少しは気を許してくれたのかしら？　私が上野に話しかける。
「上野に一つ言っておくけど。あなた、今は女の子なのよ。あのお坊ちゃまにベタベタしていたら、気があると勘違いされて、襲われちゃうわよ」
「そんな事ないよ。吉川君はそんな事しないよ」
「そんなの、わからないじゃない」
「ん～」
どうしてか、上野は腑に落ちないみたい。

首を傾げながら、私から目を逸らす。
そんな上野の頬に手を伸ばし、上野の顔をこちらに向ける。
そして、上野にキスをしたら、上野が大人しく私にしがみ付いてくる。

いつものように、心地の良い気分に浸る私から顔を離して、上野が口を開く。

「瑠菜は心配し過ぎなの。そんなに心配しなくても大丈夫だよ」
「そんなの……わからないわ」
「大丈夫だよ。だって、僕は男だよ。吉川君に恋するわけないじゃない」

上野がヘラヘラと笑いながら、私の額にキスをする。
私の頭を撫でながら、私をギュッと抱きしめてくれる。
上野の言葉に嘘偽りはない。だけど、それは上野が何も知らないから……。

私が上野に黙っている事……。
一つは、あいつの過去について。一つは、あいつの未来について。
この二つの話を知ったなら、きっと優しい上野の事だから、なんとかしようと行動に出るはず……。

本来なら、あんな奴を上野に近付けるのはもってのほか。
全力を尽くしてでも、追い払うのだけど。
全てを理解している私には、それができない。
だから、あいつに上野が男だという真実も伝えられない……。

今年は上手くいくかしら？
もう諦めていた事だけれど……。

今年は異常だから、もしかしたらと期待をしてしまう。

私を抱きしめながらゴロゴロと喉を鳴らす愛猫。

上野には、不思議な力を感じる。

普段から上野の周りで起きる出来事は、日常から離れた世界。

そんな上野の側にいたなら、恐ろしい現実から免れる事ができそうで……。

＞i32106―231＜

寝言〈ハル編〉

とある日の昼休み、お姉ちゃんに用があり、探すのだけどどこにもいない。
仕方がないので、僕専用の探知機を使って、お姉ちゃんの居場所を確認。
バタバタと走り回っていたら、図書室に辿り着く。

そういえば、歴史の授業で調べ物があるとかなんとか言っていたな。
図書室に入ると、図書室特有の空気が鼻をかすめる。
奥へと進み、角を曲がると知った背中を発見。

吉川君に菊池さん……二人して地面に座りながら、何かを覗きこんでいる。
近づいてみると、二人の前でお姉ちゃんが熟睡していた。
地面に寝転びながら、小さく丸まっている。

不意に菊池さんがお姉ちゃんに手を伸ばす。
菊池さんの手がお姉ちゃんの頭に触れると、お姉ちゃんから唸り声が……。
『ウ～』……猫というか、犬。
菊池さんが手を引っ込めて、吉川君と一緒にお姉ちゃんを眺める。

菊池さんが手を引くと、お姉ちゃんが静かになる。
そうしたら、今度は吉川君が手を伸ばす。
吉川君の手がお姉ちゃんに触れると、先程と同様にお姉ちゃんが唸りだす。
そして、吉川君が手を引っ込める。

何だ、この光景は？　流石に僕が口を開く。

「何をしているのですか？」

「上野が眠っているの……。可愛いから眺めているのよ。だけど、手で触れると唸りだすの」と菊池さん。

「二人共、静かにして。ミャラちゃんが起きちゃうよ」

吉川君が僕達に注意を促す。そのまま静寂が訪れて……。

しばらく経つと、今度はお姉ちゃんの手足がピクピクと動きだす。口はモグモグ動いて、何かを食べているみたい。

不意に菊池さんが問いかける。

「夢でも見ているのかしら？」

「夢を見ているのなら。草原を走り回って、ご飯を食べる夢ですね」と僕。

「まるで野生動物ね」

僕と菊池さんがお喋りをしていたら、急に吉川君がお姉ちゃんの頭に手を近付ける。

頭を撫でるつもりだろう。しかし、吉川君の作戦も無念に。

何かの気配を感じたのか、途中でお姉ちゃんが吉川君の指にかぶりつく。

と言っても、歯を立てるわけではなくて。カプリッと口に銜（くわ）える程度。

吉川君は炎上しながら、停止。

お姉ちゃんはモグモグしている。強く噛む事はないけれど、モグモグしている。

食べ物をゲットできた夢でも見ているのだろう。何だか幸せそう……。

今度は菊池さんがお姉ちゃんの喉を撫でる。
そしたら、お姉ちゃんがゴロゴロと音を立てる。
何とも穏やかな空気の中、お姉ちゃんから妙な鳴き声……。

「キュ～～～～～～」
「……」

お姉ちゃんの鳴き声に、皆が静まり返る。
吉川君が首を傾げ、菊池さんが僕を見る。
いや、僕に目を向けられても困りますよ。知りませんよ。今の声は何なのですか？
困り果てた僕は、眉をしかめながら、お姉ちゃんの頬を突く。

「みゅい？」

お姉ちゃんが不快そうな表情を浮かべ、僕はお隣二名に睨まれる。
一方的に僕が悪者扱いされるけど、関係ない。
こんな所で寝られたら、他の人に迷惑だもの。
お姉ちゃんを突きまわしていたら、お姉ちゃんが目を覚ます。
吉川君と菊池さんが手を引いて、お姉ちゃんがゆっくりと上体を起こす。

「みぃ……お昼ご飯は？」
「ついさっき食べたじゃない」
「……これは夢だ」
「違うよ。二度寝しないで。もう授業が始まるし、お姉ちゃんに聞きたい事があるんだから。早く頭を回転させて、目を覚ますの」

うにゃうにゃと文句を言うお姉ちゃんを叩き起こす。
菊池さんと吉川君が不機嫌になる中、お姉ちゃんが寝ぼけた事を言う。

「さぁ、お昼ご飯は何にしようかな?」

吉川君が来てから、数日後に大事件が勃発する。
バカな未来がやってきて、何を思ったのか。
吉川君とハルを拉致して、狭間で肝試しを始める。
しかも、運悪く災害に遭い、三人が散り散りになる。

なんとか三人共に、生きて帰ってこられたのは良かったのだけど。
ハルは魔力の消費が激しく子どもの姿に戻っているし、吉川君には特殊な力が備わっていた。

吉川君についた力は、異常なまでの超治癒力。
傷を負っても、ほんの数分で治ってしまう。軽い傷なら、数十秒だ。
どう考えても人間ではあり得ない事。
話を聞いてみると、狭間で間違えて奇妙な物を食べてしまったらしい。

しかも、結構危険な物だそうで。狭間の住人の話によると、食べる事はあまりお勧めできないらしい。
といっても、上手くいく場合もある。
まぁ、その確率が一割にも満たないらしいので。
あまり期待はできないという事だけど……。

こんな事件が起きた翌日。教室にて、不安な気持ちで吉川君を待つ。
昨晩に吉川君から電話があった。
何か起きたらすぐに連絡してと、僕の方から言ってある。
それで連絡してくれたんだ。

吉川君が家に帰ってからも、奇怪な出来事が起きたらしい。
電話で聞いた話だと、暗闇で身体が光るとか言っていた。
どういう意味だろう？
じれったく待ち続ける僕の膝上で、子ども姿のハルが口を開く。

「お姉ちゃんどうしたの？　気分悪いの？」
「ううん、僕は大丈夫だよ。ただ……吉川君の事が気になってね」
「お姉ちゃんは吉川君の事が好きなの？」
「うん、好きだよ。凄く話しやすくて気が合うね。友達としては大好きかも。例えて言うなら、江川先生みたいだね」
「あー、お姉ちゃんはおバカなのー」
「え？　何で？」

僕が首を傾げていたら、背後からブラックオーラが……。
瑠菜が来た事を悟り、ハルの頭を撫でながら口を開く。

「だけど、瑠菜も大好きだよ。初めは憎たらしかったけど、最近は可愛く思えるんだ。洗脳されたのかな？」
「そうかもー。お姉ちゃんは洗脳に弱いのー。最後はお姉ちゃんでＳＭ系のドエロゲーを作れそうなの。きっといろんな人に振り回されて、大変な事になるのー。だけど、お姉ちゃんが大変な事になったところで、周りの人は喜ぶだけなのー」
「子どもがそういう話をするんじゃありません」ハルの頭を軽く小突く僕。
「あーん！　お姉ちゃんが叩いたー！」

泣きだすハルの頭を撫でながら、後ろを振り返る。
ちょっと恥ずかしげな瑠菜の姿が目に入る。そんな瑠菜に笑顔を向ける。

「おはよう、瑠菜」
「おはよう、上野……」
「あれ？　今日は髪型が違うね。どうしたの？」
「えっと……ちょっと気分を変えてみようかと思って」
「フフフッ、凄く可愛い。何だか大人びた感じだね。瑠菜って、そういうイメージなかったけれど。こうやって見ると、凄く似合ってる。黙っていれば、日和みたい」
「黙っていなきゃダメなの？」
「そんなことないよ。喋らないと瑠菜らしくないもの」

ちょっと膨れ上がる瑠菜に、そう言ったら、瑠菜が両手を伸ばしてくる。

「私も構って。昨日の夜は一人で寂しかったの」
「瑠菜は寂しがり屋さんだね。そんなに寂しいのなら、誰かに側にいてもらえばいいのに……」
「上野がいいわ。上野が側にいて」
「ずっとは無理だよ。できる限りの努力はしているんだけどなぁ……」
「じゃあ、私も上野の家に泊まるわ」
「だーめ。そんなの却ってややこしいから。ねぇ？　ハル？」
「お姉ちゃんはお母さんとイチャイチャしたいから、そんな事を言っているの」

ハルが余計な事を口にして、瑠菜が不機嫌になる。
ハルを押しのけて、僕に抱きつき、じゃれてくる。
僕の身体を撫でまわして、身体が熱くなるようなキスを繰り広げて。
僕は瑠菜の言いなりに……。今更抵抗できるわけない。
はぅ……凄くドキドキする。あぅ……凄くゾクゾクする。
僕がされるがままになっていたら、不意に声が聞こえてくる。

「何してるんだ？　バカ嬢」

顔を上げると、何だか不機嫌な吉川君が目に入る。瑠菜が僕に抱きついたまま、口を開く。

「上野とイチャイチャしているのよ。見てわからないの？」

「学校でそういう事をするのはどうかと思うけど……」

「あら？　嫉妬？　上野を取られてそんなに悔しいのなら、あなたもすればいいじゃない。まぁ、そんな度胸はないでしょうけど」

瑠菜の言葉を聞いた途端に、吉川君が炎上する。すぐに激しい口調で怒鳴りだす。

「大体、お前はデリカシーがなさすぎるんだ！　ミャラちゃんの気持ちも考えてみなよ！」

「上野だって楽しんでいるわよ。そうよね、上野？」

「み……みぃ～」

返答に困った時の必殺技。ニャーニャー言って誤魔化す作戦。

僕がオロオロしていたら、急にハルが乱入してくる。

「そういえば、吉川君……。昨晩、お姉ちゃんに電話していましたよね？」

「上野に電話？　まさか上野に変な事を吹き込んだり……」急に吉川君を疑いだす瑠菜。

「あぁ、あれね。あの後、ちょっと問題が起きて……。まぁ、大した事じゃないんだけど……」

不満げな瑠菜を無視しながら、吉川君が話をする。僕に向いて、

続きを話す。

「まぁ、とりあえず……伝えておこうと思って。ボクにもよくわからないし」

そう言って、指を鳴らすと、どこからともなく黒い板を持った黒スーツの人がゾロゾロと出現する。

こちらは吉川君の護衛達の人だろう。

正直に言って、菊池家と吉川家の護衛の人達を区別する事ができない。

だけど、本人達にはわかるのだろうな。

凄いな、僕にはきっと無理だ。唯一わかるのがリチャードだけ……。

黒スーツの人達が、教室中の窓に板を張りつけて、カーテンを閉める。

光を遮断しているみたい。

何をしているのか理解できていない生徒達はちょっと不安げ。

皆で顔を見合わせている。

扉に窓、外からの光を全て遮断した後に。

吉川君が教室の電気スイッチに目を向ける。

そこには、いつの間に来たのか執事さんが立っていた。

執事さんが灯りを消して、教室中が真っ暗になる。

だけど、一つ……灯りの点る場所。

皆が皆して、吉川君に釘付けだ。

この暗闇で、唯一の灯りが吉川君自身。

人の身体が光るなんて……どう考えてもあり得ない話。

それが今、現実に起きている。

吉川君の身体は、服を含んで、薄らと白い輝きを放っている。
眩しい程に強くはない。ぽうっとした光。
夜中に見たら、幽霊と勘違いしてしまいそうだ。
それくらいの淡い輝き。
薄らと光を放つ吉川君の姿を見て、瑠菜が口を開く。

「あら、電気スタンドにもなれるなんて。流石は天才ね」
「黙れよ、バカ嬢」瑠菜に向いて怒りを表すのは吉川君。
「これは問題ですね……」

僕の隣で、ハルが口を開く。瑠菜を睨む吉川君に対して、意見を述べる。

「少し光が弱いです。もう少し明るくなってもらわないと、周りが見えな……」
「ボクは照明器具じゃない！」
「そんなに怒鳴らないで下さいよ。まぁ、いいじゃないですか。怖い顔の人が光っていたら、叫ばれるかもしれませんが。吉川君が光ったところで、どこかの王子様が来たと勘違いされるだけです。まったくもって問題ありませんよ」
「問題だよ……。こんなにピカピカ光っていたら。夜中の散歩に支障がでるじゃないか。せっかく誰にも発覚されずに、散歩できる時間帯を見つけたのに……。チロとボクの自由時間がなくなってしまうなんて嫌だよ」
「坊っちゃん、今のお言葉は誠でございましょうか！？」

執事さんが吉川君に近づいて、問いかける。
そんな執事さんに顔を向けずに、吉川君が答える。

「そうだよ。昼間は一人になれる時間なんてないもの。心配性の爺

やが目を光らせているからね。ボクには私的な時間がないんだ。この歳になって、まだ護衛がついているなんて……。自分の身くらい自分で守れるし、必要な時には連絡を入れるから。せめて付きまとうのは止めてほしいよね」

「何を仰っているのですか!?　もしも、坊ちゃんの身に……」

「危険が迫ったら、自分でどうにかするって。これでも体術や護身術は色々と習っているし。爺やだって、センスがあるって褒めてくれたじゃないか。もういいでしょ？　少しくらいは一人にさせてよ」

「駄目です！　昨日の件もございますし、何よりも坊ちゃんは……」

執事さんの話を聞かずに、吉川君がため息をつく。

「あー、わかった、わかった。これだけ言っても聞かないのなら、諦めるよ。まぁ、初めから期待はしていなかったけどね。そういえば、バカ嬢の所はどうしているの？」

「私の所は玲がしつこいわ……。黒松の時は、結構自由がきくのよ。だから、玲に用事がある時はちょっと嬉し……」

「お嬢様、何か？」

瑠菜の背後から、玲の声。すぐに瑠菜が黙り込む。

瑠菜の言葉を聞いて、吉川君が腕を組みだす。

「成る程、二人制か。それは名案だね。だけど、ボクの相手は老人だからなぁ～。日がな一日、暇を持て余しているし。こうなったら、老人ホームにでもぶち込んで……」

「坊っちゃんー！」ショックを受ける執事さん。

「冗談だよ、冗談。ボクがそんな事をするとでも思ってるの？」

「……」

執事さんが黙っている。ちょっと信用がないみたい。

うーん、吉川君ならやりかねないかな？　まぁ、きっと大丈夫だとは思うけど。

　不意に吉川君が、電気スイッチに目を向ける。すると、すぐに灯りが点る。

護衛の一人が点けたようだ。執事さんじゃない。

だって、執事さん……吉川君の言葉に落ち込んでいるから。

黒スーツの人達が黒い板を撤去して、いつもの教室が戻ってくる。

仲裁〈ハル編〉　★（前書き）

上野は何を目指しているのだろう？

仲裁〈ハル編〉　★

とある日曜日、皆でテレビ局へ行き、大事件が勃発する。
そこで起きたのは吉川君の体調不良。次いで、色々と騒ぎが起きる。
結局の所、吉川君が狭間で食べた物が原因だった。

未来さんが言うには、それは幻獣の卵らしい。
吉川君が体調を崩した時に、卵が孵ったそうで。
今後、命の危機に見まわられることはないという。
ちなみに、吉川君の中で孵ったのはペガサスらしい。

その日以来、吉川君は魔力の使い方をマスターして。
バリアーを張ったり。背に真っ白な翼を出現させて、空を飛んだり
できるようになった。
それでなくても、凄い吉川君がどんどんレベルアップしていく。

僕的には面白くないけれど、文句を言ってどうにかなる事じゃない。
仕方がないと思って、現状を受け入れることにしよう。
そうこうしているうちに日々が過ぎる。

それから数日後。学校にて、休み時間。
飽きずに喧嘩を続けるのは菊池さんと吉川君。
この二人は一時間に一度、必ずと言っていい程に争っている。
余りにも喧嘩ばかりするから、周りの人達は慣れてしまったみたいだ。
誰もが気にせず、他の事をしている。

だけど、いくら慣れたとはいえ、うるさい事には変わりない。
工事現場よりもうるさい二人を見ていると、気持ち的に疲れてくる。
妙に嫌気を感じて、黒松さんと間違い探しをするお姉ちゃんに声を掛ける。

「ねぇ、お姉ちゃん。あの二人をどうにかしてよ。もううるさくて、頭が痛くなりそう」
「うん、わかった。二人を静かにさせたらいいんだね？」
「うん、とにかく黙らせて。何してもいいから」
「ガッテンだー」

お姉ちゃんが椅子から立ち上がって、二人に近づく。
自分の制服についているリボンを解いて……。
え？　何する気？　僕が眉をしかめていたら。
お姉ちゃんが胸元を開けて、スカートの裾を軽く掴んで引っ張り上げる。

何だか色々と見せそうなエロいポーズをしながら、えらく艶(なま)めかしい声で、二人に口を開く。

「二人共、こっち見て～」

＞ｉ３２９６８―２３１＜

振りかえる二人はすぐに炎上。吉川君は翼を出しながら硬直。
感情が高まると翼の制御ができないということが、この間の僕の実験により明らかとなった。
菊池さんは顔を真っ赤にして興奮している。
そんな二人を前に、お姉ちゃんが挑発するようなしぐさで話を続ける。

「喧嘩なんてしちゃあ……や・だ・な」

滅茶苦茶にエロっぽい仕草をするお姉ちゃん。
おかげ様で菊池さんと吉川君だけではなく、誰もがお姉ちゃんに釘付けだ。
確かに、教室は静かになった。静かにはなったけど……。

僕がお姉ちゃんに近づく。
今は子どもの姿なので、軽く空を飛び、後ろから頭を叩く。
ミャアと鳴いて、振り返るお姉ちゃんに注意を始める。

「お姉ちゃん、何してるの？」
「え？　二人の喧嘩を止めてってハルが……」
「確かに言ったけど、他に方法はなかったの？」
「だって、この方が早いから……」
「いくら早くても、していいことと悪い事があるよね？　仮にも、お姉ちゃんは女の子でしょ？　こんな公共の場で、色っぽい事はしないの。ここは学校だよ。教育に悪いでしょ？　他の生徒に影響が出たら、どうするの？」
「だって……。いつも瑠菜は凄いキスしたり、身体触ったりしてくるし……」
「だからって、お姉ちゃんまでマネしないでよ。大体、お姉ちゃんは……」

グダグダグダとお説教を並べる僕。
お姉ちゃんが今にも泣きそうになる中、授業開始のチャイムが鳴り響く。
説教を止めて、僕が席につくと。先生が入ってくる。
いつも以上に静かな教室を見て、戸惑っているがすぐに授業が開始

される。

お姉ちゃんを見ると、反省しながら落ち込んでいた。

菊池さんと吉川君は落ち込むお姉ちゃんをなだめている。

こう言う時は、仲違いしないのだ。

うーん、やっぱりこの二人は似た者同士なんだな……。改めてそう思った。

メロンパン〈ハル編〉

教室の後ろにて、お疲れ気味の黒松さんの前には、目を潤ませるお姉ちゃん。
キュンキュンと鳴き声を上げながら、黒松さんに手を伸ばす。

「抱っこ」
「上野様、少しばかり休ま……」
「抱っこ」
「……」

お姉ちゃんが黒松さんに抱きつくと。
黒松さんがため息をつきながら、お姉ちゃんを抱っこする。
抱っこをされて、満足げなお姉ちゃんは、目を瞑りながら眠りだす。
黒松さんはそのまま停止。

黒松さん……先程から一時間に渡り、お姉ちゃんを抱っこしている。
ベッドの上だろうが、シートの上だろうが。
どこかに置いた時点で、お姉ちゃんが目を覚まし、抱っこを強請ってくるらしい。

お姉ちゃんは授業放棄だ。
黒松さんに抱っこをされながら、眠る事が気持ちいいのか。
そればかりに集中している。

菊池さんは不満げだけど、お姉ちゃんを抱っこし続けるなんてできっこない上に、授業を受けなくちゃいけないから手を出せない。
相手が吉川君だったら、怒るだろうけど。黒松さんだから、放置プ

レイだ。

ちなみに、吉川君はどこかに出かけちゃった。
一時間程前まではお姉ちゃんとお喋りしていたけど、どこに行ったんだろう？
もしかして、図書室かな？

まぁ、そんなこんなで、黒松さんの精神力が尽きかけてきた頃に。
吉川君が帰ってくる。
吉川君の手には紙袋。すぐにお姉ちゃんに近づいて声を掛ける。

「あれ……？　ミャラちゃん、眠っちゃったの？」
「みゅ？　ん……あ、吉川君……」
「ごめん、起こすつもりじゃなかったんだけど……」
「もしかして、頼んでいた物？」
「そうそう。作ってきたよ」
「わーい。見せて、見せて。リチャード、下りたい」

お姉ちゃんが言って、黒松さんが非常に嬉しげな顔をする。
お姉ちゃんを地面に下ろして、黒松さんの重荷も下りる。
そんな中、吉川君が袋からとある物を取り出す。
それを見て、黒松さんは絶句。お姉ちゃんは大喜び。

言葉を無くす黒松さんの前で、吉川君が口を開く。

「ボクの手作りメロンパン」
「ありがとう！　凄く良い香り。ね？　リチャード？」
「メロンパン……」

黒松さんが蒼白している。

お姉ちゃんはそんな事など気にもしないで、吉川君に口を開く。

「いくつあるの？」

「これを合わせて二十個だね。いくつ必要なのか聞いていなかったから、ちょっと多めに作っちゃった。だけど、パンの専門家にも褒められたから。味には自信があるよ。ホワイトチョコを混ぜ込んだ、メロンパン。フフッ、ミャラちゃんの口にあえば嬉しいな」

「きっと凄く美味しいね。もちろん、リチャードも食べるよね？」

「えっ！？」

止めて下さい！　黒松さんの心の叫びが聞こえてくる。

次にお姉ちゃんから、呪いの言葉が聞こえてくる。

「リチャードはメロンパンが大好きなの。ね？」

「いえ……その……。今日は少々……体調が……」小声で反発する黒松さん。

「へー、そうなんだ。じゃあ、是非とも食べてもらわなくちゃあね」

黒松さんの言葉を無視して、吉川君が笑顔で言ってのける。

吉川君は黒松さんがそれほどメロンパン好きじゃない事に気づいているだろう。

暇だから、からかっているんだ。

お姉ちゃんがしおれる黒松さんにメロンパンを押しつけ、目を輝かせる。

言葉を出さなくても一目でわかる。味見して、感想を教えてね。

黒松さんがそれを悟り、ゆっくりと頷いた後に。

食べたくないにも係わらず、メロンパンを口にする。

一口食べて、じっと黙り込む。

黒松さんの前には、ちょっと緊張気味の吉川君。
そして、ワクワクと胸を躍らせるお姉ちゃん。
黒松さんが吟味の結果を報告する。

「本来のメロンパンなら、表面の生地が非常に甘く、中はさっぱりしている事が多いですが。吉川様のメロンパンは、少々勝手が違うようです。表面の生地には過剰な甘さがなく、ほんのりとした甘み。しかし、薄くスライスされたホワイトチョコレートが味を出しており、物足りなさを感じない。それに加えて、中の生地はしっとりしていて、甘さの加減も素晴らしい。このメロンパンなら、毎日食べても飽きないでしょう。非常に食べやすく、美味しいと思います」
「よし来た！」
「凄いよ、吉川君！　リチャードに褒められたよ！」

大喜びする吉川君の隣では、お姉ちゃんが拍手をしている。
というか、天才でもある吉川君が、たかがメロンパンを褒められただけで大喜びするなんて。
他の事で褒められても、『ふーん』で終わるのに。
そんなにパンが好きなら、パン屋になれよ。とつい考えてしまう。
不意に、黒松さんが言葉を追加する。

「私が思うに、『ｓｗｅｅｔ　ＤＡＹ』のメロンパンに近いですね……」
「凄い！　その通りだよ！　ボクはあのパン屋のメロンパンが一番好きなんだ。『ホワイトマルシェ』も悪くないけど、バターの量が少し足りない気がするんだよね……。その分、『ｓｗｅｅｔ　ＤＡＹ』は味がしっかりしていて、食べていて満足するし」

そこから始まるのは吉川君のマシンガントーク。
吉川君はパンが大好きらしい。

まぁ、甘いパンに限定されているけれど。
そういえば、ホワイトチョコも好きなんだよね？
凄い甘党だ。未来さんを上回っているかもしれない。

更に驚くのは、その話に黒松さんがついて行っている事だ。
あのパン屋はどうだ、このパン屋はどうだ。
そんな話を普通に理解し、受け答えをしている。

黒松さんもパン好き……というわけではないだろう。
余りにもお姉ちゃんがメロンパンを薦めるので、少しは好きになろうと自力で努力していたに違いない。
その結果がこれだ。

黒松さんと吉川君の話が盛り上がる中。
お姉ちゃんを見ると、菊池さんとメロンパンの食べさせあいをしている。
『はい、あーんして』、『あーん』みたいな。
メロンパンよりも甘ったるい空気を出している。

吉川君は気づいていない。話に夢中だ。
身近にパン好きがいないからか、黒松さんに溜まっていた気持ちをぶつけている。
黒松さんも吉川君の意見を理解できるらしく、何やら変に意気投合している。

何だか楽しそうだな。と思いながら、黒板に目を向ける。
これでも今は授業中……。
こんなのでいいのだろうか？
クラスの皆が浪人したら、誰のせいになるのだろう？

バイト探し〈メモリー編1〉

僕の家にて……。
食事を終えてゴロゴロしていたら、急に電話が鳴り響く。
日和はテレビに集中していて忙しそう。
寝転ぶ僕は起き上がる気力もなくて、幼いハルに口を開く。

「ハル～、電話取って～」
「もう～、面倒くさいなぁ……」

見た目は幼い癖に、何だか大人っぽいハルが電話の元へと駆けて行き、受話器を手に取る。

「もちもち～」

……あれ？　どうして、ここでお子様モード？
僕がそんな事を考えていたら、ハルが話し始める。

「もちもち～、だ～れ？　僕、ハリュ。ううん、ハリュ。おじちゃん、だ～れ？　わーべ？　わーべ、わーべ。僕、ちらない。パパ、いない。パパ、いなくなった……。ねーたんはいる。ねーたん、ねんねしてる」

せめて対応が逆だったらなぁ～。
僕の前では、これでいいけど。相手にこれじゃあ、伝わらない。
立ち上がり、ハルの元へと向かう僕。
電話をもぎ取ると、相手が話しかけてくる。

「えっと……上野さんですか？」

「あぁ、渡辺。何でそんなに敬語なの？」
「あぁ、いや……。何かちっちゃいのが出たから」
「気にしないで。それより、どうしたの？」

受話器を奪い返そうと、邪魔をしてくるハルを抱きしめながら、問いかける。
ちなみに渡辺というのは、僕の同僚。
僕がお嬢様に襲われた事も、ネコ耳を付けている事も。
現在、性別が変わっている事すら知っている。

というか、仕事仲間は、僕の状況をほとんど知っている。
だって、黙っていられない。
黙ったまま上手くいくのなら、そうするけど……。
急用とかで呼び出しを食らったら、お仕舞いだもの。
全て暴露しておいたほうが、後が楽だ。

渡辺が僕に話しかけてくる。

「そうそう、見つけてきたぜ。超高額日給のバイト」
「本当に！？」

バイトっていうのは、最近になって気付き始めた家計のピンチ。
こんな事、日和にもハルに言えやしない。
今までは一人暮らしで、お金もほとんど使っていなかったから、上手くいっていたけど。

今は三人になって、色々と使う事が増えたから、収入よりも支出が多い生活だ。
食費は瑠菜との契約で賄っているけれど、他のフォローができない。

このまま行くといつか破綻する。
お金なんて瑠菜に甘えればいくらでも出してもらえるけれど、そういう事は余りしたくない。
何て言うか……、一家の主としてのプライドだ。

一人でなんとか蹴りをつけたい。
そう思い、渡辺に良いバイトがあったら教えてほしいと頼んでおいた。
ハルを地面に置いて、問いかける。

「それで、どんなの？」
「でも……ちょいヤバい系なんだよな。色々と探してはみたけど、あったのが一つ……」
「え？　もしかしなくても、法律違反？」
「そういう事はないと思うけど……。知り合いの知り合いの知り合いくらいに遠い話だから、詳しい事は知らないんだ。が、一言で説明するなら、メイド喫茶」
「今の僕なら余裕じゃん」

メイド喫茶くらいで何を言っているんだろう？　お金の方が大事だ。
メイドの格好をして、ニコニコ笑っているだけでお金を貰えるなんて。超楽じゃん。
昔から色々なバイトで培ってきた経験が、こういう面での羞恥心を打ち消している。
乗り気な僕に対して、渡辺が真剣な声を出す。

「そりゃあ、普通のならな……。ただあっち系の人が多いとか」
「オタクなら慣れてるよ」
「いや、そうじゃなくて……。もっとヤバい系だ」

「え……。うーん……でも、襲われる事はないんでしょ？」
「そりゃないと思うけど。結構、触ったりとかあるみたいで。以前にバイトしていた子がそれで止めてしまって。その後、裁判沙汰になりかけたとか……。でも、店長もヤバいらしいから。大事になる前に、話が消えたみたいだけど。俺はオススメしないな。まぁ、そういう店があるという事だけは伝えておこうと思って」
「うーん……。まぁ、とりあえず。その店の名前を教えてよ。少し考えてみるから」
「まぁ、無理するなよ。ヤバいと感じたら、止めておけ」
「うん、ありがとう」

渡部から、店の名前と住所、電話番号を聞き出して。メモを取る。電話を切ると、ハルが問いかけてくる。

「何のおはなち？」
「フフッ、何でもないよ」

ハルの頭を撫でて誤魔化す。皆の紅茶を淹れて、日和の元に持っていく。
お礼を言って、紅茶を飲み出す日和。その隣では、お菓子を頬張るハル。
僕もティーカップを手に取って、二人を眺めながら紅茶をすする。

バイト探し〈メモリー編2〉

それから更に数日後、そろそろ切羽詰まってくると。
どうしても気になり、例の店に立ち寄る事を決意する。
今日は平日、学校を休んで、朝から電車だ。
駅を降りると、繁華街に辿り着き。
地図通りに歩いていたら、どう考えても危なそうな店を発見する。

傍から見ると、メイド喫茶には見えない。
どちらかと言えば、キャバクラやスナックに近い雰囲気。
渡辺の案を聞き入れるなら、入らないべきだろう。
だけど、このままじゃあ……家計が。

お金欲しさに足が動いてしまう。
もしも、僕が男なら、他にも力仕事とか何かあるだろうけど。
何もできないこの姿でバイト探しはかなりキツイ。
捨て身でチャレンジしてみるか？

ビビり腰で扉に近づき、中を覗こうとするけど、暗くて見えない。
扉には、ＣＬＯＳＥと書かれた札が吊るしてある。今は閉店中みたいだ。
ノブに手を掛け、引いてみる。これで開かなかったら、家に帰ろう。
そう思ったのもつかの間、扉が軽く動き出す。

そーっと中を覗き込んで、声を出す。

「すみません……」

返事はない。

だけど、扉が開いているってことは……人がいるって事だよね？
まさか店を無人にするとは思えないし。

音を立てずに店に入って、ちょこちょこと奥へ進む。
この店……凄く鼻に悪い。お酒の匂いとタバコの匂いで、気分が悪くなりそうだ。
まぁ、僕の仕事場も結構酷いから、文句は言えないけれど……。あっちはタバコ臭いかな？

時間に余裕がある時はそうでもないけれど、切羽詰まってくると皆してイライラモードに入る。
タバコを吸う人がかなり増える。
だから、僕は家で仕事。あんな所じゃあ、集中できないもの。
禁煙席を作ってもらわなくちゃ……。

僕がオロオロしていたら、急に人が現れる。
人相が悪い男。ここのオーナーみたい。
緊張気味の僕に向いて、訝しげな表情を浮かべながら口を開く。

「何だ？　お前？」
「えっと……ここでバイトを募集しているって聞いて……」
「あぁ、それか。それで、名前は？」
「えっと……上野ミャラです」
「じゃあ、ミャラ。あっちで服を着替えてこい。吊ってあるのを勝手に使えばいい」

え……？　もう採用？
僕、何一つ採用試験とか受けてないんだけど。
それどころか、住所も歳も何も聞かれていない。
オロオロする僕を余所に、オーナーは雑誌を読み始める。

……もう着替えるしかないよね？

言われた通り、奥に行って。適当に吊ってある服に着替えてみる。
ここの制服はまちまちで、何て言うか統一感がない。
いろんな所から適当に集めてきたようだ。とりあえず、メイド服ではあるようだけど……。

自分にあいそうなサイズの服を着て、薄汚れた鏡を見ると。
うん、それなりに似合っていると思う。
本来なら、ここにネコ耳をつけたりするのだろうけど。
メイド服以前から、ネコ耳が付属しているから。
ここにウサ耳とか無理だよね。うん……ちょっと耳が多すぎる。

着替えを終えて、オーナーの元に戻ると。
とりあえず、掃除でもしてろって言われた。
適当に掃除道具を探して、掃除を始める。
それにしても……汚いな。
ここ飲食店だよね？　こんなのでお客さん来るのかな？

僕が一生懸命に掃除をしていたら、扉の開く音が聞こえてくる。
振りかえると、女の人。ちょっと気の強そうなお姉さんだ。
サングラスを掛けて、タバコを吸っている。
服はヒョウ柄……。何て言うか……キャバ嬢とかしていそう。

僕が頭を下げると、お姉さんが話しかけてくる。

「あら？　あなた誰？」
「えっと……今日入ったバイトです」
「まぁ、そうなの。よろしくね」
「はい……」

「名前は？」
「えっと……ミャラです」
「ふーん。私はアカリよ。あなたと同じバイトね。まぁ、ここでは結構長いけど……。飽き性の私が珍しく続いているのよ。と言っても、そろそろ止めるけど。良い彼氏が見つかったし～。それが結構お金持ちなのよ。顔はいまいちだけど」

話をしながら、アカリさんが奥へと歩いて行く。服を着替えてくるらしい。
僕はもう一度頭を下げてから、小さくなりながら掃除を再開。
何だか凄く息が苦しくなる店だな……。しばらくの我慢とはいえ、耐えられるかな？

バイト探し〈メモリー編3〉

僕が掃除を終えた頃に、アカリさんが登場する。
服はやっぱりメイド服。
そんな姿のアカリさんを見ると、少し安心する。
何だか仲間ができた気分。アカリさんが店の扉に掛けてあるＣＬＯＳＥの札を裏返す。
そして、裏返った札にはＯＰＥＮの文字が。

それを終えると、戻って来たアカリさんがオーナーと同様に、椅子に座り雑誌を読み出す。
え……？　もしかして、準備は終わり？
オーナーはちょっと怖いから、アカリさんに近づいて問いかける。

「あの……料理の準備とかは？」
「え？　あぁ、どうせ誰も頼まないからいらないわよ。もしも、頼まれたら向かいにあるコンビニで、それっぽいのを買えばいいの」
「あの……じゃあ、他にする事は？」
「別にないわね」
「そうですか……」

こうして、雑誌を読む人が二人になった。
とりあえず、店は開いたみたいだけど……。
僕はする事がなくて、またもや掃除を再開する。
何もしないのは、ちょっと暇だ。だけど、雑誌を読む程の勇気はない。
だってこれでもバイトだもの……。新米はやっぱり掃除担当だよね。

せっせと掃除をする僕の前では欠伸をしながら、眠そうなアカリ

さん。
気が付けばオーナーはビールを開けてテレビを見ている。凄い店だ。
こんな店、一般人なら立ち入らないだろう。僕だって絶対に来たくない。

ゆっくりとだけど、時間は着実に過ぎて行く。
今がどれほど辛くても、今がどれほど楽しくても。
それを理解しているから、人は耐えるという行動を覚えるのだろう。
結局は、逃げ出す事もなく。飽きずに掃除を続けていた。

お客が来ない上に、オーナーとアカリさんは仕事なんてしていない。
オーナーはタバコを吸いながら、ずっとテレビを見ていて。
アカリさんは雑誌を読むのを止めて、携帯電話をいじっている。

そろそろ二時間が経過しようとしていたら、不意に店の扉が動く。
ゾロゾロと入ってくるのは、ちょっと怖いおじさん達。
どう考えても暴力団関係の人達だろう。

案内も待たずに、好き好きに席につくお客さん。
オーナーは客に視線を向けた後、欠伸をしながら関心なし。
飲み物の用意なんて、もちろんしない。
アカリさんに目を向けると、手足を組みながら、鬱陶しそうな表情を客に向け、椅子に座っていた。

気が付けば、いつの間にやら。店の中はお客さんでいっぱい。
しかも、全員が知り合いという。きっとお得意さんなのだろうな。
人数にしてみれば、十数人……いや、二十数人はいくかな？　結構

な数。

僕は何をすればいいのだろう？
うろたえていたら、お客の一人がアカリさんに声を掛ける。

「アカリちゃ～ん、お絞り取って～」
「そこにあるわよ。勝手に取りなさい」

冷たく言ってのけるアカリさん。
他のお客が笑い転げる中、僕が迅速に行動する。
お絞りを用意して、要望したお客の前に差し出す。

「い、いらっしゃいませ……。お絞りです」
「あら、君は？」
「あ、新しく入ったバイトです……。よ、よろしくお願いします……」
「わーお、可愛いじゃん。お名前は何て言うの？　高校生でちゅか？」
「えっと……ミャラです。はい……高校生です。あの……あまり詳しい事は聞かないで下さい……」

どんどん声が小さくなっていく僕の姿を見て、お客達が変に盛り上がる。
彼氏いるの？　とか。俺とつき合わない？　とか。
冗談だとわかっていても、答えづらい。だって、相手が威圧的すぎるから。

なんとか話を進めて、注文を承る。
アカリさんに話を聞きながら、飲み物やおつまみを用意する。
飲み物のほとんどがお酒類。おつまみは間に合わせでいいらしい。

何て適当な店なのか。本来なら、お客が打ち切れているだろうな…。

せっせと働く僕の前では。アカリさんがオーナーの席を陣取り、テレビを見ている。

オーナーはいつの間にか消えていた。

どこに行ったんだろう？

もしかしたら、家に帰ったのかもしれない。

あのオーナーだから、そうしていても不思議じゃない。

バイト探し〈メモリー編４〉

いくぶん時間が過ぎた頃、店内は騒がしくなっていた。
酔っ払いがわらわらとはびこり、喧嘩を始める者まで現れる。
相変わらずにのんびりしているアカリさんと。注文を受け、走り回る僕。

一番奥の席。他の人達とは違い、少し格が高そうな人達が話し合う中。
僕が飲み物の追加を持って行ったら、不意にずんぐりと太った人に声を掛けられる。

「なぁ、嬢ちゃん。ちょいとおじさん達とお話しようや。男ばかりじゃあ、むさくるしくて。なぁ？　兄さんら」
「いいね、いいね。席はいくらでも空いてるから。ほら、ここ。ここに座りなって」

タバコを吹かしながら、怖い顔のおじさんが開いた席を叩く。
僕はすぐに首を横に振りながら、口を開く。

「いえ……今は仕事中ですので。あの……他にも注文を受けているし……」
「あいつらの注文なんか放っておけ。俺らが先だ。何でもまずはお偉いさん、これは仕事の基本だろ？」

そう言って、今度は白髪交じりの人に腕を引かれる。
無理矢理に席に着かされる僕。怖い顔のおじさんと太ったおじさんの間。
これじゃあ、逃げようにも逃げられない。

恐怖のあまりに身体が硬直する。
ネコ耳を伏せて、尻尾は自分の身体に密着。
三人の乱暴そうな人達に囲まれたら、誰だって小さくなる。
特に女の子になった僕にしてみれば、全員が自分よりも体格が大きいから。もの凄く怖い。

小さくなりながら、酔っ払い達の目に留まらないよう心がけるけれど。
こんな席につかされたら、嫌でも見つかる。
僕が怯える中、太ったおじさんが僕に声を掛けてくる。

「なぁ、ミャラちゃんって言ったっけ？　歳はいくつ？　学生だよね？」
「あの……高校生です。その……それ以上は、ちょっと……」
「へー、高校生か。なぁ、彼氏いんの？　おじさんとか、ちょっとイケてない？」

臭い息を吐きながら、僕に顔を近付けてくる太ったおじさん。
もう気持ち悪いから離れてほしい。
僕がそんな事を考えていたら、急に身体を触られる。
太ったおじさんが僕の足を触りだし、思わず僕が小声で叫ぶ。

「やぁっ！」
「『やぁっ！』って、可愛い声出すね。もしかして、お兄さん達を挑発してんの？」

怖い顔のおじさんが言う。お兄さんじゃなくて、おじさんだ。
僕が泣きそうになっていたら、怖い顔のおじさんが僕の腰に腕を回してくる。

自慢げに他の二人を見て、他の二名が笑いだす。

怖さのあまりに、僕の身体が震えだし。
怖い顔のおじさんが僕の腰に回した手で、僕の身体をなぞってくる。
最後は胸を揉み出して、僕が小さく悲鳴する。

「ひぃ！」
「可愛いなぁ～。高校生は良いな。アカリちゃん見てみい。シケた面して。この間、身体を触ったら。ビンタ入れてきたんや。酷いよなぁ～」

太ったおじさんがそんな事を言いながら、僕の太股辺りを触り続ける。
太股っていうか……下手すりゃあ、股関節辺りだ。
いやいやいや、気持ち悪い、気持ち悪い。マジで止めてほしい。

僕が寒気に襲われていたら、怖い顔のおじさんが僕の耳元で囁きだす。

「これはネコ耳言う奴？」

そして、僕のネコ耳を触りだす。
急に耳を触れられて、身体の芯からゾクゾクとした快感が溢れ出てくる。
思わず、声を出してしまう。

「あんっ！　駄目ぇ！　や、止めてっ！」
「あれ？　もしかして、神経が通ってんの？」

怖い顔のおじさんが言った後、恐ろしい程の激痛を感じる。

頭というよりも心臓……。心臓に車が衝突した気分。
直後、声の限りに叫ぶ僕。
何が起きたのかさっぱり分からない。
とにかく痛い。痛くて堪らない。

僕が目眩と冷や汗で瀕死状態になる中、人の声が聞こえてくる。

「悪い、悪い。まさか本当に神経が通っているなんて……」

怖い顔のおじさんが僕のネコ耳を引きちぎろうとしたみたい。
今の言葉で、状況を察する。
不意に別の人の声、太ったおじさんの声……。

「じゃあ、こっちを触っても感じるんか？」
「やぁ！　あんっ……。はぁ……う」

反対側の耳を触られる。今度は痛くない。
グニグニと乱暴だけど、気持ちが良い……。
そんな具合で、時間経過と共にエスカレートしていく二人の行動。
白髪交じりのおじさんは止めてくれない。ニヤニヤと僕を見て、楽しそう。

それから数十分が経過し……。今や僕……凄くエロい事になっている。
服は乱れて、いけない所までさらけ出し。酷い有様。
数分前からなんて、服の中に手を突っ込まれ。
下着の下、直に身体を触られる始末。

だけど、助けを求めても誰も助けてくれない。
アカリさんは『頑張れ』の一言だし、他の人達は助けを求める僕を見て興奮している。
まぁ、それ以前に声が出ない。
恐ろしさの余りに、口元まで出かかる声が、雑音に紛れて消えていく。
口を動かせても声が出なければ意味がない。

涙をぽろぽろ流しながら、襲われ続ける僕を見て。
太ったおじさんが恐ろしい発言を口にする。

「何かムラムラしてきたなぁ～。もう俺、限界や」

え？　何が？　一瞬、脳内が停止する。
すぐに僕が蒼白し、涙も止まる中。
太ったおじさんに目を向けると、もの凄く興奮した目つき。

とっさに逃げようする僕だけど、二人に挟まれているから逃げられるわけもない。
瞬く間に、怖い顔のおじさんに腕を押さえ込まれる。
そうしたら、もう動けない。

力に差があり過ぎて、どれだけ力を入れてもビクともしない。
男の力って、こんなにも強かったのか……。

久しぶりに声が出て、叫びまわる僕。すぐに口元を手で押さえ込まれる。
僕の口元を押さえ込むのは怖い顔のおじさん。
太ったおじさんがニタニタしながら、僕に言う。

「大丈夫、大丈夫。ちょ～っとだけや。ちょ～っとの辛抱だから」
「ん～っ！　んん～っ！」口元を塞がれても叫び続ける僕。
「もしかして、処女？　だったら、安心しい。おじさんはそういうの慣れてるから」
「んんん～！！！！」

嫌がる僕の事など気にもしないで、僕のスカートの中に手を入れる。
いやいやいやいやいや！！！！　気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い！！！！！
頭の中がパニックだ。下着を脱がされて、もう大混乱。

目の前でズボンを下げだす太ったおじさん。
本気でやられる。そう思ったら、逆に力が抜けて行く。
もうムリムリムリ。死にたい、死にたい。

今朝までは、普通に暮らしてきたのに。
お金欲しさにこんな所にきたがために、こんな目に遭うなんて……。
やっぱり止めておけば良かったな。今更だけど……。本当に、今更だけど……。

世界が夢心地になる。近づいてくる怖い人。

それから、逃げ出す事もできない僕。
だから言ったのに……。渡辺の声が聞こえてきそうだ。

バイト探し〈メモリー編6〉

全てを諦めて、僕が大人しくなる。
そんな中、時間を戻すかのように、希望の音が聞こえてくる。
乱暴に扉を開ける音。誰か来た……新しいお客さん。

早くお絞り用意しなくちゃ……。
だけど、僕は動けない。アカリさんは動かない。誰か用意してあげて……。
目を瞑りながら、ぼんやりと目の前の出来事を逃避していたら、素早い足音が聞こえてくる。

そして、人の声……どこかで聞いた事のある声。

「ミャラちゃん！」

目を開けると、蒼白する天使様が見える。
あぁ、お迎えがやってきた。これで日和と静かに暮らせる……。
天使様が僕に近づこうとすると、太ったおじさんが怒鳴りだす。

「何やワレ！？」
「うるさい！　お前は黙ってろ！！」
「何やと！　おいっ！！」

太ったおじさんが天使様に襲いかかる。
あぁ、天使様……逃げて。
そう思ったのもつかの間、天使様が太ったおじさんの側頭に突きを入れる。

軽くかすった程度なのに、フラフラと倒れそうになる太ったおじさん。
お酒に酔っているわけではなくて、頭に突きを入れられたから。脳震盪を起こしたみたい。

天使様は容赦がない。凄く怒っているようで、太ったおじさんに追加の打撃を加える。
顎に鋭いアッパーを入れた後、倒れ込んだ太ったおじさんの大切な所を手加減することなく踏みつぶす。
先程までの僕の恐怖の対象が粉々になった。これで少し安心だ。
ホッと胸を撫で下ろす僕。

店の中に緊迫感が漂う中、天使様が怖いおじさんを押しのけ、僕を抱きかかえる。
僕は声を出す事もできなくて、天使様にすがりつく。
不意に騒ぎ出すのは、他の人達。
天使様に悪態をつきながら、ナイフなどの武器を出してくる。

天使様は気にしちゃいない。
僕をじっと見つめながら、悲しそうな目をしている。
怒った客人が押しかけてくる中、天使様と僕を包むのは白い壁。
周りが真っ白になり、怖い人達の姿が見えなくなる。

僕を抱えながら、天使様が地面に座り込む。
僕の頭を優しく撫で始める。だけど、すぐに手が止まる。
天使様が心痛な面持ちで、口を開く。

「ミャラちゃん……耳から血が……」
「あぁ……さっき……無理矢理に引っ張られたから」
「酷い……」

不意に天使様の身体が白い光で覆われる。
そっと僕の耳に触れる。何だか暖かい……傷みが消えていくみたい。
天使様が口を開く。

「どう？　痛みは治まった？」
「うん……気持ちいい」
「良かった……。もう……怪我は治ったね。この力は案外に役に立つみたいだ」

天使様がそう言った後に、黙り込む。
僕の姿を見ながら、悲しみと怒りで声を振わせる。

「ごめんね……。ボクがもう少し早く気付いてあげていたら……」

あぁ、天使様にはわからない。
僕がこんな姿だから、もう襲われた後に見えなくもない。
まぁ、襲われている最中だったけれど……。
間一髪という言葉が当てはまるだろうか？
僕が天使様に真実を述べる。

「大丈夫……。身体は触られたけど……。凄く酷い事までは……されてないよ。天使様が……助けてくれたから……。もう少しで危なかったけど……」
「そう……。でも、ごめんね……。怖かったでしょ？」
「フフッ、僕が悪いの……。お金欲しさに、こんな所に来たから……。危ないってわかっていたのに……」

力なく笑う僕を見て、天使様が一緒に笑ってくれる。
やっぱり天使様は笑っていたほうが素敵だ。

悲しそうな天使様を見ていると、僕まで悲しくなるもの。
不意に天使様が口を開く。

「ここは空気が悪いから……。そろそろ外に出ようね」

天使様が僕を抱えて、再び立ち上がる。
ゆっくりと白い壁が薄れていき、周りの光景が目に留まる。
先程までとは違う光景。
客人達が地面にひれ伏し、先程の僕のようにビビりながらこちらを見上げている。

それを見て、眉をしかめる天使様。
天使様が振り返ると、そこには見慣れたお爺さん。
天使様がお爺さんに口を開く。

「あぁ、爺や。遅かったね」
「坊っちゃん！　お一人で先走るなど、余りにも……」
「だって、爺やが遅いんだもの。トロい老人なんて待っていられないよ。現に、ミャラちゃんが危なかったんだ……。もう少しで取り返しがつかなくなる所だったよ……。それでなくても、こんな姿にされて……」
「う、上野様！？」

僕を見て、仰天するお爺さん。
僕は気力を消耗していて、話をする気にもなれない。
騒ぎ回るお爺さんを無視して、天使様が口を開く。

「爺や、後片づけを頼むよ」
「よ、吉川の坊っちゃん！」

話に割って入ってくるのは、僕を襲っていた人の一人。怖い顔をしたおじさんだ。
天使様に向いて頭を下げながら、話し続ける。

「何も知らなかったとはいえ、坊ちゃんの思い人に手を出してしまい。誠に申し訳ございません！　それに加え、坊ちゃんに刃を振った事、大変深くお詫び申し上げます！」
「ボクに刃を振る事は構わないけれど、ミャラちゃんに手を出した事は問題だね」

冷たく言い放つ天使様。
怖い顔のおじさんが僕に話しかけてくる。

「上野様、誠に申し訳ございません！　何とぞ、私達が無知でしたので！　何度となく、お詫び申し上げます！　本当に申し訳ございませんでした！」

死に物狂いに謝る怖い顔のおじさん。
顔色は真っ青。天使様に脅えているみたい。
あれほど酷い事をしていたのに、そういう姿を見ていると、少し可哀そうに思えてしまう。
落ち着きを取り戻した僕が口を開く。

「ごめんなさい……。僕が悪いの……。危険な事をわかっていたのに、こんな所に来て……」
「め、滅相もありません！」と怖い顔のおじさん。
「そうだよ。ミャラちゃんは悪くないよ」

天使様が心配そうに僕を見る。
きっと僕の一言でこの人達の運命が決まる。

それほどまでにハッキリとした力関係。
先程とは、正反対の立場。
僕が天使様を見た後、脅えるおじさん達に顔を向ける。

「許してあげて……。僕も反省するから、おじさん達も反省しよう……。皆で反省すれば、二度とこんな事にはならないから……」
「ありがたきお言葉！」

怖い顔のおじさんを含み、皆が僕の言葉に安堵を覚える。
天使様は不満げだ。僕に向いて、不平を述べる。

「ミャラちゃん、優しすぎるよ。こんなにされたのに、本当にそれでいいの？」
「うん……。えへへ……」ちょっと元気が出て笑顔を見せる僕。
「……」

天使様は恥ずかしげに、僕から目を逸らす。
すぐに地面にひれ伏す人達に向いて、辛い一言を口にする。

「まぁ、いいさ。ミャラちゃんが言うのなら、ボクは手を出さないよ。ただし、ボクが手を出さないだけで。菊池のバカ嬢は知らないよ。ミャラちゃんはあいつのお気に入りだからね。この話を知ったなら、大人しくしているわけないだろうし。腕が飛ぶか、首が飛ぶか。それはそっちで相談しなよ」

バイト探し〈メモリー編7〉

薄れる意識……。
恐怖から解放されて、眠くなる。
聞こえてくる人の会話……。

「坊っちゃん、これからどのようになさるおつもりですか？」
「そうだね……。こんな状態で、ミャラちゃんを学校に連れて行くわけにもいかないし……。うーん……」

長い沈黙。そして、また会話が始まる。

「よし、決めた。ボクの家に連れて帰ろう。丁度、良いバイトもあるし……。ミャラちゃんが起きたら、話をしてみようと思う」
「それでは、お車をご用意致します」
「うん、よろしく」

そこから、プッツリ……。
恐怖も安心も、夢も現実も。
全ての意識が吹っ飛んで、空白の時間。
虚空を描く僕の時間……。

不意に、鼻をかすめるのは甘い香り。暖かそうなミルクの香り……。
聞こえてくるのは、パラパラと本をめくる音。静かで穏やかな空気。

あぁ、眠い……。眠いけれど、起きなくちゃあ……。
心地の良い気分に浸りながら、ゆっくりと目を開く。

見慣れない天井。ここはどこだろう？
何だか身体がだるくて、寝転んだまま首だけ動かす。
シックな雰囲気の部屋。少し暗み掛っているけど、ほんのりとした暖色のライトがよく似合う。

ふと目に留まるのは、椅子に座りながら本を読む人。
その前には机があって、机の上にはマグカップ。
きっとホットミルクが入っているのだろう。
薄らと見える湯気と甘い香りで想像できる。

僕がぼうっとその人を眺めていたら、ふいにその人が振り返る。
目が合う僕達。椅子から立ち上がり近づいてくるのは吉川君。

「ミャラちゃん、大丈夫？」
「うん……。ここは？」
「ボクの部屋。あの後、ミャラちゃんが寝込んじゃって……。行く宛てがなかったから、ここへ来たんだ。もしかしなくても、迷惑だった？」
「ううん……ありがとう」

上体を起こして、吉川君に笑顔を向ける。

「さっきの天使様は……吉川君だったんだね。あの時は意識がぼんやりしていたから、天使様がお迎えに来たのかと思っていたけど」
「天使様は大袈裟だよ」苦笑する吉川君。
「そんなことないよ。あの時の吉川君……凄く綺麗でカッコ良かった。真っ白な翼を見た時は、怖い思いも吹っ飛んだもの」

僕が真面目に答えたら、吉川君が炎上する。すぐに背から翼が生えて、輝きを放つ。
吉川君が慌てながら、翼を落ち着かせようとする。
そんな吉川君が可愛くて、僕が思わず笑ってしまう。そしたら、吉川君が苦笑い。

「便利な時は便利だけど……。こう頻繁に出て来ちゃあ、困るよね」
「ずっと出してちゃダメなの？　よく似合うのに……」
「流石に、恥ずかしいよ。暗闇で身体が光る事すら止めてほしいのに。こんな物を背負っていたら、子どもに笑われちゃうよ」
「そう？　子ども達も『天使様が来た』って大喜びすると思うんだけどなぁ……」

首を傾げる僕に向いて、吉川君が別の話を口にする。

「そうだ、ミャラちゃん。その……あの時の格好のままだから、着替えるといいよ。そのままじゃあ、ヤニ臭いでしょ？　ここに新しい服を置いてあるから、サイズが合えばいいのだけど……」
「あぁ、ごめんなさい。お布団に臭いが付いちゃったかも……」

すぐにベッドから抜け出す僕。そんな僕から目を逸らす吉川君。
うわぁ、僕……凄くはだけた格好。ふゅ！？　しかもパンツはいてない！？

思わずスカートの上から前を押さえる。
そうか……最高に恥ずかしい場面を吉川君に見られたんだ。
あの時の光景を思い出して、僕が急激に燃え上がる。
吉川君は何とも恥ずかしそうな表情を浮かべながら、僕に背を向け、話を続ける。

「あの……向こうにシャワーがあるから、良かったら使って。ボクは外にいるから。終わったら、机の上にあるボタンを押してくれるといいよ。それじゃあ、また後で」

吉川君が振り返ることなく手を上げて、部屋を立ち去る。
僕はとりあえず貰った服を手に持ち、更衣室に入る。
準備をして、中に入ると。わぁ、浴槽もついている。しかもお湯まではってある。
吉川君って、やっぱり気が利くなぁ……。

楽しい気分に浸りながら、お湯に浸かって考える事。
吉川君が用意してくれた服って……わざわざ買ってくれたのかな？
どうしよう？　また厄介になっちゃった。
吉川君にはお世話になってばかりだ。
なんとかお返しを考えないとなぁ……。

バイト探し〈メモリー編8〉

お風呂から出て、服を着替えて……。さて……寝るか。
そんな気持ちになるけれど、寝ちゃ駄目だ。
せめて吉川君にお礼を言わないと……。
机に近づき、吉川君に言われた通りにボタンを押してみる。

その後、しばらく部屋を散策。
ここは吉川君の寝室かな？　何だか落ち着いた部屋……。
瑠菜の部屋とは大違いだ。あっちは華やか。
やっぱり男女の違いかな？

難しそうな本がいっぱい……。
あ、この本……僕も持ってる。読んだ事はないけれど、日和のお下がりだ。
いつか読むつもりで残している物……。
いつも初めの目次でダウン。だって、難しすぎるもの……。

不意に目に留まる物。床の上に小さなお家。
中を覗くと何か発見。白い生き物……。あれはもしや……。

「オコジョ！」
「違う、フェレット」

後ろを振り返ると吉川君。キョトンとする僕を見て、笑いだす。

「オコジョじゃないよ。フェレットだよ。前に言っていたでしょ？
こいつはチロ。ボクの親友」
「あぁ、チロ！」

「フフッ、そう。チロ」
「チロ！　チロ！　……呼んでも来ないよ」
「寝ているんだよ。ミャラちゃんも寝ていたら、返事は出来ないでしょ？」
「あぁ……。じゃあ、僕……凄く迷惑な事をしている」
「フフフ……そうかもしれないね」

吉川君が楽しそうに頷いてみせる。
静かにしなきゃいけなかったのか……。
動物を見て、興奮して、えらく騒いでしまった。
僕が吉川君に問いかける。

「ねぇ、檻（おり）とかに入れなくていいの？　逃げないの？」
「普通はね。フェレットは狭い隙間に入って行ったり、落ちている物を何でも口にするから。よく注意しなくちゃいけないのだけど……。チロは頭がいいから、危ない所には行かないし。食べ物以外の物は口にしないんだ」
「そっか……。フフフフ……」
「どうしたの？　ミャラちゃん？」
「チロは偉いね。食べ物以外は口にしないんだ」

僕が言ったら、吉川君が恥ずかしそうに視線を泳がせる。
吉川君の悪習……落ちている物を口に入れてしまう癖。
この間はドングリを食べていた。
そして、執事さんに怒られるの。
吉川君が子どもに見える瞬間。

僕は別に拾い食いくらいしても構わないと思うけど……。
吉川君はお偉い家の子だから、そういう事をすると怒られるみたい。
僕の様子を見て、恥ずかしげに口を開く吉川君。

「いや……うん。爺やに『チロを見習え』って、何度となく注意されたよ。まだ……実行していないけど。まぁ、来年あたりはちょっと……注意しようかなと」
「大丈夫だよ。僕も幼い頃はよく拾い食いしたもの」
「え？　ミャラちゃんも？」
「うん……。僕の場合は食べ物がなくて。ご飯……貰えなかったから。勝手に冷蔵庫の物を食べたら怒られるし……。自分で調達するしかなかったの。パン屋さんでパンを貰ったり、公園で木の実を拾ったり。酷い時はゴミ箱を漁った事も……何度か」
「え……？」

吉川君の反応を見て、ハッと我に返る。
何だか気分が良かったから、つい昔の話をしてしまった。
子どもの頃の酷い話。
拾い食いは皆しているよ。って事を言いたかったのに、これじゃあ内容が重すぎる。
僕が首を横に振りながら、慌てて話を逸らす。

「ご、ごめん。何でもないよ。今のは嘘。気にしないで」
「あの……ミャラちゃん、それって本当？」
「う、嘘。嘘だよ。そんなことないよ」
「本当に？」
「えっと……」

どうしよう？　真顔で問いかけてくる吉川君に、このまま嘘で通せない。
僕がうろたえていたら、吉川君が更に質問を投げかけてくる。

「それって、最近もそうなの？」

……ん？　ちょっと待って。あぁ！
もしかしなくても、このまま行くと。上野進一が酷い親になってしまう！
自分で自分を虐待していた事になるのは悲しすぎる。
僕が頭を整理しながら、説明を始める。

「えっと……今の家族じゃないの。僕は養子だから……。昔の両親が、ちょっと冷たくて。ご飯をくれなかったの。今の家族はとーっても優しいから、大丈夫。あ、えーっと……バイトを探していたのは。本当に家計がヤバくて……」
「そう……」
「あの……昔の事だから気にしないで。今は凄く幸せだし」

僕の言葉を聞いて、吉川君が頷く。不意に顔を上げて、僕を見る。

「そうだ、ミャラちゃん。その……バイトの件だけど。良いバイトがあるんだ。もちろん、あんな危ないバイトじゃないよ。安心して受けられるバイト。ちゃんと給料も出すから。どうかな？　やってみない？」
「えっ……。どんなバイト？　あの……難しい事はできないよ」
「うん、大丈夫。誰にでもできるよ。簡単なバイト」
「や、やる。やらせて下さい。お願いします」
「そんな硬くならなくていいよ。気を楽にして。今から行こうか。バイト先へ」
「う、うん！」

どんなバイトだろう？　僕にもできるバイト……。
吉川君が言うのだから、間違いなく安全なバイトだろうけど……。
勝手に一人で妄想する。

掃除係かな？　お庭の手入れ？
それとも、パーティーの用意をするとか？

バイト探し〈メモリー編9〉

テクテクと廊下を歩き続ける。
うわぁ〜、やっぱり広いな。
瑠菜のお屋敷も広いけど、吉川君の所も凄く広い。

しかも、お高そうな絵画とか、装飾品とか、至る所に置いてある。
壊さないようにしないと……。もしも、壊してしまったら大変だ。
僕には一生掛っても弁償できない物ばかりだろうから。

色々と見る事に忙しくて、足が遅れてしまう僕。
吉川君は僕の様子を窺いながら、ゆっくりと足を進める。
いつしか、一緒になって装飾品を眺め出し。説明まで加えてくれる。
無料美術館。

正直に言って、美術作品とかよくわからないけれど。
説明を聞いていると、わかった気になれる。
わかった気になれるだけで、決して何一つわかっちゃいない。

それでも楽しいから、色々と質問してみる。
吉川君は質問に答えながらも、追加説明までしてくれて。まるで専門家みたい。
吉川君って何でも知っているよね。何でこんなにも物知りなんだろう？

僕なんて、吉川君よりもずっと年上なのに、まったく太刀打ちできない。
ゲームの話なら勝てるのかな？
まぁ、勝てたとしても余り格好は良くないけど……。

そんな具合で、のんびりと歩いていたら、目的地に辿り着く。
それなりに近かったにも係わらず。結構、時間が掛った。
だって、装飾品を見るのに忙しかったんだもの。

大きな扉を開けて、中に入ると。驚きの光景が……。
僕が感動しながら、騒ぎ出す。

「うわぁ、本がいっぱい！」

ずらりと並ぶのは本の山。
学校の図書室の何倍も広い空間に、本がぎっしり。
あっちにも、こっちにも。本、本、本。
吉川君が部屋に足を踏み入れながら、僕に振りかえる。

「ここはボクの書庫。隣が書斎になっているんだ。普段はここにある本を書斎や寝室に持ち込んで読んでいるんだけど……。いつも読みっぱなしで……。とりあえず、書庫までは持ってくるのだけど。仕舞うのが面倒くさくて……。その辺りに、散らばっているでしょ？」

吉川君がとある本棚の前を指差す。
確かに、ちょこちょこと本棚に仕舞われていない本が目に留まる。
吉川君が僕に言う。

「ミャラちゃんには、それを片付けてほしいんだ。順番とかは気にしなくてもいいから、とにかく本棚に詰め込んでくれるだけでいいよ。どう？　簡単でしょ？」

「簡単だけど……。それなら、一時間もあれば終わっちゃうよ。これが終わったら、次は何をすればいいの？」
「これが終わったら……」

吉川君の言葉が詰まる。
不意に顔を赤らめて、背に白い翼を生やす。
何とも気恥ずかしそうな表情をする吉川君。
僕が首を傾げていたら、躊躇いがちに話し出す。

「あの……その……」
「うん？」
「もしも、それが終わったら……。ボクと……」
「吉川君と？」
「あ……遊んでくれない？」
「遊ぶ？」

どういう事だろう？　何だかよくわからない。
僕が不思議な気分になっていたら、吉川君が説明を加える。

「実はボク……あまり友達がいなくて。家が裕福で、才があって……。それでもって、こんな性格だから……。人が寄ってこないんだ。いや、ゼロってわけじゃないんだけど……。近づいてくる人は、神仏を見るような目でボクを見るから。面白くなくて……。とりあえず、対等に話をしてくれるのが、バカ嬢くらいなんだよね……」
「そうなんだ……」
「だから、一緒に遊んでくれる友達が欲しくて……」

吉川君の声がどんどん小さくなっていく。
それにしても、何でもできる吉川君にも悩みはあるんだなぁ……。
ちょっと意外だ。

僕が笑顔で返答する。

「うん。もちろん、いいよ。こんな僕でよければだけど……」

「本当に！？　ありがとう！」

僕の言葉を聞いて、吉川君が凄く晴れやかな笑顔を見せる。

うわぁ、やっぱり吉川君は天使様だ。

吉川君が背に翼をつけて、ニッコリ笑えば、凄く絵になる。

その後、少し話をしてから。僕はバイトのお仕事をさせてもらう。

吉川君は僕の近くで本を読んでいる。本当に本が好きみたい。

吉川君のお邪魔にならないように、静かに本を仕舞う僕。

あぁ、何だか心地の良い空気……。

バイト探し〈メモリー編１０〉（前書き）

最近の上野は案外に前向きだな。

バイト探し〈メモリー編10〉

しばらくして、仕事を終えた僕が吉川君に声を掛ける。

「あの……。お仕事、終わっちゃったんだけど……」

「え？　もう終わったの？　思った以上に、早かったね……」

「バイトだから……ちょっと張りきっちゃった」

「そんなに急がなくてもよかったのに……」

「でも……やっぱりお仕事だから。ちゃんとしなくちゃ」

「フフッ、ミャラちゃんは真面目だね。給料の事は爺やに言ってあるから、帰りに貰って。とりあえず、現金だけど……。振り込みよりも、その方がいいよね？　すぐに必要なんでしょ？」

「うん、ありがとう。助かるよ」

一仕事終えて、充実した気分。

そういえば、このバイトって一回限りかな？

かなり美味しいバイトだけど、あまり無理は言えないし……。

僕の心を見透かしたように、吉川君が話し出す。

「週に二回か……三回くらい手伝ってくれたら嬉しいのだけど。どうだろう？」

「えっと……是非ともお願いしたいです。だけど……あの……本当にいいの？」

「もちろんだよ。正直を言うと、毎日来てもらいたいくらいだけど……。それじゃあ、ミャラちゃんに悪いから。週に何度か……ミャラちゃんの時間がある時にお願いできるかな？　バイトをしたくなったら、ボクに連絡して。遠慮しないでね。ボクも手伝ってほしいから」

「は、はい。ありがとうございます！」

頭を下げながらお礼を言う僕を見て、不意に吉川君が話を変える。
「さて、バイトも終わったし。今度はボクと遊んでくれる？」
「うん。何するの？」
「じゃあ、まずは家の案内をしようか？」

そういうわけで、吉川君の家を案内してもらう。
家っていうか……規模はお屋敷。菊池家のお屋敷並に広いお屋敷。
お屋敷慣れしている僕だから何も思わないけれど、こういう所に初めて来る人は驚くだろうな。
きっと目を丸くするに違いない。

それにしても、菊池家と同様にやっぱり何でも揃っている。
よくよく考えれば、菊池家は日本一。吉川家はそれに次ぐレベルの大富豪。
そんなにも凄い家柄の人達に囲まれながら、一般人レベルで暮らすのは僕。

うーん……しかも、お嬢様とお坊ちゃま。二人共に僕よりずっと年下だ。
あぁ、何だか恥ずかしくなってきた……。
年下の女の子と男の子にお世話になるなんて、僕のレベルはペットだろうか？

何ともいえない気分になりながら、家案内を楽しむ。
不意に入った部屋の中、周りを見て僕が騒ぐ。

「わぁ～、絵がいっぱい」
「ここはボクのアトリエ」

「え!?　って事は、この絵……吉川君が描いたの?」
「うん。まぁ、あまり上手くないけどね。独学だし……。好き勝手に描いた落書きのような物だよ」
「そんな事ないよ!　すっごく上手いよ!」

冗談抜きで上手い。本当にプロの人が描いたのかと思われるような上手さだ。
感心しながら、絵を見て回る僕。
それにしても、多種多様。水彩画や油絵、鉛筆で描いた物もある。

ただ全てが風景画。色々な国の風景。現実にありそうな絵ばかり。
人物画は描かないのかな?
チョロチョロと絵を眺めていたら、不意に気になる物を発見する。

一枚だけ、布が掛っている絵。
部屋の隅の方なのに、何だか妙に目立っている。
そっと近づき、中を覗こうとする。だけど、布を取らないと見えないな……。
この布って……捲ってもいいのかな?

僕がそわそわしていたら、吉川君が近づいてくる。

「どうしたの?　そわそわして……」
「これ、これは何?　どうしてこの絵だけ布が掛っているの?」
「あぁ……それか」

吉川君が絵に近づいて、埃よけの布を取り除く。
その下から出てきた絵は意外な物……。
描かれているのは、一人の女の子。高校生くらいの女の子。
お花畑の中、こちらを見ながら、優しそうに微笑んでいる。

この子……僕によく似ているな。もちろん、今の僕に……だけど。
今の僕に、もう少し身長をプラスして、髪の毛を肩くらいまで伸ばしたら。
兄弟よりもそっくりになれそうだ。

僕が問いかけるまでもなく、吉川君が説明してくれる。

「彼女の名前は、門倉楓（かどくらかえで）……。ボクの……」

一瞬、吉川君の言葉が詰まる。すぐに押しだすように口にする。

「ボクの……昔の彼女」
「今は？」
「彼女……亡くなったから」
「え……？」

亡くなった？　にしては、若過ぎないか？
日和みたいに病気持ちだったのかな？　それとも、事故？
僕が一人で妄想していたら、吉川君が寂しそうに話し出す。

「彼女ね……。何か……思い悩んでいたみたいなんだ。彼女が亡くなる……一週間くらい前から、様子が一変して……。それまでは、元気だったのに……急に塞ぎ込んで。ボク……凄く心配して、何度も彼女に問いかけたのだけど。答えてくれなくて……。そしたら、一週間後に……彼女の部屋で」

吉川君が黙り込む。
話の流れから察するに自殺……かな。若気の至りだろうか？
僕も若い頃は生きる事に苦痛を覚えた事が何度となくある。

というか、僕の場合は幼い頃か……。

中学に入って、日和に出会ってからはハッピー&ハッピーだ。
暴走するくらいに惚れこんで、日和が僕の生命力になっていた。
全てのエネルギー源は日和。
おかげ様で、家も飛び出し、バイトに明け暮れ。
どんな苦難も恋一つで乗り越えてきた気がする。

まぁ、日和が亡くなってからは……どん底に落ちたけど。
エネルギー源がプツリと途切れて。生きるどころか、死ぬ気も失せて。
ずーっと寝ていた。冬眠する熊以上に寝ていた。
食事もほとんど取らずに、今までよく生きてこられたなと。今になって感心する。

そう考えたら、僕ってしぶといよね……。
死んでいても不思議じゃない状況が二度もあったにも関わらず、今は平気にヘラヘラと生活している。
絵を眺めながら、物悲しそうな顔をする吉川君に向いて、僕が話しかける。

「辛いよね……。残されるのって」
「うん……」
「僕も凄く辛かった。大切な人を失ってから……。『どうしてあの時に』って言葉が付きまとうの。あの時に僕があああしていれば……。って」
「……ミャラちゃんも？」
「……え？　あぁ、うん。僕の恋人も亡くなったの。病気で……。身体が弱かったから。それなのに、僕はその人を引っ張り回して、いろんな所に連れて行って。もっと安静にさせてあげれば、まだ生

きていたのかな？　って、後で凄く悔んだよ」
「そうなんだ……」

吉川君の表情が少し和らぐ。
同じではないけれど、少し似通った経験を持つ僕の話を聞いて。気持ちが落ち着いたみたい。
僕が吉川君に振りかえって、話を続ける。

「僕達って、よく似ているね。大切な人は失ってしまったけれど……。それでも、強く生きなくちゃ。僕達が悲しんでいたら、亡くなった人達も悲しいもの。皆が楽しく暮らせるように、笑顔で頑張ろう。ね？」
「うん、そうだね」

僕がニッコリ笑ったら、吉川君も微笑んでくれる。
そうそう、笑顔が大切。って、日和がいつも言っていた。
最近の僕は嫌でも笑顔が尽きない。
楽しい時って、やっぱり笑顔になるんだね。不思議だな……。

バイト探し〈メモリー編11〉

その後、吉川君と話をしながら、歩きまわる。
凄く綺麗なお庭で、吉川君に花の首飾りを作ってもらったり。
大きな池で、お魚に餌をあげてみたり。
そうこうしていたら、夕食まで頂いて。
その後も、駄弁って遊んで、大忙し。

夜になり、吉川君の部屋でお喋りをしていたら、扉を叩く音が聞こえてくる。
吉川君が返事をして、入って来たのが執事さん。執事さんが吉川君に話しかける。

「坊っちゃん、そろそろ就寝されないと……」
「え？　今、何時？」
「九時半でございます」
「九時半？　それなら、まだ早いよ」
「ですが、坊ちゃん。これ以上、遅くなりますと上野様のお帰りが……」
「あ、そっか……。僕、帰らなくちゃ……迷惑だね。余りに楽しくて、帰る事を忘れてたや」

僕が帰宅を思い出して、帰ろうかと立ち上がる。
そんな僕に話しかけるのは吉川君。

「ミャラちゃん、もう帰っちゃうの？」
「いや、だって……。これ以上、迷惑を掛けるわけには……」
「迷惑じゃないよ。あ、そうだ。今日は泊まっていきなよ。明日は車で学校に送るから。ミャラちゃんの家には連絡を入れるし」

「だけど、迷惑じゃない……？」
「迷惑じゃないって。ねぇ、いいでしょ？　爺や？」
「……上野様がよろしければ。よろしいかと存じます」

執事さんが答える。
僕が戸惑いがちに吉川君を見ると、吉川君の瞳が爛々と輝いている。
どう考えても、ヒート状態。今が楽しくて、楽しくて、堪らない。

例えて言うなら、仕事が一段落した後。
飲み会が終わり、渡辺が見せる、あの瞳……。
まだまだ飲もうぜ！　次は二次会だ！　みたいな。
あれに似通ったオーラを感じる。

こういう目をしている人からは逃げられない。
何が何でも自分の期待通りに話を持っていこうとする。いわゆる自己中状態。
まぁ、僕は別に構わないけど。
僕が理解を示すと、吉川君がもの凄く嬉しそうな顔をする。

すぐに執事さんに部屋を用意させて。
ついでに就寝時間を遅らせようと話をつける。
決まる時間は十一時。十一時には就寝する事。
僕に与えられた部屋は、吉川君の部屋からさほど遠くない場所にある。
物の三十秒で辿り着く場所。

部屋を確認した後、吉川君と遊ぶのだけど。
時間経過が早過ぎる。気付けば、もう十一時。
吉川君が『まだまだ遊ぶ』と喚き立てる中、執事さんが無理矢理に吉川君を寝かせつける。

僕は与えられた部屋に入って、ちょっと寛ぐ。
しばらくして、ベッドに入り。
さて……寝るか。と思うのだけど、眠れない。
何だか寂しい、一人は寂しい。
最近は、隣に必ず誰かが居るから。一人で眠る事がない。

家では、日和とハルと僕……三人で狭いベッドに入り眠っている。
僕が女の子になってからは、皆で眠っている。
遠慮とかなくなった。だって、日和とは女の子同士だもの。
ハルは子どもだし、気にしない。

瑠菜のお屋敷では、もちろん隣に瑠菜がいる。
嫌でもいる。まぁ、嫌じゃないけど。
イチャイチャしながら、就寝するのが基本。

ゴロゴロと布団の中を転げまわる。
うーん、眠れない。どうしても眠れない。
三十分近く転げ回った後に、起き上がる。
このままじゃあ、不眠症だ。それは流石に明日が辛い。

枕を抱きしめながら、部屋から抜け出す。
ちょこちょこと吉川君の部屋に近づき、ノックする。
吉川君……起きているかな?
そう思っていたら、ふいに返事が帰ってくる。
吉川君の声を聞いて、安堵を覚える僕。

扉を開けて、中に入るとパジャマ姿で手に本を持ちながら、ベッドに座る吉川君の姿を発見する。
今は髪を括っていない。

ベッド脇にあるライトが点いている。
どうやら読書していたみたい。
目を丸くしながら、吉川君が問いかけてくる。

「どうしたの？　ミャラちゃん？」
「眠れないの……」
「今日は怖い思いをしたものね……。何か飲み物でも用意しようか？」
「ううん……そうじゃないの」
「え……？　じゃあ、どうして？」

首を傾げる吉川君に近づいて、吉川君のベッドに潜り込む。
枕を置いて、勝手に隣で眠ろうとする。
そんな僕を見て、仰天する吉川君。
僕が寝転びながら、口を開く。

「隣に誰かいないと……眠れないの」
「へっ……！？　あの……でも……」
「駄目……？」

僕が強請る様な眼で吉川君を見たら、吉川君が炎上する。
すぐに真っ白な翼を付けながら、戸惑いだす。

「いや、あの……。ボク……」
「ん～、邪魔しないから」
「え……う、うん」

吉川君が顔を赤らめながら、しばらく時間が経過する。
何だか眠くなってきた。
僕が目を瞑りだしたら、不意にライトの消える気配。

薄らと目を開けたら、消えたライトの代わりに光輝く吉川君。
背の翼は消えているけど。ほんのりな明るさが良い感じ。

吉川君が僕から離れて、端っこの方に行く。そしたら、寂しい。
僕が吉川君に声を掛ける。

「そんなに端っこに行ったら、落ちちゃうよ」
「だ、大丈夫……」
「もっと真ん中に来ないの？」
「う、うん。いや……こっちの方が落ち着くから」

ん～、それだと僕が眠れない。だって、眠るには隣に人が必要だ。
お邪魔になる事を理解しつつ、転がりながら吉川君に近づく。
吉川君を背後から抱きしめると、吉川君の身体がビクつき、白い翼が出現だ。
ふわぁ～、翼に追い払われた～。ちょっと吉川君が遠くなる。

何だか目が覚めてきて、せっかくだから翼をいじって遊んでみる。
フニフニ触って、顔をスリスリと擦りつけて。
うーん、なめらかで気持ちいい。それに暖かい。
翼の触感を楽しんでいたら、吉川君が恥ずかしい声を出す。

この翼は敏感だから……。
きっと身体の芯からゾクゾクしているのだろうな。
わかっていながら止めない僕。
それからしばらくして、吉川君が起き上がる。布団がずれて、寒い……。

寒い、寒い。と思っていたら、吉川君がこっちに向いて横になる。
あー、暖かい翼が遠くへ行ったー。

残念がる僕に向いて、恥ずかしげに吉川君が口を開く。

「もう止めてよ。眠れないじゃない」
「だって、暖かいんだもの。僕は寒がりなの」
「だからって……あんなに翼を触られたら頭がおかしくなるよ」
「気持ちいいでしょ？　敏感だから」
「わかっている癖に……」
「フフフッ……」

悪戯をして、楽しげな僕。
そんな僕を見て、吉川君が逆襲をしてくる。
僕のネコ耳に手を伸ばして、フニフニフニフニ。
やぁ……やぁ～。あーん、気持ちいい。変になる……。
今度は僕が恥ずかしい声を出して、吉川君にしがみ付く。そしたら、吉川君が炎上。
吉川君の手が止まった隙に、吉川君に抱きついたまま奥にある翼に手を触れる。

「やぁっ！？」驚いて声を上げる吉川君。
「逆襲返し！」
「やったな。この～」
「あぁん！　ダメっ！　はぁう！」

今度は吉川君に仕返しされて、頭の中が白くなる。ん～、ヤバい快感。
二人でふざけていたら、どんどん眠くなってくる。あぁ、やっと眠れそう。

バイト探し〈メモリー編１２〉（前書き）

人懐こい子猫を見ているようだ……。

バイト探し〈メモリー編12〉

誰かが抱きしめてくれる。暖かい……。気持ちいい……。
フワフワとした夢から目覚める。
目を開けて、しばらく停止。
目の前には、日和でもハルでも瑠菜でもない、見た事のない男の子
……。

……。

一分近く停止する僕。
昨日の出来事を振り返り、やっとのことで思い出す。
あぁ、吉川君！　髪を解いていたから、わからなかった。
吉川君はスヤスヤと幸せそうに眠っている。

わ～、綺麗な顔。瑠菜の寝顔も可愛いけど、吉川君も可愛いな。
二人共、外国の血が流れているらしい。
混血児は美顔が多いっていうけど、本当なんだなぁ～。

まじまじと吉川君の顔を覗き込む。
吉川君は起きそうにない。ぐっすりと眠っている。
そんな吉川君を見て、変な事を考える。
一体、どこまで顔を近付けられるだろう？　ちょっと試してみたく
なる。
現在の距離……五センチ。うーん、結構近い。吉川君に声を掛けて
みよう。

「吉川君、吉川君」

反応なし。スースーと寝息が聞こえてくる。
ちょっと顔を近付けて、今度は三センチ。
もう一度、声を掛けてみる。

「伊吹君、伊吹君」

反応なし。なかなかの熟睡タイプだ。これでも起きないのか……。
更に顔を近付ける。一センチ……。もう限界レベル。
これ以上近づいたら、顔が当たる。
僕がテンポよく口を開く。

「い・ぶ・き・く・ん」

不意に瞼が動く。ゆっくり吉川君の目が開いていく。
目を開けた瞬間に待っているのは、僕の顔面。さぁ、叫べ！
僕がワクワクしていたら、ぼんやりする吉川君と目が合う。
吉川君は寝ぼけているみたい。
叫ぶ事はなかったけれど、不意に顔を動かす。

余りにも距離が近かったから、僕達の唇が触れ合ってしまう。
あ、ヤバい。ゲームオーバーだ。顔が触れたらゲームオーバー。
僕が勝手に考えた設定。

さぁ、どうしよう？
逃げるにも、叫ぶにも。タイミングを失ってしまった。
キスされた状態で停止する僕。
吉川君は夢心地。ボーっとした瞳が閉じていく。

え？　このまま二度寝？　それ、困るよ。
僕がそんな事を考えていたら、急に吉川君が飛び起きる。

僕から離れて、翼を付けながら赤面する。

「う、うわぁ！？　ご、ごめん！」
「あー、起きちゃった」
「わ、わ、ごめん。今、ボク……」
「伊吹君にキスされた～」

口元を押さえて真っ赤になる吉川君を見て、プーっと膨れる僕。
どう考えても僕に非があるのだけど、吉川君の慌てる姿が面白いから冗談を続ける。
恥じらうような表情を浮かべて、上目遣いで吉川君を見る。

「伊吹君にキスされた～。い・ぶ・き・く・ん、にキスされた」
「だ、だって、起きたら目の前にミャラちゃんがいるから……」
「目の前にいたらキスするの？　伊吹君ったら、積極的～」

好色な目つきで吉川君を見たら、吉川君が更に赤くなる。
今度はどこまで赤くなるかチャレンジしてみよう。
吉川君に近づいて、目前で囁く。

「伊吹君にキス～されたぁ～」
「だ、だから、謝ったじゃない！　だ、大体、ミャラちゃんが近づいてくるから……」
「違うもの。伊吹君が近づいてきたの。伊吹君が～」
「ま、まず、『伊吹君』って何なの！？　昨日は『吉川君』だったじゃない！　急に馴れ馴れしいよ！」

あーあ、怒られちゃった。
燃え上がりながら、半パニックになる吉川君を見て、クスクス笑う僕。

吉川君に向いて、謝罪する。

「ごめんなさい。ちょっとからかってみただけ。朝から顔が真っ赤だよ、吉川君」

「いや……別に怒ってるわけじゃあ……」

「吉川君はすぐに赤くなるの。それが面白いの」

「……」

未だに赤面する吉川君。

視線がウロウロと定まることなく忙しない。

だけど、僕を見てくれない。何だか恥ずかしいみたい。

それでも、いつしか僕と視線が合い。また余所を見ながら、小声で呟く。

「いいよ……」

「え？　何か言った？」

「伊吹君でいいよ……。ボクも……ミャラちゃんの事、名前で呼んでいるから」

「え……。でも、吉川君を名前で呼ぶなんて……。そんな事したら、何か言われそうだよ」

「いいよ。ボクが構わないって言っているんだから」

吉川君……名前で呼んでほしいのかな？

もしかしたら、楓という子もそういう風に呼んでいたのかも。

僕が頷いて、笑顔で口にする。

「わかった。じゃあ、伊吹君でいい？」

「う、うん……」

「それとも、伊吹にする？」

僕が問いかけたら、吉川君からマグマが噴火。あぁ、これで決定だ。
硬直する伊吹を見ながら、僕が一人で伊吹音頭を歌う。
名前を連呼されて、伊吹は蒸発寸前。
僕達がバカな事をしていたら、急に人の声。
扉の前を見ると執事さん。朝から礼儀正しくキッチリした服装だ。
僕達に向いて口を開く。

「お楽しみの所、大変申し訳ございませんが……。そろそろ、朝食のお時間でございます」

バイト探し〈メモリー編13〉

こうして、朝食を頂いて。
更に、昨日のバイトのお給料も頂いて。
学校にまで送ってもらって。至れり尽くせり。

勉強道具は学校に置いてあるから、問題ない。
学校へ向かう途中も車の中でお喋りだ。
朝から元気溌剌な伊吹。そんな伊吹を眺めながら、のほほんとする僕。

学校へ到着し、車から降りたら。周りから感じる視線。皆が僕達に目を向ける。
まぁ、そうだろうな。瑠菜と僕の時でさえ、反射的に視線が集中するのに。伊吹と僕なら尚更だ。
何だ、この異常事態？　って、思っているに違いない。

だけど、神経が鈍くなっている僕には余り関係ない。
周りの事など気にもせずに、教室へと向かう。
教室に入ると、何かが吹っ飛んできた。
僕に抱きついてくるのは、今にも泣きそうな瑠菜。
朝からどうしたのだろう？　僕が心配して、頭を撫でたら。瑠菜が答えてくれる。

「上野、昨日……襲われたって。バカな奴らに襲われたって……」
「あぁ、大丈夫だよ。心配かけてごめんね。伊吹に助けてもらったから。僕は大丈夫」
「でも、身体を触られたんでしょ？　怖かったでしょ？」
「うん、怖かった……。でも、僕も悪いの。もう二度とあんな所に

は行かないよ」
「ねぇ、お金が必要なの？　だったら、私があげるから」
「そこまで知ってるの？　もう……恥ずかしいな。だけど、心配しないで。伊吹が凄く良いバイトを教えてくれたから。変なバイトじゃないし、安心して」
「うん……」
瑠菜が僕に抱きつきながら、伊吹に顔を向ける。
「今回だけは礼を言うわ。だけど、『伊吹』って何？　どうして名前を呼ぶ仲になっているの？　まさか上野に手を出していないでしょうね？」
「名前は……ボクもミャラちゃんの事を名前で呼んでいるから。その方が良いかと思って……。それと、お前が思うような事は何一つ……」
伊吹が話をしている最中、僕が余計な事を言う。
「伊吹ったらね。ベッドの中で、僕の凄く敏感な所をいじくり回すの。だから、僕……凄く感じちゃった」
いたいけな表情を浮かべる僕の隣で、伊吹が炎上しながら、翼を生やす。もちろん、瑠菜が発狂だ。
「上野に何したの!?　この変態！」
すぐに伊吹が両手を振りながら、真っ赤な顔で否定する。あぁ、面白い。
「ち、違う！　ミャラちゃん、誤解を生むような事を言わないで！」

「昨晩は気持ち良かったね」
「だから、そういう事を言わないでって！　だ、大体、ミャラちゃんがボクのベッドに潜り込んでくるのが、悪いのだし。初めに手を出してきたのは、ミャラちゃんで……」
「だって、一人じゃ眠れないんだもの」
「上野！　こいつに気があるの!?　ねぇ、ないわよね!?　上野は私の方が好きよね!?」

瑠菜が涙を流しながら、僕の服を振り回す。あぁ、可愛い。
僕が瑠菜を抱きしめて、頬ずりすると、少し落ち着く。
瑠菜に軽くキスして、笑顔で言う。

「冗談、冗談。ベッドに潜り込んだのは本当だけど。そういう事はしていないよ。フフッ……ちょっとじゃれ合ったけど。ネコ耳と翼の触り合い。伊吹の翼は暖かくて気持ちが良いの」
「そう……。でも、一緒に寝たのね」伊吹を睨みながら、プーっと膨れる瑠菜。
「だから、ミャラちゃんが勝手に入ってきたんだって……」

伊吹は必死だ。自分は手を出していないって、必死になりながら訴えている。
確かに全部、僕が悪い。
伊吹って、こういう所は消極的だよね。瑠菜は行動的。
似ている二人の違うところ。

ふと気付くと、周りの人達が囁きながら僕達を見ている。
あれ……？　もしかして、僕……非常識な事をした？
そうでもないと思うけど……。神経が鈍っていて分からない。
これもそれも瑠菜のおかげだ。

瑠菜と伊吹の言い争い。
昨晩の出来事について、疑いの目を止めない瑠菜に対して。
伊吹は必死になりながら、真実を訴えている。
そういえば、ハルはどうしたんだろう？
今日はまだ来ていないみたいだけど……。

異世界訪問〈吉川編1〉（前書き）

今回のお話が、タイトルに一番近い内容……な気がする。

異世界訪問〈吉川編1〉

「どうしよう……？　困ったな」

ボクの手には一つのボールペン。
ミャラちゃんが普段から大切そうに持ち歩いているボールペンだ。
ミャラちゃんがバイト先でヤクザ共に襲われた事件……。
あの事件の後、気を失うミャラちゃんのスカートから落ちた物を、
ボクが拾って所持していた。

ミャラちゃんが目覚めたら返そうと思っていたのだけど……。
他の事に気を取られていて、すっかり忘れていた。
返しそびれて、この始末。
今は夜中だから、電話をするわけにもいかない。

深夜の私邸。寝室にて、カジュアルな服に着替えると。
走り回るチロを肩に乗せて、部屋を出る。
今から、娯楽時間、夜の散歩。この時間は人が少ない。
警備の者は回っているけど、それ以外は皆して眠る時間だ。

いくら過保護の爺やでも、眠らないわけにはいかないから。
爺やが眠るこの時間帯は一人になれる。
この間、ボクが夜の散歩の事を教えたら。
しばらくは騒いでいたけれど、私邸から出ないという話を聞いて、
爺やも諦めがついたようだ。
まぁ、実際は外出するけど……。それはもちろん黙っている。

ミャラちゃんのボールペンを手に持ちながら、廊下を歩く。
暗み掛った廊下の中、きっとボクは目立っているのだろう。
警備の者に見つかったら、何か言われそうだ。
細心の注意を払いながら、散歩しないと……。

庭に出ると、チロが肩から降りて、散策する。
その間、ボクは椅子に座りながら、休憩だ。
この辺りは、ライトアップされているから。ボクだけが浮き出て光り輝く事もないだろう。
昔なら、暗闇に紛れるようにして行動するのだけど。
身体が輝くようになってからは、明るい場所にいた方が、却って目立たない。

それにしても、このボールペン……かなり使いこんでいるな。
薄く傷が付いていたり、黒ずんでいる箇所が目に付く。
こんなにも薄汚れているにも関わらず、ミャラちゃんがこのボールペンに執着する理由はなんだろう？
もしかしたら、ミャラちゃんが話していた恋人の物だったのかな……？

ぼんやりとそんな事を考えていたら、急にボールペンが輝きだす。
とっさの事で驚いて、ボールペンを落としてしまう。
転がって行くボールペン。近くにある木に軽く触れる。
すると、その木が白く輝きだした。

目を丸くするボクの元へと駆けてくるのはチロ。脅えながらボクの肩によじ登る。
ボクは輝く木に目を向け動けない。何が起きた？　理解不能な現象。

しばらくは硬直していたけど、ふいに立ち上がり。

輝く木に近づいて、警戒しながらボールペンに手を伸ばす。
ボールペンを拾い上げ、輝く木を眺めていたら。いつしか、元の木に戻ってしまう。

ボクの手元には輝き続けるボールペン。
今の出来事を確かめるために、ボールペンを木に当ててみる。
すると先程と同様に、その木が白く輝きを放つ。
不思議な現象に面食らうボクの耳に聞こえてくるのは女性の歌声。
ミャラちゃんじゃない……。だけど、凄く似通った歌い方。

不意にチロが地面に下りて、輝く木の中へと駆けて行く。歌声に釣られたのか？
取り残されたボクはチロを呼び戻そうとするけど、チロは帰ってこない。
仕方ない、行ってみるか……。チロに続いて、ボクも木の中へと足を向ける。

真っ白な世界。輝きを失ったボールペンを手に持ち。歌声に向かって、歩き続けるボク。
なぜだろう？　胸が高鳴る。ボクは何かを期待している。
この先にある物。それがボクの知らない世界であってほしい。そう願う自分がいる。

幼い頃は夢見がちな子どもだった。
本を読むにしても、童話や空想物が好きで。
そういう物ばかりを読んでいた記憶がある。
そうしたら、大人達がボクの将来を心配して。
ボクの知らない間に、そういった本を全て捨ててしまった。

泣きはしなかったものの、子ども心にかなりのショックを受けた。
辛い思い出だ。
それ以来、そういう本を読む事は大人達の期待に反する事だと勘付き、自らも求めないように心掛けたけど。
爺やがこっそりと残してくれたボクの愛読書は未だに残してある。
愛読書を爺やから受け取った時は本当に感動したものだ。

この歳になって、そういう夢見がちな傾向は薄れたけど。
ミャラちゃん達と出会い。
狭間という奇妙な世界を知り、自分の背に翼が付いたら。
流石に期待してしまう。
前にテレビで人……ハル君が空を飛んだと聞いた時は、ただの遣らせだろうと思っていたけど。
いざ自分が空を飛べるようになると、遣らせだなんて言えなくなった。

歌声だけを頼りに、歩き続けていたら。不意に何かが現れる。
視界が開け、目に留まるのは大きな大木。
その近くに座っているのは歌を口ずさむ少女。
まるで王国のお姫様のような姿。少女の肩には青い鳥、膝の上にはチロ……。

ボクが少女に近づくと、少女が歌うのを止めてしまう。ボクの方に向いて、口を開く。

「メモリーさん……ではありませんね。足音が違います。あなたはどちら様で？」
「ボクは吉川伊吹。君は？」
「私は……そうですね。『姫様』と名乗っておきましょう。皆さん

がそう呼ばれますから」
「そう……」

足音で人を判別する……。
という事は、この少女は目が見えないのか？
それに『姫様』って確か……未来という人が言っていた。
ボクが口にしたペガサスの卵……それは『姫様』の世界にある物だって。
ボクが姫様に問いかける。

「ここは異世界？」
「そうですね……。どちらとも取れない存在です」
「……」
「一言で説明するのなら、中心になります。皆さんはここを『セントラル』と呼んでいます」
「セントラル……。じゃあ、この場所から、ボクが歩いてきた道とは別の方向へ歩けば……異世界に辿り着くの？」
「そうですね。あなたからしてみれば、異世界になるでしょう」

軽く答える少女。今の話は真実だろうか？
しかし、少女が嘘を言っているようにも思えない。ならば、確かめてみよう。
ボクがチロの名を呼ぶと、チロがボクの元へと駆けてくる。
いつもの指定席、ボクの肩に乗って、辺りを見回す。

ボクが歩いてきた道とは別の方向に足を向けたら、姫様が口を開く。

「そちらはよろしくありませんね。まず、初心者はあちらからがよいでしょう」

「あっち？　そう……ありがとう」
「それではあなたにお使いを頼みます。ニートさんという方を見つけて、『今日のおやつ』を貰ってきて下さい」

お使いか……。まぁ、いい。
ボクが了承して、チロと一緒に目的地へと向かう。
背後から、姫様の声。

「一つ注意です。歩きだしたら、曲がってはいけません。狭間に落ちてしまいます。自分が思う真っすぐの道を歩いて下さい。まぁ、自ら曲がろうと願わない限り。そうそう落ちるものではありませんから、大丈夫だと思われますが……。とりあえず、念を押しておきます」
「あぁ、わかったよ……」

理解を示して、歩きだす。
異世界……それはどのような物だろう？

異世界訪問〈吉川編2〉

しばらく歩いていると、白い世界が変化し。
気付けば、中庭のような場所にいた。
天井はガラス張りで、青空が見える。
ボクの私邸ではない、別の場所。
不意に聞こえてくるのは、人が争う声。
そちらに目を向けると、椅子に座る短髪の女の子。
机を挟んだ対面には、黒コート……未来という人。

女の子が机を叩きながら、不平を言う。

「わかんない！　わかんない！　漢字なんてわかんない！」
「分からないから勉強しているんだろ？　騒ぐ元気があるのなら、それを頭に打ちこめ！」
「大体、漢字なんてなくても。ひらがなとカタカナで十分じゃない。誰が漢字なんて作ったのよ!?」
「知るか。それより、勉強する気がないのなら。俺は向こうに行くぞ。君のバカ騒ぎに付き合っている暇はないんだ」
「どうせ向こうに行っても、転がりながらポテチ食べるだけでしょ？　ちょっとくらい付き合ってよ」
「じゃあ、ヤル気出せ」
「これが限界」
「そうか……。低レベルな限界だな。このままじゃあ、どうせ次も赤点だ。まぁ、国語が赤点なのは構わないけど。せめて、テストの問題くらいは読めるようになってくれ」
「読めるし！　それくらい読めるわよ！」
「この間、わけのわからない事を言っていただろ？　覚えてないのか？」

「あれは問題の意味がわからなかっただけで……」

女の子が言い訳をする中、未来が一案出す。

「こうなったら、君の超得意分野。科学の力で、なんとかならないか？　人にバレないようにカンニングできる機械を作るとか……」

「カンニングの機械は前に作った事があるけど……。失敗したから、もう嫌」

「作ったのか……。流石だな。それで、失敗という事は、先生に見つかったのか？」

「ううん、答えを間違えていたの。カンニングは成功したけど、用意した回答が間違ってちゃあ意味ないわよね」

無表情に答える女の子。その姿を見て、未来が大笑いする。

笑い転げる未来を見ながら、顔を赤らめ怒鳴りだす女の子。

最後は女の子が未来に向かって、教科書を投げつける。

未来が空を飛ぶ教科書を上手く掴んで、机の上に置き。楽しげな表情で、ボクに目を向ける。

「あれ～？　誰が来たのかと思えば……。もしかして、吉川君？　これまたビックリなお客さんだね」

「えらく口調が変わるんだね……。まるで別人みたいに……」

「お客さんには優しくしなくちゃ。それにしても、君……一人で来たの？」

「まぁね……」

「……ふーん。メモリーのボールペン……どうして君が持っているのか？　不思議で仕方がないけれど、聞いたところでどうにかなる問題でもない。とにかく、早く返してあげるんだね。じゃないと、メモリーが毎度の如く泣き出すよ。あぁ、メモリーって言うのはミャラちゃんの別名だよ」

未来がボクの手にあるボールペンを一瞥した後、女の子を横目で見る。

「そうそう、君は頭が良かったね。だったら、バカを天才にする方法を知らない？」

「さぁ？　だけど……。もし、そんな事ができるのなら、既に世界は天才で溢れているよ」

「そりゃそうだね。やっぱり諦めるか」

「まぁ、しいて言うのなら。記憶は興味の上に成り立つよ。どうしても、記憶すべき対象物に興味が持てないのなら。罰を与える事だね。人は恐怖でも学習するから」

「そりゃあ良いや」

「又は、他の興味を全て奪い取ってしまうか」

「成る程。漢字の本しか存在しない部屋に閉じ込めるのか。それは面白い」

「面白くない～。あ～、もう～無理～」

女の子が泣き言を言って、机の上に伸びる。

それを見ながら、ため息をつくのは未来。

ボクが二人を眺めていたら、未来が口を開く。

「吉川じゃあ、ここには合わない。名を名乗るなら、イブキだね。ちなみに俺はディサスト、覚えておいて。この子はキッシュ。そうそう、姫様にお使いを頼まれたみたいだね。ニートというのは、ゼイガス。まぁ、ニートで通じるよ。最近は、皆がニートって呼んでいるから」

「どうして……？」

「お使いの話を知っているのか？」

「……」

「まぁ、読心術って奴かな？」

ディサストがボクに向いて、何とも薄気味悪い笑みを浮かべる。妙な人だ……。

キッシュが眉をしかめながら、ノートに落書きをする中。ディサストが扉を指差し、話し出す。

「あっちが出口。ニートは図書室にいると思うよ。いなかったら、談話室だね。ちゃんと部屋の入口に名前が書いてあるから。まぁ、時間があるなら。他も見学していきなよ。この世界は基本的に安全だよ。大怪我ぐらいはするかもしれないけれど。死にはしないね。特に、君は回復力が強いから。問題ないよ」

大怪我ぐらいか……。チロが怪我をしないように気をつけないと……。

ボクの肩ではしゃぎ回るチロを撫でながら、扉に向かって歩き出す。

異世界訪問〈吉川編3〉

扉を出ると、廊下に繋がっていた。
歩きながら、辺りを見回す。ここはビルの中らしい。
廊下の窓から外を見ると、日差しが見える。朝というより昼……。
先程までは夜中だったのに、世界が異なると昼夜も異なるのか。

しばらく歩いていると、人の声が聞こえてくる。
食堂という文字が書かれた扉の中。気になり顔を覗かせると、二人の人物が目に留まる。
一人は妙に気力のなさそうな人で、もう一人は非常に綺麗な人だ。

美人が腕を組みながら、冷蔵庫の前で眉をしかめていて。
無気力人が椅子に座りながら、机の上に山積みにされた雑誌を眺めている。
不意に美人が冷蔵庫の扉を開く。
すぐに乱暴に扉を閉めて、大きな声で不平を述べる。

「もう嫌だ！　何なんだよ、この冷蔵庫！　捨てても、捨てても。中がゴミ溜めになるなんて。何てエコ意識のない冷蔵庫なんだ！」
「うるさいなぁ～。お前、天才なんだから。何とかしろよ」
「何とかしたくても、どうにもできないんだよ。加工できる物なら、手を付けるけど。カツ丼って、もうそれで一品じゃないか。カツ丼を加工って、錬金術じゃないんだから。無理だし、無理。しかも、それが八つもあるんだぞ。冷蔵庫を開けたら、八つのカツ丼に睨まれるんだぞ」
「じゃあ、食えよ。食えば解決する」
「こんなに食べれるかー！」
「文句の多い天才だな。じゃあ、カロリーを消費して。食欲だそう

ぜ。つーわけで、この間違い探しの本の山を手伝って」
「本の厚み……計五十センチもある間違い探しなんて。そんな物……存在自体が間違っている」
「成る程、これは幻だったのか」

無気力が無駄に納得する。
冷蔵庫から目を逸らし、振り返る美人。ボクと目が合い、話し掛けてくる。

「あれ、君は？」
「吉川……いや、イブキ……。こっちはチロ……」
「吉川……。あぁ、君が。確か、ミャラの友達だよね？　話は聞いているよ」
「君は……ミャラちゃんの知り合い？」
「まぁね。ネットゲーの戦友だよ」
「別名、オタク友達。略して、オタ友！」

なぜか意気込みながら、話に口を出す無気力。その頭を美人が軽く叩く。
頭を押さえる無気力を無視して、美人がボクに口を開く。

「俺の向こう名は江川隼人……。こっちではアレギアだ。それで、これはＫＹ。向こうでも、ＫＹ。どこにいても、ＫＹはＫＹだよ。空気を読んだ例がないし。ＫＹのせいで冷蔵庫の中が溢れるし……」
「お前、冷蔵庫の事を根に持ち過ぎだろ？　どれだけ冷蔵庫好きなんだよ？　つーか、いつも冷蔵庫の中を見て騒いでない？」とＫＹ。
「誰のせいだと思ってるんだ。まったく……」

アレギアが文句を言いながら、ＫＹを睨む。
ＫＹは気にしていない。それどころか、アレギアに背を向け、戸棚

の中を荒らしている。
すぐにアレギアが騒ぎ出す。

「ちょっと！　掃除したところなのに！」
「ちょい、紙袋ない？　できれば大きいの」
「紙袋はこっちだって。もう荒らさないでくれよ。ＫＹは散らかしっぱなしなんだから」
「おぉ、あった、あった」

ＫＹが見つけた紙袋に、山積み雑誌を詰め込む。
それをボクに押し付けて、しわがれた声で口を開く。

「わ、わしには……もう無理じゃ。全てはお主に掛っておる……」
「いらないよ」
「そう言うでない……。この間違い探しを全て解く事ができたら……ぐふっ！」

ＫＹが無理矢理にボクの手に紙袋を持たせて、何事もなかったかのように席につく。
そして、アレギアに口を開く。

「アレギア、茶をくれ。紅茶。砂糖もミルクも気の向くままに」
「本当に自分勝手だよな……。ごめんね。いらなかったら、そこに放っておいて。後でリサイクルに出すから」
「リサイクルするのなら、中身を全部解いてからだ。何せこれ、かなりのお値段なんですよ。一万円なんて軽く超えるんですよ。もし捨てるのなら、その前にヒッキーにやれ。ヒッキーは喜んで受け取ってくれる」
「ヒッキーっていうのは、ミャラの事だから。そうだな……。手間を掛けるけど、もしもミャラに会うなら、渡してくれないかな？

全部を持っていくのは重いから、何冊かでいいんだけど……」
「これくらいは大丈夫……」
ボクが言うと、ＫＹが豪く喜び出す。よっぽど困っていたのだろう。
手を付けられないのなら、買わなければいいのに……。
ボクは二人に挨拶をして、食堂を後にする。
お使いが二つに増えた……。これじゃあ、まるでパシリだな。

異世界訪問〈吉川編４〉

辺りを見回しながら、廊下を歩く。
チロはいつもとは違う風景に興味津々だ。
普段から活発なチロだけど、今日は特別に気分が良いらしい。
ボクだって、興奮が治まらない。ここは異世界だと考えるだけで、ワクワクする。
もしも、これが夢だったなら……残念で堪らない気分になるだろう。

不意に見つけるのは、大きな扉。
ガラス張りの扉で、中が見える。
中というよりは、外のようだ。
空は見えるが、曇り空。
地面は土、グラウンドだろうか。それにしても……。

ボクの目に映るのは、二人の子ども。中学生くらいの男の子が二人。
一人は片手に白い剣を、一人は両手にカードのような物を持っている。
そんな二人の前に居るのは、八つの頭と尾を持つ大蛇。
あれって……八岐大蛇（やまたのおろち）か？

幻ではないだろう。チロは脅えて、紙袋の中に隠れてしまった。
唖然とするボクの前で、ゲームのような戦闘が始まる。
剣を振う少年の後ろでは、カードを掲げて口を開く少年。
急に空が暗くなり。次いで、けたたましい落雷の音。
大蛇に稲妻が直撃する。これは魔術だろうか？

それにしても、この二人……なかなか良い動きをする。

こういう事に慣れているのだろう。反射神経がかなり良い。
大蛇の絶え間ない攻撃を物ともせずに、回避して。隙を窺い、反撃だ。

これは面白い……。
二人の遊びに興味を持ったボクが、チロの入った紙袋を廊下の隅に置く。
ガサゴソと動くチロの上に、ミャラちゃんのボールペンを乗せてやる。

「お前はこれを守ってな。決して、壊すんじゃないよ」

任務を任せられたチロがボールペンを紙袋の奥へと封印する。
うん……よく理解しているようだ。やっぱりチロは賢いな。
少し勇敢な目をするチロの頭を撫でて、ガラス扉に手を伸ばす。

グラウンドに出ると、激しい戦闘音が耳に入ってくる。
二人はボクに気付いていないようだ。戦いに忙しい。
ボクがぼんやりしながら、激しい戦闘を眺めていたら。
不意に剣を持つ少年と目が合う。その少年がもう一人に言う。

「リオン！　しばらくの間、一人で頑張っていてね」
「え!?　無理だろ!?　こんな奴と一対一なんて、無理だろ!?」
「リオンなら、大丈夫だよ。それに、テストで満点取るよりも簡単でしょ？」
「いや、そういう問題じゃないって！」

うろたえながら、カードを天に掲げるリオンと呼ばれる少年。
呪文を唱えると、大蛇の周りで炎が舞い踊る。
ボクが不思議な現象に目を奪われていると、剣を持つ少年が近づい

てくる。

「新しいお客さん？」
「え……？　うん、ボクはイブキ」
「僕はシンク。あっちがリオン。よろしくね」
「あぁ……。君達は何をしているの？」
「運動を兼ねたゲームだよ。こんな事をしている暇があるのなら、勉強か読書をしたい所なんだけど。リオンに誘われちゃって。仕方がないから、付き合っているんだ」
「へー、面白そうだね。ボクも参加していい？」
「参加してもいいけど……。基本的に怪我するよ」
「大丈夫だよ。ボクは自然治癒力が人より優れているから」
「それなら、大丈夫かな？　武器は向こうに置いてあるから……。持ち込みもありだけど……。見た感じイブキは手持ちなしだよね。魔力とか使って、武器を作れるのなら。そういうのもありだよ。何でもありで、ルールはなし。だから怪我をするんだよね」

　魔力で武器……。以前に試した事がある。
だけど、ボクが作った物はどれもこれも役に立たない。武器としての使用は無理だ。
何せ刃物を作ったとしても、刃が対象物に触れると、対象物が回復してしまう。
ここで使ったなら、大蛇が回復する。
少年達には怒られるだろうな……。

　そんな事を考えていたら、急にリオンの騒ぎ声が聞こえてくる。
振り返ると、頭から血を流しながら、リオンが大声を上げている。

「誰か、回復プリーズ！」
「あれ？　ハートのトランプは？」とシンク。

「使いきったぜ！　ってか、何で回復がこれしかねーんだよ！？　せめてアイテムくれー！」
「毎度のことながら、足りないよね。回復系。状態異常とかになったら、お仕舞いだものね」
「ってか、何でシンクは回復魔法を使えないんだよ！？　お前の属性、光だろ！」
「何でだろう？　考えた事なかったや。確かに属性は光だけど……回復とかないんだよね。無属性のリオンの方が回復できるなんて、不思議だね。だけど、エランは回復が得意なんだよ……。あぁ、エランっていうのは、僕の召喚獣」

シンクがボクに説明をしてくれる。
召喚獣……。余所ではそういう物まで存在するのか。
本当に、本の世界に入った気分だ。
気が付けば、リオンが攻撃を止めて、大蛇から逃げ惑っている。
今や逃げる事で精一杯ということか……。

せっかく参戦したのだから、援護しなければ……。
魔力で弓矢を作りだし、リオンに狙いを定める。
それを見たシンクが騒ぎ出す。

「ちょっ！？　リオンは敵じゃないよ！」
「わかってる」

そう言って、矢を放つ。
隣で騒ぐシンクを無視して、矢がリオンに向かって行く。リオンの目は大蛇に釘付けだ。
微かな音が耳に入ったのか、不意にリオンが振り返る。その先にはボクが放った矢。
反応しきれなかったリオンの胸に矢が突き刺さる。

それを見たシンクが思わぬ事を口にする。

「ナイスヒット！」

「君……彼の事、心配じゃないの？」

「いや……。余りにも見事に命中したから」

結構……呑気な世界だな。

矢が胸に直撃したにも関わらず、このような言葉が出てくるなんて。

呆れるボクから遠く離れて、リオンが一人で大騒ぎだ。

「すげー！　怪我が治った！　何だ、今のは！？」

リオンの言葉を聞いて、ボクが大声で答える。

「ボクの魔力で作った矢だよ。ボクの魔力は触れた対象物を回復させるんだ。だから、ボクは回復を担当するね」

「よっしゃー！　念願の白魔道士が仲間に加わったー！」

リオンが大蛇と戯れながら喜んでいる。シンクがボクに口を開く。

「回復が使えるのなら、ありがたいや。お願いするよ」

「お役に立てそうでなによりだよ。ただ……攻撃は君達に任せるよ。何せボクが武器を振ったところで、大蛇が喜ぶだけだから」

「あはは、大丈夫。僕は攻撃専門だから。まぁ、リオンは色々とあるけれど。あのトランプは一度使うと、使用可能になるまで一日くらい掛るから。もう回復は使ったみたいだし……。それじゃあ、そろそろバトルを再開しよう！」

三人での連携プレー。
ボクが回復を担当し、シンクが攻撃を担当。
リオンは特殊魔法で仲間の攻守能力を向上させる。
まるでゲームの世界にきた気分だ。
幼い頃に望んだ異世界への大冒険……。

大蛇の頭が次々と倒れて行く。
シンクが大蛇を切りつけても、グロテスクというわけではなく。
血も出なければ、切り口も黒く染まるだけ。
目を背けたくなるような光景にはならない。
お子様向けなのだろう。

だけど、ボク達は怪我をする。
ボクは回復を担当しているので、すぐに二人を治療するけど。
二人は怪我をした所で、それほど大騒ぎはしない。
血を見て泣いたり、騒いだり、そういう事はなく。
本当に慣れているといった感じだ。

もしかしたら、大怪我をしたところで。何か治療方法があるのかもしれない。
又は、ボクのように自然治癒力がずば抜けているとか……。
ここは異世界なのだから、人間といっても、ボクの世界のそれとは異なる。

大蛇との戦いの中、ちょっとした事で。ボクが翼を付けて空を飛んだら、二人が目を丸くした。
戦いながら、質問をされる羽目になり。ペガサスの卵を口にした事を説明すると、大笑いされた。

直後、リオンが大蛇の口から噴き出た炎に覆われ炎上。

炎が消えうせた後に残ったのは、そのまま炎上するリオン。
手で自分の顔を扇ぎながら『あつい、あつい』と言うリオンを見て。
今度はボクが笑い転げる。
心配するまでもなく、これは状態異常らしい。

燃えながら、あつさに騒ぐリオンが面白くて。状態異常を治してやらない事にする。
リオンは治してくれと願うけれど、ボクは知らない振りだ。

そうこうしているうちに、大蛇の頭が全て倒れる。
大蛇の姿が薄くなり、粉になって消えていった。ボク達の勝利だ。
大蛇の消失に、ガッツポーズをするリオン。
シンクは疲れているのか、身体を伸ばしながら欠伸をしている。

その後、二人と話をしながら、グラウンドを退場する。
チロの所へ戻り、確認すると、眠っていた。
ボクは紙袋を両手で抱えながら、二人と一緒に歩きだす。
そろそろニートという人を探さないと……。遊んでばかりもいられないな。

異世界訪問〈ニート編〉

遅い……。いくらなんでも遅すぎる。
吉川……いや、イブキの奴。一体、何をしているんだ？
俺を探しているのなら、そろそろここへ来てもいい頃だ。
シンク達に会ったのなら、場所くらいは教えてくれる。
……。まさか、どこかで油を売っているのか？

シンク達が行きそうな場所を想像する。
運動後なら食堂か……。よし、行ってみよう。
いつもの本を手に持ち、図書室を後にする。
今回は二冊だから、ちょっと面倒だ。
しかし、文句など言えやしない。
嫌なら読まなきゃいいのだからな……。

早足で食堂へと向かう。到着し、中に入れば案の定。
部屋にいるのは、アレギアにＫＹ。シンク、リオン……それと、問題の人物。
椅子に座りながら、カツ丼を食べるイブキに近づき、頭を叩く。
眉をしかめ、不快げに俺を見るイブキに口を開く。

「お前、俺を探しているのなら、早く来いよ」
「何だよ、お前？」
「ニートだ、ニート。イケメン天才お坊ちゃまの癖に、ろくにお使いもできんのか？　それ以前に、こんな所で賞味期限の切れたカツ丼を食うなよ。読者の夢をぶち壊すな。というか、そろそろリオンの状態異常を戻してやれ」

リオンは未だに炎上中だ。

こんな食堂の中で、状態異常（炎）だなんて。
ビルが炎上しそうで、不気味じゃないか。火事なんて止めてほしい。
リオンの事など気にもしないで、イブキが話し出す。

「運動後で空腹なんだ。何か食べないと倒れてしまうよ」
「そんな事で、人外回復力を持つお前が倒れるのなら、世の人間は常に倒れた状態だ。ほふく前進で生活する人が溢れる世界なんて御遠慮する」

俺の対応に不満を隠せないのか、イブキが俺を睨みつけてくる。
二人で睨み合っていたら、アレギアが口を挟んでくる。

「まぁまぁ、ゼイガスさんもカツ丼をどうですか？　イライラする時はカツ丼を食べれば、ストレスも無くなりますよ」
「お前はカツ丼を減らしたいだけだろ？」
「そうですよ。はい、どうぞ」
「……」

アレギアが俺にカツ丼を突きつけてくる。
今はいらないのに……。ここで断ったら、怒られる。
何せ、アレギアの背に切迫感が漂っている。
何が何でもカツ丼を処分したい。
その意気込みが嫌という程に伝わってくる。

俺がカツ丼を受け取って、部屋の隅に行く。
椅子がないから、壁にもたれて地面に座る。
ちびっ子モードになり、カツ丼を突く。
ちっちゃくなった俺を見ながら、イブキが口を開く。

「何……？　あの生き物？　今までは人間だったのに……」

「あれはちびニートだ。ニートがしょげた時に変化する。不思議な生き物だ」とＫＹ。
「へー……」

椅子に座りながら、じーっと俺を見てくるイブキ。
何だよ？　何か用かよ？
俺がもそもそとカツ丼を食べていたら、イブキがコップにお茶を淹れる。
それを俺に向けて、差し出してくる。

お茶を淹れてくれたのだろうか？
立ち上がりイブキに近づく。
手を伸ばし、コップを受け取ろうとしたら。
イブキが俺の目の前で、コップのお茶を飲み干してしまう。
そして、空のコップが俺の手に……。萎える……。

俺がコップを地面に置いて、元の位置に戻ろうとしたら。
イブキがコップを拾い上げ。もう一度、コップにお茶を淹れる。
そして、俺に差し出してくる。
騙されないぞ……。警戒する俺。
不意にイブキが口を開く。

「いらないの？」
「欲しいです」
「……」

イブキは返答しない。
どうせまたくれないのだろうな。そう思いながら、手を伸ばす。
そうしたら、意外にもコップを俺に手渡してくれた。
何だ……そこまで卑劣な奴じゃなかったか。未来なら絶対にくれな

いだろうに。
ちょっとご機嫌になりながら、元の位置に戻る俺に向いてイブキが口を開く。

「それ以上は小さくなれないの？」
「なれん。これが限界だ」
「どうしたら、小さくなれるの？」
「人は気分が沈んだら、自然と小さくなるものだ」
「そう……？　この世界では誰でも小さくなれるの？」
「いや、多分……俺だけだと思う」

こんなモードがあるのは俺だけだろう。
他の奴が小さくなっている所を見た事がない。
新キャラを見て、興味を持ったのか。イブキが俺に問いかける。

「ねぇ、その本を貸して」
「駄目だ、駄目だ。これぱかりは貸せない」
「どうして？　すぐに返すよ」
「お前がこれを読むと、非常に困るんだ」
「……なぜ？」
「一言で説明をするのなら、そうだな……。プレイヤーが攻略本を読むに値する」
「……」

イブキが黙ったまま、数回頷く。
何かを悟ったのだろう。不意に恐ろしい質問だ。

「ボクの立場は何？　主人公じゃないよね？」
「……。お前は勘が良い奴だな。だが、言えん」
「頻繁に登場するのは誰？　もしかして、ミャラちゃん？」

「そういう質問には耳を貸せん。それより、お使いの品『今日のおやつ』は図書室の机の上に置いてあるから。勝手に持って行ってくれ。というか、お前……それを食ったら、そろそろ戻れよ。あまりこっちで遊んでいると、向こう時間が大変な事になってしまうぞ」
「時間？　もしかして、時間の経過スピードが異なるの？」
「そうだ。こっちの一年が向こうの一日、又はその逆。そんな事が頻繁に起きる。だから、時間には注意しなきゃいけないんだ。ほら、そろそろ帰りたい気分になってきただろ？」
「いや……。もう少し遊びたい」
「帰れよ～。あ、そうだ。図書室に入ったはいいが。その辺りの本が気になり、立ち読み。なんて事は止めろよ。お前がそんな事を始めたら、当分は帰ってくれそうにないからな。とりあえず、一度は帰る事だ。どうしても、遊びたいのなら。家に連絡を入れてから、後日にでも来ればいい」
「また遊びに来てもいいの？」
「そういう行動をしていた奴は数人いるからな。例えて言うなら、そうだな……。ハルという奴がいるだろ？　あいつはお前の世界の住人ではないが、ここでも余所者だ。また別の世界の住人だが、頻繁にここへ遊びに来る」
「ミャラちゃんも？」
「あいつは少しジャンルが異なる。『橋』だからな……」
「『橋』って何？」

目を輝かせ、イブキが俺の話に興味を持つ。
頭の良い奴は嫌いだ。
きっと黙っていても、何かしら問いかけて。自分なりに推理しようとする。
その推理がまた的中するのだから、俺には手の出しようがない。
コップのお茶を飲みながら、俺が言う。

「どうしても、その話を知りたいのなら。後で、姫様にでも聞いてくれ。ここで答えるには真面目すぎる」
「そう……」
そんな調子で、イブキは帰る事無くお喋りを続けていた。
食事が終わった後も、談話室に向かおうとする皆の後について行こうとするから厄介だ。
俺が無理矢理に引っ張って、図書室へと連行する。
お使いの品を渡した後、図書室で本を読み始めるイブキの腕を引っ張って、中庭まで連れて行く。
さっさと追い返さなければ、こいつはいつまで経っても帰らないだろう。

異世界訪問〈吉川編5〉

ニートという奴に追い返された。
面白くないな。せっかく楽しんでいたのに……。
ディサスト……未来に道を開いてもらい。先程、目覚めたチロを肩に乗せ。
ミャラちゃんのボールペンを眺めながら、ボクが不満げに帰り道を歩いていたら。
セントラルに辿り着く。
そこには先程の少女……姫様の姿が。
肩に青い鳥を乗せながら。地面に座り、じっとしている。
ボクが姫様に声を掛ける。

「お使いの品を貰ってきたよ」
「ありがとうございます。その辺りに置いて下さい。後で頂きます」
「ところで、『橋』って何？」
「川や谷に道を通す際に作るものです」
「そんな返答は必要ないよ。ミャラちゃんは『橋』……なんでしょ？」
「ミャラ……？」
「えっと……メモリーで通じる？」
「あぁ、メモリーさんですね。そうです、『橋』ですよ」
「その『橋』というのは？」

ボクが問いかけたら、姫様が黙り込む。不意に話を始める。

「各世界には『橋』と呼ばれるリーダーが存在します。あなたの世界には『メモリー』さん。先程、あなたが訪れた世界では『未来』さん……」

「ハル君……の世界では？」
「『死神』さんですね」
「君は？」
「私は私の世界の『橋』です。残る世界に『リベンジャー』さんと呼ばれる方も『橋』をしています。ご理解いただけましたか？」
「そう……そのリーダーというのは。何か特別な人達なの？　各世界の……神様と言える？」
「言えなくもありませんが、余所の世界……。特に死神さんの世界には、色々な神様が存在します。それとはまた異なりますので。一概に神様という言葉を使用する事はできませんね」
「そう……」

余所では神様が実在しているのか……。色々といるものだな。
とにもかくにも、ミャラちゃんは異世界の住人達と交流している。
しかも、ボクの世界のリーダーとして……。
だけど、そんな話は聞いた事もない。きっと黙秘しているのだろう。

まぁ、その気持ちはよくわかる。
こんな事、人に知れたら大変だ。
国の問題どころか、世界的問題になってしまう。
それ以前に理解者がいるかどうか……。
ただの戯言だと思われても不思議じゃない。
ボクが更なる質問を繰り出す。

「ねぇ……『橋』というのは何をする人達なの？　各世界のリーダーなのだから、会議とかするの？」
「会議はしませんね。お喋りはしますけど……。あぁ、合唱会があります。日時は私の気まぐれです。それ以外は……そうですね。狭間が壊れた時に、修繕に向かいます。後は世界の異変を敏感に感じ取り、それに対応する事くらいでしょうか？」

「そう……他には？　これでお仕舞い？」
「とにかく、各世界の人達が楽しく暮らせるように、努力はします。ですが、所詮名前だけなので、大した事はできません。世界の人々全てを幸せになんて無理な話です。ほとんどの方々は……自分の知り合いを守る。それで精一杯ですね。結局は、しょぼい組合レベルなのですよ」
「ふーん……。ねぇ、ボクも『橋』になれる？」
「無理です。『橋』は各世界に一人と決まっています。今の所、例外には出会っていません。どうしてもというのなら、『大樹様』に相談して下さい」
「大樹様？」
「あなたの目の前にいらっしゃる方ですよ」

ボクの目の前……。
顔を上げると、神々しく厳かな雰囲気を漂わせる大木。
これが大樹様か……。
ボクが大樹様に近づき、口を開く。

「こんにちは」

ざわざわと葉の触れ合う音が耳につく。しかし、声は返ってこない。
耳を澄ませて待ち構えるボクに、姫様が口を開く。

「駄目ですね。大樹様はお昼寝中のようです。まぁ、普段から眠っている事が多い方なので……。よっぽどの事がない限り目を覚ましてはくれません」
「よっぽど……と言うと？」
「そうですね。『橋』の交代時や、世界を巻き込んだ大事件……。後は気まぐれでしょうか？」

「それじゃあ、なかなか会えないね……。そういう時……君達『橋』どうするの？」
「自分達で何とかします。そもそも大樹様に用があるなんて事は、あまりありませんから。大樹様が目覚めなくて、大騒ぎになった事はありませんね」
「そう……」

今回は諦めるか……。
ボクの気持ちを察したのか、姫様が元の世界への帰り道を指差し、話し出す。

「お帰りはあちらです」
「他の世界には……」
「止めておいた方が無難でしょう。私の世界はもちろんの事。死神さんの世界も、今はゴタゴタしていますし。リベンジャーさんの世界は……『橋』自身が危険です。近づいてはなりません。今の所、メモリーさんの世界と、未来さんの世界が最も安全ですよ」
「そうなんだ……」
「未来さんの世界は『裏』が危険ですが……。今は大人しいそうですし。メモリーさんの世界は『橋』が『橋』なだけに、世界の規模が小さいので、災害も小さいのです。まぁ、最近は拡大傾向にありますが……」
「まず……『裏』って何？」
「各世界には『表』と『裏』が存在します。例えば、未来さんの世界では、裏世界に『魔法界』が存在します。死神さんの世界では『魔界』……ですね。後は知りません。行った事も聞いた事もないので」
「そう……。じゃあ、『橋』が『橋』なだけに、世界の規模が小さいっていうのは……」
「メモリーさんは『橋』をしていらっしゃいますが……。真の『橋』

ではありません。仮の『橋』です」
「本物は……このボールペン？」

ボクが右手に持つボールペンに目を向ける。使い古したボールペン。
何も知らない者が手に取ったなら、思わずゴミ箱へ放り込みそうだ。
返答を待っていたら、ゆっくりと姫様が語りだす。

「そうです……。本来、『橋』は人でなくてはなりません。ですが、メモリーさんは昔の思い出に引きずられて。そのボールペンに『橋』の力を封じたままにしています。メモリーさんの恋人……以前、『橋』をしていた方が。一時的な物として、ボールペンに力を移したようなのですが。メモリーさんはきちんとした『橋』にならず、ずっとその一時的な『橋』を使用し続けているのです」
「それは……問題なの？」
「よろしくはありませんね。世界に負担が掛りますし……。何よりも、人が『橋』にならないと、解決しない事も多々あるので。そのボールペンでは限界があるのですよ。大樹様も心配されているのですが。メモリーさんは夢想家なので、どうしようもありません」
「……ずっとこの状態を維持し続けると、何が起きるの？」
「そうですね……。良くも悪くも『橋』には異変を呼びよせる力があります。それに対応できないとなると……。後は想像にお任せします」

姫様が口を閉じる。ボクも黙り、訪れる静寂。
それを破るのは別の声。振りかえると、未来だ。

「姫様、今日は豪くご機嫌だね。だけど、喋りすぎじゃない？　もしかして、一般開放日？」
「暇なのですよ。最近はお喋りをする人がいないので……」

「あぁ、そうか。今までは、メモリーがいたけど。最近は忙しいから、構ってくれないんだ。それで、暇だから。吉川君にペラペラ喋っているわけ」
「そうです。最近のメモリーさんは見ていて腹が立ちます。何だかリア充を見ているようで……」
「あはは、現にリア充だよ。いつも凄く楽しそうだもの。だけど、良かったじゃない。知り合った当初は『あの人はいつ首を括るかわからないので心配です』って、俺に真面目に相談してきたけど。もうそんな心配も必要ないでしょ？」
「心配ですよ。あの人は未来さんや死神さんのように強い精神を持ち合わせていません。その上、私のようにきっぱりと割り切れるタイプでもありませんし。リベンジャーさんのように、全てを怒りで解決しようとする人でもありません。小さくなりながら、一人で我慢ばかりする。気弱い人です。今は充実しているでしょうが……。いずれは……」
「日和ちゃんがね……。でも、本人もわかっているだろうし。案外に、そういう人の方が最後に驚くような強さを見せたりするかも。そればかりはわからないよ」
「……」
「それよりも吉川君。そろそろ帰らないと、時間が飛んじゃうよ。まだ大丈夫だけど……。もう戻っておいたほうが無難だね。帰り道はわかる？」
「え……。あぁ……うん」

二人の会話に気を取られて、返事が遅れる。
もう帰った方がいいな……。確かに、そろそろ時間が心配になってくる。
ボクが頷き、帰り道を歩きだす。
後ろから聞こえてくるのは、二人の笑い声。
既に会話の内容が変わっているらしい。

多分……ボクには興味のない話だろう。

異世界訪問〈吉川編6〉（前書き）

菊池さんが怖い……。
吉川君がビビってる……。

異世界訪問〈吉川編6〉

白い世界を歩き続ける。
帰り道、少し心寂しいが引き返すわけにもいかない。
曲がるなと言われているから、真っすぐに歩かなければ……。
下手な事をして、狭間に落ちると厄介だ。
あの場所は戦場よりも不気味で危険だろう。
あまり知識のないボクが足を踏み入れたら最後、次こそ無事では済まない気がする。

不意に耳に入るのはピアノの音。
おかしいな……。あの庭にピアノなんて置いていないはずなのに……。
スッと辺りが暗みがかり、白い世界から外に出る。
突然に、聞こえてくるのは人の声。

「上野!?」

驚き余って、心臓が激しく波打つ。次いで、翼まで出現。
肩から転げ落ちそうになるチロを支えて、振り返る先には思わぬ顔が……。
人の姿を見て、ボクが目を丸くする。

「バカ嬢!?」
「えっ……。上野じゃない?」
「な、何でバカ嬢が……」
「それはこっちの台詞よ。どうしてあなたが……」

しばらくの沈黙……。

すぐにボクが辺りを見回し、確認する。
ここは……ボクの私邸じゃない。
ボクの背にはルーシュ・ルーディー……。
以前に、一度だけ見た事がある。
ピアノのコンクールの時……。
妙な木だなと思って、バカ嬢の父親……大雅さんに質問してみたら。
色々と語ってくれた。

　ということは、ここはバカ嬢の屋敷か……。
どうも帰り道を間違えたらしい。
唖然とするボクの肩から降りて、チロが紙袋に潜り込む。
バカ嬢の大声が恐ろしかったのだろう。
ボクだって、かなり驚いた。
不意にバカ嬢が話し掛けてくる。

「あなた……そのボールペン」
「あぁ……。この間、ミャラちゃんが襲われた件で……。気を失うミャラちゃんのスカートから落ちたんだ。後で返そうと思って、持っていたのだけど……。返すのを忘れてしまって。それで……」

　先程までの出来事を事細かに説明する。
信じてもらえなくても仕方がない程に、異常な出来事。
そんな話をバカ嬢が真剣になって聞き入っている。
本当は黙っていてもよかったのだけれど。今は夜中で疲労も溜まり、意識も虚ろ。
これが夢ではないと信じたい余りに、どうしても人に話しておきたかった。

　全ての話を終えた後に、バカ嬢が問いかけてくる。

「そのボールペン……。あなたは今でも使えるの？　道を開ける？」
「いや……。ちょっと待って」

ボールペンを見ると、あの時の輝きがない。
無理な気がするけれど……。今一度、試してみよう。
ルーシュ・ルーディーに振りかえり、ペン先を当ててみる。
何も起きない。目の前から消えてしまう夢物語。
戻ってくるんじゃなかった……と少し後悔してしまう。
ボクが首を左右に振って、ため息をつく。

「駄目……みたいだ。あの時は、ボールペンが輝きだして。それを木に当てると光ったのだけれど……」
「そう……。偶然だったのかしら？」
「さぁね？　だけど、ミャラちゃんなら。道を開く事ができるんでしょ？」
「そうよ。上野はそのボールペンでいつも向こうへ行ってしまうわ。行ってしまったら、しばらくは帰ってこない事が多いの。一か月……二か月……。早い時は数時間だけど……」
「お前は向こうへ行った事がないよね？　ミャラちゃんに頼んでみた事は？」
「毎日よ。上野に会う度に、聞いているわ。私もついて行きたいって。だけど、上野は『危険だから駄目だ』とか。『また今度ね』とか。そう言って誤魔化すの。この先に何があるのかも教えてくれないし……」
「……じゃあ、ボクが話した内容は初耳？」
「うん……。この先に何があるのか、あなたの口から聞いて初めて知ったわ。もちろん、上野がこの世界の『橋』……リーダーなんて話を聞いたのも始めてよ」

不意に口を止め、バカ嬢が黙り込む。

そして、目に涙を溜めながら、不安げな表情を浮かべる。

「上野は……私を信用していないのかしら？」

「そういうわけじゃないと思うよ……。ただ、ミャラちゃんはお前に心配を掛けたくないだけだよ」

「そう……かしら？」

ボクの言葉を聞いても、バカ嬢の不安は尽きないらしい。

仕方がないな……取って置きの話をしてやろう。

「……ボクが言うのも変な話だけど。ミャラちゃんはお前に気があるみたいだよ。お前は案外に鈍いから気づいていないだろうけど。お前がミャラちゃんを見ていない時程……。ミャラちゃんはお前の事を気にしているよ。ちらちらと遠くからお前の様子を窺うんだ。ボクにしてみれば、面白くない話だね……」

「そう……なの？」

「嘘だと思うのなら……。ミャラちゃんの前で、関心がない振りをしてみなよ。放っておいたら、向こうから寄ってくるよ。お前は身勝手で一方的だから、考えもしないだろうけど。ずっと付きまとうよりも、少し離れた方が相手の気持ちがあらわになる事だってあるんだ」

「確かに……考えもしなかったわ」

「だろうね」

はぁ……。どうしてボクがバカ嬢を元気づけなきゃいけないんだ？

面白くない真実を言って、こっちが落ち込んできた。

ミャラちゃんはきっとボクを恋愛の対象には置いていないだろう。

気が合う友達、良くて親友。それくらいの関係。

気分が滅入るボクに向いて、バカ嬢が口を開く。

「普段はろくでもない人だけど、たまには良い事を言うのね。驚いたわ」
「うるさいな。お前はいつでも口が悪いよ」
「何よ、その言い草は？　せっかく褒めたのに……」
「褒め言葉になっていない事にも気付かないのか。やっぱりバカ嬢だね」

ボクの言葉を聞いて、バカ嬢が不満げに口を尖らせる。
すぐに表情を改め、今度は怖いくらいに無表情になる。
バカ嬢の不気味な様子に、眉をしかめるボク。
ボクから目を逸らしながら、バカ嬢が小声で話し出す。

「上野は……この世界のリーダーなのね。それなら、上野に……言わなくちゃ。きっと上野なら知っている。この世界で起きる現象……。あの言葉は空耳なんかじゃなかった。それなら、もう怖くない」
「おい、バカ嬢？　大丈夫？」
「あなたは知らないでしょうね。そう……知るはずもないわ。毎回起きる、あの現象……。今年の大みそか……。その日は晴れ？　それとも、雪？　どちらも違うわ……。季節外れの大きな台風……」
「あの……菊池さん？」

蒼白しながら、バカ嬢に話し掛ける。
不意に振り返るバカ嬢、生気のない目でボク見る。
バカ嬢の様子に、極度の恐怖心を覚える。
恐れのあまりに身体が固まり言葉を失う。
そんなボクの服を掴んで、必死な形相でバカ嬢が訴える。

「できれば、あなたに会いたくなかった！　なるべく会わないようにしていたのに、上野を通して出会ってしまった！　それって、偶

然？　それとも必然？　もしも、運命を変えられるのなら。それはきっと上野だけだわ！」

「菊池さん……とりあえず、落ち着こうよ」詰まる言葉を何とかして口にするボク。

「今度は、きっと上手くいく！　上手いくから、話を聞いて！」

「話は聞いているから、落ち着いて……」

本気でバカ嬢を心配していたら、バカ嬢がヒステリックに話し出す。

急に涙を流しながら、ボクを真顔で見つめてくる。

「毎年が同じように繰り返される。何度も、何度も。少しの違いはあるけれど、殆どは同じ出来事。特に、大きな事件は変わらない。私がいくら手を出しても、絶対に起きる不可避な運命」

「あの……」

「あなたはいつも信じてくれない。私は何度も訴えたわ。だけど、それでも避けられなかった。だから、いつからか私があなたを避けるようになっていた。知りたくなかった、見たくなかった、耳に入れたくなかった」

「はぁ……」

「私はあなたの事を好きになれないわ。だけど、相性が合わないだけで。決して、心の底から殺したい程に嫌いというわけでもない。むしろ、喧嘩友達としては好きなくらいよ」

「凄く微妙なご意見ありがとう……。まぁ、ボクも……そうだね」

「だから、あなたに忠告しておく」

「忠告？」

一瞬、空気が硬直する。固まる時を動かすのはバカ嬢の言葉。

「十一月二十六日……その日を忘れないで」

「十一月二十六日？　どうして？」

ボクの問いかけに、しばらく黙り込むバカ嬢。
ゆっくりと吐き出すように、返ってきたバカ嬢の言葉はとんでもない物。

「あなたが死ぬ日よ」

重い空気が辺りを漂う。
バカ嬢の言葉を飲み込めなくて、ボクが混乱していたら。バカ嬢が一人で話し出す。

「あなたが死ぬ……二週間程前に、吉川家で大事件が起きるの。今……あなたに語るには重すぎるような話」
「いや、今の話も十二分に重いけど……」
「それがきっかけなのかどうかはわからないわ。だけど、その後……あなたは必ず死んでしまう。私が手を尽くしても……。まるで、逃れられない運命のように」
「それは……恐ろしいね。それで、死因は？」
「自殺よ」

バカ嬢の言葉を聞いて、押し黙る。
奇妙だな……。今のボクには、そのような気持ちはない。それは確かだ。
かと言って、吉川家にどのような災いが訪れようとも。
多分、ボクは……そういった考えを持つ事はないだろう。
なら、なぜ……？

バカ嬢の言葉を真に受け止め、頭の中で模索する。
これといって、思い当たる節がない。

わからない。
まぁ、当然と言えば、当然だ。
今のボクには決してわかるはずがないだろう。
わかっていたら、既に死んでいる。
バカ嬢が話を続ける。

「毎回……死に方は異なるわ。首を吊ったり、薬を飲んだり。だけど、自殺に変わりはないの。誰かに殺されたような形跡もなく……。必ず自殺。だから、あなたの気持ちが変われば、生き残るという道も存在するはずよ」
「……」

ボクは遺書など書かないだろう。
自殺の理由がわからなければ、今から気持ちを変える事は難しい。
もしも、死ぬ気になってしまったら、そう簡単に思いを変えることはできない気がする。
ボクって、結構……意固地だからな。
一人で思案していたら、バカ嬢が憂慮の面持ちでボクを見上げる。

「今の話……信じてくれる？」
「そんなに怖い形相で捲し立てられたら、嘘でも信じるよ」
「前は信じてくれなかったわ。『馬鹿を言うな』って……怒られた」
「それは……お前の人間性を理解していなかったんだよ。元々、ボク達はあまり話さないもの。だけど、ミャラちゃんに出会って。これだけ毎日、顔を合わせていたら。嫌でも性格を掴めてくるね」
「そう……。ありがとう」
「……」
「とにかく、注意をして。少しでも気持ちが塞ぐようなら。こんな私でも、相談に乗るわ。上野だって、きっと話を聞いてくれるはず。だから、絶対に……」

「死なない……ように、努力はしてみるよ」
「うん……」
絶対宣言はできないな……。
何せ死んでしまうから、こんな話をされているんだ。
努力はしてみるが……。
思考の中、ふと頭に過る思いを口にする。
「ただ……もしも自殺をするのなら。中途半端な事はしないはずだ。今のボクは人並み以上に治癒力があるから……。きっと確実に死ねる方法を選ぶだろう」
「確実に……」
怯える子犬ようなバカ嬢の前で。
左手の親指と人差し指以外を曲げて、人差し指を自分の口元に持っていく。
そして、一言。
「バーン……」

この間はお姉ちゃんが犯されそうになって、大変だった。
と言っても、僕は途中まで参加だけど。
何せ、ニートさんから遅い連絡を受け。
お姉ちゃんの居場所を突き止める所までは、頑張ったけど。

その直後、吉川君が一人で素っ飛んで行ったから。
急に気力が失せてしまい、普通に授業を受けていた。
まぁ、人外が一人でも飛んで行けば、物事は自然と落ち着くものだ。
予想通り、大問題になることなく。その事件は終止符を打つ。

それから数日が経過した今日の話。学校にて、早朝。
眠さに欠伸が絶えない僕の隣では、お姉ちゃんが机に伏せて眠っている。
昨晩は珍しく本業に力が入っていて、殆ど寝ていないそうだ。
だったら、わざわざ学校に来ずに。家で寝ていればいいものの。
うにゃうにゃ言いながらも。結局の所、登校。

それにしても、今日は静かだ……。
何が原因か。よく考えてみたら、菊池さんと吉川君がいない。
あぁ、あの二人がいないから静かなのか。
ボーっと間の抜けた空気に、僕まで机に伏せていたら。ざわざわと人の騒ぎ声が耳に入る。

振りかえる先には、菊池さんと吉川君。
何やら元気のない菊池さんの隣で、吉川君は顔色が悪い。

こちらも寝不足だろうか？
それにしても、吉川君……今日はカジュアルな服装だな。
しかも、両手で紙袋を抱えている。
あれには……何が入っているのだろう？
リョウさんが二人に話し掛ける。

「何や……。二人共、元気ないな。どないしたん？」
「バカ嬢のおかげで……寝付けなかった」と吉川君。
「まさかのビックリな三角関係ですか！？」

僕が菊池さんと吉川君の仲を疑っていたら、吉川君が首を横に振る。

「いや……そういうのじゃなくて。昨晩は……ちょっと出かけて。帰り道を間違えてしまい、菊池家に辿り着いたのはよかったのだけれど。そこで怖い話をされて……。その後、部屋を借りて、眠ろうとするのだけど……。悪夢にうなされて……。熟睡できなくて……」
「別にあなたを怯えさせるつもりはなかったの……」菊池さんが口を挟む。
「わかってるよ……。だけど、真夜中にあんな話をされたら。誰だって、眠れなくなる」
「……」

非常に眠そうな吉川君の隣で、菊池さんが黙り込む。
今日は朝から皆して元気がないな。
まるで雨が降っている時のような、奇妙な眠気が辺りを包む。眠い……。
そんな中、不意に現れるのは吉川君の所の執事さん。
吉川君に駆け寄り、大声で捲し立てる。

「坊っちゃん！　昨晩は何処(いずこ)へ！？」

一人外れたテンションの執事さん。
執事さんが大声を出した直後、吉川君が抱える紙袋の中から何かが飛び出てくる。
その物体が『シャー！』という声を上げながら、執事さんに飛びかかる。
執事さんの腕に食らいつくのは、白い動物。
あれって……フェレット？
その後、始まるのは執事さんとフェレットの戦い。
吉川君が二人を放って、お姉ちゃんに近づく。

「ミャラちゃん……。眠っているみたいだね」
「お姉ちゃんに用ですか？」と僕。
「あぁ……。ＫＹという人から、これを渡してくれって」
「ＫＹさんに会ったのですか？　一体、どこで？」
「どこだったかな……？　昨晩は夢現(ゆめうつ)つだったから、覚えていないや」
「……」

夢現つって……。
まさか、異世界に行って来たなんてことは……。
リアルにあり得そうだな。
吉川君いわく、道を間違えて菊池家に辿り着いた、と言っていたけど。
吉川君が方向音痴なわけがないだろうし。
迷うとしたら、行った事のない場所へ行ったはず。
狭間か、セントラルか……。
狭間だったら、きっと出口なんてわからないだろうし。やっぱりセントラル。

とすると、どうやって行ったのか？　誰かが補助した？

勝手に推理をしながら、吉川君の手に持つ紙袋を受け取る。
中を見ると、間違い探しの本がたくさん……。
よくみると、クロスワードも混じってる。
何だ、食べ物じゃなかったのか。期待して損した気分。
不意に吉川君が、フェレットに振りかえる。

「チロ、おいで」

吉川君の声に釣られて、フェレットがやってきた。
と思ったら、吉川君を通り過ぎて、机に伏せて眠るお姉ちゃんに近づく。
そのままスカートをよじ登り、お姉ちゃんの服の中に入り込む。

次いで、お姉ちゃんが驚き余って、飛び起きる。
短い悲鳴を上げて、混乱しながら。混入物を取り押さえようとする。
だけど、素早いフェレットを取り押さえられる程に素早くないお姉ちゃん。
寝起きということもあってか、フェレット如きに弄ばれている。

フェレットが服の中をはいずり回り。
もぞもぞ感に堪え切れなくなった、お姉ちゃんがエロい声を上げ出す、

「あんっ！　ダメ！　それ……あぁ！　やぁん！　そ、そこ……突いちゃ。やぁ！？」

お姉ちゃん……日に日にエロさが増していく。
クラビア……というか、アダルトアイドルでも目指しているのだろ

うか？
おかげ様で、お姉ちゃんに皆の視線が集中。
最後は、お姉ちゃんが立ち上がって、近くにいた吉川君にしがみ付く。
ちなみに、吉川君は寝ぼけ眼も吹っ飛んで、赤面しながら翼を付けている。
不意にお姉ちゃんが涙目でとんでも発言だ。

「取って！　服の中にいる物を取って！」
「む、無茶言わないでよ！」
「取ってぇ！　あぁんっ！　何！？　やぁん！　怖いよぉ……！」

お姉ちゃん……服の中に入った物が何なのか、理解していないらしい。
だから、余計に怖いのだろう。
吉川君はわかっているから、ある意味では冷静なのだけど。
パニックになるお姉ちゃんの言葉に対して、動揺している。
そりゃあ……男性の吉川君が、とりあえず女性のお姉ちゃんの服の中に手を突っ込むわけにもいかない。

こういう時のお役立ちアイテムといえば、菊池さん。
そう思い、菊池さんに振り返ったら。パニックになるお姉ちゃんに萌えたのか。
鼻血を垂らしながら、お姉ちゃんの写真を撮りまくっていた。
この人……本当に最高だ。

そして、痺れを切らしたお姉ちゃんが行動に出る。
吉川君の右腕を掴んで、自分の服の中に突っ込み、訴える。

「取って！　変な物を取ってぇー！」

「……っ！？」言葉なく燃え上がりながら仰天する吉川君。
「いやぁぁん！　後ろに来たぁ！　やぁあ！　今度は前に来たぁ！　早く取ってぇえ！」

お姉ちゃん……本泣きだ。吉川君……石化している。
凄いエロ展開を繰り広げる中。
問題の根本、白いフェレットがお姉ちゃんの胸元を開けて、顔を覗かせる。
満足げに上半身を外に出して、大人しくなる。
それを見たお姉ちゃんがキョトンとした表情で呟く。

「……チロ？」
「クククククッ」嬉しそうなフェレット。
「何だ……チロだったの。もう～、ビックリしたぁ～」

吉川君にしがみ付き、安堵のため息をつくお姉ちゃん。
不意に顔を上げて、吉川君に問いかける。

「それにしても、どうしてチロがいるの？　ここは学校だよ。もしかして、お散歩？　あれ……？　伊吹もどうしたの？　いつもと服が違うね。何だか可愛いね、その服。今から、どこかにお出かけするの？　ねぇ、伊吹……？」

お姉ちゃんが問いかけても、吉川君は動かない。いや、動けない。
何せ右手はお姉ちゃんの服の中に突っ込んだまま。
しかも、見た感じ……結構、ヤバい所に手がある。
まるで吉川君がお姉ちゃんを犯しているように、見えなくもない。
いや、むしろ……そう見える。

今の状況に、お姉ちゃんがはたと気づく。

そして、普通ではあり得ない行動を起こす。
吉川君の右手を掴んで、自分の胸に持っていき、自慢げに一言。

「僕って、結構、胸あるでしょ？」

すぐに僕が椅子から立ち上がって、空を飛びながら、お姉ちゃんの後頭部に一撃を加える。
これでも、まだ子どもの姿だから。空を飛ばないと、お姉ちゃんの頭に手が届かない。
ニャアと鳴くお姉ちゃんの背後から、おどろおどろしい声で口を開く。

「お姉ちゃん、何してるの？」
「何にもしてない。ごめんなさい」

お姉ちゃんが吉川君の右手を自分の服から取り出して。
チロというフェレットを抱きかかえながら、菊池さんの元へと向かう。
未だに石化を続ける吉川君に、僕が話し掛ける。

「あのフェレット、吉川君が飼っているのですか？　それにしても、上手く躾ましたね。流石は天才です。動物をこれほどまでに調教するなんて。お願いですから、お姉ちゃんを調教しないでくださいね。動物よりも調教されやすいので」
「……」
「あ、吉川君も鼻血が垂れていますよ」
「へっ！？」

やっと我に返る吉川君。
本当に鼻血が出ている。菊池さんと同レベルだ。

鼻元を押さえる吉川君に、ティッシュを持った執事さんが近づく。
吉川君がティッシュを受け取り、鼻を押さえながら一言。

「あんなの……ズルイ」
「不意打ちにも限度がありますよね。僕も最後の行動には驚きました。お姉ちゃんは女性としての自覚があるのか、そろそろ心配になってきます」
「……」

僕達の前では、ティッシュを使って菊池さんの鼻血を拭きとるお姉ちゃん。
チロはお姉ちゃんの胸元でお休み中。
ちらちらと下着が見えているのに、お姉ちゃんは気にしていない。
結構、破廉恥なのだけど。この人なら許せると思うのは、やっぱり天然だからであろうか？

心底暴露君〈ハル編1〉（前書き）

イラストは最後に軌道修正することにしました。
だって、下書きをスキャンするのが凄く面倒くさいから。

心底暴露君〈ハル編1〉

僕達がほのぼの幸せ安泰生活な日々を過ごしていたら、迷惑事件が勃発する。
放課後の教室の中にて、皆でお喋りしていたら。
いらない者が登場だ。もちろん、この方、未来さん。

あー、鬱陶しいのが来たな。
と思っていたら、予想通りにいらない発言を繰り出す。
未来さんの話は一つ。
自分が作った『心底暴露君』というゲームで遊ばないか？　っていうか、遊べよ。的な話。

乗り気どころか否定的なボクに対して、えらく乗ってきたのが吉川君。
今日はお姉ちゃんからプレゼントを貰って、超ご機嫌だ。
菊池さんも同様にプレゼントを貰っていたのだけど。
吉川君がご機嫌だと、なぜか僕の苛立ちが募る。

仕方なしに、ゲームが始まる。
まぁ、ゲームと言っても。別にこれといった事はしない。
参加メンバーの各心の中を覗いてみようという話。
参加するのは、僕にお姉ちゃん。恵梨さんに梨香さんと斎藤君。リョウさんとお嬢様に、鬱陶しい天才……吉川君。

そういうわけで、恵梨さんと梨香さん……二人の心から始まり。
リョウさん、吉川君、僕、斎藤君、菊池さん、お姉ちゃんという順番で話が進む。
まぁ、僕の場合は作り物だから、心なんてないけれど……。

真っ暗な世界を見て、かなり気分が落ち込んだ。

と言っても、今はもう立ち直っている。
立ち直るの早過ぎるだろって？
そりゃあ、これくらいに前向きに生きないと、こんな人生はやっていられない。
鬱になって、死んでしまう。
なるべくは、無駄に落ち込まない事が得策だ。

ところで、ここはお姉ちゃんの心の中。
それが何とも美しくて、桜畑になっている。
ずらりと辺りに佇むのは桜木達。
こんなに眺めの良いお花見スポットはそうそうないだろう。
来年はここでお花見をしよう。とか考えていたら、マジでお花見を始める人達が現れる。

えらく楽しそうだけど、僕は別件で忙しいのでご遠慮した。
一人、桜の木の下で、必死に考えるのは例のパズル。
かなり以前に、お姉ちゃんから貰ったパズル。
未だに解けないでいる。難易度、超強のパズル。

最後の謎がどうしても解けずに、僕が唸りながら思考していたら。
菊池さんがやってくる。
えらく興味深げにパズルを見る。

「ねぇ、それは何？　あなた……前にも、それで悩んでいたわね」
「パズルです。かなり前に、お姉ちゃんから貰ったのです」
「上野に……？」
「はい……。僕がお姉ちゃんの家に居ついて、しばらく経った頃……。丁度、お母さんが現れる少し前くらいです。僕がお姉ちゃんの

仕事部屋でウロウロしていたら、お姉ちゃんが僕にくれたのです。
箱の中には、何かが入っているようで……。お母さんが言うには、凄く大切な物だから。僕が自分で解かなきゃいけないそうです。この箱を貰った僕は、お姉ちゃんに凄く信頼されているって……お母さんが言っていました」
「私にも貸して」
「嫌ですよ。これは僕がお姉ちゃんに貰ったのです」

僕が言ったら、菊池さんが不満げな顔をする。
直後、パズルに手を伸ばして、僕から奪い取ろうとする。
何て乱暴な人なのか。すぐに対抗する僕。
僕達が争っていたら、不意に手からパズルが滑り落ちる。

地面に墜落するパズル。マズイと思っても、もう遅い。
パズルの一部が弾け飛んで、蓋が外れ落ちる。
壊れた!?　でも、開いた!?
チラリと見えるのは箱の中身……何か紙切れのような物。
僕がパズルに手を伸ばすと、菊池さんも同じ事をする。

僕達が同時にパズルに触れて、直後、恐ろしい事態だ。
ズンッと足が重くなり、地面に身体が引きずり込まれる。
え？　嘘!?　何、これ？
考えるまでもなく、地面に飲みこまれる僕達。
助けを呼ぶ暇なんてなかった。
僕達はパニックになったまま上の世界から消えうせる。

地面に飲み込まれ、落ちた先は、地面の下。当たり前か……。
と言っても、呼吸もできるし、動く事も可能だ。

ただ暗闇。上を見上げると、桜の根のような物が辺りにはびこっている。

菊池さんが僕の服を掴み不安げな表情をする。

「ここは……？」

「どうやら、僕達は地面に飲み込まれたみたいです。上に行けば、また元の世界に戻れるでしょう。ここは地下帝国ですね」

「地下……どうして、地面に飲み込まれたの？」

「それは知りませんが……。もしかしたら、あの箱が原因かも……」

「箱の中身は……？」

「紙切れのようでしたが、詳しい事は……。箱に触れた瞬間に、落ちましたから。箱は上にありますし……。何とか登って、地上に行かない事には何とも言えませんね」

「うん……」

菊池さんが理解を示す。

それにしても、この地下……えらく重苦しい気が漂っている。

息はできるが息苦しい。

妙な不安感を覚えて、早く離れたい気分になる。

さて、どのようにして上に登ろうか？

空……というか、地中とか飛べるのかな？

それとも根っこを伝って行く？

向こうに、地中深くまで根付いている物があるし。

そんな事を考えていたら、不意に辺りが揺らぎだす。

暗い世界に変化が現れ、気づけば街路に立っていた。

何が起きたのかさっぱりな僕。

不意に菊池さんが落ち着きのない声で呟く。

「あの子……」

菊池さんが凝視する先、俯き加減の男の子。
歳は、小学生低学年くらい。
ランドセルを背負いながら、とぼとぼと歩いている。
一目でわかる。これはお姉ちゃん……というか、お父さんの幼い頃。

何となく幼い表情が、今のお姉ちゃんにそっくりだ。
どちらかと言えば、お父さんよりもお姉ちゃん似。
この頃から、女装趣味が……なんて余計な事は言わないでおこう。

それにしても、元気がない。まるで生気を感じられない。
友達と喧嘩をしたとしても、ここまで暗くなる事はないだろう。
先生に怒られても、こうはならない。
一体、どうしたのだろう？

不思議がる僕を残して、走って行くのは菊池さん。
男の子の前に立って、大声で話しかける。

「上野！　あなた、上野でしょ！？」

返事が返ってくるわけない。
だって、これはお姉ちゃ……うみゃうみゃ、お父さんの過去だ。
男の子は菊池さんに気付く様子もなく、そのまま青白い表情で歩き続ける。

菊池さんの横を素通りして、三歩進んで立ち止まる。
不意に振り返る、その先には菊池さん。
え？　まさか、僕達の事が……。と思ったが、そういうわけではな

くて。
単に来た道を戻りだすだけ。菊池さんには気づいていない。
　立ち去ろうとする男の子の後ろを菊池さんが付けて行く。
もちろん、僕もする事がないから追いかける。
お姉ちゃんの幼い頃って、どんな感じだったのだろう？
興味津々に追いかける僕達二人。

心底暴露君〈ハル編2〉

いつの間にか、空まで現れ。夕日が辺りを包み込む。
学校帰りだったのか……。てっきり、登校拒否をするのかと思っていた。
来た道を戻ると言ったら、登校拒否以外に思い付かないし。
お姉ちゃんならあり得そうだったから……。

一体、どこへ向かうのだろう？
僕と菊池さんが話し合っていたら、辿り着く先は公園だった。
誰もいない公園で、男の子がブランコに座り、一人で遊び出す。
えらく寂しいな。友達とかいないのかな？
じっと眺めていたら、本当に一人で遊び続ける。
楽しそうには見えないけれど、何とかして時間を潰そうとする意志が伝わってくる。

刻々と過ぎる時間、いつしか辺りは真っ暗だ。
公園の時計を見ると、夜の九時。
流石に、そろそろ帰らないと両親に怒られますよ……。とか考える僕だけど……。
……あれ？　そういえば、以前、お姉ちゃんに家族の事を聞いたら『いない』って言っていたっけ？

……。じっと考え込む僕の前では。家に帰る気のない男の子が、滑り台を滑っている。
永続ループ滑り台。今ので、軽く千回は滑ったんじゃないだろうか？

菊池さんは大人しく男の子の様子を眺めている。
怖いくらいに大人しい菊池さんを見て、何となく違和感を覚える。

もしかして、この人……何か知っている？　僕が菊池さんに問いかける。

「あなたは何かご存知ですか？　お姉ちゃんの過去について……」

「……」

「話す気ゼロですか。別に構いませんけど……」

僕がムスッと膨れたら、不意に菊池さんが冷めた声で話し出す。

「前に……皆で学校に泊まった時」

「そんな事がありましたね。その時に、何か？」

「上野と一緒に……歩いていたら……。知らない部屋に……辿り着いて」

「……」

「そこは……上野が幼い頃に住んでいたマンション」

「それで……？」

「声だけ……聞こえてくるの。声だけ……」

今にも泣きそうになる菊池さん。そのまま押し黙ってしまう。

これ以上は、問いかけられそうにない雰囲気に、僕まで黙りこんでしまう。

そんな中、動き出すのは男の子。

今の時間は、夜中の十二時。

普通は……子どもがこんな所でウロウロしていて良いはずない。まさに異常だ。

暗い夜道を歩く男の子、その後を僕達が追いかける。

歩き続けて、十分程度。辿り着くのは、古びたマンション。
しかも、エレベーターがなくて、階段はボロボロ。
正直に言って、廃墟に近い。
こんな暗闇の中でも、ハッキリとそう思うのだから相当な物だろう。

そんなマンションに男の子が足を踏み入れる。
いつの間にか、菊池さんは僕の服を掴んで、不安げな表情。
何かに脅えて、身体が震えている。
菊池さんが余りにも脅えるので、僕まで怖くなってきた。

男の子がとある部屋の扉を開けた瞬間、飛んでくるのがフライパン！？
男の子の頭に直撃して。男の子が頭を押さえながら、しゃがみ込む。
次に、転がるフライパンの音よりもうるさい怒鳴り声が部屋の中から聞こえてくる。

恐ろしい程の怒鳴り声。
基本的に怖いものなしの僕でさえ本気でビビる。基本から外れている。
何、これ？　何が起きているの？
怒鳴り声を冷静に分析してみると、女性の声だと理解できる。
内容は男の子に対しての非難の嵐。
非難と言うか、侮辱、軽蔑、さげずみ踏み付けるような罵声。

ふいに男の子が立ち上がり、地面に落ちたフライパンを取りに行く。
それを手に持ち、死んだような目で、自ら罵声に向かって歩いて行く。
部屋に入り、扉が閉まるが、止まらず外まで聞こえてくる怒鳴り声に、耳が痛くなりそうだ。

事の事態に、硬直する僕と菊池さん。
不意に菊池さんと僕の目が合う。
ポロポロと涙を流す菊池さん。
お姉ちゃんの過去を見て、気分が滅入っているのだろう。
僕だって、平常な振りをしているけれど、かなりパニクっている。

二人で顔を合わせ、どちらという事もなく、小さく頷きあう。
部屋に入ってみよう。暗黙のうちに、お互いの心を理解する。
扉に近づき、触れようと試みたが、それはできないようだ。
手が扉を突きぬけてしまう。
これは過去に起きた出来事……。
目に映るのは幻想だということだろう。

扉を突きぬけ、中に入ると、目を疑う光景だ。
厚化粧な女性……派手な服を着た、まるでキャバ嬢のような人。
どことなく……お姉ちゃんに似ている。
もちろん、顔の話だ。性格なんて、どこも似ていない。むしろ、真逆に近し。

その人が、『汚らわしい！』とか、『汚い！』とか、ほざきながら、お風呂場で男の子にシャワーをぶっ掛けている。

一緒にお風呂で仲良し家族……ではなく……。
男の子の姿……ランドセルを背負ったまま、服も着たまま……。
頭からシャワーをぶっ掛けられている。

しかもこれ……水っぽいんだけど。
僕が突っ込んだ所で答えてはくれないだろう。
女性が、『気持ち悪い！』と言いながら、じょうろを男の子に投げ

つけて、風呂場から離れる。

男の子は泣きも騒ぎもせずに、冷静沈着。その態度が更に怖い。
不意に音を立てずため息をつく。
風呂場から出て、その辺りに落ちているタオルを手に取り、身体を拭き始める。

あの……少しお話いいですか？　これ……虐待って言いません？
教育ではありませんよね。だって、もう……わけがわからない。
男の子が自分とランドセルを拭き終わり、部屋の奥へと入って行ったら。またもや女性が怒り狂う。

その時には、テレビを見ていた女性。
『足音がうるさい！』と言って、寝転んでいた状態から立ち上がる。
その辺りに落ちていたビール瓶を手に持ち、男の子に近づく。
不安を感じた男の子は、とっさに近くにある布団を頭にかぶる。

そこから始まるのは一方的な暴力。
布団をかぶる男の子に向かって、女性がビール瓶を振り落とす。
切りがない程に、振り落とす。
嫌な音が鳴っているけれど……お願いだから無事でいて。
そう……僕達は願う事しかできない。

途中で、女性が飽きたのか、ビール瓶をその辺りに放って。また寝転び、テレビを眺める。
テレビの音だけが広がる空間。
不意に布団が動き出し、男の子が顔を覗かせる。

何とか生きていたらしい。
上手くランドセルでカバーしたのか。

それほど、大きな被害はなさそうだ。
それでも男の子は腕をさすっている。
きっとビール瓶が直撃したのだろう。

哀れな男の子は布団を地面に置いて、足音を忍ばせ、押し入れの中へと入って行く。
そこからは無音。急に辺りが暗くなる……。

心底暴露君〈ハル編3〉

次に明るくなった時には、別の場面。
男の子はサイズの合わないコートを着ていて、目の前には一人の男性。
滅茶苦茶に怒っているようだけど……。
何で怒っているのかはわからない。
だけど、凄く怒っている。

この人……お姉ちゃ……じゃなくて、お父さんに似ているな。
何となく目元とか……似ている気がする。
不意に男性が男の子を蹴り飛ばして、ベランダに追い出す。
そして……鍵を掛けた。

え……？　あの……。ちょ……。外……吹雪いていますけど？
真冬の真夜中の吹雪の中、ベランダに追い出された男の子はガタガタと震えている。
そりゃそうだろう。これ、ヤバいって！

僕なら耐えられるけど……。
普通の人間……しかも、幼い子どもが耐えるには余りにも厳しすぎる環境だ。
それでも、男の子は泣き言も言わずに、訴える事もなく。
ベランダの隅で小さく縮こまる。
死ぬって……このままじゃあ、凍死するよ……。

数時間が経過して、朝になる。
吹雪は落ち着いてきたけれど、雪は止まる事を知らない。
男の子は生きているのだろうか？

正直に言って、凍死していても不思議じゃない。
不意に、動き出すのは例の女性。この人もいたらしい。

立ち上がり、ベランダに向かう。
流石に助けるだろうと思ったら、『日は嫌い』とか言って、カーテンを閉めた。
おいおいおいおいおい、ないないないないない。
理解不能な男女の態度に、思わず喧嘩を売りたくなる。
何て疎ましいのか……。

それにしても、胸糞が悪い。
菊池さんも歯を食いしばって、怒りを抑えている。
そう……暴れても無意味だから、更にストレスが急上昇だ。
このままだと、僕達がノイローゼになりそうだ。
お願いだから、どなたかこの子を助けて下さい。

僕達の願いは報われる事なく、刻々と時間が過ぎて行く。
雪が止んだ夕暮れ時、縮こまっていた男の子が微かに動きを見せる。
手に暖かい息をかけて、空を見上げるその姿を見ると、なぜかこちらが泣けてきた。
涙も見せない男の子の姿を見て、泣き始めるのは菊池さん。
寂しげな男の子と咽び泣く菊池さんを見て、僕まで貰い泣き。

関係のない僕達が泣いていたら、不意にベランダの扉が開く。
顔を見せるのは、男性。灰皿のゴミをベランダに捨てる。
不意に男の子を見て、口を開く内容は卑劣なもの。

『こんな所で何してるんだ?』

自分が行った行動を忘れてしまったのか。はたまた、ただの嫌が

らせか。
そんな事はわからないが、男の子が部屋に入れただけでもよしとしよう。
泣き続ける菊池さんを元気づけながら、暗くなる世界に安堵する。
もうこれ以上、見たくない……。

それでも尽きる事なく、悪夢のパレードは華やかに。僕達の視界に、幻を映す。
虚ではない実なる幻。嘘であったなら、笑い事で済むだろうに……。
次々に目に焼きつく光景は、僕達の記憶に刻まれ。
それはきっと永遠に失せる事はないだろう。

怖い事件は、いくつもあった。
印象に強かったのは、以前にお姉ちゃんが黒松さん達と話していた事。
ゲテ物食いの話になり、お姉ちゃんが猫を食べた事あるとかないとか言っていた。
僕には何の事かわからなかったけど……。きっと次の話だろう。

男の子が拾ってきた捨て猫……。
見つからないように育てていたら……。
学校からの帰宅後に、夕食にされていた。
男の子は何も知らずに、超珍しく女性が作った料理を喜んで食べた後、押し入れの中を見たら猫の首。
ホラー映画でも止めてほしい。
トイレに駆け込んで、食した物を吐き出そうとする男の子。
それを見て、大笑いする女性。

まるで酷い話ばかりだ。
基本的には、食事なし。

お姉ちゃんは近所のパン屋さんからパンを貰ったり。
色々な人から食べ物を貰って、それで耐えていた。
給食以外はそれで我慢。
家の冷蔵庫の中身を食べたら、その後に待っているのが死刑だから。

真面目にゴミ箱を漁っていた時もある。
この時は流石の僕もマジ泣きだ。
だって、余りにも哀れだから……。
野良犬と一緒になって、ご飯を食べるのだもの。
もう泣くしかない。

学校の教師達は気づいていたが、見て見ぬ振り。
面倒事には係わりたくないらしい。
お姉ちゃんに友達はいたけれど、少しよそよそしい感じ。
きっと親から余り係わるなと止められているのだろう。

病気になっても、もちろん治療費なんて出してくれない。
それどころか、『風邪が移る』とか言われて、またもやベランダに追い出される。
部屋に立っているだけで、鬱陶しがられて。
お姉ちゃんの居場所はいつも押し入れの中。

時間経過と共に、怒りは消えうせて。悲しみだけが僕達を包み込む。
幼い哀れな男の子を見て、手助けもできないのだ。
自分の力なさに泣いて、男の子の謙虚さに泣いて。

菊池さんと一緒になって、大声で泣いていたら。
いつしか暗闇だけになる。もう幻は見えなくなった……。
僕達が見た、この話が全てではないだろう。

きっと知らない事もたくさんある。

早くお姉ちゃんに会いたい。

急に孤独感を覚えて、菊池さんと一緒に出口を探す。

とにもかくにも、一分一秒でも……。

早く、早く、早く、早く……会わなくちゃ。

心底暴露君〈メモリー編〉

……。

……。

……。

ど……どうしよう？

ここは僕の心の中、桜に囲まれ地面に座る僕は赤面しながら混乱中。

少し前の話……伊吹と一緒に桜を見ていた。

追いかけっこをして遊んだ後。

話をしているうちに、つい……甘えたくなってしまい。

自分の幼い頃の辛い思い出を聞いてもらって……。

その後、急に伊吹の様子がおかしくなって。

心配していたら、両腕を押さえ込まれて、もの凄く熱いキスをされて。

急な話で、僕が怖がってしまい。

泣きそうになっていたら、今度は伊吹が謝りだして……。

涙を流しながら、謝りだして……。

泣きながら謝る伊吹を心配していたら……。

心配していたら……。

伊吹が僕を見て……伊吹が僕に……。

「ボク……君に恋しているんだ」

って、言ってきた……。

嘘でも冗談でもない。あの顔は本気だ。

だって……泣きながら告白してきたもの。

もちろん、僕は返事に戸惑う。

好いてもらうのは嬉しいけれど、僕はあくまで友達として伊吹の事が好きだ。

僕の中で、伊吹は親しみやすい友達という立場だった。

確かに、少し好かれている気配は感じていたけれど……。

単に楓に似ているからであって。まさか、泣く程好きだなんて考えもしなかった。

どうしよう……困った。あんな告白をされて、拒否なんてできない。

伊吹の姿を思い出したら、断る事なんてできそうにない。

だって、断った時の伊吹の反応が想像できないから……。

伊吹は僕が男だという事を知らない。

それが更に話をこじれさせる。

断る理由が思い当たらない。

だって、相手はパーフェクト人間だ。

きっと何を言っても、言い負かされるに決まっている。

かと言って、今更……真実なんて言えやしない。

困った……。
対処法が思いつかなくて、困惑するばかり。
伊吹はもう立ち去ってしまった。
最後に、僕の額にキスをして。
そのまま……向こうへ行ってしまう。

顔を真っ赤にしながら、口元を押さえて。今の出来事を思い出す。
どうしよう？　どうすればいいの？
日和に相談したら、なんて答えるだろう？
頭の中で想像してみる。

『良かったね、上野君！　あ！　だけど、菊池さんも上野君に気があるのよね？　うーん……こうなったら……。両取りだぁー！』

駄目だよー！　というか、僕は男だってー！
これなら、瑠菜に告白されたほうがよっぽど気が楽だ。
まさか、伊吹に告白されるなんて。
はぁ……気が重い……。

ああでもない、こうでもない。
一人でブツブツと呟いていたら、急に人の声が聞こえてくる。
振り返る先には、ハルと瑠菜。
二人共に泣きそうな顔でこちらに近づいてくる。
どうしたのだろう？　僕が二人に問いかける。

「二人共、どうしたの？　何かあったの？」

僕の問いかけに答える事なく、二人が僕にしがみ付いて泣き始める。
何とか二人をなだめていたら、不意にハルがあの箱を取り出す。

あぁ……それで。
箱の蓋が開いていて、その中には一枚の紙。
日和との交換日記の一部。
このページでは、僕が初めて日和に家の話を持ち出している。
口で語る程の勇気がなくて、日記に綴ったんだ。

日和が死んでしまった後。
日記を読み返した時に、変に目に付いて。
他人に見られるのは嫌だけど、せっかくの日記を捨てるのも惜しくて。
この箱に封印していた。
その後、しばらくは忘れていたのだけど……。
ハルに出会って、発作的に思い出して。
つい……ハルに渡してしまった。
少し躊躇はしたけれど、渡してしまったら。
これで良かったのだと、自分の中でも納得ができた。

そうか……あの謎を解いたのか。
もっと時間が掛ると思っていたのに。
案外に早かったな。

二人を交互に抱きしめて、頭を撫でて口を開く。

「お疲れ様」

そう言ったら、二人が更に泣き出した。
うーん……伊吹の件でも困っているのに。
こっちはこっちで困った事になったな。
泣きやまない二人を前に、僕の思考は止まる事なく。
あっちの話も考えて、こっちの話も考えて。

忙しいけれど、何だか癒されるなぁ～。

心底暴露君〈メモリー編2〉

今日は皆の心の中を覗けて、充実した。
未来もたまには面白い事をするじゃないか。
まぁ、大概はくだらない事ばかりだけど。
それにしても、伊吹に告白された事には驚いたな。
返事……どうしようかな？

ここは瑠菜のお屋敷、僕の部屋。
今日は瑠菜がどうしても家に来てほしいと言うので、了承した。
本当は家族で食事に行く予定だったのだけど。
まぁ、急ぐ事もないだろう。

食事を終えて、二人でベッドに座ってお喋り。
今日の瑠菜は大人しい。
何だか元気がない。
いつもなら僕にちょっかいを出したり、身体を触ったりしてくるのに……。
今日は何もしてこない。
隣に座って、ボーっとしている。

僕は心配しながら、瑠菜を抱きしめたり、頭を撫でたり。キスしたり。
何とか元気づけようと試みる。
それでもどこか……上の空。
僕が瑠菜に抱きつきながら、顔を摺り寄せていたら。
不意に瑠菜が僕を抱きしめる。
強く抱きしめた後、僕から身体を離して。真顔で言う。

「ねぇ、上野……」
「どうしたの？」
「話を……聞いてくれる？」
「うん、聞くよ。話して」

僕が優しく言ったら、瑠菜が少し笑みを浮かべる。
そんな瑠菜の姿を見て、ホッと胸を撫で下ろす。
何だか体調が悪そうだったから……笑顔を見ると安心する。
そして、瑠菜が語りだす。

「上野はこの世界で起きている現象に気づいている？」
「へ……？」

唐突に……何なのだろう？
この世界で起きている現象？
何？　えーっと……最近、何か起きたっけ？
別にこれと言って、思い当たらない。
政治の話？　それとも、何か異常気象の話？
僕が首を左右に傾げていたら、瑠菜が泣きそうな表情を浮かべる。
不意に思いきったように、瑠菜が恐ろしい質問をする。

「今年の……今年の大みそかは晴れ？　雨？　それとも、雪？」

その質問を聞いた途端に、僕が眉をしかめる。
今年の大みそかは……大嵐。季節外れの台風。
恐ろしい程の嵐になって、次の年に行く事なく、また今年が繰り返される。
何度も何度も僕の気が済むまで……。

こんな質問、何も知らない人は普通しない。

瑠菜は今年の大みそかに起きる出来事を知っている？
だけど、どうして瑠菜がそれを？
だって、そんな事を知っているのは……僕だけのはず。
僕が躊躇いながら、瑠菜に問いかける。

「ねぇ……どうして、瑠菜はそんな事を……」
「やっぱり！　上野は気づいているのね！」
「う……うん。いや……だけど、瑠菜は？　なぜ？」

僕の戸惑いに、瑠菜が静かに答えてくれる。

「私は……。ずっと前は違ったの。初めは違和感。こんな事が前にもあったような気がする……。そんな軽い違和感から始まったわ。だけど、ある日……気づいてしまった。何度も繰り返される一年に。一度、気づいたら……。次の回になっても記憶が消えないの。皆は忘れているのに、私だけ覚えている」
「……」
「繰り返される一年間。きっと次は終わりだからと信じて、もうかれこれ十年は経っている……。だけど、終わる気配もなくて。そんな事態が、少しずつ……怖くなってきて。それでも、誰にも助けを求められなくて……」
「……」
「悪夢を見て、一人で泣いて。菊池家の魔女伝説を調べて、自分が何者かに呪われているんじゃないかと誤解して。最後は……最後は……同じような境遇にある人がいないか、調べ始めたの」
「……」
「全然……見つからなかった。今の質問に答える人は、選択肢から選んでしまう。こんな季節に台風なんて、イメージが湧かないもの。答えられなくて当然。アンケートを取っても、道で質問をしても……。誰一人、答えられないの。それを知って、私は恐怖に怯えたわ

……。だって、私だけがこの現象に気づいている」
「瑠菜……」
罪悪感が込み上げて、思わず瑠菜に手を伸ばす。
ギュッと抱きしめて、口を開く。
「ごめんね……」
「上野……。まだ……あるわ。話の続きが」
「うん……。話して」
小刻みに震える瑠菜の身体を抱きしめて、頷く。そしたら、瑠菜が僕を抱き返して、そのまま話を続ける。
「ある日……また街に出て、アンケートをしていたの。そうしたら、偶然……あなたが通りかかった。あなたと直接に話をしたわけではないわ……。私が他の人に質問をしていたら、その内容を耳にして……。あなたが呟いたの。『違うよ。その日は嵐だ』って……」
「覚えて……ないや」
「その後……あなたを追いかけようとしたけれど。人通りの多い所だったから、人混みに紛れてしまって、わからなくなったの。通りすがりだったから、顔もハッキリ覚えていないし。分かっていたのが、声だけ……。私は音を覚える事が得意だったから、ずっとその声を頼りに探し続けたわ」
「うん……」
「それで……必死に探していたら、次の年にあなたを見つける事ができた。仕事仲間と飲み会の帰りだったみたい。あなたの声には癖があるから、きっとこの人だろうという確信はあったわ。だけど、声を掛ける事はできなかった」
「どうして……？　話しかけてくれたらよかったのに……」
「怖かったの……。もしも、あなたじゃなかったら。また一から人

を探さないと……。下手をしたら、あの声は私の聞き間違いだったかもしれない。あなたは私の希望だったの。あなたを見つけてからも、同じような声の人を探し続けたわ。でも、見つからなくて……。そうしたら、更にあなたに対する思いが増えてしまって……」

「……」

「間違っていた時の絶望を考えると、黙っていた方がいくぶんマシよ。私の気持ちを安定させるためには、あなたに声を掛けないほうがよかった。だから、話し出せなかった。でも、あなたの事は気になっていたから……。偶然にでも、大みそかの話をしてくれないかという期待を持って。盗聴器を仕掛けたり……していたの」

「あの盗聴器は……もったいないよ。僕はそんなに……話さなかったでしょ？」

「でも……歌は凄く上手かった。初めて聞いた時は、涙が出て……感動したわ。今でも大好きよ。上野の歌声」

「ありがとう。初めの頃は嫌な奴だと思っていたけど、今は凄く可愛いね。瑠菜は」

瑠菜の頬にキスをしたら、瑠菜の顔が真っ赤になる。

落ち込み加減だった表情が消えうせて、はにかみながら僕に目を向ける。

うぅ……ん、可愛い。瑠菜が僕の手を取りながら、続きを話す。

「それで……ハル君が来ると、あなたがよく話をするようになって。その頃には、私は……あなたの事が好きだったから。ずっと見ているうちに、好きになっちゃったの。これでも、初めはそうでもなかったのよ。根暗な人ね、陰気臭い。って、思っていたわ」

「根暗……陰気臭い……」

心臓に突き刺さるような言葉だ……。

今の瑠菜に言われたら、かなり……ショック。

何か……もの凄く辛い。
しおれ始める僕を見て、瑠菜が慌てふためく。

「違うわ、上野！　それは初めて会った頃の話よ。今は凄く明るくて、前向きだから。凄くカッコいいし、可愛いから！　それに、根暗な上野も素敵だし！」
「ん……。そういう事にしておくよ」
「本当よ。本当なの」

必死に訴える瑠菜。
でも……根暗が素敵なんて言っている人……見た事ない。
うーん……微妙な気分だ。
そして、瑠菜が無理して話を進めようとする。

「そ、それでね。あなたがよく言葉を口にするようになると……。今度は面と向かって、話をしたくなってきて……。なるべく、あなたの近くにいたいから。学校を替えて、放課後にでも遠くから様子を窺おうとか考えていたの。そうしたら、驚いた事に……あなたが学校に来て。私は慌てていたら、何を話せばいいのかわからなくて……。思わず……」
「キスしたの？」
「ん……。人が見ていたから、いきなり泣きつくのは恥ずかしいし。あなたが抵抗したから、ちょっとイラッてきて……。私が一方的に好きだったのだけど。あなたに話をする程の、余裕が心になくて。キスしたら……全部悟ってくれるかと」
「それは……流石に無理があるよ」
「あなたなら全てを理解しているって……そう思っていたんだもの」
「う～ん、それは瑠菜の思い違いかな？　僕はそんなに凄くないよ。期待を裏切って、ごめんね……」
「そんな事ないわ」

そう言って、瑠菜が僕をベッドに押し倒す。
頭の中が燃えるようなキスをして、一緒にベッドに転がりながら話を続ける。

「上野は……世界を変えられる？」
「あぁ……そうだね。来年はきっと前に進むから」
「……ねぇ、上野」
「何？」
「上野は『橋』なんでしょ？　この世界のリーダーなのよね？」
「へ？　ど、どうして、そんな事……。リーダーなんて話は……」
「知っているわ。私は何でも知っているわよ。それよりも……上野はニュースを見ないでしょ？」
「う、うん……ごめん。世間には疎いの」
「じゃあ……気づいていないわね。毎回、大きな事件は必ず起きるという事に」
「え？　いや、それは知っているよ。仕事の内容とかが、殆ど同じだから。小さな出来事はぶれる事があるけど、大事は殆ど変わらずに起きるね。それが……？」
「上野……」

瑠菜が僕に抱きつきながら、不安げな声で話し始める。

「今から……凄く大切な話をするわ。きっと上野はショックを受ける。もの凄く混乱するし、辛いかもしれない。それでも……聞いてくれる？」
「……うん。僕は……『橋』だから、重要な話はどんな事でも受け入れるよ」
「ありがとう……」

瑠菜が頷き、そして口を開く。

「これは……吉川の話」

「伊吹の？」

「今日……きっと吉川の両親が事故で亡くなるわ」

「え……」頭の中が真っ白になる僕。

「そして……十一月の二十六日。あいつが……自殺する日」

「なっ！？」

嘘っ！？　って、叫びそうになるけれど、瑠菜が嘘をつくわけない。

だけど……信じられない。

伊吹が……自殺？　ご両親の後を追って？

混乱して、目の焦点が合わない僕。

僕がパニックになっていたら、瑠菜が僕の口元にキスをする。

すぐに口を離して、正気になる僕に話し続ける。

「吉川の両親は……事故死だから、助けられないと思う。助けたとしても、またどこかで事故が起きるもの。だけど、吉川は別。あいつは自殺だから……。あいつの心の持ちようで助かるかもしれない。気持ちが変われば、助かるかもしれない。そうでしょ？」

「そう……かも」

「そうよ！　助かるわ！　だけど、私には助けられないの。何度も試したけれど、いつも最後は……」

「……」

「死因は毎回異なるわ。首を吊ったり、薬を飲んだり……。だけど、今回はハッキリしている。あいつ……銃を口に当てて死ぬ気よ」

「な、何でそんな事を……」

「あいつが……本人が言っていたの。もしも、死ぬのなら銃を使うだろうって。今のあいつは治癒力が人よりも優れているから、中途

半端な事はしないって」
「伊吹に……話したの？」
「そうよ。本人に言わないと、言っておかないと。もしかしたら、それがためになるかもしれない。両親の事故の話はしていないわ。大きな事件が起きるとだけ告げておいたの。下手な事を言って、自殺が早まると怖いから」
「そう……」
「ねぇ、上野……」

瑠菜がすがる様な眼で僕を見る。

「上野なら……助けてくれるわよね？　私はもう……あいつが死ぬ所を見たくないの。嫌いだけど、友達よ。特に今回は……今回は特別だもの。上野と出会って……。口喧嘩でも、あいつと話ができて。私が今の話をしたら、あいつが真面目に話を聞いてくれた。以前は、無視されたけど。今回は本当に特別なの」
「……」
「お願い……助けて」

僕に抱きつきながら、泣き始める瑠菜。
僕が何とかしないと……。
瑠菜を抱き返して、強く抱き返して。しっかりと口を開く。

「大丈夫。僕が……僕が絶対に守るから」

レジスタンス〈メモリー編1〉（前書き）

今回はきっとシリアスになるだろう。

レジスタンス〈メモリー編1〉

あの日以来、伊吹が青鶯学園に来なくなる。
連絡を試みようとしても上手くいかない。
瑠菜も学校を数日休み、数日後に状況を語ってくれる。
伊吹のご両親は飛行機事故でお二人共に他界したそうだ。
事故が起きたその日に亡くなったらしい。

通夜と葬式……喪主は伊吹がして。かなり盛大な物だった。
資産家の繋がりか、人が多くて本人と話をする機会はなかったが。
数秒だけ、近づく事ができ。長話はしなかったものの。
伊吹が瑠菜に『大丈夫だから、そんな顔をするなよ』と声を掛けてきたらしい。
自殺をする程に、落ち込んでいるようには見えなかったけれど……。
これが瑠菜の話だ。

今は、財産の継承や吉川家の今後について、話し合っているところだろう。
伊吹には弟さんがいるみたいだから、そちらと相談している……と思われる。
後、数日はゴタゴタするな……。僕の予想通り、それから一週間は連絡が取れない状況が続く。

十一月二十六日まで……後、三日。もう日がない。
まだ生きているはずだけど、僕の不安は増加するばかり。
家のキッチンで、携帯電話を眺め続ける僕に向いて。日和が心配げに声を掛けてくれる。

「大丈夫？　上野君？　最近……きちんと眠れている？　凄く……顔色が悪いよ」
「うん……ちょっと悩み事」
「余り思いつめちゃ駄目だよ。上野君が倒れちゃうと……吉川君を助けられる人がいなくなっちゃうもの。少し気持ちを軽くして、休む事も大切だよ」
「うん……だけど」
「フフッ、大丈夫。私は前の『橋』だもの。何かが起きれば、すぐに起こしてあげるから。今はゆっくり休んで、体力を回復させて。人の手を引くには、まず自分が元気じゃないと。ただの足手まといにはなりたくないでしょ？」
「うん、そうだね。じゃあ、お願いしようかな……」

日和に言われて、少し心が安らぐ。
隣で、話を聞いていたハルが口を開く。

「大丈夫だよ、お姉ちゃん。何か起きれば、僕も出動するから」
「そうだね、凄く頼もしいや。それじゃあ、三時間程経ったら、僕を起こしてくれる？　今から少し……休むから」
「わかった。三時間だね」

ハルが頷き、僕はベッドに向かう。
転がった直後、眠気を感じる。
そして、考えるまでもなく、意識が薄れて夢の中……。

誰かの声が聞こえてきて、急に目が覚めてしまう。
上体を起こし、横を向くとハル。

手に僕の携帯を持ちながら、僕に話しかけてくる。
「お姉ちゃん、吉川君から電話だよ」
「えっ！？　伊吹から！？」
「はい、どうぞ」
「う、うん……。ありがとう」

あたふたと携帯を受け取って、耳に当てながら仕事部屋に向かう。
耳元から聞こえてくるのは、懐かしい声。

「ミャラちゃん？」
「う、うん。そう」
「あぁ……。ごめんね、心配掛けちゃって。ちょっと家の世継ぎの話が長くて……。連絡するのが遅れたんだ」
「あの……。ねぇ、今から……会える？」
「えっと……ボクは構わないけど。もう夜だよ」
「夜でもいいの。お邪魔にならなければ……」
「邪魔な事はないよ。世継ぎの話には、飽き飽きしていたし。そろそろ他の話をしたいと思っていた所だから」
「本当に？　今からでも構わない？」
「うん。それなら、迎えを送るよ。ミャラちゃんは家の前で待っていて」
「う、うん。ありがとう……」
「フフッ、お礼を言うのはボクの方だよ。そうそう、迎えが到着するのに一時間程掛るけど……」
「大丈夫、待ってる。ずっと待ってるから……」
「そう……。ありがとう。ミャラちゃんが来るのなら、ボクも準備をしなくちゃ。じゃあ、電話を切るね」
「うん。また後で……」

電話が切れる。
伊吹の声を聞く限り、それほど落ち込んでいる様子はなかったけれど……。
だけど、実際はわからない。
顔を合わせて話をしないと。伊吹の気持ちが読みとれない。

日和とハルに話をしてから、お出かけの準備。
それを終えると、マンションの前まで移動して。じっと迎えを待ち続ける。
三十分程して、それらしい車がやってくる。
運転手さんが出てきて、僕の顔を見ると、すぐに車に乗せてくれた。

車の中でも、気持ちが落ち着かず。伊吹の様子が気になって仕方ない。
ご両親が二人共同時に亡くなったんだ。
僕のような境遇でない限り。いくら伊吹が完璧でも、やっぱり……
それは辛いだろう。

じっと待っていたら、吉川家の敷地に到着する。
長い庭を突っ切って、屋敷の前。
車から下ろしてもらい、屋敷を見ると。玄関に伊吹の姿を発見。
すぐに駆けよって、声を掛ける。

「伊吹！」
「お久しぶりだね。ミャラちゃん」
「あの……」

何を話せばいいのかわからなくて、戸惑う僕。
僕の様子を見て、伊吹が笑顔になり、手を引いてくれる。

「まぁ、中に入りなよ。こんな所にいると、風邪を引いてしまうよ」
「う、うん……」

伊吹に勧められて、屋敷に入る。
少し軽い話をしながら、廊下を歩いて。伊吹の部屋の前までやってくる。
部屋に入ると、チロが歓迎してくれて。何だか話しやすい空気になる。
僕が伊吹に話しかける。

「あの……今更だけど、ご両親が亡くなって……。本当に……ご愁傷様です」
「あぁ……。いや、まぁ……。バカ嬢から、大まかな話は聞いていたし。ボクは元々……両親とはあまり顔を合わす機会がなかったから。ミャラちゃんが思う程に、落ち込んではいないよ」
「でも……」
「いや……それが、本当に落ち込んでいないんだ。こんな話をするのは、薄情かもしれないけれど。親が子より先に死ぬのは、自然的原理だし。ボクの場合は、それが少し早かっただけ。そう思えば、納得がいくんだよね」
「そう……なの？」

そうなの……かな？
僕は両親が亡くなる前に、家を出たし。
酷い扱いを受けていたから、普通の親子関係というものがよくわからない。
両親が亡くなった時の、子どもの気持ちなんて想像ができない。

僕が考え込みながら、伊吹のベッドに横たわると。
チロが駆けてきて、僕の服の中に潜り込もうとする。

直後、伊吹に注意されるけれど、チロは全然気にしていない。
チロが服の中に入って、こそばゆくて、変な声が出てしまう。
チロと戯れる僕を見て、伊吹が顔を赤らめる。翼が出現。
悪戯をしたいけれど、チロに悪戯されているから、手を出せない。

夜中にワイワイと騒ぐ僕達。
あぁ、あの頃と変わらない空気。
凄く気持ちが安らいで、恐怖心が消えてしまう。
何も起きない事が危機感を和らげる。
不意に伊吹が話しかけてくる。

「ミャラちゃんは……。バカ嬢の話をどう思う？　流石に、もう……聞いているよね？」
「うん……。瑠菜の言っている事は正しいよ。この世界はループしている。だから、伊吹の話……本当だと思うけど。だけど……」
「ボクにはわからない。今ですら、そういった気は起こらないし。何が原因なんだろう？」
「そこまでは……僕にも」
「そう……」

伊吹がそう言って、椅子に座り。腕を組みながら、悩み出す。
そんな伊吹に声を掛ける。

「ねぇ……伊吹」
「うん？」
「その……。もしも……良かったら。僕を……」
「……」
「僕を……」
「……」
「しばらく、お泊まりさせてくれない？」

僕の言葉の後に、伊吹が黙りこむ。
駄目かな？　と思っていたら、返事が返ってくる。
妙に不満げな表情で僕に言う。

「それは構わないけれど……。一つ、ミャラちゃんに言いたい事がある」
「何？」
「もったいぶるのは止めて」
「もったいぶる？」
「そんなことは、一言で言えばいいのに。ミャラちゃんはすぐに間を置こうとするから。変に期待するじゃないか。ボクに対する嫌がらせ？」
「へっ？　何？　どうして、怒ってるの？」
「怒っているわけじゃない」

どう考えても、怒っている。
何で怒っているんだろう？
僕がうろたえながら、ベッドから降りて、伊吹に近づくと。
伊吹が不満げながら、恥ずかしそうに、視線を僕の胸元に持っていく。

「ミャラちゃん……服が乱れてる」
「うん？　あ、本当だ」
「……」

チロが服の中に入ってきていたから、ちょっと乱れている。
僕が服を正していると、急に腕を掴まれる。
一瞬、頭の中が白くなって。気づけば、伊吹にキスされていた。
ボッと炎上する僕に、伊吹が言う。

「ミャラちゃん……。ボクの事を好きになってくれないの？」
「え……？　いや……あの……」
「やっぱりバカ嬢の方がいいのか……。別にいいよ。どうせボクなんて……」
「ち、違うよ。そういうのじゃなくて……」
「じゃあ、何？　どうして、ボクは駄目なの？　ボクに対して、気に入らない事があるのなら言ってよ。そうしたら、努力して直すから」
「そういうのでもなくて……」
「それなら、なぜ？　ハッキリと理由を教えて」
「いや……あの……」

何だか伊吹が凄く威圧的。
だけど、言えるわけないでしょ？
僕、実は男なんです。なんて言葉は禁句だ。
考えた末に、口にした言葉は……。

「伊吹が悪いわけでも、瑠菜の方が好きなわけでもなくて。これは僕自身の問題なの……」
「ミャラちゃんのどこが問題なの？」
「そ、それは言えないけど……」

男の上に、超年上です。
この二言が……この二言が口にできない。
口にできないから、伊吹が更に反発してくる。
あーん、もうー、ややこしいな。
いっその事、話してしまえば楽だろうか？
だけど、それをショックに死なれたら。今度は僕が生きていけない。

えらくご機嫌斜めな伊吹の機嫌を取ろうとするけれど。
どういう話を持ち出しても、最後はこの話に辿り着く。
もー、伊吹……しつこいー。
他愛ないけれど、口喧嘩。
僕が落ちるまで、ご機嫌が直りそうにないな……。
だけど、流石にここは譲れないって。

うにゃうにゃと話をしているうちに、真夜中になる。
未だに、伊吹のご機嫌が直らないから、別の部屋で寝ようとしたら。
伊吹に腕を引っ張られる。
伊吹が僕をベッドに放り込んで、自分も乱入。
僕を抱きしめながら、眠り始める。
何だか……今日の伊吹は自分勝手だ。
まるで瑠菜を見ているみたい。

レジスタンス〈メモリー編2〉（前書き）

何か……すげー修羅場。

レジスタンス〈メモリー編2〉

十一月二十六日まで……後、二日。
目が覚めたら、伊吹が消えていた。
キョロキョロと辺りを見回し、探すけれど姿が見えない。
代わりに目に付いたのが、ベッドの横の台に置いてあるメモ。

手に取ると伊吹の字で僕宛て。
今日はまだ話があるから、お出かけするみたい。
夕方には帰ってくるそうだけど。
それまでは一人になるから、屋敷内で遊んでいていいらしい。
どこかに行きたければ、人に頼んでくれという話。

親切な伊吹は屋敷のマップまで書いてくれている。
凄く細かい所まで、きっちりと書かれたマップ……。
これ……手書きだよね？　伊吹が描いたのかな？　何だか、凄い……。

せっかくマップを頂いたにも係わらず、僕は部屋から出る気なし。
ベッドに転がって、二度寝して。起きたら、昼で三度寝して。
夕暮れ前に、お風呂に入って。飲み物を飲んで。
チロも目覚めたから、一緒になって散歩に行く。
ここで初めて、部屋から出る。

僕達がウロウロと歩いていたら、とある客室でえらい騒ぎ声が聞こえてくる。
扉が開いていて、数人の声。
バカ騒ぎを耳にしたチロが脅えて、僕の服に入ってくる。
抱っこをする僕の胸元から。チロが顔を出して、安全確保。

素通りしようかと思ったけれど、こんな所でバカ騒ぎなんて珍しいから。
気になり、少し顔を覗かせる。
部屋の中には見慣れぬ人達。五人の男性……。
何て言うか……凄くチャラチャラしている人達。
リョウより酷いかもしれない。

その人達が何かしている。
机の上には、薬と注射器。
その薬をアルミホイルに乗せて、ライターの火であぶり、煙を吸っている人。
飲み物に薬を入れて、飲んでいる人。
薬に手を付けない人もいるけれど……。
あれって、もしかしなくても覚せい剤？

僕がじっと眺めていたら、不意に一人と目が合ってしまう。あ、マズイ……。
唯一、薬に手を付けていない人が立ち上がり。僕の元へとやってくる。
ネコ耳を倒して警戒する僕に、話しかけてくる。

「お前は誰だ？　見た事ないな」
「えっと……上野ミャラです」
「へ～」

僕をじろじろと眺める人、面白そうに口を開く。

「よく似てるな……。もしかして、兄さんの知り合い？」
「えっと……。兄さんって……？」

「あぁ、伊吹だ。オレは吉川和樹（よしかわかずき）」
「あぁっ！　伊吹の弟さん」

言われてみれば、確かに伊吹に似ている。髪の色とか、顔つきとか……。
だけど、伊吹よりも背が高くて。大人みたいだったから分からなかった。
そうか……弟さんだったんだ。
和樹君が笑顔で頷く。
そうしたら、やっぱり伊吹に似ている。
僕が緊張しながら、口を開く。

「は、初めまして。はい、えっと……お兄さんとは仲良くさせて頂いています」
「丁重な子だな。それで……兄さんとはどこまでしたんだ？」
「えっ！？　いえ、ただの友達です。別にそういうのじゃあ……」
「えっ……そうなんだ」

和樹君が意外そうに目を丸くする。
そういう姿を見れば見る程に、伊吹に見えてくる。
大人バージョンの伊吹。
本当は伊吹よりも年下なんだけど……。
伊吹って、ちょっと幼げな顔をしているから。
変に顔を赤らめる僕を見て、和樹君がとんでも発言をする。

「じゃあ、オレとつき合わない？」
「へっ！？　い、いえ……あの……。僕はそういうお付き合いはその……」

冗談だろうに、真に受けて、更に赤面する僕。

余りにも僕が炎上するから、和樹君までが炎上する。
冗談を言ったつもりなのに、本気に考える僕はバカに見えただろう。
和樹君が僕から目を逸らし、数回左右に首を振って。僕の腕を掴む。

「こっちにこいよ。オレ達と駄弁ろうぜ」

あ……。僕の思考は停止状態。
和樹君に引っ張り込まれそうになっていたら、不意に大声が聞こえてくる。

「ミャラちゃん！」

声のする方に振りかえると、伊吹の姿。
血相を変えながら、僕に近づき。
和樹君を僕から突き放して、口を開く。

「親の通夜にも顔を見せないと思ったら、こんな所で何をしているんだ？」
「別にいいじゃん。オレの勝手だろ？」
「お前の事はどうでもいい。だけど、ミャラちゃんには手を出すな」
「少し話をしようと思っただけじゃないか」

そして、始まるのは二人の睨み合い。
うわぁ……何だか不仲な雰囲気。
おもむろに、伊吹が客室の中を見る。

「ろくでもない奴らと付き合っているみたいだな。あんな中にミャラちゃんを連れて行くつもりか？」
「別に薬を薦めるわけじゃないだろ？　オレだって、そんなバカはしない。見ているだけが、一番面白いからな」

「あの中に居て、薬をしないのは褒めてやるけど。ああいう奴らと付き合うのはどうかと思うよ。とにかく、ミャラちゃんを巻き込むな。これ以上、彼女には係わらないでくれ」
「……」
「そうそう……。相続の件、お前が来ないから、勝手に話を進めているよ。言いたい事があるのなら、紙にでも書いて、ボクの所に持ってきてよ。とりあえず、考慮はするから」

伊吹がそれだけ言うと、僕の手を掴んで、歩きだす。
和樹君はもの凄く不愉快そうにしていたけど……。
客室から離れて、伊吹の部屋に入った後。
伊吹が深くため息をして、僕を見る。

「ミャラちゃん……。危険を感じたら、近づいちゃ駄目だよ」
「でも……伊吹の弟さんだったから」
「確かにそうだけど……。あの部屋を見て、何も思わなかったの？どう考えても、問題のある連中だよ」
「それはそうだけど……」

僕がもじもじしていたら、伊吹が心配げに僕を見つめてくる。

「もう……。ミャラちゃんは警戒心がないから、変な事件に巻き込まれないか、心配で堪らないよ。大体、前にもバイト先で……」
「あれはバカしたけど。今回のは、屋敷の中だったし。危険な人なんているわけないと思っていたし」
「どこに居ても、警戒心は必要だよ。ミャラちゃんはもう少し用心深くならないと……。いつもボクが近くに居ると思っていちゃ駄目だよ。何か起きてからじゃ、遅いんだから」
「もー。大丈夫だって。何もなかったもの」
「今日は何もなかったけれど。次はわからないでしょ？」

「んー、今日の伊吹は説教臭いー。執事さんみたい」
「えっ……。いや、爺や程じゃないよ。それに、ミャラちゃんは女の子だし。心配して当然でしょ？　とにかく、あいつらとは係わらない事。わかった？」
「んー、わかった……」

プーッと膨れながら、理解を示す僕。
不意にチロが僕の服から抜け出して、自分のお部屋に戻って行く。
直後、伊吹が僕に注意をする。

「それと、そういう肌蹴た格好をしない事」
「これはチロが悪いの！　僕のせいじゃない！」
「チロには駄目だって、ハッキリ言わないと。ミャラちゃんは舐められているよ」
「だって、注意しても聞いてくれないから……」
「本気で怒れば、言う事くらい聞くよ。チロはバカじゃないんだから」
「そんな事を言われても……」

もう……昨日から変に伊吹が絡んでくる。
心配してくれるのはいいけれど、何かもう……。
伊吹の反応が、面白くなくて。ベッドに寝転んで、そっぽを向く。
伊吹の声が聞こえてくるけど、知らない。プイッ……。

レジスタンス〈メモリー編3〉（前書き）

自分の事は棚に上げる、吉川兄。

レジスタンス〈メモリー編3〉

十一月二十六日まで……後、一日。
目を覚ますと、隣で伊吹が眠っていた。
凄く熟睡しているので。伊吹に抱きつき、僕も二度寝する。
んん……眠るのって幸せ……。
次に目覚めると、伊吹がいない。
んん……三度寝しようかな？
僕がうつらうつらしていたら、不意に目の前に伊吹の顔。

「まだ眠るの？」
「……」

起きようか？　そう思いながら、眠っていたら。
うとうとする僕の頬に手を当て、伊吹が話し続ける。

「眠っちゃうの？　眠っちゃったら、ボクが手を出しちゃうよ」
「……」

お……起きないと。わかっているのに、身体がビクともしない。
寝過ぎて眠い。恐怖の冬眠現象。
不意に伊吹が顔を近付けてきて、僕と伊吹の唇が触れる。
あの時……伊吹が告白してきた時と同じようなキスをする。

起きないと！　それでも僕の身体が重い。
身体中が火照るのに、動かない。
伊吹が僕の唇から口を離して、今度は耳元で囁く。

「次は……何をしようかな？」

「……っ！！」

起きたいー、起きたいー、起きたいのにー。
眠気と葛藤する僕に悪戯をしようとする伊吹。
僕が何とか手を動かして、伊吹の腕を辛うじて握る。
努力の末に、上体を起こした僕が伊吹に言ってやる。

「せっかく……気持ち良く……寝てるのに」
「ミャラちゃんは眠り過ぎ。いつでも隙だらけだね」
「んんっ！　最近の伊吹は……何だか意地悪」
「分かっていて、意地悪しているんだ。ミャラちゃんが構ってくれないから」
「そんな事ないのに……」
「じゃあ、ボクと付き合ってくれる？」
「それは駄目だって。もう何度言わせるの？」
「ボクの事、そんなに嫌い？」
「そういうのじゃないって、もう～」

またこの話に逆戻り。
そこから始まるのは、意見の押し付け合い。
言い争いをしながら、食事に向かう。
朝食を食べた後、少し散歩してから。
伊吹の書庫へ行って、空気を読まないで、バイトをさせてもらう。

僕達が和やかにお喋りしていたら、執事さんがやってくる。
眉をしかめる伊吹に近づいて、耳元で何か囁く。
きっとまた世継ぎや相続の話だろう。
伊吹が執事さんから離れて、話を聞かなかった振り。
それを見た、執事さんが伊吹に近づき、無理矢理に連行する。

僕は居残りだ。一人でバイトをしながら、たまに立ち読み。
だけど、難しい本ばかりだから、すぐに諦めてバイトの続き。
何だか眠くなる空気にうっとりしていたら、後ろから物音が聞こえてくる。

振り返る先には、和樹君。
今日はお友達がいないみたい。
頭を下げる僕に近づき、和樹君が口を開く。

「あれ？　今日は一人？」
「伊吹は執事さんに連行されちゃった。えっと……和樹君も一人？」
「あぁ、うん……。兄さんがうるさいから、連中は帰したよ」
「そうなんだ……。和樹君はいつも……ああいう人達と付き合っているの？」
「え……あぁ、まぁ」

妙に気まずそうな表情を浮かべて、和樹君が僕から目を逸らす。
そのまま、恥ずかしそうに口を開く。

「幻滅するだろ？　あの完璧な兄さんの弟がこれだと」
「幻滅っていうか……ちょっと意外だったかな。でも、人はそれぞれ違うから。いくら兄弟でも同じにはなれないよね。個性があっていいんじゃないかな？」

僕が言ったら、和樹君が赤面する。すぐに反論。

「いいわけないじゃないか。親も世間も向こう優先だ。落ちこぼれのオレになんて、興味なし。母なんて『この子は失敗作』って言うんだ。酷いだろ？」
「僕もよく言われたよ。『次の生ゴミの日には捨ててやる』って」

「えっ？　それは……えっと」
「あぁ、ミャラでいいよ。僕の名前。そうなの、僕を捨てるって。よく言っていたよ。どうも僕……幼い頃は親に虐待を受けていたみたいなの。季節を問わずに、ベランダに放り出されたりして。丸一日放置されるの。冬は寒くて、堪らないよね。きっと両親はよっぽど僕の事が嫌いだったんだね。今は離れて暮らしているから、笑えるけど。あの時は笑えなかったな」
「当たり前だろ？」

和樹君が呆れかえる。
僕はヘラヘラ笑いながら、和樹君に質問する。

「和樹君は学校に行ってるの？」
「え？　あぁ……気が向いたら」
「どこの学校？」
「……博秀」
「博秀って、お金持ちの進学校じゃない！　全然、落ちこぼれじゃないじゃん！」
「と言っても、ギリギリ合格だし……。兄さんは高校生の癖に、大学院だ。それと比べたら、足元以下。地球の裏手くらいに離れている」
「……」

不思議だな……。僕が気持ちを口にする。

「どうして人間って、比べたがるんだろうね？　人と自分を比べて、自分の存在をアピールしようとするのかな？　だけど、そんな事をしなくても、ちゃんと君は僕の目に見えているよ」
「……」
「わざわざ伊吹と比べる必要はないと思うけど。和樹君は和樹君な

りに、頑張ればいいよ。必死になって、背伸びしていたら。足が吊っちゃうもの。後で転げまわるのが嫌だったら、普通にしているのが一番だよ」

「……ふーん。その話でいくと、オレは転げまわっているところだな。背伸びして、足を吊って。嫌んなりながら、転げまわっている」

ぶっきらぼうに口を開く和樹君が面白くて、僕がクスクスと笑いだす。

そうしたら、和樹君が真っ赤になって。僕から顔をそむける。

そんな和樹君に助言する。

「足の痛みが治まってから。またゆっくり立てばいいよ。そうしたら、今度はあまり背伸びをし過ぎない事だね。また足を吊っちゃうと痛いから」

「そうだな……。次があるのなら、気を付ける……」

えらく素直な和樹君を眺めながら、僕が微笑んでいたら。不意に和樹君が僕に振り向く。

すぐに赤面しながら、視点をキョロキョロさせる。

何だか伊吹を見ているみたい。フフッ、可愛い。

そのまま話が盛り上がって、学校の話や日常の話を永遠と語り合う。

僕もバイトを終えて、暇だったから。二人でずっとお喋りを続ける。

三時間近くお喋りを続けていると、不意に和樹君が問いかけてくる。

「なぁ、ミャラは……彼氏とかいるの？」

「えっと……いないけど」

「だったら、オレとつき合わない？　あの……冗談じゃなくて。本気で」

「フフッ、ありがたいけど……。それは駄目だよ」
「……やっぱり兄さんと付き合ってるのか？」
「残念だけど、そういうのじゃないよ。もっと別の話」
「じゃあ、何？」
「フフフッ、その顔……伊吹とそっくり」
「兄さんと一緒にするなよ！」
「ごめんなさい。だけど、二人共……可愛いね。理由がわからないと、必死になって知りたがるの」
「そんなの当たり前だろ？　何で付き合ってくれないんだよ？」
「教えてやんな～い」

僕が悪戯な笑みを浮かべていたら、和樹君が不満顔。
急に僕に近づき、僕の肩に手を置いて、容赦なくキスしてくる。伊吹よりも行動的だ。
会って二日目でキスされるとは思ってなかった僕は、かなり油断していた。
非常に攻撃的なキスを受けて、思考回路が停止していたら。不意に物音が聞こえてくる。
やっとのことで口を離してくれる和樹君。
僕がへにゃっていると、遠くから怒りの声が聞こえてくる。

「何をしているんだ！？」

そちらに振りかえると、背に翼を付けた伊吹。
威嚇するように翼を広げながら、もの凄く怖い形相で、こちらに近づいてくる。
思わずネコ耳を倒す僕の腕を引っ張り、僕を自分の後方に置いて。
和樹君を睨みつける。

「彼女には手を出すなって言っただろ！」

「別に兄さんの彼女じゃないんだからいいだろ？　ミャラちゃんは兄さんと付き合っているわけじゃないって、言っていたぞ」
「それは……。だけど、彼女が望んでキスをしたわけじゃないだろ？　どうせお前が無理矢理に……」
「あぁ、そうだよ！　それが何だ!?　キスくらい、いいじゃないか！」

和樹君の口調が荒れる。
睨み合う二人。
あの……喧嘩はよくないよ。言いたいけれど、口にできない。
不穏な空気が立ちこめて、僕がうろたえていたら。
伊吹が僕の手を引っ張って、書庫から出て行く。

歩いて、歩いて、歩いて。結構、早足で歩いて。
伊吹の部屋に入り、伊吹が乱暴に扉を閉める。
その後、僕に振りかえる。未だに続く怒りの形相。
思わず、僕が震えだしたら。伊吹が重々しい口調で問いかけてくる。

「どうして、あいつと一緒にいたの？　あいつには係わるなって、言っただろ？」
「だって……和樹君が書庫に入ってきたから……。お話してて……」
「お話なんてしなくていいよ。放っておけばいいんだ」
「でも……そんな事……」
「危険な虫には優しくしない事。もうあいつと話をしちゃ駄目だよ」
「はい……」

伊吹に怒られて、本気で泣いてしまう。
不意に伊吹が、ポロポロと涙を流す僕の頬に右手を当てて、親指で僕の唇をなぞってくる。
相変わらず、不満げな表情で、伊吹が呟く。

「和樹なんかに……キスされた」
「でも……瑠菜だって、いつもキスしてくる」
「バカ嬢はまだいいよ。和樹の方が不愉快だ……。面白くない……」
「でも……伊吹だって、最近……キスしてくる」
「ボクはいいの。当然でしょ？」
「当然……なの？」
「そうだよ。当然」

そう言って、当然な行動にでる伊吹。
これ……当然だったっけ？　そもそも、当然って何？
同じ言葉を連呼すると、意味がわからなくなる現象。
もういいや……考えるのは止そう。
天使様にキスされながら、頭の片隅で、自分の性別に疑問を感じる。
僕って……何だった？

泣き疲れて、ミャラちゃんが眠ってしまう。
スヤスヤと眠る姿も可愛らしい。
こんなに可愛い彼女を和樹なんかにやるものか。
正直を言うと、バカ嬢だって、気に入らない。
本当は一人占めしたいのに……。

ボクの中で絶え間なく燃えたぎる独占欲。
彼女をどこかに監禁して、ボクだけの物にしてしまいたい。
行動には出さないけど、ずっと願い続けてきた。
あぁ、この願いが叶うのならなぁ……。

彼女の髪をいじっているうちに、ふと思い出す事。
そうだ……あれを返さないと。
彼女のボールペン……まだボクの手元にある。
確か、書斎に置いていたはず……。
部屋の鍵を手に持って、部屋を出る。
鍵を掛けて、書斎に向かう。
和樹が勝手に彼女に近づくと困るから、用心に越したことはないだろう。

書斎に辿り着くと。ペン立ての中に、例のボールペンが見える。
それを手に取り、胸ポケットに入れて。
部屋を出ようと振り返ったら、部屋の出入り口に和樹の姿。
妙に曇った瞳をボクに向ける。

「何をしているんだ?」
「忘れ物だよ。お前には関係ない」

「そうか……」
「それより、何か用？　用があるのなら、さっさと話して」
「……」

黙りこむ和樹。不意に、口を開く。

「あの子……可愛いな」
「……ミャラちゃんの事？」
「楓によく似てるよな……。見た目も性格も……」
「だったら……何？」
「兄さん……覚えているか？　兄さんが楓に初めて会った時、兄さんに楓を紹介したのはオレだったんだぞ……」
「あぁ、そうだったかな……？」

ボクが愛想なく首を傾げたら、和樹が歯を食いしばりながら話し出す。

「元々は、オレの彼女だったんだ。楓はオレのお気に入りだったのに……」
「それはお前の妄想だ。お前が楓の事を好きでも、楓はお前になんて興味なかった。ただの友達だって言っていたよ」
「兄さんが手を出さなければ、オレの物になる予定だった！」
「はいはい。ほざくのは好きにしろ。だけど、そんな憂話（うさばなし）を聞いている程、ボクは暇じゃない。お前と違ってね。そういう話なら、鏡に向かって言ってやりな。向こうも真面目になって、聞いてくれるよ」

嫌みを込めて言ってやると、和樹が激怒の表情を浮かべる。
知るものか。和樹の戯言なんて、耳に入れる程の価値もない。
こいつと係わるのは、時間の無駄だ。

ボクが扉に近づこうとすると、不意に和樹がボクの足元に何かを叩きつける。
一通の封筒。眉をしかめるボクに、和樹が言う。
「兄さんにプレゼントだ。弟からの誕生日プレゼントだぞ。嬉しいだろ？」
「何？」
「別に危険な物じゃない。が……どうだろうな？　兄さんにとっては、刺激が強すぎて、毒になるかもしれない」
「ゴミには興味ない」
どうせくだらない物だろう。
封筒を無視しようとする、ボクの耳に入ってくるのは思わぬ言葉。
「楓が自殺した理由を知りたくはないか？」

レジスタンス〈メモリー編4〉

不意に目が覚める。
あれ……？　今何時？
時計を見ると、夜中の一時……。
えぇ！？　寝坊した！？
その後、頭に過る不安。
もしかしなくても、今日……十一月の二十六日？　い、伊吹は！？

飛び起きて、辺りを見回すけど。伊吹の姿が見えない。
どこかに行っちゃった？　早く探さないと……。
寝起きでおぼつかない足取りのまま、扉に向かって歩いて行く。
丁度、そのタイミングでノックの音が聞こえてくる。
伊吹かな？　深く考えもせずに、扉を開くと、目の前には和樹君。
僕が虚ろな目で、和樹君に問いかける。

「い……伊吹を知らない？」
「さぁ？　兄さんなら、今頃……ショック死しているかもな」
「へ……？　ショック死……？」

何？　どういう事？
よく理解していない僕を部屋に押し戻す和樹君。
すぐに僕が部屋を出ようとしたら、和樹君が僕の腕を掴む。

「どこに行くつもりだ？」
「ど、どこって……伊吹を探さなくちゃ」
「兄さんなんて、放っておけよ」
「だ……駄目。今日が……今日は伊吹を」

半分寝ぼける僕を、和樹君が無理矢理にベッドに寝かせつける。
ベッドの上で仰向けになりながら、ぼんやりする僕。
起き上がろうにも、和樹君が覆いかぶさっているから起き上がれない。
事の事態を理解できない僕を押さえつけたまま、和樹君が怖いくらいに乱暴なキスをしてくる。

何……？　何なの？
怖くなって、僕が必死に顔をそむける。
やっとキスから解放されたと思ったら、和樹君の瞳に映る暗雲。
不意に和樹君が一人で呟く。

「兄さんはオレから全てを強奪するんだ……。名声も人望も……楓も」
「和樹……君？」
「オレの楓だったのに……。兄さんに会ってから、向こうばかりを見るようになって。オレにはからきし興味なし。それでもずっと想い続けて……。無理を承知で、楓に告白したんだ。そうしたら、案の定、断りの反応。『ごめんなさい』って言ってきた」
「……」
「だけど、それでもどうしても楓の事を諦めきれなくて……。何度も告白して、そのつど、拒まれて。楓は兄さんにばかり目を向けて。そんな楓が、次第に憎く思えてきて……。それで……それで、最後は……」

和樹君の声が小さくなる。
長い間を置いて、口にしたのは恐ろしい言葉。

「仲間を呼んで無理矢理に……楓を押さえつけて。皆で回してやった。それを写真に撮って、楓を脅しつけて。オレの物にならないと、

写真を兄さんに見せるって言ったら……。楓が……」

集団強姦……？

どんな反応をしていいのかわからない僕は硬直するばかり。

そんな僕の服に手を伸ばしてくる和樹君。

いや、ちょいま！

抵抗しようとする僕の耳元で、和樹君が囁く。

「ミャラは……オレと付き合ってくれるよな？　オレの事を好いてくれるよな？　楓のようには、なりたくないだろ？」

「ちょっと待って、和樹君っ！」

「兄さんだけ、ずるいもんな……。わかってくれるだろ？　オレの気持ち……」

「やぁっ！　そ……そんなの止めて……」

泣きそうになる僕の服を乱暴に剥ぎ取っていく和樹君。

逃げ出そうとしても、押さえつけられて。暴れ回る事も出来ずに、マズイ事態に陥る。

僕が襲われる云々（うんぬん）の前に、早く伊吹の元へ行かないと大変な事になる。

こんな話を伊吹が知ったなら、自殺してもおかしくない。

早く行かないと……。気持ちは急いても行動に移せない。

和樹君から逃げる事ができずに、どんどん破廉恥な姿になっていく僕。

服を脱がされて、身体中を舐め回されて。

処女を取られるの……時間の問題だな。

レジスタンス〈吉川編2〉

ここは……アトリエ。
自分で描いた楓の絵を眺めながら、ぼんやりする。
和樹が置いて行った封筒の中には酷い写真の数々。
それらは既に処分した。
あんな物……二度と目に入れたくない。

この絵の楓はいつも笑っている。
それなのに、今日はどうしても……笑顔に見えない。
泣いているようにさえ見える。

ボクのせいだ……。

ボクが傲慢だったから……。

思いあがって、和樹に自慢して……。

実際は違うのに……嘘まで付いて。

楓が本当にボクの彼女であったなら、怒りが先に出ていただろう。
だけど……真相は異なる。
実際の所、楓は……和樹の時と同様に、ボクの告白も断っていた。

彼女がボクの側にいてくれた理由は、ボクに友達がいなかったから。ボクが孤独に見えたのだろう。
だから、友達として側に居てくれた。恋人としてではなくて……。

それを和樹が勘違いして、更にボクが後押しして。

楓がボクを好いていると、和樹に思い込ませた。
そうしたら、ライバルが減ると思ったから。
和樹は楓を見る度に声を掛けるし、楓も楽しそうにしていたから。
不安だったんだ。怖かった。和樹が楓に近づく事を避けたかった。

だから……和樹に嘘をついて。
まさか、それを機に和樹が卑劣な行動に出るなんて思わなかった。
想像にもしていなかった。

彼女が死んでしまったのは、ボクのせいだったのか……。
ボクが和樹に嘘を付かなければ……。
真実を話していたなら、きっとこんな事にはならなかった。
恋は叶わなくても、もっと別の形で楓と係わる事ができた。
それなのに……ボクのせいで……。
今では、でっち上げの恋物語。作り上げた想像物。

椅子の上で待機している拳銃を手に取る。
死にたいというよりも……これ以上、生きていられない。
あぁ……成る程。バカ嬢の言っていた事は真実だったのか。

元々、自殺なんて……死にたがり屋が取る行動じゃない。
生きていられないから、自殺するんだ。
決して、死ぬ事が好きで自殺するわけじゃない。
要するに、環境に適応できない者の末路……それが自殺。

追い詰められたら、動物だってそういった行動に出る。
狼に追われた雌鹿が、逃げ場を失い、崖から飛び降りて死ぬ事がある。
雌鹿には自殺という概念はないだろう。

ただ……助かる可能性を信じて、飛び降りた。
結果的には、自殺と大差変わりない。
人間も同様だ。死後を知らない者にとって。
自殺は唯一、苦境から逃げ出せる希望の光……に見える。

周りが止めたとしても、本人には戯言に感じられて。
むしろ、この行動以外に道がないように感じられて。
このような行動を取る事は、馬鹿げていると。
頭の中では、ハッキリと理解しているのに……。
その理性を上回る、切迫感。
もう……どこにも道がない。
存在していても、ボクの目には映らない。

銃口を口に入れる。
恐怖心よりも、追迫（ついはく）されているような気持ちが先に出て。
死に対する嫌悪感もなく。臆する気持ちさえ見せずに、引き金に指を掛ける。

もしも……死後に、楓に出会う事があれば……。謝ろう。
謝って許される事ではないけれど……それでも一言……声を掛けたい。

ボクが深呼吸をして、思いきろうとした直後。足元に不快感を覚える。
下を見るとチロの姿……。チロ専用の出入り口から、入ってきたのだろう。
ボクのズボンをくわえて、必死になりながら引っ張っている。
まさか、ボクが自殺を図ろうとしている事を理解しているのか？

動物であるチロに、そのような事が理解できるだろうか？

だけど、チロは賢いから、もしかしたら……。

不意に、チロがボクの足に噛みつき、足に痛みを感じる。
すると、急に気力が失せてしまい。銃口を口から取り出す。
その後、押し寄せるのは脱力感、無気力感に次いで、疲労感。

衝動的な思いが枯れてしまい、小さくため息をつきながら、地面に座り込む。
ボクの膝元では、チロが未だにボクのズボンを引っ張っている。
あぁ……こんなにも小さな生き物に元気づけられるなんて。

チロの行動をぼんやりと眺めていたら、急に胸ポケットのボールペンが輝きだす。
見た事のない……黒い光。直後、ボクの頭の中で響くのは女の子の悲鳴。

ミャラちゃんの声……？　彼女に何か起きたのか？　胸が高鳴り、蒼白するボク。
ふとチロを見ると、目に炎を抱きながら、訴えるようにボクのズボンを引っ張り続けている。

ボクとチロの目が合い、チロが扉に掛けて行く。
ボクもすぐに立ち上がって、拳銃を片手にチロを追いかける。
チロはボクを心配していたわけではなくて。
ミャラちゃんに危険が迫っている事を知らせにきたのか！？

ボクは何を寝ぼけていたんだろう？
バカ嬢から注意を受けて、ミャラちゃんにまで心配かけて。
それなのに、こんな事をするなんて。少し……頭を冷やさないとな。

チロを追って、後ろに続く。向かう先は、ボクの部屋か？
この私邸で、ミャラちゃんに危険が迫っているとしたら、間違いなく和樹が係わっている。
あいつ……今度はミャラちゃんに何をする気だ！？

レジスタンス〈メモリー編5〉（前書き）

ドエロマスターって呼んであげるよ。　By未来

レジスタンス〈メモリー編5〉

伊吹……大丈夫かな？
和樹君に苛められながら、頭の片隅で考える。
死なないで……。
僕の気持ちをどのようにして伝えよう。
こんな状況じゃあ、伝えようにも伝えられない。

あぁ……、処女……取られるな。
でも、まぁ……素性の知れないおじさん達に襲われるよりもマシか……。
あの時よりも恐怖心が薄いのは、相手が伊吹の弟さんだから……。
やっぱりイケメンに襲われるのと、おじさんに襲われるのとではわけがちが……。
やばい、僕……相当駄目になってる。

あー、近くで見ると、カッコいい。だって、伊吹の弟さんだよ。
そりゃあ……性格は違うけど。見た目がね……伊吹の大人版。
んー……。心底、男の僕ですら、カッコいいと思う。
やる事はちょっと乱暴だけど……。

不意に和樹君が凄い所を触ってくる。
やぁっ！？　それ……。ゾクゾクと身中から快感が湧きあがり。もう……駄目。
意識がもうろうとして、逃げ出す気力は皆無に等しい。
もう逃げ出せない。されるがままに……。

いいよ、別に……。僕はどうせ男だもの。
今の見た目は女の子だけど……。

実際は男の上に、年上だよ。君よりもずっと年上だよ。
襲って後悔するのは君だから。僕はまったく気にしないもの。

　薄れる意識の中、考えるのは屁理屈の嵐。本当はちょっと気にしている。
せめて、襲われる側よりも襲う側でありたかった。
これは男としての本能だろうか？
でも、いつも瑠菜にも襲われるんだよね……。
あんなに背の低いお嬢様に襲われるなんて……。
僕って、どうしてこうなんだろう？
日和の時はそうじゃなかったのにな……。

　もう待ったなし……。
そろそろ終焉の鐘が鳴り響くだろうという時に、勢いよく扉が開く音。
何だかデジャビュを感じる。前にもあったな……こんな事。
和樹君が少し僕から離れて振り返る。
僕もそちらに振り向くと、伊吹の姿。
翼はなく、目に感情が見えない。
伊吹の両手がゆっくりと上がる。
その先には……銃。それを見て、僕が叫ぶ。

「止めてぇー！」

　伊吹には僕の声が届いていない。
和樹君を狙った銃先。伊吹が引き金に指を掛ける。
考える事もなく、和樹君の前に飛び出す僕。
鳴り響く銃声。
和樹君をかばいながら、僕が瞼を強く閉じる。
死んだ……。

刻々と過ぎる時間。
変だな……痛くない。
あぁ、銃だから、一瞬にして死ねたのか。
こんなに痛みを感じないなんて、悪くない死に方だな。
死んだのなら、日和に会えるかも。
そう思いながら、ゆっくりと瞼を持ち上げると。
世界が停止していた。

僕の目の前で、宙に浮きながら停止するのは銃弾。
その奥には、蒼白する伊吹の顔。ピクリとも動かない。
伊吹の足元にチロの姿。ちょろちょろと回って、最後は部屋の隅に行く。
そちらには、未来の姿。
未来がチロを撫でた後、銃弾に近づき。右手でそれを掴み上げる。
次に、伊吹に向いて、手を差しだす。

「それをこっちに渡してよ。恋愛物はいいけれど、サスペンスはオススメできないな。ここで殺人事件なんて、流石の読者も苦情が尽きないよ」

未来が話をしながら、伊吹から拳銃を奪い取る。
伊吹が地面に座り込み、未来が話を続ける。

「まぁ、死ぬのがそっちの和樹君だっけ？　君ならスルーする所だけど。ミャラちゃんは困るんだよね。『橋』が死ぬと、後の手続きが面倒だから。いくらミャラちゃんが『仮橋』であったとしても。『橋』を理解し、その役にあたる人がいなくなった世界。それをそ

のまま、放っておいたら、その世界が壊れてしまう。『橋』事態が存在しない世界にするにしても、新しい『橋』を呼ぶにしても。『大樹様』に相談しなくちゃいけない。その役目が『橋』のリーダーである俺の仕事。俺って、仕事嫌いだから。そういうのは止めてほしいんだ」

未来以外は動かない。

止まった世界で、未来が一人で口を開く。

「それじゃあ、そろそろ人が集まるだろうから。後は勝手にしてね。それにしても、ミャラちゃん……日に日に恥知らずになってきたね。今度から、ドエロマスターって呼んで……」

「うるさいな！」

僕が怒鳴った直後に、外から人の声が聞こえてくる。

そして、入ってくるのはたくさんの人々。警備の人だろう。

気づけば、未来が消えていた。狭間に飛んだらしい。

未来が消えた部屋の中。

既に石化から解放されていた僕だけが、今の状況を大きく理解している。

現在、僕は見事に服を着ていない。

すぐに両腕で身体を隠して、大声で叫ぶ。

女の子だけができる、必殺技。

男子追放攻撃（エグザイル）。

一度、使ってみたかった。

レジスタンス〈メモリー編6〉（前書き）

執事さんがカッコイイと思います。

レジスタンス〈メモリー編6〉

ここは会議室。と言っても、部屋は狭く、数人程度しか入れない。部屋の中心には、円卓があり、その周りに椅子。円卓の上には、紅茶の入ったティーカップが四つ。それ以外は何もない。

本当に……吉川家にとって、重大な会議の時にだけ使用する場所だろう。

ずっと俯き続ける伊吹、その対面には感情を見せない和樹君。二人の間に挟まれ、座るのは僕。

僕の対面には、執事さん。吉川家に、最も古くから係わっている人……。

チロは僕の膝上で眠っている。

もちろん、僕はもう服を着ているから。全裸じゃないよ。

それくらい、わかっているよね？

メンバーはそれだけ……。だけど、誰も話さない。

伊吹も和樹君も口を開きそうにないから、僕が口を開く。

執事さんに、自分がわかる範囲で説明して。執事さんが神妙に話を聞き続ける。

質問は一切ない。僕が話を終えるまでは、何も話さないつもりだろう。

案の定、僕が話を終えて口を閉じると。今度は執事さんが話し出す。

「旦那様と奥様がご逝去されて、まだ間もないというのに……。吉川家、始まって以来の名折れでございます。もちろん、お二人方も

ご理解されていらっしゃると存じますが……」

執事さんの言葉を聞いて、伊吹が微かに頷く。
和樹君は知らんぷり。執事さんに目を合わせようとしない。
執事さんが僕を見て、頭を下げる。

「上野様……。お二人の身勝手な振り舞いについて、大変申し訳なく思います。これは吉川家に従事する者としてではなく。坊ちゃん方の面倒を見てきた者として、今一つ謝罪させて頂きたい。誠に申し訳ございませんでした。就きましては、上野様のお気持ち一つで、法的手段に持ち込む事も可能です。和樹坊ちゃんはもちろんの事。伊吹坊っちゃんも……図らずとも上野様に銃を向け、引き金を引いてしまった。証拠はなくとも、真実がそうであるなら……。警察のお世話になる事も考えられましょう」

「め、滅相もない！　ぼ、僕は大丈夫だし……。誰も怪我をしなかったから、それで良かったと思うよ。あの……警察とかは止めようよ。だって、そんなのスキャンダルだよ」

「確かに……吉川家にとって、大きな損害になるでしょう。しかし、このような事について、先代はしっかりと始末を付けるお方でした。後が濁らないようにとの事です。先代の意思を継ぐならば、この話はあながち間違いでもございません。上野様は如何なさいますか？

正直にお答えください」

「僕は……」

警察も賠償金も何もいらない……。何もいらないけれど……。
伊吹を見た後、和樹君を見て、執事さんを見る。

「訴えるような事は……しないよ。ただ……もう少し仲良くできないかな？　せっかくの兄弟なのに、喧嘩ばかりするのはもったいないと思うの」

執事さんが深々と頭を下げて、お礼を言った後に。伊吹と和樹君に話しかける。

「上野様のお言葉をお聞きになられましたか？　お二人が仲良くなさる事を願っておられます。黙していては、切りがございません。まずは意見の交換から始めましょう。片方が話をしている間は、もう片方は黙って耳を傾ける事。これがルールです。では、初めに……和樹坊ちゃん。伊吹坊っちゃんにご自分の主張を述べて下さい」

「死ね」

和樹君が即答する。まるで子どもの喧嘩レベル。

伊吹は反応なし、未だに俯いたままだ。

執事さんのため息が聞こえそうになる中、和樹君がボソボソと話し出す。

「兄さんはズルい……。オレから、全てを奪いやがる……。オレが一番欲しい物を全部連れ去って行く……。楓だって……元々は俺が連れてきたのに……」

そして、黙りこむ和樹君。

もう話さないと悟ったのか、執事さんが伊吹に目を向ける。

伊吹は黙ったまま、ずっと下に目を向け続ける。

そんな伊吹に執事さんが話しかける。

「伊吹坊っちゃん、ご意見の方は？」

「……」

黙り続ける伊吹。

不意に口を動かすけれど、声が小さすぎて聞こえない。

聞こえないから、僕が近づき耳を貸すと。
すっごく和樹君がお怒りの形相になる。
ちょっとくらい許してよ。声が聞こえないと話が進まないんだもの。
和樹君が不満げになる中、僕の耳に入るのは不思議な言葉。
僕が伊吹に問いかける。

「『違う』……って。何が違うの？」

僕の質問に、伊吹が少しずつ話をしてくれる。
ようやく理解できた僕は、真剣な面持ちで自分の席に座る。
伊吹が黙っていた真実。
これは……。和樹君には辛い話だな。
だけど、話をしないと。

僕が順を追って、刺激の少ないように、ゆっくりと話を進める。
少しずつ状況を理解する和樹君。
最後は顔色が真っ青だ。
怒りの表情は消えうせて、今にも死にそうな顔で硬直している。
不意に和樹君が一人で話し出す。

「じゃあ……、オレは……。オレは兄さんの虚言を信じて……勝手に妬んで。楓に……」
「ごめんなさい……」小さく呟くのは伊吹。
「何で嘘なんて付いたんだよ！　バカ兄！　鵜呑みにしたじゃないか！　楓と兄さんがそういう仲だって……。それで腹が立って、楓に……」
「ごめんなさい……」
「お前、オレが楓に何をしたのか知ってるのか!?　あんなに酷い事……。それでなくても、やり過ぎたって……。後になって……後悔したのに。あんなにも……後悔したのに。今更、それかよ……。

そんなの……あんまりだろ……？　楓は……何もしていなくて……」

そして、和樹君が泣き出して。伊吹まで、翼を付けて泣き出して。二人でわんわんと、子供のように泣き出して。執事さんが困り果てる。

やっぱり二人共……まだまだお子様だな。

だって、高校生でしょ？　まだ自分勝手な年頃だものね。

人の事を考えている余裕なんてないもの。自分の事で精一杯。

だから、道を間違う事もある。大人でも道を踏み外すのに、子どもじゃ尚更。

椅子から立ち上がり、和樹君の所へ行く。

ギュッと抱きしめて、背中をさする。

しばらく背中をさすって、落ち着きを取り戻すのを見届けてから。

伊吹の元へ行き、同じように背中をさする。

二人が落ち着いた後に、自分の席に戻って、話を始める。

「きっと……楓という子は、二人の事が好きだったから、選べなかったんだね。僕もわかるよ、その気持ち。二人共……心底は優しいもの。どちらかの告白を受け入れてしまったら、もう片方が可哀そうに思えて。だから、選べなかったのだと思うよ。友達のままなら、三人共に仲良くやっていけるものね。ただ……少し歯車が噛みあわなくて。こんな事になってしまったけれど……。きっと楓は二人の事を恨んではいないよ。優しい子だったんでしょ？　だったら、二人の事を心配していると思うな。もしかしたら、後悔しているかも。突発的に死んでしまったけれど、生きていれば良かったかなって……。三人で楽しくお喋りできる未来があったのかなって……」

僕の周りで啜り泣きする伊吹と和樹君。

なぜか執事さんまで涙している。
こちらは、ドラマを見ている気分だろう。
第三者視点。きっと日和的立場だ……日和もドラマ好きだから。
僕が伊吹と和樹君を交互に見ながら、話を続ける。

「もう終わってしまった事だから……取り返しは付かないけれど。
だからこそ、今日から頑張って行こう。二人が仲良くして、楽しく暮らしていたら。楓もきっと喜ぶよ。だから、ね？　元気をだして」

僕の言葉で涙の嵐。部屋の中が大雨だ。
落ち着くのに、時間が掛りそうだな。
そういえば、今日は伊吹が早まってしまうだろう日だったな。
ずっと伊吹の側にいたいけれど、和樹君も不安だし。
困ったな……。恵梨達みたいに分身できたら、便利なのに……。

レジスタンス〈メモリー編7〉

こうして、超大事件日が終了する。
部屋を離れる時に、執事さんによく注意しておいた。
何を、って？　和樹君から目を離さない事を。
僕は伊吹を見守るから、和樹君をよろしくお願いしますって。
感情的になって、早まらないように。絶対に目を離さないで下さいと。
執事さんもよく理解してくれているようで、真面目になって僕の話を聞いてくれた。
これでしばらく和樹君は大丈夫だろう。

伊吹の部屋に行くと、チロが自分のお部屋に戻って行く。
大活躍の白い勇者。チロがいなかったら、僕……和樹君に処女を取られていた。
まぁ、別に構わないと言えば構わないのだけど。
今になって、消えうせる恐怖心と羞恥心。
あの時は……和樹君の事をよく知らなかったから。
しっかりと話し合って、心の奥底が見えてきたら。
それは余りにも心細くて頼りない幼さだった。

伊吹もそうだな……。大人に見えていても、どこか子どもだ。
いくら天才でも、精神は幼い子ども。見た目で判断しちゃあ駄目だよね。
普段はしっかりしているように見えるから、尚更に安心してしまいがちだけど……。

ベッドの上に座りながら、ぼうっとする伊吹の表情は青白い。
感情が殆ど廃れてしまい、表に出ない。

目が赤いから、辛うじて泣いていた事がわかるくらい。

これは……マズイな。

今は歯止めが利いたけれど、いつ暴発するかわからない。

放っておけば、今後に……また危険な行動に出るかもしれない。

一段落して、周りが安心する頃が一番危険だ。

僕もどん底に落ちた経験があるから言える事……。

落ちた事のない人には、きっとわかりもしないだろう。

僕が伊吹の頭を撫でながら、優しく声を掛ける。

「伊吹……。まだ……不安？」

伊吹が小さく頷く。まだ心の整理ができていないようだ。

そんな伊吹に手を伸ばして、強く抱きしめると。伊吹が抱き返してくる。

さぁ……どのようにしたら、立ち直ってくれるだろう？　かなり難しい問題だな。

声を掛けても、余り耳に入っていないようだ。返事はするけど、上の空。

抱きしめたりすると、少し安心した表情になる。

言葉だけじゃあ、通じないのかな？

スキンシップが必要みたい。

そういうわけで、ちょっとチャレンジ。

ぼんやりする伊吹に手を伸ばして、キスしてみる。

男を捨てて、キスしてみる。

伊吹が自殺するくらいだったら、男を捨てるくらい平気だ。

元々、テクテクのミャラに性別はないもの。

僕はミャラだから、男女なんて関係ない。

キスをしたら、少し伊吹の表情が和らいで。うっとりとした顔つきになる。

頭を撫でて、髪をいじって。頬を摺り寄せて、とにかくへばり付く。

よく瑠菜がしてくる行動。結構、される方は嬉しかったりするから。

不意に伊吹が僕の手を取って、口を開く。

「ごめんね……。迷惑……掛けちゃって」

「構わないよ。僕もたくさん迷惑を掛けているもの」

「でも……情けない所……見られちゃった」

「情けなくてもいいよ。僕も相当にバカをしてきたもの」

「そう……かな？」

「そうだよ」

頷いて、伊吹の額にキスをする。

少し生き返った瞳を僕に向ける伊吹。

今度は、伊吹が僕にキスをしてくる。

こんな場面で抵抗したら、えらい事になるだろうな。

とか思いながら、素直にキスを受け入れる。

キスを終えると、本当に大切そうに僕を抱きしめ、身体を摺り寄せてくる。

和樹君なら、ここで既に手を出しているだろう。

伊吹はそういう事を……しないとは言い切れないな。

だって、桜の下で……ちょっと襲われ掛けた過去があるもの。

だけど、自重するタイプ。理性が勝つのか、ギリギリの線で止まる。

ある意味で、一緒に居て安心できるのだけど。
ちょっと物足りな……だから、僕……そろそろ精神がヤバいって。
自分が男だって事を半分くらい忘れている。

伊吹に抱きしめられながら、一人で性別について考える。
伊吹の事は好きだけど、僕は男だし……。
それに、友達としては好きだけど。恋人として、好きというわけでは……。
うだうだうだうだ悩んでいると、急に伊吹の顔が目に入る。
思わず、胸が高鳴る僕に伊吹が口を開く。

「ミャラちゃんのおかげで……少し元気が出てきたみたい。フフッ……ありがとう」

こんな時に、天使様の微笑み。
それを見て、本気で炎上してしまう。
伊吹は首を傾げながら、不思議そうに僕に顔を近付ける。

「どうしたの……？　気分でも悪いの？」

ここに来て、その言葉？
今はぼんやりしていて、勘も鈍っているのか。ちょっと天然気味な伊吹。
それが何とも言えない……良い感じ。
すぐに両手で顔を覆って、伊吹から目を逸らす。
マズイ……このままでは非常にマズイ。

それでも、自分の心境を垣間見たくて。伊吹を指の隙間から覗く。
ううっ……ち、違うもの。別に惚れているわけじゃあ……。

冷静になって考えよう。まずは日和をイメージする。
大好きだ。もう堪らなく大好きだ。
次に、瑠菜をイメージする。
可愛い。凄く可愛くて、抱きしめたくなる。
よし……伊吹をイメージしてみる。
カッコ良くて、頼りになって。だけど、たまに幼くて可愛い所もある。

駄目だ！　僕、皆が大好きだ！　かなり浮気性だ！
勝手に想像して、蒼白する僕。そんな僕を見て、伊吹が心配してくる。

「大丈夫？　ミャラちゃん？」
「大丈夫じゃないかもしれない……」
「え？　やっぱり調子が悪いの？　医者を呼ぼうか？」
「ち、違うの……。そうじゃなくて……」

黙っていても仕方ないだろう。
僕が男という事実は述べずに。気持ちだけを語る事にする。

「僕ね……。さっきから、伊吹といるとドキドキするの。瑠菜といても、ドキドキするし。前の恋人といても、ドキドキするの。凄く浮気性だなと思って、ショックを受けていた所」

僕の言葉を耳にして、伊吹が顔を真っ赤にする。
翼を付けながら、返す言葉なし。
せめて笑い飛ばすか、怒るか。そういった反応が欲しかった。
黙って炎上されたら、僕まで炎上だ。二人で沸騰しながら、長い沈黙。

不意に名案を思い付く。
名案というか……結構、投げやりな案なのだけど。
どうせ……今更、伊吹に僕の真実を語るわけにはいかないし。
ずっと黙っているのなら、それなりの効果はありそうだ。
ミャラに性別はないもの。両性類ってことで、許してもらおうか。
僕が伊吹に顔を近付けて、話を始める。

「ねぇ、伊吹……。一つお願いがあるの」
「な、何……？」
「あのね……。これから、一生の間で辛い事が何度起きるかわからない。だけど……絶対に早まらないで」
「あぁ……えっと……」
「早まらないでくれるって、約束してくれるのなら……。僕……」

そこまで言って、口が動かなくなる。
にゃにゃにゃにゃ……にゃんて言おう？
あからさまな言葉は使いづらい。
悩んで、悩んで、悩んだあげくに。
伊吹にキスをして、悟ってもらう大作戦。

すぐに口を離すと、僕の気持ちを悟ってくれたのか。
伊吹が物の見事に真っ赤になる。本当に見事に真っ赤になる。
こんなにも真っ赤になれるのかと疑ってしまいそうになるくらいに真っ赤になる。
このままだと、いつか翼まで真っ赤になりそうだ。

恥ずかしさのあまりに死にそうな僕は、指遊びをしながら俯く限り。
しばらくしても、反応がないので。ちらりと上目遣いをすると、伊吹と目が合う。

もう……逃げ出したい気分。自らどつぼに嵌まりに行ったようなものだもの。

急に伊吹が真顔になって、捲し立てるように口を開く。

「や、約束するよ！　絶対に自ら命を絶たないって！」

その後、今度はうろたえるように話し出す。

「だ、だけど……ミャラちゃん。本当にいいの？　その……それって……。別段、ボクの事を思っているわけじゃなくて……。ボクの事が心配だからという意味じゃあ……」

「ただの心配なら、この胸のトキメキは何？」

先程から自問自答していた言葉が口から漏れる。

思わず、真顔で答える僕に対して、伊吹は炎上。

ううっ……間違えて口にしてしまった。

すぐに僕も赤くなって、首を横に振る。

「な……何でもないよ。今の話は……聞かなかった事にして」

「う……うん」

「あの……ただね。瑠菜の事も好きだから……。その……伊吹だけというわけにはいかないの……。後……瑠菜に話したら、怒られるかな？」

「ボクはまったく構わないよ。無理を言っているのは……ボクの方だから。バカ嬢には黙っていればいいよ。話しても構わないけれど、うるさいでしょ？」

「えっと……その……。多分、凄く怒ると思うけど……」

「大丈夫だよ。バカ嬢とは取引をする仲なんでしょ？　食べ物の代わりにって……」

「う、うん……。まぁ、半分くらいは」
「それなら、ボクも同じ。ボクの場合は、早まらない代わりに、お付き合いするという形。ね？　対等でしょ？」
「うーん、言われてみれば……そうかも」

僕が頷いていたら、不意に伊吹が僕の顔に手を伸ばし。凄く熱いキスをしてくる。
んんっ……変になりそう。
その後、僕の身体にも触れてきて。思わず、僕が伊吹の腕を掴む。
僕の反応に躊躇う伊吹に向いて、恥じらいながら呟く。

「お……男の人とするの……。初めてだから……優しくしてね」

レジスタンス〈メモリー編8〉（前書き）

我が身を犠牲に……。非常に優しい主人公なのだが、果たしてそれでいいのだろうか？　道を間違えているのは、お前じゃないのか？
ヒッキー？

レジスタンス〈メモリー編8〉

想像していた以上に、頭の中が白くなる。

ふやぁ……凄い。

僕……きっととんでもなく恥ずかしい声を出している。

でも……黙っていられない。

あうぅ……変になる。

気を失いそうになる僕の前には天使様。

白い翼を付けながら、僕に優しくしてくれる。

僕は天使様に身を任せて、快楽を覚えて。

息を荒げながら、しがみ付いて。

僕がこんなになったのは、瑠菜のせいだ。

運動会の後に起きた、あの一週間はかなり大きい。

あの後から……どんどん変になってきた。

やっぱりあの時に身も心も改造されたのか……。

悦に浸りながら、ぼんやりと自分の愚かさを振り返る。

だけど、今更どうにもならない。

まぁ、これはこれで楽しいからいいか……という考え方が既に間違っている。

天使様にいたぶり回され、ぐったりする僕。

そんな僕を優しく抱きしめてくれる天使様。

まさか、一生に一度でも天使様に抱かれるとは思っても見なかったな……。

翌日になり、目が覚めると。隣で伊吹が眠っていた。

スヤスヤと心地よさそうに眠っている。

良かった……生きている。安堵する僕。

そういえば、和樹君は大丈夫かな？

執事さんに任せておいたから、大丈夫だと信じているのだけど。

伊吹の髪を撫でながら、ぼんやりしていたら。伊吹が目覚める。

僕にキスをして、僕を抱きしめてくる。

「おはよう……」

「うん、おはよう」

「そろそろ……起きないと」

「そうだね。起きなくちゃいけないね」

「ん……もう少し」

「二度寝しちゃうよ。僕はもう……眠たくなってきちゃった」
「じゃあ、二度寝しよう……」

そう言って、伊吹が二度寝してしまう。
僕も釣られて、目を閉じて二度寝。
冬はどうしてこんなにも眠気が増すのだろう？
怖いくらいに寝てしまう……。

それから数時間後、やっとのことで目が覚めると。お昼……。
準備をしてから、食堂に行って。ご飯を食べながら、お喋りする。
今日の伊吹は凄くご機嫌だ。うん……凄くご機嫌。
楽しそうにニコニコ笑って。たまに、照れ顔を見せる。
そんな伊吹を見て、僕は炎上。昨晩の事が頭から離れない。
だって、僕……凄く恥ずかしい事になっていた。

んー、伊吹に抱かれて思う事。
やっぱり人それぞれだな……。
こういう事でも個性が出るのか……。
ゲーム的に説明すると。
瑠菜の場合は、連続攻撃。
一方、伊吹の場合は一撃必殺。
どちらにしろ、ＨＰの低い僕には関係ない。
すぐに逝かされる。

あうぅ……でも、昨晩は凄かったな。
あの快感……思い出すだけでも、かなりヤバい。
ご飯を食べながら、ぼんやりと考えていたら。食堂の扉が開く。
入ってくるのは、顔色の悪い和樹君と心配げな執事さん。
あぁ……こちらの問題もあったのか。

和樹君が扉から一番近い椅子に座り、そのままボーっとする。
うっ……あの目は昨日の伊吹と同じ。かなりマズイ目。
伊吹を見ると、爽やかスマイル。
昨晩の出来事一つで、ここまで笑顔になるのか……。
人間の感情なんて、適当な物だ。
怖いくらいにご機嫌な伊吹を見て、執事さんが目を丸くする。
すぐに僕を見て、問いかけてくる。

「どのようにして……？」
「この身一つで出来る事だよ……」

僕の言葉の後に、執事さんは沈黙。きっと内容は悟っている。
だって、あれだけの笑顔にするには……言葉だけじゃあ足らないもの。
執事さんが頭を下げそうになる中、僕が立ち上がり、和樹君の元へと向かう。

「昨日は……眠れた？」
「兄さんと何かあったのか？」
「……」

少し不機嫌に僕を睨みつけてくる和樹君。
執事さんと同様に、伊吹と僕の間で起きた出来事を悟っているようだ。
僕が答えないので、和樹君が更に不機嫌になる。

「別にいいけど……。どうせオレなんて……」

はぁ～、頭が痛くなる兄弟だ。
思わず、ため息を付いてしまいそうになるのを我慢して。

そっぽを向く和樹君に手を伸ばす。
和樹君の顔をこちらに向けて、ド熱いキスをしてやる。
もう考えるより、行動に出た方が早い。
伊吹の騒ぎ声が聞こえてくる中、和樹君から顔を話して口を開く。

「伊吹とは長い付き合いだけど。君とは出会って、まだ数日だよ。
そんなに僕の事が気になるのなら、もっと仲良くなって。その気にさせてよ」
「はい……」素直に答える和樹君。
「だけど、後で後悔したって知らないんだから……。どうして、皆……僕に興味を持つんだろう？　瑠菜も伊吹も和樹君だって……。
世の中は不可思議だね」

ちょっと頬を赤らめながら、ぽうっとする和樹君から離れて。自分の席に座る僕。
すぐに伊吹が文句を言ってくるけど、昨日に言っておいたもの。
伊吹だけってわけにはいかないよって。
その話を持ち出したら、伊吹が不満げな表情で黙りこむ。
もう……嫉妬深いんだから。

僕と伊吹がお喋りをしていたら。
急に和樹君が椅子を持ってきて、僕の隣に座りだす。
そして、伊吹のお怒り。二人で口喧嘩。
だけど、以前のように本気でマジ切れレベルじゃなくて。戯れる程度の口喧嘩。
執事さんは感心している。
あれだけ落ち込んでいた和樹君を一瞬にして立ち直らせたから。
僕の身投げ技に驚いているのだろう。

レジスタンス〈メモリー編9〉

三人で食事を終えた後、今度は伊吹と執事さんが喧嘩を始める。
というのも、次の主になる伊吹は余所へ挨拶回りに行かなければいけないらしい。
だけど、伊吹は僕と一緒に居たいから、それを拒んでいるみたい。
僕を抱きしめながら、ギャーギャーと騒ぎ。執事さんに訴える。

「今日は嫌だ！　行きたくない！　ミャラちゃんと遊ぶんだ！　大体、挨拶くらいだったら、和樹が行けばいいじゃないか。なんなら、和樹が世継ぎになればいい。ボクは主の権限を譲るよ。和樹だって、悪くないだろ？　この案……」
「行ってこいよ。代わりに、オレがミャラと遊んでおいてやるから」
と和樹君。
「バカを言うな！　お前が挨拶回りで、ボクがミャラちゃんと遊ぶんだ！」

伊吹と和樹君の喧嘩が勃発しそうになる中。
いつの間にか伊吹の背後に立っていた執事さんが、伊吹の後ろ首に軽く手刀を入れる。
そして、気を失う伊吹を担いで、僕達に頭を下げる。

「それでは、失礼致します」
「う、うん……。行ってらっしゃい」と僕。
「今度の主人は曲者だな」

和樹君の呟きに、執事さんが心中から頷く。そして、伊吹を連れて出て行った。
残されたのは、僕と和樹君。

穏やかな空気に眠気を感じていると、不意に和樹君が話しかけてくる。

「なぁ……ミャラ。相談があるんだけど……」

「どうしたの？」

「楓の件……で。オレは……どうすればいいのか……。わからなくて……」

「うん……」

「反省はしているつもりでも……。何をすればいいのか……わからなくて。楓の家族に謝ろうにも……。楓は……家族と不仲だったそうだから……。行っていいのか……どうか」

「え……？　楓はご家族と仲が悪かったの？」

「あぁ……えっと……。オレが楓に初めて会った日は……真夜中の公園で。楓は……一人でブランコに座っていて。オレは暇だったから、暇つぶしのつもりで話しかけたら。楓が家族と喧嘩をしたって……口にして」

「喧嘩……」

「それだけで……。その他には……家族の話を一切してくれなかった。話を持ち出しても、上手くかわされて……。そういう話に触れられたくないみたいだったから、関係のない話ばかりしていて……。だから、余り楓の家については……知らないんだ」

「そう……なの」

「そりゃあ……通夜と葬式には、それらしい人はいたけど……。余り悲しんでいる様子はないどころか……。顔には出ていないけれど、妙に楽しげで……。オレと兄さんは詳しい素性を述べずに、楓の友達という形で参加していたから。その人達とは深く話をしていなくて……。ただ……帰りに兄さんが『気味が悪い』って呟いていた。それはオレもよくわかる……。確かに……不気味だった」

「そう……」

もしかしたら、楓もボクと同じような境遇だったのかな？
家庭内でのゴタゴタは外部の人にはよくわからない。ボクもそれは承知している。
もしかしたら……と思われていても。そういう話を持ち出してくる人はまずいない。ほぼ皆無だ。

だって、ボクにも……助けは訪れなかった。
食べ物をくれたりはするけど、本当に心底から思って、手を差し伸べてくれる人はいなかった。
日和と出会うまでは……。

そう思えば、楓は和樹君と出会って嬉しかっただろうな。
最後は裏切られるような形になってしまったけれど、それまでは本当に心の支えだったに違いない。
楓がもう少し……二人に自分の気持ちを話せていたら。
また別の運命が待っていたのだろうにな……。

今頃、死んで後悔しているね。
あー、もったいない事したなって。
酷い事をしても、反省をして、これだけ思ってくれているんだ。

酷い事をして、反省もしないで。
何にも思わない人達の中で、生きてきたのなら。
こんな人もいるのかって、驚いているよ。
一瞬、目がくらんで。和樹君の本性が見えなくなったのかもしれないけれど……。
今はきちんと見えているだろう。

深刻そうな表情で、机に残った料理を眺め続ける和樹君。僕が和樹君に口を開く。

「ねぇ、大学ノートを一冊とボールペンを一つ貰えるかな？」
「え？　あぁ……」

不思議そうに首を傾げる和樹君が、手を叩くと人がやってくる。
和樹君がお願いしてくれて、すぐにノートとボールペンを持ってきてもらう。
僕がノートの表紙に文字を書くと、和樹君が仰天する。

「うわぁ……もの凄く酷い字だな」
「うるさいな！　これでも丁寧に書いているつもりなの！」
「本気か？　これじゃあ、誰も読めないぞ」
「伊吹は読んでくれるもん！」
「それは解読しているんだろう。普通に読むには難しい文字だ」
「もう、文字については何も言わないで！」
「いや、悪い……」

呆れ返る和樹君に向いて、プンプンと怒る僕。
すぐにご機嫌を直して、和樹君に口を開く。

「何て書いてあるでしょう？」
「いや、だから、読めないって」
「……」
「えっと……ん～……」

僕が膨れると、和樹君が真面目になって考えだす。かなり真面目に考えだす。
そんなに悩む事なのかな？
不意に和樹君が戸惑いながら話し出す。

「ボラン……ティア？」
「そう！　ちゃんと読めてるじゃん！」
「いや……かなり迷った」
「んん～……そんなに汚いかな？」

悩むの十秒。すぐに笑顔になって、和樹君に話を始める。

「まぁ、いいや。さっきの……和樹君の話を聞く限り、楓のご両親に会っても。仕方なさそうだね。僕なら……オススメしないな。きっと楓もそう思っているよ。下手に係わって、和樹君が妙な事に巻き込まれるのは良くないと思うから。だから……別の方面から、道を探そう」
「うん……」
「反省って……口にするのは簡単だけど。実際は地道なものだよ。急いで解決できることじゃないし。一生掛るかもしれない。それはきっと長い道のり。だけどね、そんなに重く考えないで。小さくても、一歩一歩、歩き続ける事が大切だから」
「それで……ボランティア？」
「そう、これはボランティア帳。日記みたいな物。毎日、何をしたのか。メモをしていくの。ボランティアじゃなくても、人助けをしたなら、ここに記入して。何月何日に……。例えば、今日なら十一月二十七日。『道に迷っている人を道案内した』とか。簡単な事でいいよ。そんなに大きな事じゃなくても構わない。だけど……これって、結構……大変なの。和樹君は頑張れる？」
「……」

じっと考え込む和樹君。不意に口を動かす。

「持続力はないほうだけど……。頑張ってみる……」
「フフッ、そんなに悩まなくてもいいよ。これが一冊見事に埋まっ

たら……。楓も喜んでくれると思うな。僕も相談に乗るから。今日から、地道に頑張ってみよう」

「あぁ……ありがとう」

「フフッ……。じゃあ、今日は……そうだ！　今日は僕の家の近所の公園で、もちつき大会があるの。そこで豚汁を配ったり、ソーセージを焼いたりするんだけど。いつもボランティアの人がお手伝いしているの。前の時は、人数が足らなくて騒いでいたから。今回も騒いでいるかも。確か……一時半から始まるから、今から行くとギリギリだね。ちょっと越えるかも……。だけど、途中参加も良かったはずだし、誰でも参加自由だったはず。うん、よし！」

僕がすぐに立ち上がって、和樹君の腕を引っ張る。

「ほら、早く行かないと！　遅刻しちゃうよ！　遅刻！」

「途中参加ありだろ？　そんなに急がなくても……」

「早いに越したことはないって、よく言うでしょ？」

「まぁ……」

「ほら、行こう。僕、先に行っちゃうよ」

「ちょっと待てよ！　ミャラ！」

和樹君の言う事を聞かずに、食堂を出る。

僕が廊下を駆けて行こうとすると、背後から和樹君の大声。

「ミャラ！　そっちは遠回りだ！」

レジスタンス〈メモリー編１０〉

そういうわけで、途中まで車に乗せてもらって。途中から、歩きで公園に向かう。
だって、いきなり高級車が公園の前に止まったりしたら、何者かと思われるもの。
場の空気を濁すような事はしたくない。って、和樹君が言っていた。流石、伊吹の弟だ。空気を読まない僕とは豪い違いだ。

公園に辿り着くと、賑やかな事になっていた。結構、人が多い。
今日は日曜日だから、地域の人々が遊びに来ているみたい。
僕が和樹君を引っ張って、受付に向かう。
受付では格安でチケットを販売していて。
そのチケットを使って、食べ物を購入できる仕組みになっている。
まぁ、儲けるためというよりは。地域の交流のために行っている行事だ。

僕が受付の人に話しかける。

「すみません。お手伝いをしたいのですけど……」
「あらあら、助かるわ。今回も人数が少なくて困っていた所なのよ。ここに住所とお名前を書いて頂戴」
「はい、わかりました」

僕が返事をすると、受付の人がボールペンと記入用紙をくれる。
僕が住所を書こうとすると、和樹君にボールペンを奪われる。
ムッとする僕と目を合わせずに、和樹君が言う。

「ミャラが書いたら、読めないだろ？　オレが書いてやるよ」

「読めるのに……」
「おい、ミャラ。住所は？」

む～、としながら、住所を口にする。
和樹君の文字を見る。うわぁ……綺麗。
和樹君……乱暴そうなのに、何で文字が綺麗？
何とも妙な組み合わせに、僕が考え込んでいたら。和樹君が自分の分を書き始める。
だけど、住所が……どこかのマンション？　僕が問いかける。

「マンションなの？　自宅じゃないの？」
「オレは……普段から余り家には寄らないんだ。今回はたまたま寄っただけで……。大体は、一人で暮らしている」
「一人暮らし？」
「と言っても、まぁ……見えないところで、ちょろちょろといるけどな。家臣達に見張られているんだ。こんなオレでも、妙な事に巻き込まれると厄介らしい。まぁ、オレが妙な事をしないか見張っているのかもしれないけれど……」
「フフフッ、お偉い人みたい」
「うるさいなぁ～」

和樹君が恥ずかしげに不満顔を見せながら、記入用紙とボールペンを受け付けの人に手渡す。
すぐに担当の場所を案内されて、説明される。
僕達の任務は、永遠にフランクフルトを焼き続ける係りだ。

棒に刺さったフランクフルトがずらりと箱に入っていて、それをひたすらに焼き続ける。
和樹君がフランクフルトを焼いて、器に入れる係り。
僕はチケットを受け取って、器に入ったフランクフルトにケチャッ

プとマスタードを掛けて、お客さんに渡す係り。

あたふたとする僕に対して、和樹君は様になっている。
少しお客さんが減った瞬間に、僕が和樹君に話しかける。

「何だかプロみたいだね」
「何のプロだよ？　これくらい、誰でもできるだろ？」
「僕なら焦げるよ。真っ黒になっちゃう」
「それはミャラの動きが遅いだけだ」
「遅くないもん！」
「ほら、溜まってきたぞ」
「今はお客さんがいないの！　もう焼いちゃ駄目だって！　冷めちゃうよ！」
「ほら、客が来た。客」
「あ……って、向こうに行っちゃった。って、もう！　和樹君、焼き過ぎ！」

文句を言う僕の隣では、和樹君がたくさんのフランクフルトを焼き始める。
和樹君……凄く楽しそうだけど。そんなに一度に焼いても出ないよ。もうー！
僕が大騒ぎだ。

「どうするの！？　そんなに出ないって！」
「そりゃあ……商売だろ？　見てろよ……」

和樹君がそう言った後に、公園内を歩く女性グループに声を掛ける。

「そこの綺麗なお姉さん方、フランクフルトは如何ですか？」

「あらまぁ、カッコいいお兄さんね。一つ頂こうかしら？」
「私も欲しいわ」
「そう？　じゃあ、私も」

そう言って、フランクフルトを貰ってくれるのは中年のおばさん達。
綺麗なお姉さんって言うのは、明らかに客寄せ言葉だ。
まぁ、向こうもわかっていらっしゃるだろう。
豪く和樹君の事を気に入ってくれた中年のお姉さん方が、フランクフルトを計十本近く貰ってくれた。
その流れに沿って、他のお客さんもやってくる。
そうこうしているうちに、足らなくなって。焼きあがるまでしばらくの時間待ち。
長蛇の列を見ながら、僕がたまげる。

「うわぁ～、凄くお客さんがたくさん……。フランクフルト……大人気だ」
「ほらな、オレの言った通りだろ？」
「だけど、多すぎるよ。早く焼かないと。急いで、和樹君」
「オレが急いで、どうするんだ？　急ぐのは、フランクフルトだろ？　お前ら、早く火を通せよ。『嫌だね。まだまだここに居たいんだ』だってさ」
「一人で何言っているの？　頭、大丈夫？」
「そろそろヤバいかもな。鉄板から出る熱気のせいでヒートしているらしい」

バカな話をしているうちに、焼きあがったフランクフルトをお客さんに手渡す。
僕達が楽しく仕事に励んでいたら、遠くから騒ぎ声が聞こえてくる。
そちらを向くと、大変だー！

豚汁が引っくり返って、地面がドロドロ……。

僕が停止していたら、和樹君がそちらへ向かう。
ちゃんと鉄板の電源を落としている辺りが、かなり冷静だ。
何て言うか……吉川家って、繊細だよね。こういう所……。
伊吹も凄く気が利くの。これって、家柄なのかな？

僕も和樹君の後に続いたら、和樹君が周りの人達に声を掛ける。

「怪我人は出ていないか？」
「え……えぇ……。だけど、中身が全部……」うろたえるのは豚汁係りの人。
「豚汁くらい、いいじゃないか。火傷した奴がいないんだ。マシな方だぞ」

和樹君の後ろで僕も頷く。本当に……怪我人が出なくて良かった。
不意に聞こえてくるのは子どもの泣き声。横を向くと、男の子が泣いている。
母親が男の子に声を掛ける。

「ほらほら、泣くんじゃありません。こぼれてしまったのだから、仕方ないでしょ？　また、今度に頂きましょうね」
「いやぁー！　食べたいー！　豚汁―！」と泣き喚く男の子。
「子どもはお菓子じゃないのか？」突っ込みを入れるのは和樹君。
「いや……まぁ、好き好きかな？」

思わず、口を出す僕の前では。
男の子が地面にへばりながら、豚汁で汚れた地面に手を伸ばす。
ダメダメ、それは流石に食べれない！
母親が止めようとする中、和樹君が男の子に話しかける。

「おい、坊主。どうしても豚汁を食べたいか？」
「食べたい！　食べる！」物がないのに食べると言い張る男の子。
「一時間……我慢できるか？」
「出来る！　豚汁！」

男の子の話を聞いて、軽く頷く和樹君。僕が和樹君に口を開く。

「とりあえず、向こうの舞台で。二時から子ども用のイベントの、キャラクターショーがあるから……。その後に、餅つきをして……。合わせて一時間くらいにはなると思うけれど……」
「ギリギリだな……」
「用意できそう？」
「やってみるしかないだろ？」

そう言って、和樹君が右の人差し指を曲げて口にくわえる。
そして、息を吹き出し、高音が辺りに響く。
指笛なんて……カッコいい。
しかも、直後に黒スーツの家臣さんが駆けてきて、和樹君の前で頭を下げる。
更に、カッコいい。
皆が和樹君に目を向ける中、和樹君が家臣さんに命令だ。

「こぼれてしまった豚汁の代理になる物を用意しろ。迅速にだ、わかっているな？　後、この地面を片付けておけ。オレはフランクフルトを焼くのに忙しいから、後は頼むぞ」
「はい、かしこまりました」

頭を下げて、引きさがる家臣さん。
僕の横では必死になりながら、指笛を吹こうとする男の子。

すぐに顔を上げて、和樹君に問いかける。

「どうやって音出すの？　ねぇ、もう一回やって！」

「お？　いいぜ。見てろよ」

そう言って、もう一度、指笛を吹く和樹君。

すぐに家臣さんが駆け付けてくる。

和樹君……用はないはず。

男の子の背を押し、家臣さんの前につれて行く。そして、一言。

「よし、言ってやれ」

「ドウレッドになりたい！」と男の子。

「だそうだ」

「はっ！？」

硬直する家臣さん……可哀そう。わけわからないだろうな。僕が説明する。

「ドウレンジャーって、戦隊シリーズの特撮テレビドラマがあるの。今、子ども達の中で、凄く流行っているんだよ。それのドウレッドになりたいって意味だと思うけど……」

「そうなのか？」と和樹君が男の子に問いかける。

「うん！　ドウレッドになる！」

男の子が自信のみなぎった表情で口を開く。

家臣さんは停止状態。

そんな家臣さんを見ながら、和樹君が楽しげに話し出す。

「ドウレッドになりたいそうだ。子どもの夢は偉大だよな。この願いを叶えるには、どうすればいいのか？　お前なりに考えてくれ」

「は……はい。かしこまりました……」

躊躇しながらも、家臣さんが頭を下げて引きさがる。何て嫌がらせだろう。

和樹君は非常に楽しそう。ケラケラと笑っている。

ふと気付くと、周りの大人は和樹君に視線一直。

何者だろう？　って、顔をしている。

男の子の母親だって、同様だ。

そんな中、無垢な男の子が、和樹君に向いて、皆が口にしたい質問をする。

「ねぇ、兄ちゃんは誰？」

「オレか？　オレは吉川和樹。たまにテレビに吉川伊吹っていうのが出てるだろ？　あれの弟だ」

「知らない。誰、それ？」

「知らないか……。じゃあ、まぁ……。分かりやすく言うなら、そうだな……。大金持ちだ」

「大金持ち!?　だから、口笛吹いたら、人が来るの？」

「あぁ、あれはオレの家来だ。ちなみに、オレは指笛派だ」

「大ガメ持ち！　大ガメ持ち！」

「亀は持たないなぁ～。でっかい鯉なら、家にいるぞ」

「コイ？　コイって、金魚のでかい奴でしょ？　学校にもいる」

「学校のよりもでかいと思うぞ。今度、家に来るか？　坊主？」

「行く！　でも、坊主じゃない！　健太（けんた）！」

「健太か。カッコいい名前じゃん」

「えへへへ……」

凄く気が合う和樹君と健太君。

周りの大人はビックリ仰天。まさかそんな大物が……。

男の子の母親なんて、気を失うのではないかと、思う程にうろたえている。
すぐに健太君を呼び寄せて、和樹君に頭を下げだす。
それを見ながら、和樹君が商売口調。

「頭を下げるくらいなら、フランクフルトを買ってくれませんか？焼き立てで、身体も温まるし。なかなか旨いですよ。どうです？健太君の分と、合わせて二本」

レジスタンス〈メモリー編11〉

こんな事件が起きたから、フランクフルトの人気が急上昇だ。
和樹君が焼いたフランクフルト……。
フランクフルトの価値は変わらないはずなのに、和樹君が焼いたという事で、皆が買いたがる。

一人、一本限定にしても。足らなくなるだろう勢いで売れていったら、本当に足らなくなる。
そしたら、和樹君……またもや指笛だ。
僕が発狂する中、和樹君が家臣さんにフランクフルトを用意させる。

その頃には、豚汁も用意されていた。一時間もいらなかったな。
家臣さん達はどうやって用意したのか？
わからないけれど、凄く早かった。
同じ勢いで、フランクフルトも用意される。そしてもう一つ……。

和樹君の隣で。ドウレッドのコスプレをしながら、専用の玩具銃をバンバンと撃つのは健太君。
玩具銃は音を立てて、ピカピカ光る。
健太君は和樹君のお邪魔になる事を気にもせずに、凄く自慢している。
もう餅つきどころじゃない。
キャラクターショーは見終わったから、今はコスプレの自慢で必死だ。
そんな健太君を羨ましそうに眺めるのは、他の子ども達。
ワイワイと集まって、僕達の周りはお子様だらけ。

健太君の母親は、健太君に声を掛けるけれど。

健太君は和樹君の事が気に行ったらしく、周りでうろちょろしている。
和樹君も笑いながら、健太君を構ってあげている。
フフッ……楽しそう。

しばらくして、健太君がお休みモードになってしまう。
今にも眠りそうな健太君の手を取りながら、母親が和樹君にお礼を言う。
和樹君がフランクフルトを無料提供し。
母親がもう一度お礼を言って、健太君を連れて行く。

それから更に時間が経ち、もう夕暮れ。
人の数がわずかになった頃に、今回のイベントを仕切っていた人達やボランティアの人達で、残った食べ物を分かち合う。
ベンチが空いていたので、僕と和樹君が隣同士に座り。
皆で分け合った食べ物を頂く事にする。

フランクフルトを食べる僕の隣には。豚汁を啜る和樹君。
僕が和樹君に問いかける。

「どうだった？　ボランティアは」
「んー……。久しぶりに……楽しいと思ったな」
「フフフッ、ちょっと名残惜しいの？」
「まぁ……祭りが終わった気分だな」
「今日は大活躍だったものね。和樹君、様になっていたよ。僕、驚いちゃった」
「フランクフルトの話か？」
「違うよ～。まぁ、フランクフルトを焼くのも上手かったけど……。そうじゃなくて……。地域の人達の中に……凄く溶け込んでいたから。こんなに社交的だとは思ってなかったの。伊吹ならこうはいか

ないだろうね。人付き合い苦手だもの」

僕が言ったら、和樹君が赤面する。すぐに僕が追加発言だ。

「あ、この話は伊吹に言っちゃ駄目だよ。また拗ねるから」

「あぁ……うん」

「初めてで、これなら……きっとこれからも上手くいくね」

「そう……か？」

「そうだよ……。これから色々な人助けをするの……。結構、大変な事もあるだろうけど。和樹君なら問題ないよ。今日の和樹君は活気に溢れていたし、凄く楽しそうだったよ」

「うん……。だけど、これ……継続できるかな？」

「できるよ、大丈夫。初めは、ちょっと戸惑うかもしれないけれど……。次第に慣れてくると、それが日常の一部になるから。それを更に続けて行くと、最後は……ボランティアをしてあげているんじゃなくて。ボランティアをさせて貰っている……という風に思えて。それがありがたいと感じるんだって。そういう考え方ができるようになったら、一人前らしいよ。僕はそこまで極めていないけれど……。やっぱりボランティアをしている時に、怒られたりしたら、不愉快に感じちゃうし。だけど、今は亡くなった僕の恋人は……そういう事を話していたよ」

「それは……凄いな」

「うん、凄い事。こんな人はそうはいないけれど……。和樹君なら、そうなれる気がするな」

「か、買いかぶるなよ。そ、そんな……聖者みたいな考え方……できるわけないだろ？」

「そう？　和樹君なら、できると思うよ」

僕の言葉を耳にして、和樹君が首を左右に振る。

赤い顔で全面否定する和樹君が面白くて、もっと褒めたたえてみる。

すると、更に赤くなって。最後はギャーギャーと怒りだす。
褒められるのが苦手みたいだ。

和樹君は自分の事を過小評価しているから、本当の事を教えてあげないと。
和樹君の価値は本人が思うよりもずっと大きい。
この人は……きっと偉大な人になるだろうな。僕はそう思う。

後片づけを終えた後、皆にサヨナラを言って、公園を後にする。
車の中で、じっと外を眺める和樹君。
今は色々と考える事が多いだろう。
自分が犯した罪について、これからの事について……。
僕も黙って外を見る。
和樹君はこれからどういう人生を歩むのだろう？
想像するだけで、心が躍る。

レジスタンス〈メモリー編12〉（前書き）

猫は寒がりなのに……。俺もだ。

レジスタンス〈メモリー編12〉

屋敷に戻った後、食堂にて和樹君と一緒にボランティア帳を開く。
僕の隣に和樹君が座り。今日起きた出来事をお喋りしながら、まとめてみる。
といっても、僕は見ているだけ。
だって、書いたら読めないって言われるから。
書きこむのは和樹君。

二人で楽しく今日の出来事を振り返っていたら、帰ってくるのが伊吹。
僕達を見て、妙に不機嫌になり。
和樹君を睨みながら、僕と和樹君の間に割って入ってくる。
そのおかげで、和樹君まで不機嫌になり。睨み合う二人。

ここに瑠菜が乱入してくる所を想像すると、何だかそれだけでノイローゼになりそうだ。
今はいないから、いいけれど……。いつか、全てを理解するだろう。
特に、伊吹との間で起きた出来事を知られたなら。
僕は一生……紐付き首輪。その上、檻の中暮らしになる。
それは勘弁してほしい……。

何とか二人の仲を取り持って、お喋りを続ける。
何も起きていないのに、僕と和樹君の関係を疑う伊吹を言いくるめるのに、凄く時間が掛った。
多分、今でも疑っている。伊吹って……こんなにも嫉妬深かったのか。
まぁ、前々からそういう傾向はあったけど。
いざ、お付き合いを許可すると、本当に焼き餅焼きなんだもの。

困った彼氏だな……。

軽い夕食を食べた後に、伊吹の部屋に行こうとするのだけど。
今度は、和樹君がごねりだし、これはこれで厄介な事に。
二人が喧嘩を始めるから、疲れ切った僕は自分の部屋に戻る。

部屋に入ったら、もうぐったりだ。
ベッドの中に潜り込んで、目を瞑る。
眠い……。特に今日は走り回ったから、疲れたみたい。少し休もう……。
目を瞑ると、心地よい睡魔がやってきて。意識が突然に……。

「……だから」

誰かの……声？

「今から……少しだけ……」

伊吹……？

身体が重くて動かない。瞼も上がらない。
そんな僕に、誰かがキスをしてくる。
僕の頭を撫でてから、抱きかかえる。
身体が宙に浮き、どこかに移動する気配……。
どこへ行くの？　すぐに意識が遮断される。

全身が揺れる気配で目が覚める。
目の間には、伊吹の姿。
以前に一度……学校で見たようなカジュアルな格好……。
上体を起こす僕に、伊吹が話しかけてくる。

「ごめんね、ミャラちゃん……。話も聞かずに、連れてきちゃって」
「ここは……？」
「ここは車の中だよ。そろそろ到着する頃かな……」
「到着？」
「フフッ……そう。到着」
「どこに？」

僕が首を傾げるタイミングで、車が停止する。
伊吹が僕用に準備していた上着を手渡してくるので。
僕はお礼を言って、それをはおる。
伊吹が先に外に出て、僕に手を差し伸べてくる。
僕がその手を取り、車から降りると肌寒い風を身体に感じる。
だけど、暖かい格好をしているから、それほど苦痛でもない。

ぼんやりしながら、辺りを見回す僕。
暗闇の中、イルミネーションの如く光輝くのは世界その物。
ここは遊園地のようだ。真夜中の遊園地。
普段は動いていないだろうに……。今日だけは、特別にライトアップされている。
もちろん、伊吹も輝いている。
暗闇の中で光る体質は、依然として変わらない。

周りを見て困惑する僕の手を取り、伊吹が走り出す。
伊吹に手を引かれ、されるがままに行動する僕。
僕達以外に誰もいない。二人だけの遊園地。

真っ暗な夜空の下で、僕達は遊び始める。

初めは戸惑っていたものの。
光り輝く数々のアトラクションに乗っているうちに、気持ちが高ぶってくる。
次はこっちの乗り物、その次はあっち……。
そんな風に、時間を余す事もなく……遊び続ける。

遊びながら、思う事。僕の目に映るのは、まるで幻想だ。
夢のように……ぼんやりとした空間。それは儚く綺麗で涙すら出てきそう。
僕達以外に人がいないから……尚更に現実離れした世界に見える。
観覧車の中、伊吹の隣に座りながら。僕が呆けていたら、伊吹が声を掛けてくる。

「ミャラちゃん、大丈夫？　疲れちゃった？」
「ううん、元気だよ。だけど……何だか凄く幻想的で……。ゲームの中にいる気分……。これ……現実なのかな？　って、自分に問いかけていたの」
「現実だよ……。気に入ってもらえて、良かった」
「周りも綺麗だけど……伊吹も綺麗だね。だから、更に困惑しちゃうの。僕の妄想じゃないのかって」

僕が言ったら、伊吹が翼を付けて赤面する。
伊吹の背に翼が生えたら、まるで天国だ。
生きながらにして、天国を見られるなんて。僕は何て幸せ者なのだろう。
伊吹を眺めながら、心に染み渡る幸福を感じていたら。不意に伊吹

と僕の唇が触れ合う。

堪らなく熱烈なキスをされて、更に天国を見る事に。
伊吹が口を離した時には。僕は天国を見過ぎて、瀕死状態。
幸せも度を超えると、毒になるのだろうか？
頭の中が白くなり、虚ろな快感の中、伊吹にしがみ付く。

僕が本当に女の子だったら……。
この世界を見て、どう感じるのだろう？
それはもう……堪らなく幸せなんだろうな。
今の僕よりも、ずっと幸福に感じるのか。
あぁ……それも悪くないかもしれない。

その後も、二人で遊んで。遊んで、遊んで……。
このまま永遠に二人で遊び続ける事ができたなら……。
そんな選択肢が存在したのなら、選んだかもしれない。
そう思えるほどに、幸せな一時を過ごす。

だけど、いつしか終わりがやってきて。そろそろ帰ろうかという話になる。
本当はもっと遊んでいたいのだけど。そういうわけにもいかないだろう。
遊園地の中、輝きを放つアトラクションを眺めながら歩く僕達。

不意に伊吹が立ち止まる。
僕が伊吹に振りかえると、伊吹が妙に寂しげな表情を見せる。
無意識のうちに、伊吹の手を握る僕。僕が心配していたら、伊吹が口を開く。

「今日は……ボクのわがままに付き合ってくれてありがとう」

「ううん……いいよ。僕も楽しかったもの」
「うん……」
伊吹が小さく頷いた後に、耳を疑うような言葉を口にする。
「ボク……ボク達ね……。今度から、イギリスで暮らさなくちゃいけないんだ……」
「え……？」
イギリス……？　暮らすって事は……旅行とかじゃなくて。行ったきり？
不安を感じて、伊吹の手を強く握る。
嫌……そんなの嫌……。
泣きそうな僕を優しく抱きしめ、伊吹が話し出す。
「元々、ボク達は向こうで……母方の祖母の元で暮らしていたのだけど。祖母が病気になって、それで日本で暮らす事になったんだ。すぐに祖母も良くなったし、向こうに戻れば良かったのだけど。両親もいたし、ボク達もこちらで馴染んでしまったから。こっちで暮らす事になって……。だけど、今は両親も亡くなったし。祖母も寂しいから一緒に暮らそうって……。そりゃあ、嫌だって口にすれば諦めてくれるだろうけど……。ずっと世話になってきたから。流石に、放っておく事もできないし……」
「そう……」
「いきなりの話でごめんね……」
「和樹君は……？」
「あぁ……あいつにもさっき伝えておいたよ。何が何でもここから動かないとか、ほざいていたけど……。まぁ、無理矢理に連れて行くよ。二人で帰ってきてくれというのが、祖母の願いだからね」
「うん……」

それじゃあ……仕方ないよね。
お祖母さんが言うのだもの。無視するのは可哀そう。

急に寒気を感じる。
身震いする僕を、伊吹が強く抱きしめる。
僕の前から消えてしまう天使様。
忽然と現われて、忽然と去って行く。
幸せなんてそんな物だ……。
伊吹の腕に抱かれながら、小声で問いかける。

「いつ……出発するの？」
「明後日にでも……」
「明後日……そんなに早く」
「大丈夫だよ。心配しないで。ボクはミャラちゃんと誓いを立てたし。二度と会えないわけでもない。また近々にでも……遊びに来るから」
「うん……」

遊びに来るという言葉に、距離を感じる。
遊びに来たら、また帰ってしまう。
一緒に居る時間よりも、離れている時間の方が長い。
彦星と織姫みたいに……。
だからと言って、僕がごねても迷惑が掛るだけだ。
ここは引き下がるしかない……。

もしも、僕が本当に女の子だったなら……。
伊吹を一途に思って、真の恋をしていたなら……。
引きとめるか……。もしかしたら、イギリスへ付いて行くと……発言できたかもしれない。

だけど、僕にはそれができない。
元々、男だし……。
付き合うと言っても、形だけ……。
好きは好きだけど、普通と違う。
それに、恵梨の件もある。
他にも、まだ……やり残した事が多すぎて。日本を離れる事はできない。
いくら伊吹を天秤にかけても、僕には離れられない理由がある。

伊吹が約束を守ってくれるのなら、僕はここに残らなくちゃいけない。
付いて行くことはできない。
かと言って、伊吹を引きとめる事もできない。
黙って、見守る事しかできない……。

僕達の周りを、冷たい風が吹き荒れる。
その風から僕を守ってくれる人。
この人はもういなくなる……。僕を残して、立ち去ってしまう。
取り残される僕は、寒空の下に震えるの？　猫は……寒がりなのに……。

レジスタンス〈メモリー編13〉

楽しく悲しいデートが終わり、屋敷に戻る。
伊吹と一夜を過ごした翌日、目が覚めると、伊吹の姿は見えず。
ベッドの横には、置き手紙。
朝食が用意してある事と、今日は明日の準備で忙しいから伊吹達には会えない事。
食事を終えたら、家臣さんが僕の家まで送ってくれる事などが綴られていた。

食堂に向かい、一人で寂しくご飯を食べる。
だけど、喉に通らなくて……。殆ど食べられずに食事を終える。
家臣さんに声を掛けたら、車まで案内してくれる。
高級車に乗せて貰い、送ってもらう先は学校。
とりあえず、皆に説明しないと……。

学校へと到着して、運転手さんにお礼を言い、下ろしてもらう。
懐かしい学校を目にして、妙に新鮮な気持ちになる。
学園に入り、校舎へ近づき。教室へと向かう。

教室の中へ入ると、皆が僕の姿を見て大騒ぎだ。
真っ先に飛んできたのは瑠菜。泣きそうな顔で僕を問い詰めてくる。

「連絡がなくて、心配していたのよ！　それで、結果は！？」
「あぁ、ごめん……。忙しくて、連絡をするのをすっかり忘れていたよ」
「あいつは！？」
「大丈夫、伊吹は生きているよ。ただ……」

僕が暗い顔をすると、瑠菜の表情まで曇ってしまう。
僕が瑠菜を抱きしめて、続きを話す。

「伊吹は……明日、イギリスに帰っちゃうんだって。そっちで暮らすそうなの……」
「でも、生きているのね？　生きていたら、問題ないわ。イギリスだろうが、宇宙だろうが。可能性があるもの。それに、イギリスなんて、案外に近いものよ。半日もあれば、到着するわ」

前向きな瑠菜の意見を聞いて、少し気分が軽くなる。
そうか……確かに、生きてさえいればいつか会える。
それほど深刻に悩む必要もないのかな……。
急に心が穏やかになったと思ったら、瑠菜にキスされる。
僕は身を任せて、瑠菜の言いなり。
口を離した後も、ゴロゴロと喉を鳴らして、瑠菜にすり寄る。
うーん……懐かしい香り。

僕達がイチャイチャしていたら。突然、廊下から声が聞こえてくる。
振りかえると、扉付近に血相を変えたハルの姿。
今は高校生バージョン……。魔力が回復したようだ。
ハルが息を切らしながら、僕に話しかけてくる。

「お姉ちゃん！　大丈夫でしたか!?」
「だ、大丈夫だよ……。心配掛けちゃってごめんね。伊吹は問題なく元気にして……」
「吉川君なんてどうでもいいのです！」

ハルが怒鳴りながら、扉の枠を右手で叩く。
目を丸くする僕に向いて、大声で衝撃的な一言を口にする。

「それよりも、お姉ちゃん！　吉川君とリアルに痛い関係を持ったって、本当ですか！？　しかも、断れない理由があって。無理強いされたとか！」
「そっちー！？　っていうか……何でハルがそんな事……」
「まさか、本当なんですか！？」
「いや……あの……その……」

口が滑って、余計な事を言ってしまった。
周りの世界が硬直する中、ハルが悔しそうに一人で騒ぐ。

「あの野郎、僕のお姉ちゃんに手を出しやがって！　いけ好かないとは思っていたけど、まさか、そこまでするとは！」
「上野！　今の話は本当なの！？」

今度は瑠菜だ。
あうぅー！　ど、どうしよう……伊吹の代わりに自殺したい。
赤面しながらうろたえる僕を見て、皆が寄って集って質問してくる。
僕は気持ちが顔に出るタイプだから、すぐに悟られる。黙っていても、意味はない。
皆がキャーキャーと騒ぐ中、両手をいじりながら俯く僕。

最後は、黙っていられない程の騒ぎになって。僕が少しずつ話し始める。
精密には語らないけれど、ちょっとそういう風な関係を持ってしまった事。
そうせざるを得なかったわけではないが、結果的にはそうなったという事。
もちろん、無理矢理ではなくて、自分も納得しての話だという事。
最後に、伊吹には僕の正体を明かしていない事。

を述べ、そして瑠菜に胸倉を掴まれ、振り回される。

それにしても、僕が話をしている最中の皆の表情。
怖いくらいに真顔になって、マジで真剣に耳を傾けていた。
こんな話を真面目に聞くくらいだったら、授業を真面目に聞けばいいのに。

僕の話を聞き終えた後に、リョウが恐ろしい発言を僕に向ける。

「そういえば、ミャラちゃん……。子どもできたら、どうするん？」
「できないよ！　バッカじゃん！　できるわけないじゃん！」

大声で否定する僕。
だけど、実際はどうなの？
僕……今は女の子だけど。これって、どこまで女の子？
じっと考えて……いや、まさか……。
そんな事はあり得ない。あり得ちゃ駄目だ。絶対に駄目だ。
どんどん蒼白する僕に向いて、ハルが小さく呟く。

「未来さんは完璧主義ですからね……。中途半端な薬なんて作らないですよ……」
「いやー！　そんなのあり得ない！　絶対にない！　ない、ない、ない！」騒ぎ散らす僕。
「ヨッちゃんとミャラちゃんの子どもやったら……。そらぁ、可愛いやろうね。天才かな？　女の子と男の子、どっちやろう？　楽しみやわぁ～」

勝手に、僕達の将来を思い描くリョウに向いて、僕が怒り狂う。

「もう、これ以上、変な事を言わないでよ！」

「上野～。私も子どもが欲しいわ～」

瑠菜が僕にへばり付きながら、物欲しそうに言う。

こっちの方がリアリティーだ。いつか……できてしまいそうな気がしてならない。

だって、もう……どれほど寝たか。数えきれない程に、瑠菜とは寝ている。

既に恋人を超越した勢いだもの。夫婦だって、ここまではしない。

皆が妄想話で盛り上がる中、瑠菜とイチャイチャして現実逃避。

そんな事よりも、明日……伊吹をお見送りしなくちゃ……。

やっぱり……行ってしまうのだろうな。

話が尽きない教室を眺めながら、明日の事について考える。

あぁ……寂しくなるなぁ……。

レジスタンス〈メモリー編１４〉（前書き）

今更ですけど……これって、ＢＬとかＧＬとかＲ１５に入るのでしょうか？
Ｒ１８ではないと思うのですが……。微妙な線過ぎて……わからない。（＾―＾；）
入るのだったら、設定をしなおすのですが……。
これ駄目だろー！　と思う人は一言でも口にしてあげてください。
素直に意見を受け入れます。（＾―＾）

レジスタンス〈メモリー編１４〉

授業が終わり、家に帰る。
結局、最後まで授業を受けていた。
久しぶりだったので、皆と話をしたかったのと。学校の空気を感じたかった。
懐かしい雰囲気の中で、寂しさを紛らわせようという考え。
どうせ途中で家に帰っても、日和の姿は見えないから。
恵梨と一緒に帰らなくちゃ、ただの一人ぼっちと変わりない。

家に着くと、恵梨に日和が入って。日和が笑顔を見せる。

「お帰り、上野君」
「うん、ただいま」
「お風呂にする？　それとも、ご飯？」
「ご飯。お腹空いちゃった」

僕が言うと、日和が頷き、夕食を出してくれる。
今日はシチュー。昨晩に作っておいたものだろう。
ハルがご飯をむさぼり食べる中、僕と日和がゆっくりと食事を始める。
不意に、日和が話しかけてくる。

「それで、どうだった？」
「うん……何とか。伊吹は無事だった」
「そう……。良かったね」
「うん」

僕は頷き、向こうで起きた出来事を、順を追って話し始める。

そして、最後に伊吹がイギリスへ行ってしまう話をする。
静かに話を聞いていた日和が、不意に僕に話しかける。

「寂しくなるね……」
「うん……」

たったそれだけ……。それだけ言えば、もう十分。
僕の心を見透かすように理解してくれた日和が、僕にお茶をいれてくれる。
それを飲んで、シチューを食べていたら。何となく気持ちが楽になる。

食事が終わり、後片づけをして。
他愛ない話をしながら、ソファーで寛いで。
その後、お風呂に入る。
皆が譲ってくれたので、僕が一番風呂。
浴槽に浸かって、ぼんやりしていたら。急な眠気が襲ってくる。
気疲れから出たものだろうか？
暖かいお湯の中……いつの間にか、目を瞑って……。

「お姉ちゃん！　大丈夫！？」

ハルの大声を聞いて、飛び起きる。
え？　ここはどこ？
身体が暖かくて心地よいけど、布団の中じゃない。
もっとしっとりした空気……。
あ、そうだ……。僕はお風呂に入っていて……。
僕が思い出していると、またもやハルの声。

「溺れてない!?　生きてる!?」
「ご、ごめん!　寝てた!」
「何だ……まったくもう……。ん?」

呆れ返るハルの言葉の最後に、妙な不審感。
僕がうろたえながら、問いかける。

「ど、どうしたの?」
「お姉ちゃん……声が……。もしかして、戻った?」
「えっ!?」

ハルの言葉を聞いて、驚きながら自分の姿を見る。どう考えても、男……。
浴槽から飛び出して、鏡の前に行く。
戻ってる……。女の子じゃない。以前の自分。
うわぁ!　やったー!　元に戻った!　思わず、気持ちを口にする。

「元に戻った!　やったー!　これで、いつもの生活だ!」
「だけど、明日はどうするの?」
「え……」

ハルの言葉にショックを受ける。
明日……あぁ!　マズイ!
明日は伊吹達をお見送りしなくちゃいけない日だ。
この姿ではマズイ!
ミャラがお見送りしないといけないのに。男姿の僕が行くと意味がない。

風呂場から飛び出す僕の前には、ハルの姿。

手にバスタオルと男性用の僕の服を持ちながら、僕に言う。

「男女構わずに、裸体で室内を走り回られると困るから。お父さんはパニックになると、わけのわからない事をするし。とりあえず、服を着てから……」

「着るよ！　当たり前だよ！　僕を何だと思ってるの！？」

「わからないよ。放っておいたら、今にも走り出しそうな雰囲気を出していたもの」

「そこまでバカじゃないもん！」

ハルからバスタオルを奪い取って、身体を拭いていると。

ハルが僕の服をカゴにいれながら、余計な事を口にする。

「こっちを着ちゃ駄目だよ。こっちが男用……」

「わかってるって！　僕には女装趣味はない！」

「さっきまで着ていた癖に……」

「うるさいなぁ！　もう、あっちに行って！」

「はいはい」

ハルが立ち去り、服を着た僕が部屋に戻る。

携帯電話を手にして、未来に電話だ。

未来があの薬を作ったのなら。何とかしてもう一度、薬を作ってもらおう。

未来なら、薬を作るのに一日も掛らないはずだ。

電話して、電話して、電話するけど……繋がらない。

いくら電話しても、繋がらない……。嘘？　何で？

パソコンルームに行って、メールも送って。

携帯からも、メールを送って。

また電話して……それでも繋がらなくて。

痺れを切らした僕が、公園へ向かおうとすると、後ろから日和の声。

「上野君……。今は冬……それに雪が降り出しているの。この寒さだと、木々は眠っているよ。だから……セントラルへの道は開かない……」

「そ……そんなぁ……」

地面に崩れ落ちる僕。

どうしようもない……。

未来に連絡が繋がらないんじゃあ……。あの薬を貰えない。

女の子に戻れない。

それは……ミャラが伊吹達をお見送りできない事を表している。

最後の最後に……どうしてこんな……。

僕がポロポロと涙を流していたら、日和が僕を抱きしめてくれる。

「上野君は頑張っているよ……。ミャラちゃんになれないのなら、その姿でお見送りをしてあげようね」

「……そんなの……意味ない」

「そんな事はないよ……。この世には、意味がない事なんてないの。見えなくても大切な事は色々とあるのだから。いつの日か、後悔しないように。やれることはやっておこう」

「……うん」

小さく頷いて、日和を抱き返す。

幻想の女の子は消え。

勘違いした天使様は、幻を信じて去って行く。

もしかしたら、もう二度と会えないかもしれない。

未来に薬を貰えなかったら……。
全ては夢の中に掻き消える。
儚い夢物語。天使様は何も知らずに……。

レジスタンス〈メモリー編15〉

翌日……。今日は晴々しい空が見える。
大雪だったら、飛行機も飛び立たないだろうに。
そんな事はなく、むしろいい天気。
それが無性に悔しいのは、どうにかして伊吹を引きとめたいという思いがあるから。

空港の中にて、青白い顔の僕に話しかけてくるのは高校生バージョンのハル。

「お父さん、大丈夫？」
「うん、大丈夫……」

結局、昨晩は寝ずに、ずっと未来に電話をし続けた。
まぁ、繋がらなかったのだけど……。
だから、僕は男の姿。
伊吹達とは初めて会う設定。

それにしても、人が多い。
警備員まで出回っていて、専用の通り道までできている。
きっと伊吹は有名だから、その姿見たさに集まっているのだろう。
今日は僕とハルだけ。他の皆は重要なテストがあるから、外せないらしい。
個人的には、少し寂しいお見送りだけど……。
これだけ賑やかなら、まぁ、いいか……。

ザワザワと人の声が尽きない中。じっと待っていると、遠くから騒ぎ声。

そちらに向くと、伊吹の姿。伊吹の肩にはチロ。
その後ろには、和樹君なのだけど……。
和樹君……執事さんに紐で縛られ、まるで罪人だ。
ギャーギャーと騒ぐ和樹君の声が耳に入る。

「オレは残るー！　行くなら、お前らだけで行け！」
「和樹坊ちゃん、お静かに願います」
「うるさい！　どうしてもというなら、ミャラを連れて行く！　あいつが行かないのなら、オレもいかない！」
「それでは、ご清聴お願い致します。昨日から和樹坊ちゃんのお話を拝聴しておりますが……。歳の関係か、そろそろ私も疲労困憊でございます。これ以上、お言葉が尽きないようでございましたら……」
「爺は黙ってろ！　それより、ミャラはどこだ!?　ミャラー！」
「……」

執事さん……頑張って。心の中で、凄い罪悪感。
だって、今日はミャラじゃない。ミャラはいない。もう……いない。

不意にハルが一般人立ち入り禁止の紐を乗り越える。
すぐに警備の人が走ってくるけど、伊吹が口を開く。

「いいよ、通して。知り合いだ」

伊吹の言葉に、警備員が頭を下げて引きさがる。
僕は……出て行きづらい。
しょんぼりと身を縮める僕に向いて、ハルが眉をしかめる。

「ちょっと、お父さん。お姉ちゃんの代理でしょ？　ほら、話をしてあげてよ」

「はい……」

和樹君以上に、罪人っぽく紐を乗り越え……伊吹の前に出る。
恐ろしくて、伊吹の顔を見る事ができない。俯いたまま、挨拶をする。

「初めまして……上野進一です。ミャラの……父親です」
「あぁ、初めまして。ミャラちゃんにはお世話になっています。それで、ミャラちゃんは……？」
「あの……ミャラは……。ちょっと……急な用事があって……来られなくて……」
「……」
「何だよ！？　ミャラは来ていないのか！？　だったら、オレは行かない！　ここに残る！」

黙り込む伊吹の後ろで、騒ぐのは和樹君。
そんな和樹君を無視して、伊吹が話し出す。

「用があるのなら……仕方ありませんね」
「ごめんね……。期待を裏切って……」と僕。
「お前、ミャラの父親だろ！？　だったら、今からでもいい！　ミャラを呼んでこいよ！」

騒ぎ続ける和樹君。
僕だって、できることならそうしたい。
だけど、どうしてもそれはできない。
変に悔しくて、涙目になってくる。
和樹君の言葉が胸に刺さる。
だけど、僕には何もできない。

俯き続ける僕に、伊吹が優しい声を投げかける。

「すみません、後ろの奴がうるさくて。気にしないで下さい。ミャラちゃんにだって、用はありますし。振り回していたのは、ボク達ですから。かなり……迷惑を掛けていたと思います」

奇妙な程に丁重な伊吹。
いつものような親しさがない。少し離れた関係。
そう……僕達は今この時に知り合いになったんだ。
落ち込む僕の前で、伊吹が急にしっかりとした言葉で話を始める。

「この度は、ミャラちゃんのご尊父である上野さんに。今一度、お礼を申し上げます。本当にありがとうございました」

深く頭を下げる伊吹。
チロが慌てて、伊吹にしがみ付く。
思わず、本気で泣いてしまう僕。
声を出す事はないものの、涙が止まらず地面に落ちる。
誰かに見られているだろうか？
お願いだから、気づかないでいてほしい。

そう思っていたら、伊吹が顔を上げる瞬間。
わずかな間。一瞬だけ、伊吹と目が合う。
僕はすぐに視線を逸らすけど、伊吹は気づいただろうか？　少し不安を覚える。
だけど、何事もなく。伊吹が話を続ける。

「それでは、また……。ミャラちゃんにも、よろしくお伝えください」
「うん……」

小さく頷く事しかできない。
下手な事を口にすると、僕がグダグダになっている事がバレてしまう。
そうなると、怪しまれるだろう。
伊吹が真実に気づいたなら、僕との約束を破るかもしれない。
それだけは……絶対に駄目だ。

せめて……、一目でいい……。

伊吹の顔を見て、サヨナラを言いたい。

ありがとうって、言いたい……。

だけど、顔を上げる事ができない。

ありがとうも言えない。

僕は……何て無力なのだろう。

天使様を騙し続けた猫は……。

最後の最後まで、役立たず……。

役立たず……。

頭の線が切れて、無気力になっていたら。不意に誰かの声が耳に入る。

「きっと戻ってくるから……」

へ……？　と思い、顔を上げたら。僕の唇に何かが触れる。
現状を理解できない僕は、涙さえ止めて。混乱する。
周りの音が耳に入らず、僕の視界に映る物は何だろう？
僕の口から離れていく。伊吹の顔が目に入る。
透き通った瞳で僕の心を見透かすように、ちょっと悪戯な笑みを見せる。

すぐに背を向け、飛行機乗り場に向かって走って行く。
その後を行くのは、和樹君を担ぐ執事さん。
和樹君は口を開けたまま停止している。
今は騒ぐどころじゃないらしい。

急に罪悪感が消えて、安堵感を覚える。
直後に、腰が抜けて、地面に座り込む。
そんな僕の隣で、ハルが伊吹の背に向かって、苦情を述べる。

「あの堕天使……やっぱり気づいていたんだな。変だと思ったんだよ。お金持ちの天才が好きな子の事を調べないわけないのに。どうして、こんなにも無知なんだろうって」
「いつから……」僕の口が勝手に動く。
「さぁ？　どう思いますか？　未来さん？　いるんでしょ？」

ハルが言った直後に、僕の後ろから未来の声が聞こえてくる。

「俺が知る限りでいいのなら、話すけど」
「構いません。話して下さい」とハル。
「とりあえず……俺が初めて吉川君に出会った時。ミャラちゃんがウサギを探している間に。彼がウサギを抱えながら……。『どうしよう！？　ボク、男の人を好きになっちゃった！　どうしよう！？

しかも、ボクよりずっと年上だよ。どうしよう!?　お前は、どう思う!?』って……。ウサギに訴えていたよ。その後の彼の葛藤は見ていて、非常に面白かった……」

「それはもう……スタート地点からじゃないですか。どうしようもありませんね。あの堕天使は」

「だけど、一人で相当に悩んでいたよ。もうね、それ見るのが俺の生きがいになっていたもの。滅茶苦茶に面白いの、あの子。まぁ、それは後々に語るとして。ミャラちゃんは騙していたんじゃなくて。騙されていたんだよ。彼がミャラちゃんに真実を語らせようと躍起になっても。ミャラちゃんは話さないし。かと言って、自分が話すとあからさまだし。これで彼は悩みに悩んでね。こんなに頭を抱えたのは生まれて初めてだって。一人で呟いていたよ。独り言が多いんだよね。あの子」

未来の言葉が何となく遠くから聞こえてくる。

後ろにいるのだけど、今の僕には何と言っていいものか……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9545n/

◆世界の枠組みを越えて◆　『漫画小説……だったけど、今は保留中』

2011年11月28日07時55分発行